31-752
12006008591 75

■ドストエーフスキイ全集（9）

短篇集

ドストエーフスキイ作
長島直昭譯

新潮社
東京出版

31
752

序

自分はドストエーフスキー短篇集を飜譯したことを限りなき光榮とする。どれも皆驚くべき、寶石のやうな作品だ。大浪のやうな力を以つて讀む者の心に押しせまり、肉體も魂も併せ呑んで了ふこの力は、如何なる一篇にも漲り溢れてゐる。「白夜」や「小英雄」を譯してゐる時には、殆んど絶えず興奮し涙ぐんでゐたことを忘れることが出來ない。

今非常に疲れてゐるので簡單に書いておくが、「プロハルチン氏」から「ボルズンコフ」までは皆初期の作品で、「小英雄」は獄中で出來上つたものださうである。「優しき魂」は「一作者の手記」の中のものである。「變人の夢」も多分さうだらうと思ふが、はつきり知らない。

校正の時行き逢つて自分が見なかつたので、直さうと思つてゐて直せずじまひになつた箇所があるのだが、氣になる處だけ此處に註釋を加へておくことにする。

三五〇頁——ei suoi amanti とあるのは Cleopatra ei suoi amanti であつて、「クレオパトラとその愛人」の意。

三五三頁——パラッゾーとあるのは、古代羅馬の宮殿のある丘の名前である。

I種
W
1200600859175

五〇四頁――"Mais cést trés sérieux, messieurs, ne vlez pas!" とあるのは、「それは非常に眞面目なことです、皆さん、笑つてはいけません！」の意。

千九百二十年五月二十日

長崎村にて

永島直昭

目次

プロハルチン氏……三
女主人……六三
弱き心……二一九
白夜……三一三
ボルズンコフ……四三三
小英雄……四五七
優しき魂……五三七
變人の夢……六一一

ドストエーフスキイ短篇集

永島直昭譯

プロハルチン氏

ウスティニヤ・フョードロウナの持つてゐる貸家の一番暗い一番下等な隅つこの部屋に、人の好い、可成年取つた、そして酒を飲まないセミョーン・イワーノヴィチ・プロハルチンといふ男が住んでゐた。プロハルチン氏は役所では甚だ低い階級で、彼の官吏としての力と正確に釣合つた丈けの俸給をとつてゐたので、ウスティニヤ・フョードロウナは彼からは宿賃として月に五留以上は取ることが出來なかつた。彼女が彼を泊めておくのは、彼女自身の理由があるのだと或る人々は言つてゐた。けれども、それはさうかも知れないが、彼を誹謗する者が多勢ゐたにも拘らず、プロハルチン氏は勿論正しい道徳的な意味で本當に彼女の愛人となつてゐたやうであつた。斷つて置かなければならないことは、この、甚だ尊敬すべき婦人ウスティニヤ・フョードロウナは、肉類と珈琲とが特に好物で、精進することは困難だと知つたので多くの宿泊人たちに部屋を貸すことにしたのだ、といふことである。その宿泊人たちはセミョーン・イワーノヴィチの二倍も拂つてゐるのであつたが、餘り靜かな人々ではなく、むしろ皆が皆彼女の女らしい遣方とその手賴りない孤獨とに對する「憎惡に充ちた嘲弄者」で、彼女の善意からでも餘程低い位置におかれてゐた。それ故、若しも彼等がその宿料を拂はなからうものならば彼女はさういふ人々を泊めようとはしなかつたであらうし、又現にさういふ人々は彼女の家には一人も居なかつた。セミョーン・イワーノヴィチは、酒を飲み過ぎて弱くなつた或る休職の、いや恐らく一層正確に言ふと罷免された書記がヴォルコーヴオに於ける彼の最後の休息所に運ばれたその日から彼女の愛人となつたのである。この紳士は、彼自身の言葉によればその勇敢な行爲のために一方の眼を敵き出して了つたので、眼が一つしかなく、そして同じく勇敢のために一方の足を壞して了つたので足が一本しかなかつたがそれでもウスティニヤ・フョードロウナの持ち得た凡ゆる深切な感情を上手に贏ち得て、その中から澤山の利益をとつた。で、若しも彼が最後に最も見窄らしく死ぬ程に飲み潰れなかつたとすれば、恐らくは彼女の忠實なる從者として又幣間として數年間生活しつゞけたのであつたらう。すべてこれはウスティニヤ・フョードロウナがやつと三人しか宿泊人を持つてゐなかつた時分のペースキイに於ける出來事である。その三人のうちで、彼女が新しい家に移り、約十二人の新しい宿泊人に部屋を貸す程大規模に開業した時、殘つてゐたのはプロハルチン氏一人だけであつた。

プロハルチン氏が本當に矯正しがたい缺點を持つてゐたか、又は彼の仲間が誰もかれも賞むべき者であつたのか、それは分らないが、最初から兩方の側に誤解があるやうに思はれた。こゝに言つておかなければならないのは、ウスティニヤ・フョードロウナの新しい宿泊人たちは皆が皆取除けなしに全く兄弟のやうにやつてゐることであつた。彼等のうちには、同じ役

所に勤めてゐる者もあつた。各自（めいく）が交る替るに自分のすべての金を各自のバンチイシュカやプレフェランス（共に一種の骨牌遊び）やビークシェ（玉突の如きもの。）やに失つた。彼等は皆一緒に集つて彼等が人生の沸騰せる瞬間と呼んでゐた所のものを樂しむことを好んだ。彼等は、時とすると高尚な問題に就いて議論することをも好んだ。そして結局、事が議論なしに過ぎることは稀であつたが、しかし凡ゆる偏見がその全會合から驅除され一般の調和がそれによつて少しも亂されるといふことはなかつた。その宿泊人たちの中で最も著しいものは、智的な、讀書家のマールク・イワーノヴィチであつた、それからオブレヴニーエフ、それから、これも立派な愼み深い人物プレボロヴェンコであつた。それから貴族社會にはひつて行くことをその目的としてゐたジノーヴィ・プロコフィエーヴィチといふ者がゐた。それから、寫字生のオケアーノフがゐたが、この人は其處に居た間は、殆んどセミョーン・イワーノヴィチから第一の好意を特別にもぎ取つてゐた。それから、スードウビンと呼ばれたもう一人の寫字生と平民のカンターレフ、まだその他にもゐた。けれども、このすべての人々に對してセミョーン・イワーノヴィチは云はば彼等の一人ではなかつた。勿論誰も彼を害するものはなかつた、すべての者は當初からプロハルチンを公平に見てゐた。そしてマールク・イワーノヴィチの言葉で、彼プロハルチンは決して信ずるに足る當世風の人間ではないが、そして勿論失錯をすることはあ

つても詔訣者（おべつかひ）ではない、たゞ善良な無害な奴だと決（き）めてゐたのである。だが、若しも彼が時に不幸なのだつたとしたらそれは無くてはならない想像力の缺如のために他（ほか）ならなかつた。斯くの如く想像力を缺いてゐたが、その上彼はその姿や態度（これらに對して嘲弄者共は酒落を言ふことを好んだ。）から特に愛すべき印象を與へることはどうしても出來なかつた。しかし彼の姿は、人々を彼に反對させるやうなものではなかつた。智的な人物であつたマールク・イワーノヴィチは、嚴格にセミョーン・イワーノヴィチの擁護を引受けてゐた、そしてプロハルチンは年取つた尊敬すべき人で、ずつとずつと前にそのローマンスの時代を通つて來てしまつたのだと、やゝ幸福な華かな言葉で宣言したのであつた。そこでもしセミョーン・イワーノヴィチが如何にして人々と共に生くべきかを知らなかつたとしてもそれは全く彼自身の罪ではなかつたに違ひない。

第一に彼等の氣づいたことは、セミョーン・イワーノヴィチの間違ひ無い吝嗇であつた。それは忽ちに觀察され記憶された。何故ならセミョーン・イワーノヴィチは、一寸の間でも彼の茶瓶（チャーイニク）を決して人に貸さなかつた、だがそれは彼が殆んど茶を飮むことさへなかつたのだから尙更不條理であつた。で、何か飮みたくなつた時には彼はきまつて野生の花と或る藥草とをいゝ具合に煎じたものを飮むのであつた。それを彼は常に澤山貯へてゐた。彼の食事も亦、

他の宿泊人たちのとは全く異つてゐた。例へば彼は日々ウスティニヤ・フョードロウナによつて他の宿泊人たちの爲めに調へられる常食を、決して取らうとはしなかつた。その食事は半留かゝるのである。セミョーン・イワーノヴィチは二十五哥拂(カペイカ)ふだけで、それを決して越えたことはなかつた。それ故パイのついたスープの皿か、肉の皿かどちらかを採つた。スープも肉も兩方共採らないことも屢々あつた。しかし彼は、洋葱と凝乳と鹽漬けの胡瓜とのついた白パンか、又はそれに似た何かを控へ目に採つた。それは非常に安價だつた。そして彼は、愈々腹が減つて堪らなくなつた時でなくては、その彼の半食事に戻つては來ないのであつた……。

此處で傳記作者の告白しなければならないことは——若しも現實的な、そして下らない是等の細事(デテール)が此の物語の主人公の或る特質或る特性を表はすのでなかつたならば、英雄的態度を愛する者に對して本當に恐ろしい且つ不快な斯くの如き細事(デテール)に就いては、彼をして書くに到らしめるやうなことは何事もなかつたであらう。何故なら、プロハルチン氏は正しい十分な食事を採ることが出來ない程貧乏なのでは決してなかつた、尤も、彼は折々さうなのだと證明してはゐたが。けれども彼は實際、惡口と人々の臆斷とには無關心で行動してゐた。それは單に彼の奇妙な氣まぐれを滿足させるためで、儉約と過度の懸念とからであつた。けれどもこれは皆後になればよく分るであらう。だが我々は、セミョーン・イワーノヴィチの多くの氣まぐれを以て讀者を退屈させるのは氣を附けることにして、例へば彼の態度に就いての奇妙なそして甚だ興味ある記述をも省くこととしよう。そして、實に、若しもウスティニヤ・フョードロウナの證言さへなかつたならば、セミョーン・イワーノヴィチは、その襯衣を洗濯にやる決心がどうしてもつかなかつたといふ事實をすら、恐らく諷しはしなかつたであらう。又は彼がそれをなしたとしても、人々はセミョーン・イワーノヴィチの襯衣の存在を合間には全く忘れてしまつてゐた程、それは稀なのであつた。その女主人の證明によると「セミョーン・イワーノヴィチは己れの魂を守る哀れな小羊で、二十年間その隱家にもぐり込んでゐて、人々が何を考へてゐたか氣を附けもせず、彼の地上生活のすべての日に於いて彼は靴下とハンケチとあらゆる斯樣なものに對して他人であつた」といふことが明白になつた。そしてその上ウスティニヤ・フョードロウナは、屏風の壞れてゐたお蔭で、この哀れな愛する人が時とするとその裸かの身の皮を掩ふべき何物を持たなかつたことを、彼女自身の眼で見たのであつた。

斯くの如きはセミョーン・イワーノヴィチの歿後に於ける環境の風說であつた。けれどもその生前には（そしてこれは最も屢々起つた軋轢の場合の一つであつたが）若しも誰かが、彼

と友人の間柄の者でさへ、そしてたとへ壊れた屏風の罅隙からでも、呼ばれたのでない時に、彼の隣家へ探るやうに首を突込んだならば、彼は到底それを忍ぶことは出來なかつた。彼は馴れ難い寡默な人間であつた。そして病氣勝ちであつた。彼は自分を忠告する人を好まなかつた。彼は差出がましい人間をも好まなかつた。そして若しも誰かが彼を冷かしたり、訊きもしないのに忠告したりすると、彼は直ちにその人と喧嘩して、恥をかゝせ、そして自分の仕事に就いてしまふのであつた。「お前は生意氣だよ、輕はずみだよ、忠告をするやうな人間ぢやない、さうだらう——自分のことを氣にし給へ、ゑゝ君。君自身の靴下を縫ふことでも考へた方がいゝんだ、さうだらう！」

セミョーン・イワーノヴィチは眞正直な人間であつた。そして決して人に形式的に話しかけるやうなことをしなかつた。彼のいつもの遣り方を知つてゐた者が、その小さなトランクにはひつてゐたやうなものを問題にして純粹な遊戲で彼を困らせ始めた時には、彼はいづれにしてもそれを忍ぶことは出來ないのであつた。セミョーン・イワーノヴィチは一つの小さなトランクを持つてゐた。それは彼のベッドの下に置かれて寵愛物の如くに守られてゐた。そして、その中には古いぼろと二三足の壞れた靴と凡ゆる種類のがらくたとがはひつてゐた許りだといふことは誰でも知つてゐたのだが、それでもプロハルチン氏はその財産を甚だ高價に

尊重してゐた。しかも人々は、彼がその古いしかし未だ丈夫な錠を折々不滿足に思つて祕密の彈機の著いた種々に入組んでゐる特殊な獨逸式の新しいものを買ふと言つてゐる、といふことをよく聞きさへした。或る時、ジノーヴィ・プロコフィエーヴィチが青年の無思慮から、セミョーン・イワーノヴィチは多分、その箱の中に子孫に遺すべき何かを隱し貯藏してゐるのだらうといふ甚だ下品なそして不都合な考へを發表した時、そこに居合せたすべての人々はそれに全く魂を奪はれて、ジノーヴィ・プロコフィエーヴィチの唐突の警句は異常な効果を收めたのであつた。最初プロハルチン氏はこんなが、さつすることが出來なかつた。長い間彼の言つてゐる言葉は支離滅裂であつた。そして、暫らくしてセミョーン・イワーノヴィチはジノーヴィ・プロコフィエーヴィチの遠い以前の或る賤しい行爲を非難してゐたのだといふことを人々はやつと見出したのであつた。それから人々はセミョーン・イワーノヴィチが、ジノーヴィ・プロコフィエーヴィチは貴族社會に入ることは決して出來ない、そして著物を拂へて彼に書附を渡してゐる仕立屋は彼を殿るであらう——きつと殿るであらう——何故ならこの狗ころは非常に長い間彼に拂はなかつたから、といふことを豫言してゐたことを知つた。そして遂に「おい、狗ころ、」とセミョーン・イワーノヴィチは附け加へた。「そこでお前は驃騎兵にはひり度がつてる。だがはひれまいよ。俺は言ふがね、お前は自

分を愚弄するだらう。それから俺の言つておくことは、お前の先輩たちがそれに就いて何もかも知つてゐれば彼等はお前を捕へて寫字生にしてしまふだらう、といふことだ。それでお終ひだ！　解つたか、狗ころ？」それからセミョーン・イワーノヴィチは引込んだ。けれども五分間許りぢつとしてゐた後、皆の非常に驚いた事には、彼は或る決定に達したかのやうであつた。そして唐突（だしぬけ）に再びその若者を非難し罵り始めた。最初は獨言のやうだつたが、終ひにはジノーヴィ・プロコフィエーヴィチに話しかけてゐた。しかし、事はそれなり濟んでしまひはしなかつた。そして晩にマールク・イワーノヴィチとプレボロヴェンコとがお茶を拵へてオケアーノフを一緒に飲むように呼んだ時、セミョーン・イワーノヴィチはその寢床から起き上つて、彼の十五乃至二十哥（カペイキ）を呈出して彼等に故意（わざ）と加はつて、一杯のお茶に對する突然の欲望の口實として長々とそれに就いて語り出し、自分は貧乏人だ、貧乏人以外の何者でもない、そして、自分のやうな貧乏人は何も貯へがないのだと説明し始めるのであつた。プロハルチン氏はこの場合單にこの問題が出たから言ふのだと言つて、こんなことを告白した。彼は貧乏人である。一昨日彼はあの破廉恥漢から一留借りるつもりであつた、だがあの狗ころは自慢するだらうから、今はもう借りないであらう。それは事實だ。そして彼の俸給は食物を十分に買ふことも出來ない位なのだ。そして最後に、御覽の通りの貧乏人である彼は、毎月五

留をトゥヴェールに居る義妹に送つてゐる、若し彼が毎月五留をトゥヴェールにゐる義妹に送らなかつたとしたら、彼の義妹は死んでしまふであらう、そして彼に頼りかゝつてゐたその義妹が死んでしまつたとしたら、彼セミョーン・イワーノヴィチはずつと前から新しい著物を買はなければならなかつたであらう、……と言つた。そしてセミョーン・イワーノヴィチは斯くの如く、貧乏人である事に就いて、義妹に就いて、そしてその五留に就いて長々と語りつゞけた。そして彼の聽集に感銘を與へようとして幾度も幾度も同じ事を繰り返しつゞけ、終ひには彼は本當の昏酔に陷つて沈默に返つてしまつた。僅かに三日の後、皆もう彼のことをすつかり忘れて、誰も彼を襲はうと思ふ者も無かつた頃、彼は最後に次のやうな意味の或事を附け加へたのであつた。卽ちジノーヴィ・プロコフィエーヴィチが驃騎兵にはひればあの破廉恥漢は戰爭で足を折つてしまふであらう、そしてそれから彼は木の義足を附けてやつて來て、かう言ふであらう、「セミョーン・イワーノヴィチ、深切な友達よ、何か食べる物を下さい！」そしてその時セミョーン・イワーノヴィチは彼に食物を與へないであらう、そしてあの橫著者を見もしないであらう、でつまりさういふ結果になるのだ、そして彼はそれで及ぶ限りいゝ事をすることが出來たのだ。

すべてこれは言ふまでもなく甚だ不可思議に、そして恐ろしく面白く思はれた。餘り考へ

もせずにすべての宿泊人たちはもつと突撃しようとして集つて来た。そして、單に好奇心から（一緒になつて）セミョーン・イワーノヴィチに向つて最後の攻撃を與へようと決心した。そしてプロハルチン氏の方でも亦、最近――即ち彼等と共に同じ家に住み始めてからこの方――彼等に就いての種々のことを見出したり、又多分己れ自身の私の理由で、何等の準備もなく何れかの側に對する盡力もなく、云はば偶然そして獨りでにその反對者團のうちに發生した因緣に、探るやうな質問をかけたりすることを好んでゐたのであつた。その因緣の中へ入るためにセミョーン・イワーノヴィチは常に彼獨特のどつちかといふと狡猾なそして甚だ公明正大な方法を保存してゐた。それに就いては、讀者は既に或事を知つてゐる。彼はお茶の時分にはその寢床から降り、そして若しも他の者がお茶にするので一緒に集つてゐるのを見ると靜かな感じ易いそして親しみ深い人間の如くに彼等の處に出掛けて行つて、まるでさうする權利でもあるやうに彼の二十哥を渡して、彼等の仲間に加り度いと言ひ出すのであつた。すると若い人々はお互ひに目くばせをし合ひ、そして彼等がセミョーン・イワーノヴィチに對して全く同盟してゐることを表示しながら、最初は全然適當なそして禮儀正しい會話を始めるのであつた。やがてその仲間のうちで機智に富んでる方の奴が、全く出し抜けに大抵な場合非常に悪い、そして全く信じがたい細事（デテール）から成る話を皆の前に持ち出した。例へばこんなことを言ふのであつた。閣下がデミッド・ヴシリエーヴィチに向つて、彼の考へでは既婚の書記の方が未婚の書記よりも信用が出來、且つ昇進にも相應（ふさは）しい、何故なら彼等はしつかりしてゐて、それに彼等の能力は結婚によつて非常に發展してゐる、といふやうなことを言つてゐるのを聞いた者がある、それ故彼――即ち話し手――は昇進に相當すべく發展し善くなる爲めに出來るたけ速かに全力を盡してフェヴローニヤ・プロコフィエーヴナといふ者と結婚せんとしてゐるのだ、などと言ふのであつた。又は彼の同僚の或者は社會的恩惠を缺き教育のいゝ氣持のいゝ態度を缺き、その結果善い社會の婦人たちを喜ばせることが出來ない、それ故この缺陷を絶やす爲めには彼等の俸給からいくらか割引するのが至當である、そこから出る金額で舞踏を學ぶべき大廣間を借りて、紳士らしさと善き教養との外標、禮節、長者に對する尊敬、意志の力、善良にして愉快なる心情、及び種々の氣持のいゝ性質を獲得するがいゝのだといふ事が彼等に就いて度々言はれた、などと言ひ出した。さうかと思ふと彼は又こんな事も言ふのであつた。その書記たちの或者は最年長者を始めとして、彼等の教養の標準を擧げるために、凡ゆる種類の問題に對する試驗で苦しまされるやうに極められたのだなどと。そして序に話し手は凡ゆる種類の事柄が明かにされ、そして或る紳士たちはテーブルの上にその骨牌を置かなくてはならなかつたであらう――要するに、これと同じ樣な

多くの甚だ馬鹿げた風説が話された、と附け加へた。それを續ける爲めにすべての者は早速その話を信じてしまつて、それの内に興味を表はし、質問を發し、それに身を入れた。そして彼等の或者は元氣のない樣子をして、頭を振つたり皆の忠告を求めたりし始めて、若しも彼等がそれに屬することになつたら、どうしたらいゝのだらう？　などと言ふのであつた。プロハルチン氏より遙かに輕信的でない、そして單純な心の人間が、非常に氣を揃へて信じられたる噂によつて迷はされ魂を奪はれたといふことは殆んど言はるゝ必要もない。その上、凡ゆる外見から見て、セミョーン・イワーノヴィチが非常に愚かで新しい普通な觀念を摑むことがのろく、且つ何か新しいことを聞いた時にはいつも最初は、いはばそれを噛みしめて篤と考へその意義を見出し、そして困惑しながらそれと戰つて、最後には恐らくはそれに打勝つてしまふといふことは安心して推斷出來ることなのである。とはいへ、その最後の時でさへも、彼自身に限つた全く特殊な態度に於いてである……。

こんな風にして、奇妙なそしてこれまで豫期されてゐなかつた性質が、セミョーン・イワーノヴィチの中にその姿を表はし始めた……。雜談と容談とが續いた、そして加ふるにそれは皆、遂に主題を離れて役所のことに及んだのであつた。いつからか殆んど全く同じに見えてゐたプロハルチン氏が突然何のためとも知れず全く異つた容貌となつたことは、その知覺を

增進せしめた所のものであつた。彼の顏は不安さうで、彼の眼はおづ〳〵として、そして脅かされたる、どつちかといふと疑ひ深いやうな表情であつた。彼はゆつくり歩いたり、飛び上つたり耳を傾けたりし始め、そして事實を穿鑿せんとする熱情を起さしめた彼の新しい特質に仕上げをし始めた。彼は、眞實に對する愛を、たうとう、一日に何度となく傳はつて來る變な噂をどれ丈け信じたらいゝかに就いて、デミッド・ヴシリエーヴィチ自身に二度までも敢て尋ねる程の極度にまで持つて行つたのであつた。で、若し我々がセミョーン・イワーノヴィチの行爲の結果に就いて此處で何も言はないとしても、それは他でもない彼の名聲に對する敏感な注意に過ぎないのである。斯くして人々は彼を厄人家であると思ひ、そして禮儀などに構はなくなつたのである。それから彼等は、彼に關する風變りな多くのものを發見し始めた。そしてこれに就いては、彼等は全然間違ひではなかつた。何故ならば、セミョーン・イワーノヴィチは全く己れを忘れ、ペンを空で握つた儘まるで凍つたか化石したかのやうに口を開いた坐つてゐ、それは丁度本當の生物其ものではなく本當の生物の影の如くに見えた、といふやうなことが一度ならず言はれたのであつた。或る紳士が呑氣に欠伸をしてゐる時に、出し抜けに彼のさ迷へる光のない訊ねるやうな眼に出會つてびつくりし慄へ上つて、前後不覺に、或る重要な文書に汚點か又は或る全く不適當な言葉かなんかを書き込んでしまつた、

といふやうなことが折々起つた。セミョーン・イワーノヴィチの非禮な態度は、凡ゆる眞に善き敎養の人々を困惑させ惱亂させた……。終ひにはセミョーン・イワーノヴィチの風變りに就いて、誰も疑ひを感じる人はなくなつた。その時分の或るよく晴れた朝、プロハルチン氏はデミッド・ヴシリェーヴィチその人を本當に恐れてゐる、何故ならば廊下で彼に逢ふとセミョーン・イワーノヴィチは、その先輩をして退かしめた程非常に奇妙な特殊な風をした……といふ噂が役所中に擴がつた。セミョーン・イワーノヴィチの擧動の噂は遂には彼自身にも聞えて來た。それを聞くと彼は早速立ち上つて、椅子とテーブルとの間を用心深く通つて、入口に行き、自分の手で外套をとり、それを著て出て行つた。そして暫くの間姿を見せなかつた。彼がそんなことをしたのは、驚きの爲めか又は或る他の衝動の爲めか、それは解らない、が家に居るのか役所に居るのか彼の足跡も見えなかつた……。

我々は、セミョーン・イワーノヴィチの運命を單にその「風變り」に歸さうとは思はない。けれども我々は讀者に向つて語らなければならない。我々の主人公は、社會に慣れてゐない甚だ内氣な人間で、それに新しい宿泊人たちと知己になるまでは全くの破られざる孤獨のうちに住んでゐたのであつた、且つ際立つて平靜で、幾分か神祕的なるものでさへあつたのだ、と。何故ならば彼は、ペースキイに宿泊してゐた間は人と話をするでもなく、何等かの關係を持つでもなく、始終屏風の蔭の寢臺の上に横はつて暮してゐたのである。彼の年取つた同宿者等も全く彼と同じことをして住んでゐた。彼等も亦やゝ神祕的な人間で、屏風の蔭で十五年間も暮してゐたのであつた。幸福な眠い日時が、次々にその跡を追つて尊い停滯をなした。そして彼等の周圍のすべてのものもその同じ幸福な方法で進んでゐたので、セミョーン・イワーノヴィチもウスティニヤ・フョードロウナも、運命が彼等を相共に導いたのは何時であつたか正確に覺えてゐることは出來なかつた。

「十年かも知れない、二十年かも知れない、ことによつたら全く二十五年かも知れません。」と彼女は時々彼女の新しい宿泊人たちに向つて言ふのであつた。「あの人が私と一緒に住んでからね。可哀想な愛する人、あの人の心に祝福がありますように！」そしてそれは、それ程社會に不慣れな我々の物語の主人公が、一年前に彼の役所の同僚及び彼の新しい同宿者たち十二人の若い人々から成つてゐる騷がしい矢釜しい仲間の中に自分を見出した時、忌はしく脅された程甚だ自然なことなのであつた。

セミョーン・イワーノヴィチの居なくなつたことは家の中を少なからず騷がした。一つには彼が愛人であつたからで、もう一つには女主人に保管されてゐた彼の旅行券が圖らずも遺失してゐたからであつた。ウスティニヤ・フョードロウナは叫び聲をあげた、これは凡ゆる危急

な場合に於けるお極まりの彼女の習慣であつた。彼女は二日の間その宿泊人たちを罵り非難して暮した。皆が彼女の宿泊人を雛子のやうに追出してしまつたのだ、そして彼が破滅したのは全くその悪むべき嘲弄者共のためだ、と言つて彼女は泣いた。そして三日目には彼女はその亡命者を、どんな事があつても、生きてゐても死んでゐても連れ戻すようにと彼等を探しに出した。夕方になつて第一にスードゥビンが歸つて來て行方が見附かつたといふ報告をよこした。トルクーチイ市場附近の場所で彼は逃走者を自ら見て、彼について行き、直ぐ近くまで行つた。が、彼に話しかけることはどうしても出來なかつた。彼は、うねり曲つた小路で燃えてゐる家を群集に交つて眺めてゐたのであつた。半時間の後オケアーノフとカンターレクとがはひつて來て、スードゥビンの話を一語々々確認した。彼等も亦彼の近くに、全く近くまでついて行つて、彼から十歩とは離れてゐない位であつたが、彼等も矢張り彼に話しかけようとはしなかつたのであつた。けれども兩者共に、セミョーン・イワーノヴィチは醉つぱらひの乞食を連れて歩いてゐたと言つてゐた。遂に他の宿泊人たちも戻つて來て、皆一緒に集り、そして彼等は心を留めて、プロハルチンは遠くに行きはしない、そして間もなく歸つて來るであらうと決定した。けれども彼等は、彼が醉つぱらひの乞食と一緒にならうとしてゐたことは豫め皆よく知つてゐたのだ、と言つてゐた。此の醉つぱらひの乞食といふのは、

橫着なおべつかつかひの全くの悪者で、彼は何等かの方法でセミョーン・イワーノヴィチを瞞着したことは明かであつた。彼は、セミョーン・イワーノヴィチの居なくなる丁度一週間前に現れて、レムニェーフと一緒になつて、宿で少時間を過し、彼等にこんなことを言つた。彼は正義の爲めに苦しんでゐる、以前には田舍で役所に出てゐた、監査役が突然彼等を襲つた、彼と彼の同僚とは兎も角、善のために苦しんだ、彼はペテルブールグにやつて來てボルフィリイ・グリゴリエーヴィチの足元に陷つた、彼は利益のために官廳に入つたのだが、運命の殘忍なる迫害のために又そこから解雇された、そしてその後改革のために役所それ自身も存在しなくなつてしまつた、そして彼は、全く見當違ひの他の事に對して有する能力と同樣役所の仕事に對する明らさまな無能力のために、その改新の職員のうちには含まれなかつた——これも皆彼の正義に對する熱情に關與する事で勿論彼の敵共の手管なのだ……といふやうなことを語つた。話し終るとジモヴェイキン氏は、その話の間にも一度たらずその陰氣なそして弱むしやの友レムニェーフを接吻してゐたが、彼は順々に部屋の中のすべての人々にお辭儀をして召使アヴドーチャさへも忘れなかつた。彼等のすべてを恩人と呼んだ。そして彼は價値のない厄介な卑しい橫著なそして馬鹿な人間だと說明し、善良な人々は彼の憐れむべき狀態と愚直とに對して、嚴格であつてはならないと言つた。彼等の深切なる保護を嘆願した後

ジモヴェイキン氏は彼の元氣のいゝ方の方面を表はし、甚だ愉快になつてウスティニヤ・フヨードロウナの手に接吻した。彼女の手はあれてゐて、貴婦人の手のやうではないといふ彼女の遠慮勝ちな斷言にも拘らず。それから夕方になつて驚くべき特色ある踊をやつて仲間に彼の才能を示すと約束した。けれどもその定日には、彼の訪問は悲しき大團圓に終つたのであつた。特色ある踊に於いて餘りにその特色を表はし過ぎた爲めか、又はウスティニヤ・フヨードロウナ自身の言葉によれば、彼女を貴婦人ではないやうに取扱つて、而も彼女の方ではヤロスラーフ・イリイーチその人と友達關係を保つてゐたそして彼女が好むならばずつと前に士官の妻となつてゐたであらう。」といふ理由のためか、どちらか分らないが、ジモヴェイキンは翌日には家に向つて出掛けなくてはならなかつた。彼は、行つてしまひ、再び戻つて來、再び醜行を演じ、それからセミヨーン・イワーノヴィチの好意に取入つて思ひがけなく彼の新しいズボンを奪ひ、そして今や彼はセミヨーン・イワーノヴィチをさ迷はせるに到つたのであつた。

女主人は、セミヨーン・イワーノヴィチが健康で生きてゐることを知り、彼の旅行券を探す必要のないことを知るや否や、速かに悲しみを打棄てゝ、和らいだ氣持になつた。その間に宿泊人たちの或者は逃走者に凱旋歡迎會をしてやらうと決心した。彼等は門を外し、プロハルチン氏の寢床から屏風を持ち去り、幾分か寢床を嵩にして、例の有名な箱をとり、それを寢床の足元のところへ置いた。それから寢床の上に義妹を、即ち女主人のハンケチと帽子と外套とで拵へた人形を置いた。それは、本物の人と間違へられさうな位正確に義妹に似せて出來た。その仕事を濟ますと彼等は、彼の義妹が田舍からやつて來たことを話さうと思つてセミヨーン・イワーノヴィチの歸るのを待つて屏風の陰にはひつてゐた。哀れなことだ！　が彼等は待ちに待つた……。

彼等が待つてゐる間に、マールク・イワーノヴィチは賭をして月給の半分をブレボロヴェンコとカンターレフとにとられてしまつた。オケアーノフは「鼻打」と「三枚札」とを演つてゐるうちにその鼻が赤くなり、膨れ上るに至つた。召使のアヴドーチャは殆んど外で眠つてしまひさうになり、二度までも薪をとつてストーヴに火をつけようと立ち上りかけてゐた。そしてジノーヴィ・プロコフィエーヴィチは、セミヨーン・イワーノヴィチが來たかどうか絶えず見に駈け出して行つたが、最早びしよ濡れになつてしまつてゐた。而も、未だ誰も來る氣遣ひさへなかつた——セミヨーン・イワーノヴィチも醉つぱらひの乞食も。たうとう皆は、義妹を非常な場合に間に合ふやうに屏風の蔭に殘しておいて、寢に行つてしまつた。そして、門にノックの聞えたのはもう四時過ぎであつた。が、そのノックの音は、期待してゐた宿泊人たち

に對して、彼等のやつた退屈な事を全く償つた程聲高いものであつた。それは彼——その人——セミョーン・イワーノヴィチ、卽ちプロハルチン氏であつた。けれども彼は、皆が悉く仰天して叫び出し、義妹の事などは誰も考へなかつた程の大變な樣子であつた。失はれたる人は無意識であつた。彼は、ぐしや〳〵になつたぼろ〳〵の著物を著た夜の馭者に連れられて來た、といふよりは運び込まれたといふ方が正しい。哀れな愛人は何處でこんなに醉つぱらつたのかといふ女主人の質問に馭者は答へた。「いや、この方は醉つてやしませんよ。一滴も飮らなんですからね。そりやもう確かなもんでございますよ。ですが見た所氣が遠くなんなすつたのか、何かの發作か、でなけりや多分ぶん毆られて來なすつたんでせう。」

彼等は、一層便利にするために罪人をストーヴに凭せかけて彼を調べ始めた。そして實際醉つぱらつてゐるのでも、毆られて來たのでもなかつたことを知つた。何か他に惡いことがあつたのである。何故ならばセミョーン・イワーノヴィチは一言も口をきくことが出來なかつた。けれども一種の痙攣を起して、ピク〳〵動いてゐるやうであつた。そしてやつと目ばたきをして最初は見物人のうちの一人を、それから他の者を困惑してぢつと眺めた。見物人たちは皆寢卷を著てゐたのであつた。その時彼等は、何處から彼を連れて來たのかと馭者に訊ね始めてゐた。「へえ、コロームナの方からです。」と馭者は答へた。「畜生、奴等は本當の紳

士ぢやありませんや。たゞ愉快でふざけ廻つてるだけの紳士でさア。そこでこの方が、こんな風になつたら、奴等は私に押しつけちまつたんです。喧嘩をしてたのか、何か發作が起つたのか、まるで分りやしませんよ。でも奴等は美しい愉快な紳士なんだ！」

セミョーン・イワーノヴィチは捉へられて、二三人の嚴丈な人々の肩に高く擧げられて、彼の寢床へ運ばれた。セミョーン・イワーノヴィチは、寢床に置かれようとした時、義妹に觸れた彼の足はかの神聖なる箱の上に載つた。彼は聲を限りに叫び出し、殆んどその足を屈げて蹲まらうとした。そして全くぶる〳〵慄へながらその手と體とで有らん限りの力を出して、寢床の中の空いた場所に身を置き替へた。その間に彼は、恐れ戰いてはゐるが妙に決然とした樣子で其處に居合せた人々を見詰めながら、かの貧しき附屬物の百分の一でも何人かに渡されゝば直樣彼は死んでしまふであらうと斷言しようとしてゐるかのやうであつた……。

セミョーン・イワーノヴィチは、二三日間屏風でしつかりと防寨を作つて寢てゐた。そしてその樣にして全世界とその全杞憂とを遮つてゐた。翌朝は、勿論、すべての人々が彼の事を忘れてしまつた。その間に時はいつもの通り過ぎ去り、時間は時間に從ひ、日は日に續いて行つた。病人の重い熱病的な頭腦は、睡眠と忘我との中間の何物かに陷つた。けれども彼は、靜かに橫になつてゐて、呻きもしなければ不平もこぼさなかつた。その反對に彼は、强ひて靜

かにし沈默を守り自分を制へ、恰も獵師の聲を聞いて地に身を伏してゐる野兎のやうに寢床の中に低く横はつてゐるのであつた。折々長い、壓しつけられたやうな靜けさが家の中に押し擴がつた、宿泊人たちが皆役所へ行つてしまつたしるしである。そしてセミョーン・イワーノヴィチは起き上つて、女主人が間近かで忙しく仕事をしてゐる臺所の雜音や、溜息を洩し唸いてゐるやうなアヴドーチャの踏みへらされたスリッパの、規則正しいバタ〳〵いふ音やに耳を傾けることに依つて彼の憂鬱を救ふことが出來た。アヴドーチャは、家の中のすべての部屋を順々に淸め、こすり、拭ふのであつた。すべての時間はかくの如く、丁度臺所で貯水桶（サラーヴカ）から盥へと規則正しい音を立てゝ注がれる水の如くに、鈍い元氣のない眠さうな退屈な調子で經過して行つた。遂に、宿泊人たちは、一人々々又は群をなして歸つて來るのであつた。そしてセミョーン・イワーノヴィチは、彼等が天候を罵り、腹がすいてゐると言ひ、騷ぎ、煙草を吸ひ、喧嘩をし、それから群をなして骨牌を弄び、お茶の用意をしてゐる時にはコップをがちや〳〵させてゐる、これらのことを、甚だ都合よく聞くことが出來た。セミョーン・イワーノヴィチは、機械的に努力して立ち上り彼等に加はるのであつた。彼はお茶の時にはさうする權利があつたので。併し彼は直ちに、沈滯の中へ戻つて來るのであつた。さうして彼は長い間お茶の卓に坐つてゐて、彼等と一緒にお茶を飲み話をしてゐたのだと夢想してゐた。ジノ

ーヴィ・プロコフィエーヴィチが旣に機會を捉へて、義妹に關する或る企てと彼等に對する種々な價値ある人々の關係とを會話のうちにとり込まうとしてゐた、などと夢想してゐた。その時セミョーン・イワーノヴィチは、急いで自己を防禦して答へた。ところがすべての人々の口から溢れ出た偉大なる信條が――「それは一度ならず言はれたことだ。」――彼のあらゆる言分を妨げた。そしてセミョーン・イワーノヴィチは、今日は月の最初の日で、自分は役所で金を受取らうとしてゐるといふ事を再び夢想し始めるより外に何もする事は出來なかつた。

階段の上で手形を受取りながら彼は大急ぎで自分の周圍を見廻し、出來る丈け速かに彼が受取つた規定の報酬の半分を減じてそれを靴の中へ隱した。それからその場で、その階段の上で、（實は寢床の中で眠つてゐたのであつたが）彼は決心した。家へ歸つたら賄料と宿泊料との借を女主人に拂はう、それから、或る必要品を買はう、そして誰か懸念する奴には、云はば偶然にそして何氣なく、月給はいくらか差引かれて了つた、今は義妹に送るものが全く無しになつて了つた、といふことを示してやらう。それから義妹を憐れんでゐる事を話さう、翌日もその又翌日も彼女のことを澤山言はう、そして十日後には彼女の貧乏に就いて再び何氣なく或事を話さう、仲間のものたちが忘れてしまはないように。この決心をしながら彼は、プロハルチン氏見た。永遠に默つてゐる禿頭の小男、役所ではセミョーン・イワーノヴィチの席から三つ目の部

屋に坐つてゐる、そして二十年間彼に一言も話した事のなかつたアンドレイ・エフィセーヴィチがその階段の上に立つてゐるのを見た。彼も亦、その留銀貨を算へてゐた。そして頭をふりながら彼に向つて言つた。「金だ！」『金がなければ粥もないでせう。」彼は階段を降りながら兇猛にかう附加へたが、丁度戸口の處で彼は言ひ終つた。「而も私には七人の子供があるんですよ、え、君。」それから此の禿頭の小男は、彼が幽靈として行つてゐることも、本當の現實としてではないことも恐らくは等しく意識しないで、その手を床から三尺ばかり擧げて、それを上の方で振り乍ら、總領は學校へ行つてゐるのだといふ事を呟き、それからセミョーン・イワーノヴィチに腹を立てゝゐるやうな一瞥を與へながら、(恰も彼が七人の子供の父親であるる事がプロハルチン氏の過ちででもあるかの如くに)彼の古い帽子を眼の上まで押込んで、外套の襟を持つて左の方へ曲つたかと思ふと消えてしまつた。セミョーン・イワーノヴィチは全く脅かされてゐた。そして七人といふ不愉快な堆積が、一つ屋根の下に居るといふ事に關しては彼自身罪はないといふ事を十分確信してはゐたが、それでも實際に於いてセミョーン・イワーノヴィチ以外に、咎むべき人は誰も居ないといふことがあり得るやうに思はれたのであつた。苦しみに打たれて彼は駈け出しさうになつた。何故ならば、その禿頭の紳士は戻つて來て、彼を追ひかけて走つて來て、彼を檢査して彼の俸給をすつかり取り上げて、爭ふべからざる七人といふ數を主張しセミョーン・イワーノヴィチの上に義妹などといふ人間が居るといふ可能的な斷言をも決定的に拒んでしまふかの如くに思はれたのであつた。プロハルチンは走りに走つた、呼吸をきらしながら……。彼の傍を非常に多くの人々が矢張り走つてゐた、そして彼等のすべてがその貧しい小さな禮服の後の衣嚢の中で彼等の金をぢやら〳〵鳴らしてゐるのであつた。遂にすべての者が非常に增大して、消火機の響が起つた。そしてそれらの人々の全群が彼を殆んどその肩の上に載せるやうにして、彼が最後に醉つぱらひの乞食と共に觀てゐた燃えてゐるあの同じ家の處まで、運んで來たのであつた。醉つぱらひの乞食——別稱ジモヴェイキン氏——は矢張り其處にゐた。そして彼はセミョーン・イワーノヴィチに逢ふと恐ろしい騷ぎをして彼を腕に抱へ、そして群集の最も群つてゐる部分へ彼を連れて行つた。もう其時には彼等の凡てといふのは、宝は二つの橋をとりまいてゐる非常な群集の騷擾と叫喚とにびその二つの橋の間のフォンタンカ堤防いつぱいに溢れてゐる非常な群集の騷擾と叫喚とになつてゐたのであつた。丁度其時セミョーン・イワーノヴィチは、醉つぱらひの乞食と一緒に、町から、トルクーチイ市場から、そして凡ゆる周圍の家や酒場や料理店から集つて來た見物人のいつぱいになつた大きな材木置場で丁度やつとこで挾まれたやうに、人々が押されてゐた垣根の後ろを運ばれてゐたのであつた。セミョーン・イワーノヴィチはこれらを悉く見、そし

て其時には自分が押されてゐたやうに感じた。その狂熱と無我夢中との渦巻の中では、凡ゆる種類の不思議な姿が彼の前を飛び廻り始めた。彼は、彼等の或る者を覺えてゐた。その中には凡ての者をひどく壓しつけてゐる紳士があつた。丈が七尺位の人間で、一尺五寸もある頬髭を持つてゐたが、その男は火事の中でセミョーン・イワーノヴィチの背の後ろに立つてゐて、後ろから彼を勵ましてゐた。其時我々の主人公は、何か有頂天の樣なものを感じた。そして、彼の高められた位置からは素晴しい光景だつたので、そのために消防夫の勇ましい仕事を褒めそやさうと思つてゐたかのやうに足踏みしてゐた。もう一人は厳丈な若者であつた。その男は他の垣根に上らうとして、我々の主人公をひどく壓しつけた。その時彼は確かに誰かを救はうとしてその垣根に上るつもりだつたのだ。それから彼は又、病氣らしい顔をした古い綿のはひつた樂著を著て腰の周圍を結んでゐる老人の姿をちらと見た。その老人は、火事の前には或る小店にゐて彼の宿泊人のために砂糖と煙草とを買つてゐたが、今は、手にミルクの鑵と四分の一磅入りの壺とを持つて家の方へ群集を分けて行つた。その家には、彼の妻と娘とが、寢床の下の隅つこに隱しておいた十三留半と共に燒けかゝつてゐたのだ。けれどもそれらの人々の中で最も判然してゐるものは、彼が病中に一度ならず夢想した哀れな罪深い女であつた。——彼女は今や彼の前に立つてゐた。丁度夢想の中に現れたのと同じ樣で、

慘めな樹皮の靴を履いて襤褸著物を纏ひ、その背中には撞木杖と柳枝細工の籠とを背負つてゐた。彼女は消防夫や群集よりももつと大聲に叫び、彼女の撞木杖と腕を振りまはし、自分の子供等が自分を追ひ出し、そしてその爲めに銅貨を二枚失くしてしまつたと言つてゐるのだつた。子供等と銅貨、銅貨と子供等、それが全くの譯の分らない昏濁の中で一緒くたに入り交つてゐた。そこからすべての人々は、理解せんとする無益の努力の後欺かれて退いた。しかし女は止めはしなかつた。彼女は喚き續け叫び續け、そして腕を振りながら、往來から群集に壓されて自分が火のすぐ近くまで來てゐた事にも、彼女のそばに居た人々にも、他人の不幸にも、乃至は近くに立つてゐた群集の上に驟雨のやうに落ち始めた火の粉と赤熱した餘燼とに對しても、全く何等の注意をも拂はないやうであつた。遂にプロハルチン氏は恐怖の感が湧き起つて來たことを感じた。何故ならば彼は、これらのすべては云はば偶然の出來事ではない、そして彼は無事に逃れられはしまいといふことを判然と見たのであつた。そして實際彼のすぐ傍の材木の上には、その體からばら〳〵に離れて垂れさがつてゐる裂けた襯衣を著て髪の毛も髯も燒け焦げた一人の百姓がゐた。そして彼は、セミョーン・イワーノヴィチの方へすべての人々を咬しかけ始めた。群集は壓しつ壓されつし、百姓は叫び、そしてプロハルチン氏は、恐怖のために口から泡をふいてゐたが、突然この百姓は自分が五年前に最

も不人情な遣り方で欺いた敵者だつたことを知つた。といふのは、その時彼は代を拂はずに横の入口からこつそり抜け出して、熱した煉瓦の上を跣足で通るかのやうに後をも見ずに一目散に駈け出したのであつた。プロハルチン氏は、絶望的に何か言はうとし叫ばうとしたが、聲がどうしても出ないのであつた。怒り立つた群集が、錢の色をした蛇の如く彼のまはりに絡みつき、彼を絞め、彼を壓潰さうとしてゐたやうに彼は感じた。彼は信じ難き努力をなして眼を覺ました。すると彼は燒けかゝつてゐたのであつた。彼の屏風が燃えてゐた、家中が燃えてゐた、ウスティニヤ・フョードロウナも彼女の宿泊人たちも皆一緒に。彼の寢床は燃えてゐた、彼の枕も、夜著も、箱も、そして最後に彼の貴重なる蒲團も。セミョーン・イワーノヴィチは飛び上つて、蒲團を摑んでそれを後ろに引ずりながら駈け出した。併しながら、我々の主人公が禮儀も何も構はずに跣足で襯衣一枚で駈け込んで行つた時、女主人の部屋で彼は捉まつた、しつかりと捉へられて、それから意氣揚々と屏風のうしろへ連れ戻された。然るにその邊は燒けてはゐなかつた——燒けてゐたのはむしろセミョーン・イワーノヴィチの頭だつたやうに思はれる——そして寢床の上にもとの通り置かれた。それは恰も或るぼろ著物を著た悔だらけの氣持の惡い手風琴彈きが、今まで多くの他の傀儡を鞭打ちながらその魂を惡魔に賣りながらでんぐり返しをしてゐた道化人形を

彼の旅行用の箱の中へ片附けてしまつたかの如くであつた。而もその人形は遂に、この次の出演まではその存在を終つて惡魔や黒奴やペトルーシュカ（譯者註——道化者のこと。）やカテリーナ嬢や彼女の幸福なる戀人陸軍大尉等と同じ箱に入れられたのである。

間もなくすべての者が、老人も若い者も、セミョーン・イワーノヴィチを取り巻き、彼の寢床のまはりに列を作つて並び、そしてこの病人の上に期待に充ちた眼を向けたのであつた。そのうちに、彼は我に返つたが、恥かしさか又は或る他の感情から、彼に同情してゐる友達の注意から確かに身を隱さうとして夜著を引被り始めた。遂にマールク・イワーノヴィチが第一に沈默を破つた。そして感じ易い人の如くに彼は、セミョーン・イワーノヴィチは靜かにしてゐなければ不可い、病氣になるのは惡いことで且つ恥づべきことだ、小さな小兒だけがそんな風にすることが出來るのだ、彼はよくなつて役所へ行かねばならない、といふことを甚だ友達らしい樣子で言ひ始めた。マールク・イワーノヴィチは、而も正當な俸給は病人に對しては當然ではない、そして病人の位置は勤務に於いては甚だ低いものだといふことを知つてゐるので、どう考へても病人の職業や地位は大きな實質的な利益を得る見込みはないなどと言つて一寸した冗談で語り終つた。實際、彼等は、皆セミョーン・イワーノヴィチの運命に純粹な興味を持ち、且つ甚だ同情してゐたといふことは明かであつた。しかしセミョーン・イワ

ーノヴィチは變に無作法に默つて寢床の中にぢつと横はつてゐた。そして頑固に夜著を高く高く頭の上に引被るのであつた。けれどもマールク・イワーノヴィチはそれに逆ひはしなかつた。そして彼の感情を押へながら、再びセミョーン・イワーノヴィチにとつて甚だ心持のいゝ何事かを言つた、病人は如何に取扱ふべきかといふ事を彼は知つてゐたので。併しセミョーン・イワーノヴィチはこれを感じなかつた。その反對に彼は最も不信な樣子をして齒の間から何か呟き、そして出し拔けに敵意を持つた風で左右を横眼で睨み始めた。恰も彼はその同情を持つた友達を、彼の眼で燼滅してやらうとでもいふやうに。それを止めることは無益であつた。マールク・イワーノヴィチは堪へきれなかつた。そしてその男が腹を立て全く激しそして唯單に片意地を張らうと決心したのを見ると、もう温和に柔しくしてやらうとはしず に面と向つて言つた。もう起きる時だ、寢てゐる必要はない、そして燒けてゐる家や義妹や酔つぱらひの乞食や錠前や箱に就いて夜となく晝となく叫ぶがいゝ、凡ゆる馬鹿な不都合な下品なことは何だかは神が知つてゐる、何故ならセミョーン・イワーノヴィチが自身眠りたくないとしても他の人々を妨げてはならないからだ、忠告は喜んで聽くがいゝのだ、と。

此の話には効果があつた。セミョーン・イワーノヴィチは直樣話し手の方を振り向いて、しつかりとした發音で、しかし荒々しい聲で言つた、「默れ、狗ころー わるお喋り、口の汚

れた奴めー よく聽け、青二才のしやれ者、お前は公爵なのか、えゝ？ 俺のいふことが解るか？」

こんな侮辱を聞くとマールク・イワーノヴィチは怒り立つたが、病人を相手にしてゐることに氣がついて心を廣くして彼の鬱憤に打勝ち、そして不機嫌から彼を辱かしめようとした。が、それも矢張り妨げられた。何故ならセミョーン・イワーノヴィチは詩を作つたから人々は彼と事を共にしてはならないと言つたからだつた。それから二分間ばかり沈默が續いた。やつと驚きから我に返つて、マールク・イワーノヴィチは判然と明確によく選ばれた言葉で、しかししつかりと、セミョーン・イワーノヴィチは紳士の中に居るのだといふことを理解しなければならないと斷言した。そして、「君は紳士に對する交際ひ方を理解しなければいけませんよ。」

マールク・イワーノヴィチは隨時うまく喋ることが出來た、そして聽衆に感銘を與へることを欲してゐた。ところが、セミョーン・イワーノヴィチは恐らく長年の沈默の習慣から幾らか唐突な話方をし、唐突な行爲をした。そしてその上折にふれて長い文句を言ひ出す時には彼はそれの中で先きへ先きへと行つてしまふので、一語々々が他の言葉にくつ附いて行くやうに思はれた。他の言葉は第三の、そして第三の言葉は第四のそれに……。そこで彼の口は一杯

になつて溢れ出るといふ風だつた。彼は吃り始めた、そして一杯になつてゐる言葉は繪にでも描いたやうな混雜さで飛出さうとしてゐた。感じ易い人間だつたセミョーン・イワーノヴィチが時とすると恐ろしく馬鹿なことを言ひ出すのはその爲めであつた。「お前は嘘つきだ、」と彼は今言つた。「お前は馬鹿だ、自墮落な奴だ！　お前は――お前は乞食をしたがつてゐるんだ、お前は煽動者だ、お前は――お前はごろつきだ。そんなもんだ、詩人め！」

「だが、君はまだ氣違ひのやうになつてゐる、さうぢやありませんか、セミョーン・イワーノヴィチ？」

「よく聽くがいゝ、」とセミョーン・イワーノヴィチは答へた。「馬鹿共が氣違ひのやうになる、醉つぱらひがさうなる、犬共がさうなる、だが賢い人は良心を持つた行ひをする。よく聽くがいゝ、お前はお前自身の爲すべきことを知らないのだ、ごろつきめ、お前は教育を受けた紳士だらう、お前は本を習つたんだらう！　さア、お前は燒けさうになつてるんだ、お前の頭は燒け落ちかゝつてるのが分らないのか。お前はそれをどう考へてるんだ？」

「だが……君は……どう言ふつもりなんだ、頭が燒け落ちるつて……セミョーン・イワーノヴィチ？」

マールク・イワーノヴィチはもうそれ以上何も言はなかつた。すべての者はセミョーン・イワーノヴィチがまだ正氣になつてゐないで無我夢中であることを明かに見た。

しかし女主人は、此時次のことを言はずにはゐられなかつた。うねり曲つた小路の家は禿頭の寡女（デーフカ）の爲めに燃えてゐたのだ。あすこには頭の禿げた寡女が住んでゐる、彼女が蠟燭を點（とも）して物置へ火をつけたのだと。しかし、彼女の處では何事も起らなかつた。そしてすべてが家の中ではうまく行つてゐた。

「だが、見給へ、セミョーン・イワーノヴィチ、」とジノーヴィ・プロコフィエーヴィチが堪りかねて女主人を遮りながら言つた。「君は頑固爺だ、古道具だ、馬鹿だ――君は義妹や踊りの試驗のことでからかはれてるんぢやないか？　え、さうですかね？　君の考へてるのはそれですかね？」

「さア、よく聽け、」と我々の主人公は、寢床の上に坐り、彼の深切なる友達に對する激怒の發作で最後の努力をしながら答へた。「馬鹿とは誰のことだ？　お前が卽ち馬鹿だ、犬が馬鹿なのだ、お前こそ道化者だ。俺は道化をやらうとは思はないよ、お前ぢやあるまいしね。よく聽くがいゝ、狗ころ、俺はお前の召使ぢやないんだ、えゝ。」

セミョーン・イワーノヴィチはもつと何か言はうとしてゐたが、もとの寢床へ力無く倒れてしまつた。彼の深切なる友達は、混亂してぽかんとして殘された。何故なら彼等は今や何が

セミョーン・イワーノヴィチを悪くしてゐたのか解つたのであるが、どう始めたらいゝか知らなかつた。突然に臺所の戸がきしつて開いた。そして醉つぱらひの乞食——別稱ジモヴェイキン氏——がおづ〳〵と首を突込んで、いつもやる通り注意深くその場所を嗅ぎまはしてゐた。恰も彼は期待されてゐたかのやうだつた。すべてのものは早く來るやうに早速彼に手招きした。"そしてジモヴェイキンは非常に喜んでひどくいそ〳〵として大急ぎでセミョーン・イワーノヴィチの傍へ突進して行つた。

ジモヴェイキンが或る種の非常な働きをして眠らずに全夜を過したといふことは明かなことであつた。彼の顏の右側には膏藥が貼られてゐた。彼の腫れた眼瞼は眼から出る膿の爲めに濡れてゐた。彼の外套と著物の各部は裂けてゐた。而も、彼の著物の左側の全部は著しく穢らしい、多分水溜の泥か何かをはね上げてゐたのであつた。彼の腕の下には誰だかのヴァイオリンがあつた。それは彼が賣るつもりで、何處からか持つて來たのであつた。確かに彼等が彼を助けに呼んだのは間違ひではなかつた。先づ事件がどういふ位置にあるかを見ると、彼は早速犯人に向つて話しかけた。そして彼がどうしようとしてゐるのかを知り、そして彼が上手であるといふことを感じてゐる人間の樣子で言つた。「お前さんは何を考へてるんだね？　お起きなさいよ、セーニカ。お前さんは何をしようとしてるんです、お前さんのやうな悧巧者が？　氣をお附けなさいよ、それとも騷ぐんなら寢床から引張り出しますよ。騷いぢやいけませんよ！」

此の簡單なしかし力ある言葉は彼等をすつかり驚かした。それよりもつと驚いたのは、彼等がセミョーン・イワーノヴィチの樣子を見た時であつた。彼はこれをすべて聞きながら、そして自分の前に居るこの人物を見ながら、已むを得ない反抗を殆んどその齒の間から私語くのがやつとであつた程、狼狽して混亂と驚駭とに陷つたのであつた。

「あつちへ行け、畜生、」と彼は言つた。「お前は憐れな奴だ——お前は泥棒だ！　わかるかね？　お前は本當のえらがり屋だ。」

「いや、兄弟、」ジモヴェイキンは、しつかりと彼の沈著さを保持しながら力を籠めて答へた。「よくないこつた、賢い兄弟、プロハルチン、お前さんは、本當のプロハルチンらしい人間だ！」ジモヴェイキンは、セミョーン、イワーノヴィチをあしらひながら、そして喜ばしさうに四邊を眺めながら續けた。「騷いぢやいけませんよ！　しつかりなさい、セーニカ、しつかりなさい、でないと私はお前さんを棄てゝしまふよ、何もかも皆に話してしまふよ、えゝ兄弟、解るかね？」

確かにセミョーン・イワーノヴィチは理解した。何故なら彼は話の最後を聞いた時びつくり

した。そして全く絶望的な風をして敏速に四邊を見廻し始めた。

その結果に滿足して、ジモヴェイキン氏は喋り續けるのであつた。しかしマールク・イワーノヴィチは彼の熱中を妨げた。彼は、セミョーン・イワーノヴィチがぢつとして、殆んど全く靜まつたのを待つて、その不安な病人の上に次のやうなことを力をつくしてうまく感じさせ始めた。「彼の頭に現在持つてゐるやうなそんな考へを蓄へることは、第一無益なことであり、第二に、無益なばかりか有害なことである。そしてその爲めにはセミョーン・イワーノヴィチが悪い例だといふばかりでなく、すべての人々を誘惑することになるのだ。」

すべての者はこの話から滿足なる結果を豫期してゐた。而も今までセミョーン・イワーノヴィチは非常に靜かにしてゐて、當り前の言葉で答へてゐた。靜かな議論が續いた。彼等は、友達らしく彼に訴へて彼が何をそれ程恐れてゐるのかを訊ねた。セミョーン・イワーノヴィチは答へた。が、彼の答へは見當違ひであつた。彼等は彼に答へ、彼は彼等に答へた。双方に尙ほ一二の說明があつて、それから凡ゆる人々が議論の中に入つて來た。といふのは、彼等がどういふ態度をとつたらいゝか解らなかつたやうな、不思議な驚くべき問題が出し抜けに出現したからであつた。議論は遂に短氣に導き、短氣が叫喚となり、そして叫喚は涙とさへ

變つた。そしてマールク・イワーノヴィチは遂に口から泡を吹いて、こんな阿呆は見たこともないと斷言するに到つた。オプレヴニエフは厥はしげに唾を吐いた。オケアーノフは脅されてゐた、ジノーヴィ・プロコフィエーヴィチは涙をいつぱい溜めてゐた。而もウスティニヤ・フョードロウナは全く泣き叫んでゐるのであつた——彼女の宿泊人は氣が違つてしまつたのだ、旅行券もなし誰に話もしずに死んでしまふのだ、哀れな人よ、だが自分は取遺されて淋しい女になつてしまふ、さうして襤褸を曳ずつてゐるのだらう。要するに、彼等の蒔いた種が百倍の産出をなした、土壤も餘りに豐饒であつた、そして彼等と共にセミョーン・イワーノヴィチは全く已れの機智を張り過ぎ、最も取り返しのつかぬ方法を成就したのだといふことを彼等は皆遂にはつきりと見たのであつた。すべての者は引込んで默つてしまつた。それはセミョーン・イワーノヴィチが脅されてゐたことを彼等は見たが、その深切なる友達の方も矢張り脅されてゐたからであつた。

「何だ?」マールク・イワーノヴィチは叫んだ。「だが君は何を恐れてゐるのだ、何で氣が違つたんだ? 誰が君のことを考へてるんだ、親愛なる者よ? 君は恐れる權利があるのか? 君はどういふ人間だ? 君は何をしてゐる? 虚無だ、ねえ君。完全な虚無、ねえ君、それが君なのだ。何を君は騒いでるんだ? 女が町を練つて行く、そこで君も練つて行かうとして

るのか？　酔つぱらひがその衣嚢に注意しなかつた、が、それが君の上衣の裂け目が切り離されなくてはならないといふ理由なのか？　家が焼ける、そこで君の頭は焼け落ちるであらう、さうなのか？　えゝ君、さうなのか？」

「お前は……お前は……馬鹿だ！」とセミョーン・イワーノヴィチは呟いた。「お前の鼻が切られるとお前はそれをパンのかけらと一緒に食つちまつて氣がつかずに居るだらう。」

「しやれ者ならしやれ者で結構さ、」マールク・イワーノヴィチは耳にもかけずに叫んだ。「僕は本當にしやれ者かも知れない。だが僕は試験を受けようとはしてやしない、結婚しようとはしてゐない、踊を習はうとはしてゐないんだ。僕はしつかりと地に足をおいてゐるんだ。だがお爺さん、どうして君には場所がないんだ？　君が行くと床がおつこちでもするんですかね、えゝどうです？」

「それがどうしたんだ？　お前が聞かれてるんぢやないか。閉ぢ込めてしまふのさ。それつきりだ。」

「それつきり？　閉ぢ込めるつて？　君は何を考へてるんだ、えゝ？」

「おゝ、酔つぱらひの乞食を……」

「さうだ、だが御承知のとほりあれは酔つぱらひだ。しかし君は人間ですよ。」

「さうだ、俺は人間だ。だがあれが在る、いや失くなつちまつた……」

「失くなつた？　あれとは何のことですか？」

「あれぢやないか、役所さ。や、く、所さ！」

「だが、幸福な人！　しかし勿論役所は必要で、且つ役所は……」

「それは必要さ。聽き給へ、それは今日は必要だ、明日は必要だ。しかし明後日にはそれは不必要になるだらうよ。どんなことが起つたか聽いたかね？」

「だが、君の俸給は年額でくれますよ。君はフォーマを穿つてゐる、君は不信だ。ねえ、君が年を取れば又他の仕事を與へてくれますよ。」

「俸給？　だが、もし俺が俸給を費つてしまつたらどうだらう？　もし盜賊が來て俺の金を取つて行つてしまつたらどうだらう？　それに俺は義妹を持つてゐるんだ。いゝかね？　義妹だよ！　お前はグヴォズドゥイリ（譯者註――昔城壁を撞き破るに用ゐし軍器、破城槌、撞車）だ……」

「義妹だつて！　君は人間だ……」

「さうだ、俺は人間だ。しかしお前は讀書家で而も馬鹿だ、いゝかね、お前はグヴォズドゥイリだ、本式のグヴォズドゥイリだ！　お前はそんなものなんだ！　俺はお前の冗談のことを言つてるんぢやない。が、突然に廢されてしまつた仕事もあるさ。デミッド――いゝかね――

デミッド・ワシリエーヴィチはあれは廢されるだらうと言つてる……」

「あゝ、君のデミッド！　だが、それや罪ですよ……」

「目瞬き一つする内にお前は地位を失つてしまふんだ。そこでお前はそれを利用しなくちやならなくなるんだ。」

「それにしても、君はたゞ狂つてるんだ、でなければ氣が違つてるんですよ！　さアはつきり言つて下さい、君は何をしたんです？　君は、何か惡いことをしたんなら、すつかり白狀なさい。恥かしがつたつて、何にもなりやしませんよ。氣が狂つてるんですか、お爺さん、え？」

「狂つたんだ、氣が違つたんだ！」と彼等は皆叫んでそして絶望的に彼等の手をよじるやうにした。が女主人はマールク・イワーノヴィチがセミョーン・イワーノヴィチを滅茶苦茶に引裂いてしまふことを恐れて、彼の方へ兩腕を投げかけたのであつた。

「異端だ、お前さんの魂は異端だ、賢い人！」ジモヴェイキンは彼に懇願した。「セーニヤ、お前さんは怒るやうな人間ぢやない。お前さんは氣高い愛嬌のある人間なんだ。單純で善良なんだ……。いゝかね？　それは皆お前さんの善良さから出て來るんだ。そら、私は惡者で馬鹿で而も乞食でさア、それでも善良な人々は私を棄てやしないんだぜ。恐れることはありやしない。御覽のとほり皆さんは私を尊敬してゐて下さる。私は皆に、お内儀さんにもお禮を言ひます。さア、御覽、私は床まで屆く程皆にお辭儀をする。さア。御覽、御覽、私はあなたに借りてるものを拂つてゐますよ。御内儀さん！」此處でジモヴェイキンはペダンティックな威嚴を以て頭を振りながら床にまで屆くお辭儀をした。

それが濟むとセミョーン・イワーノヴィチは再び話しを續けるのだつた。が今度は皆は彼を拋つておかなかつた。彼等は皆干渉した。彼に懇願し、彼をしつかりさせ彼を慰め始めた。そして、結局セミョーン・イワーノヴィチをして己れを恥ぢさせたのであつた。で終ひには彼は、弱々しい聲で自分を說明させてくれと求めた。

「だが、それで大變いゝ。」と彼は言つた。「俺は愛嬌がある、俺は靜かだ、俺は善良で信實で熱誠だ。俺の血の最後の一滴まで、ねえ……聽いてるかね、狗ころ、しやれ者？……仕事はどうにでもなれだ、が御覽のとほり俺は乞食だ。だがそれでいゝんならどうだ？　いゝかね、しやれ者？　お前は默つて理解しようとするがいゝんだよ！　それでいゝとすれば、それ丈けのことだ……。それは在るさ兄弟、だがそれから失くなるよ……解るかね？　そこで俺はパンを求めて乞食をするやうになるだらう、解るかね？」

「セーニカ、」ジモヴェイキンは、その聲で一般の騷擾を消しながら狂暴に叫んだ。「お前さん

は騒動を起させる！　私はお前さんを告發する！　何を話してるんだ？　お前さんはどういふ人間なんだ？　お前さんは謀反人かね、お馬鹿さんだね？　無法な馬鹿者は證明書なしで追拂はれるんだ。だがお前さんはどういふ人間だね？」

「おゝ、丁度それだ。」

「それとは何だ？」

「さうだ、それだよ。」

「どういふ意味なんだ？」

「いや、俺は自由だ、彼も自由だ。人は寢てゐて、考へる……」

「何を？」

「もし俺が謀反人だと言はれゝば……」

「謀、反、人？　セーニカ、お前は謀反人だ！」

「待て、」とプロハルチン氏は手を振つて、持上りかけてゐた騒動を押止め乍ら叫んだ。「俺が言はうとしてゐたのはそんなことぢやないんだ。理解しようとしろ、たゞ理解しようとしろ、阿呆め。俺は法を守つてゐる。俺は今日も法を守る。明日も守る。すると出し抜けに奴等は俺を蹴出して俺を謀反人と呼ぶんだ。」

「何を言つてるんだ？」とマールク・イワーノヴィチはたうとう雷のやうな聲で叫んだ。休まうとして腰を下ろした椅子から飛び上り寢床の方へ駈け出して行つて、そして狂氣の如く業腹なのと狂暴とで震へながら、「どういふ心算なんだ？　君こそ阿呆だ！　頭もなければ尻つぽもない。だが、この世界では君が唯一の人間なのか？　この世界は君の爲に作られたのか、さう思つてるのか？　君はナポレオンか？　君は何だ？　君は誰だ？　君はナポレオンなのか、え、？　さア、言ひ給へ、君はナポレオンなのか？」

けれどもプロハルチン氏は、この質問には答へなかつた。それは、彼がナポレオンたることの恥かしさに壓迫されたからではない。こんな責任を、身に引受けることを恐れたからでもない――否、彼はそれ以上議論しそれ以上何か言ふことが出來なかつたのである……。彼の病氣は危險な處に達してゐた。小さな涙の玉が、突然彼の輝いた熱病のやうな灰色の眼から迸り出た。彼は、この燃ゆる頭を病氣によつて弱らせられた骨張つた手のうちに隱して、床の上に坐り、啜り泣きながらこんなことを言ひ出した。――彼は全く貧乏だ、彼は簡單な不幸な人間だ。彼は愚かで無教育だ。彼は深切な人々に求める。彼を許し、彼の面到を見てくれ、彼を守つてくれ、彼に飲食を與へてくれ、彼を缺乏のうちに拋つて置かないやうに求める、と。それからセミョーン・イワーノヴィチがほかにどんなことを言つたのかは神が知つてゐる

丈けだ。彼がこの訴へを發した時、彼は氣違ひじみた恐怖を以て自分の周圍を眺めてゐた。まるで彼は天井が落ちて來るか、床が外れて了ふかを待つてでも居る時のやうであつた。凡ての者はこの不幸な人を見て憐れみを感じた、そして彼等の心は和らげられた。女主人は頼るべのない百姓女のやうにしやくり上げ、泣きながら、その兩手の寢床の上の病人の背中に置いた。マールク・イワーノヴィチはナポレオンの記憶に觸れることの無益なのを見て、忽ち深切に戻つて彼女の助けとなつた。他の人々は、何か役に立たうとして、ラズベリイのお茶のことを言ひ出して、それはいつでもすぐ利いた、そして病人といふものは非常に好きだ、と言つた。しかしジモヴェイキンはそれに全く反對して、加密列(カミッル)か又はさういふ種類のものの一服に勝るものは何もないと言つた。ジノーヴィ・プロコフィエーヴィチに到つては、善良な心から凡ゆる種類の無考へのことでセミョーン・イワーノヴィチを脅したことを後悔して涙を流してゐた。そしてこの病人が全く貧乏で助けを要してゐるといふ彼の最後の言葉から推して、その家を借りてゐる者に當座制限をして彼のために義捐金を出さうとしてゐた。溜息をつき、唸き聲を洩さない者はなかつた。哀憐と悲哀とを感じない者はなかつた。それでも尚すべての人には、一人の人間がこれ程に苦しみに打たれるといふことが有り得るのかと怪んでゐるのであつた。そして彼は何を恐れてゐたのであらう？　若しも彼が善い地位を持

つてゐたとしたら、若しも彼が妻を持つてゐたとしたら、若しも彼が幾人かの子供を持つてゐたのだつたとしたら、すべては甚だ善かつたであらう。若しも彼が何等かの嫌疑を受けて裁判所に引出されてゐたのだとしたら、許されたに違ひない。ところが彼は一個のトランクと獨逸式の錠とより外、何も持つてゐない全くつまらない人間であつた。彼はその屛風のうしろで何も言はず、世間に就いても何も知らず、彼の僅かばかりの金を貯へながら二十年以上もぢつとしてゐたのである。さうして今やその人は、輕佻な馬鹿らしい言葉でいへば全くその頭を覆した、(氣が違つたこと)そして困難に逢はねばならないといふ考へで全く苦しみに打たれたのであつた……。そしてすべての者が困難に逢ふのだといふことは彼の心には決して浮んで來なかつた！　「もし彼がその事を考へに入れさへしたら、」と後になつてオケアーノフが言つた。「我々すべてが困難に逢ふのだといふことを考へさへしたらあの男は氣をしつかりとして、あんな馬鹿なことは止めてしまつて、どうにかして辛抱したらうが。」

共日いつぱいセミョーン・イワーノヴィチの事より外に何も話されなかつた。人々は彼の處へ行つて訊ねたり慰めようとしたりした。が夜になると彼はもうそれどころの狀態ではなかつた。哀れな人は人事不省になり熱に浮かされてゐた。彼は無意識に陷つたので、人々は遂に

は醫者を呼ぶことを考へた。宿泊人たちは皆協力してセミ・ーン・イワーノヴィチを看護することを引受け交る替るに徹夜して彼を慰めてゐた。そしてすべての人を起すことにした。眠らずに居るために、彼等は病める醉つぱらひの友達のそばに坐つて骨牌をやつてゐた。その醉つぱらひは終日その家で過し、そして夜もそこに居たいと言つてゐた。遊戯は後拂でやつてゐたので彼等はまもなく飽きてしまつた。彼等は遊戯をやめて何か議論をし始め、それから次第に聲高くなり騒がしくなつたが、遂には色々な方面へ飛ばつちりが飛んで長いこと怒つて呶鳴つたり言ひ爭つたりして續いてゐた。そして誰もかも出し抜けに不愉快になつたのを感じたので、最早そこに坐つてゐる氣がしなくなつて、寢に行つてしまつた。間もなく家の中は空つぽの穴倉の様に靜かになつてしまつた。恐ろしく寒かつたので尚更穴倉みたやうであつた。最後に眠りに落ちたのはオケアーノフであつた。「で、それは眠りと目覺めとの中間だつたんだ。」と彼は後で言つた。「丁度明方に僕のすぐそばで二人の人が話しつゞけてゐたやうだつた。」オケアーノフは、彼がジモヴェイキンを見、ジモヴェイキンが彼のすぐそばに居た古い友人レムニェーフを起し始め、それから彼等は長い間私語き合つてゐたが、やがてジモヴェイキンは出て行つて臺所へ入る戸の錠を外さうとしてゐるのが聞えた——と言つてゐた。後で女主人が斷言したことだが、鍵は彼女の枕許に置いてあつたが其晩失くなつてしまつた。たうとう彼は——オケアーノフにかう證言した——彼等が屏風の後ろの病人のところへ行つて蠟燭をつけた時の物音を聞いたやうに思つた。「それきりで僕はもう何も知らないのだ。」と彼は言つた。「僕は熟睡して眼を覺ました。」他の皆も同様だつた。その時には家の中のすべての人が、屏風の後ろで死人をも呼び起しさうな叫び聲のあがつたのを聞いて、その寢床から飛び上つたのであつた。そして彼等の多くは丁度其瞬間に蠟燭が燃えつくしたやうに思つた。大騒動が起つたがすべての人の心は固くなつた。彼等は叫び聲の方へ遮二無二突進して行つたが、その時には爭闘が始まつて、叫び、罵り、摑み合つてゐるのであつた。人々はマッチを擦つて火をつけると、そこではジモヴェイキンとレムニェーフとが互ひに摑み合つてゐた。彼等は互ひに相手を罵り惡く言ひ合つてゐた。人々がその方へ燈火を差し向けた時に一人の方が叫んだ。「それは僕ぢやないんだ、この惡者だ。」すると、もう一人の方、ジモヴェイキンが叫んでゐた。「私に觸れるな、私は何もしなかつたんだ！　私はいつでも誓つてみせる！」二人共殆んど人間のやうには思はれなかつた。しかし人々にとつては、第一に最早その二人は問題でなかつた。いつもの屏風のうしろには病人が居なかつたのである。彼等は早速爭闘者を分けて引離した。そして、プロハルチン氏が寢臺の下に轉がつてゐるのを見た。寢臺の上には古

い脂じみた裸の蒲團の他には(彼はシーツを持つてゐたことはなかつた。)何も殘つてゐなかつた所を見ると、彼は、全く無意識ではあつたが掻巻や枕を一緒に引ずつて行つたに違ひない。彼等はセミョーン・イワーノヴィチを引張り出して蒲團の上に寢かした。が、まもなく彼に就いて心配する必要はなかつたことに氣がついた。彼は全く駄目になつてゐた。彼の腕は硬ばつてゐた。そして、彼はすつかりちぎれ〳〵になつてゐるかのやうに思はれた。彼等は彼の前に立つた。彼はまだかすかにぶる〳〵身震ひし、腕を以て何かしようと努力してゐたが、一言も口はきけなかつた。しかし眼をぱちぱちさせてゐた。それは丁度死刑執行官によつて切り離された後、まだ暖かで血のしたゝつてゐる頭がすると言はるゝものの如くであつた。

遂に彼は、次第々々に沈靜になつて行つた。最後のかすかな痙攣も去つた。プロハルチン氏は彼の善行と彼の罪とを持つて出立したのであつた。セミョーン・イワーノヴィチは何事かに脅されてゐたのか、後にレムニェーフが主張したやうに夢を見てゐたのだつたか、又は何か他の禍があつたのだつたか——誰も知らなかつた。言ひ得ることはかういふ事であつた。若し其時家の中に長官が現れてセミョーン・イワーノヴィチは謀反と傲慢と狂亂との爲めに罷免になつたと言つたとしても、若しまる年取つた襤褸を引ずつた乞食が戸口にはひつて來て

自分はセミョーン・イワーノヴィチの義妹だと言つたとしても、又若しセミョーン・イワーノヴィチが報酬として二百留の金を丁度此時受取つたとしても、或は又家が火事になつてセミョーン・イワーノヴィチの頭が本當に燒け落ちかゝつてゐたとしても——彼は、大抵是等の結果に指一本動かすことも許されてはゐなかつたであらう。最初の昏迷が過ぎ去つて、居合せたすべての人々が口をきく力を回復し推測と想像とを以て叫んだり飛び上つたりし乍ら、狂熱と興奮とに激してゐた間に、ウスティニヤ・フョードロウナが寢床の下から例の箱を引張り出し、狼狽てゝ蒲團の下やセミョーン・イワーノヴィチの靴の中までも掻き捜してゐる間に、人々がレムニェーフとジモヴェイキンとに詰問してゐる間に、その時まで一番靜かで一番ハンブルで一番變な樣子をしてゐたオケアーノフは、出し抜けにその沈着な心を振ひ起して彼の凡ゆる見えざる才能を表はし、帽子をとつて一般の騒擾に掩はれてゐる家の中をすり抜けて外へ出て行つた。その騒擾と亂脈との憂悶がその時まで極めて靜かだつたその動亂せる家に於いて極點に達した時、扉が開いて突然に雪のやうに頭髪の白い紳士らしい風采の人物が彼等の方へ降りて來た。眞面目な不愉快さうな顏附をしたその人のうしろにはヤロスラーフ・イリイーチ、又ヤロスラーフ・イリイーチのうしろには彼の下役と、かういふ場合に出て來る義務を持つてゐる職員、そして彼等すべてのうしろには非常に困惑したオケアーノフ氏がゐた。紳

士らしい風采の眞面目な樣子をした人物はセミョーン・イワーノヴィチの處へ眞直に行つて、彼を檢査し、顏をしかめ、肩をゆすぶつて、それから誰でも知つてゐることを言つた。卽ち、この死人は死んでゐる、と。そしてこれと同じく一二日前にも或る高貴な紳士が眠つてゐる內に突然死んでしまつたといふことを附加へただけであつた。それから、紳士らしい、が不快さうな樣子をしたその人は、人々が何事に就いても彼を苦しめたことはなく、彼は自殺したのである、と言ひ乍ら行つてしまつたのであつた。彼の場所は直ぐヤロスラーフ・イリイーチによつて滿たされた。（その間にレムニェーフとジモヴェイキンとは例の特殊な職員の保管の下に手渡しされた。）ヤロスラーフ・イリイーチは或者に質問をし、敏捷に女主人が旣に開けようとしてゐた箱をとり、靴を元の場所に返して、何もかも穴に納まつてゐる、全く使はれてゐないと言ひ、枕を元のところへ置くように賴み、オケアーノフを呼んで箱の鍵を訊ねた。鍵は醉つぱらひの乞食の衣囊から現れた。それから嚴肅に例の官吏の面前でセミョーン・イワーノヴィチの財產を開いた。すべてのものが明るみに出された。二著の襤褸著物、一足の短い靴下、半分になつたハンケチ、古帽子、釦が五六個、若干の古い靴底、そして一足の靴上脚絆、卽ち凡ゆる種類のがらくたと切屑と襤褸と癈物とで、それらは腐つた臭ひがしてゐた。いくらか價値のある唯一のものは、獨逸式の錠前だけであつた。人々はオケアーノフを呼んで嚴重に彼に詰問した。が彼は誓ひを立てる覺悟をしてゐた。彼等は枕を求めてそれを檢査した。それは恐ろしく穢らしかつたが、その他の點では他の枕と全く變りはなかつた。彼等は蒲團の處へ行つた。そしてそれを持上げようとしたが一寸考へて止めた。その時出し拔けに全く思ひもかけず何か重いものが、床の上にかちんと落ちた。屈んでみるとそれは紙をよぢつた物で、そのよぢつた中には、數十留がはひつてゐた。「ひやアー」ヤロスラーフ・イリイーチは、髮の毛や詰物などがはみ出してゐる蒲團の裂目を指示し乍ら叫んだ。その裂目を檢査してみると、それはたつた今ナイフで切られた許りで長さは半碼程だつた。彼等はその破れ口へ手を差込んでみた。そして豪所用のナイフを引出した。それは確かに、蒲團を裂いた後で急いでそこに押し込んだものであつた。ヤロスラーフ・イリイーチが裂目からナイフを引出したかと思ふと再び、「ひやアー」と言つた。見るともう一つ金をよぢつたものが落ちたのであつた。それからその後で今度は一度に半留錢が二つ、四分の一留、それからいくらかの小錢と古代の重みのある五哥錢——すべてこれらは保管された。此處に於いて剃刀で蒲團をすつかり切つてみるのも無益ではあるまいといふ事が分つた。剃刀が求められた。

其內に、蠟燭の光は見物人にとつて非常に珍らしい光景を照らした。十人ばかりの宿泊人たちは繪にでもありさうな服裝で寢床のまはりに集つてゐた。丁度寢に行つた時の樣に皆髮

はもぢや〳〵で髯だらけで、顔も洗はず眠むさうな様子をしてゐた。眞蒼な顔をしてゐる者もゐれば額に汗をしたゝらしてゐる者もゐた。或者は震へてゐ或者は熱病のやうであつた。女主人は全くぽかんとしてしまつてヤロスラーフ・イリイーチの喜びを待ちながら兩手を組んでおとなしく立つてゐた。上のストーヴから召使アヴドーチャの頭と女主人の可愛がつてゐる猫とが恐ろしさうな好奇心を以て覗いてゐた。裂け破れた屏風が、寢床の上に投げ出され、開いた箱は役にも立たない内容をさらけ出し、掻巻や枕は滅茶々々に投げ散らされて蒲團から出た毛氈をその上にかけてあつた。そして三本脚の木造のテーブルの上には銀貨や他の貨幣の著々と堆積が輝いてゐた。獨りセミョーン・イワーノヴィチは安靜なまゝで寢床の上にぢつと寢てゐて、彼自身の破滅に就いては何等の先見をも持つてゐないやうに見えてゐた。剃刀が持つて來られて、ヤロスラーフ・イリイーチの助手が、役立つことを望みながら、蒲團をその所有者の背中の下から自由にするためにやゝ面倒臭ささうに振つた時に、セミョーン・イワーノヴィチはいつもの通り丁寧に一寸餘地を作つて探檢者の方へ背を向けて轉がつた。それから二度目に振つた時、彼はその顏を引くり返して、遂にそれ以上の餘地を與へた。そして最後に寢具をうまく打ち損つた時には、彼は突然全く意外にも頭を下へ落して、たゞ二本の骨張つた細い青い足を見えるところへ殘したきりだつた。それは木炭の

木の二本の枝のやうに、上を向いて突立つてゐた。これは二度目であつた。その朝プロハルチン氏は彼の寢床の下に頭を突込んだが、それは忽ちに疑ひを惹き起した。ジノーヴィ・プロコフィエーヴィチを先頭にして、或る宿泊人たちは其處にも何か隱されてゐるか見ようとしてその下に這ひ込んだのであつた。けれども、彼は徒らに各自の頭をぶつけ合つただけであつた。そしてヤロスラーフ・イリイーチが叫んで、セミョーン・イワーノヴィチをその不愉快な場所から解放するやうに命じたので、その内の感じのいゝ二人の者が一本々々足を持つてその疑ひない資本家を日の光の下に引つぱつて來て、寢床の上に彼を置いた。その間髮の毛がばら〳〵飛んでゐた。銀貨の堆積は增した——そして、神よ、何といふ金額だ！……貴重な銀貨、固い重々しい留、半留、綺麗な半留貨幣、下等な四分の一留、二十哥錢、見込みのない古い小さい十五哥錢まであつた——すべては、最も整然たる間違ひのない方法で切れ〳〵の紙に包まれてゐた。その內には、又或る種の珍らしい二つの貨幣があつた、一つはナポレオン金貨で、一つは種類の分らない或る甚だ稀な貨幣であつた……。そのうちの或る物は非常に古代のものであつた。それらは磨滅したそして切り刻ざまれたエリザベス貨幣と、獨逸のクロイツェ（昔の小銅貨。）ペテロ貨幣とカザリン貨幣であつた。例へば今では殆んど無い古い十五哥錢などがあつた。それは、耳輪として著ける爲めに穴を開けられ、皆ひどく磨れてゐたがそ

れでも須要なる婚姻持参物の品數のうちに入るものである……。銅貨もあつたが皆綠色になり錆びついてゐた。……彼等はたつた一枚の赤い紙幣を見出した。遂に解剖が濟んで蒲團類も幾度も振つてみて金の音がしなくなつたので、彼等はその全金額をテーブルの上に積んでその計算にかゝつた。一目見たのでは人は一寸欺かれて、それを百萬もあるやうに見積つたかも知れない。それ程それは莫大な山であつた。併し、實際それは驚くべき金額ではあつたが百萬ではなかつた——正確に二千四百九十七留半——それ故、ジノーヴィ・プロコフィエーヴィチの義捐金がその前日擧げられたとしたら、多分それは正に二千五百留だつたであらう。彼等は金をとり、死者の箱には封印をした。彼女が死者の負債に就いて告訴すべき場所と時とを彼女に知らした。例の官吏が檢閲をした。この時、義妹に就いてのことが一寸口に出た。しかし、義妹は或意味に於いて作り話だといふこと即ちそれはその爲めに彼等が一度ならずセミョーン・イワーノヴィチを非難した所の不完全な幻想の所産だといふことが說明されたので、彼等はプロハルチン氏の名聲に對する無益な、有害な、そして不利なその考へを棄てゝ了つた。そして事件は終つた。

最初の感動が終つて、宿泊人たちが我に返り、その亡き友がどういふ人物だつたかといふことを知つた時、彼等は皆穩かになり沈默に陷つて信じられないやうにお互ひに顏を見合せ始めた。中にはセミョーン・イワーノヴィチの行爲に非常に感銘したやうに思はれた者もあつた。何といふ財産だ！　してみると人間は斯くの如くに貯蓄することが出來るのだ！　マールク・イワーノヴィチはその沈著さを失はずに、何故セミョーン・イワーノヴィチがそれ程突然苦しみに打たれたかを說明し出した。が、誰もそれを聽く者はなかつた。ジノーヴィ・プロコフィエーヴィチは非常に考へに沈んでゐた、オケアーノフはいくらか飮んでゐた。他の人々はやゝ鬱ぎ込んでゐた。ところが、雀の嘴のやうな鼻を持つたカンターレフと呼ばれてゐる小男は、自分の箱や鞄をすつかり注意深く荷作りし繩をかけて、聽きたがる者には、時勢が困難になつて此處では生活條件が彼の收入以上なのだと冷淡な說明をして、その晚この家を去つたのであつた。女主人はセミョーン・イワーノヴィチを歎いて斷え間なしに泣いてゐた。そして彼女の淋しい淋しい狀態を利用したのだといつて彼を呪つてゐた。マールク・イワーノヴィチは、この死んだ人が何故金を銀行に預けなかつたのかを訊ねられた。「彼は單純すぎたのです。善い人間だ。そんなことは想像もしなかつたんです。」とマールク・イワーノヴィチは答へた。

「さうだ、あなたも亦善良な單純な婦人だ。」とオケアーノフが言葉を挿んだ。「二十年間この人はあなたの家の中で此處にぢつとしてゐたんだ。さうして、一打ちで倒されてしまつた

んだ——だがあなたはキャベツのスープを拵へてやつてたが氣のつく間はなかつた……あゝ善良婦な人！」

「おゝ、可哀想な人、」と女主人は續けた。「何のための銀行だらう！　若しあの人が、このお金を私の處へ持つて來て、『さア、持つてる全部だ、僕を助けて僕の生きてる限りこれを取つて置いて、賄つてくれ。』と言ひさへしたら聖像にかけても私はあの人を養つてあげたのに。私は飲ませても上げたし、あの人の面倒を見ても上げたのに。あゝ何て罪の深い人、嘘つきでせう！　あの人は私を欺いた、私をだまかした、可哀想な淋しい女を！」

彼等は再び寢床の處へ行つた。セミョーン・イワーノヴィチは今は一番いゝ服裝をして正しく横はつてゐた。が、實はそれは彼の唯一の服裝なのであつた。可成不器用に結ばれた襟飾の下にその硬い顎を埋め、よく洗はれた髪もとかしてあつたが、髯は十分よく剃つてはなかつた。それは、この家の中には髯剃刀がなかつたからだつた。たつた一つジノーヴィ・ブロコフィエーヴィチが持つてゐたが、一年前にその縁を缺いてしまつた。そしてトルクーチイ市場で甚だ割よく賣られたのであつた。他の人々は常に理髪屋へ通つてるのであつた。

彼等は散かりを片附ける暇がまだなかつた。破れた屏風は前のどほり置いてあつて、セミョーン・イワーノヴィチの隱遁を開いて見せ、凡ゆる我々の祕密、我々の旨いやりくりと詭計とから死がその掩ひを引きのけた事の印でもあるやうに思はれた。蒲團から出て來た詰物はうづ高く積んであつた。突然に靜かになつたこの部屋の全景は、詩人によつて、嵐に叩き落されて滅茶々々にされた燕の巢によく比較されたかも知れない。雛とその母とは殺され、毛屑や羽毛や叢毛で出來た暖かい小さなベッドは散り〳〵になつてしまつた……。併しセミョーン・イワーノヴィチは、生意氣な盜賊のやうな年をくつた雄の雀に一層よく似てゐた。彼は今は靜かであつた。低く横はつてゐるのを見ると、彼はまるで罪深い者ではなかつた如く、無恥に無良心にしたことは何もなかつたかの如く思はれた。そして、凡ゆる善良なる人々を瞞したり欺いたりしたやうには見えなかつた。彼は、最早その奪はれ傷ついた女主人のしやくり上げる泣聲にも注意しなかつた。その反對に、用心深い冷淡な資產家のやうに、棺にさへ無駄に少しでも費はないようにと氣にしてゐるやうで、或ることの打算に氣をとられてゐるかの如くであつた。彼の顏には深い反省の樣があつたが、その脣は意味ありげな風で堅く結ばれてゐた。それをセミョーン・イワーノヴィチは生前にも可能なこととして疑はなかつたのであつた。彼は云はば一層敏捷になつたかのやうで、彼の右の眼は云はば惡ごすくねぢれてゐるやうだつた。セミョーン・イワーノヴィチは、或る事を、或る極めて重大な通告か說明

を日時をうつさず云はうと欲してゐるやうに思はれた。何故ならば事は紛亂してゐた、そして一瞬も失つてはならなかつた……。そして、人々は彼から次のやうな事を聞くことが出來たかのやうに思はれた。

「どうしたといふんだ？　絶望しろ、えゝ、愚かな女！　泣くな！　床にはひつてよく眠れ、善良な女よ、解るかね？　俺は死んだ。もう騒ぐ必要はないんだ。どうしてそんな必要があらう、本當に？　此處に寢てるのは大變いゝよ……。だが俺はそんな事を言ふつもりぢやないんだ、いゝかね？　お前は美しい婦人だ、お前は本當に美しい女だ、それを理解しろ。さア俺はこの通り死んだ。だが見よ、若しも——つまり、そんなことは有り得ないだらうが——若しも俺が死んでゐなかつたらどうだね、若しも俺が立ち上つたらどうだね？　えゝ？　さうしたらどんなことが起るだらう？」

女主人

第一部

一

オルディノフはたうとう宿を變へる決心をした。彼の下宿してゐた家の女主人は、或るつまらない官吏の寡婦で貧しい年取つた女であつたが、彼の下宿の期日が終る翌月の一日までに何か理由があつてペテルブールグを去つて、或る片田舍で親戚のものと一緒に暮さうとしてゐた。その期日の終るまで續けてそこに居る間に、青年はその古い場所を惜しいと思つてゐた。そしてそこを去ることに當惑を感じてゐた。彼は貧しく貸家は高かつた。女主人の去つてしまつた翌日彼は帽子をとつてペテルブールグの裏通をぶらつきに出て、家々の門に貼つてある張札を一々調べ、一番穢い一番賑かな長屋建を選んで探して行つた。そこでは貧しい人々の借りてゐる家の中に隱れ家を見出す機會がよくあつた。

彼は非常に注意深く長い間探して歩いた。が、まもなく彼の心には新しい全く未知の氣持が湧き起つて來た。彼は最初無頓着にぼんやりと四邊を眺めた、それから今度はよく氣をつけて、そして最後には激しい好奇心を以て。町の群集と雜沓、騷擾、運動、異常な事柄と異常な彼の位置、勞働によつて汗によつて及び種々の他の手段によつて居心地のいゝ家の中で

平和に靜かに休まうとする無益な努力に、全生活を浪費してゐるせはしないペテルブールグ人には、甚だ退屈な都會生活の凡ゆるつまらない家常茶飯事——この、凡ゆる平凡な味のない雜風景な有樣が、不思議にも優しい喜びと落ちつきとの感じをオルディノフに與へたのであつた。彼の青白い頰はかすかな赤味を帶び、その眼は新しい希望を持つた時のやうに輝き始めた。そして彼は、その冷たい新鮮な空氣を深く熱心に呼吸するのであつた。彼はいつになく樂々とした心持になつた。

彼は普段から靜かな絕對的に孤獨な生活をしてゐた。三年前彼が學位をすつかり思ひ通りになつてから、人傳てに知つてゐた許りの或る老人を訪問したことがあつた。その時彼は、お仕着を着た召使が二度も彼の名を取り次ぐ氣になるまで長い間待たされてゐた。それから彼は暗い、天井の高い荒れ果てた部屋にはひつて行つた。それは年代がついて惜まれるやうになつた古風な人々の私宅の中に、今も折々見出される沈鬱な部屋の一つであつた。その中には、物事に一々區別をつけたがる白髮頭の老人がゐた。これは彼の父の友人にして同僚だつた人で、オルディノフの保護者でもあつた。その老人は小さな紙幣の束を彼に手渡した。それは非常に少額になつてゐた。それは、家の負債を拂ふために祖先傳來の財產を競賣に附した其うちの殘りであつた。オルディノフは無關心に彼の遺產を受取りその保護者に

永遠に別れを告げて、そして町の方へ出て行つた。それは寒い陰氣な秋の夜であつた。青年は夢想的な人間であつた。そして彼の心は或る種の無意識な悲しみに引裂かれてゐた。彼の眼は輝き出した。彼は熱病を病んでゐるやうな氣がして、今熱くなつたかと思ふとすぐ今度は冷たくなつたりした。彼は途々金を勘定して、二年か三年乃至は四年目も半年位まではその金で食つて行けることを知つた。何だか薄暗くなつた來て、やがて霧雨がびしよ〳〵降つて來た。彼は出會はした最初の穢い部屋を借りて一時間內にそこへ引越してしまつた。其處へ彼は閉ぢ籠つてしまつた、丁度世を捨てゝ僧院に閉ぢ籠つたやうに。そして二年の內に彼は全然隱遁者となつてしまつた。

彼は本當の事は知らずに唯だ臆病になり非社交的になつた。その間彼には、他の生活——彼にとつても早晩必要になる筈の、喧騷に滿ち紛亂に滿ち不斷の激昂と不斷の變化に滿ちた生活が彼を待つてゐようとは、夢にも思はれなかつた。それを聞くことが避け難いことであつたことは事實だが、それを彼は決して知らなかつたし又知らうと思ひもしなかつたのである。少年時代から彼の生活は常規を失つてゐたが、今は益々異常なものとなつたのである。彼は實に深い實に止めどなき熱情に呑み込まれてゐた、その熱情は人間の全生活を吸收するもので、オルディノフのやうな人間に對しては實際的日常の動作の權內に於ける或る凹みを

充たしてくれはしないのである。この熱情は科學であつた。その內にそれは、彼の青春を食ひ盡し、その鈍い醉はすやうな毒素を以て彼の夜間の休息を傷つけ、彼の健康を助けてゐる食物と、この息苦しい隱家には透み込んで來ることの無い、新鮮な空氣とを奪はうとしてゐた。それでも猶ほこの熱情に醉はされてゐるオルディノフは、それに氣附かうとはしなかつた。彼は若かつた、そしてこれまでにもそれ以上の何物をも求めてはゐなかつた。彼の熱情は彼をして永遠の存在といふ小兒と化せしめ、そして或る位置を自分のために占める必要のある時にも、他人を押しのけるといふことを全く不可能ならしめた。悧巧な人々にとつては科學はその手の內に在る資本である。オルディノフに對してはそれは、彼自身に向けられた武器であつた。

彼は、學問知識に對しては論理的な判然と定義された動機によつてよりもむしろ本能的な衝動によつて激勵された。そして彼がこれまでに爲した凡ゆる他の動作に於いても（最も些細な事でさへ）同樣であつた。子供の時でも彼は變人に思はれ他の學校友達のやうではないと思はれてゐた。彼は自分の兩親を少しも知らなかつた。彼は、その奇矯な非社交的な性癖によつて怒らされたる學校友達から受ける、荒々しい野蠻な取扱ひを忍ばなければならなかつた。そしてこの事は彼をして本當に非社交的に且つ氣むづかしくし、而も彼は次第々々に

屑一層彼の習慣に引籠るやうになつたのであつた。しかし彼の孤獨な勉強のうちには、何等の秩序も法式も決してないのであつた、又今でもそれはなかつた。今でも彼は藝術家の最初の有頂天、最初の熱、最初の夢中狀態を持つてゐるばかりだつた。彼は自分は法式を創造してゐた。それは年と共に彼の中に展開されたものであつた。そして、新しい澄み透つた形を成してゐる或る觀念のかすかなぼんやりとした併し驚く程鎭靜な幻影（イメージ）が、次第に彼の魂の中に滲み出て來たのであつた。そして此の形は彼の心を波立たして表現を望んだ。彼はまだそれの本質とそれの眞理とそれの獨立とを恐る〳〵知つたに過ぎなかつた。創造の天才は、既に示されつゝあつた、それは力を集め形を採りつゝあつた。けれどもその具體化と完成との時は尙ほ遙かであつた、多分甚だ遙かであつたらう、恐らく全く不可能であつたらう！

今、彼は世捨人のやうに隱者のやうに町を步き廻つてゐた。それも彼の默々とした荒野から騷がしい喧噪の都市へ突然に現れたのであつた。事々が彼には新しく珍らしく思はれた。けれども彼は彼の周圍に波の如く打寄せてぐわら〳〵鳴つてゐる凡ゆる世界から非常に隔絕してゐたので、殆んどその自分の不思議な感情をも怪しまなかつた位であつた。彼は、自分のその冷淡を意識してゐないやうに思はれた。却つて彼の心には、長い間斷食してゐた後その前に食物と飮物とが置かれた時の餓ゑた人の有頂天にも似た喜ばしい感情、或る種の熱狂が發生したのであつた。が、勿論、下宿を變へるといふやうなこんな些細な變化がベテルブールグ人をオルディノフをさへ刺戟し感動させることが出來たといふことは不思議なことであつた。併しながら事實は、彼が實際的の目的を以て外出することは殆んどなかつたからなのであつた。

彼は尙ほも喜びを感じて町をうろつき步いた。彼は flâneur（のらくら者。）のやうにすべての物に目を見張つた。

併しながら、今でもいつもの通り聯絡なく彼は、自分の前にかくも輝かしく擴げられた繪のうちに意義を讀んでゐるのであつた、丁度本の行を追つてゆく時のやうに。すべての事が彼を感動させた。彼はほんの少しの印象をも逃がしはしなかつた。そして、通りすがりの人々の顏をその考へ深い眼でぢつと眺め、彼の周圍の事々の特殊な光景を注視し、そして淋しい夜な夜なの靜けさの中で形作られた結論を、すべての事柄の中に實證してゐるかのやうに、心持よく人々の話に耳を傾けてゐた。取るにも足らぬ事柄が頻りに彼を感じさせ、或る觀念を惹起させ、そして始めて彼は自分が穴倉の中に如何に埋もれてゐたかを感じて當惑したのであつた。此處ではすべてが、より速かに動き、彼の脈搏は完全に、より早く打つてゐた、孤獨によつて壓迫され、緊張した有頂天な活動の時のみ動かされ擧げられてゐた彼の心は、

今は速かに靜かにそして勇敢に働いてゐた。而も彼はこの生活のうちに何とかして押入らうとする無意識な熱望を持つた。この生活は彼にとつては非常に珍らしいものであつたが、彼はこれを嘗て知つてゐた——といふよりはどつちかといふとちやんと先見してゐた——それも單に、藝術家の本能によつて先見してゐたに過ぎなかつた。彼の心は、愛と同情とに對する敬慕を以て、知らず識らずうづき始めたのであつた。彼は自分のそばを通る人々を一層注意深く見た。しかし、彼等は考へに耽つてそれに氣をとられてゐる見知らぬ人なのであつた。で次第にオルディノフの氣輕さは無意識のうちに過ぎ去りはじめた。現實が彼の上に重くのしかゝり彼のうちに無意識な恐怖と畏敬とを吹き込みはじめた。彼は新しい感動に食傷し飽き始めた。それは恰も最初は喜ばしくその病床から立ち上つた病人が、彼の周圍で激動する群集の運動によつてうつとりとしてしまひ、その光、輝き、生活の渦、騒擾、及びごたごたな色彩によつて疲勞して眩暈がして倒れてしまふやうなものであつた。彼は氣落ちした哀れな氣持になり始めた。彼の全生活に對して、彼の仕事に對してそして未來に對してさへ恐怖でいつぱいになり始めた。新しい觀念は彼の平和を破壊した。或る考へが突然彼の心に浮んで來た。それは生涯彼は孤獨で、誰も彼を愛してくれるものもあるまいといふ考へであつた、——そして實際彼は自分の方からも誰をも愛し續けたことがなかつた。彼が家を出た許りに偶然會話を交へた或る通行人は無作法にそして不思議さうに彼を見てゐた。彼は、人々が自分を氣違ひか、又は甚だ變な奇矯な奴だと思つたことを見た。彼は思ひ出した——誰でも彼の前ではきつと何だか工合が惡かつた、子供の時でさへ誰でも彼の夢想的な頑固な性格のために彼を避けてゐた、人々に對する同情はいつも彼にとつては困難で且つ重苦しいことであつた。そして他人には氣づかれもしなかつた。何故ならば道德的無差別といふことが彼のうちにはあつたのだが、その同情のうちには認められなかつたからであつた。子供の時でさへ彼を苦しめた事實は、彼が同年輩の他の子供等と全く似てゐない場合であつた。いつでもきつと彼はすべての者からのけ者にされ、おろそかにされてゐたといふことを今彼は思ひ出して繰返し繰返し考へてゐた。

彼は、いつのまにか、都市の中央からは餘程離れたペテルブールグの町外れにはひつてゐた。淋しい料理屋で型の如く食事をして、再び彼はうろつきに出た。再び彼は、多くの往來や辻を通つた。それらは皆うしろに灰色と黄色の長い垣が結ひ廻してあつた。彼は金の有りさうな家ではなく、全く荒れ果てた多くの小屋に突當つた。長い煙突の立つた大きな工場や奇怪な煤烟に汚れた赤い建物などが、その小屋に交つて建つてゐた。そこらぢうが荒涼として物淋しかつた。すべてが物凄く忌はしげであつた。少くもオルディノフにはさう思はれ

た。もう夕方になつてゐた。彼は、或る長い横町を出て教會の建つてゐる辻の方へはひつて行つた。

彼は別に考へもしずにそこへはひつて行つた。お勤めの丁度終つたところで教會は殆んど空であつたが、唯だ二人の老婦人が、入口のそばで跪いてゐた。白髪の老人の役僧が蠟燭を消してゐた。日沒の光線が狹い窓から圓天井を射輝し、光輝の海に禮拜堂の一つを溺らせてゐた。がそれは次第々々にかすかになつて、圓屋根の下に集つてゐる闇黑が濃くなるに從つてランプと日光とのゆらぐ光を反射させて、輝ける聖像を一層ぎら〳〵といゝ工合に輝らすのであつた。深い憂鬱と息づまるやうな感情との發作でオルディノフは、教會の最も暗い隅つこで壁に凭れてゐた。そして一寸の間忘却狀態に陷つた。彼がやつと我れに返つた時、二人の人間の、平坦ながらんどな跫音が、建物の中から響き反して來た。彼は眼をあげた、そして進んで來る二つの姿を見戍つた時彼の心には何とも言はれぬ好奇心が起つたのであつた。彼等は老人と若い女であつた。老人は、脊の高いまだ腰の眞直な强壯らしい、が痩せてひどく青ざめた人であつた。その樣子から見ると、或る遠い地方の商人と思はれたかも知れなかつた。彼は毛皮の飾りのついた長い黑色のすつかり緣のとつてある外被（コート）を著てゐた、明かに休日服である。而も彼はそれを釦をかけずに著てゐた。その下には他の長く緣のとつてある著物が見えてゐたが、それは上から下まですつかり釦がかけてあつた。彼のネクタイなしの襟には無造作に結ばれた眞紅色のハンケチで掩はれてゐ、その手には毛革の帽子を持つてゐた。その細長い白髪交りの髯は胸まで垂れ、火のやうに狂熱的に輝いた眼は擊められた迫つた眉の下から傲慢に引延ばすやうにぎろりと見据ゑられてゐた。女は二十歳位で、恐しく美しかつた。彼女は素晴しい綠色の、毛皮の飾りのついたジヤケツを著、その頭には白い繻子の頭巾をかけてそれは顎の下で結ばれてゐた。彼女は眼を落して歩いてゐた。そして憂鬱な威嚴ともいふべきものがその全姿に滿ち亘つて、その顏に子供らしい柔かな優しい線を持つた氣持のいゝ輪郭を活き〳〵と、そしてもの悲しげに映してゐた。此の目立つた一組には或る不思議な何物かがあつた。

老人は教會の眞中にぢつと立ち止つて、教會はもう全く空つぽであつたにも拘らず四方へ向いて禮拜した。連れの女も同じことをした。それから彼は彼女の手をとつて、教會が祭つてゐた大きな聖母の像のところへ連れて行つた。それは、安置の場所にある黃金や寶石の反射を受けて、まばゆき蠟燭の光によつてその聖壇の上で輝いてゐた。教會の中に最後まで殘つてゐた會堂の役僧は老人に向つて恭々しくお辭儀をした、後者も彼に頷いた。女は聖像の前で顏を埋めた。老人が聖像の土臺に下つてゐた幕の緣（ふち）を持つて彼女の頭に被せた。押し包ん

でゐる啜り泣きの聲が會堂の中で反響した。

オルディノフは、嚴肅なこの光景に感じ、その終るのを堪らなさうに待つてゐた。二分間の後女は頭を擧げて、再びその魅力ある顏の上にはランプの光が落ちた。オルディノフは立ち上つて一歩前の方へ出て行つた。彼女は最早老人に手を與へて、二人は一緒に敎會から靜かに歩き出た。涙が彼女の暗い綠色の眼から流れ出して、乳白色の彼女の顏に反してきらめいてゐる睫毛の下から彼女の蒼さめた頰に傳はつて落ちた。彼女の脣には、ちらりと微笑が浮んだ。しかし彼女の顏には、子供らしい恐れと神祕的な戰慄との跡があつた。彼女はおづおづと老人に摑まるやうにしてゐた。そしてすぐ氣のつくことは、彼女が激情のために慄へてゐたことであつた。

彼にとつては異常な氣持のいゝそして固執する感情に壓服され苦しめられてオルディノフは急いで彼等について行つて、敎會の入口のところで追ひついた。老人は親しみ難く不愛想に彼を見た。彼女も亦ぼんやりとではあつたが好奇心なしに彼をちらりと見た。恰も彼女の心は或る遙かに遠くの考へに吸はれてゐるかのやうであつた。オルディノフは自分が何をしてゐるかも分らずに彼等の後について行つた。その時までには四邊はもう全く暗となつてゐた。彼はほんの少し離れてついて行つた。老人と若い女とは、或る長い廣い穢い通りにはひつて行つた。そこは市の門に眞直に導かれてゐる道で、物賣の小屋掛けや雜穀店や酒場などが一杯あつた。そして彼等は、そこから四階建の煉瓦作りの建物の大きな黑い壁の傍を走つてゐる兩側に垣のある長い狹い橫町へ曲つて行つた。その家の門の傍にはこれも大きな賑やかなもう一つの通りがあつた。彼等が家の近くに來た時老人は出し拔けに振返つて腹立たしげにオルディノフを見た。青年はまるで射擊されでもしたやうに石の如く堅くなつた。彼は自分の衝動的な行爲が奇妙なものであつたことを自ら感じた。老人は、恰も彼の威嚇的の一瞥が效を奏したことを確めようと欲したかのやうに再び四邊を見まはした。それから、彼等のうちの二人、老人と若い女とは庭の狹い門からはひつた。オルディノフは引返した。

彼は非常に不滿で氣持が惡かつた。そして、その一日を浪費し無益に疲れ全く當り前な出來事に大げさな冒險をやつて愚かに終つたことを反省して我ながら腹立たしかつた。

彼は朝方にはその隱遁の習慣のために己れ自身を責めてはゐたけれども、彼の外的な（內的のでない）技巧的な世界に於いて彼を迷はし激さし感動さした何事かを避けようとすることは彼の本能なのであつた。今彼は自分の隱家を悲しみ悔いたかと思ふと、今度は氣落によつて壓迫され、自分の不定な位置と自分の前に置かれた努力とに對する不安によつて壓迫されるのであつた。たうとう疲れ果て、二つの考へを同時に懷く事が出來ないで、夜、遲くなつ

て自分の宿に向つた。そして、自分の住んでゐた家を通り過ぎさうになつたことを知つてびつくりした。茫然として彼は頭を振つた、そしてその放心狀態を疲勞のせゐにして、階段を上つてやつと自分の屋根部屋に著いた。其處で彼は蠟燭をつけた——そして一瞬間後には泣いてゐた女の幻像が彼の想像の前にあり〳〵と起つたのであつた。その印像は、非常に熱烈で非常に力强かつた、彼の心は神祕的な激情と恐れとに震へながらかの柔和な優しい容貌を非常に心持よく再現し、そして有頂天の涙が子供らしい後悔に浸つた。そのために彼の眼前には霧が起り、熱火のやうな震へが彼の全四肢を駈け廻るかと思はれた。けれでも幻想は長くは續かなかつた。心醉の後には、有頂天の後には反省が來、困惑が來、それから無力の怒りが來た。著物を脫ぎもしずに彼は自分の堅いベッドの上に身を投げたのであつた……。

オルディノフは、神經的なおづ〳〵とした。そして壓服されるやうな心的狀態で、朝わりに遲く目を覺ました。彼は大急ぎで用意をして、殆んどあの事を考へる前に實際的な問題に自分の心を無理に集中させるやうにしながら、前日の彷徨でとつたのとは反對の方へ出掛けて行つた。遂に彼は貸間を見出した。シュビースと呼ばれた貧しい獨逸人の家の小さな部屋でその獨逸人はティンケンと呼ばれた一人の娘と孤獨に住んでゐるのであつた。シュビースは手附金を受取ると早速、間借をしようとする人々のために戸口に釘づけにされてゐた札を取り去つて、科學の信仰に就いてオルディノフに追從を言つて、それから自分も熱心に彼と一緒に働くことを約束した。オルディノフは夕方引移ると言つた。其處から彼は歸宅しかけたが彼の心は變つて他の方向へ外れて行つた。彼の自信は戻つて來た。そして彼は己れ自身の好奇心に微笑した。彼にとつては道が非常に遠いやうに思はれていら〳〵した。やつと彼は昨日の夕方行つた教會のところに達した。夕のお勤めが行はれてゐた。彼は、その會衆が殆んど全部見える位置を選んだ。しかし彼が探してゐた姿はそこには見えなかつた。彼は長い間待つて少し顏を赧らめながら出て行つた。思ひもかけない感情が、彼自身のうちに起るのを決然と制しながら彼は頑固に己自身を押へつけて自分の思想の潮流を變へようと試みた。實際上の日々の事柄を考へると彼は、食事をしてゐなかつたことを想ひ出した。そこで彼は腹のすいてゐたことを感じながら昨日食事をしたあの同じ料理屋にはひつた。彼は無意識に長い間町をうろつき、ごた〳〵な殺風景な小路を通つた。そしてたうとうさびれた地方へ踏み込んでしまつた。そこは、黃色くなりかけてゐた畑をずつと見渡した處で町は其處で盡きてゐるのであつた。その不思議な見知らぬ死の如き沈默に打たれて、彼はやつと我に返つた。それは十月の、ペテルブールグには有り勝ちな乾燥した霜の降りた日であつた。餘り遠くない處に小屋があつてその近くに二つの乾草堆が立つてゐた。肋骨の突出た小さな馬が、小さ

な二輪馬車の傍で頭を垂れ、脣を突き出して馬具を解かれたまゝで立つてゐたが、何事かを沈思してゐるやうに思はれた。一匹の番犬が、吠え乍ら壊れた車のそばに落ちてゐる骨を咬んでゐた。襯衣一枚しか著てゐない三つ位の男の子がその白つぽいむしやくしやした頭髪を一生懸命に櫛でかいてゐたが都會からまぎれ込んで來た淋しげな見知らぬ人を、不思議さうに見詰めてゐた。小屋の後には野原が一面に擴がり小屋に屬した庭も見えた。地平線上青空に對して暗くおつかぶさるやうに森があつた。そして、反對の方向には重々しい雪雲が出てゐたが、その前を空を横切つて音もなく續々と飛んで行く小鳥の群を追つてゐるやうに見えた。凡てが靜寂で、そして言はば嚴肅に憂鬱で全く胸をどき〳〵させ乍ら不安を押隱してゐるといふ風だつた……。オルディノフはどん〳〵先きの方へと歩いて行つたが、その荒涼とした有樣は彼を重苦しく壓しつけた。彼は、其時突然に夕のお勤めのために鳴らされてゐる重々しいベルの響の漂つて來た町の方へ引返して行つた。彼は二倍も早く歩いたので、短時間で再び彼にとつては前日から非常に親しくなつて了つた教會の中へはひつて行つた。

見知らぬ女は、最早其處に來てゐた。彼女は禮拜者の群に交つて、例の入口のところで跪いてゐた。オルディノフは、教會の戸口で施與（ほどこし）を待つてゐた襤褸を纏つた老婆や病人や蹇（あしたへ）や乞食共のいつぱひに叢がつてゐる中を押しはひつて、見知らぬ人の傍に跪いたのであつた。彼の著物は彼女の著物に觸れた。そして彼は、彼女が熱心な祈禱の言葉を囁いた時その脣から不規則に出て來る呼吸（いき）を聞いた。以前のとほり彼女の顏は、涯しなき信仰の感情で震へてゐた。さうして淚が又も落ちかゝつて彼女の燃える頰の上で乾いて行くのだつた。恰も或る恐ろしい罪惡を洗ひ落してでもゐるかのやうに。彼等が共に跪いてゐた場所は全く暗かつた。そして折々ランプのかすかな光が、狹く開けてある窓硝子から通風口でちら〳〵しながら彼女の顏に震へるやうな輝きを投げてゐるだけであつたが、その容貌の全部が青年の眼をいつぱいにしその心を漠然とした怏へきれない苦しみで引裂きながら、彼の記憶の上に感銘を與へてゐた。けれども此の苦しみは、それ自身の特殊な激しい歡喜を持つてゐた。遂に彼はそれを忍ぶことが出來なくなつてしまつた。彼の胸は、一時或る心持のいゝ珍らしい熱望に震へ全く痛み始めた。そして出し抜けに啜り泣きながら彼は、教會の冷たい甃石に狂熱した額をつけてお辭儀をした。彼は、その心持のいゝ苦惱にビリ〳〵と感じてゐた心の痛みの外には何も見ず何も感じなかつた。

此の驚くべき感受性、敏感、及び抵抗力の缺除は孤獨によつて發達したものであるかも知れない。又は、此の衝動的心情は無意識の熱望と怏へられぬ魂の激動とに於ける疲勞と窒息と長い不眠の夜の絕望的な沈默との中に發生したものなのであつて、遂にそれが爆發し出口

を見出したわけなのかも知れない。或は又それは單に嚴肅な瞬間が到來したのであつて、その瞬間は已むを得ないものであつたのかも知れない——陰鬱な息苦しい日に、突然空が一面に暗黒になり、嵐は雨を降らし、焦熱の大地を射撃し、眞珠のやうな點滴は綠玉の小枝に垂れ、雨は草を打ち作物を打ち、優しい花瓣を地上に粉碎する、そのために後には初めて太陽の光線を受けるやすべては再び活氣づき輝き、光を受けようとして立ち上り、そしてその快い濃厚な芳香を、新生活の歡喜を、誇りげに空に向つて擧げるのである……つまりこれと同様に已むを得ないものであつたのかも知れない。

けれどもオルディノフは、今は彼がどうしたのであつたか考へることが出來なかつた。彼は殆んど意識を失つてゐた。

彼は、お勤めが如何にして終つたのか殆んど氣がつかなかつた。そして、入口に込み合つてゐた群集の中を通つて彼の見知らぬ女の後を追つてゐた時、やつと彼は自分の知覺を取戻したのであつた。時々彼は、彼女の明敏な怪しむやうな眼に出會つた。續々と出て來る人々によつて始終止められてゐたので、彼女は一度ならず彼の方へ振り向いた。彼は彼女の驚きが次第に大きくなつて、忽ち彼女は燃えるやうに赤くなつたことを見ることが出來た。丁度其時、昨日の老人が、群集の中から再び現れて、彼女の腕をとつたのであつた。オルディノフ

は、再び彼の苦々しい諷刺的な凝視に逢つた、そして不思議な怒りが突然彼の心を締めつけた。たうとう彼は二人を暗黒の中に見失つてしまつた。そこで彼は人力以上の努力で突進して教會から出た。しかし新鮮な夕方の空氣は彼を回復せしめることは出來なかつた。彼の呼吸は迫り息苦しく感じられた。彼の心臟はゆるやかに、そして胸を燃やすやうに激しく皷動し始めた。遂に彼は全く彼の見知らぬ人々を見失つてしまつたことを知つた——彼等は大通りにも小路にもゐなかつた。けれども既に或る考へがオルディノフには浮んでゐた。そしてその心中では、亂暴なことであるとはいへ遂行される時には殆んど常に成功する不思議な決然とした計畫の一つが目論まれてゐた。翌朝八時に彼は小路のそばの家へ行つた。そして家の中の開けてある下水溜のやうな狹い、不潔な、そして掃除のしてない後庭に歩み入つた。庭の中で何かしてゐた門番が鋤の柄に顎を凭せてぢつと立つてゐたが、オルディノフを見上げ見下ろししてどうしようといふのかと訊ねた。その門番は二十五歳位の小男で、皺だらけな非常に老けた顏附をした韃靼人であつた。

「僕は宿をさがしてるんだ。」オルディノフは苛々して答へた。

「どつちだね？」と門番は顏をしかめて訊いた。彼は、オルディノフのことは何もかも承知してゐるかのやうな風に彼をじろ〳〵見てゐた。

「僕は造作附の部屋が借りたいんだ。」とオルディノフは答へた。
「その構内にはありませんよ。」門番は曖昧に答へた。
「ぢや、此處には？」
「此處にも無しでさア。」門番は彼の鋤を再びとり上げた。
「きつと僕には貸してくれるだらう、えゝ。」とオルディノフは十哥を門番に與へながら言つた。

鞣革人はちらりとオルディノフを見て、十哥を受取つて、それから再び鋤をとり上げた。そして一寸默つてからかう言つた。「いゝや、貸間なんぞは無かつた。」けれども青年は彼の言ふことを聞いてはゐなかつた。彼は、水溜の中に渡してある腐りかゝつたぐら〳〵な板の上を通つてその庭から住居へ通じてゐる唯一の門の方へ行つた。その黒い不潔な泥だらけの門は、今にも水溜の中へ落ちさうに見えてゐた。ずつと下の家には貧しい棺造りが住んでゐた。樂しげな仕事室のそばを通つてオルディノフは上部の部屋の方へと半ば壞れた當てにならない螺旋狀の階段を上つて行つて、暗黒の中で襄布の襤褸で掩はれた重い不細工な扉に突當つた。そこで鍵を見出してそれを開いた。彼は誤つてはゐなかつた。彼の前には例の老人が立つて、非常に驚いて屹と彼を見つめてゐた。

「何か御用ですかね？」彼は唐突に殆んど私語くやうに訊ねた。
「貸間はありませんか？」オルディノフは彼が言ふつもりでゐたことを殆んど何もかも忘れてしまつてから訊いた。老人の肩越しに彼は若い女を見た。
考人は、默つてオルディノフを閉め出さうとして戸を閉ぢかけた。
「貸間はございますよ。」若い女の親しげな聲が突然さう言つた。
老人は戸をはなした。
「僕は暗い隅つこでいゝんです。」オルディノフは急いで室にはひつて、自分から美しい女に話しかけるやうに言つた。
けれども彼は、彼の未來の主人と女主人とを見るとびつくりして化石した樣に立止つた。彼の眼前には、默々とした驚くべき光景が現出した。老人がまるで意識を失ひかけてゐるやうに死の如く眞青になつてゐた。彼は重苦しい、物を探すやうな眼附で、ぢいつと女を見据ゑてゐた。彼女も亦第一に眞青になつた。それから血が彼女の顏に走り、彼女の眼は異樣に輝いた。彼女はオルディノフをもう一つの小さな部屋に導いた。
一つの可成り大きな部屋で一家をなしてゐたが、それは二つの劃壁で三つに仕切られてゐた。外側の部屋から彼等は狹い暗い出入口へ眞直に出た。その眞向ひに扉があつたがそれは

明かに劃壁の向う側の寢室に導かれてゐるのであつた。出入口のもう一方、右側の方へ行つて彼等は貸すべき部屋にはひつた。狹くるしい見窄らしい部屋で、劃壁と二つの低い窓との間に押し込められてゐた。それは日常生活の必要品で塞がれてゐた。部屋は貧しく妨げられてはゐたが、可成りに綺麗だつた。家具といつては、飾りのない白いテーブルと二つの椅子、及び壁の兩側に亙つてゐる戸棚だけであつた。鍍金した環の中に入れてある、大きな古めかしい聖像が隅つこの棚の上に立つてゐて、燭火がその前で燃えてゐた。大きな不細工なストーヴが半ばは此の部屋に、半ばは出入口に出來てゐた。こんな部屋には三人人が一緒に住むことは不可能だといふことは明かであつた。

彼等は掛合ひを開始したが、お互ひに辻褄が合はないで、理解し難かつた。彼女から二歩ばかりの處にゐたオルディノフは彼女の心臟の鼓動を聞くことが出來た。彼は彼女が激情から震へてゐるのを見た。そしてそれは恐れのためであるらしかつた。たうとう彼等は何とか相談がついた。青年は早速引移るといつて、主人の方を一寸見た。老人はまだ靑ざめてはゐたが靜かに戸口の處に立つてゐた。夢幻的な微笑さへその脣にはひそかに漂つてゐた。オルディノフと眼を見合はせると彼は再び顏をしかめた。

「あなたは旅行券はお持ちですか？」彼は、オルディノフのために入口の戸を開きながら、

突然、大きな唐突な聲で訊ねた。

「えゝ。」オルディノフは不意を打たれて答へた。

「あなたはどういふ人なのです？」

「ヴシッリイ・オルディノフ。士族です、官廳に出てはゐません、自分の仕事をしてゐるんです。」と彼は、老人の調子に引き入れられてさう答へた。

「わしもさうです。」と老人は答へた。「わしはイーリア・ミューリン、職人です。もう御用は無いですかな？　どうかお構ひなく……」

一時間の後にはオルディノフは新しい宿に來てゐた。かの獨逸人が、その忠順なティンケンと共に新しい借手が彼を欺いたことを疑ひ始めたのと同樣、オルディノフ自身でもこれは驚いたことであつた。

オルディノフは、どうしてこんなことが起つたのか全く譯が分らなかつた。又分らうとも欲しないのであつた……。

二

彼の心臟の鼓動はひどく激しかつたので、彼は眩暈を感じ眼の前のすべての物が綠色に見えた程であつた。彼は新しい家の中で、僅かばかりの所持品を處理することに器械的に沒頭

してゐた。彼は色々な必要品のはひつてゐる鞄を解き、本のはひつてゐる箱を開けてテーブルの上にそれを置き始めた。しかしこの仕事は直きに彼の手を離れてしまつた。絶えず彼の眼の前には女の幻影が浮んで來た。それが浮んで來れば彼の全存在はひどく苦しめられ、かき亂されるのであつた。彼の心は抵抗し難い激烈な歡喜に滿たされた——而も彼の窮迫した生活には忽ちに非常な幸福が漲り渡るやうに思はれた。その幸福のためには、彼の思想は混亂し、彼の魂は苦惱と當惑とのうちに昏倒するのである。

彼は、旅行券をとつて、彼女を一目見たいといふ欲望からそれを主人のところへ持つて行つた。けれどもミューリンは、戸を開くや否や彼からその紙片を受取ると言つた。「結構です。平和にお暮しなさるがいゝ。」そして再び戸を閉ぢてしまつた。オルディノフは不愉快な氣持になつた。彼は何故だか知らなかつたが、兎に角あの老人を見ることは彼にとつては面倒なことであつた。彼の眼の中には何だか憎惡に滿ちた輕蔑的な物があつた。とはいへ不愉快な印象は速かに過ぎ去つてしまつた。この三日間といふものオルディノフは、以前の沈滯に比して人生の渦の中で暮してゐたのであつた。しかし彼は反省することが出來なかつた、實は恐ろしかつた。彼の全存在は高調と渾沌との狀態に在つた。彼は自分の生活が半分に引破られたかのやうであることをかすかに感じてゐた。一つの熱望一つの期待が、彼を捕虜にし

た。そして他に彼を苦しめる考へは全くなかつた。

混亂して彼は自分の部屋に歸つて來た。料理の爲されるストーヴのそばでは、年取つた小さな傴僂の女が、穢らしい、そして哀れな姿に見えた程ひどい襤褸を著て忙しさうに仕事をしてゐた。彼女はひどく不機嫌らしく、それに折々屑をもぐ〳〵動かして獨りでぶつ〳〵不平をこぼしてゐた。彼女は例の主人が召使つてゐる女なのであつた。オルディノフは、その女に話しかけようとしたが、彼女は明かに不機嫌からロをきかうとしなかつた。やつとお晝になつた。老婆はキャベツのスープとパイと肉とを竈から出して、それを主人と主婦とに持つて行つた。彼女はオルディノフにも同じ物をくれた。食事が濟んでからは家の中は死の如き沈默に支配された。

オルディノフは本を取り上げた。さうして以前に度々讀んだ意味を追はうとしてその頁を繰りながら長い時間を費した。怺へきれなくなつて彼は、本を投げ出して再び部屋を整頓し始めた。終ひには彼は帽子をとり外套を著て町へ出て行つたのであつた。途を見もしずに矢鱈に歩きながら彼は、出來る丈け速かに自分の心を中心に集め、散り〴〵な考へを正しくし、そして自分の位置に就いても少し反省しようと試みた、しかしその努力は單に彼を不幸と苦惱とに陷れるに過ぎなかつた。彼は狂熱と冷氣とに代る〴〵に襲はれた。そして折々

彼の心臓は、壁に身を凭せなければならなかつた程はげしく鼓動するのであつた。「いけない、一層死んだ方がいゝ。」と彼は考へた。「一層死んぢまつた方がいゝ。」と彼は、殆んど自分が何と言つてるのか考へられないで熱した震へる脣で私語いた。彼は非常に長いこと歩いてゐた。たうとう彼はびしよ濡れになつたことを感じ、それは雨に降られたのだといふことに始めて氣がついて家に歸つて來た。家から餘り遠くない處に例の門番が居るのを見た。彼は、その韃靼人が好奇心を持つて暫らく彼を見詰めてゐたが彼が見てゐたことに氣づいた時、さつさと行つてしまはうとしたやうに思つた。

「今日は、」とオルディノフは彼に追ひついて言つた。「君は何といふ人だね？」

「人樣は門番と言つてお出でですよ。」と彼は、齒を出して笑ひながら言つた。

「ずつと前から此處の門番をやつてるのかね？」

「へえ。」

「僕の大家さんは職人なのかい？」

「へえ、あの人がさう言ふならね。」

「あの人は何をしてるんだい？」

「あの人は病氣で、生活してゐて、神樣にお祈りをしてゐるんです。それ丈けでさア。」

「あれは細君なのかい？」

「何の細君ですつて？」

「あの人の一緒に住んでる女の人さ。」

「な、成程ね、あの人がさう言ふならね。御免なさい、旦那。」

韃靼人は自分のしやつぽに手を當てゝ、それから彼の小屋の方へ行つてしまつた。

オルディノフは、自分の部屋へ行つた。老婆が何か不平をこぼしてぶつ〳〵獨語を言ひながら彼のために戸を開けてくれて、再びそれに鎖をかけ、それから復た彼女の生活の場所であるストーヴの上へ這ひ上つた。もう既に暗くなりかゝつてゐた。オルディノフは燈火をつけようとしてゐたがその時彼は、主人の部屋へ通ずる戸に錠が下ろされてゐたことに氣がついた。彼は老婆を呼んだ。老婆は肘で身を支へながら、彼が主人の錠を欲しがつてゐるのではあるまいかと怪しんでゐるかのやうに、ストーヴから彼を鋭く見据ゑてゐた。彼女は一語も言はずにマッチの箱を彼に投げた。彼は自分の部屋に戻つた、そして再び、(何回となくやつたことだが)本か何かに沒頭しようと試みた。しかし、次第に自分のしてゐたことが分らなくなつて彼は戸棚の上に坐つた。そして眠りに落ちたやうに自分では思つてゐた。時々彼は我に返つた、そして彼の眠りは眠りではなく不快からの苦しい前後忘却であつたことを知

つた。彼は、門が叩かれてそれが開かれたのを聞いた、そして主人と女主人が夕のお勤めから歸つて來たのだらうと思つた。その瞬間に、彼は何かのために彼等を助けなければならないのだといふ考へが浮んで來た。彼は立ち上つた。そして自分では既に彼等の處へ行きつつあつたと思つてゐたが、彼は老婆が床の眞中に拋り出して置いた薪の堆積に躓いてその上に打ち倒れたのであつた。その瞬間に彼は全然氣を失つてしまつた。ずつと、ずつと經つてから彼は眼を開いて、自分があの時と同じ戸棚の上に自分の着物を着て寢てゐたことを知り、彼の上に被さるやうに、神の如く美しい女の顏が優しい心遣ひで屈められてゐたことに氣がついてびつくりしたのであつた。その女の顏は、優しい母らしい涙に濡れてゐるやうに思はれた。彼は、彼女が自分の頭の下に枕を置いてくれ、何か暖かなものを掛けてくれ、そして何だか柔らかな手が自分の熱した額の上に置かれたやうに感じた。彼は、「有難う」と言ひたかつた、彼はその手をとつて自分の渇いた脣に押し當て、自分の涙でそれを濡らし、永遠にそれを接吻し、接吻してゐたかつた。彼は非常に話したかつた。が、何をであるかは自分でも知らなかつた。彼はその瞬間にならば喜んで死にさへしたであらう。けれども彼の腕は鉛のやうで、動きもしなかつた。彼は言はば痺れてゐたのであつた。そして、彼が床のうちに横はつてゐた時彼を持上げるやうに思はれた勤悸と彼の血管の中を震動してゐる血の他には、何

も感じなかつた。誰かが彼に水を吳れた……。と、彼は遂に人事不省に陷ちてしまつた。

彼は朝の八時になつて眼を覺した。日光が綠色の鎧びた窓から、一束の金色の線をなして流れ込んでゐた。安樂な感じが病人の四肢をくつろがせた。彼は、靜かで落著いてゐて無限に幸福だつた。丁度その時誰かが彼の枕のそばに來たやうに彼は思つた。彼は起き上つてその見えざるものを追つて不安さうに四邊を見廻した。彼は、自分の友だちを抱いて生涯に始めて、「君が幸福に暮すやうに、親しき者よ。」と言つてやることに非常に熱望した。

「何て長い間あなたは眠つていらしつたのでせう！」と女の優しい聲が言つた。

オルディノフは見廻した。そして彼の美しい女主人の顏が、日光のやうに朗かな親しげな微笑を浮べて彼の上に屈んでゐた。

「隨分長いことお惡かつたんですよ！」と彼女は言つた。「もう澤山ですわ、お起きなさいまし。どうして御自分を束縛していらつしやるの？　自由はパンよりも甘いのです、日の光よりも美しいのです。お起きなさい、私の可愛い人、お起きなさいまし。」

オルディノフは、彼女の手をとつて、それを暖かく握つた。彼にはまだ自分が夢を見てゐたやうに思はれた。

「お待ちなさい、私はあなたにお茶を入れて來て上げますわ。お茶が呑り度いでせう？

お喫りになつた方がよろしいわ。快くなりますよ。私自分でも病氣したことがありますから知つてゐますの。」

「えゝ、何か飲むものを下さい。」とオルディノフはかすかな聲で言つて、そして自分の足で立ち上つた。彼はまだ非常に弱つてゐた。冷たいものが脊筋を走り下り、體中が痛んで四肢がすつかり壞れてでもしまつたやうな氣がした。けれども彼の心には光輝があつた。そしてその日光は、或る種の嚴肅な眞劍な喜びを以て彼を暖めてゐるやうに思はれた。彼は、或る新しい力強い信じ難い生活が、彼のために始まりかけてゐたことを感じた。彼の頭は一寸した旋轉をなしてゐた。

「あなたのお名前はヴシッリイでしよ？」と彼女は訊ねた。「私、間違へてゐるでせうか、それとも昨日主人があなたをさう呼んでゐたやうに思ふだけなのですかしら。」

「いゝえ、さうなのですよ。で、あなたのお名前は何といふんです？」オルディノフは言つた。彼女の方へ近づいて行つたが、自分の足で立つてゐることは殆んど出來なかつた。彼はよろ〳〵した。

彼女は彼の腕を捉へて、笑つた。

「私の名はカテリーナです。」と彼女は、その大きな朗かな碧い眼で彼の顏に見入りながら

言つた。二人はお互ひに手を執り合つてゐた。

「あなたは何か仰しやりたいのでせう。」と彼女は遂に言つた。

「知りません。」オルディノフはかう答へたが、すべてが彼の前では眞暗だつた。

「まア、あなたは、どういふ處にいらつしやるのか、御覽なさいまし。そら、可愛いゝテーブルねえ。悲しんではいけません、苦しんではいけません。此處へ、この日當りのいゝ方、の處へお坐りなさいな。靜かに坐つてるんですよ、さうして私に隨いて來てはいけませんよ。」彼女は、青年が彼女を留めて置かうとするやうな動作をしたのを見て附け加へた。「すぐ復た參りますからね。私に居て欲しければいくらでも時はあるんですからね。」一分間後には彼女は、お茶を持つてはひつて來て、それをテーブルの上に置いて、それから彼の向側に坐つた。

「さアお喫りなさい。」と彼女は言つた。「頭痛がなさるの？」

「いゝえ、もう痛かないんです。」と彼は言つた。「どうだか分らない、多分、痛い……僕は構はないんです……澤山です、もう澤山です！……僕はどうしたんだかちつとも分らない。」彼は遂に彼女の手を見出しながら息もつかずに言つた。「此處に居て下さい、向うへ行かないで下さい、もう一度お手をとらして下さい……。僕の眼の前は眞暗だ、僕にはあなたが太陽

のやうに見えます。」彼は、云はば自分の胸から言葉を引きちぎるやうにしながら言つた。そして彼がさう言つた時には、殆んど心神恍惚として卒倒しさうであつた。彼の咽喉は咽び泣きで窒つてゐた。

「可哀想な方！　あなたは、誰か深切な方といつしよに生活してはいらつしやらなかつたんでせう。あなたはまつたく淋しくて、獨りぼつちなのですわね。御親戚はおありになりませんの？」

「無いんです、一人も。僕はたつた一人です……。氣にかけないで下さい、何でもないんです！　もうよくなります。もうすつかりいゝんです。」オルディノフは、酔つてゐるやうに言つた。部屋がぐる〳〵廻るやうに彼には思はれた。

「私も、身内のものには長年逢ひませんのよ。まア、あなたの私を御覧になりやうといつたら……。」彼女は、一寸默つてゐた後言つた。

「おゝ……どうなのです？」

「あなたの御覧になりやうと言つたら、まるで、私の眼があなたを暖めてでもゐるやうですわ！　ねえ、あなたが誰かを戀しくお思ひになれば……私ね、最初にお言葉を交した時からあなたのことを思つてゐましたの。あなたがお悪くなれば復た私看護してあげますわ。でもお悪くなつてはいけませんわ、本當に。あなたがお直りになつたら私たちは兄妹のやうに暮しませうね。いゝでしよ？　ようございますか、神様が與へて下さらないのに妹が出來るなんてむづかしいことですわね。」

「貴女はどういふ方なんです？　何處から來ていらつしやるんです？」オルディノフは弱々しい聲で言つた。

「私、此邊の者ではございませんの……。或る暗い森の中に十二人の兄弟が住んでゐて、その森へ一人の美しい女が迷ひ込んだといふ話を御存じでせう。その女は彼等の處へ行つてその家の中で皆のために色々のことをちやんとして上げて、萬事に愛を籠めてやつたのです。その兄弟たちが歸つて來てみると、その妹がそこで一日暮してゐたことを知りました。皆が彼女を呼ぶので彼等の處へ出て行くと、彼等は皆して彼女を妹と呼んで彼女に自由を與へました。さうして彼女はその皆に平等にしてゐたのです。このお伽噺を知つていらつしやいますか？」

「知つてゐます。」とオルディノフは喘いた。

「人生は愉快です。この世の中で暮すことはあなたにとつても快いことでせう？」

「さうです、さうです。長い間生きるのです、萬年も、生きるのです。」とオルディノフは答

へた。

「私には解りませんわ。」とカテリーナは夢みるやうに言つた。「私は死にたくもあるのですよ。人生は快いものでせうか？　愛すること、善良な人々を愛すること、さうです……まアあなたは復た紛のやうに白くおなりになつたわ。」

「さうだ、僕の頭はぐる〳〵廻つてるんです……。」

「待つてらつしやい、私の掻巻ともう一つの枕を持つて来て上げませう。私此處へベッドを拵へますわ。お休みなさい、さうして私の夢を御覧なさい。御病氣は行つてしまひますよ。私達のお婆さんも病氣なんですよ。」

彼女はさう言つてゐる間にベッドを作り始めた、折々微笑を浮べてオルディノフの方を眺めながら。

「まア、澤山御本を持つてらつしやるのねー」と彼女は箱の方へ行きながら言つた。

彼女は、彼の許へ行つて、その右の手をとつてベッドの處に連れて行き、彼を床の中へ押入れて夜具をかけて彼を包んだ。

「本は人を損ふつて言ひますわね。」と彼女は考へ深く頭を振りながら言つた。「讀書がお好きなんですか？」

「えゝ。」オルディノフは、自分が眠つてゐたのか覺めてゐたのか解らないでさう答へたが、覺めてゐることを己自身に確證しようとしてカテリーナの手をしつかりと握つてゐた。

「私の主人も本を澤山持つてますのよ。今に御覽になりますわー　それは宗教の本だつて、あの人は言つてゐます。あの人はそのうちからよく私に讀んでくれるんですよ、いづれお目にかけますからね、あなたは、あの人がその中から何を私に讀んでくれたか後で言はなくてはいけませんよ。」

「話して下さい。」オルディノフは彼女をぢつと見据ゑながら囁いた。

「あなたは祈ることはお好きですか？」と彼女は、一寸默つてから彼に言つた。「お解りになつて？　私は恐れてゐるんです、いつも恐れてゐるんです……。」

彼女は言ひ切らなかつた。彼女は思ひに沈んでゐたやうであつた。遂にオルディノフはその手をとつて自分の脣へ持つて行つた。

「何故あなたは私の手を接吻なさるの？」（そして彼女の頰はかすかに赤く輝いた。）「さア、接吻なさい。」彼女は笑つて彼の方へ兩手を差出しながら言つた。それから彼女は、片方の手を引いて今度はそれを彼の燃えてゐる額に當てた。それから彼女は、彼の頭髮を撫でつけ始めた。彼女は幾度も幾度も顏を赧めた。たうとう彼女は彼の寢床のそばの床に坐つてその

頬を彼の頬に當てた。彼女の暖かい温ひのある呼吸が彼の顔を撲るのであつた……。遂にオルディノフは、熱い涙が彼女の眼から迸つて彼の頬の上に鉛を鎔かすやうに落ちて來るのを感じた。彼は、次第々々に弱つて來たことを感じた。彼は氣が遠くなつて、手を動かすことも出來なかつた。その瞬間に門の戸が叩かれて、續いてボルトの軋る音が聞えて來た。オルディノフは、例の老人、彼の主人が劃壁の他の側からはひつて來るのを聞くことが出來た。それから彼は、カテリーナが起ち上つて急ぎもしず耳を傾けもしずに彼女の本をとつたのを聞いた。彼女が出て行つた時には自分の上に十字を切つてくれた事を彼は感じた。彼は眼を閉ぢた。突然に、長い燃えるやうな接吻が彼の熱い脣を焦がした。それはナイフのやうに彼の心臟を突き刺した。彼はかすかな叫び聲を發して、無意識に陷ちた……。

かくして彼には不思議な生活が始まつた。

彼の心が不確かになつた瞬間に、彼は不思議な無益な動亂と爭鬪と苦惱とに滿ちた長い涯しない夢の中に生活するやうに罰せられたのだといふ考へが、ふいと彼の心に浮んで來た。彼は、恐ろしさうにその彼の上に掩ひかぶさつた不吉な宿命論を拒絶しようとした。そして緊張した絶望的な爭鬪の瞬間に或る見知らぬ力が再び彼を打つて、彼は復たもや記憶を失はうとしてゐたこと、及び通り抜け兼ねる底知れぬ深淵が彼の前に開いて、彼はその中へ苦惱と絶望とで泣き叫びながら飛び込まうとしてゐたことを、判然と感じたのであつた。時とすると、彼には怺へられない荒らされた幸福の瞬間が來た。その時には生活力は凡ゆる機能のうちに痙攣的に生かされる、その時には現實の歡喜の時が誇らしげに鳴り響き、且つ人は凡ゆる認識以上の未來を夢み喚び生かすのだ、その時には言葉以上の希望が魂の中に生命を與へる露を落すのだ、その時には人は有頂天になつて叫ぶことを欲する、その時には人は、存在のすべての糸が切斷される程大きな感銘のために肉體が餘りに弱いことを感ずる、而もそれと同時に人は、凡ゆる人間の生活に對して希望と更新とを以て敬意を拂ふのである。時とすると彼は昏睡に陷ちた。そしてその時には、この二三日の間に彼の身に起つたすべての事柄が再び繰返され、且つ損はれた朦朧とした幻像が、一群をなして彼の心を過ぎるのであつた。しかし彼の夢幻は奇妙な謎のやうな形を採るに到つた。時とすると病人は、彼の身に起つたことを忘れてしまつて、自分が以前の女主人と一緒に以前の下宿にゐない事を不思議に思つた。彼は、何故老婆がいつもの通りやつて來ないのか分らなかつた。いつでも老婆は時々微かなちらゝする輝きをその部屋の暗い隅つこ一杯に溢れさせてゐたストーヴの處へ黄昏時には極つてやつて來て、火の消えない內にその餘燼で彼女の慄へる骨張つた手を暖め、獨語をぶつゝ言つたり、時によると、彼を見詰めたりするのであつた。その見知らぬ宿泊

者を彼女は、非常に長い間坐つて本を讀んでゐた爲めに氣が違つたのだと思つてゐた。

時には又彼はもう一つの下宿に移つてしまつたやうな記憶が起るのであつた。が、それはどういふ風になされたか、自分はどうしてゐたか、又何故彼は移らなければならなかつたのか、彼は知らなかつた。尤も彼の全精神は不斷の抵抗し難い憧憬のうちに氣を失つてゐたのだ……。だがどういふ目的で、何が彼を誘ひ彼を苦しめたのか、又誰が彼を窒息させ彼の血を吸ひ盡すこの恐ろしい焔を點じたのか、再び彼には解らなくなり思ひ出すことも出來なかつた。屢々彼は貪るやうに或る影を摑んだ、又屢々彼はその寢床の近くにさわ〳〵する輕い足音を聞いた、音樂のやうに快い囁きを、優しい慈愛深い言葉を。誰かの濕へる不同な呼吸が、愛を以て彼の全存在を震はしながら彼の顏を渡り、熱い涙が彼の熱した頰に滴り、そして出し拔けに、長い柔かな接吻が彼の脣に印しづけられたのであつた。その時彼の生命は、抑へ難い苦しみの中に惱んでゐた。凡ゆる存在が、凡ゆる世界が、ぢつと立ち上つてゐるやうに思はれ、彼の周圍で幾萬年も消えかゝつてゐるやうに思はれ、そしてすべてのものが數千年の長い夜に隱されてゐるかのやうに思はれた……。

今度は、溫和な靜かに流れる幼年時代が再び彼の胸に甦つて來たやうな氣がした。朗かな歡び、消すことの出來ない幸福、人生に對する最初の美しい驚異、樂しげな精靈の群がそれと共に浮んで來た。その精靈たちは、アカシアに圍まれた小さい家の前の綠鬱蒼とした牧場で彼と共に戲れ、ピチャ〳〵いふ水音を聞きながらよく皆で數時間坐つてゐた廣い透きとほつた湖から彼に向つて微笑し、彼の母が彼の上に身を屈めて十字を切つて彼に接吻し、それから長い平和な夜を私に快い子守歌をうたつてゐた間には、彼の小さな家の上に聳いた虹の夢を優しく散らしながら、その翼を彼のそばでサラ〳〵鳴らすのであつた。けれども次には、或者が突然に現れ始め、最初は悲しみと涙との鈍い毒を彼の生活の中に持つて來て彼を子供らしい恐怖で壓迫した。彼は、見も知らぬ老人が凡ゆる彼の未來を奴隸として抑へつけてしまつたやうにかすかに感じた。そして震へながらも彼はその人から眼を離すことが出來なかつた。その老人は灌木の草叢があるときつとその下から出て來て、覗き込んでその子供に詐つて頷いてみせ彼を嘲り笑つて、邪惡な一寸法師のやうにその兩手を握り合せて顰め面をしたり笑つたりしながら色々な人形の形をしてみせた。老人はこの子供に向つて彼の學校友達の薄情な奴ばかりを一人々々連れて來たり、さうかと思ふと小さい者達と一緒に學校のベンチに腰かけて、彼の文典の文字の到る處から覗き出て顏を顰めてみせるのであつた。それから彼が眠つてしまふとこの意地の惡い老人は彼の枕のそばに坐つた……。老人は彼の小さな家の周圍で黃金の又は青玉の翼をサラ〳〵させてゐた樂しげな精靈達を追ひ拂ひ、彼の哀れな

母を彼から永遠に連れて行つてしまひ、そして毎晩彼の子供らしい想像では理解し難い、長い奇怪なお伽噺を囁き始めたが、恐怖と子供には不向な熱情とで彼を身震ひさせ苦しめ始めるのであつた。けれどもその意地悪な老人は彼の獻欵と懇願とには注意も拂はずに、彼が麻痺に陷り無意識に陷つてしまふまで、彼に向つて話し續けるのであつた。するとその子供は突然大人に目覺めた、數年が見えないうちに、知らない內に彼の上を過ぎ去つた。彼は突然に現在の位置を認識するに到つた。彼はたつた一人で、凡ゆる世の中に對して全くの異邦人で、彼自身の隱家に孤獨で居り、奇妙なそして胡散臭い人々の間に居り、彼の暗い部屋のあちこちの隅つこへいつも一緒に集つて私語き、火のそばに足を屈めてその骨張つた皺だらけの手を暖めてゐる老婆に頷き、そして彼の方を指してゐる多くの敵の中にゐるのだといふことを彼は忽ち理解した。彼は混亂に陷り不安になつた。此等の人々は誰なのか、何故彼等は此處に來てゐるのか、どうして彼は、此の部屋に一人でゐるのか、彼は知り度かつた。そして、その家を借りてゐる人々はどういふ人間で、何をしてゐる者か、又家主はどういふ人間かといふことを最初に極めもしずに、或る有力な譯の分らぬ權力に引きずられて眞暗な惡漢の巢窟に迷ひ込んだのだと考へた。彼は疑念のために苦しめられ始めた——そして突然靜まり返つた夜の中で、再び長い私語きの物語が始まつた。そして、或る老婆が悲しげにその白髮

まじりの頭を消えかゝつてゐる火の前に垂れながら、そろ〳〵と殆んど自分自身にだけしか聞えないやうにそれを呟いてゐた。ところが、——そして再び彼は恐怖に壓倒された——その物語は彼の前に形をとつて姿や顏を備へたのである。彼は、今言つたやうなぼんやりした子供らしい幻想からすべてのものを見た。凡ゆる彼の思想と夢想、凡ゆる彼の人生に於ける經驗、彼が本で讀んだ凡ゆる事柄、彼が長く忘れてゐた事、それらのすべてが甦つて來て、すべてが組み立てられ、形を備へ、大きな形象をなして彼の前に浮び上り、彼のそばに進み寄り雲集した。彼の前に壯大な魂を奪ふやうな庭園がいくつも擴がり、完全な一つの町が彼の前に打ち建てられたり壞されたりし、凡ゆる墓地からは死人が見捨てられ再び生活を始めたりするのを彼は見た。すべての種族と國民とが實物となつて現れて彼の前を通り過ぎた。遂に今度は彼の思想が、無形の幻想が、すべて悉く彼の病床の周圍に來て實體を備へた、殆んど、それが考へられると同時に實體を備へるのであつた。彼はたうとう、非物質的な觀念の中でではなく、完全な世界の中で凡ゆる創造に就いて考へてゐる自分を見た。全く逃げ場のない此の無限の不可思議な世界に於ける原子のやうなものの中から、自分が生れて來たのを見た。而も反抗せる獨立の狀態に於けるこのすべての生活は永劫無窮の諷刺を以て、彼を粉碎し壓迫し、そして彼を追跡しつゝあるのだ。彼は、自分が死にかゝつて滅亡しかゝつてゐ

て、それに復活の望みもなしであつたことを感じた。彼は自由にならうと試みた。しかしこの全宇宙の中には彼を隠す隅つこもなかつた。終ひには彼は絶望の極はげしい努力をし、叫び聲を發して眼を覺したのであつた。

眼覺めてみると、彼は冷たい氷のやうな汗に浸つてゐた。彼の周圍には死のやうな沈默があつた、眞夜であつた。けれどもまだ彼には、何處かで奇怪なお伽噺が續けられてゐて、がさつな聲が、彼にはお馴染であるらしい何か長い物語を本當に話してゐたかのやうに思はれた。彼は暗い森林や大膽な山賊や或る圖太い强賊の話を聞いた。多分ステンカ・ラザンその人に就いても、樂しげな醉漢の水夫や或る美しい少女や母なるヴォルガに就ても聞いたのであらう。それはお伽噺ではなかつたか？　彼はそれを本當に聞いてゐたのか？　始終彼は苦しい麻痺のうちに、筋肉一つ動かさずに眼を開いて横になつてゐた。遂に彼は用心深く起き上つた。そして、この激しい病氣の後で、力が回復して來たことを感じて喜んだ。人事不省は過ぎ去つて、現實が始まりかけてゐた。彼は、自分がカテリーナと話をしてゐた時と全く同じ著物を著てゐることに氣がついた。してみると朝、彼女が彼のところを立ち去つてからまだ左程長くはならなかつたのであらう。決心の火が彼の血管を走り通つた。彼は寢床の置いてあつた近くの劃壁に頂上に何か理由があつて打ち込んであつた大きな釘を、機械的に手でさぐつてそれを摑んだ。そして彼の全身の重みをかけてそれにぶら下り、節穴のところまでうまく自分を引張り上げることが出來た。その節穴からは、やつと眼に見える位の光が彼の部屋のうちに忍び込んでゐた。彼はその孔に眼を押し當てゝ、殆んど息もつかずに興奮して覗き込み始めた。

主人の部屋の隅の處には寢臺が置いてあつた。その側には布をかけたテーブルがあつて、その裝幀から見ると宗教書らしい古めかしい形の本が積んであつた。隅の方には、彼の部屋のと同じ古風な聖像があつて、燭火がその前に燃えてゐた。寢床の上には老人ミューリンが横はつてゐたが、病氣なので苦しみのために弱りきつてシーツのやうに蒼ざめて、毛布を被つてゐた。その膝の上には開けたまゝの本があつた。寢床のそばの長椅子の上にはカテリーナが寢てゐて、腕を、老人の胸の邊に載せ、頭は彼の方の上に垂れてゐた。彼女は、注意深い子供らしい驚異の眼を以て老人を見詰めてゐた、そしてミューリンが彼女に話してゐた事に飽くことなき好奇心を以て、期待のために息もつかずに耳を傾けてゐるやうに思はれた。折々話し手の聲は高く昂がり、彼の蒼白い頰には活氣を呈した。彼は顏をしかめ、彼の眼は輝き始めた。そしてカテリーナは恐れて期待を以て靑くなるやうに思はれた。今度は、何だか微笑のやうなものが老人の顏に現れ、そしてカテリーナは柔和に笑ひ出した。彼女の眼に涙が

出て來ることもあつた。その時には老人は子供にするやうに優しく彼女の頭を撫でた、そして彼女は雪のやうに光つてゐるその裸かの手でいつもよりも一層しつかりと彼を抱擁し、一層慈愛深く彼の胸にかじり附くのであつた。

時々オルディノフは、これはまだ夢の中の一部だと思つた。實際彼はそれを確信した。しかし彼の頭には血が上り、彼の顳顬では脈搏が苦しく鼓動してゐた。彼は釘を放して寢床の上に降りた。そしてよろめきながら、その樣子が氣遠ひのやうであることを感じながら、彼の血の中で火のやうに燃え上つた衝動を理解せずに、彼は戸口へ行つて激しく押した。錆びたボルトは忽ちに開け放たれて、がた〳〵といふ音がしたかと思ふと突然彼は主人の寢室の中央に突立つてゐる自分を見出した。彼は、カテリーナが立ち上つて慄へてゐ、老人の眼がその陰氣な眉の下で腹立たしげに輝いてゐ、そしてその顏が突然の憤怒を以て顰められてゐたのを見た。彼は、老人が尙ほも彼をぢつと見詰めながら、急いで壁に懸つてゐた鐵砲を盲さがしに探つてゐるのを見た。それから彼は、そのきら〳〵する銃の筒先が怒りに慄へてゐる不確かな手で彼の胸を眞直に狙つてゐたのを見た……。射撃の響きがして、今度は荒々しい殆んど人間とは思はれないやうな叫び聲が擧げられた。そして煙が去つた時オルディノフの眼は恐ろしい光景に出會つた。全くぶる〳〵震へながら彼は老人の上に身を屈めた。

ミューリンは床の上に倒れてゐた、痙攣を起してのたうち廻つてゐた。彼の顏は苦しみで歪んでゐた。そしてぴく〳〵動いてゐる脣の上には泡が出てゐた。この不幸な人は激しい癲癇の發作に罹つたのだとオルディノフは考へた。彼はカテリーナと共に急いで彼を助けに行つた……。

三

全夜が動亂のうちに過された。翌日オルディノフは、まだ彼の身體には衰弱と熱とが殘つてゐたにも拘らず、朝早くから出掛けて行つた。彼は庭で復た門番に出會つた。今度は韃靼人は遠くから彼に向つてしやつぽを擧げて好奇心を以て彼を眺めてゐた。それから、彼は氣を落著けようとするやうに箒をとつて仕事を始めたが、オルディノフがゆつくりと近づいて行くと横目で彼の方をちらりと見た。

「おい、君は夜中に何も聞かなかつたかね？」とオルディノフは訊ねた。

「へえ、聞きましたよ。」

「彼はどういふ種類の人なんだね？　どんな人なんだい？」

「部屋をお借りなすつた御當人が、御自身御承知のわけですがねえ、私にや赤の他人でさア。」

女主人

「貴様一體言ふ氣なのか？」とオルディノフは、急に病的な癇癪を起して夢中になつて叫んだ。

「私が何をどうしたつてんでせう？　あなたが悪いんだ――店子たちを脅かしてさ。下に住んでまさア、奴あ聾ですがね、それでもちやんと聞いたんですよ。奴のかみさんも聾なんだが、これも聞いたんだ。それにあんなに離れてる隣の構内でも矢張り皆聞いたんですよ。私や差配の人んとこへ行きますよ。」

「僕自身で行かうとしてるんだ。」オルディノフは答へて、それから門の方へ歩いて行つた。

「御勝手に。部屋を借りなすつた御當人なんだ……旦那、旦那、一寸。」

オルディノフは振向いた。門番は、丁寧に帽子に手を觸れてみせた。

「もし旦那が行つておしまひなら、私は大屋の處へ行きますがね。」

「何だつて？」

「引越した方が良うござんすぜ。」

「馬鹿な奴だ。」とオルディノフは言つて再び行かうとした。

「旦那、旦那、一寸、」門番は復た彼の帽に手をかけて、齒を出して笑つた。「まア、お聽きなさい、旦那、お怒んなすつちやいけませんよ、何だつて可哀さうな人間をいぢめなさるんだ？　可哀さうな人間をいぢめるのは罪ですぜ、そりや神の掟ぢやありませんや――旦那聞いてるんですか？」

「君も聽き給へ、さア、とつてくれ給へ、さア、あの人は一體何だね？」

「あの人は何だつて？」

「さうさ。」

「無料で話しませうや。」

此時、門番は、彼の帽をとつて、一二度それを振廻した、それから止めて、大風な樣子をしてオルディノフをぢつと見詰めた。

「旦那は立派な紳士だ。旦那がもし善良な人と一緒に生活しようとなさらないなら、御隨意になさい。私の言ふことはそれ丈けでさア。」

それから韃靼人は尙更意味ありげに彼を眺めた。そして復た荒々しく掃除をし始めた。遂に或事が終つたといふことを示しながら彼は、變な風にオルディノフのそばへ寄つて來た。そして意味ありげな身振をして言つた。――

「つまり、かうなんですよ。」

「つまり――どうなんだ？」

「滅茶苦茶なんですね。」

「何が？」

「飛んでつちまつたんだ、さうですよ！　飛んでつてしまつたんだ！」彼は、尚更變な調子で繰り返した。「あの人は病氣なんです。船を持つてゐたんですよ、大きな奴を。二つも三つもね。ヴォールガへはよく出たもんだつけがな、この私もヴォールガから來たんでさア。あの人は工場も持つてたんだが、それは燒けてしまつたんです。それであの人は氣が變になつてるんですよ。」

「あれは氣違ひなのか？」

「どうして！……どうして！……」韃靼人は力強く答へた。「氣違ひなもんですか、あの人は悧巧な人だ。あの人は何でも知つてるんです。あの人はそれや澤山な本を讀んでるんですよ。何もかも讀んでるんです。さうして他に眞理を語るんです。二留、三留と持つて來る奴はある、四十留でも、好きなだけ持つて來る奴はある。ところがあの人はといふと、本を檢べて凡ゆる眞理を見るんだ、そしてそれを語るんですからね。それでテーブルの上へ早速金が出りやア——金が無くちや駄目だ！」

是に於いて韃靼人は、ミューリンの爲めに、熱心に味をつけながら、嬉しさうに本式に笑つた。

「えゝ、あれは占ひをやるのかい、豫言をするのかい？」

「ふむ！……」門番は敏捷く頭を振りながら呟いたり呟いたりして、よろ〳〵しながらやもう祈りに祈つてゐるんです。あの人があゝ成るのは當り前でさア。」

その時、韃靼人は再び例の意味ありげな身振りをした。

此時、誰かが向うの庭から門番を呼んだ、そして縮羊皮の著物を著た小柄な腰の曲つた白髪頭の人が現れた。彼は、地面を見詰めて獨語を唸つたり呟いたりして、よろ〳〵しながらやつて來た。彼は、老耄してゐるやうに見えた。

「旦那だ、旦那だ！」門番は、面喰つてから囁いたが、急いでオルディノフにお辭儀をして、それから帽子をとつてその老人に逢ひに駈けて行つた。その老人の顏をオルディノフは見覺えがあるやうな氣がした。彼はつい最近に何處かで確かに彼に逢つたのである。

だが、そんな事は何も別に珍らしいことではないと考へて、彼は庭から出て行つた。門番は全くのならず者で破廉恥漢のやうに彼には感ぜられた。

「あの悪黨は、俺と實際上の取引をしてゐたんだ！」と彼は考へた。「どういふ譯で神が知つてゐるのだ！」

彼はかう言つた時にはもう町に來てゐた。その考へは不愉快なものだつた。其日は
次第に彼は、他の考へに氣をとられ始めて
灰色で且つ寒く、雪がちら〳〵降つてゐた。青年は、再び狂熱的な震へに襲はれたことを感
じた。彼は、地面が自分の下でぐら〳〵搖れてゐるやうにも思つた。出し抜けに、氣持の惡
い位朗かな親しみのある聲が破れたやうな次中音で彼にお早うと言つた。
「ヤロスラーフ・イリイーチ。」とオルディノフは言つた。
彼の前には脊の低い頑丈な赤い頬をした男が立つてゐた。見たところ三十位で、脂ぎつた
灰色の眼をして、やゝ微笑を浮べ、扮飾し込んで……ヤロスラーフ・イリイーチはいつもめ
かし込んでゐるのだつた。彼は、非常に親しみ深い風でオルディノフに手を差出した。オル
ディノフは、丁度一年前に全く思ひがけない具合で、殆んど町の中で、ヤロスラーフ・イリイ
ーチと知合ひになつたのである。彼等がそれ程わけなく知合ひになつたのは、半ばは偶然で
半ばは何處からでも善い性質の教養ある人々を拾ひ出すヤロスラーフ・イリイーチの異常な
性癖と、才能と典雅な行動とによつて少くも善良な社會に屬する價値のある人々と思はしめ
るやうな善い教育を受けた友達を彼が選ぶこととの爲めであつた。ヤロスラーフ・イリイー
チは非常に朗かな次中音を持つてはゐたが、それでも、全くごまかしを忍び得ないやうな彼

の聲音には、最も親しい友達との會話にさへ或る異常に明瞭な、有力な、そして權威ある何
物かがあつた。それは多分單に習慣のためだつたのであらう。
「一體どうして？……」ヤロスラーフ・イリイーチは、最も純粹な有頂天な歡びを表して叫
んだ。
「僕は此處に住んでるんだ。」
「どの位此處に住んでゐたの？」ヤロスラーフ・イリイーチは、だん〳〵調子を高くして續
けた。「だが僕は知らなかつた！　だつて、僕等は隣人ぢやないか！　僕は今この土地に居る
んだよ。僕は一月前にリャザーン州から歸つて來たんだ。さア、君を捉へた、尊い舊友！」そ
してヤロスラーフ・イリイーチは、最も人のいゝ樣子をして笑つた。「セルゲイエフ！」と彼は
強く叫んで、「タラーソフの處で僕を待つてゝくれ給へ、袋は僕のゐない處で奴等にいぢらせ
ちやいけないぜ。それからオルスーフィエフの門番をせかしてすぐに役所へ行つてるように
命令けてくれ給へ。僕も一時間たてば行つてるから……。」
急いで此の命令を誰かに與へてから、風流者のヤロスラーフ・イリイーチは、オルディノフ
の腕をとつて、一番近い料理屋へ連れて行つた。
「こんなに長いこと離れてゐたんだもの、二語三語話した丈けぢや僕は滿足出來ないね。さ

ア君のやつてるのは何だね？」彼は、妙に聲を落しながら殆んど靜肅に言つた。「以前のやうに科學の仕事をしてるのかい？」

「さう、前のやうに。」とオルディノフは、鮮いた考へに打たれて答へた。

「素敵だ、ヴシッリイ・ミハーイリチ、素敵だね！」此時ヤロスラーフ・イリイーチはオルディノフの手を暖かく握つた。「君は、社會の名譽になるだらう。神は君の經歷に幸福を與へ給ふ……。えゝ、どうだらう！　僕は君に逢つて實にうれしい！　隨分君のことは考へたんだぜ、僕は幾度かう言つたらう、『彼は何處にゐるんだ、我が善良なる、立派な心を持つた、賢明なヴシッリイ・ミハーイリチは？』つてね。」

彼等は、私室を借りきりにした。ヤロスラーフ・イリイーチは、晝食を通し、ヴォートゥカを命じた。そしてオルディノフを感動して眺めてゐた。

「僕は君と逢つてから隨分讀んだよ。」と彼はおづ〳〵した、稍々機嫌をとるやうな聲で始めた。「僕はプーシュキンを皆讀んだ……。」

オルディノフは、ぼんやりと彼を眺めてゐた。

「人間の熱情に對する驚くべき理解だね。だが、先づ第一に僕に感謝させてくれ給へ。君が正當な考へ方を僕に立派に吹き込んでくれたのは、實に役に立つたんだよ。」

「そりや確かに……」

「いや、僕に言はしてくれ給へ、僕はいつでも當然拂ふべきところで尊敬を拂ふのが好きなのだ。で、この感じが少くも表現を見出したことを僕は誇りとする。」

「本當に、君は君自身に對して公平ではない。そして僕は、實際……」

「いや、僕は全く公平なんだ。」とヤロスラーフ・イリイーチは、異常に興奮して答へた。「君と比べたら僕は何だらう？」

「おや、おや！」

「さうだ……。」

それから沈默がつゞいた。

「君の忠告に從つて、僕は可成在つた賤しい知識とは別れてしまつたんだ。さうしてね、或る程度まで僕の粗暴な態度を和げたんだよ。」とヤロスラーフ・イリイーチは、やゝおづ〳〵とした機嫌をとるやうな聲で再び始めた。「僕は義務から自由になる時には、大部分家の中に坐つてるね。晩には僕はためになる本を讀む、そして……僕はたつた一つ欲望を持つてるんだよ、ヴシッリイ・ミハーイリチ、祖國に對して少しは役に立つやうな……。」

「君は大變氣高い人だと僕はいつも思つてゐたよ、ヤロスラーフ・イリイーチ。」

「君はいつでも僕の心に慰安を與へてくれる……君は寛大な青年だ……。」

ヤロスラーフ・イリイーチはオルディノフの手を暖かく握つた。

「君は何も飲んでゐないんだね？」と彼は、いくらか興奮を鎭めて言つた。

「飲めないんだ。僕は具合が惡いんだよ。」

「具合が惡い？　さう、本當なのか？　どの位――どんな風に――具合が惡くなつたんだい？　君がよかつたら話すが……どんな醫者にかゝつてるんだね？　よかつたら僕の敎區の醫者に話さうよ。僕は自分で彼の處へ駈けてつて來る。その人は非常にうまいんだ！」

ヤロスラーフ・イリイーチは、既に帽子をとり上げようとしてゐた。

「どうも有難う。僕は、治療を受けることはいゝと思はないんだ。僕は醫者といふ奴を好かない。そんなことを言ふもんぢやあるまい？　人は、そんな風にやつてくことは出來ないよ。だがあの人はそりや上手なんだぜ。」ヤロスラーフ・イリイーチは、嘆願するやうにつゞけた。

「いつか――こんな事を君に話すのを許し給へ、愛するヴシッリイ・ミハーイリチ――いつか或る可哀さうな大工がやつて來たつけ。『さあ、』と奴は言つた、『私は道具で手を怪我したんです、私のためにこれを癒して頂きたいんで……』セミョーン・パフヌティーチは、その可哀さうな奴が危く脫疽になりさうだつたのを見ると、その傷の手を切斷しにかゝつたんだ。彼は僕の前でやつたんだがね、それはこんな風にやられたんだ……つまり、實に華美なやり方でやられたんだよ、その爲めに、僕は白狀するが、もし苦しんでゐる人間に對する同情がなかつたら、僕は單に好奇心からでも喜んでそれを眺めたらうと思ふね。だが、君は何處でどうして病氣になつたんだい？」

「引越の時に……。僕はやつと起きたばかりなんだ。」

「しかし、君はまだ隨分惡いぜ。外出なんかしちやいけないんだ。ぢや、君は前に居た處に住んでるんぢやないのか？　だが、何だつて引越しする氣になつたんだい？」

「お內儀さんがペテルブールグを立ち退かうとしてゐたからさ。」

「ドームナ・サヴィーシュナが？　本當かい？……全く尊敬を持つてたんだよ。あの生活には、隨分いかい？　僕は彼女に對して殆ど息子のやうな尊敬すべき善良な女だつたねえ！　い終局に近かつたんだが、我々の先祖の靜かな威嚴ともいふべき或物があつた。そして彼女を見てゐると、誰でも我々の白髮の莊嚴な古い因襲の權化を見るやうな氣がしたんだ……僕はかういふつもりなんだ……そのうちに在る非常に詩的な或物なんだねー」ヤロスラーフ・イリイーチは、全く恥かしさでいつぱいになつて、耳まで赧らめながら、言ひ終つた。

「さうだ、彼女は立派な女だつた！」
「だが、教へてくれ給へ、今度は何處に落著いたんだか。」
「此處からは餘り遠くない、コシュマローフの建物の中だ。」
「僕はあれを知つてるよ。偉大な老人！　僕はあれの實際の友達なんだとも言へるね。立派な老兵だ！」
　ヤロスラーフ・イリイーチの脣は、殆んど情熱のために震へてゐた。彼は、もう一杯のヴォートゥカとそれからパイプとを命じた。
「君は家を借りたの？」
「いや、家の中の造作附の部屋だ。」
「主人は誰だい？　多分その人も僕は知つてるだらう。」
「ミューリン。職人だ。丈の高い老人で……」
「ミューリン、ミューリン。さうだ、裏庭の、棺作りの居る上の、失敬だが、さうだらう？」
「さうだ、さうだ、裏庭のだ。」
「ふむ！　あすこは具合はいゝかい？」
「さうさね、僕はやつと引越したばかりなんだ。」
「ふむ！……僕は、たゞ言つて置きたいんだがね、ふむ！……君は何も特殊なことに氣がつきはしなかつたかい？」
「全く……」
「といふのはね、……君がその部屋が氣に入つてるんならきつと君は具合がいゝだらうと思ふが……僕が言ふのはそんなつもりぢやなかつたんだ、僕は君に警戒しようとしてるんだがね……だが、君の性格を知つてるんで……あの老人の職人を君はどう思つたね？」
「あれは全く病氣らしいね。」
「さうだ、あれは本式の病人さ……しかし君は何も氣がつかなかつたかい？　君はあれと話をした？」
「ほんの少ししたよ、あの人は氣むづかしくつて非社交的だね。」
「ふむ！……」ヤロスラーフ・イリイーチは、默想した。「あれは不幸な人だ。」と彼は、夢みるやうに言つた。
「あの人がね？」
「さうさ、不幸なんだよ。と同時に又信じられない位奇妙な、興味のある人物だ。だが、あれが君を苦しめないのだとすると……こんな問題をいつまでも言つてるのを許してくれ給

へ、しかし僕は知りたかつたんで……」

「だが、君は本當に僕まで知りたくさせたんだ、……僕はあの人がどういふ種類の人か非常に知りたいんだよ。それに、僕はあの人と一緒に住んでるんだからね……。」

「ねえ君、あの人はもと非常に金持だつたんださうだよ。多分君は聞いたらうが、あれは商業をやつてゐたんだ。ところが色んな不幸なまはり合せであれは貧乏に落ちてしまつた。澤山あつたあれの船は嵐で破船して、積荷も一緒くたに何もかも失つてしまつた。あれの工場は、これは近い親しい親戚の人に委托されたと思ふが、同樣に運が悪くて、燒失したんだ。それにその親戚の人まで焰の中で燒け死んぢまつたんだ。どうしたつて、それは恐ろしい損失だつたに違ひない！　それから、人の噂では、ミューリンは氣落ちしてしまつて涙にくれてゐたさうだ。人々はあれが理性を失つてしまふことを恐れてゐたんだね、そして實際矢張りヴォールガ通ひの艀の持主だつた他の商人と喧嘩をして、あれは出し抜けにひどく奇妙な思ひがけない處へ現れたんださうだ、その凡ゆる出來事が彼が全く氣違ひになつたといふ推測を(僕もそれを信じかけるんだが、)說明してゐた唯一のものだつた位だつたさうだ。あれの奇妙なことに就いては、細かい事も僕は聞いたよ。で、終ひに突然非常に變な、いはば重大な事情が起つたんだ、それは、唯だ腹立たしい運命の毒惡な影響に歸するよりないやうな事

情なんだがね。」

「それはどんな事だつたのだ？」とオルディノフは訊ねた。

「あれは、狂氣の發作でね、あれがもと非常に好きだつた或る若い商人の、命に關るやうな或る企みをやつたんださうだ。その發作から覺めた時、あれは全く顚倒してしまつて自殺しさうだつた位だつたのだ、少くも人はさう言つてる。その後どういふことが起つたか僕は知らないが、數年間贖罪をしてゐたといふことは知れ渡つてゐるやうだ……。だが、君はどうしたんだね、ヴシッリイ・ミハーイリチ？　僕のつまらない話に疲れたのかい？」

「おゝ、いや、どうか……あの人は贖罪をしてゐたと言ふんだね。だがあの人は一人ぢやないよ。」

「どうだか僕は知らない、獨りだつたと聞いてはゐたが。兎に角他には誰もその事件に係り合つてはゐなかつたんだ。しかし、どうなつたのか僕は聞かなかつた。唯だ僕の知つてるのは……。」

「それで？」

「唯だ僕が知つてるのは——と言つても、何も特に附加へて言ふやうなことを持つてるわけぢやないんだが……僕はたゞかういふことが言つときたいんだ、君が若しあの人のうちに

何か變な又は常規を失したことを發見したら、それは皆單に續々と彼の上に落ちかゝつて來た不幸の結果に過ぎないと言ふことなんだ……。」

「さうだ、あの人はひどく信心深くて、ひどく神聖だね。」

「僕はさうは思はないね、ヴシッリイ・ミハーイリチ、あの人は非常に苦しんだ、あの人は全く誠實な人だと思ふ。」

「だが、あの人は今はもう氣違ひぢやない、もうすつかりいゝんだ。」

「おゝ、さうだ、さうだ、僕はそれを誓つてもいゝ。あれは全くその能力を十分に所有してゐるよ。あれは、たゞ君が今言つたやうに、非常に變人で信心家なんだ。實際あれはひどく敏感なんだよ。あれは、小氣味よく大膽にそして微妙に口をきくね。過去の暴風雨のやうな生活の跡があれの顏にはまだ見られる。あれは奇妙な人間だ、非常な讀書家だ。」

「あの人はいつも宗教書を讀んでるらしいね。」

「さう、あれは神祕家だ。」

「何だつて？」

「神祕家さ。だが、これは君には言ふが祕密だぜ。もう一つ祕密を君に話さう、あれには一

時非常に念入りな監視がついてゐたんだ。あの人は、いつもやつて來る人達に大變影響したんだね。」

「どういふ影響だい？」

「だが、君はどうしたつてこれを信じやしまいよ。ねえ、あれがまだ此處に住まなかつた時分にね、尊敬すべき市民で、立派な人間で、一般からも敬慕されてゐたアレクサンドル・イグナティエーヴィチといふ人が補佐を一人連れて、好奇心からあれに逢ひに行つたんだ。彼等が到著して案內されると變人は、彼等の顏をちつと見入り始めたんだ。自分が彼等の爲めになるなと思へば、あれはきつと、その人々の顏を穴のあく程見詰めるのだつた。さうでなければ、あれは人々を追ひ出してしまふんだ、非常に無禮だとさへ言はれてるね。あれは彼等に訊ねた、『何か御用ですか、貴方方？』『左樣。』とアレクサンドル・イグナティエーヴィチが答へて、『我々が言はんでも、君の天賦の才でお分りでせうな。』『私と一緒に次の間へいらつしやるがいゝ。』からあれは言ふんだ。それからあれは、彼等がお勤めをして貰ひに來たんだといふことを示したさうだ。アレクサンドル・イグナティエーヴィチは、あれの處でどんなことがあつたのか、後で言はなかつたが、彼が其處から出て來た時にはシーツのやうに眞白だつたさうだ。或る高い階級の有名な貴夫人にもそれと同樣のことが起つた。彼女も矢張りあれに

逢つて出て來ると、シーツのやうに眞白で、涙に濡れて、それにあれの豫言と話とに壓倒されてゐたといふことだよ。」

「變だな。だが、今でもあの人はまだ同じことをやつてるんだらうか？」

「それは、嚴重に禁められてるんだ。大變なことがあつたんでね。或る屈指の家庭でその希望と歡びの對象になつてゐた一人の青年騎士があれを嘲つたんだ。『何を笑ふんだ？』と老人は怒つて言つたさうだ。『三日經てば貴樣もかうなるんだぞ！』そして、あれは自分の胸のとこで腕で屍を示すやうに十字を切つたさうだ。」

「それからどうしたね？」

「僕はそれを信じたくないんだが、あれの豫言は本當になつたと人は言つてるよ。あれは天賦の才を持つてゐるんだ、ヴシッリイ・ミハーイリチ……君は僕のこの無邪氣な話を笑つて喜んでるんだね。君は學問では僕より遙かに上だ、といふことを僕は知つてる。が、僕はあれを信じてゐるんだ。あれは香具師ぢやない。プーシュキンもその作品の中でこれと同じ場合を言つてるね。」

「ふむ！　僕は君と爭はうと思やしない。君は、あれが獨りで住んではゐないと言つたやうに思ふが？」

「僕は知らない……。あれの娘があれと一緒に居るんだらうと思ふ。」

「娘が？」

「さう、でなければ多分妻がね。僕はある女が、あれと一緒にゐることは知つてるんだ。僕はその女をちらりと見たことがあつた、氣を附けて見やしなかつたが。」

「ふむ！　不思議だな……」

青年は、沈思に落ちた、ヤロスラーフ・イリイーチも深い默考に沈んだ。彼は、舊友に會つてゐることと、彼に何か甚だ興味ある事を滿足して語つたといふこととに感動してゐた。彼は、パイプを見詰めながら、ヴシッリイ・ミハーイリチをぢつと見詰めて、坐つてゐたが、突然彼は狼狽てゝ飛び上つた。

「時間がなくなつちやつた、僕は、時間を忘れてゐたんだ！　愛するヴシッリイ・ミハーイリチ、もう一度は、我々が一緒になつたこの幸福な偶然を感謝する、だが僕の時間は經つちまつたんだ。君の有名な隱家へ訪ねて行つてもいゝかね？」

「どうぞ、僕は喜ぶよ。僕も機會があつたら君に逢ひに行くよ。」

「そりや又實にうれしいね。君は僕を滿足させる、君は僕を口では言へない位滿足させるといふものだ！　君がどれ程僕を喜ばしたか、君には分るまいね！」

彼等は、料理屋から出た、セルゲイエフは既にそこにゐて、飛びかゝるやうに彼等のところへやつて來て、ヴィリアム・エメリヤノーヴィチは喜んで出掛けたと早口に傳へた。實際に勇ましい氣持のいゝ三輪馬車に附けた輕快な二匹の葦毛馬が見えた。その擧革は、目立つて立派なものであつた。ヤロスラーフ・イリイーチは、一番いゝ友達の手を萬力のやうに握りしめ、帽子に手を觸れて、そして、飛んで來る二輪馬車を迎へるために出掛けた。その途中で彼は、一二度振向いてオルディノフに左樣ならをした。

オルディノフは、ひどく草臥れ、體中が萎えきつてゐるのを感じた。やつとのことで足を動かしてゐる程であつた。彼は這ふやうにしてどうにかかうにか家まで行つた。門のところで彼は、復た門番と出會つた。彼はオルディノフがヤロスラーフ・イリイーチと別れるのを一生懸命に見戍つてゐて、遠くの方から彼に御辭儀をしてゐるのだつた。しかし、青年は彼のそばを通り拔けて、彼の家の戸口で、彼は、ミューリンの部屋から出て來て、下を見詰めながら歩いて來る小柄な白髮頭の姿にぶつかつた程に駈けて行つたのであつた。

「神樣はわしの罪を許して下さらう！」その姿は、コルクの跳ねたやうに一方へ飛びながら私語いた。

「怪我をさせやしませんでしたか？」

「いや、却つて御丁寧にありがたう、……おゝ、神樣、神樣！」

大人しい小さな人は、何か敎訓的なことを己自身に唸り呻き呟きながら、注意深く階段を降りて行つた。これは、門番があんなに恐ろしがつてゐたこの家の「旦那」であつた。やつとその時オルディノフは、彼が引越をしてゐた時このミューリンの處で始めて彼を見掛けたことを思ひ出した。

彼は、心が攪き亂され打震へることを感じた。彼はその幻想と感觸とが極端に張りつめてゐることを知つた、そして、もうそれを信用しまいと決心した。次第に彼は或る平靜に落ちてしまつた。重い壓しつけるやうな感情が彼の胸の上に凭れかゝつてゐた。彼の心は、爛れてでもゐたかのやうに痛むのであつた。そして彼の全精神は、物言はぬわびしい涙でいつぱいだつた。

彼は、彼女が彼に作つて呉れた寢床の上に再び打ち倒れた。そして再び耳を傾け始めた。彼は二つの呼吸を聞いた。一つは病人の重苦しい亂調の呼吸で、今一つは、柔かな、しかし不同な、丁度矢張り激情によつて搖られてゐるやうなものであつた、そして、又その心臟もそれと同じ憧憬で、それと同じ熱情で鼓動してゐるかのやうでもあつた。折々彼は、彼女の著物のサラ〳〵いふ音と、その柔かな輕い步調とを聞いた。そしてその彼女のかすかな步調が

彼の心のぼんやりした、併し悶えるやうな心持のいゝ苦痛に反響するのをさへ聞いた。遂に彼は、歔欷と治まり難い溜息と、最後に再び祈つてゐるのとを聞き分けたやうに思つた。彼は、彼女が聖像の前に跪いて絶望の亂心に於いてその兩手を振つてゐたことを知つた！……彼女は如何なる女だつたのか？　誰のために、彼女は祈つてゐたのか？　どういふ絶望的な感情で彼女の心は引き裂かれてゐたのか？　どうしてそれは痛み、悲しみ、かゝる熱い望みのない涙をそゝいでゐるのだつたか？

彼は、彼女の言葉を思ひ出し始めた。彼女が彼に話したすべては、まだ音樂のやうに彼の耳で鳴りひゞいてゐた。そして彼の心は、それを思ひ出す毎に、彼女の一語々々を彼が熱切に繰返す毎に、或るぼんやりした重々しいうづきを以て心持よく相應ずるのだつた……すべてこんなことを夢想してゐた彼の心の中を、一瞬間或る考へが閃いて過ぎた。けれどもそれと同時に、彼女の熱い呼吸、彼女の言葉、彼女の接吻などの印象が、彼の想像のうちに再び生き〳〵と起つて來たので、彼の全存在は氣が遠くなるやうな苦悶の中に痛んだのであつた。彼は、眼を閉ぢて、忘却に陷つた。何處かで時計が打つてゐた。もう大分晩かつた、黄昏に近かつた。

突然彼は、復たもや彼女が彼の上に身を屈め、熱い白日の無限なトルコ玉のやうな穹窿の如くに柔かく、且つ輝いてゐる靜かな幸福な歡びに閃く涙に濡れた彼女の非常にはつきりした眼で、彼の眼の中を覗き込んでゐたやうな氣がした。彼女の顏は、非常に勝誇つたやうな平和で輝き、彼女の微笑は、無限な祝福の非常な嚴肅さに暖められてゐた。彼女は、非常な同情を以て、非常に子供らしい情に驅られて、彼の眉に凭れかゝつてゐた。その爲めに喜びの呻きが彼の疲れきつた胸から破れ出た程であつた。彼女は、何事かを彼に話さうとしてゐた。抱愛するやうに彼女は彼に何事かを打開けて話してゐた。再びそれは、彼の聽覺を打ち破つた悲慘な音樂のやうだつた。彼は、彼女の近づいて來る呼吸に感電してゐる暖かな空氣を貪るやうに吸つた。苦悶して彼は腕を伸ばし溜息をつき、眼を開いた……。と、彼女が彼の前に立つてゐた。彼の顏の上に身を屈めて、恐れのために眞青になつて、全く涙に濡れて、全く激情のために打震へてゐた。彼女は、半裸體の腕で彼に何か求めるやうにしながら、そしてその兩手を摑んだり振つたりしながら、何事かを彼に語つてゐた。彼は、兩手に彼女を抱きしめた、彼女は彼の胸の上で震へてゐた……。

第二部

一　女主人

「どうしたんです？　貴女はどうしたんです？」とオルディノフは言つたが、全然起き上つてしまつて、それでもまだ彼女を彼の強い暖かい抱擁のうちに押さへ縫けてゐた。「貴女はどうしたんです、カテリーナ？　何が起つてるんです、愛する人？」

彼女は、眼を伏せその赧らめた顔を彼の胸に隠しながら穏かに吸り上げてゐた。

「私には解りません、私には解りません。」と彼女はたうとう、やつと聞える位の聲で、喘ぎ〳〵言つた。而も殆んど言ひ廻しをすることなどは出來なかつた。「私には解りません、どうして私參りましたんですか……」彼女は、前よりも一層しつかりと、一層はげしく彼に摑まつて、抑へきれぬ激しい感情の突發から彼の肩や手や胸に接吻した。終ひに彼女は絶望したやうに、その顔を自分の手で隠し、膝をついて倒れ、彼女の頭を彼の膝に埋めた。オルディノフが、言ふに言はれぬ苦しみから、怺へきれずに彼女を抱き上げて、自分のそばに坐らせた時、彼女の顔は全く恥かしさで眞赤に輝き、彼女の泣き腫らした眼は許しを求め、そして、彼女自身の意志に反してその唇の上に漂つてゐた微笑は、彼女の新しく起つた感情の力に打ち勝つことが殆んど出來なかつた。今、彼女は再び恐れてゐるやうであつた。疑ひ深く彼の手を押しのけて、そして、頭を垂れて、彼が恐ろしく私語いた性急な質問に答へてゐた。

「多分貴女は、恐い夢を見たんでせう？」とオルディノフは言つた。「多分何かまぼろしでも

見たんでせう……さう？　きつとあの人が貴女を脅かしたんでせう……あの人は無我夢中なんだ。きつとあの人は、貴女に聞かしてはならないやうなことを何か言つたんでせう？　貴女は何か聞いたんですか？　さうなの？」

「いゝえ、私は眠りはしなかつたんです。」とカテリーナは、努力して激情を抑へながら、答へた。「私は眠られなかつたのですわ。あの人は始終默つてゐましたの、たつた一度しか私を呼びはしませんでしたわ。私は起き上つて、あの人の名を呼んであの人に話しかけたのです。そりや私はびつくりしたんですよ。あの人は眼を覺さないし、私の言ふことが聞えもしなかつたんです。あゝ、神樣があの人をお救ひ下さるようにー　それから私の胸には苦しみが起つて來たのです、ひどい苦しみが！　私は祈りに祈りました。それからこんな事になつたのです。」

「靜かに、カテリーナ、靜かに、私の生命よ、靜かになさい！　貴女は昨日びつくりしたんで……」

「いゝえ、私、昨日はびつくりしませんでしたのよー……」

「貴女は、前にもいつか、こんな事はあつたんですか？」

「えゝ、」そして再び彼女は全く震へた、そして子供のやうに彼の方へ寄り添つた。「あのね

え、」と彼女は、その歔欷を抑へながら言つた。「私があなたのとこへ來ましたのは、何でもないことではありませんわ。私が、とても一人でゐられなかつたのは、何でもないことではありませんわ。」彼女は、彼の手をうれしさうに握つて繰り返した。「他の人達の悲しみの上には十分に、涙をふりかけることですわ！　あなたがお淋しくて、氣が沈んで、誰もあなたと一緒に居る者はないといふやうな時には、暗い日に在る人々をお救ひなさい！……よう御座んすか、あなたは戀をしたことがおありなさるの？」

「いや……僕は貴女の前には戀を知らなかつたんです……」

「私の前には？……あなた、私を戀人とお呼びになるの？」

彼女は、突然びつくりしたやうに彼を眺めて、何か言つたやうだつたが、それから默つてしまつて眼を伏せた。だん〳〵に彼女の顏は赤くなつて行つて、再び眞赤になつてしまつた。彼女の眼は、尙ほその眼瞼の上を暖めてゐた忘れられた涙の中で一層きら〳〵と輝き、そして、或る疑ひが彼女の脣のあたりにさ迷つてゐた。內氣な羞らひを以て彼女は一二度彼を眺めたが、それから又眼を伏せた。

「いゝえ、あなたの初戀の人は私ではありませんわ。」と彼女は言つた。「いゝえ、いゝえ、」と彼女は、徹底的に頭を振りながら言つた。その間に微笑が再び彼女の顏の上に優しく覗き出た。「いゝえ、」と彼女は遂に笑ひながら言つた。「それは私ぢやないわ、愛する人、あなたの戀人になる方はね。」

此時彼女は彼をちらと見たが、彼女の顏には唐突に非常な悲しみが映つてゐた、彼女の容貌全體には唐突に非常な絶望的な悲哀が蔽うてゐた、內部から、彼女の心から忽ちに非常な絶望が浮き上つて來てゐた。それは、オルディノフが彼女の譯の分らない悲しみに對する不思議な苦しい同情の感じで壓倒され、言ふに言はれぬ苦惱を以て彼女を眺めた程であつた。

「私が言ふことをよくお聽きなさい。」と彼女は、その手の中に彼の兩手を握り、歔欷を制へようと努力しながら言ひ出したが、その聲はオルディノフの心臟に迫るのであつた。

「ようく私に氣をつけて下さいね、よう御座いますか、私の喜び！　ようくお心をお鎭めになつて、あなたがいま愛していらつしやるやうには私を愛さないで下さいましね。あなたの爲めにはその方がいゝんですから。あなたのお心はだん〳〵輕く、喜ばしくなりますわ、そして、恐ろしい敵から身を守つて、妹の愛をお持ちになるやうになりますわ。私はあなたの御好きな時に來て、あなたを愛して上げますわ、そして、あなたとお友達になることをちつとも恥ぢません。あなたがあのひどい病氣で寢ていらしつた間、二日間といふもの私はあなたと御一緒にゐましたー　あなたの妹を知るやうになさいましね！　私たちが兄妹の誓ひを

したのは無駄ではありませんわ！　私があなたの爲めに、聖母様にお祈りして泣きましたのは無駄ではありませんわ！　あなたはもう他に妹を持つてはいけません！　あなたは世界中何處へでもいらつしやれます、地球上の隅から隅まで知らうとなさることも出來ます。でも私のやうな、他の愛を見附けることは出來ませんわ。私は、いつでも今のやうにあなたを愛してゐますでせう、ね。私は暖かくあなたを愛します。私は、あなたの精神が純潔で、見通されないからですわ。さうして、私があなたを愛してゐるのは、あなたの家のお客様だ、熱望してゐたお客初めて私があなたをお見掛けした時、すぐにこの方は私の家のお客様だ、熱望してゐたお客様だといふことを知つたからですわ。それにあなたが私たちの處へいらつしやりたいとお思ひになつたのも無意味なことではありませんわ。私があなたを愛するのは、私を御覽になる時あなたのお眼が愛に充ちて、あなたのお心を語つてゐるからでございます。そのお眼が何か話してゐる時には、すぐに私には、それが皆あなたの內から出てゐるのだといふことが分るからでございます。あなたの愛のためには、私の生命も自由も差上げたいといふからなのでございます。私が、そのお心を見出しました方の奴隷にでもなるのがうれしいからなのでございます……。しかし、私の生命は私のではなく他の人のもので……私の自由は束縛されてゐるのでございます！　私を妹にして下さい、私の兄さんになつて下さいまし、さうして、

不幸の時、私がひどい病氣になつた時には思ひ出して下さいましね。たゞさうして頂けさへすれば、私はちつとも恥ぢずにあなたの處に來られますし、長い夜中を今のやうにあなたと一緒に坐つてもゐられますわ。お解りになりましたでせう？　私の言つてることがお解りになりまして？　あなたのお心は私に開かれてゐますの？……」

彼女は、もつと何か言はうとして、彼をちらりと見、その手を彼の肩に置いて、それからたうとう頼りなげに彼の胸に凭れた。彼女の聲は、ひきつるやうな情熱的な歔欷（すゝりなき）のうちに消えて行き、彼女の胸は波立ち、そして彼女の顏は日沒のやうに赤くなつた。

「僕の生命、」とオルディノフは私語（さゝや）いた。すべてが彼の眼前では眞暗で、彼は殆んど息も出來ない位であつた。「私の喜びよ。」彼は、自分が何を言つてゐるのか分らず、自分自身をさへ理解しないで、一瞬の暇が、今起つてゐる現實といふよりは夢のやうに思はれた總ての事柄を破り損つてしまひはしないかといふ恐れに震へ乍ら、さう言つた。彼の周圍の總ては全く濛々としてゐた！「僕には分らない、僕には貴女が分りません。今貴女は何を仰しやつたのだつたか、僕には思ひ出せない。僕の心は眞暗です、僕の胸は痛んでゐる、僕の女王！」

この時彼の聲は感激のために破れた。彼女は、一層しつかりと、一層暖かく、一層熱烈に彼にしがみついてゐた。彼は、最早それを制しきれないで、立ち上つたが、有頂天のために

打ち碎かれ、疲れきつて膝をついて倒れてしまつた。遂にひきつるやうな歔欷が彼の胸から痛々しく絞り出された。そして、彼の心臟から眞直に出て來た聲は、溢れるばかりの計り知られぬ有頂天と幸福とのために竪琴の弦のやうに震へてゐた。

「貴女はどういふ人なのです、貴女はどういふ人なのです、貴女は來たんです、可愛い〻人？」彼は、歔欷を抑へようとしながら言つた。「如何なる天上から貴女は僕の地面へ飛んで來たんだらう？　僕は夢の中にゐるやうな氣がする、僕は貴女を信ずることが出來ない。とめないで下さい、僕にすつかり、すつかり話させて下さい！　僕は長い間言ひ度かつたんです……。貴女はどういふ人です、どういふ人です、僕の喜びよ？　どうして貴女は僕の心を見出したんです？　話して下さい、貴女は長い間僕の妹だつたんだらうか？……貴女のことをすつかり僕に話して下さい、今まで貴女は何處にゐたんだか、貴女の住んでゐた處は何といふ處だつたのか話して下さい。初めに貴女は何を愛したんです？　何が貴女を喜ばしました？　何が貴女を悲しませました？……空氣は暖かでしたか？　空は晴れてゐましたか？……貴女はどういふ人を愛しいと思ひましたか？　僕の前には誰が貴女を戀したんです？　貴女の魂は誰に對して初めて慕ひあこがれたのですか？……お母さんはあつたんですか？　お母さんは貴女を子供のやうに愛してくれましたか、それとも貴女は僕のやうに蒼しの上で淋しい目を見て來たのですか？　貴女はいつでもこんな風だつたんですか？　話して下さい。貴女が夢みたのはどんな事だつたんです？　貴女の未來に對する夢想はどんなものだつたんです？　貴女には何が果され、何が果されなかつたんです？——話して下さい、何もかも……。貴女の處女の心は最初誰に對してあこがれたんです、そして何のためにそれを貴女は與へたんです？　話して下さい、僕はそのために貴女に何を與へなくてはならないのです？　僕は貴女自身のために何を與へなくてはならないのです？……話して下さい、可愛い〻人、僕の光明、僕の妹、話して下さい、どうしたら僕は貴女の心を得られるのでせう？……」

その時彼の聲は、再び破れた。そして彼はその頭を垂れた。けれども彼が眼をあげた時には、默々とした恐怖がその心を鎖し、髮の毛は頭の上に突立つた。

カテリーナは、シーツのやうに眞青になつて坐つてゐた。彼女の脣は屍のそれの如く、眞青で、その眼は沈默せる苦しい恐れで朦朧とかすんでゐた。彼女は、ゆつくりと立ち上つて二歩ばかり前の方へ出た。そしてはげしい泣聲を擧げて聖像の前に身を投げ出した……。急變的な辻褄のあはない言葉が彼女の咽喉から破れ出た。彼女は意識を失つた。恐れのために震へながらオルディノフは彼女を抱き上げて寢床の上に

運んだ。彼は彼女の前に氣違ひのやうになつて立つてゐた。一瞬間の後には、彼女は眼を開いて、寢床の上に坐つて、四邊を見廻し、彼の手をとつた。彼女は、彼を自分の方へ引寄せて、まだ蒼ざめてゐたその脣で何か私語かうとしてゐたが、しかし彼女の聲はいふことを聽かなかつた。たうとう彼女は溢るゝ涙に浸つた。その熱い滴りがオルディノフの凍つてゐる手の上に熱湯をそゝいだ。

「私には出來ないわ、私には、今は出來ないことですわ。私の最後の時間が近づいてるんです。」彼女は、たうとう絶望的な苦しみに於いて言つた。

彼女は、何か他のことを言はうとしてゐた。しかし彼女のぶる〳〵してゐる舌は一語も發することが出來なかつた。彼女は、賴りなくオルディノフを眺めた。彼は彼女を理解しなかつた。彼は、彼女にくつつく程に身を屈めて耳を傾けた……。遂に彼は、彼女が判然と私語くのを聞いた——。

「私は汚されたのです——人々が私を汚したのです、人々は私を零落させたのです！」

オルディノフは、頭をあげて、むき出しの驚きを以て彼女を眺めた。或る恐ろしい考へが彼の心を過つて閃いた。カテリーナは、彼の顏のひきつるやうな運動を見てとつた。

「さうです！　汚されたのです、」と彼女は續けた。「悪い人が私を汚したんです。私を零落

させたのは、あの人でした！……私は自分の魂をあの人に賣つたのです。何だつて、何だつて、あなたは私の母のことをお言ひになつたの？　何だつてあなたは私を苦しめようとお思ひなさるの？　神樣が、神樣があなたをお審き下さるわ！……」

一瞬間の後には、彼女は隱かに泣いてゐた。オルディノフの胸は、死の苦しみに於いて鼓動し、痛んだ。

「あの人はかう言ふのです、」と彼女は、制へてゐる變な聲で私語いた。「あの人が死ぬ時には私の罪深い魂を取りに來るんですつて……私はあの人のものなのです、私は魂をあの人に賣つたのです。あの人は私を苦しめます、私にあの人は本を讀んでくれます。さアあの人の本を見て御覽なさい！　此處にあの人の本があります。私は許しがたい罪を犯したとあの人は言ふのです。御覽なさい、御覽なさい……」

そして彼女は、一冊の本を彼に示した。オルディノフは、それが何處から出て來たのか氣がつかなかつた。彼は機械的にそれをとつた——それは彼が前に一度偶然見たことのある古い異教の本のやうな寫本であつた、しかし今は、彼は何か他のものを見たり注意をそれに集めたりしてゐることは出來なかつた。本は彼の手から落ちた。彼は、彼女に理性を取り戻させようとしながら、カテリーナを柔かく抱いた。「靜かに、靜かに、」と彼は言つた。「人々が貴

女を脅かしたんだ。貴女と一緒にゐるのは僕ですよ。僕と一緒に休むのですよ、僕のもの、僕の戀人、僕の光明。」

「あなたは、何も、何も、御存じないんです。」彼女は、暖かく彼の手を握りながら言つた。「私はいつでもこんなのです！　私はいつでも恐れてゐるんです……私はあなたを苦しめ過ぎましたわ！……」

「ぢや、私はあの人の許へ行きます。」と彼女は暫くして、呼吸をつきながら言ひ出した。「時にはあの人はたゞ言葉で私を慰めるのです。又時には、あの人は本をとつてそれを私に讀むのです！——あの人はいつでもそりや怖い、恐ろしいことを讀むんですよ！　私には何だか分りませんの、一語々々が分りませんの。でも私、恐ろしくはなつて來るんです。さうして、あの人の聲を私聞いてる時には、まるでそれはあの人が話してるんぢやないやうなのです、誰か他の人、他の惡い、あなたがどんなにしても柔らげることも出來ないやうな誰かのやうなのです。さうして、誰の心だつてそりや重くなつて、燃えて來ますわ……。この苦しさが私を襲ふ時より重苦しいことが他にあるでせうか！」

「あの人の許へ行つてはいけない、どうして貴女はあの人の許へ行くんです？」とオルディノフは、殆んど己れ自身の言葉に氣がつかないで言つた。

「どうして私、あなたの處に來たんでせう？　あなたがお訊ねになつても——私、矢張り知りませんわ。……ですが、あの人は始終私に、『祈れ、祈れ！』と言つてゐるんです。時による と私は眞暗な晩に眼を覺して長い間、幾時間も祈るのですよ。時には眠りに襲はれることもありますけど、大抵は恐怖が私を起すのです。いつも私を起すのです。それから私はいつもこんな空想をするんですの——私の周圍に嵐が起つたり、惡いことが始まつたり、凶事が私をズタ〳〵に引裂いて私を苦しめたり、私の祈りが神々へ屆かなかつたり、屆いても私を殘酷な悲しみから救つてくれなかつたり。私の魂は引裂かれてゐるんです、私の體中は泣いてばかりゐるんでびり〳〵に破れてるやうですわ……。そこで私は復たお祈りを始めるんです。そして聖母樣が、像のところからだん〳〵愛らしく私を御覽になるまで祈りに祈るのです。それから私は立ち上つて眠りに行くのです、全くめちや〳〵に打碎かれて。時によると、私は床の上で像の前に跪いたまゝで眼を覺ますこともあるんですの。それから復たあの人が私を呼び覺まして私を慰め慈しみ宥め始めて、やつと私が快くなつて來ることもあるんですの。さうするともうどんな苦しみが來ても私はあの人を恐れませんわ。あの人は力強いのですよ！　あの人の言葉は大きいのですよ！」

「だが、どんな苦しみを、どんな種類の苦しみを貴女は持つてるんです？」……さうしてオ

ルディノフは、絶望的に彼の手をよぢつた。

カテリーナは、恐ろしく眞蒼になつた。彼女は、最早赦免の望みもない死刑囚のやうな様子で彼を眺めてゐた。

「私が？　私は呪ひの下に在るのです。私は人殺しです。私の母が私を呪つたのです！　私こそ自分の母親を破滅させた源なのです！……」

オルディノフは、無言で彼女を抱いた。彼女は、震へながら彼に寄添うた。彼は、彼女の體中を通つてゐる痙攣的の震へを感じた。そして、まるで彼女の魂はその體から離れてゐるやうに思はれた。

「私は母を濕つた土の中へ隱したんです、」彼女は、回想の恐れに壓倒され、取返しのつかない過去のまぼろしの中に氣が遠くなつて言つた。「私は、長い間それがお話ししたかつたんです。あの人は、いつも歎願と譴責と腹立ちの言葉とで私を禁めてゐたのです。さうして時によるとあの人がまるで私の仇敵でもあるやうに、あの人自身が私の苦しみを呼び起すのです。夜には、今でも——このすべては私の心に浮んで來るんです。聽いて頂戴、聽いて頂戴！　それはもうずつとずつと前のことでしたわ、私、何時だか思ひ出せませんわ、ですけれど、それは皆昨日あつたことのやうに、夜中私の胸を食ひ荒してゐた昨日の夢のやうに、

眼の前に在るのです。不幸なその時を二倍も長くするのですわね。此處へ御坐りなさい、此處へ、私のそばへ御坐りなさい。私、自分の悲しみをあなたにすつかり御話ししますわ。私は母の呪ひによつて打倒されてゐるのかも知れませんが、私は呪はれてゐるのですが……私は私の生命をあなたの御手の中に置いてゐます……。」

オルディノフは彼女を止めようとした。が彼女は、彼の愛を引くことを求めながら、兩手を組み合せた。そしてそれから一層動亂して語り始めた。彼女の話は辻褄が合はなかつた、彼女の精神の混亂がその言葉の中に感じられた、けれどもオルディノフは、それを悉く理解した。何故ならば彼女の生活は彼の生活となり、彼女の悲しみは彼の悲しみとなつたから。何故ならば彼女の敵は彼の前に眼に見えて立ち、形をとり、彼女の發した一語々々を以て彼の心を打碎き、彼を毒惡に呪つてゐたから。前に現はれ、そして言はば極まりなき力を以て彼の心を打碎き、彼を毒惡に呪つてゐたから。彼の血は湧き立つて、彼の胸に溢れ、彼の理性を晦ました。彼の夢の邪惡な老人は（オルディノフはこれを信じた。）彼の前に澁刺としてゐた。

「えゝ、それはこんな晩でしたわ、」とカテリーナは始めた。「たゞもつと荒れてゐて、私たちの森では風が、その時まで聞いたこともなかつた程吹き叫んでゐました……。私の破滅の始まりは、その晩だつたのですよ！　私たちの窓の前で樫の木が折れましたの。さうすると

年取つた白髪頭の乞食が私たちの戸口にやつて来て、自分はその樫の木が若木の頃あつたことを覺えてゐる、それはその樫の木が風で吹き倒された時と丁度同じやうだつた、と言ふのでした……。その晩——今でも覺えてゐますが——私の父の艀が嵐のために河で破船したのです。さうして、父は病氣で苦しんでたのですけれど、漁夫たちが私たちのゐた工場へ駈けつけて來るや否や、早速その場へ出掛けて行つたのでした。母と私とは淋しく坐つてゐましたの。私は眠つてしまつたんですよ。母は或る事を悲しんで大變泣いてゐましたわ……さうして私は何を悲しんでゐたのか知つてゐました！　母は丁度病氣だつたのですが、まだ蒼ざめてゐて、自分の經帷衣の用意をすることを私に話しつゞけてゐました……。その時突然、夜中ですのに、門を叩く音が聞えたのです、私は心臟を血が走つたやうで飛び上つてしまひましたの。母は叫び出しました……私は母を見ませんでしたわ、恐かつたんですの。私は燈火を持つて自分で戸を開けに行きましたの……それはあの人でした！　私は恐しくなりました。私はあの人が來るといつも恐ろしがるのでしたの。それはまだ私が物心がついた許りの子供の時からなのですの！　その時にはあの人にも白髪はありませんでしたわ、髭も濃青のやうに眞黒で、眼は石炭のやうに輝いてゐました。その時まであの人は一度だつて私を深切に見てくれたことは決してなかつたのです。あの人は、『お母さんはお宅ですか？』と私に訊きました。私は、その小さい門を閉めながら『父は不在だ、』と答へたのです。するとあの人は、『知つてゐます、』と言つて、そして出し抜けに私を見ました、妙な風に私を見たのは初めてだつたのです。私はどんな風に私を見たのか知つてゐました。『どうしてあなたははひらないのです？』『考へてゐるのです。』その時まで立つてゐました。お母さんはお宅ですかと訊いたのにどうには私達は部屋の方へ歩いて行つてゐたのです。『お母さんはお宅ですかと訊いたのにどうして貴女は、お父さんが不在だと言つたのですね？』私は何も言ひませんでした……。母は恐怖に打たれてゐました——そしてあの人の許へ飛んで行つたのです……。あの人は母を殆んどちらとも見ませんでしたわ。私、それをすつかり見たのです。あの人は、濡れしよぼたれて震へてましたわ。あの人は十五哩も嵐に追はれて來たのです。ですが、あの人は何時來てゐたのか、何處に住んでゐたのか、母も私も知らなかつたのです。私たちはあの人に九週間も會はなかつたのです……。あの人は、帽子を抛り出して手袋を脫ぎ棄てゝ——聖像にお祈りもしなければ主婦にお辭儀もしないで——火のそばに坐つたのです……」

カテリーナは、まるで何かが彼女の上にのしかゝり、彼女を押へつけてでもゐたやうに手で顏の上を拂つた。しかし、一分間後には彼女は頭をあげて、再び始めた——

「あの人は、韃靼語で母に話し始めました。母はそれを知つてゐたんですが、私には一語も

俯りませんでしたわ。いつもはあの人が來ると二人して私を追ひ出してしまつたんですが、その時は母は、自分の子供に一言も言はうとはしませんでした。私の心は惡鬼を得ました、さうして私は、心中に自分自身を高めながら母を見てゐました。二人が私を見ながら私の事を話してゐたのを私は見ました、すると母は泣き出しましたの。私はあの人がナイフを握つてゐるのを見ました。其時分にはあの人が母と話してゐる時ナイフを握つたことを度々私は見てゐたんですの。私は飛び上つて、あの人の帶革を捉へて、その惡いナイフをあの人から離さうとしました。あの人は齒を喰ひしばつて、叫び出して、私を押し退けようとしました。あの人は私の胸を打ちましたけれど私を振り退けることは出來ませんでしたわ。私、その場で死んでしまひ度いと思ひましたわ、私の眼の前は霧が降りてるやうでしたわ。私は、床に倒れましたけれど泣き出しはしませんでした。私は殆んど何も見えなかつたんですが、あの人を見ました。あの人は帶革をはづして、袖をたくし上げて、私を打つた手でナイフをはづして、それを私に差出しました。『さア、切つとしまひ。お前さんの好きなやうにするがいい。私は、お前さんを侮辱したとしても、高慢な娘さん、その爲めにお前さんに對して地面に頭をつける氣なのだ。』私はナイフを側に置きました、血液が私の息を止めました、私はあの人を見ませんでした。私は脣を開かないで笑つて脅かすやうに母の悲しげな眼を眞正面に見たことを覺えてゐます。そして、その恥知らずな笑は決して私の脣から去りませんでしたの、母は蒼くなつて死んだやうになつて坐つてゐましたのに……。」

緊張した注意を以てオルディノフは、彼女のしどろもどろな話に耳を傾けてゐた。第一の爆發の後には、彼女の動亂は次第々々に收まつて、彼女の言葉はだん〳〵靜かになつた。哀れなる者は、彼女の記憶によつて全く夢中になつてしまつた。そして彼女の不幸はその無限な範圍にまで擴がつて行つた。

「あの人は、お辭儀もしずに帽子をとりました。私は、母の代りに彼を送り出す爲めに、もう一度燈火をとりました。母は、病氣の時でも彼に從いて行くのでした。私達は門に達しました。私はあの人の爲めに小さい門を開けて默つて追ひ出したのです。私は、あの人が帽子をとつて私にお辭儀をしてゐるのを見ました。そしてあの人は抱愛を感じながら、赤いモロッコ革の箱を出して蓋を開けるのを私は見ました。私は覗き込んで——大きな眞珠を、私への贈物を見ました。『私は佳人を持つてゐます。』とあの人は言ふのです。『町にね。その女にやる爲めに買つたのですが、その女には持つて行かなかつた。おとりなさい、綺麗な娘さん、貴女の美しさを大事になさい。これをおとりなさい、貴女はこれを足の下にこな〳〵にしてしまはうとも。』私はそれをとりましたが、踏みつぶす氣にはなりませんでしたの。それを名譽と

する氣にはなりませんでしたが、でも私はそれをとりました、一言も言はずに、毒蛇のやうに。私は部屋にはひつて、母の前のテーブルの上にそれを置いたのです——私がそれをとつたのはその爲めだつたのですからね。母は、暫らく默つてゐましたが、ハンケチのやうに眞白になつてゐました。母は、まるで私を恐れてゐるやうに私に言ひました。『これは何なの、カーチャ？』そして私はかう答へたのです。『あの商人は、お母さんのためにこれを買つたのよ、ねえ——私は何も知らないわ。』私は、母の眼から涙が流れて來るのを見ました。母は呼吸ぜはしく喘いでゐるのを、私は見ました。『私にぢやないよ、カーチャ、私にぢやない、意地惡な子だねえ、私にぢやない。』母は、まるで魂全體で泣いてゐたやうに、そりや悲しげに、そりや悲しげにさう言つたことを私は覺えてゐるのですよ。私は眼をあげました、そして母の足許に身を投げ出さうと思ひました。しかし、突然に惡いものが私に入れ智慧したのでした。『さう、もしお母さんのためでないのなら、多分、お父さんにでせうよ。ぢや、お父さんが歸つて來たら上げませう。商人たちは、品物を忘れてゐたんだつて言ひますわ……』その時母はどんなに泣いたでせう、私のものの。……『商人たちがどうしてゐたかは、私が自分でお父さんに言ふよ、さうして商人たちはどんな品物をとりに來たか……お前は誰の娘か、誰の私生兒か私はお父さんに話しませうよー　お前はもう私の娘ぢやない、お前は

惡者のはらゝ兒だ！　お前は呪はれた子供だ！』私は何も言ひませんでした、涙も出ては來なかつたんですの……私は、自分の部屋へ行つて一晩中嵐を聽いてゐました、その嵐の怒號に相應しかつたんですものね。

「その內に五日間たちました。五日目の夕方になつて、父が、氣むづかしく脅かすやうな顏附をして歸つて來ました。そして父は途中で惡いことに襲はれたのでした。父の腕が縛つてあつたのを私は見ました。敵が途中に待ち伏せしてゐて、父を惱まして病氣にしたのだと私は思ひました。その敵が誰だかといふことも私は知つてました、それはすつかり知つてましたのよ。父は、母には一語も言ひませんでしたわ。父は、私のことも訊きませんでした、そして惡者の眼から家を守らせました、勞働者共をすつかり呼び集めて工場から去らせました。その時に私は、家中すべてがよくなかつたことを心の中に感じました。私たちは待つてゐました、夜が來ました、又も吹雪の夜が。そして私の心には恐れが來ましたの。私は窓を開けました。顏はほてり、眼は淚に濡れてました。私の休みない心臟は燃えてゐました。私は燒けてゐたのですわね。私はその部屋から行つてしまひたくて堪りませんでしたわ、ずつと遠くの、雷と稻妻が生れる光の國へ。私の處女らしい心臟は鼓動し鼓動してゐました、……突然に、眞夜中に、微睡んでゐました時、といふよりは霧が私の魂の上に落ちかゝつて來て、

全く出し抜けにそれが掻きまはされた時に、——私は窓の處にノックの音を聞いたのでした。『開けなさい！』見ると窓の處に一人の男が立つてゐました、その男は繩でよぢ登つて來たのでした。私にはすぐにその來た人が誰かといふことが解つたので、窓をあけて、私の淋しい部屋にその人を入れましたの。それはあの人でした！　帽子も取らずにあの人は腰掛けに坐つて、まるで追ひかけられて來たやうに喘ぎ、息を切つてました。私は、隅の方に立つてゐましたが、自分が全く眞蒼になつたことを自分で承知してゐました。『お父さんは家に居ますか？』『居ります。』『で、お母さんは？』『お母さんも居ます。』『今は默つてるんですよ、聽いてますか？』『私は聽いてゐます。』『何を？』『窓の下でヒー〳〵鳴つてる音を！』『さア、美しい娘さん、貴女は敵の頭を切つてしまはうと思ひますか？　お父さんを呼んで、私の命をとりますかね？　私は貴女の淨いお慈悲にすがつてゐるのですよ。此處に繩がある、もし貴女の心が貴女に命ずるならばお縛りなさい、貴女の屈辱に對して復讐をなさい。』私は默つてゐました。『さア、言つて御覽？　私の喜びよ。』『あなたはどうしたいんです？』『私は敵を追ひ拂ひたい、古い戀人に全然暇乞ひをしたい、そして新しい人の足許に私の心を置き度いのです、貴女のやうな美しい娘さんの……』私は笑ひました、さうして、その惡い言葉がどんな風に私の胸に來たか知りませんでしたの。『美しい娘さん、階下へ行かして下さい、私の勇氣をお試しなさい、私の力に敬意をお拂ひなさい。』私はもうすつかり震へてしまつて、齒ががたがたしてゐましたのよ、それでも私の心は赤く燃えた鐵のやうでしたわ、私は行きました。私はあの人のために戸を開いて、家の中へ入れました、たゞ闇の處で努力して私はかう言つたのです。『さア、あなたの眞珠をお持ちになつて下さい、さうして二度と私に贈物をしないで下さい。』そして私は箱をあの人の前に投げ出しました。

此處でカテリーナは、止めて息を入れた。一寸の間彼女は眞蒼で、木の葉のやうに震へてゐた、が次には彼女の頭には血が上つた、そして今彼女が止めた時には、その頬は火のやうに輝き、その眼は涙に閃き、そしてその胸は不自然な不均等な呼吸で高くなつてゐた。けれども突然彼女は再び眞蒼になつた、そして彼女の聲は、悲しみに充ちた震へる顫動によつて低くなつた。

「そこで私は獨り殘りました、そして嵐が私を包んでしまふやうな嵐でしたわ。まもなく私は叫び聲を聞き、勞働者たちが庭を通つて工場の方へ駈けて來て、かう言ふのを聞いたのでした。『工場は火事だぞ。』私は隱れつゞけてゐましたが、皆は家から駈け出して行きました。私は母と殘つてゐたのです、母は死にかゝつてゐた事を私は知つてゐました。母は三日間といふもの死の床に横はつてゐたのです。私はそれを知つてゐたのです、呪はれた娘！……

忽ちに或る叫び聲が私の部屋の下で起りました、眠つてゐる所を脅かされた時の子供のやうなかすかな叫び聲でしたわ。それからはすべてが沈默してゐました。私は蠟燭を吹き消しました、私は氷のやうに冷たくなつてゐました、私は兩手で顏をかくしてゐました、私は見るのが恐かつたんですのよ。突然私は、すぐ近くに叫び聲を聞きました、人々が工場から駈けて來るのを聞きました。私が窓から乘り出して見ると人々が私の死んだ父を運んで來るのでした、人々の間ではかう言つてゐるのを私は聞きました。『よろけたんだ、梯子をふみ外して眞赤に燒けた大釜の中へ落つこちたんだ、だから惡魔が押し落したにちがひないさ。』私は寢床の上に倒れました。私は恐れの爲めにすつかり痺れてしまつて待つてゐましたの、でも私は誰を待つてたのか何を待つてたのか知りませんでしたわ。たゞ私は、其時には恐怖に包まれてしまつてたのです。私はどの位待つたか覺えません、出し拔けにすべての物がぐら〳〵搖れて來て、頭が重くなつて、眼が烟でヒリ〳〵痛んでゐたことを私は覺えてゐますの。さうして私、自分の終りが近づいたことを喜んでゐたのです。突然私は誰かが私の肩をあげたことに氣がつきました。私は一生懸命になつて見ました。あの人は全く燒け焦げてゐました、そして觸つたら熱さうな下衣は烟が出てゐました。

『『私は貴女の爲めに來ました、美しい娘さん、私を困難から連れ出して下さい、前に私を困難の中へ連れ込んだやうにね。私は貴女のために魂を失つたのだ、私自身の如何なる祈りもこの呪はれた夜を打消すことは出來ないのだ！

う！』』あの人は笑ひました、惡い人。『『敎へて下さい、』とあの人は言ひました、『どうしたら人の通らない處を出られるか！』私はあの人の手をとつて私の後に連れて行つたのです。私たちは廊下を橫切つて行きました——鍵は私が持つてゐたのです——私は貯藏室の戶を開けてその窓を指しました。私たちは手をとつて一緒に駈け出しました、長い間一緒に駈けて行きました。私たちは見ました、私たちはこんもりした暗い森に來てゐたのでした。あの人は耳を傾け始めました、『『私らのうしろには追手が來てゐるよ、美しい娘さん、だが、こんな時に生命を棄てるのは私らのためではない！　接吻してくれ、美しい娘さん、愛のために、永遠の幸福のために！』』『『どうしてあなたの手は血だらけなの？』』『『私の手が血だらけだつて？　私のものよ。お前さんの處の犬を突き殺したのさ、遲く行つたので餘り吠えたからね、さあ、お出で！』』

「私たちは、再び駈けつゞけて行きました。私たちは途で父の馬を見ましたわ、馬勒をはづして既から駈け出して來たのでした、やつぱり燒けたくはなかつたんですのね。『私と一緒にこれにお乘り、カーチャ、神樣が助けて下さる。』私は默つてゐました。『いやかね？　私は異

教徒ではない、私は不逞な邪教徒ではない、さア、もし望むなら私は自分で十字を切つて見せる。』さうしてあの人は十字の印しをしました。私は、馬に乘つてあの人にとりついたまゝ、あの人の胸の上で、何もかも忘れてしまひました。まるで夢の中に居たやうでしたの。そして、眼が覺めた時には、私たちが廣い廣い河のそばに立つてゐるのを私は見ました。あの人は馬から降りて、私を降ろして、それからボートの隱されてゐた蘆の茂みの處へ出掛けて行きました。私たちははひつて行きました。『さア、左樣なら、いゝ馬よ、新しい主人の處へ行け、古い主人はお前をすつかり見放してるんだ！』私は、父の馬の處へ駈けて行つて、お別れに暖かく抱いてやりましたの。それから、私たちは乘り込みました。あの人が櫂をとりました。さうしてまたゝく間に私たちは岸から見えないところへ行つてしまつたのです。そして、岸邊の方が見えなくなつてしまふとあの人は、櫂をおいて私を見、自分の周圍を眺めました、どこもかも水ばかりでした。

「『萬歲！』とあの人は言ひました。『荒れ狂ふ母なる河よ、爾は神の人々に飮物を與へ私に食物を與へる！　話せ、爾は私が行つてしまつた間に、私の物品を守つてゐたのか、私の品物を安全にしてゐるのか？』私は、默つて坐つて、胸に眼を落してゐました、私の顏はほてりと同時に恥かしさで燃えてゐました。さうして彼は——『爾はすべてをとることを喜ぶ、荒れ狂ふ、飽くことを知らぬ河よ、たゞ私をして我が誓を保たしめよ、我が貴き眞珠を愛せしめよ！　止めよ、しかし唯だ一語、美しい娘よ、嵐の中に日光の光線を送れ、暗黑の夜を光を以て吹き散らせ！』

「あの人は言ひながら笑ひました。あの人の心臟は燃えてゐたのです。しかし私は、恥かしさの爲めに、あの人の愚弄を忍ぶことは出來ませんでした。私は一語言ひたかつたのですが、恐れてゐました、そして無言で坐つてゐました。『よし、そんなら、それでいゝさ！』とあの人は、私の臆病な考へに答へました、あの人はまるで悲しんでゐるやうに言ひました。悲しみがあの人の上にやつて來たやうでもありました。『つまり人は暴力では何もとることは出來ない。お前を神樣が守つて下さるように。お前は、高慢な者だ、愛する者よ、私の美しい娘よ！　お前が私を嫌つてることは餘程ひどいやうだ、それでも私がお前の澁みとほつた眼の中に愛を見出さないのか！』私は聽いてゐましたが、憎惡にとりつかれました。憎惡と愛とにとりつかれたのです。私は私の心に刃を被せました。私は言ひました。『喜んでか、喜んでではないか知りませんが、あなたは私の處へ來ました。それを知ることは私に關することではなく、暗の夜にその處女の室を辱かしめ、その魂を致命的な罪のために賣り、さうしてその狂つた心を責めることの出來なかつた他の無感覺な、恥ぢ知らずな娘に關することで

す。そしてそれを知ることは私の悲歎の涙のために妨げられた。彼女は、息をつき、その
を自慢にし、處女の心を嘲笑する人のためなのです、そして泥棒のやうに他人の恐れ
う泳へきれなくなつてしまひました。私は泣きました……。あの人は何にも言はずに私を見
てゐました。それで私は木の葉のやうに慄へてゐたのでした。『私の言ふことを聽きなさい。』
とあの人は言ひました。『美しい娘さん。』そしてあの人の眼は異樣に輝きました。『私の言ふ
言葉は無益なことではない。私は貴女に嚴肅な誓ひをする。貴女が私に與へてくれた丈け
の幸福丈け、それ丈け私は紳士とならう。そしてもしどうしてもお前が私を愛さないならば
——言ふな、一語も言ふな、煩はすな。だがだゞお前の眞黑な眉を一寸動かしてくれ、お前
の眞黑な眼を向けてくれ、ほんの一寸でもお前の小さな指を動かしてくれ、さうすれば私は
お前の愛を黃金の自由と共に返してやる氣だ。たゞ、高慢な不遜な美しい者よ、その時には
私の生活も終りとなるだらう。』そしてその時私は、體中であの人の言葉を嘲笑したのでし
た……。」

此處に於いてカテリーナの話は、深い感激のために妨げられた。彼女は、息をつき、その
新しい幻影に對つて微笑した。そしてつゞけようと思つてゐたのであつた。が、突然彼女の
輝ける眼は彼女をぢつと見詰めてゐたオルディノフの熱病的な凝視に出會つた。彼女はびつ

くりして、何か言はうとしてゐた。が彼女の顏には血が漲つてゐた……。彼女は顏を兩手に
隱して、氣を失つたやうに枕の上に倒れてしまつた。オルディノフは、全く震へてゐた！　苦
しい感情、忍び難い譯の分らない動搖が彼の血管中を毒の如く駈け廻つてゐた、そしてそれ
はカテリーナの話の一語々々によつて一層增大した。絶望的な慕はしい貪るやうなそして泳
へきれない情熱が彼の幻像の中に起り、彼の感情を苦しめた。けれどもそれと同時に彼の心
は、屑一層苦しい無限な悲哀によつて壓迫されるのであつた。時々彼は、カテリーナを默ら
せようとして叫びたくて堪らなくなつた、彼女の足許に身を投げ出したくなつた、そして、
彼の以前の愛の苦しみを、以前の純潔な疑ふべからざる憧憬を返して貰ふやうに、涙を以て
彼女に懇願したかつた。そして彼は、長い間彼の頰の上で乾いてゐた涙を後悔した。彼の心
には疼痛があつた。それは熱のために苦しく抑壓され彼の苦しみ惱める魂に、涙の救ひを與
へることが出來ないものであつた。彼は、カテリーナが彼を呼んでゐた事を知らなかつた。
そして彼の愛は、哀れな女を興奮させた所の感情から脅かされてゐた。その時彼は自分の情
熱を呪つた。それは彼を窒息させた、彼を疲憊させた、そして彼は、恰も血液の代りに鎔か
された鉛が自分の血管の中を走つてゐたやうな心持がしたのであつた。
「あゝ！　それは私の悲しみではありませんのよ、」とカテリーナは突然に頭をあげながら

言つた。「私がたつた今あなたに話したことは、私の悲しみではないのよ。」彼女は或る唐突な新しい感情から銅の如く鳴る聲でつゞけた。けれども彼女の心は、秘密な流されざる涙で引裂かれてゐた。「それは私の悲しみではありません、私の苦しみではありません、私の恐れではありません！　私はこの世で他には母を決して持たないのに、私は自分の母のためにどんな、どんな世話をしたのでせう！　私は、母が最後の恐ろしい時に私を呪つたことをどう思つてゐるのでせう？　私は、私の古い黄金時代を、私の暖かい部屋を、私の處女らしい自由をどうしようと欲したのでせう？　私が私自身を悪い人に賣り、私の魂を破壊者に委ねたといふことを私はどう思つてゐるのでせう？　幸福のために私が許され難い罪を侵したといふことをどう思つてゐるのでせう？　あゝ、それは私の悲しみではありませんの、その中で私の破滅したことは大きなことですけれど！　しかし私にとつて苦しいことは、そして私の心を引裂くことは、私があの人の恥知らずな奴隷だといふことです。私の恥と不名譽とが私にとつては貴いといふことです、私は恥知らずですけれど、しかし、私の悲しみを喜びか幸福でもあつたやうに思ひ出すことが、私の貪慾な心にとつては貴いのです。それが私の悲しみなのですわ、その中には何の力もありません、そして私の悪いことに對する何の怒りもないのです！……」

哀れなる者は、息をするために喘ぎ、そして痙攣的なヒステリカルな歔欷が、彼女の言葉を途切らし、彼女の熱い疲れた呼吸がその唇を乾かし、彼女の胸は高まつたり沈んだりし、そして彼女の眼は理解し難い怒りで輝くのであつた。けれども彼女の顔は、その時にはそのやうな魅力を以て光を放ち、凡ゆる線、凡ゆる筋肉がそのやうな熱烈な感情の汎濫を以てそのやうな堪らない信じ難い美を以て震へてゐたので、オルディノフの陰氣な考へは忽ちに消失し、彼の魂の内なる純粋な悲しみは默し切つたのであつた。さうして彼の心は燃えて彼女の心を壓迫し、狂へる情緒の中に夢中にさせ、その同じ嵐、その同じ無限な情熱の迸出と調子を合せて鼓動し、而もそれが爲めに氣を失ふ程であつた。カテリーナは、オルディノフの惱んでゐる眼に出會つて微笑した。そこで彼の心は二重な火を以て燃やされた。彼は、自分が何をしてゐたのか殆んど知らなかつた。

「許して下さい、僕を憐れんで下さい、」彼は、自分の震へる聲を抑へながら、彼女の方へ身を屈めながら、彼女の肩に手を凭せ、彼女の眼に近づいて見入りながら、私語いた。非常に近寄つたので二人の呼吸は一つに混合してゐた。「貴女は僕を殺さうとしてゐるんだ。僕には貴女の悲しみは解らない、僕の精神はかき亂されてゐる……。貴女の心が涙を流してゐるそのことが僕にとつて何でせう！　どうしたいのか言つて下さい——　僕はそれをします。僕と

一緒にいらつしやい、行きませう、僕を殺さないで下さい、僕を殺さないで下さい！……」

カテリーナは、身動きもしずに彼を見詰めてゐた。彼女は、彼を妨げて彼の手をとらうと欲した。何か言はうとした、が言葉を見出すことが出來なかつた。不可思議な微笑が彼女の脣に浮んだ、恰もその微笑の中から笑ひが破れ出ようとしてゐたかのやうであつた。

「でも、私はすつかりあなたにお話ししたのではありませんのよ。」彼女は、たうとう弱々しい聲で言つた。「たゞ私の話を聽いて下さい、私の話を熱い心を聽いて下さいな？　あなたは妹の話に耳を傾けて下さいな。あなたは、妹の悲しみをまだほんの少ししか知つてはいらつしやらないのです。私があの人と一年の間をどんな風に暮してゐたか、お話ししようと思ふんですけれど、出來ませんのよ……一年は經ちました。あの人は仲間の者と一緒に河を下つて行つてしまひました。さうして、私は家であの人を待つてゐたあの人が母と呼んでゐた人と一緒に殘されました。私は、一月もあの人を待つてゐました。そのうちに私は或る若い商人と出會ひました。そして私はその人をちらと見るとすぐ自分の黄金時代が過ぎ去つたと考へたのでした。『可愛い〳〵妹よ。』とその人は二語も話してから言ひました。『僕はアリーシャです、貴女と許嫁にきめられてゐた。老人達が我々を子供の時許嫁にしたのです。貴女は僕を忘れてしまつたでせう——考へ出してゐるんですよ。』で、皆はあなたの地方では私の事を何と言つてまして？』『人々の雜談による と、貴女は不名譽な事をして、處女らしい謹しみを忘れて、盜賊人殺しと友達になつた、と言つてます。』とアリーシャは笑ひ乍ら言ひました。『ではあなたは私の事を何と言つてらつしやるの？』『僕が此處に來た時には澤山言はうと思つてたのでした。』——そしてその人の心は困惑してゐたのでした。『澤山言はうとしてたのでしたが、貴女を見た今では、僕の心は僕の中に死んでしまひました。貴女は僕を殺しました。』とその人は言ひました。『僕の魂も買つて下さい、とつて下さい。貴女は僕の心を、僕の愛を嘲笑するでせうがね、美しいお嬢さん。僕は今では孤兒なのです、自分が自分の主人です。そして僕の魂は僕自身のもので他の人のものではない。僕はそれを他人に賣りはしません、彼女の記憶を消してしまつた誰かのやうに。その心を買つたつて十分ではない、僕は何物の爲めにもそれを與へはしない、そして、これがい〳〵取引だといふことは明かなことです。』私は笑ひました。そして一度ならず、二度ならずその人は私に話しました。まる一月その人は其處に滯在してゐて、彼の商賣を止めて、一緒に居た人々を見棄てゝ全く獨りになつてしまひました。彼の淋しい涙が私は氣の毒でしたわ。そこで私は或る朝その人に言ひました。『アリーシャ、夜が來たら港を下り

て私を待つてゐて下さい。私、あなたの許へ一緒に行きますわ。私は自分の生活に倦き〳〵してゐるのです、淋しいのです。』それから夜が来ました。私は包みを縛りました。そして私の魂は痛んで私の中で働いてゐました。どうでせう、私の主人が一語も言はず、警告もしずにはひつて来たのです。『今晩は、我々は行かう。河は嵐になるだらうが時間は待つてくれはしない。』私はあの人に従いて行きました。私たちは河まで来ました。あの人の仲間の處までは遠いのでした。見ますとボートが一艘と、私たちの知つてゐる人が丁度誰かを待つてるやうにその中で漕いでゐました。『今晩は、アリ■ーシャ。神様がお助け下さるぜ。だが、お前さんは港で遅れたのかね？　お前さんの船へ急いでゐるのかね？　私を載せて漕いでくれ、い〳〵人よ、女も一緒にね、私たちの仲間の處へ、私たちの場所へ。私はボートを返してしまつたんだ、それに私は泳ぎを知らないんだ。』『おはひりなさい。』とアリ■ーシャが言ひました。さうして彼の聲を聞いた時私の魂全體は氣を失つてしまつたのです。『奥さんと一緒におはひりなさい、風はみんなに吹くんだ。だが僕の家には貴女のはひる餘地もあると思ひますよ。』私達ははひりました。眞暗な晩でした、星は隠れ、風は猛り、浪は高く上り、さうして私たちは岸から一哩ほど漕ぎ出しました——三人共全く默り込んでゐました。

『嵐だ。』と私の主人が言ひました。『而も嵐といふ奴は、い〳〵ことの前兆だつた例はないん

だ！　私はこれまでこの河で今荒れてるやうなこんな嵐は見たこともない！　こんなボートではとても堪らない、三人なんて持つてくことは出來やしない！』『駄目だ、それや出來ないこつた。』とアリ■ーシャが答へました。『それで、我々のうち一人が優勢なものと成つて行くらしい。』と言ふのですが、彼の聲は琴の絃のやうに震へてゐました。『さうだ、アリ■ーシャ、私はお前さんが小さな子供だつた時を知つてゐる。お前さんの父は私の友達だつた、私たちはお互ひに食物も食べ合つたのだ——さア、どうだね、アリ■ーシャ、お前さんボートなしで岸まで行くことが出來るかね、それとも犬死をするか、命を失ふのかね？』『僕には行けない。そしてあなたも、もし水を飲むことがあなたの運命ならば岸まで行けますか、行けませんか？』『行けない、それは私の精神の終りだ。私には嵐の河を持ちこたへることは出來ない！　お聽き、カテリーナ、私の貴い眞珠よ！　私はこんな晩を覺えてゐるが、あの時には浪は揺れてはゐなかつた、星は閃いてゐた、それに月が輝いてゐた……。私はたゞ訊きたいのだ、お前は忘れてしまつたかね？』『覺えてゐます。』と私は言ひました。『では、それを忘れなかつたなら、それなら、勇氣のある男が、美しい娘に彼女の自由を愛せざる者からとり返すと言つた時の約束も忘れてはゐないのだらう——え〳〵？』『え〳〵、それも忘れはしません。』と私は言ひましたが、生きてるといふよりは死んでるやうな氣持でしたわ。『あ〳〵、お前

は忘れてゐない！　さア、今私らはボートの中で困難に逢つてゐる。我々のうちの一人にその最後の時間が來るのではないのか？　さあ、言つてくれ、私のものよ、言つてくれ、私の可愛いゝ者、鳩のやうにお前の優しい言葉を我々に話してくれ……』」

「その時、私は私の言葉を話しませんでしたのよ。」とカテリーナは、眞蒼になりながら囁いた……。

「カテリーナ！」叫れたがらんどうの聲が彼等の上に鳴り響いた。オルディノフは飛び上つた。戸口にはミューリンが立つてゐた。彼は僅かに毛皮の襤褸を被て死の如く蒼ざめてゐた。そして彼は殆んど無感覺な眼で彼等を見詰めてゐた。カテリーナは、次第々々に蒼くなつて行つた。そして彼女も亦、茫然としてしまつたやうに、彼をぢいつと見詰めてゐた。「こつちへお出で、カテリーナ。」と病人は、やつと聞える位の聲で囁いて、部屋から出て行つた。カテリーナは、まだぢいつと空を見詰めてゐた、丁度老人がまだ彼女の前に立つてゐたかのやうに。けれども突然、彼女の蒼ざめた頰には血の氣がサツと差して來て、それから寢床からゆつくりと立ち上つた。オルディノフは、最初に會つた時のことを思ひ出した。

「では、明日までね、私の悲しみ！」彼女は不思議な笑ひ方をして言つた。「明日までね！私の止めた處を覺えてゐて下さいね。『二人のうちから選ぶのだ、どつちがお前にとつて貴いか、貴くないか、美しい娘よ！』覺えられて？　一晩お待ちになれて？」彼女は、彼の肩に手をおいて優しく彼を眺めながら繰り返した。

「カテリーナ、行つてはいけない、貴女は滅びてしまつてはいけない！　あれは氣違ひだ！」オルディノフは、彼女のために震へながら囁いた。

「カテリーナ！」彼は劇壁の向うから呼ぶのを聞いた。

「何ですつて？　あの人が私を殺すですつて？　恐いことはないわ！」カテリーナは、笑ひながら答へた。「お休みなさい、私の貴い心臟！　私の暖い鳩、私の兄さん！」彼女は、優しく彼の頭を彼女の胸に押し當てながら言つた。而も涙は彼女の顔を濡らしてゐた。「これが私の最後の涙ですよ。悲しみを振り棄てゝしまつてお休みなさいね、可愛いゝ方、明日は喜びのためにお眼覺めなさるように。」そして彼女は情熱的に彼に接吻した。

「カテリーナ、カテリーナ！」オルディノフは、彼女の前に膝を折つて倒れながら、そして彼女を止めようとしながら囁いた。「カテリーナ！」

彼女は、振り向いて彼に頷いた、微笑みながら。そして部屋から出て行つた。オルディノフは、彼女がミューリンの處へはひつて行くのを聞いた。彼は息をついて、耳を傾けてゐた。が、それからは物音は聞えなかつた。老人は默つてゐたのだ、それとも再び無意識になつて

るのかも知れない……。彼は彼女の處へ出掛けて行つたかも知れなかつたが、彼の足はよろよろした、……彼は疲れ果てゝ寢床の上に倒れた……。

二

長い間彼は、眼を覺ましたのが何時頃だつたか見出すことが出來なかつた。夜明の薄暗だつたのか、夕の黄昏だつたのか、彼の部屋の中はまだ暗かつた。彼は、自分がどの位眠つてゐたのか判然知ることが出來なかつた。しかし、その眠りは健康な睡眠ではなかつたことを感じてゐた、我に返ると彼は、丁度睡眠と昨夜の幻影とを振り落さうとするやうに、手で顔の上を拂つた。けれども床の上に立上らうとした時には、彼は恰も彼の全身が震へてゐたかのやうに感じた。そして、彼の疲れ果てた四肢は彼のいふことをきかないことを感じた。彼の頭は痛み、そしてぐる〳〵廻つてゐた。そして彼は交互に震へたり熱くなつたりした。記憶が、意識を持つて彼に甦つて來た、そして忽ちにその記憶の中で前夜のすべての事を生活し通した時彼の心は震へた。彼の心臟は彼の考へに應じて激しく打ち、彼の感覺は燃え新らたにされた、それは丁度カテリーナが行つてしまつてからは一晩も經つてゐるのではなく、長い時が經つてゐるのではなく、ほんの一瞬間過ぎた許りだつたかのやうであつた。彼は、自分の眼がまだ涙に濡れてゐるやうな氣がしてゐた——それとも、それは新たなものだつたのか、彼の燃ゆる心から泉のやうに迸り出た新しい涙だつたのだらうか？　そして、言ふも不思議な事だが、彼の苦惱は彼にとつては快くさへあつた。尤も彼はそんな激しい感情を二度と忍ぶ事は出來ない事を微かにではあるが、全く感じてはゐたのだが。彼が殆んど死を意識した瞬間があつた、そして喜ばしい客としてそれを歡迎しようとしてゐた。彼の感覺はひどく緊張し、彼の熱情は眼覺めると同時に非常な激しさを以て浪立ち、非常な有頂天の狀態が彼の魂を包んだ。それが爲めにその激しさに活氣づけられた生命は今にも破れ、ばら〳〵になり、一瞬間揺めいたかと思ふと永遠に消滅してしまはうとしてゐるやうに思はれた。殆んどそれと同時に、まるで彼の苦惱に答ふる如く、彼の震へる心に答ふる如く、聞き覺えのある軟かな銀のやうなカテリーナの聲が鳴り響いた——歡びの時、靜寂なる幸福の時に人間の魂に知られたるかの内的音樂のやうに。彼のすぐそばで、殆んど彼の枕の上で、歌が始まつた、最初は軟かにそして憂鬱に……彼女の聲は、歌そのものの中へ隱れるやうに唐突に消えたり、悲しめる心の中に絶望的に匿はれたその不滿な壓迫された欲望の苦しみの上を優しく歌ひ慰めたりし乍ら、或は聲高くなり或は低く沈んだ。すると又それは鶯のやうな震へ聲のうちに流れ込み、そして抑へ難い情熱に震へたり熱したりし乍ら、愛の祝福の最初の瞬間のやうな完全なる有頂天の海、偉大なる無限の響へと溶け込んで行くのであつた。

オルディノフは、その言葉をも識別した。その言葉は單純な眞實なもので、久しい以前から、直接な靜かな純粹な瞭然とした感情を以て組立てられてゐたものであつたが、彼はそれを忘れてゐた、彼はその響きのみを聞いた。その歌の單純な可愛い〳〵詩句のうちからは、他の言葉が閃いた。それは、彼の胸を充たしてゐた凡ゆる憧憬の情を反響した理解し得ないであつた。理解し得なかつたとはいへ、そのた彼の熱情の最も神秘な微妙さに相應ずるものであつた。そして或る時には彼の言葉は、それに就いての十分なる意識を以て判然と彼に反響した。今度は彼は、それの束縛を破りながら、そして解放された愛の無限なる大海の中へ生々と自由に飛び込んで行く所の意志の歡びと精神の歡びとを聞いた。それから今度は彼は、女の顏を一目見た時の芳香ある羞恥、祈り、涙、神祕的なおづ〳〵した囁きなどを伴ふ愛人の最初の誓ひを聞いた。次には鳴り響くやうに笑ひながらその醉ひしれた眼を自分の周圍に向けてゐる、誇らしげなそしてその力を喜んでゐる、面を表はした飾り氣のないバッカス信者の情熱を聞いた……。

オルディノフは、歌の終るのを待ちきれないで、寢床から立ち上つた。歌は忽ち止んだ。

「お早うも御機嫌ようももう濟みましたわ、可愛い〳〵方、」カテリーナの聲が鳴り渡つた。「あなたには今晩はですわね、起きて、私たちの仲間入をなさいな。お起きになつて快活になさいな。私たちはあなたを待つてゐるのよ。私と主人とはね、二人共い〳〵人間ですのよ、あなたのお好きな召使ですわ。憎しみなんぞは愛で消滅させてお終ひなさいな、あなたのお心がまだ怨んでいらつしやるのならばね。友達らしい言葉をかけて下さいな！」……

オルディノフは、彼女から最初に呼びかけられた時既に彼の部屋を出てゐた、そして自分が主人の寢室へはひらうとしてゐたことを殆んど氣が附かなかつた。戸は、彼の前に開かれてゐた、そして太陽のやうに輝いた彼の不思議な女主人の黃金の微笑が、彼の上に閃いた。その瞬間には、彼は彼女の他には誰も見なかつた、聞かなかつた。一瞬にして彼の全生命、彼の全歡喜は、彼の心の中のたつた一つのことのうちへ溶け込んで行つた——彼のカテリーナの輝ける影像（イメージ）の中へ。

「夜明が二度通り過ぎましたのよ、」と彼女はその手を彼に與へながら言つた。「私たちがさよならを言つてから。二つ目が今過ぎかゝつてるんですわ——窓から見て御覽なさい。處女の魂の中の二つの夜明のやうにね。」カテリーナは、笑ひながら附加へた。「最初その淋しい處女らしい心がその胸の中で物語る時、その最初の羞しさで顏を赤くするのが一つ。それからもう一つは、處女がその最初の羞しさを忘れた時、火のやうに燃えてその處女らしい心を窒息させて、さうしてその顏に眞赤な血を走らせるのですわね……。さあ、私たちの家へい

らつしやい。善いお若い方！　どうしてあなたは戸口に立つてらしやるの？　あなたに名譽と愛のありますように、さうして主人から宜しく申しましたのよ！」

鳴り響く音樂のやうに笑ひながら、彼女はオルディノフの手をとつて部屋の中へ連れて行つた。彼の心は臆病に沈んだ。彼の胸の中に怒り狂つてゐた凡ゆる熱、凡ゆる火はまたゝくまに消滅し消え去つた。そして暫くの間彼は混亂して眼を落した、そして彼女を見るのが恐ろしかつた。彼は、自分の心が彼女の燃える眼を堪へきれなかつた程に、彼女が素晴しく美しかつたことを感じた。彼は、今までにこんなカテリーナを決して見たことはなかつた。初めて笑ひと樂しさとが彼女の顏の上に閃いて、その黒い睫毛の上から悲しみに充ちた淚を乾かしてゐた。彼の手は彼女の手の中で震へてゐた。そして若しも彼が眼をあげたならば、カテリーナが勝ち誇つた微笑を浮べて、混亂と情熱とに曇つてゐる彼女の顏をその透明な眼でぢいつと見据ゑてゐたのを彼は見たであらう。

「お起きなさいよ、お爺さん。」彼女は、たうとう眼覺めたやうにさう言つた。「私たちのお客さんに歡迎の言葉をおつしやいな、兄弟のやうなお客さんですよ！　お起きなさいよ、高慢な意地つ張りのお爺さん、お起きなさい、さアア、あなたのお客さんの白い手をとつて、テーブルに坐らせてお上げなさいね。」

オルディノフは眼をあげた。そして彼はやつとその時、我に返つたかのやうであつた。その時やつと彼はミューリンのことを考へた。死の近づいた爲めにかすんでゐるやうに見える老人の眼は、ぢいつと彼を見詰めてゐた。そこで心に痛みを感じながら彼は、此前にもその眼が今のやうに苦惱と怒りとを以て狹められた黒い垂れ下つた額から、自分に向つてぴかぴかと輝いてゐたことを思ひ出した。彼の頭の中はいくらか眩暈を感じてゐた。彼は邊を見廻した。そして其時やつとすべての事を明確に判然と知つた。ミューリンはまだ寢床に横はつてゐた。が、彼は半ば著物を著てゐた、そしてその朝にはもう起きて出掛けたのであつた。前のやうに彼は赤い布をその頸に卷きつけてゐて、足にはスリッパを履いてゐた。彼の發作は確かに終つたのだが、その顏丈けはまだ恐ろしく眞蒼で黄色くなつてゐた。カテリーナは彼の寢床のそばにゐた、彼女の手はテーブルに凭れ、熱心に彼等二人を見戍つてゐた。けれども歡迎の微笑は彼女の顏を去らなかつた。あらゆる事が、彼女からの相圖でなされてゐたかのやうに思はれた。

「さうだー　あなただ。」とミューリンは、起き上つて寢床の上に坐りながら言つた。「あなたはわしの處のお泊り客だ。御免下さい、あなた、先達わしは罪を犯した、あなたに惡いことをした、全く知らずに、鐵砲で惡戲をして。あなたも矢張り重い病氣に罹つてゐなさつたと

いふことが誰に分りませう？　時々わしにはあれが起りますので。」彼は、顔をしかめて無意識にオルディノフから眼を外しながら嗄れた苦しげな聲で附け加へた。「わしの苦しみは夜中に門を叩かずにはひつて來る盜賊のやうな工合に起るのでしてな！　この間も、わしはもう少しで彼女の胸にナイフを突刺すところでした……」彼は、カテリーナの方へ頷いてみせながら、言つた。「わしは病氣です、發作が起つてわしを捉へる——だが、もうよい。お坐りなさい——あなたはわしらの客になりなさるでせう。」

オルディノフは、なほも激しく彼を見詰めてゐた。

「お坐りなさい、お坐りなさい！」と老人は堪らなさうに叫んだ。「お坐りなさい、それを彼女が喜ぶならば！　するとあなた方は兄妹だ、同じ母親から生れた！　あなた方は戀人同志のやうに互ひに好き合つてる！」

オルディノフは坐つた。

「ねえ、あなたは何といふ美しい妹を持たれたのでせう。」と老人は笑ひながら續けた。そして彼は白い全く健全な二筋の齒並を表した。「お互ひに好き合ひなさい、わしの愛する人たち。あなたの妹は綺麗ですかね、あなた？　話して下さい、答へて下さい！　さア、彼女の頰がどの樣に燃えてゐるか、御覽なさい。さあ、邊りを御覽なさい、彼女の美を全世界に向つて賞讃して歌ひなさい、あなたの心が彼女のために痛んでゐるのを見せて下さい。」

オルディノフは顏を顰めた、そして眼を落してゐた老人を腹立たしげに眺めた。盲目的な怒りがオルディノフの心中に浪立つた。或る動物的本能によつて彼は、自分の近くに不倶戴天の敵を感じた。彼は、自分に何事が起つたのかを理解することが出來なかつた。彼の理解は彼に仕へることを拒んだ。

「見ちやいけません。」彼のうしろで或る聲が言つた。

オルディノフは邊りを見廻した。

「見ちやいけません、見ちやいけません、私、言つて置きますがね、惡魔があなたを誘惑するならば、あなたの愛人に憐れみを垂れて下さい。」カテリーナは、笑ひながら言つた。そして突然にうしろからその兩手で彼の眼を隱した。それから直ぐ手を放して、今度はその手で彼女自身の顏を隱した。けれども彼女の顏色は、その指の間から表はされてゐるやうに思はれた。彼女は、その手をどけて、まだ火のやうに燃えながら、彼等の笑ひとさゞめくやうな眼に出會つても晴やかにそして身震ひ一つしずにゐようと試みた。しかし二人共默つて彼女を眺めてゐた——オルディノフは戀の痲醉によつてまるでこんな恐ろしい美が彼の心を繋いだといふことは初めてであつたやうにだつたが老人は冷やかにそして注意深くであつた。

老人の眞蒼な顏には、その脣が靑くなつて、かすかに震へてゐたことのほかには、何物も見えなかつた。

カテリーナは、もう笑ひはしないで老人の處へ行つた、そして、本や紙やインクスタンドや、テーブルの上にあつたすべての物を整理し、それを皆窓閾の上に置き始めた。彼女の呼吸は速くそして不同だつた。そして彼女は時々まるで心臟が壓迫されでもするやうに、きつい息を引いた。彼女のふつくりした胸は海岸の波のやうに或は高まり或は沈んだ。彼女は眼を落した。そしてその眞黑な睫毛が輝いた頰の上で銳い針のやうに閃いてゐた……。

「處女なる女王。」と老人は言つた。

「僕の君主ー」とオルディノフは、全く震へながら囁いた。彼は、感覺を取戻したが、老人の眼が彼の上にあることを感じてゐた——その眼は一寸の間電光のやうに彼の上に閃いたのだが——貪婪な毒惡な冷たく輕蔑的なものであつた。オルディノフは、その席から立ち上らうと思つたのであつたが、或る見知らぬ者の力が彼の脚を拘束するやうに思はれた。彼は再び坐つてしまつた。折々彼は、現實とは思へないかのやうに自分の手を抓つた。彼は、まるで夢魔に息の根を止められてでもゐるやうな氣がした、そして彼の眼は憐れな狂熱の眠りのうちに、いまだに閉ぢられてゐたかのやうな氣がした。けれども、不思議にも彼は眼覺めよ

うとは欲しないのであつたー

カテリーナは、テーブルから古い布を取り去つて、それから箱を開いてその中から金色のそしで晴々した絹絲で刺繍のしてある贅澤なテーブル掛けをとり出し、そしてそれをテーブルの上に置いた。それから彼女は、戸棚から古風な祖先傳來らしい小箱をとり出して、テーブルの中央に置き、その中から銀の杯を三つ出した——一つは主人に、一つは客に、そして一つは彼女自身に。それから、莊重な、殆んど思ひに沈んでゐるやうな樣子で彼女は老人を眺め、客を眺めた。

「私たちのうち一人が、誰かに對して貴いとか貴くないとか言ふことがあるのでせうか、」と彼女は言つた。「もしか誰かが或る人に對して貴くないとしても、その人は私には貴いのです、だから私と一緒に私の杯も乾すでせう。あなた方二人は私には自分の兄弟のやうに貴いのですわ、愛と和合との爲めに私たち皆で飲みませうよ。」

「飲まう、そして酒の中へ暗い幻想を溺れさせようよ。」と改まつた聲で老人は言つた。「注いでくれ、カテリーナ。」

「あなたも私に注がせて下さつて？」とカテリーナは、オルディノフを眺めながら訊ねた。

オルディノフは、默つて彼の杯を差出した。

「待つてくれ！　若しも祕密と幻想とを持つ者があるならば、その者の希望は本當になるかも知れないのだ！」老人は、杯を擧げながらさう言つた。

皆は、杯をカチ合はせて、そして飲んだ。

「さあ、あなたと一緒に飲ませて下さいな、お爺さん。」とカテリーナは、主人の方へ向きながら言つた。「あなた方の心が私に對して深切ならば、私たちは飲みませう！　過去の幸福のために飲みませう、私たちの送つた年月に挨拶をしてやりませう、心から、そして愛を以て私たちの幸福を讃美しませう。あなた方の心が私に對して暖かなのならば、あなた方の杯を充たさせて下さい。」

「酒はお前には強い、わしの愛する者、だがお前はやつと脣を濡らす位のものだらう！」老人は、笑ひながら、そして再び彼の杯を差出しながら言つた。

「えゝ、私は啜るのよ、でもあなたは底までも飲むのね……どうしてお爺さんは陰氣なことをくよ〳〵考へて暮してゐるの、陰氣な考へは心を痛める丈けですわ！　考へることは悲しみを誘ふのよ、人は考へないでも幸福に生きられるのですよ、お飲りなさい、お爺さん。」と彼女は續けた。「あなたの考へを溺らせておしまひなさい。」

「お前の心の中には澤山な悲哀が醱酵してゐるに違ひない、お前自身がそんなにまでそれに對して身を守つてるところを見るとね！　そこでお前は早速それをお終ひにしたいのだな、わしの白い鳩。わしはお前と飲むよ、カーチャ！　そしてあなたも悲哀を持つておいでなのかな、あなた、もしお訊ねすることを許して貰へるなら？」

「もし僕が持つてるとすれば、僕は自分だけに保存して置きます。」オルディノフは、カテリーナの上をその眼でぢいつと見据ゑたまゝで呟いた。

「お聞きになつて、お爺さん？　長い間私は自分で知らなかつたのよ、思ひ出せなかつたの。でも時が來ましたわ、私はすべてを思ひ出し喚び起しましたわ。過ぎ去つたすべてのことを私は再び私の不滿な心の中で繰り返しましたの。」

「さうだ、誰でも若しその過去だけを覗き込み始めるとすれば、それは悲しいことだ、」と老人は夢みる樣に言つた。「過ぎ去つた事といふものは飲んで了つた酒のやうなものだ！　過去にはどんな幸福があるだらう？　上衣はすり切れる、するとうつちやられて了ふ。」

「人はその新しいのを持たなければなりませんわ。」カテリーナは作り笑ひをして調子を合せた。が、ダイアモンドのやうな二粒の大きな涙が、彼女の睫毛からは垂れかゝつてゐた。「人は、一分間の內に一生を生き消してしまふ事は出來ませんわ、それに少女の心は生活に渴いてゐるんですからね——それと足並を揃へて行くものは何にもないのだわ。お解りになつ

て、お爺さん？　まあ、私、あなたの杯を涙で埋めてしまひましたわ。」

「では、貴女はその悲哀で澤山の幸福を買つたのですか？」とオルディノフは言つた——そして彼の聲は感激で震へてゐた。

「してみると、あなたは寶物の幸福を澤山持つてゐなさる譯ですな、」と老人が答へた。「訊かれもせんのに口を入れなさるところを見れば。」そこで彼は、オルディノフを横着に眺めながら毒々しい音のない笑ひ方をした。

「私はちやんと持つてゐたのに何のために賣つてしまつたんでせう。」とカテリーナは、困惑したやうに、腹立たしげに響く聲で答へた。「或る人はそれを澤山だと思ひ、或る人はそれを少しだと思つてるんです。或る人はすべてを與へようと欲して何にもとらうとはしず、或る人は何にも約束しませんが、その素直な心がその人に從ふのですわ！　あなたは誰も非難しないでね、」彼女は、悲しげにオルディノフを眺めながらつゞけた。「或る人はこんな風で、又或る人はそれとは違つてゐます。さうして、まるで或る人はどうしてその心が誰かを慕つてゐるのかを知つたやうですわね！　あなたの杯をいつぱいになさいな、お爺さん。あなたの愛する娘の、あなたの大人しい柔順な奴隷の幸福のために、私が始めてあなたを知つた時私はそんなでしたからね。あなたの杯をお擧げなさい！」

「それはさうだらう！　がお前のもいつぱいにするがいゝ！」酒をとり乍ら老人は言つた。

「お待ちなさい、お爺さん！　飲むのはあとになさい、さうして先づ一語私たちは話さうぢやございませんか！……」

カテリーナは、テーブルの上に肘を突いて情熱的な燃やすやうな眼で老人をきつと見戍つた。變な決斷が彼女の眼には輝いてゐた。けれども凡ゆる彼女の動作は靜かであつた、彼女のしぐさは唐突で思ひがけなく敏捷(はや)かつた。彼女は、全く燒けかゝつてでもゐるやうだつた。そしてそれは驚くべき程であつた。けれども彼女の美は、その情熱と活氣とで增大して來た。彼女の速くなつた呼吸は、かすかにその鼻孔を脹らし、微笑で半ば開かれた脣から溢れ、それのために白い、眞珠のやうでもある二列の齒が露はれてゐた。彼女の胸は高まり、巻きついてゐる髮の毛は頭の周圍を三まはりして、無造作に左の耳の上に垂れ、そして燃えるやうな頰の一部を隱してゐた、彼女の顳顬には汗の玉が見えてゐた。

「私の運命を告げて下さい、お爺さん。運命を告げて下さい、私のお父さん、あなたの心を醉に溺らしてしまはない內に。さア、この白い掌(てのひら)がお役に立つでせう——人々があなたを魔法使と呼んでる事を虛言(うそ)にしないでね。あなたは本で研究なさつたのね、そして魔術はすつかり知つてるのね！　さア、お爺さん、私の憐れな運命をすつかり私に告げて下さい、たゞ

嘘は言はないやうに氣をつけて下さいよ！　さあ、あなたの知つてらつしやるまゝに私に告げて下さい――あなたの娘には幸福があるでせうか、それともあなたは娘を許さないでその上に悪い悲しみに充ちた運命を呼び下すでせうか？　私は自分の家として暖い隱家を持つでせうか、又は候鳥のやうに善良な人々の間に家を求める者――一生涯淋しい孤兒でゐるでせうか、それを話して下さい。私の敵は誰なのか、私のためには愛が準備されてゐるのか、私に對して誰が陰謀を企んでゐるのか、話して下さい。私の暖かな若い心臟は、その生活を孤獨の中に開いて終りまで弱り衰へてゐるのでせうか、それともその心臟は自分で相手を見附けて新しい悲しみが現れるまではそれと調子を合せて喜ばしく搏つのでせうか、それを話して下さい！　一度だけ私に話して下さいな、お爺さん、海を越え、森を越えて、どんな青空の中に、私の鷹は住んでるのか。さうして彼は、その相手を熱心に探してるのですか、彼は愛を以て待つてるのですか、そして私を可愛がるでせうか、彼はすぐ私に飽きてしまふでせうか、私を欺くでせうか欺かないでせうか、さうしてこれつきりですから、全く最後に私に話して下さい、お爺さん、私は氣持の悪い隅つこに坐つて陰氣な本を讀んであなたと一緒に時を過ごすことを欲してゐるのですか、そして何時私は、お爺さん、あなたに挨拶をするのでせう、永久にお別れをするのでせう、あなたのパンと鹽に對して、私に飲ませたり食べさせたりして下さつたことに對してお禮をいふのでせう？……ですが、よう御座んすか、すつかり本當のことを話して下さい、嘘はつかないで下さいですよ。」

時は來たのです、あなた自身を擁護するのです。

彼女の興奮は次第々々に大きくなつて、遂に最後の言葉に到つた、その時突然彼女の聲は感激のために破れたのであつた、丁度彼女の心が或る内的な嵐によつて持つて行かれてでもしまつたかの樣に。彼女の眼は閃き、彼女の上唇はかすかに震へた。一語々々の下に蛇の如く隱されてゐる憎惡に充ちた嘲弄が聞かれた、が併し彼女の笑のうちには涙の響があつた。彼女は、テーブル越しに老人の方へ身を屈めて、烈しい熱心さで彼の光なき眼の中を覗き込んでゐた。オルディノフは、彼女が語り終つた時その心臟が出し抜けに鼓動し始めるのを聞いた。彼は、彼女を眺めた時に有頂天のために叫び出した。そして腰掛けから立ち上りかけてゐた。けれども老人からの疾風のやうな時々の一瞥が、再び彼をその席に釘づけにした。輕蔑、嘲弄、堪らない怒りの不安、及びそれと同時に惡ごすい邪惡な好奇心、これらの奇妙にもつれ合つたものが、彼の時々ちらりとかすめる一瞥の中に輝いてゐた。それはその度毎にオルディノフを震へさせ、そして彼の心を苦惱と困惑と賴りない怒りとで充たせた。

考へ深く、そして或る種の悲しみに充ちた好奇心を以て、老人は、彼のカテリーナを眺め

た。彼の心は痛んだ、言葉は發しられた。しかし、彼の顏では眉毛一つ動かされなかつた。
彼は、彼女が語り終つた時には唯だ微笑した丈けだつた。
「お前は急いで澤山のことを知り度がるのだね、わしのいつぱい羽の生えた雛つ子さん、わしの羽搏きする小鳥よ！　それよりも、わしの深い杯にいつぱい注いでくれ！　さうして、先づ平和と惠みの心とのために、わしたちは飮まう。でなければ、わしは、誰かの黒い眼を通して、わしの豫言を、損ふかも知れん。偉大なのは惡魔だ！　罪は決して遠く離れてはゐないのだ！」
彼は、その杯を擧げて飮んだ。彼は飮めば飮む程益々蒼くなつて行つた。彼の眼は赤くなつた石炭のやうに燃えてゐた。その熱病のやうな光と、突然死のやうに青くなつた彼の顏色とは、明かに次の發作が迫つてゐた標であつた。酒は强かつたので、一杯を空にしてからは、オルディノフの視力は次第々々にかすんで來た。彼の狂熱的に燃えた血は最早堪へきれなくなつた。それは彼の心臟に突進して、苦しめ、そして彼の理性を曇らせた。彼の不安は、次第次第にはげしくなつて行つた。彼の增大する興奮を救はうとして、彼は自分が何をしてゐたかも知らずに自分の杯を充たして、再びそれを啜つてゐた。そこで、血液は尙更速かに彼の血管の中を走つた。彼は無我夢中になつてゐるやうであつた、そして極度にその注意を集めながら、彼はその不思議な主人と女主人との間に起つてゐたことを、やつとのことで辿ることが出來た。

老人は、非常な音を響かせて、その杯をテーブルに打ちつけた。
「いつぱいにしてくれ、カテリーナ！」と彼は叫んだ。「もう一度いつぱいにしてくれ、惡娘、緣までいつぱいにするんだ！　老人を平和にしろ、そしてあれと關係を絕つんだ！　それはさうと、もつと注いでくれ、わしの美しい者よ！　さあ一緒に飮まう！　何だつてお前はそれん許りしか飮まないのだ？　それともわしの眼が自分を欺いてるのかな？……」
カテリーナは、何とか言つて彼に答へた。併し彼女が何と言つたか、オルディノフには全く解らなかつた。老人は彼女を言ひ終らせはしなかつた。老人は、彼の胸の上に重くのしかかつてゐる物を、全く堪へきれないやうに、彼女の手を捉へた。彼の顏は眞蒼であつた、彼の眼は一寸の間かすんでゐたが、次には火のやうに燃えてゐた。彼の脣は震へて、白くなつた、そして不同な苦しみ惱む聲で（その聲の中には變な有頂天の閃きがあつた）彼は彼女に語つた——
「お前の小さな手を出せ、わしの美しい者よ！　お前の運命を告げさせてくれ。わしはすつかり本當のことを話さう。わしは、眞實に魔法使だ、お前の言つたことは間違つてはゐなか

つたよ、カテリーナ！　お前の黄金の心はわし獨りがその魔法使だと本當に言つた、そしてその眞理を隱すまいと言つたね、單純な娘らしい心！　たゞ、或る一つのことをお前は見てゐない、お前に智慧を敎へることは、わし、卽ち魔法使のつとめではない！　智慧は處女の要求するものではない、處女はすべての眞理を聞くが、而も知りはしないやうだ、理解しはしないやうに思はれる！　處女の心は涙の中に溶け込んでゐても、その頭は狡猾な蛇だ。處女は自分で發見するだらう、困難の間に自分の道を押し分けて通るだらう、自分の狡猾な意志を持ちつゞけて行くだらう！　處女は感覺によつて何かを得ることが出來る、そして感覺によつて得られない所では、美によつて眩惑させ、その眞黑な眼で男の心を蕩かすだらう——美は力を征服する、鐵のやうな心でさへきれ〳〵に裂き破られるのだ！　お前は憂愁と悲哀とを持つだらうか！　男の悲しみは重い！　だが、困難といふことは弱い心に對してではないのだ、困難は强い心と密接な友だちだ。それは私かに血の涙をそゝぐ、だが、善良な人々の處へ恥ぢ知らずな慰めを求めに行きはしない。少女よ、お前の憂愁は砂に押した印のやうなものだ——雨はそれを洗ひ去り、太陽はそれを乾かし、荒れる風はそれを擧げて吹き飛ばして了ふのだ。わしにもう少し話させてくれ、お前の運命を告げさせてくれ。誰がお前を戀ようとも、お前はその男の奴隷になるのだ、お前は自己の自由を自分で束縛するのだ、お前はお前自身を質に入れるのだ、そして取り戻さないだらう、お前にはいゝ具合の時に如何にして愛するのを止めようかといふことが解らない、お前が種を蒔くと、お前の破壞者が穗をすつかりつまんでしまふのだ！　わしの優しい子供よ、わしの小さな黃金の頭よ、お前はお前の眞珠のやうな涙をわしの杯に埋めたが、お前はそれ丈けで滿足することは出來なかつた——すぐにもお前は澤山涙を流す。お前は最早甘い言葉を出さなくなつた、そして、お前の悲しい生活を誇つてゐる！　だが、お前にとつてはそれを憂ふる必要はなかつたのだ——涙を、天上の露を！　それは利息がついてお前に戻つて來るのだ、お前の眞珠の涙が、殘忍な悲しみと不吉な幻想がお前の胸を噛む恐ろしい夜——その時にはその同じ涙の代りに他の涙がお前の暖かい心の上に滴るだらうが——暖かい涙ではなく鎔かされた鉛のやうな血の涙がね。それはお前の白い胸を血に變へるだらう、陰氣な日の始まる恐ろしい重苦しい朝まで、お前はその胸の血を注ぎながら小さな寢床の中でのたうち廻るのだ、そしてお前の新しい傷はもう一つの夜明けが來るまで直らないのだ。わしの杯をいつぱいにしてくれ、カテリーナ、もう一度いつぱいにしてくれ、わしの鳩よ、わしの賢明な助言のためにいつぱいにしてくれ、さうすればもう餘計なことを言ふ必要はないのだ。」彼の聲は次第に弱り震へて來た、彼の胸からは今にも獻欵が破れ出さうに思はれた。彼は酒を注いで、もう一杯をガブ〳〵と

飲み干した。それから彼は、その杯を再びテーブルの上へがちやりと置いた。彼のかすんだ眼は再び焰を以て輝き出した。

「あゝ！　お前が思ふ通りに生活するがいゝ！」彼は怒鳴つた。「過ぎ行くものは消え去り使ひ盡されたものだ。その重い杯をいつぱいにしてくれ、それをいつぱいにしてくれ、その肩から叛亂する頭を打つやうに、全精神がその爲めに死んでしまふように！　朝の來ない長い夜、わしに經帷衣を被せてくれ。そしてわしの記憶をすつかり失はせてくれ。醉ふといふことは過ぎ行くものだ、そして使ひ盡されるのだ。そこで商人の品物は、餘り長く貯へてあるので古びてしまひ、いくらにもならずにそれを渡してしまはなければならないのだ！　だが、その商人も自由意志でそれをその價値以下に賣つたのではあるまい。その敵の血が零され、罪無き者の血も流されたのだらう、で、おまけにその買手が彼の墮落した魂を棄てゝしまはなくてはならなかつたからだらう！　わしの杯をいつぱいにしてくれ、もう一度いつぱいにしてくれ、カテリーナ。」

けれども、その杯を持つた手は硬ばつてしまつたやうに思はれた、そして動かなかつた。彼の息づかひは骨が折れるやうで困難であつた、彼の頭は垂れてしまつた。最後に彼は、その光無き眼をオルディノフの上に結びつけてゐたが、その眼もしまひにはかすんで來た、そして彼の眼瞼は、鉛で作られてでもゐるやうに垂れ下つた。死の如き蒼白さが彼の顏を覆うた……。暫らくの間彼の脣は、まだ物を言はうとしてゐたやうにひきつり、震へてゐた——そして突然に大きな熱い涙がその睫毛の上に下つて來、落ちて、彼の蒼白い頰をゆるやかに走り下つた……。

オルディノフは最早堪へられなくなつた。彼は立ち上り、よろめきながら一歩前へ出てカテリーナの處へ行き、その手を摑んだ。けれども彼女は、彼に氣がつかないやうであつた、そして彼の方をちらとも見なかつた。まるで彼女は彼を認めなかつたやうに……。

彼女も亦、恰も或る者の考へが、或る者の集中された觀念が彼女を全く溶解してしまつたかのやうに、意識を失つてしまつたやうだつた。彼女は、眠つてゐる老人の胸の上に身を埋めて、彼の頸にその白い腕を捲きつけて、そして、まるで彼の上に釘づけにされたやうに、その熱に燃える眼で老人を見戍つてゐた。彼女は、オルディノフが自分の手をとつたことを感じてゐるやうではなかつた。やつと彼女は彼の方へ頭を向けて、引伸ばしたやうな探るやうな凝視を彼に注いだ。やつと彼女は解つたといふ風であつた、そして苦々しい驚いたやうな微笑が、弱りきつて、云はば苦しみに充ちて、彼女の脣に浮んだのであつた……。

「あつちへいらつしやい、あつちへいらつしやい。」と彼女は囁いた。「あなたは醉つぱらつ

て、それに意地悪だわ、あなたは私のお客さんぢやないわ……。」それから彼女は、再び老人の方へ向いて、その眼を彼の上にきつと釘づけにした。

彼女は、云はば彼が呼吸をする度毎にそれに見とれて、その眼で彼の眼を和らげてゐるかのやうに見えた。彼女は、自分の胸の非常な動悸を制へながら呼吸することを恐れてゐるやうであつた。そして、直ぐ様絶望的な、氣違ひじみた、そして留め度無き怒りがオルディノフの精神を捉へた程、彼女の顏には狂亂的な感歎があつたやうに彼女の手を摑みながら呼んだ。

「カテリーナ！　カテリーナ！」と彼は、不行跡でもあつたやうに彼女の手を摑みながら呼んだ。

苦しげな表情が彼女の顏を過ぎて通つた。彼女は、再び顏をあげたが、彼が殆んど自分の足で立つてゐられなかつた程の、非常に侮蔑的な嘲笑的な横柄さを以て彼を眺めた。それから彼女は眠つてゐる老人を指した、そして——凡ゆる彼の敵の嘲弄が彼女の眼の中へはひつて來たかのやうに、彼女は再び罵る決心をして、オルディノフをちらりと見た、その一瞥は彼の心に氷のやうな戰慄を送つたのであつた。

「どうしたんです？　あれは僕を殺すんでせうか？」とオルディノフは、激怒のために前後を辨へずに言つた。或る惡魔が、彼の耳許で、彼は彼女を理解した、と囁くやうに思はれた……

そして彼の全精神はカテリーナの固定觀念を嘲笑してゐた。

「僕の美よ、僕は貴女をあの商人から買ひます、もし貴女が、僕の魂を欲するならばね、恐がらないでもいゝ、あれは僕を殺しやしません！……」オルディノフの全存在を凍らせた所の凝り固まつた笑が、カテリーナの顏には殘つてゐた。その涯知らぬ皮肉は、彼の心を引裂いたのであつた。何を爲しつゝあるかも知らず、殆んど無意識に、彼は壁に凭りかゝつて、釘から、老人の贅澤な古風なナイフをとり下ろした。びつくりした樣子が、カテリーナの顏に現れるやうに見えた、が、それと同時に彼女の眼には、怒りと輕蔑とが同じ力を以て反映してゐた。オルディノフは、彼女を見て氣持が惡くなつた……彼は、まるで誰かが彼の狂亂せる手を無理に狂はせて推して來るやうな氣がした。彼はナイフをぬいた……カテリーナは、身動きもしずに息を殺して彼を見戍つた……。

彼は、老人をちらりと見た。

その瞬間に彼は、老人の一方の眼が開いて、笑ひながら彼を見てゐると思つた。二人の眼は出會つた。數分間オルディノフはぢいつと、彼を見詰めてゐた……と出し抜けに彼は、老人の顏全體が笑ひ出し、そして惡魔的な魂を寒からしめるやうな笑ひが、たうとう部屋中に鳴り渡つた、と思つた。或る陰險な暗黑な考へが彼の頭の中を蛇のやうに這ひ廻つた。

彼は震へた、ナイフは彼の手をすべつて床の上にがちやりと落ちた。カテリーナは、まるで忘却から、夢魔から、重苦しい動かざる幻想から覚めたかのやうに叫び聲を發した……。非常に蒼ざめた老人は、寢床からゆつくりと立ち上つて、腹立たしげにそのナイフを部屋の隅つこへ蹴遣つた。カテリーナは、眞蒼になつて、死んだやうに動かずに立つてゐた。彼女の眼瞼は閉ぢようとしてゐた、彼女の顏は、朦朧とした堪へ難い苦痛によつてひきつつてゐた。彼女はその手で顏を隱して、そして心臟を引ちぎつたやうな叫び聲と共に、殆んど息もつかずに老人の足許に打倒れた……。

「アリョーシャ、アリョーシャー」彼女の喘ぐ胸から破れ出た。

老人は、彼女をその力強い腕に捉へて、殆んど彼女を自分の胸の上で押しつぶしさうにした。けれども、彼女がその頭を彼の胸の上に押し隱した時、老人の顏に表はれた凡ゆる相貌は、オルディノフの全精神が恐れを以て壓迫された程、非常な露き出しの破廉恥な笑ひで動かされたのであつた。哀れな失戀に對する欺瞞、打算、冷たい嫉妬、深い暴虐、及び恐怖——彼がその笑ひの中に讀んだ所のものはそれであつた、それは破廉恥にもすべての假裝を投げ棄てたのであつた。

「彼女は發狂したぞー」と彼は、木の葉のやうに慄へながら囁いた。そして恐れのために無感覺になつて、その家から駈け出して行つた。

三

翌朝八時にオルディノフが、蒼ざめて動亂して、まだ昨日の興奮のために眼が眩んでゐたが、ヤロスラーフ・イリイーチの戸を開けた時、(何故だか言ふことは出來なかつたが、彼は彼に逢ひに出掛けたのであつた)彼は、その部屋の中にミューリンが居るのを見るとびつくりしてたじろいで、戸口の處に石の如く堅くなつて立つた。オルディノフ以上に蒼白くさへあつた老人は、殆んど立つてもゐられない程工合が惡いらしかつた。しかし彼は坐らうとはしなかつた。ヤロスラーフ・イリイーチは、その訪問をひどく喜んで坐るやうに彼に言つたのだが。ヤロスラーフ・イリイーチも亦、オルディノフを見るとびつくりして叫び出した。しかし殆んどすぐにその喜びは消え去つてしまつた、そして彼は、全く突然にテーブルとその次の椅子との間に中途半端に困りきつて追ひ詰められた。彼は何と言つたらいゝか、どうしたらいゝか、解らなかつたのは確かであつた、又、自分のパイプを吸つてゐたりすることの不適當も、こんな困難な瞬間に客を彼自身のしたいまゝにさせて置くことの非禮をも十分承知してゐた。さうして而も(彼の混亂はこれ程であつた)彼は全力を出して、實際或る種の熱中を以てパイプを吸ひつゞけてゐた。オルディノフは、たうとう部屋の中へはひつて來た。彼は、

ミューリンに對して慌しい一瞥を投げかけたが、老人の顏には或る表情が飛び廻つた、前日の毒惡な微笑にも似た或物が。それは今でもオルディノフを怒りのために震はせるものであつた。けれども、凡ゆる敵意は忽ち消えて、和らいでしまつた、そして老人の顏は、全く近づき難い差控へた態度を採つた。彼は、自分の下宿人に對して甚だ丁寧なお辭儀をした……。その光景を見て、オルディノフはやつと現實の感を得た。事件の狀態を熱心に理解しようとして彼は、不安になり始めて狼狽してゐたヤロスラーフ・イリイーチを烈しく見詰めた。

「はひり給へ、はひり給へ、」と遂に彼は言ひ出した。「はひり給へ、最も貴いヴシッリイ・ミハーイリチ、君に會ふ名譽を與へてくれ給へ、……このつまらないがらくたを皆ね……」ヤロスラーフ・イリイーチは、部屋の隅の方を指さして、眞紅の薔薇のやうに赤くなりながら言つた。彼の最も昂められた言葉までが自由を失ひ、間違つたので混亂し腹を立てゝ、椅子を部屋の眞中へひどい音をさせて持つて來た。

「僕は、君の邪魔をしたくないんだよ、ヤロスラーフ・イリイーチ、」とオルディノフは言つた。「二分間ばかり……僕は欲しいのだが……」

「いゝとも！　まるで、君は僕の邪魔をすることが出來たやうだね、ヴシッリイ・ミハーイリチ、だが、お茶を一杯出させてくれ給へ。やア、給仕……きつと、あなたも一杯飲むのを斷りはなさいませんね！」

ミューリンは、拒まないといふことを示して頷いた。

ヤロスラーフ・イリイーチは、はひつて來た召使に叫んだ、もう三杯を嚴めしく命じた、それからオルディノフのそばに坐つた。暫らくの間彼は、その頭を、ミューリンからオルディノフへ、又オルディノフからミューリンへといふ風に石膏細工の小猫のやうに左右に向けた。彼の位置はひどく不愉快なものであつた。彼は自分の非常にデリケートな考へでは、兎も角も一方のためには明からに何か言はうと欲してゐた。しかし凡ゆる彼の努力にも拘らず、彼は全く一言も發することが出來なかつた……。オルディノフも困惑してゐるやうであつた。兩方が同時に話し始めた瞬間もあつた……。ミューリンは、默つて珍らしさうに彼等二人を眺めながら、ゆるやかに口を開けて、齒をすつかり露はしてゐた……。

「僕は君に話しに來たのだ、」とオルディノフは出し拔けに言つた。「或る最も不快な事があつた爲めに、僕が今の下宿を越さなくてはならないことをね、そして……」

「へえ、何て妙なことだらう！」とヤロスラーフ・イリイーチは突然口を挿んだ。「白狀するが、僕はこの尊敬すべき老人が今朝君の意向に就いて話してくれた時全く驚かされたんだ。だが……」

「この人が君に話したつて。」オルディノフは驚いてミューリンを眺めながら言つた。

ミューリンは、その髯を撫でて、袖の中で笑つてゐた。

「さうだ。」とヤロスラーフ・イリイーチは答へた。「僕は間違つてたかも知れないがね。しかし僕は君のために敢へて言ふよ——僕は、名譽にかけて、この尊敬すべき老人の言葉には君を害ふやうなことは影もなかつたといふことを請負ふことが出來る……。」

此處でヤロスラーフ・イリイーチは顏を赧くした、そして努力して彼の感激を制へてゐた。ミューリンは、他の二人の男の狼狽を、心の滿足する限り樂しんでから、一步前へ出て來た。

「こんな鹽梅なのですよ、あなた。」と彼は、オルディノフに丁寧に會釋して始めた。「この方が、あなたの爲めに敢て少しばかり勞を取られたのです。あなたの見らるゝ通り、あなた御自身御承知でせうが——あの女主人とわし、卽ちわし共は、遠慮なくそして心から喜びませうし、且つわし共は敢て一言も言はねばならんことは無いでせうからな……だが、わしの暮し方は、あなた御自身御存じだ、御自身で見てゐられるんですからな、あなた——神樣は間違ひなくわし共を隱さずに永らへさされて下さる、その爲めにわし共は神の聖なる御心に祈つて居ります。それに、あなた、悲しむことはわしの爲めかどうかは、あなた御自身で御覽のことだ。」

此處に於いてミューリンは、再びその髯を袖で拭いた。

オルディノフは殆んど加減が惡くなつて來た。

「さう、さう、わしは自分でこの方のことをあなたに話しましたな、この方は病氣で、それがこの、"Malheur"（不運）なのですとな。わしは佛蘭西語で自分を表はしたいのですが、御免なさい、わしは全くわけなく佛蘭西語を話せませんので、つまり……」

「全くさうなのですよ、つまり……」

オルディノフとヤロスラーフ・イリイーチとは、互ひにその椅子の片側で一寸頷き合つた。そして二人共、その混亂を辯解的の笑ひで隱した。實際家のヤロスラーフ・イリイーチはすぐもとに復した。

「僕はこの正直な方にしつこく質問をかけてゐたのだ。」と彼は言ひ出した。「この方は、僕に話してゐたのだ、あの婦人の病氣は……」

此處で神經質なヤロスラーフ・イリイーチは多分、その顏に表はれたほんの少しの困惑を隱さうとしたのであらう、急いでミューリンを尋ねるやうに眺めた。

「左樣、わし共の家內の……」

女主人

洗錬されてゐるヤロスラーフ・イリイーチはそれ以上には迫らなかつた。

「その奥さんが、卽ち君のもとの女主人がだね、僕はどうしてか知らないんだが……しかしそら！　あの女は苦しんだ婦人だらう……あの女は君の邪魔をしてゐるといふんだ……君の勉強のね、そしてこの方は……君は或る大事なことを僕に隱してゐたね、ヴシッリイ・ミハーイリチ！」

「何だね？」

「鐵砲のことさ、」ヤロスラーフ・イリイーチは、その友だちらしい次中音で柔かに鳴る百萬分の一許りの非難を以て、その最も寛大な調子で殆んど囁くやうに言ひ出した。

「だが、」と彼は急いで附け加へた。「この人がそれに就いてはすつかり話して下さつた、そして、君は、この人の一時の君に對するいけないことを立派に振舞つて見ないふりをしてゐた。僕は誓ふが、この人の眼には涙が浮んでゐたよ。」

ヤロスラーフ・イリイーチは、再び赧くなつた。彼の眼は輝き、そして彼は感激のために椅子の中で身を置き替へた。

「わし、つまりわし共はな、あなた、つまり、なアあなた、わしは、きつと、それにわしの家内は、わし共の祈りの中であなたを思ひ出します。」とミューリンは、オルディノフに話しかけて、彼を見詰めながら始めた、その間ヤロスラーフ・イリイーチは、彼のいつもの動亂に襲はれてゐた。「で、あなたも御自身御承知のことだが、彼女は病氣で、馬鹿な女です。又わしの脚は殆んど自分を支へることも出來んのです……。」

「さうです、僕はそのつもりでゐるんです。」とオルディノフは堪らなくなつて言つた。「どうか、もう澤山ですから。僕はすぐ行かうとしてるんです……。」

「いや、つまりな、あなた、わし共はあなたの御深切に對して大變感謝しとります。」（ミューリンは非常に丁寧な御辭儀を一つした）「わしが御話ししようとしたのはそんなことではないので、な、あなた、わしは一語言ひたかつたのですよ——なア、あなた、彼女は殆んどその家庭からわしの處へ來たのです、つまり、諺にも言ふとほり、七つの海の向うの遠方からですよ——で、わしのつまらない話を咎めんで下さい、あなた、わし共は無智な人間なのですから——で、小さな子供の時分から、彼女はあの通りでした！　頭の惡い無分別な彼女は、森の中で育つて百姓になり、それから始終船乘や職工共の間にゐましてな、そのうちに、家が燒けてしまふやうなことになり、彼女の母はな、あなた、燒け死に、父も燒け死んだのですよ——わしは言ひますが、彼女があなたにお話ししてることはわしには解りませんからな……わしは干渉しません、だが、モスクヴでは、外——外科醫の會議が彼女を診斷しましたがね。

なア、あなた、彼女は全く不治の病氣なのです、といふ譯なのですよ。彼女のために殘つてゐるものといつてはわし丈けなのです。それで彼女はわしと一緒に暮してゐるのです。わし共は、生活し、神に祈り、全能なる者を信仰してゐます。わしは何事にでも決して彼女に逆らはぬのです。」

オルディノフの顔つきは變つた、ヤロスラーフ・イリイーチは、最初一人をそれからもう一人をといふ風に眺めてゐた。

「ですが、わしの言はうとしてゐたことはそれではないので……それではないのです！」とミューリンは、いかめしげに頭を振りながら訂正した。「彼女は、云はば、あゝいふ呑氣者、あいふガラ〳〵な女、あゝいふ可愛いゝ氣儘者なのですよ、彼女はいつでも戀人を求めてゐるのです——もしあなたがさう言ふことを許して下さるなら——で、愛すべき誰かをね。といふのが彼女は氣が變なのです。わしはお伽噺で彼女を面白がらせてやります、わしはそれに全力をそゝいでゐるのですよ。なア、あなた、わしには解りました、どうして彼女は——わしの馬鹿げた言葉を許して下さい。」ミューリンは、お辭儀をして、その肱を袖で拭ひながらつゞけた。——「どうして彼女はあなたと友達になつたか、あなたが、云はば、あなたの秀でた點が愛の爲めに彼女を近づけることを望まれたんです。」

ヤロスラーフ・イリイーチは眞赤になつて、非難するやうにミューリンを眺めた。オルディノフは、やつとのことで、その席にぢつと坐つてゐた。

「いや……それはさうではない、あなた……わしはあなたの思ひの儘になります……勿論、わし共は單純に言ひますよ、あなた、わしは農夫です、わしはあなたの從者ですよ、あなた、」彼は丁寧にお辭儀をして言つた。「で、わしの妻とわしとは、一生懸命にあなたのために祈ります……わし共は何を求めませう？　健かになり、食物を十分に持てば——わし共は愚痴をこぼしません。だがわしが何をしませう、あなた、自分の頸を輪索に掛けるのですか？　人生とは何であるか、それがわし共をも憐んでくれるといふことをあなたは御自身御存じだ、若しも彼女が戀人を持つとしたら、それはどんな工合になるか、これも御承知のことでせう！……なア、あなた、わしの粗暴な言葉を許して下さい。わしは農夫です、それにあなたは紳士だ……あなたは、誇り高い性急な若い人だ、立派な御方、それに彼女は、御承知の通り、淺墓な小娘なのです——罪に陷ることは彼女にはわけないのです。彼女は薔薇のやうな氣持のいゝ快活な小娘ですが、わしは始終苦しんでゐる老人です。それで、惡魔があなたを誘惑したやうに思はれるのですよ。わしは、いつもお伽噺をしてやつて彼女にお世辭をつかつてるのです、わしは本當にさうしてゐるのです。わしは彼女にお

世辭をつかつてゐます、ですが、わし共は、わしの妻とわしとは、あなたの爲めにどれ丈け祈るでせう！　わし共はどれ程祈るでせう！　それに立派な御方、もし彼女が美しいとしても、あなたにとつて彼女は何でせう？　それに彼女はたゞの女です、洗はれてゐない百姓女です、馬鹿な田舍くさい娘です、わしのやうな農夫にいゝ相手なのですよ。百姓共と友達になることはな、あなた、あなたのやうな紳士のなさる事ではない！　しかし、彼女もわしもあなたの爲めに神樣にお祈りします、どれ程わし共は祈ることでせう！」

此處でミューリンは、非常に丁寧にお辭儀をしたが、絶えず鬢をその袖で拭ひながら、長い間背中を屈めたまゝでゐた。

ヤロスラーフ・イリイーチは、自分が何處に立つてゐたのか、知らなかつた。

「さうだ、此の善良な人はね、」と彼は困惑して言つた。「或る好ましくない出來事を僕に話したのだよ、僕はまだ信じられないのだ、ヴシッリイ・ミハーイリチ、僕は君がまだ病氣だといふことを聞いたのだよ。」彼は、感激の涙に充ちた眼で、非常に混亂してオルディノフを見詰めながら急いで口を挿んだ。

「さうだ。だが僕はあなたにいくら借りてることになつてるんですか？」とオルディノフは急いでミューリンに訊ねた。

「何をおつしやる、あなたは？　やめて下さい、えゝ、わし共はユダではない。だが、あなたはわし共を侮辱してゐなさるのですな、わし共は恥しめられるのですな。わしにしろわしの善良な女にしろ、あなたに無禮なことでもしましたか？」

「だが、これは本當に可笑しい、僕の善良な方、だつて、この人はあなたから部屋を借りたのですよ、それを斷ればあなたの方がこの人を侮辱するのだといふことが解りませんか？」ヤロスラーフ・イリイーチは、その行爲の可笑しいことと禮を缺いてゐることとをミューリンに示すのが義務だと思ひながら口を挿んだ。

「だが、誓つて、あなた！　どういふお心算なのです？　わし共は、あなたを喜ばせないやうな何をしたでせう？　えゝ、わし共は出來る丈けのことをやつてみました、出來る丈けのことをしました、誓つて言ひます！　やめて下さい、あなた、やめて下さい、立派な方。クリストがあなたを御惠み下さる！　それにしても、わし共は異端なのですか、でなければ何でせう、あなたは暮すことは出來たでせう、わし共と一緒にわし共の貧しい食物をたべてゐることは出來たでせう、そして歡迎されもしたでせう、あなたは其處で眠ることも出來たでせう——わし共はそれに對して何にも言ひはしませんでした、又わし共は一語も言はうとは思ひもしなかつたのです、が併し、惡い者があなたを誘惑したのですよ。わしは苦しんだ人間

ですし、又わしの家内も苦しんでゐるのです——どうすればいゝのでせう？　あなたのお世話をする者はありません、さうでないなら、わし共は喜んだでせうが、心から喜んだでせうがね。だが、どれ程家内とわしとはあなたの爲めに祈るでせう、どれ程わし共はあなたの爲めに祈るでせう。」

ミューリンは、腰を屈めて御辭儀をした。ヤロスラーフ・イリイーチの欣然とした眼には涙が浮んでゐた。彼は熱心にオルディノフを見てゐた。

「何といふ寛大な特質だらう、さうぢやないか！　何て神聖な情誼が露西亞人の間には見られるんだらう。」

オルディノフは、ぶつきら棒にヤロスラーフ・イリイーチを眺めた。

彼は殆んど恐れて、彼の頭から足の先きまでじろ〳〵見てゐた。

「左樣、誠に、わし共はそれを讃へますよ、あなた、」とミューリンは、その袖ですつかり脅を隱しながら確言した。「さうです、實際です、その考へが丁度今わしに浮んで來た所ですよ、わし共は客としてあなたを歡迎したでせうよ、あなた、誓つて！　わし共はさうしたでせう。」彼は、オルディノフに近寄りながらつゞけた。「で、わしはそれに反する事は何も持つてをりませんでしたからな、いつもわしは何にも言はなかつた、

全く何にも。だが罪は悲しい罠だ、わしの家内は病氣なのです。あゝ、それが家内のことでなかつたら！　さア、例へばですな、もしわしが獨りでゐたのだとすれば、わしはあなたをどれ程喜んだでせう、どれ程わしはあなたの御世話をしたでせう、わしはあなたの御世話をしようと思はなかつたでせうか！　わし共は、あなたより外に誰を救はなければならんでせう？　わしはあなたの病氣を直して上げたでせう、わしは技術を知つてるので……。あなたはわし共の客とならねばならなんだでせう、誓つて言ひますが、あなたはさうしなければならなんだ、そのことはわし共には重大な言葉ですからな！……」

「さう、本當に、そんな技術があるのですか？」とヤロスラーフ・イリイーチは言つたが……突然止めた。

オルディノフは、つい今しがた粗野な驚きでヤロスラーフ・イリイーチを見上げ見下ろしした時には彼に不正をなしてゐたのであつた。

彼は、勿論、甚だ正直な尊敬すべき人物であつた。が、今彼はすべてを理解した、そこで彼の位置が頗る困難なものであつたといふことが認められたに違ひない。彼は、云はば笑ひを以て打破つて了ひたかつた！　若しも彼がオルディノフと二人きりだつたならば——二人のかういふ友達同志だけだつたなら——ヤロスラーフ・イリイーチは、勿論、己れ自身を制

へようなどとは企てずに、その愉快さを出鱈目に爆發させる事に從つてしまつたであらう。だが、彼はこれを紳士らしい遣方でやつたであらう。彼はに笑つてから感じを籠めてオルディノフの手を握つたであらう。彼に對して二重の尊敬を感じたことと、及び彼が凡ゆる場合に思ひやることが出來たことを、本當に、そして正當に彼に向つて確言したであらう……そして、勿論、彼の若さに押しつけてしまふやうなことはなかつたであらう。けれども實は、彼は最も困難な位置に立つてもいつもの敏感性を持つてゐたので、殆んど己れ自身どうしたらいゝのか解らないのであつた……。

「技術、それは煎藥ですよ。」とミューリンは附け加へた。ヤロスラーフ・イリイーチの氣のきかない驚嘆を見ると彼の顏には震へが過ぎて通つた。「何とわしは言つたらよかつたのか、あなた、わしの百姓らしい愚鈍ではな、」彼はもう一步前へ出て續けた。「あなた方は大變多く本を讀みなさつたでせう、わし共農夫たちの間で露西亞の諺が言ふとほり、『機智は智慧を越す』といふ譯ですな……」

「もう十分だ。」とヤロスラーフ・イリイーチは嚴格に言つた。

「僕は行かう。」とオルディノフは言つた。「有りがたう、ヤロスラーフ・イリイーチ。僕は來るよ、きつと君に逢ひに來るよ。」と彼は、それ以上彼を押止めることの出來なかつたヤロスラ

ーフ・イリイーチの二重な禮儀に答へて言つた。「さよなら、さよならー」

「さやうなら、立派な方、さやうなら、あなた、わし共を忘れんで下さい、わし共を。貧しい罪人を訪ねて下さい。」

オルディノフはもう何も耳へはひらなかつた——彼は心の狂へる者の如く出て行つた。彼は最早堪へきれなかつた、彼は震へを感じてゐた、彼の心は痲痺してゐた、彼は、自分が病氣に壓服されたことをかすかに感じてゐた。が、彼の魂の中には冷たい絶望が行き渡つてゐた。そして彼は、或るぼんやりした苦痛が彼の胸を碎き、弱らせ、噛んでゐることを僅かに意識した。彼はその瞬間に死んでしまひたかつた。彼の足は動かなかつた、で彼は垣根のそばに坐つてしまつた。そこを通る人々にも、彼の周圍に集り始めた群集にも、訊ねられたことにも、珍らしがつてゐる人々の叫び聲にも、全く氣がつかないで。しかし、突然に、群集の聲の中で、彼の上でミューリンの聲がするのを彼は聞いた。老人は、本當に彼の前に立つてゐた。その蒼白い顏は考へ深く威力あるものであつた、彼は、ヤロスラーフ・イリイーチの處で、下品な滑稽芝居を演じてゐた人とは全く別人であつた。オルディノフは立ち上つた。ミューリンは、彼の手をとつて、群集の中から引張り出した。「あなたはあなたの所持品を持つて行かうと思つてるのでせう。」と彼は、オルディノフを横眼でちらと見

ながら言つた。「悲しんではいけませんよ、あなた、」とミューリンは叫んだ。「あなたは若い、何で悲しむのですな？……」

オルディノフは返事をしなかつた。

「あなたは腹を立てゝおいでなのかな、あなた？……多分あなたは今ひどく怒つてゐなさる……だが、あなたには理由はないのですよ、誰にしろ己れの福利を守るものです！」

「僕はあなたを知らない。」とオルディノフは言つた。「僕はあなたの秘密を知りたくはない。しかし彼女は、彼女は！……」と彼は言ひ出した、そして彼の眼からは涙が泉のやうに迸つて出た。風があとから〳〵と彼の頬からそれを吹き去つた……。オルディノフは手で涙を拭つた、彼の身振、彼の眼附、彼の青い脣の獨りでになされる運動、すべてが狂氣のやうに見えた。

「わしは最早あなたにお話しした、」とミューリンは、眉をよせながら言つた。「彼女は氣違ひだとね！　何が彼女を氣違ひにしたのでせう？……どうしてあなたはそれを知る必要があるのです？　だが、わしにとつては、御覽の通り、彼女は可愛い〳〵のです！　わしは自分の生命よりも彼女を愛してゐる、そしてわしは誰にも彼女を讓らうとは思はんのです。さア、お解りかな？」

オルディノフの眼の中には瞬間的に火の如く輝くものがあつた。

「だが、どうして僕は……？　どうして僕は生命を失ふと同様な程なのだらう？　どうして僕の心は痛むのだらう？　何だつて僕はカテリーナを知つたんだらう？」

「どうしてですつて？」ミューリンは笑つた、そして默考した。「どうしてだか、わしにはその理由は解りませんな、」と彼はたうとう言ひ出した。「女の心は海のやうに深くはありませんが、あなたも御存じでせう、だが、それは狡猾で、しつこくて生に充ちてゐる！　女といふものは、自分の欲するものをすぐにも持たねばならないのです！　あなたも同樣御承知でせうが、彼女はわしを棄てゝあなたと逃げようと欲してゐた、彼女は老人を厭がつてゐた、彼女は老人と一緒に居ることの出來る凡ゆる事柄の中で暮して來たのです。あなたは、最初から彼女の好みを捉へたやうですな、あなたであらうと他の者であらうとそんなことは關係なかつたのだが……　わしは何事にでも彼女に逆らはぬのです——もし彼女が小鳥の乳を欲しがれば、わしは彼女に小鳥の乳をとつて來てやるでせう。そんな小鳥がゐなければわしは、それを一匹拵へるでせうよ。彼女は、その心が氣違ひのやうになつて求めてゐる物が何だか自分では知らぬのですが、自分の意志をそゝのかしてゐるのです。そこで、もとの通りにしてゐる方がいゝといふことになるのです！　あゝ、あなた！　あなたは大變お若いのだ、あな

たの心は、その袖の涙を乾かしてゐる捨てられた小娘のやうに熱烈なのです！　話させて下さい、あなた、弱い人間は獨りで立つことは出來ないのですよ。弱い人間にすべてを與へて御覽なさい、彼は弱い自分からそれを皆返しに來ますよ。彼に世界の國々を半分も持たせてやつて御覽なさい、試つてごらんなさい、そしたらあなたはどうお思ひでせう？　彼はすぐにもあなたのスリッパの中にでも身を隱すでせう——彼は、それ程小さくなるでせうよ。弱い人間に自由を與へて御覽なさい——彼は自分でそれを束縛してしまふでせう、そしてそれをあなたに返すでせう。愚かな心にとつては自由は何にも役に立たないのです！　人はそんな遣方でうまくやる事は出來ないのです。わしはこれをすつかり今あなたにお話しします、あなたは大變お若い！　あなたは何でせう？　あなたは來る、そして行つてしまふ——あなたでも他の人でも同じことです、若しも人が自分の幸福を持ち續けて行かうと欲するならば、誰も彼女に逆ふことは出來ません、誰も彼女に逆ふやうなことを一語だつて言ふことは出來ません、たゞ、お解りでせうかね、あなた、」——ミューリンは反省をして續けた——「診にも言ふことですが、何事が起るでせう、人はその怒りの時にはナイフを摑むものです、又は武裝してゐない者は素手で羊のやうにあなたを襲ひ、敵の咽喉に齒でかみつくのです。が、そのナイフをあなたの手に置かせるとして御覽なさい、あなたの敵はあなたの前に胸を露はすでせう——心配ないのです、あなたは後しざりするでせうよ。」

彼等は庭の中にはひつた。韃靼人は遠くからミューリンを見て、彼に帽子をとり、オルディノフを陰險に見詰めてゐた。

「お前の母親は何處かね？　家かね？」とミューリンは彼に怒鳴つた。

「さうでござんすよ。」

「この方の引越の手傳ひをするやうにお云ひ、駈けて行くのだぞー」

彼等は二階へ上つた。實は門番の母親であつた老婆は、その下宿人の所持品を集めてぶつぶつ口小言を言ひながら、それを縛つて大きな包を拵へてゐた。

「一寸お待ちなさい、わしはまだ他にあるあなたのものを持つて來ますからな、あすこに殘つてゐる……」

ミューリンは彼の部屋へはひつて行つた。一分間後には彼は、戻つて來て、絹で刺繍のしてある、打紐のついた贅澤な滿團をオルディノフに與へた。それはカテリーナが、彼の病氣の時頭の下に入れてくれたものであつた。

「彼女がこれをあなたに上げるのです、」とミューリンは言つた。「ではもう御別れしませう、あなたに幸福のあるやうに。それにようござんすか、もう餘りぶらつきなさるなよ。」と彼は

父らしい調子で附加へたが、聲を落して、「でないと、惡いことが起りますよ。」

彼がその下宿人を怒らせたくなかつたことは明かであつたが、彼が最後の一階を投げた時ひどく毒々しい顰きが無意識に彼の顏に表はれたのであつた。殆んど脈はしげに彼は、オルディノフの後ろに戸を閉めきつた。

二時間の內にオルディノフは、獨逸人シュビースの部屋に移つてゐた。ティンケンは、彼を見るとびつくりした。彼女はすぐに彼の健康を訊ねた。そして、餘りよくないことを知つた時、彼女は、早速彼を看病しようと一生懸命になつた。

年とつた獨逸人は、丁度今門に新しい札を貼りに行かうとしてゐた所だといふことを丁寧にオルディノフに示した。何故ならばオルディノフが前拂ひにした家賃は、丁度その日に一錢も殘らずに讀きたのであつた。老人は、遠まはしに獨逸人としての精級と正直とを讃へる機會を見逃さなかつた。その日からオルディノフは病氣になつた、そして三月の間寢床を離れられなかつた。

次第々々に彼はよくなつて來て、外出もし始めた。獨逸人の宿に於ける日常生活は平靜で單調だつた。老人は、何等の際立つた特性も持つてはゐなかつた、綺麗なティンケンは、適當といふ範圍內で、望まれ得た所のすべてであつた。けれども、人生はオルディノフにとつては永遠にその色彩を失つてしまつたやうに思はれた!

彼は、夢想的になり、怒りつぽくなつた。彼の感受性は病的な形を採つた、そして彼は、眼につかない程度で、退屈な腹立ち易い憂鬱性に陷ちて行つた。彼の本は、どうかすると續けて數週間も開かれずにゐた。未來は彼に對しては鎖され、金は消費されてゐた、そして彼は凡ゆる努力をやめてしまつて、未來に就いては考へさへしなかつた。時とすると、科學に對する彼のもとの烈しい熱心、彼自身の創造に就いての彼のもとの空想が、過去から激剌と浮び上つて來ることがあつたが、それも彼の精神的のエネルギイを壓迫し、窒息させるに過ぎなかつた。彼の心は仕事をする氣にならないのであつた。彼の創造力は、ぢつと留まつてゐた。それは、恰も凡ゆるそれらの幻影が、その創造者の無能力を嘲笑する爲めに故らに彼の空想の中に大きくなつたかのやうであつた。憂鬱な時には彼は、その師の呪文を密かに學び知つて箒に水を出させたが、「止めよ、」といふにはどうしたらいゝのかを忘れてしまつたので窒息するまでに水を飮んでしまつたといふかの魔術師の弟子に自分を比べてみないではゐられなかつた。恐らくは、彼の內には、或る完全なオリヂナルな獨立した觀念が實際に在つたのであらう。多分彼は科學上の技術者たるべく定められてゐたのであらう。少くとも彼以前には自らさう信じてゐた。純粹な信仰は未來の擔保である。しかし、今は或る場合には自らその盲目的な確信を嘲笑し

てゐた、そして——そしてその上、歩を進めはしなかつた。

六箇月以前に彼は、全く創造的でない瞬間に彼の最も確かな希望を打ち建てた所の（彼はそれ程若かつたので）仕事の草案を解決し創造して、紙に書き留めてゐた。それは教會の歴史に關する仕事であつて、その中には彼の最も暖かな、最も熱烈な決定が表はれかけてゐた。今、彼はその計畫を讀み返し、それに變更を加へ、それを熟考し、再びそれを讀み、色々の事を調べ、そして遂にその考へを棄てゝしまつた、その亡びたものの上へ新しい何事かを打ち建てようとはしないで。けれとも、何等かの、神秘主義や宿命論と深い關係を持つた事柄と、神秘的なものに對する信仰とが、彼の心の中に表はれ出した。不幸なる者は、その苦しみを感じて彼を癒してくれるように神に求めた。獨逸人の召使、信心深い露西亞人の老婆は、よくこの大人しい下宿人が祈つてゐたことを、そして彼が教會の甃石の上で無意識の如く數時間も續けて坐つてゐるといふことを面白さうに話すのであつた……。

彼は、自分に起つた所の事を、誰にも決して言はなかつた。けれども折々、特に教會の鐘が鳴る時、最初に彼の心が痛み、彼にとつては新しい感情で震へたあの瞬間、彼が何もかも忘れて、彼女のおづ〳〵した心臟の鼓動の他何にも聞かずに神の家で彼女のそばに跪いてゐたあの瞬間、有頂天と歡喜の涙を以て彼がその淋しい生活の中に發生した新しいぎら〳〵す

るやうな希望に生氣を與へたあの瞬間が、彼に甦つて來るのであつた——その時には永久に傷ついてゐた彼の魂に嵐が起つた、その時には彼の魂は震へ、そして再び戀の苦惱が火に焦げるやうに彼の胸に燃えた、その時には彼の心は悲しみと情熱とに痛み、そして彼の戀は悲哀に變るやうに思はれた。屢々數時間も續けて、己れ自身と自分の日常生活を忘れ、世の中のすべてのことを忘れて、彼は同じ場所に寂しく悲しげに坐りつゞけて絶望的にその頭を振り、そして聲無き涙を落し乍ら自分に囁くのであつた——

「カテリーナ、僕の貴い鳩よ、僕のたつた一人の愛する妹よ！」

或る恐ろしい考へが、次第々々に生き〳〵となつて屢々彼に來た、そして日毎に彼の前で一層有りさうな、一層本當らしい形を採つた。彼は空想した——そして遂には彼はそれを全く信じてしまつたが——彼は空想した、カテリーナの理性は健全だつたのだ、だが、ミューリンが彼女を「弱い心」と呼んだ時、それは正しかつたのだ、と。或る神秘が、或る秘密が彼女を老人に結びつけてゐたのだといふことを彼は空想した。純潔な鳩のやうに罪はないのにカテリーナは老人の力の中に捉へられてゐたのだと空想した。彼等はどういふ人間だつたのだらう？　彼には解らなかつた、しかし彼は、可哀想な防備なき者の上に加へられる無限な威壓的な虐待に就いて絶えず空想してゐた、そして彼の心は腹

立ち、無力な怒りに慄へた。彼女の突然に眼覺めた魂の脅かされた眼の前に、その墮落の考へが巧みに持ち來されたのだといふことを彼は空想した、哀れな弱い心が巧みに苦しまされてゐたのだと空想した、眞理が彼女に捲きつき、彼女を歪めてゐたのだと思つた、彼女は或目的のために必要な時には眼を閉ぢてゐたのだと思つた、彼女の苦しめる情熱の心の無經驗な傾向が巧みに追從されて、次第に自由な魂がその翼を切られ、遂にはそれが自由な生活に對する抵抗を不可能にし、それに對する自由な行動を不可能にした、といふことを空想した……。

次第々々にオルディノフは非社交的になつて行つた、そして彼の獨逸人は、それを公平に見て、彼のその傾向を妨げなかつた。

彼は、あてどなく町をぶらつくことを好んだ。彼は、黄昏の時を好み、遠い人目を離れた人通りの少ない場所を選つて行つた。或る雨降りの健康によくない春の夕暮に、彼の好きな裏道の一つで、彼はヤロスラーフ・イリイーチに出會つた。

ヤロスラーフ・イリイーチは、眼に見える程痩せてゐた。彼の友誼のこもつた眼はかすんで見え、彼は全く氣落ちしてゐるやうに見えた。彼は、火急な或る仕事で全速力を出して駈け出してゐた。彼は、濡れ鼠になり泥だらけになつて、而もその晩中、雨の粒が彼の高く恰好のいゝ、しかし今は青くなつてゐる鼻から、殆んど氣まぐれのやうに、滴り落ちてゐた。

彼は、その上、頰骨を生やしてゐた。

その頰髯と、ヤロスラーフ・イリイーチが舊友に會ふことを避けようとしてゐるやうに彼をちらりと見た事實とは、オルディノフを殆んど驚愕させた。不思議にもそれは彼の心を傷つけさへした、そのことは其の時までは何等同情の必要を感じなかつたのであつた。彼は實は、彼が以前のやうに——簡單な、深切な、子供らしい、正直に言ふと少し抜けた、しかし幻滅と常識とに對して、凡ゆる假裝から解放されてゐる男であることを好んでゐたのだ。我我が嘗て、他ならぬその愚かしさの爲めに好んでゐた愚かな人間が突然に敏感になつた時は不快なものである。それは確かにいやなものである。けれども、彼がオルディノフを眺めた時のその不信は、速かに消失した。

その幻滅にも拘らず彼は、以前の態度を尙ほ保存してゐた。それは、我々のよく知る通り人を墓までも伴ふところのものである。そして今でも彼は、熱心にオルディノフの信任を得ようとしてゐた。第一に彼は、自分は非常に忙しいのだと言つた、それから自分たちは長い間お互ひに逢はなかつたと言つた。が、忽ちに會話は變な工合になつた。

ヤロスラーフ・イリイーチは、一般の人々の欺瞞に充ちてゐるといふことに就いて話し出

した。この世の祝福の無常に就いて、虚榮の空しいことに就いて。彼は、無關心以上のものを以てプーシキンに對して一寸した皮肉を言ひ、彼の知己の人々をも引合に出してあてこすつた、そして最後には、眞の友情といふやうなものはこの世にはない、又決して今までにも無かつたのだけれども、友人と呼ばるゝ人々の欺瞞と裏切りに就いても暗示しさへした。要するにヤロスラーフ・イリイーチは悧巧になつたのであつた。

オルディノフは彼と爭ひはしなかつたが、まるで自分の最もいゝ友だちを土に埋めてしまつたかのやうな言ふに言はれぬ悲しみを感じた。

「あゝ！　まア、考へてみたまへ、僕は君に話するのを忘れてゐた、」とヤロスラーフ・イリイーチは、恰も甚だ興味ある何事かを思ひ出したやうに、出し抜けに言ひ出した。「珍らしいことがあるんだ！　祕密として話さうね。君が借りてゐた家のことを覺えてゐるかい？」

オルディノフはびつくりした、そして蒼くなつた。

「さア、思つてもみたまへ、つい此間ね、あの家で一團の盜賊が見附けられたんだぜ。つまり、君には信じられるかしら、盜賊の常連、密賣者、凡ゆる種類の泥棒共があるんだ、どうしたんだかは神が知つてゐる。捉まつた奴もあつたが、共他の奴はまだ捜索中なんだ、嚴しい命令が出てゐる。だが、君に信じられるかしら！　あの家の主人を覺えてゐるかい、あの信心家の、尊敬すべき、偉さうな老人を？」

「あゝ！」

「人は一體人間のことを何う考へたらいゝんだらう？　あれはその一團のかしらだつたんだ、頭領だつたんだ。馬鹿げてゐるぢやないか？」

ヤロスラーフ・イリイーチは、感じをこめて話した、そして一つの例で全人類を判斷した。何故ならヤロスラーフ・イリイーチは、さうするより他、何も出來なかつたのだ、それが彼の性格であつた。

「で、彼等は？　ミューリンは？」オルディノフは囁くやうに言つた。

「あゝ！　ミューリン、ミューリン！　いやあれは價値のある老人だ、全く尊敬すべき……だが、許してくれ給へ、君は新しい光を投げてくれるんだ……」

「どうして？　あれもその一團の中にゐたのかい？」

「どうしてであつた。

オルディノフの心臟は、堪らなくなつて破裂しさうであつた。

「だが、君の言ふやうに……」ヤロスラーフ・イリイーチは、オルディノフの上にその白眼でぢつと見据ゑながら——附け加へた。「ミューリンはその中の一人ではなかつた譯なのさ。丁度三週間前に、あれはあの細君を連れて鄕里へ歸つて行つ

弱き心

たんだからね……。僕はそれをあの門番から聞いて知ったんだよ、あの小さな鞭鞄人の、君は覚えてゐるね？」

同じ四階立の同じ部屋の下に、役所の同僚である二人の青年アルカーディ・イワーノヴィチ・ネフェデーヴィチとワーシャ・シュームコフとが住んでゐた……さういふ表現法が不都合な、或はむしろ無作法なものと見做されないのでさへあるならば、何故一人はその名前を全部揚げながら他の一人の名前は省略されるのか、作者は勿論それを讀者に説明する必要を感じてゐる。けれども、さうするには先づこれに關する人物の階級、年齢、職業、役柄、及び實際に性格までも説明する必要が生じて來る。で、さういふ風に始める作家は非常に多いが、これから始まる物語の作者は、獨りそれらとは異らせる爲めに（或る人々は多分、それは全く作者の底知れぬ自負心だと言ふであらう）眞直に行動し始めることにする。これ丈げの前置を終へて作者は始める。

新年の前夜、六時近くにシュームコフは歸宅した。寢床の上に横になつてゐたアルカーディ・イワーノヴィチは、眼を覺まして、半ば閉ぢた眼で友達を眺めた。それは勿論彼を驚かした。「ワーズボンを穿いて、非常に綺麗なシヤツを著てゐたのを見た。それにあいつは、食事も家ではしなかシャはあんな風をして何處へ行つて來たんだらう？　それにあいつは、食事も家ではしなかつたんだ！」その間にシュームコフは蠟燭に火を點けた、そしてアルカーディ・イワーノヴィチは、友達が偶然に自分を起さうと思つてゐのだといふことを直樣推察した。實際ワーシャは

咳拂ひを二度もしたり、部屋を行きつ戻りつ二度も歩いたりしてそれからたうとう、隅のストーヴのそばで始めてゐたパイプを全く偶然らしくその手からすべり落した。アルカーディ・イワーノヴィチは失笑した。

「ワーシャ、見せかけはよせよ！」と彼は言つた。

「アルカーシャ、君は眠つてるんぢやないのかい？」

「僕にも實は判然は解らないんだ、どうも眠つてはゐないらしいよ。」

「おゝ、アルカーシャ！　どうだね、可愛い〳〵坊ちやん？　おい兄弟！　おい兄弟！……僕が何を話さなければならないか、君は知るまい！」

「確かに知らないね。此處へ來給へ。」

豫期してゐたやうにワーシャは直ぐ彼の方へ行つたが、非常に敏捷に彼の腕を捉へて彼をひつを全く豫見しずに。アルカーディ・イワーノヴィチは、くり返して下に押しつけ、そしてこの犧牲者を、所謂「絞めつけ」始めた。そして明かにこんな所作が、氣輕なアルカーディ・イワーノヴィチに大滿足を與へたのであつた。

「捉へたぞ！」と彼は叫んだ。「捉へたぞ！」

「アルカーシャ、アルカーシャ、どうしようといふのだい？　放してくれ。賴むから、放して

くれ。禮服を皺くちやにしてしまふよ！」
「そんなことはどうだつていゝさ！　禮服なんか著込んで、どうしようと言ふんだい？　僕の手に陷るなんて君はどうしてそんなに大膽なんだね？　君は何處へ行つたのか話し給へ、何處で君は飯を食つた？」
「アルカーシャ、賴むから、放してくれよ！」
「何處で飯を食つた？」
「だから、言はうとしてゐるぢやないか。」
「ぢや、言ひ給へ。」
「だが、先づ放してくれ。」
「どうして放すもんか、言ふまでは放さないよ。」
「アルカーシャ！　アルカーシャ！　だが、わかるかい、駄目だ——どうしたつて出來ない！」
とワーシャは、友達の力強い手の中で賴りなげにもがきながら叫んだ。「ねえ君、問題がある んだ！」
「どういふ——問題だ……？」
「だつて、こんな風をしてゐては、君の威嚴を失はずに話すことの出來ない問題なんだ。

全く出來ないこつた。それは滑稽になつちまふよ。それにこの事は馬鹿げたことぢやないんだ、重大なことなんだ。」
「おや〳〵、餘程重大の肩を持つ男だな！　僕を笑はすために話りや珍らしい考へだ！　僕を笑はすために話すんだらう、君が話さなくちやならないのはさういふことだ。僕は重大なことなんか聞きたかないよ。それよりか、君は、僕の本當の友達らしい友達ぢやないね。えゝ、友達といへるかい？」
「アルカーシャ、本當に駄目だよ！」
「いゝさ、僕も聞きたかないよ……」
「おい、アルカーシャ！」とワーシャは、寢床の上に横に寢たまゝで、その言葉に有らん限りの威を持たせようと全力をそゝぎながら始めた。「アルカーシャ、ぢや、言ふよ。たゞ……」
「よし、何だね？……」
「いゝかい、僕は婚約したのだ！」
もう一言も言はずにアルカーディ・イワーノヴィチは、ワーシャを赤子のやうにその腕に抱き上げた。とはいへワーシャは決して脊が低くはない、むしろ高い方で痩せてゐた。それから彼は、ワーシャを寢かしつけるやうな眞似をして部屋をあつちへ行つたりこつちへ行つたり

抱いて運んだ。

「お纏裸を著けて上げますよ、花聟先生。」彼はまだそんなことを言つてゐた。しかしワーシャが身動きもしず一語も發しずに彼の腕の中でぢつとしてゐるのを見ると、彼は忽ちにそれを更によく考へ、冗談が過ぎたことを反省して、彼を部屋の眞中に下ろし、極めて純な友達らしい風に彼の頬に接吻した。

「ワーシャ、君は怒つてやしない？」

「アルカーシャ、いゝかい……」

「ねえ、今日は新年の前の晩なんだよ。」

「おゝ、僕は平氣だよ。だが、どうして君はそんなに氣違ひじみて、そんなに輕卒なんだらう？　幾度言つたか知れないぜ。アルカーシャ、それは本當に笑ひ事ぢやないよ、全く笑ひ事ぢやないよー」

「あゝ、解つたよ。だが君は怒つてるんぢやないか？」

「おゝ、平氣だよ。僕はいつだつて怒つてゐやしないぢやないかー　だが、君は、僕を悲しませる、え、解るかい？」

「だが、何で僕は君を悲しませたらう？　どうして？ー

「僕は、友達だからこそ君のところへ來たんだぜ。胸をいつぱいにしてさ、君に僕の魂を注がうとして、僕の幸福を話さうとして……」

「どんな幸福だい？　何故君は話さないんだ？……」

「おゝ、いゝかい、僕は結婚しようとしてるんだよー」ワーシャは混亂して答へた、何故なら彼は、本當に多少腹を立てゝゐた。

「君がー　君が結婚しようとしてるつてー　それは本當なのかい？」アルカーシャは大きな聲で叫んだ。「いや、いや……だが、それはどうだ？　こいつはこんな事を言ふ、それに涙を流してる……ワーシャ、僕の可愛いゝワーシャ、いけない、僕の可愛いゝ息子ー　そりや本當なのかい？」そして、アルカーディ・イワーノヴィチは、飛びかゝつて再び彼を抱きしめた。

「さあ、やつと解つたかい、どうだね？」とワーシャは言つた。「君は深切だ、勿論、君は友達だ、僕はそれを知つてる。僕は、こんな歡喜を持つて君のところへやつて來ると、いきなり僕は、その凡ゆる僕の心の歡喜を、凡ゆる僕の喜悦を、寢床へ横倒しになつて爭ひながら品もなにもなしに打開けなければならないんだ……いゝかい、アルカーシャ。」ワーシャは、半分笑ひながら續けた。「ねえ、そのためにそれは滑稽になつてしまつた。そして、或る意味に於いて、その時の僕は自分の體ではなかつたやうなもんだ。僕は、これ

を下らなくしてしまふことは出來なかつたんだ……その上、若し君が彼女の名前を訊いたとしたら、きつと僕は君に殺されても答へなかつたらうよ。」

「だが、ワーシャ、どうしてさう言はなかつたんだ！　君は、すぐあとでそれをすつかり僕に話さなけりやならなかつたんだ。それに僕だつてあんな馬鹿な事はしやしなかつたらう？」

とアルカーディ・イワーノヴィチは本當に絶望して叫んだ。

「さあ、もう澤山、澤山だ！　勿論、さういふわけだつたのさ……それは皆何から來るのか、君は知つてるだらう——僕がいゝ心を持つてる所からだよ。僕を困らせたことはね、僕が自分の欲した通りに君に話すことが出來なかつたことなのだ、君を喜ばし、幸福にし、君に旨く話し、いゝ具合に君を僕の秘密の中へ導き込まうとして……本當に、アルカーシャ、僕は隨分君を愛してるのだよ、だから、若し君が居てくれなかつたら、僕は結婚する氣にもなれなかつたらうし、それに實際、全くこの世に生きてゐられない位なのだ！」

ひどくセンチメンタルになつてゐたアルカーディ・イワーノヴィチは、ワーシャの言ふことに耳を傾けて、直ぐ様泣いたり笑つたりしてゐた。ワーシャも同樣であつた。二人は、再び飛びついて抱擁し合ひ、過ぎ去つたことは忘れてしまつた。

「それはどういふわけなのだ——どうなのだね？　すつかり話し給へ、ワーシャ！　僕は面喰つてるんだ、許してくれ、兄弟、僕はすつかり面喰つちやつたんだ。そりや全く晴天霹靂だからね、神樣！　馬鹿なこつた、馬鹿なこつた、兄弟、君はそれをきめちやつたんだね、君は本當にきめちやつたんだね、君は嘘を言つてるんだ！」アルカーディ・イワーノヴィチは叫んだ、そして彼は、本當に疑つてゐるやうにワーシャの顏を一生懸命に見入つた。が、その中に結婚せる者の確實な意志がしつかりと光を放つてゐるのを見ると、出來る丈け速かに、寢床の上に身を投げかけて、有頂天になつて壁のゆすぶれる程ごろ〳〵轉がり廻るのであつた。

「ワーシャ、此處へ掛け給へ。」彼は、たうとう寢床の上に坐りながら言つた。「兄弟、何處から始めたらいゝのか、僕には本當に解らないよ！」

彼等は、喜びに充ちた興奮に於いて互ひに顏を見合した。

「その女は誰なのだね、ワーシャ？」

「アルテミエーフ家のだ！……」ワーシャは、感激に弱つた聲で言つた。

「え？」

「ねえ、僕は最初君の耳へ囁き込んで置いてそれから默つてしまつたんだ、だから君は何も氣がつかなかつた。あゝ、アルカーシャ、それを君に隱しとくことがどんなに困難だか君に

解つたらなア、だが、僕は恐かつたんだ、話すのが恐かつたんだよー　それは全く不成功に終るだらうと思つたんだ、僕が戀に陷ちてたことは君も知つてるだらう、アルカーシャー神よー　神よー　ねえ君、これは苦しいことだつたよ。」彼は、混亂のためにポツ〳〵途切れながら始めた。「一年前には彼女はきまつた人があつたのだが、その男は出し抜けに何處かへ任命されて行つてしまつたのだ。僕はその男を知つてた——あれも一個の男だつたんだ、幸福でゐるがいゝー　ところがその男はちつとも手紙をよこさなかつた。まア消えてしまつたんだね。彼等は、どういふ譯なのか怪しみながら、待ちに待つてゐた……。するとその男は四ケ月前に突然結婚して歸つて來たんだ、そして彼等の家へは足を向けようともしないんだ！　下品な——賤しい奴だー　で、誰も辯解しにも來なかつたのさ。彼女は泣きに泣いたのだ、可哀想な娘、さうして僕は彼女を戀した……實際、ずつと前から僕は彼女を戀してゐたんだよ、始終ー　僕は彼女を慰め始めた、そして始終あすこへ行つてゐた……おゝ、それでどうしてかうなつて來たんだか僕には解らない、たゞ彼女は僕を愛するやうになつて來たのだ。一週間前に僕はもうどうにも堪へきれなくなつて、叫んだり泣いたりして彼女にすつかり話した——さうだ、僕が彼女を愛することを——すべてのことを、本當に！……『私もあなたを愛さうとしてるのよ、ワシッリイ・ペトローヴィチ、たゞ私は可哀想な娘なのよ、私をからかつちやいやですわ。私はもう誰も自分から愛しようとはしないの。』どうだい、兄弟、解つたらう！　解つたかい？……そこで、僕たちはすぐに婚約してしまつたんだ。僕は、いつまでも考へに考へぬいた、僕は彼女に言つたのだ、『貴女のお母さんにどう話したものでせう？』すると彼女はね、『それはむづかしいでせうよ、暫らく待つてね。お母さんは恐がつてるのよ、それに今ではきつと私をあなたに上げようとはしませんわ、お母さんも泣きづめに泣いてるのよ。』僕は、彼女には言はずに彼女の母に今日ぶちまけて話しちやつたんだ。リザンカは母の膝の下に跪いた、僕もさうした……ねえ、お母さんは僕たちを祝福してくれたんだよ。アルカーシャ、アルカーシャー　愛するアルカーシャー　僕たちは一緒に住まうね。どうしたつて、僕は何があつたつて君と離れるのはいやだ。」

「ワーシャ、まあ僕のやうに君を見ろよ、僕には信じられない。どうしたつて信じられやしないよ。僕はかう感じてゐるんだよ、まるで……いゝかい、どうして一緒が婚約することなんか出來るんだらう？……それを僕が知らなかつたなんて、どうしたもんだ、えゝ？　いゝかい、ワーシャ、僕は今君にそれを言つて置くよ。僕は自分が結婚しようと思つてたんだ、だが、今ぢや君が婚約しちまつてるんだから丁度いゝ鹽梅だー　幸福になり給へ、幸福になり給へー……」

「兄弟、僕は今は樂々した氣持だぜ、僕の心はこんないゝ氣持なんだ……」とワーシャは立ち上つて、興奮して部屋の中を歩き廻りながら言つた。「君は同じに感じてゐないかい？　僕らは、勿論、貧乏だらう、だが僕らは幸福になれる。で、それは理窟のない空想ぢやないだらう。僕らの幸福はお伽噺ぢやない、僕らは現實に於いて、幸福になれるんだ！……」

「ワーシャ、ワーシャ、聽き給へ！」

「何だい？」とワーシャは、アルカーディ・イワーノヴィチの前に立ちながら言つた。

「僕はあれのことを思ひ出してるんだよ、君に言ふのは、全く恐ろしい……。許してくれ、僕の疑ひを晴らしてくれ。君はどうやつて生きて行かうとしてるんだい？　ねえ君、君が結婚するのは僕は喜んでる、勿論、僕は大喜びだ、だが、自分ではどうしたらいゝのか解らないんだ、しかし――どうやつて君は生きて行くんだい？　えゝ？」

「おゝ、何てこつた！　何て奴だらう、君は、アルカーシャ！」ワーシャは、非常にびつくりしてネフェデーヴィチを眺めながら言つた。「どういふ氣なんだい？　年とつた彼女（あれ）の母でさへ、あの人でさへ、僕が何にもかもあの人の前に明かにした時には、二分間ばかりはそんなことを考へもしなかつたんだぜ。君は、彼等がどうして暮してるかでも訊けばいゝんだ！　僕等は三人家内で年に五百留、父が死んでからは、その五百留の年金だけしかありやしないんだぜ。彼女（あれ）と彼女（あれ）の母と小さい弟とさ、その弟の教育費までその中から出してるんだ――彼等の暮しはそんななんだ！　資本家は君と僕だよ！　具合のいゝ年には、僕は七百留だけのものは稼ぐよ。」

「おい、ワーシャ、失敬だが、僕は本當に……ねえ、僕は……僕はたゞ、何とかしてまづく行かないやうにしようと思つてゐるんだ。七百留つて、どういふつもりなんだい？　三百留きりぢやないか……」

「三百留だつて！……ぢやユーリアン・マスタコーヴィチは？　君は、あの人を忘れてるのかい？」

「ユーリアン・マスタコーヴィチ？　だけど君あれは不定ぢやないか、兄弟、そりや確かな俸給の三百留とは同じぢやないよ、この方は、その一留一留が君の信ずる友人なのだからね。ユーリアン・マスタコーヴィチは、勿論、あの人は偉大な人さ、實際、僕はあの人を尊敬してる、理解してる、だが、あの人は僕らよりずつと高い處にゐるんだ。そして、誓つて言ふが、僕はあの人を愛してゐる。何故ならあの人は君が好きで、君に何かしら仕事を與へてくれる。が、あの人は君に金を出してはくれまいよ、たゞ君の爲に書記を働かせる丈けだよ――尤も君はそれでいゝんだらうね、ワーシャ……僕にも話させてくれ、僕は馬鹿なことを言つてる

んぢやないぜ。僕は、ペテルブールグ中探しても君の筆蹟程の筆蹟は見出せないといふことを認めてゐる。それを君に許さうとしてるんだ。」ネフェデーヴィチは、いくらか熱中してさう決斷した。「だが(そんなことが無ければいゝが！)君は間もなくあの人の氣に入らなくなるよ、君はあの人を滿足させないだらう、君のやるあの人の仕事はやめになる、あの人は他の書記を雇ふやうになる——實際色んなことが起るー　ねえ君、ユーリアン・マスタコーヴィチは今日は此處に居る、が明日は去つてしまふかも知れない……」

「おい、アルカーシャ、今にも天井が顏の上へ落ちて來るかも知れないぜ。」

「おゝ、全くだ、僕はもう何にも言はない。」

「だが、聽き給へ、僕の言はうとしたことを、聽き給へ——ねえ君、あの人が僕と別れることが出來るなんて、考へられないこつた……いや、僕の言はなくちやならないことを聽き給へ。僕の言はなくちやならないことを聽き給へー　ねえ君、僕は自分のつとめはきちん〳〵とやつてゐる。ねえ、あの人はどんなに深切だか、ねえ、アルカーシャ、あの人は今日僕に銀貨で五十留くれたんだよー」

「本當かい、ワーシャ？　君に賞與を？」

「賞與、實は、それはあの人が自分の衣嚢から出したものなんだ。あの人はかう言つたよ、

『いや、君にはもう五ケ月もお金を上げなかつたね、君、よかつたら取つて置き給へ、有り難う、僕は君を滿足に思つてるんですよ。』……さうだ、本當だー『さうだ、君は僕のために無駄に仕事をしてる譯ぢやないんだ。』つてね。實際、あの人はさう言つた、あの人はさう言つたんだぜ。それで僕は涙が出て來たよ、アルカーシャ。あゝ有難い、全くだー」

「ねえ、ワーシャ、その書類はすつかり寫してしまつたのかい？……」

「いや……まだ寫し終らないんだ。」

「ワー……シャー　僕の天使ー　君は何をしてゐたんだ？」

「いゝかい、アルカーシャ、そんなことはどうでもいゝんだ。それは、あと二日とはかゝらないんだ、僕は十分暇がある……」

「どうして君はやつてしまはないんだい？」

「いゝんだよ、いゝんだよ。君がそんな恐ろしさうな顏をするんで、僕の氣持はあべこべになつてしまふよ、僕の心は痛んで來るよー　君はいつでも僕にこんな事をしてるんだ！　こいつは永久に泣いてばかり居る、おゝ、おゝ!!　まあ、一寸考へて見給へ、どうしたといふんだ？　いやさ、僕はそれをやつてしまふよ、勿論、やつてしまへるよ……」

「若しやつてしまへなかつたらどうだらう？」とアルカーディは飛び上りながら叫んだ。「そ

れにあの人は今日君に贈物をしたといふんぢやないか！　ところが、君は結婚しようとしてゐる……ちえつ、ちえつ！……」

「大丈夫だ、大丈夫だよ。」とシュームコフは叫んだ。「僕はすぐ書きに坐るよ、今すぐ坐るよ。」

「どうして君は打遣らかして置いたんだい、ワーシャ！」

「おゝアルカーシャ！　どうして僕が坐つて仕事なんかしてゐられたんだ！　僕はいゝ狀態にでもゐたのかね？　だつて、役所にゐてもね、僕はぢつとしてゐられないで、胸の鼓動を制へてゐられなかつたんだよ……おゝ！　おゝ！　さア、もう僕は徹夜で仕事するよ、明日の晩も明後日の晩もやりきりにやるよ――それで終れるんだ。」

「隨分殘つてるのかい？」

「邪魔しちやいけない、頼むから、邪魔しないでくれ、默つてゝくれ。」

アルカーディ・イワーノヴィチは、爪立ちで寢床の處へ行つて、坐つた。それから急に立ち上りたくなつたが、彼を妨げるであらうと思つて再び無理に坐つてしまつた。しかし彼は、興奮のためにぢつとして坐つてゐることは出來なかつた。あの賞與が、彼を全く顚倒させたことは明かであつた。そして歡びの最初の感動がまだ過ぎ去つてゐなかつた。彼は、シュームコフをちらりと見た。彼も微笑して彼を眺めかへした、そして彼に向つて指を抓つてみせて、それから嚴肅に顏をしかめて（恰も彼の全精力と彼の仕事の成功とがその顏に關つてゐるかのやうに）その眼を書類の上に結びつけた。

彼も矢張りまだその感激を制へられないでゐるやうだつた。彼は、絶えず、ペンを變へたり、椅子の中でもぢ〳〵したり、色々の物を整理し直したりして、それから仕事にとりかゝらうとした。けれども彼の手は震へて動かうとしなかつた。

「アルカーシャ、僕は彼女たちに君のことを話したよ。」と彼は、まるで丁度其時思ひ出しでもしたやうに、出し拔けに叫んだ。

「さう、」とアルカーシャは叫んだ。「そのことを今君に訊かうと思つてた所だ、さうかい？」

「あゝ、あとですつかり話さうね。勿論、こりや僕の失錯だが、四頁書かない內は何にも話さないつもりだつたといふことが、全く僕の頭から飛び出してしまつたんだよ、だが僕は君や彼女たちのことばかり考へてたんだ。僕はとても書けないよ、兄弟、僕は君のことばかり考へてるんだ……」

ワーシャは笑つた。

沈默がつゞいた。

「ひゆう！　何て恐ろしいペンだ。」とシュームコフは、困りきつてテーブルの上へそれを投

げつけながら叫んだ。彼は、また他のペンを執つた。

「ワーシャ！　いゝかい！　たつた一言だ……」

「よし、急いで言ひ給へ、これつきりだぜ。」

「まだ隨分殘つてるのかい？」

「あゝ、兄弟！」ワーシャは、まるで全世界にこの質問より以上に恐ろしい兇惡なものは何にも有り得ないかのやうに顏を顰めた。「一山もあるよ、恐るべき一山だ。」

「いゝかい、僕は或ることを考へたんだが――」

「何だい？」

「おゝ、何でもない、何でもない、書きつゞけ給へ。」

「もう六時過きだよ、ワーシャ。」

此處でネフェデーヴィチは微笑んで、ワーシャに向つて、ずるさうに目くばせした、それは或る臆病を以てなされたが、ワーシャがそれをどうとるか解らなかつた。

「えゝ、それは何だい？」ワーシャは、ペンを投げ出して、彼の顏をまともに見ながら言つたが、その顏は、興奮のために全く蒼白くなつてゐた。

「何だか分るかい？」

「後生だから言つてしまつてくれ給へ、何だと言つたら？」

「言ふがね、君は興奮してるね、君はまだどれ程もやつてないんだらう……一寸、一寸だ！　話すよ、話すよ――いゝかい。」ネフェデーヴィチは、喜びの餘り寢床から飛上つて、ワーシャの口をきくのを妨げて、凡ゆる異議を全力を以て防ぎとめようとし乍ら言つた。「第一に落著かなけりやいけない、氣を鎭めなくちやいけない、駄目かい？」

「アルカーシャ、アルカーシャ！」ワーシャは、その椅子から飛び上りながら叫んだ。「僕は徹夜するよ、本當に徹夜するよ。」

「勿論だ、勿論だ、君は朝まで床に就きやしないよ。」

「床になんか就くもんか、僕は全く床には就かないよ。」

「いや、それはよくない、そりやよくない、眠らなくちやいけない、五時には床に就きたまへ。僕が八時に起してやるよ。明日は休みなんだ、君は終日坐つて書いてられるんだ……それから夜と――だが、君、隨分澤山殘つてるのかい？」

「あゝ、見給へ、見給へ！」

ワーシャは、興奮と不安とに震へながら書き物を示した。「見給へ！」

「兄弟、そんなには無いぢやないか。」

「ねえ君、もう少しあるんだよ。」とワーシャは、自分の出掛けるか出掛けないかの決斷が、友の上に關つてでもゐるやうに、ネフェデーヴィチをおづ〳〵と見ながら言つた。

「どの位？」

「二包だ。」

「えゝ、その位何だい？　さあ、僕は話すぜ、それは書き終れるよ、誓つて、書き終れるよ！」

「アルカーシャ！」

「ワーシャ、いゝかい！　今夜は、新年の前の晩で、誰でも家族と一緒に家にゐるんだ。君と僕とだけが、家庭も親類も持つてゐないんだ……おゝ、ワーシャ！」

ネフェデーヴィチは、ワーシャを捉へて、その獅子のやうな腕に抱きしめた。

「アルカーシャ、それはきまつてるさ。」

「ワーシャ、おい、僕はこれが言ひたかつた丈けなんだよ。ねえ、ワーシャ――聽き給へ、脚曲りさん、聽き給へ！……」

アルカーディは、その口を開けたまゝでやめた。何故なら彼は喜びの爲めに口がきけなかつた。ワーシャは、彼の肩を捉へて、その顏を覗き込んで、そして彼の代りに言つてやらうと欲するかのやうに脣を動かしてゐた。

「それで。」と彼はたうとう言つた。

「今日あの人達の處へ僕を連れてつてくれ給へ。」

「アルカーディ、あすこへお茶を飲みに行かう。僕は言ふがね、言つとくがね、僕らは新年になるまであすこに居るのはよさうよ、それより早く歸つて來ようね。」とワーシャは本當に感激して叫んだ。

「つまり、二時間だけ行くんだ、それより多くもなく少くもなく……」

「それから僕の書き終へるまでは別れてるんだ……」

「ワーシャ、おい！」

「アルカーディ！」

三分間後にはアルカーディは彼の一番上等の著物を著てしまつてゐた。ワーシャは、ブラッシュをかけた許りであつた、何故なら彼はそのズボンも變へない程仕事を急いでゐたから。

彼等は、大急ぎで町へ出た。二人共負けず劣らずに愉快であつた。間の途はペテルブールグ通りからカロームナまでである。アルカーディ・イワーノヴィチは、大膽に勇しい歩調で歩い

た、その歩き方ばかり見ても人は、彼がそれ以上に幸福で晴々してゐた友の善い運命を如何に喜んでゐたかを見ることが出來た程であつてゐたが、その態度は、十分威嚴のあるものであつた。ワーシャは、もつと小きざみに早足で歩いまでにこれ程具合よく歩いてゐる彼を見たことはなかつた。その瞬間に彼は、彼に對して本當に一層敬愛を感じた。そしてワーシャの體の缺陷、それを讀者はまだ知らないであらうが（ワーシャはいくらか不具なのであつた）それは常にアルカーディ・イワーノヴィチの深切な心に愛すべき同情の感を齎らしたものであつたが、それは今アルカーシャが彼に對して感じた深い優しさを助長してゐた。その優しさにはワーシャは凡ゆる點で相應しかつた。アルカーディ・イワーノヴィチは、幸福で泣き出しさうな氣がしたが、自分で制へた。

「何處へ行くんだい、何處へ行くんだい、ワーシャ？　こつちの方が近いよ。」ワーシャがヴォズネセンキイの方角へ曲らうとするのを見ると彼は叫んだ。

「默つてゐたまへ、アルカーシャ。」

「本當に近いんだよ、ワーシャ。」

「どうしてだか知つてるかい、アルカーシャ？」ワーシャは、喜びに震へる聲で神祕的に始めた。「話さうか、僕はね、リザンカに一寸した贈物を持つて行きたいんだよ。」

「どんな贈物を？」

「此處の角にね、兄弟、ルルー夫人の家があるんだよ、素晴しい店がね。」

「成程ね。」

「帽子だ、君、帽子だよ、今日僕はそりや可愛らしい帽子を見たんだよ。訊いてみたらね、それはマノン・レスコオ型だと言つたよ——素敵なもんだ。櫻色のリボンがついてるんだ、でも若しそれが高くなければ……アルカーシャ、高くつたつて……」

「君はいゝ加減な詩人以上だと僕は思ふね、ワーシャ。行かう。」

彼等は駈け出した。そして二分間後にはもうその店にはひつて行つた。彼等は、ちぢれ毛の眞黒な眼の佛蘭西婦人に逢つた、彼女は、そのお客達を一目見ると快活に幸福さうになつた、その爲めに彼等は、（さう言へるならば）尙一層幸福になつた。ワーシャは、喜びの餘りルルー夫人に接吻しようとしてゐた程であつた……。

「アルカーシャ、」彼は、大きなテーブルの上に載つてゐる小さい木製のスタンドの上の、凡ゆる立派な美しい品物を偶然にちらりと見ながら、低い聲で言つた。「氣持のいゝ物があるね！　あれは何だらう？　此れは何だらう？　例へばこいつは、この可愛いゝ、ねえ君？」ワーシャは、ずつと向うにある氣持のいゝ帽子を指しながら私語いたが、それは彼が買はう

としてゐたものではなかつた。何故なら彼は、他の隅に置いてある例の本當の有名な奴を既に遠くから見附けて、ぢつとそれに眼をそゝいでゐた。彼は、誰かがそれを盜みはしまいかとでも思つてゐるか、それともその帽子そのものに翼が生えて、ワーシャのとるのを妨げようとして空に舞ひ上つてしまひはしないかとも思つてゐるやうな、そんな樣子でそれを見詰めてゐた。

「そら、」とアルカーディ・イワーノヴィチは、或る一つを指しながら言つた。「僕はこれがいゝと思ふね。」

「おや、アルカーシャ、君もなか〳〵信用出來るね。僕はその君の趣味のために君を尊敬する氣になるんだよ。」とワーシャは、その心の優しさを以てアルカーシャに意地惡く巫山戯ながら言つた。「君の帽子も美しいが、まアこつちへ來給へ。」

「何處にもつと善いのがあるんだい、兄弟？」

「そら、こつちだよ。」

「あれか。」とアルカーディは、疑はしいやうに言つた。

けれども、ワーシャが堪らなくなつて、獨りでに飛んで行きさうに見えてゐたスタンドから、大變いゝお客の手にたうとう落ちたのが喜ばしいとでもいふやうに、それを取り下ろして、そのリボンや襞布やレースのさら〳〵いふ音が聞えた時、アルカーディ・イワーノヴィチの力强い胸からは思ひがけない歡びの叫び聲が破れ出た。爭ふべからざる威嚴と、趣味に關する卓越とを持ち、謙遜から沈默を守つてゐたルルー夫人までが、本當に賞揚の微笑を以てワーシャに酬いた。その眼附や身振りや微笑のすべては、忽ちに、かう言つてゐるのであつた。「さうです、あなたは正當にお選びになりました。あなたはあなたを待つてゐる幸福に値する人です。」

「こいつ、愛嬌たつぷりに羞かしさうに隱れてゐたな。」とワーシャは、彼の優しい感情をその愛嬌たつぷりの帽子の方へそゝぎながら叫んだ。「お前は故意と隱れてたな、可愛いゝ奴め！」さうして、彼はそれに接吻した。が、彼はその實物に觸れることを恐れてゐたから、その周圍の空氣に接吻したのだつた。

「眞價と德とは隱れたれど、」アルカーディは、今朝讀んだ滑稽新聞からおどけたつぷりに引用しながら熱情をこめてさう附け加へた。「えゝ、ワーシャ？」

「ひやア、アルカーシャ！　今日は君の氣の利いたことを言ふね。僕は君が或る感じを出すだらうといふことを豫言するよ、婦人たちの言ふ如くね。ルルー奥さん、ルルー奥さん！」

「どういふ御用でございますか？」

「親愛なるルルー夫人。」

ルルー夫人は、アルカーディ・イワーノヴィチを見て、謙譲な微笑をした。

「今僕がどれ程貴女を讃美してゐるか、信じられますまい……失敬ですが、接吻させて下さい……」そしてワーシャは、店の主婦に接吻した。

彼女は、確かにこの時こんな亂暴者に對してその地位を支持するには凡ゆる彼女の威嚴を必要としたのであつた。けれども、ルルー夫人がワーシャの熱情を受けてしまつた所のその內からの天眞な禮儀と愛嬌とは、等しく適當なものであつたことを作者は主張する。彼女は彼を許した、そして如何に氣が利いて、如何に慇懃であつたらう、彼女はその場合に於ける態度の執り方を知つてゐた。どうして彼女がワーシャに腹を立てることなどが出來たらう?

「ルルー奥さん、いくらです?」

「五留でございますよ。」彼女は、新たの微笑を浮べて眞顏になりながら答へた。

「では、これは、ルルー奥さん?」とアルカーディ・イワーノヴィチは、自分の選んだのを指して言つた。

「その方は八留でございます。」

「さう、ねえ——そら、ねえー　さあ、ルルー奥さん、言つて下さい、どつちが綺麗か、どつちが優雅か、どつちが氣持いゝか、貴女にはどつちが似合ふでせうね?」

「あとの方のはお高うございますけれど、あなたのお選みになつたのの方が可愛らしうございますね。」

「ちや、それを貰ひませう。」

ルルー夫人は、非常にしをらしい紙を一枚持つて來て、それを包んでピンで留めた。そして、その包まれた帽子と一緒だとその紙は紙だけの時より餘程輕さうに見えた。ワーシャは、大事さうにそれを持つて、殆んど胸に抱くやうにして、ルルー夫人にお辭儀をして彼女に何か甚だ丁寧なことを言つて、それから店を出た。

「僕も色男だなア、色男たるべく生れついたんだね。」とワーシャは、音なき神經質な笑ひ方をしながら、そして自分の貴重な帽子を壓し潰さうと計畫してゐるのではないかと疑つて、通行人から身をかはしながら、さう言つた。

「いゝかい、アルカーディ、兄弟、」と彼は、一分間もたつと言ひ出した。そして彼の聲には勝利と、情愛とがほの見えてゐた。「アルカーディ、僕は實に幸福だ、實に幸福だよー」

「ワーシャー　僕がどんなに嬉しいか、えゝおい!」

「いや、アルカーシャ、駄目だよ。僕に對する君の愛情には限りがないことを僕は知つてる

が、現在僕の感じてるものの百分の一も君は感じることは出來ないよ。僕の心は、全くいつぱいだ、實にいつぱいだ！　アルカーシャ、僕はこれ程の幸福には値しない。僕はそれを感じてゐる、それを自覺してゐるんだよ。何故僕はこんなに幸福になれるんだらう？」と彼は言つた、彼の聲は息づまるやうな啜り泣きに充ちてゐた。「これを受けるに足りるだけ、僕は何をしたらう？　言つてくれ。見給へ、どれ程人間がゐるだらう、どれ程涙が流されてるだらう、如何なる悲しみがあるか、どれ程休みなしの勞働生活があるか、それに僕は、僕はこんな風に少女に愛されてゐる、僕は……。だが、君は自分で直ぐにも彼女を見るんだね、君は彼女の高尚な心を洞察するだらう。僕は低い位置に生れたが、今僕は、役も得てゐるし獨立した收入も得てゐる――僕の俸給さ。僕は體に缺陷を持つて生れた、僕は、いくらか不具だ。それにどうだ、彼女はこのまゝで僕を愛してゐるんだ。今日もユーリアシ・マスタコーヴィチが、あんなに深切で、あんなに丁寧で、あんなに情け深かつた、あの人は僕に屢々話しかけるといふ譯ぢやないんだ。あの人は僕の方へやつて來て、『いや、どうだね、ワーシャ、』（さうだ、本當にあの人は僕をワーシャと呼んだよ。）『君は、祭日に幸福を得ようといふ譯だね、え？』あの人は笑つたよ。

「『えゝ、實は、閣下、私はなすべき仕事があるのです。』だが、それから僕は勇氣を振り起して言つたよ、『で、多分、私は、幸福をも得ることになりますでせう、閣下。』僕は本當にさう言つたんだ。あの人は僕にすぐ金を呉れた、それから、まだ二言三言僕に言つた。僕は涙が出て來たよ、兄弟、本當に僕は泣いた、するとあの人も感動したやうだつたね。僕の肩を叩いて言つたよ、『ワーシャ、君が今感じてゐるやうに、いつも感じてゐ給へ。』つてね。」

ワーシャは、一寸默つた。アルカーディ・イワーノヴィチは側を向いた、彼もその拳で涙を拭いてゐるのであつた。

「そして、そして……」ワーシャは續けた。「僕は今まで君にこんなことを言つたことはなかつたが、アルカーディ……アルカーディ、君の愛情で僕は實に幸福になる、君がゐなかつたら、僕は生きられなかつたらう――いや、いや、何も言ふな、アルカーディ、君の手を堅く握らせてくれ給へ、握らせて……有……有難う……君……」又もワーシャは言ひ終れなかつた。

アルカーディ・イワーノヴィチは、身を躍らしてワーシャの頸にかじりつきたかつた、けれども、道を横切らうとしてゐた彼等は殆んどその耳許で「叱つ！　そら！」といふ金切聲を聞いたので、脅かされて興奮して甃石道の方へ走つて行つた。

アルカーディ・イワーノヴィチは、全く安心してゐた。彼は、ワーシャの喜びの爆發を、その時が例外の場合なのだといふことに歸した。彼は困惑してゐた。彼はこれまでに殆んどワ

ーシャの爲めに何にもしてやつてゐないといふことを感じてゐた。その殆んど何もしてやつてゐない自分にワーシャが感謝し始めた時には、彼は全く自分を恥かしく感じた。けれども、二人の前には凡ゆる彼等の生活があつた。そしてアルカーディ・イワーノヴィチは、一層樂々と息をした。

アルテミエーフ家では、彼等を待設ける事を全く思ひ留つてゐた。皆の人々が既にお茶に坐つてしまつたといふのが、現にその證據であつた！　そして老人（としより）といふものは、若い者が全く例外に見損つた時でさへ、若い者より時とすると一層慧眼であるやうに思はれる。リザンカは、「あの方はいらつしやらないわ、あの方はいらつしやらないわ、お母さん、私の心の中ではあの方はいらつしやらないやうに感じてゐるんですもの。」といふ考へを甚だ熱心に持つてゐたが、然るに彼女の母は、これに反して自分は、「あの人はきつと來る、留つてられるもんですか。駈けずり廻つてるでせうよ、新年の前夜だしお役所の仕事がある筈はないから。」といふことを感じてゐると斷言したのであつた。リザンカが戸を開いた時でさへ、彼女は少しも彼等に逢はうとは思ひもかけなかつた、それで彼女は彼等に出會すとは思ひもかけなかつた、彼女の心臟は捉へられた小鳥のやうに鼓動し、櫻んぼのやうに赧くなつた、實に櫻んぼそつくりであつた。まあ有難い。何てびつくりしたんでせう。「おゝ！」といふ喜

びに充ちた叫び聲が如何に彼女の脣から破れ出たことか。「嘘つきさん！　私の可愛い方！」彼女はその腕をワーシャの頸に投げて叫んだ。けれども、丁度ワーシャの背後に、彼の背中に隱れようとしてゐる如く、聊か當惑して立つてゐたアルカーディ・イワーノヴィチを見た時の彼女の驚愕を、その突然の混亂を思つても見給へ。彼は婦人たちの前では確かにぶまだつたに違ひない、實際、甚だぶまであつた、現に或る時なぞは事が起つて……だがそれは後にしよう。併しながら、諸君自身彼の立場に立つてみなければならないのである。笑ふべきことは何にもなかつた。彼は、上靴（ガローシュ）を履き外套を着、耳まで垂れてゐる帽子を被（かぶ）つて、入口の處に立つてゐたのだつた。その帽子を彼は急いで脫がうとしたのだが、悪いことに、色々のものが纏ひついて、編んである黄色い襟卷が（これが一層事を具合悪くしたのだが）その背中にからみついてしまつた。彼は、それをすつかりほぐして、出來る丈け速かに取り去つて、自分を具合よくしなければならなかつた。何故なら、誰もかも彼の具合よくなることを望んでゐたのだから。で、其時のワーシャはといへば、彼は當惑し苦しんでゐるワーシャで、勿論、いつもの同じ可愛い、深切なワーシャではあつたが、今は、憎むべき無慈悲なるワーシャであつた。「そら、」と彼は叫んだ。「リザンカ、僕のアルカーディを連れて來たんだよ。お前はこいつをどう思ふね？　こいつは僕の一番の親友なんだ、抱いてやつてくれ、接吻してやつてくれ、

リザンカ、先きへ接吻してやつてくれ、あとで――お前がこいつをよく知つた時――取り戻すことが出來るんだよ。」

さて、作者は讀者諸君に訊ねるが、アルカーディ・イワーノヴィチの爲すべきことは何であつたか？　そして彼は、其時やつと襟巻を半分ほどいた所であつた。作者は、ワーシャの過剩なる熱情を本當に恥ぢることがある。それは、勿論、善い心の徴ではある、が……それはぶまだ、見よいものではない！

たうとう、二人共中にはひつた……。母親は、アルカーディ・イワーノヴィチと近づきになることを言ふに言はれず喜んだ。「この方に就いては彼女はよく伺つてゐたんですね、彼女は……」けれども彼女は言ひ終らなかつた。部屋中に音樂のやうに鳴り響く「おゝ！」といふ歡聲が、言半ばに彼女を遮つたのである。素晴しいことだ！　リザンカは、自分の眼前に突然包を解かれた帽子の前に立つてゐた。彼女は、かくす如く微笑しながら、極度の單純さでその兩手を握り合せた……おゝ、神よ！　何故ルルー夫人はこれにも勝る可愛ゆき帽子を持つてゐなかつたのであらう？

おゝ、神よ！　だが、諸君は何處でこれより可愛いゝ帽子を見出すことが出來たらうか？　これは全く最上等のものであつた。何處で、諸君はこれ以上善いのを得ることが出來よう？

作者は眞面目にさう言つてゐるのである。戀人の側に於けるこの忘恩は、實に作者を憤らせるのである、而して多少傷つけられるのである。だが、讀者諸君、諸君自らこれを見給へ、この帽子の可愛いゝ愛より以上に何か一層美しいものが有り得るか？　さあ、これを見給へ……けれども、否、否、この作者の叱責は不用のことである。彼等は今まで作者と全く同感であつた。それは一時の氣迷ひ、盲目、感情の泥醉だつたのだ。作者は彼等を許さうとしてゐる……。しかし然らば諸君は見なくてはならない……許してくれるであらう、深切なる讀者諸君、作者はまだこの帽子に就いて語つてゐるのである。絹網で作られ、羽毛の如く輕く、廣い櫻色のリボンは、その絹網と襞布との間を過ぎるレースで掩はれ、そしてそのうしろには二筋の廣くて長いリボンが著いてゐる――それらは項の下へ稍々垂れるであらう……。帽子に必要なる事は、頭のうしろにまで稍々傾いてゐるといふことである。さあ、見給へ。諸君に訊ねるが、その後で……だが、諸君は見てゐないやうだ……諸君は、そんなことはどうでもいゝと思つてゐる。諸君は違つた方向を見てゐる……。諸君は二つの大きな、眞珠の如く大きな涙を見てゐる。それは、二つの眞黒な眼の中に浮び出て、睫毛の上で一瞬間震へ、その後、ルルー夫人の藝術品が形作つてゐたエーテルのやうな絹網の上に滴つたものである……。そして作者は再び當惑を感じるのであるが、その二粒の涙が、纔かにこの帽子に對す

る御禮なのであつた……。否、作者は、かくの如き贈物は平靜に與へられなければならない、といふことを欲する。その時始めてその十分なる價値が加へられ得るのである。作者は、告白するが、全く帽子のことに許り關つてゐる。

彼等は坐つた――ワーシャはリザンカと、そして老母はアルカーディ・イワーノヴィチと。彼等は、話し始めた。そしてアルカーディ・イワーノヴィチは自信を得た。作者は、彼のためにさう言ふことを喜ぶ。實際、誰も彼がさうなることを殆んど豫期しはしなかつたであらう。ワーシャに就いて二言三言話してから、彼は最も旨く、話を、その恩人（ペトロン）ユーリアン・マスタコーヴィチの方へ向けた。そして彼は非常にうまく話した、その問題が一時間も盡きなかつた程非常にうまく。如何に巧妙に如何に怜悧にアルカーディ・イワーノヴィチはユーリアン・マスタコーヴィチの或る特殊性に觸れ、さうすることを以て直接間接にワーシャに觸れたか、諸君は見られたに違ひないのである。母親は魅惑された、全く魅惑されてしまつた。それを自分でも認めてゐた。彼女は、故らにワーシャをそばへ呼んで、彼の友達は最も素晴しい愛すべき青年である、そして最も價値あることは彼が斯くの如き眞摯な、しつかりした青年であることだ、と言つたのであつた。ワーシャは、喜びの爲めに殆んど大きな聲を出して笑ひ出しさうだつた。その眞摯なるアルカーディが寢床の上で十五分間も自分を押し倒してゐたことを思ひ出してゐた。それから、母親は、彼女に從（つ）いて靜かに用心深く次の間にはひつて來るように彼に合圖をした。彼女はリザンカを、稍々不公平に取扱つてゐたと言はれても仕方がなかつたであらう。勿論溢るゝ如き心情に於いてではあるが、彼女はその娘を裏切る行爲をしたのだ、で、リザンカが新年にワーシャに與へようとしてゐた贈物をこつそりと彼に見せたのであつた。それは、數珠玉と金で飾られた甚だ精選な意匠の紙挾であつた。片側には全く生きてゐるやうな疾走せる鹿が描かれてゐた、實によく出來てゐた！　又片側にはこれも亦素晴しくよく似てゐる或る名譽ある將軍の肖像があつた。ワーシャの歡喜は到底表し得ない。その間、客間に於いては時間が空費されてゐた譯ではなかつた。リザンカは、眞直にアルカーディ・イワーノヴィチの方へ歩いて行つた。彼女は、彼の手をとつて何事かに就いて彼に禮を言つてゐた、そしてアルカーディ・イワーノヴィチは、彼女がその貴いワーシャに賴りきつてゐることを推知した。リザンカは、實際、深く感激してゐた。彼女は、アルカーディ・イワーノヴィチがその許嫁の非常な親友で、非常に彼を愛し、彼の面倒を見、有力なる忠告をして一歩一歩彼を守つてくれてゐたことを聞いて知つてゐた。それが爲めには、彼女は彼に感謝せざるを得なかつた、報恩を感じ、アルカーディ・イワーノヴィチが、たとへワーシャの半分だけでも彼女を好いてくれゝばいゝが、といふことを望まないではゐられなかつた、それ程で

あつた。それから彼女は、彼に質問をし始めてワーシャが自分の健康に注意してゐるかどうか、と訊ね、彼の著しく衝動的な性格と、人間及び實生活に對する知識の缺乏とに關する或る憂慮を表した。彼女は、間もなく自分が嚴格に彼の面倒をみてやる、そして彼の運命に氣をつけ、大事にしてやるのだと言つた。それから最後に彼女は、アルカーディ・イワーノヴィチも二人を離れないで二人と一緒に生活するがいゝといふことを望んだ。

「私たち三人は一人のやうに暮しませうね。」と彼女は、非常に子供らしい熱情を以て叫んだ。

けれども、もう行く時間が來た。彼等は、勿論、引きとめようとした。しかしワーシャは、それは出來ないことだときつぱり答へた。アルカーディ・イワーノヴィチも同じやうに言つた。勿論、その理由が訊ねられた、そしてユーリアン・マスタコーヴィチからワーシャに任せられた爲すべき仕事があつて、それは翌日の朝には是非手渡ししなくてはならない、それにまだそれは殆んどやりかけのまゝ拋つてあるのだといふことが早速明かになつた。母親は、これを聞くと溜息をついたが、リザンカは全くびつくりしてしまつて、その驚きの內にワーシャを急き立てゝ行かせた。最後の接吻はこの急ぎの中でも完全になされた。簡單で、それに急いでゐたのだが、それは矢張り一層暖かな一層熱烈なものであつた。たうとう彼等は別れた、そして二人の友達は家へ出掛けた。

町へ出るが早いか、すぐ二人は互ひにその印象を打開けて話し始めた。だが、彼等はそれをしずに居られたらうか？　實際、アルカーディ・イワーノヴィチは、リザンカを愛してゐた、全く愛してゐた。そして、幸福なるその人ワーシャを措いて誰にその感情を一層よく打開けることが出來たらう。そして、彼はさうなした、彼は羞しがらずに、すべてを早速ワーシャに白狀した。ワーシャは、心から笑つた、そして非常に愉快になつた。そして、これは二人を今までよりも一層親しくするに必要だつたすべてのことだつたのだと言ひさへした。「君は僕の感情を言ひ當てたよ、ワーシャ、」とアルカーディ・イワーノヴィチは言つた。「さうだ、僕は、君を愛するやうにあの女を愛する。あの女は君の天使であると同樣、僕のよき天使ともなるだらう、何故なら君の時やかな幸福は僕の上にもそゝがれるだらうからね、そして僕は、その暖かさの中に溫まれるんだから。あの女は僕のためにも家を守つてくれるだらうよ、ワーシャ。僕の幸福はあの女の手の中にあるんだ。君に對してするやうに、あの女を僕のために家を守らしてくれ給へ。さうだ、君に對する友情は、あの女に對する友情だ。君たちはもう僕にとつては別々ぢやないんだ、一人の代りに君らしい二人の人間を僕は持つことになる……。」アルカーディは、感情がいつぱいになつてやめたが、ワーシャは、その女の言葉によつて腹の底

まで動かされたのであつた。實は、彼はアルカーディからさういふ種類の何物をも期待してはゐなかつた。アルカーディ・イワーノヴィチは、きまつて、甚だお喋りの方ではなかつた、どつちかといふと夢想を好む方だつた。今、彼は最も激刺とした、最も新鮮な、虹色の白日夢にはひつた。「どれ程僕は君たち二人を守り、愛するだらう。」と再び彼は始めた。「第一にね、ワーシャ、僕はすつかりの、一人殘らずの君の子供の教父になるよ。それから第二には、ワーシャ、僕らは未來のことで奮發しなくてはならないぜ。僕たちは道具を買はなくちやならない、そして家を持つて、君とあの女と僕とは銘々一つ宛部屋を持つんだ。どうだい、ワーシャ、僕は明日貸家を探しに驅け廻るよ！　三つの……いや、部屋は二つでいゝ、そんなには要らないね、僕は誓つて言ふがね、ワーシャ、今朝僕は馬鹿なことを言つたよ、金は十分あるだらうよ、だつて、僕はあの女の眼を覗き込むや否や、十分暮して行ける、とすぐ思つたんだ。それは全くあの女の爲めだらうよ。おゝ、僕らは働かうね！　僕らは、家を借りるのに二十五留位までやつてみるんだね。何をおいても家を借りるんだね、兄弟。いゝ部屋……それですぐ人間は愉快になつちまふんだ、その夢は最も輕快な色彩を帶びて來るんだ。で、それに、リザンカが僕ら二人のために財布を握つてゝ呉れるだらう、一錢も無駄費ひなんかしまいよ。僕が料理屋へ行くだらうなんて、君は思ふのかい？　君は僕をどう見てゐるんだ！

どんなことがあつたつて行くもんか。それから僕らは賞與を得る、報酬を得る。何故つて僕らは役所にゐても熱心だらうからね——おゝ！　僕らは働かうよ、野で勞働する牡牛のやうに……まあ、思つても見給へ。」そして、アルカーディ・イワーノヴィチの聲は、喜びの爲めにかすかになつた。「出し抜けに、そして思ひがけなく、二十五留か三十留の金が……何時だつて例外といふことはあるんだからね。帽子とか襟卷とか、可愛いゝ靴下とかいふものも要るだらうからね。あの女は僕に襟卷を編んでくれなくちやならない、見給へ、僕のしてゐるのは何んて恐ろしいもんだらう、きたならしく黄色くてさ、今日は僕をひどく困らせやがつた！　だが、君はいゝのをしてゐたね、ワーシャ、僕が狼狽しきつてる時君は僕を紹介するなんて……だが、もうそんなことはいゝさ。それから、おい、いゝかい、僕はすつかり銀製のものを約束するよ。僕は君に何か一寸した贈物をしようと思つてるんだ——それは名譽あることとなるよ、僕の虚榮心を喜ばせるだらうよ……。僕の賞與はふいになりはしないよ、きつと。君は、それがスコロホードフに與へられてしまふなんて思やしないかい？　心配するな、あいつの衣襲に落ちるやうなことはないんだ。僕は君に銀のスプーンを買つてやるぜ、兄弟、いゝナイフも——銀ぢやない總金の奴をね。それから胴衣、これは僕自身の胴衣だ。僕は立派な人間になる、勿論。唯だ、今はね、兄弟、君は辛抱してゐなくちやいけない、辛抱し續

けて働かなくちやいけないよ、僕は杖を持つて君を監視するよ、兄弟、今日と明日と、それから夜中はね。僕は、君を仕事で苦しめるぜ。やつてしまへ、急いで、やつてしまへ、兄弟。やつてしまへば、それからは、また晩を暮せる、また僕ら二人は幸福になる、ロト（一種の骨牌遊び。）をやらうね。僕らはあすこで晩を過すんだ、——おゝ、素敵だなー　おゝ、畜生！　何だつて、僕は君を助けることが出來ないとは忌々しいこつたなあ。僕は、やりたいんだぜ、君の代りに皆書いてやりたいんだぜ……何だつて僕らの筆蹟は同じでないんだらう？」

「さうだ、」とワーシャは答へた。「さうだ、僕は急がなくちやならない。もう十一時にやなんだらう、急がなくちやならない……仕事だ！」そして、かう言ひながら、今まで絶えず、友の感情の溢出に或る情熱的な應答をして、微笑したり遮らうとしたり交互にしてゐた、そして要するに最も懇篤な應答を示してゐたワーシャは、突然靜まりかへつて默り込んでしまつて、殆んど町を駈けるやうに歩いてゐた。それは恰も或る頗はしい考へが、彼の熱した頭を急激に凍らしてしまつたかのやうであつた。彼は忽ちに打萎れたやうに見えた。

アルカーディ・イワーノヴィチは、全く不安を感じた。一語か二語しか言はなくなつてしまつて折々無關係な感嘆の聲を放つたりしてゐるワーシャからは、彼の慌しい質問に對する答を得ることも殆んど出來なかつた。

「おや、君は一體どうしたんだい、ワーシャ？」彼は、殆んど同じやうな態度ではゐられなくなつて、たうとう叫んだ。「本當に君は大變不安になつてるのかい？」

「おゝ、兄弟、もうお喋りは澤山だよ！」とワーシャは、困惑して答へた。

「鬱ぎ込むなよ、ワーシャ——さア、さア。」アルカーディは遮つた。「だつて、僕は、君が僅かな間に、隨分澤山書けることを知つてるんだからねー　何でもないぢやないか？　君はたゞそれに對する才能を持つてるんだ！　君は急ぎの時には早く書けるんぢやないか。向うぢや、君の寫したのを石版にとらうといふ譯でもないんだ。隨分時間はあるよ！……ただ、君は今は興奮してるからね、だから、うつかりしてしまつて、仕事がわけなくいかないだらうね。」

ワーシャは、返事をしなかつた、といふよりは、何かぶつ〳〵獨り言を言つてゐた。そして彼等は二人共、本當に不安さうに家へ駈けて歸つた。

ワーシャは、すぐに書類の處に坐つた。アルカーディ・イワーノヴィチは、靜にして默つてゐた。彼は、ワーシャをぢつと見戍りながら、音のしないやうに著物を脫いで寢床へ行つた。……或る苦しみが彼を捉へた……。「彼はどうしたんだらう？」だん〳〵白くなつて行くワーシャの顏を、その熱した眼で見詰めながら、彼が動く度毎に表はれた不安を以て、彼は考へて

ゐた。「おや、手が震へてる……何て馬鹿なこつたー　何で俺は二時間ばかり眠るやうに忠告しないんだらう？　兎に角あの神經的な、興奮だけを眠り和げてしまふまでだ。」ワーシャは、丁度一頁終つたところであつた、彼は眼をあげて偶然にアルカーディをちらと見たが、すぐ眼を伏せて再びペンを採り上げた。

「いゝかい、ワーシャ、」とアルカーディ・イワーノヴィチは、突然言ひ出した。「今、一寸眠る方がよかないかしら？　だつて、君は全くの熱病だぜ。」

ワーシャは、困惑して、殆んど怒つてアルカーディをちらと見たが、返事をしなかつた。

「ねえおい、ワーシャ、自分から病氣になるやうなもんだぜ。」

ワーシャは、忽ちに考へを變へた。「お茶を飲んだらどうだらう、アルカーディ？」と彼は言つた。

「どうなるつてんだい？　えゝ？」

「よくなるだらうよ。僕は眠らない、床にははひらない！　僕は書きつゞけるんだ。だが今一寸休んでお茶を飲みたいんだ、さうすれば一番いけない瞬間が過ぎちまふんだ。」

「上等だ、ワーシャ、素晴しい考へだ！　全くさうだ、僕は、さう言ひ出さうと思つてたんだよ。で、何故さうする氣にならなかつたんだか自分でも解らないんだ。だがね、マーヴラは起きまいよ、あいつは何があつたつて眼を覺さないんだからね……」

「本當だ。」

「だが、何でもないこつた。」とアルカーディ・イワーノヴィチは、寢床から飛び上りながら叫んだ。「僕が自分でサモヴールをよくして來よう。始めてぢやないんだ……」

アルカーディ・イワーノヴィチは、臺所へ駈けて行つて、サモヴールの支度をした。ワーシャは、其間も書きつゞけてゐた。アルカーディ・イワーノヴィチは、その上、着物を著てパン屋へ走つて行つた、そのお蔭でワーシャは一晩腹をすかさずにゐることが出來たのであつた。十五分後には、サモヴールはテーブルの上に載つてゐた。彼等は、お茶を飲み始めたが、會話は活氣がなかつた。ワーシャは、まだ茫然としてゐるやうであつた。

「明日は、」と彼は、たうとう口をきつて今それを思ひ出したかのやうに言つた。「新年のお祝ひに行かなくちやならない……」

「そんな必要はあるもんか。」

「おゝ、兄弟、行かなくちやならないよ。」とワーシャは言つた。

「だつて、何處もかも僕が行つて君の代りに訪問帳に署名して來てやるぜ……君は行かれやしないのぢやないか？　君は明日は仕事するんだ。今夜も君は仕事しなくちやならない、朝

の五時まで、僕の言つたやうにね、それから床にはひるんだ。さうしないと明日は何も出來やしないからね。僕が、きつかり八時に起してやるよ。」

「だが、大丈夫だらうか、僕の代りに君が署名しても？」ワーシャは、半ば同意しながら言つた。

「だつて、さうするのが一番いゝぢやないか？　誰だつてそれをやつてるんだよ。」

「僕は本當に恐ろしい。」

「どうして、どうしてだい？」

「そりや、君、他の人は大丈夫だが、ユーリアン・マスタコーヴィチは……あの人は僕にあんなに深切にしてくれるんだ、ねえ、アルカーシャ、それに、あの人が僕の筆蹟でないことに氣がついたら――」

「氣がつくだつて！　えゝ、何て奴だらう、君は、本當に、ワーシャ！　どうしてあの人が氣がつくもんか？……おい、ねえ、僕は實によく君の署名に似せることが出來るんだよ、全く同じに立派に書くよ、誓つて、僕は出來る。何て馬鹿なこつた！　誰が氣がつくもんか？」

ワーシャは、返事をしなかつたが、急いでお茶を飲み干した……。それから彼は、疑ひ深く頭を掉つた。

「ワーシャ、おい！　あゝ、うまくいきさへしたらなア！　ワーシャ、どうした、え、脅かすなよ！　いゝかい、ワーシャ、僕はもう床にはひりやしないよ、眠らうとはしないよ！　見せてくれないか、どの位殘つてるんだか？」

アルカーディは、ワーシャのその時の樣子を見ると、すつかり氣落ちがして、口もきけなかつた。

「ワーシャ、どうしたんだい？　何を君は考へてるんだい？　何だつてそんな風をしてるんだい？」

「アルカーディ、僕は本當に明日は、ユーリアン・マスタコーヴィチの處へお目出度をしに行かなけりやならないよ。」

「よし、そんなら行き給へ！」アルカーディは、不安な期待に於いて、眼を見開いて彼を凝視しながら言つた。「では、ワーシャ、成るべく早く書き給へ、僕は君のためを思つて忠告してるんだぜ、本當だよ！　ユーリアン・マスタコーヴィチは、君の書いたのが特に氣に入るのは、それが讀み易いことだつて、幾度言つてたか知れないよ。だが、書き物は手本通りによく判然してゐなくてはならないといふのは、スコロブレーヒンの心配することなんだ、さう

だらうさ、奴はあとで自分の子供に寫させるためにその紙を衣嚢へ入れて家へ持つて歸るんだからね、奴は手本を買ふことが出來ないんだ、あの馬鹿者は！　ユーリアン・マスタコーヴィチは、いつまでも言つてるよ、いつでもしつこく言ふんだよ、『讀み易い、讀み易い！』つてね。……どうしたんだ、ワーシャ？　僕は君にどう話したらいゝのか、本當に分らないよ……全く僕を脅かすよ……君の鬱ぎ込んでるのを見ると堪らないよ。」

「大丈夫だ、大丈夫だ。」とワーシャは言つた。そしてがつかりしたやうに椅子に背を落した。アルカーディは、びつくりした。

「水を飲むかい？　ワーシャ！　ワーシャ！」

「いゝんだ、いゝんだよ、」とワーシャは、彼の手を握りしめながら言つた。「大丈夫だよ、たゞ一寸悲しくなつたんだ、どうしてだか解らないけれど。何か他のことを話した方がいゝんだ、そのことは忘れさせてくれ。」

「落著けよ、どうか、落著いてくれ、ワーシャ。君はうまくやつてしまへるよ、僕の名譽にかけて言ふが、きつとやつてしまへるよ。だがたとひ、やつてしまへなかつたとしたつて、それが何だ？　君は、まるで罪でも犯したやうに言つてるんだものゝ！」

「アルカーディ、」ワーシャは、相手が全くびつくりして了つた程、意味ありげにアルカーディを眺めながら言つた。何故なら今までにワーシャはそれ程混亂してゐたことは決してなかつたから……。「若し僕が先のやうに一人でゐるんだつたら……いや！　そんなことを言ふつもりぢやないんだ。僕は友人として君に話したいと思つてる、君に打開けて……だが、それにしてもどうして君は苦しいんだらう？……ねえ、アルカーディ、或る者には多くのものが與へられてゐる、が、他の者は、僕みたやうにつまらないことをしてゐる。いゝかい、若し報恩か、感謝か、君に期待をおいてるなら……それでも君はそれを與へることは出來ないかい？」

「ワーシャ、君の言ふことはちつとも解らないね。」

「僕は決して忘恩ぢやなかつた。」ワーシャは恰も自身に話すやうに、穩かにつゞけた。「だが、若し僕が自分の感じてゐることをすつかり表はすことが出來るとしたら、まるで……まるでね、アルカーディ、僕が本當に忘恩であるやうな氣がするんだ、それを考へると僕は殺されるやうだ。」

「それからどうするんだ、それからどうするんだ！　まるで、報恩といふことが、君が間に合ふやうに寫し終るといふことばかりを意味するやうだね？　君が言つてることを一寸考へて見給へ、ワーシャ？　それで報恩といふことを表現しきつてるのかい？」

ワーシャは、忽ち黙り込んでしまつた。そして眼を見開いてアルカーディを見てゐたが、まるで、その思ひもかけない議論が凡ゆる彼の疑念を晴したかのやうであつた。彼は微笑さへ浮べてゐた、が、まもなくその同じ憂鬱な表情が彼の顔に戻つて來た。アルカーディは此の微笑を、彼の不安がすつかり晴れた徴(しるし)と見做し、それに續いた表情を、うまくやらうと決心した徴候と見做して、非常に安心した。

「よし、兄弟、君は起きてくれるだらうね、」とワーシャは言つた。「僕を見てくれ給へ、もし僕が眠り込んでしまつたら、恐ろしいことになるんだ。もう僕は仕事を始めよう……アルカーシャ?」

「何だい?」

「おゝ、何でもない、僕はたゞ……僕は……」

ワーシャは落ち著いた、そしてそれ以上、何にも言はなかつた。アルカーディは寢床にはひつた。二人共、彼等の友アルテミエーフ家に就いては一言も言はなかつた。恐らくは二人ながら、自分がいくらか責任を感じ、彼等のなした遊山を辯護してはならないと感じてゐたのであらう。アルカーディは、まだワーシャのことを心配してゐたが、まもなく眠りに落ちた。翌朝、きつかり八時に眼を覺ました時には、彼は自分でもびつくりした。ワーシャは、蒼い顔をして疲れきつて、手にペンを握つたまゝ椅子の中で眠つてゐた。蠟燭は燃えきつてゐた。マーヴラが、臺所では急がしくサモヴールの支度をしてゐた。

「ワーシャ、ワーシャー」アルカーディは、驚いて叫んだ。「何時君は眠つたんだい?」

ワーシャは、眼を開いた、そして椅子から飛び上つた。

「おゝー」と彼は叫んだ。「いつのまにか眠つてしまつた……。」

彼は、急いで書類を見た——すべてがきちつとしてゐた、すべてが整頓してゐた、インキの汚點一つなかつた、その上に蠟燭の脂の落ちたあともなかつた。

「七時頃に眠つてしまつたに違ひないよ、」とワーシャは言つた。「夜は隨分寒いねえ! お茶を飲まう、それから又續けるんだ……。」

「具合はいゝかい?」

「あゝ、あゝ、大變いゝ、もう大變いゝよ。」

「おい、ワーシャ、新年お目出度う。」

「君もお目出度う、兄弟、君にも同じくお目出度うだ、ねえ、おい。」

彼等は、抱擁し合つた。ワーシャの顏は震へ、その眼はうるんでゐた。アルカーディ・イワーノヴィチは默つてゐた、彼は悲しい氣がした。彼等は、急いでお茶を飲んだ。

「アルカーディ、僕は決心したよ、僕はユーリアン・マスタコーヴィチの處へ自分で行かうと思つてるんだ。」
「どうして、あの人は氣がつきやしないのに――」
「だが、僕の良心が氣持が惡いんだ、兄弟。」
「しかしねえ、此處にかうして坐つてるのもあの人の爲めなんぢやないか。君がへと〳〵に疲れきつてるのもあの人の爲めなんだ。」
「もう澤山だよ！」
「ねえ、解るかい、兄弟、僕も一廻り出掛けて來るぜ……。」
「何處へ？」とワーシャは訊ねた。
「アルテミエーフ家へさ。僕のと一緒に君の分もお目出度うを言つて來るよ。」
「うれしい奴だな！　ぢや、僕は此處に坐つてるよ。そりや君のいゝ考へだと思ふね。僕は此處で仕事してる、時間を浪費しない。一寸待ち給へ、手紙を書かう。」
「さうだ、さうしろよ、兄弟、さうしろよ、まだ十分時間はある。僕はまだ、髮を梳つたり、髯を剃つたり、僕の最上の上衣にブラッシュをかけたりしなくちやならないんだ。ねえ、ワーシャ、僕らは滿足で幸福になるんだ。僕を抱いてくれ、ワーシャ。」

「あゝ、僕ら丈けならね、兄弟……」
「シュムコフさんは此處にいらつしやるんですか？」彼等は、階段の處に子供の聲を聞いた。
「さうですよ、可愛いゝ方、さうですよ。」とマーヴラは、客を請じながら言つた。
「何だい？　何だい？」とワーシャは、テーブルから躍り上つて、入口へ駈け出して行きながら叫んだ。「ペティンカ、君かい？」
「お早うございます。新年お目出度うございます、ワシッリイ・ペトローヴィチ。」とちゞれた黑い髮の美しい十歳になる子供は言つた。
「姉さんがあなたに宜しくつて。それからお母さんも。それから、姉さんの代りにあなたを接吻するようにつて姉さんが僕に言つてました。」
ワーシャは、その使者を捉へて空に差し上げて、非常にリザンカのによく似てゐた彼の脣に長い熱情的の接吻をした。
「接吻してやつてくれ、アルカーディ、」と彼は、ペーチャを渡しながら言つた。そして床には觸れずに子供は、アルカーディ・イワーノヴィチの力強い待受けてゐる腕に代へられた。
「君は何か朝飯に食べてかないか、坊や？」
「有りがたう、澤山です。僕たちはもう食べたんです、僕たちは、今日は早〳〵つから起きて

たの、皆は教會へ行つたの。姉さんはね、僕の髪を二時間もかゝつてちゞらして、油をつけたり、洗つてくれたり、ズボンをよくしてくれたりしたんですよ。だつて僕は昨日町でサーシュカと遊んで、ズボンを破いちやつたんですもの。雪投げをして遊んだの。」

「さうか、さうか、さうか！」

「それから姉さんは、あなたの處へ行くんだからつて著物を著せてくれたの、それから又頭に油をつけてくれて、それから本當に接吻してくれたの。姉さんはかう言つたんです。『ワーシャの處へ行つて、お目出度うをしていらつしやい、そして、あの人たちが幸福だかどうか、よく眠れたか訊いてらつしやいよ、そして……』まだ他のことを訊いて——おゝ、さうだ！　あなたが昨日話したお仕事は濟みましたかつて……　あなたがいらしつた時さう言つてた。あ、僕はすつかり書いて貰つて來たんだつけ。」子供は、一枚の紙片を衣嚢からとり出して讀みながら言つた。「さうだ、忘れるといけないつて。」

「もう直き濟むんだ！　ぢきだよ！　もう直きに濟みますつて、姉さんに言ふんだよ。僕は何でつたつて濟ましちまふよ！」

「それからまだ他にも……おゝ、さうだ、僕は忘れてた。姉さんがね、手紙と贈物を寄越したの、僕、忘れるところだつた！……」

「豪い！　おゝ、可愛いゝ奴！　そりや何處にあるんだい？　何處に？　これだね、おゝ！　どうだい、兄弟、彼女が書いてくれたのを見給へ。可——可愛いゝ、貴い奴！　ねえ僕は昨日僕に呉れるといふ紙挟を見たんだ、それがまだすつかり出來てないんで、彼女は『私の髪の毛を一房お送りします、あとのものはもう少し經つてから送ります。』と言つてるんだ。見給へ、兄弟、見給へ！」

そして、歡喜に押しつけられてるやうに、アルカーディ・イワーノヴィチに、房さりした眞黒な髪の毛の一捲を示した、そして彼は、それを情熱的に接吻して、心臟に一番近い胸の衣嚢にそれを藏つた。

「ワーシャ、僕がそのちゞれ毛で時計の下物を拂へてやらう。」アルカーディ・イワーノヴィチは、たうとう決然と言つた。

「それから、僕んとこではね、熱い犢肉を拂へるの、明日はその頭の料理だつて。お母さんはお菓子を拂へたいつてるんだけど……黍粥は出來ないんですよ。」と子供は一寸考へてから、興味ある品目の豫定を精算した。

「おゝ、何て綺麗な子供だらう。」とアルカーディ・イワーノヴィチは叫んだ。「ワーシャ、君は一番幸福な人間だよ。」

子供はお茶を飲んでしまつて、ワーシャから手紙と幾度もの接吻とを受取ると、前のとほり幸福さうに巫山戯ながら出て行つた。

「さあ、兄弟、」とアルカーディ・イワーノヴィチは、非常に嬉しくなつて言ひ出した。「何もかもが何て素敵なんだらうねえ、何もかもがうまく行つてる、萎れるな、心配するな。やつつけろ！　やつて終へ、ワーシャ、やつてしまへよ。僕は二時には歸つて來るよ、一廻りしてあすこへ出掛けて、それからユーリアン・マスタコーヴィチの處へ行く。」

「さうか、さやうなら、兄弟、さよなら……おゝ！　若しかして……いゝんだ、行き給へ、いゝんだ。」とワーシャは言つた。「そんなら僕は本當にユーリアン・マスタコーヴィチの處へは行くまいよ。」

「さよなら。」

「一寸、兄弟、一寸待ち給へ、あれ達にさう言つてくれ……いゝや、君がいゝと思ふことを何とでも言つといてくれ。彼女を接吻してくれよ……それからあとで何もかもすつかり僕に話すんだぜ。」

「あゝ、あゝ——いゝとも、そんなことはよく承知してるよ。この幸福が君を動顚させるんだ。すべてが出し抜けだからね、君は昨日からまるでいつもの君ぢやないよ。昨日の興奮がすんでゐないんだ。よし、きまつた。ぢや始め給へ、やつてしまひ給へ、ワーシャ。さよなら、さよなら！」

たうとう友達は別れた。アルカーディ・イワーノヴィチは、その朝中かゝつたが、ワーシャのことより他には何も考へることが出來なかつた。彼は、あの弱い、神經の激しい性格を知つてゐた。「さうだ、この幸福が彼を動顚させたんだ、俺は間違つてやしない。」と彼は己自身に言つた。「確かに彼は俺までも全く陰氣にしてしまつた、あの男は何かしら悲劇を作るんだ！　何て熱し易い奴なんだらう！　おゝ俺は彼を救つてやらなきやならない！　救はなくちやならない！」とアルカーディは、ほんの少しの心配を、實際全くつまらないことを、眞面目臭つて大げさにしてゐたことには氣もつかないで、言つた。やつと十一時に彼は、ユーリアン・マスタコーヴィチ家の門番所に著いた。その門番所で汚されて書散らされてある紙の上に、書き列ねられてゐる立派な名前のうしろへ自分のつまらない名前を書き加へようとしたが、ワーシャ・シュムコフといふ彼自身の署名を見た時、彼の驚きはどれ程であつたらう！　それは彼をびつくりさせた。「彼はどうしたんだらう？」と彼は考へた。丁度希望に燃えて快活になつてゐたアルカーディ・イワーノヴィチは、感情がひつくり返されたやうになつた。確かに厄介なことになるのだつた、がどんな風にであらう？　それにどんな形でであらう？

彼は、陰氣な前兆をもつてアルテミエーフ家へ行つた。彼は、最初からぼんやりしてゐたやうであつた、そして、一寸リザンカと話をしてるかと思ふと、彼の眼には涙が出て來た。彼は、本當にワーシャのことを心配してゐた。彼は、駈けて家へ歸つた、そしてネーヴ河の邊でワーシャその人とぶつかつた。ワーシャも、矢張り不安さうだつた。

「何處へ行くんだい？」とアルカーディ・イワーノヴィチは叫んだ。

ワーシャは、まるで悪いことをして捉まりでもした時のやうに立ち止つた。

「おい、何でもない、兄弟、僕は一寸散歩したかつたんだ。」

「君は怯へきれないで、アルテミエーフ家へ行かうとしてたんだね？　おゝ、ワーシャ、ワーシャ！　どうして君はユーリアン・マスタコーヴィチの處へ行つたんだい？」

ワーシャは、答へなかつた。しかし、やがてその手を振つて言つた。「アルカーディ、僕はどうしたんだか解らないんだ、僕は……」

「おい、おい、ワーシャ。僕には解るよ。氣を鎭め給へ。君は興奮してるんだよ。昨日からあまり激し過ぎてるんだよ。考へても見給へ、忍ぶことはわけないことなんだよ。誰でも君を愛してるんだ、すべての人が君のために何かしようとしてるんだ、君の仕事はうまく行つてるんだ。君はやつてしまふだらう、確かにやつてしまふだらう。君が或事を考へてたことは僕も知つてるよ、君は或事に就いて疑懼を持つてたんだ……」

「いや、もういゝんだ、もういゝんだ……」

「覺えてるかい、ワーシャ、覺えてるかい、前にも一度これと同じことがあつたぜ、君が昇進した時、君は喜びと感謝のあまりに全く熱して了つて、一週間といふもの君は仕事を滅茶滅茶にしてしまつたことがあつたのを覺えてるかい？　今もその時の君と丁度同じだ。」

「さう、さう、アルカーディ、だが今のは違ふよ、全くあれとは違ふんだよ……」

「どう違ふんだい？　すると多分仕事はちつとも急ぎぢやないんだらう、だが君は自分で自分を殺してゐるんだ……。」

「何でもないんだ、何でもないんだ。僕は全く具合がいゝんだ、何でもないんだよ。さあ行かう！」

「えゝ、君は家へ歸るのかい、あすこへは行かないで？」

「さうだよ、兄弟、僕がどの面さげてあすこへ行かれるものか？……僕は決心をかへた。ただ、君がゐないと獨りでぢつとしてはゐられなかつたんだ。君が僕と一緒に歸れば、僕はまた書きに坐るよ。行かう！」

彼等は、歩き出した、そして暫らく默つてゐた。ワーシャは急いでゐた。

「どうして君はあの人たちのことを僕に訊かないんだい？」とアルカーディ・イワーノヴィチは言つた。

「おゝ、さうだー　ぢや、アルカーディ、あれ達はどうだつたい？」

「ワーシャ、まるでいつもの君みたいぢやないぜ。」

「おゝ、大丈夫だ、大丈夫なんだよ。すつかり話してくれ、アルカーシャ。」ワーシャは、それ以上の説明を避けるやうに訊きたさうな聲で言つた。アルカーディ・イワーノヴィチは溜息をついた。彼は、ワーシャを見て全く落膽を感じた。

彼等に就いての彼の話は、ワーシャを勇氣づけた。彼は、多辯にさへなつた。二人は一緒に晩飯を食べた。リザンカの母親がアルカーディ・イワーノヴィチの衣嚢へ可愛いゝお菓子を一杯入れてくれた、それを二人は食べながら次第に愉快になつた。食事のあとでワーシャは、徹夜して坐るために一寸晝寢をすると約束した。實際、彼は横になつた。朝の中から、アルカーディ・イワーノヴィチは、どうしても斷るわけにいかない或る人からお茶に招かれてゐた。そこで二人は又別れた。アルカーディは、出來る丈け早く、出來るなら八時までには歸つて來ると約束した。三時間別れてゐるのが、三年ものやうに彼には思はれた。遂に彼はそこを出て、ワーシャの處へ飛んで歸つた。部屋の中へはひつてみると、其處は眞暗だつた。ワーシャは家にはゐなかつた。彼はマーヴラに訊いた。マーヴラは、彼は始終書いてゐたが少しも眠らないで部屋の中を歩き廻つて、それから一時間ばかり前に、三十分もすれば歸ると言つて駈け出して行つた。「そしてあの方がおつしやるには、アルカーディ・イワーノヴィチが歸つて來たらね、さう言つてくれ、婆さん、とね、」マーヴラは最後に言つた。「僕は散歩に出たんだから、とね。」そして彼は、三四回もその命令を繰り返したさうだつた。

「アルテミエーフ家へ行つたんだな。」とアルカーディ・イワーノヴィチは考へて、頭を掉つた。

一分間後には彼は、再び希望をとり戻して飛び上つた。

「彼はやつてしまつたんだらう、」と彼は考へた。「お終ひになつたんだ、彼は待ちきれないで、あすこへ駈け出してつたんだ。しかし、さうぢやない！　彼は俺を待つただらう……どうなつてるか覗いてみてやれ。」

彼は、蠟燭をつけて、ワーシャの書物机の處へ飛んで行つた。仕事は進捗してゐた、もう殘り少なになつてるやうに見えた。アルカーディ・イワーノヴィチが、それ以上に調べようとした時、ワーシャ自身がはひつて來た……。

「おゝ、君は歸つてるのかい？」と彼は、びつくりして叫んだ。

アルカーディ・イワーノヴィチは、默つてゐた。彼はワーシャに質問することを恐れてゐた。

ワーシャも、眼を落して、默つてゐた。そして紙を揃へ始めた。遂に二人の眼は出會つた。ワーシャの眼附は、アルカーディがそれを見た時震へ上つた程、懇願的な希求的な打碎かれたものがあつた。彼の心は震へ、一杯になつた。

「ワーシャ、僕の愛する者、どうしたんだい？　何がいけないんだい？」と彼は、飛びかゝつてその腕に抱きしめながら叫んだ。「説明してくれ、僕には君が解らない、君の落膽が。君どうしたんだい、僕の可哀想な苦しんでる兄弟？　何なのだい？　すつかり隱さずに話してくれ。たゞそんな樣子をしてるだけぢや――」

ワーシャは、しつかり彼を抱いた、そして何も言ふことが出來なかつた。彼は殆んど息をつくことも出來なかつた。

「いけない、ワーシャ、いけない！　さア、若し君が書いてしまはなければ、どうなんだい？　僕には君が解らない、君の苦しみを話してくれ。ねえ、それや君のためだ、僕が……おゝ愛する者！　おゝ愛する者！」彼は、部屋を歩き廻りながら、そして手當り次第のものを摑みながら言つた、まるで、すぐにもワーシャを救ふことを探してゐるかのやうに。「僕が明日君の代りにユーリアン・マスタコーヴィチの處へ行かう。僕が、延ばしてくれるやうに、あの人に頼まう――懇願しよう。君が苦しければ、僕が何もかもすつかりあの人に説明して來よう……。」

「駄目だ！」とワーシャは、壁のやうに白くなつて叫んだ。彼は、殆んど立つてゐられなかつた。

「ワーシャ！　ワーシャ！」

ワーシャは、氣を落著けた。彼の脣は震へてゐた。彼は何か言はうとしてゐたが、默つて痙攣的にアルカーディの手を握り締めることが出來る丈けであつた。彼の手は冷たかつた。アルカーディは、心配な憐れな疑念でいつぱいになつて彼に面と向つて立つた。ワーシャは再びその眼をあげた。

「ワーシャ、しつかりしろよ、ワーシャ！　君は僕の心臟を締めつけるやうだ、おい、友達。」

涙がワーシャの眼から迸り出た。彼は、アルカーディの胸に身を投げかけた。

「僕は君を欺いてたんだ、アルカーディ、」と彼は言つた。「僕は君を欺いてたんだ。許してくれ、許してくれ！　僕は君の友情に背いてたんだ……」

「何のことを言つてるんだい、ワーシャ？　どうしたんだい？」とアルカーディは、本當に驚き切つて訊ねた。

「見給へ！」

そして、ワーシャは絶望的な身振をして、抽斗から七個の厚い書き物をテーブルの上に投り出した。それは彼が寫してゐたのと同じものであつた。

「これは何だい？」

「これだけ、僕は明後日までにやつてしまはなけりやならないんだ。僕は四半分もやつてないんだ！　どうしてこんなことになつたかとは訊いてくれるな、訊いてくれるな。」ワーシャは、早速、彼を恐ろしく不幸にしてゐた所のことに就いて話しつゞけた。「アルカーディ、愛する友達、僕は一體どうしたんだか自分でも解らないんだ。夢から覺めたやうな氣持がするんだ。僕は何もしないで三週間を棒にふつてしまつたんだ。僕は……いつでも僕は……彼女に逢はうとしてゐる……僕の心は痛んでる、僕は苦しんでる……その譯の分らないことで……僕は書くことが出來なかつた。僕はそんなことを考へさへしなかつたんだ。やつと今、幸福が僕に近づいた時、僕は我に返つたんだ。」

「ワーシャ、」アルカーディ・イワーノヴィチは決然と言つた。「ワーシャ、僕が君を救つてやる。すつかり解るよ、そりや眞面目な問題だ、僕は君を救つてやらう。いゝかい！　聽き給へ！　僕は、明日ユーリアン・マスタコーヴィチの處へ行かう……頭を掉るなよ、いや、聽き給へ！

僕は、どういふ事が起つたか正確にあの人に話さう、さうさせてくれ……僕はあの人に說明するよ……僕は何でもするよ。如何に君が落膽してるか、如何に君が苦しんでるか、僕はあの人に話さう。」

「解るかい、君は今僕を殺すやうなことをしてるんだつてことが？」ワーシャは、恐れのために冷たくなりながら言つた。

アルカーディ・イワーノヴィチは、蒼くなつた。しかしすぐに自分を制へて笑つた。

「それだけかい？　それだけかい？」と彼は言つた。「誓ふよ、ワーシャ、誓ふよ！　君は恥かしかないのか？　さア、いゝかい！　僕は君を悲しませてゐるんだね。ねえ、僕は君を理解する。僕は君の心の中に何が起つてるのか知つてゐる。ねえ、僕らは五年間も一緒に住んでたんぢやないか、あゝ！　君は、さういふ深切な穩かな心の人間なんだ、しかし弱い、實に弱い。だが、リザヴェータ・ミハローヴナまでがそれは認めてゐるんだ。それに君は夢想家だ、それも惡いこつた。だん〳〵君はいけなくなつてくよ、兄弟。ねえおい、僕は君が欲してるものを知つてる！　君は、ユーリアン・マスタコーヴィチが夢中になつて、それに多分喜びから舞踏會でも催してくれることを欲してゐるんだ。君の婚約のためにね……止すよ、止すよ！　君は顏をしかめてるね。ねえ君、僕が一語言ふだけで君はユーリアン・マスタコー

ヴィチのために腹を立てゝゐる。もうその話は止さう。ねえ君、僕は君と同様にあの人を尊敬してるんだ。だがね、君が結婚しようとしてゐる今は全世界の何人も不幸があつてはならないと望んでるといふその僕の考へは、如何に君が辯じても、妨げられないんだ……さうだ、兄弟、君はかういふことを承認しなくちやいけないよ、例へばだね、僕が、君の最上の親友が、出し抜けに十萬の財産を受取るといふやうなことを望んでゐる、世の中のあらゆる敵同志が急に理由もなしに和解して、喜び合つて、それから多分君を訪問しに來るといふやうなことを望んでゐるんだ。ワーシャ、おい、僕は笑つてやしないよ、そりや本當だよ、ずつと前に君がその通りに言つたことなんだ、遠つた言ひ方でね。何故なら君は幸福なんだ、君は、すべての人が、絶對的にすべての人が忽ちに幸福になることを望んでゐるんだ。たつた獨りで幸福になつてることは君を傷つけるんだ。君を苦しめるんだ。そこで君は、早速全力を盡してその幸福に値するやうにならうと欲する、そして多分君の良心を滿足させる丈けの或る偉大な行爲をしようとするんだ。おゝ！　君の熱情、君の才能……さうだ、多分君の所謂報恩が現されなければならないところを丁度突然怠つてゐることの爲めに、君は如何に己自身を苦しめてゐるかといふことが、僕には解るよ。ユーリアン・マスタコーヴィチが君に對して持つてゐた期待に添はないやうなことを君がしたのを見て、あの人が顏を顰め、腹を立てさへするだらうと考へることが、君にとつては實につらいのだ。君が恩人として見上げてゐる人から非難をきくのかと思ふことが、君を傷つけるのだ——しかも君の心が喜びに充たされてゐる、そんな瞬間にね！　そして君は自分の報恩を誰のために浪費してるのか知らないんだ……そりや本當だらう？　さうだ、さうぢやないかい？」

アルカーディ・イワノーヴィチは、その聲は震へてゐたが、突然默つた。そして深い息をついた。

ワーシャは、愛情をこめてその友を見戍つてゐた。微笑がその口元を過ぎて通つた。彼の顏は、希望に輝くかのやうに晴々としてさへ來た。

「では、聽き給へ、いゝかい、」アルカーディ・イワーノヴィチは、有望になつて來たので、再び始めた。「君がユーリアン・マスタコーヴィチの信用を失ふやうになるわけはまるでないんだ……あるかい、おい？　そこに何か問題があるかい？　だからさうなんだよ。」とアルカーディは、飛び上りながら言つた。「僕は君のために自分を犧牲にする。僕は明日ユーリアン・マスタコーヴィチの處へ行く、反對するな。君は、君の過誤を大げさに考へて罪だなんぞと思つてるんだ、ワーシャ。ユーリアン・マスタコーヴィチは大量な慈悲深い人だ、その上、あの

人は君みたやうぢやないよ。あの人は、君や僕の言ふことをよく聽いてくれて、僕らを苦しみから出してくれるだらう、兄弟、ワーシャ。えゝ、君は落著いたかい？」

ワーシャは、眼に涙を浮べて友の手を握りしめた。

「もういゝ、もういゝ、アルカーディ、」と彼は言つた。「事はきまつた。僕は書き終へなかつた、それで大變いゝんだ。僕が書き終へてゐないなら、僕が書き終へてゐないといふ丈けのことだ。君が行く必要はないさ。僕がすつかりあの人に話さうよ、自分で行かうよ。僕はもう落著いてる、すつかり落著いてる。たゞ君が行つちやいけない……しかしいゝかい……」

「ワーシャ、ねえおい、」とアルカーディ・イワーノヴィチは、歡びに充ちて叫んだ。「僕は君の言つたことで判斷したよ、君が一層よく事が解つてくれて、我に返つてくれて、僕はうれしいよ。だが、君に何が起らうとも、どんなことが起らうとも、僕は君と一緒に行くよ、いいかい。ユーリアン・マスタコーヴィチの處へ行つて僕が何を話すかと思ふとそれで弱つてるんだらう、解るよ――だが、僕は一語も口をきかない、一語もだ、君が自分であの人に話すだらうからね。ねえ、君は明日行き給へ……いや、いや、行かない方がいゝ、此處で書きつゞけてる方がね、それで僕はこの仕事のことを探つて來るよ、これが大變急ぎのものか、さうでないか。きまつた時までになされなくてはならないものか、さうでないか。そして若し君が間に合はして書き終へないとしたらどうなるんだか。それから僕は君の處へ駈けて歸つて來る。どうだい、どうだい！　まだ望みがあるんだ。この仕事がそんなに火急のものでないのだとして見給へ――隨分素敵ぢやないか。ユーリアン・マスタコーヴィチは覺えてやしない、そこですべてが救はれるのだ。」

ワーシャは、疑ひ深く頭を掉つた。けれどもその感謝の籠つた眼は決してその友の顏を去らなかつた。

「おい、もう澤山だ、僕はぐんなりしてる、疲れきつてるんだ、」と彼は、溜息をつきながら言つた。「僕はもうそのことを考へたくないんだ。何か他のことを話さう。僕はもうどつち途書かうとは思はない。ねえ、丁度一章終る爲めに二頁かそこら書いてしまふだけにしようよ。いゝかい……僕はずつと前から君に訊かうと思つてたんだが、君はどうして、僕をさうよく知つてるんだらう？」

涙がワーシャの眼からアルカーディの手の上に落ちた。

「ワーシャ、僕がどれ程君を愛してるかといふことを君が知つたら、君はそんなことを訊きやしまいよ――さうだ！」

「さうだ、さうだ、アルカーディ、僕は知らない、何故つて、僕は何故君がそんなに僕を愛

するんだか知らないからね。さうだ、アルカーディ、解るかい、君の愛は僕を殺さうとさへしてるんだぜ？　知つてるかい、今までに幾度、特に僕が寢床の中で君のことを考へてる時に（何故なら僕は、眠りに落ちる時きつと君のことを考へてるんだ、）涙を流したことがあつたか。それを考へると僕は動悸がして來る……さうだ、君が僕を非常に愛してるといふことを考へるとね。だのに、僕は自分の心を樂にすることがどうしても出來ない、君に報いることが何も出來ないんだ。」

「おい、ワーシャ、君は何て奴だらう！　えゝ、今君はまるで動顚してるんだよ。」アルカーディは、さう言つたが、その瞬間心に痛みを覺えたのであつた。彼はその前日に町で起つた光景を想ひ出してゐた。

「馬鹿なこつた、君は僕を落著かせようとしてゐる、だが、僕は今までにこれ程落著いてこれ程幸福だつた時はないんだ！　いゝかい……聽き給へ、僕はすつかり話したいんだが君を傷つけることを恐れてるんだ……君はいつも僕に小言を言ひ、困らせてゐる、それで僕は恐ろしい……今僕がどれ程震へてるか、見給へ、何故だか解らないが。ねえ君、僕の言はうとしたことはこれなんだ。僕は、まるで今まで自分自身を知らなかつたやうな氣がする——さうだ！　さうだ、僕は他の人もやつと解りかけて來た、昨日から。僕は感じなかつた、十分に事を識別しもしなかつた、兄弟。僕の心は……固かつた……いゝかい、どうしてこんなことが起るんだらう、僕は今までに世の中の誰に對しても、何人に對しても一度も善いことをしたことがないなんて、だつて僕には出來なかつたんだ——僕は見た所も愉快さうではないんだ……だが、皆の人は僕に善いことをしてくれる！　第一に君だ。僕にそれが解らないと君は思つてるかい？　僕は何も言はなかつた丈けだ、何も言はなかつた丈けだ。」

「もう止し給へ、ワーシャ！」

「おゝ、アルカーシャ！……いゝんだよ、」ワーシャは、涙のために殆んど口がきけないで途切れた。「ユーリアン・マスタコーヴィチに就いては昨日君に話した。さうして君は自身よく知つてるんだ、あの人がどれ程嚴格な眞面目な人だか。君はあの人から譴責を受けてさへゐるんだ、それにあの人は、昨日僕に冗談口をきいたり、誰に對してもなか〳〵表はさない愛情を、深切な心を示したりする氣になつたんだ……」

「それ見給へ、ワーシャ、それは君が君の幸福に値するのだといふことを示すばかりぢやないか。」

「おゝ、アルカーシャ！　どれ程僕はこれをすつかり書き終へてしまひたかつたらう……駄目だ、僕は、自分の幸運をだいなしにすることになるだらう！　僕はそれを感じてゐる！

おゝ、いや、その爲めぢやない。」ワーシャは、アルカーディがテーブルの上に載つてゐる緊急な仕事の堆積をちらりと見たのを見てとると附け加へた。「そりや何でもないんだ、そりやただ書きつぶしたる紙片に過ぎないんだ……そりや馬鹿なこつたー　その問題はきまつちつやたんだ……僕は今日あれ達の處へ行つたんだよ、アルカーシャ、僕は中へはひりやしなかつた。僕はがつかりして悲しい氣がしてゐたんだ。僕はたゞ戸口に立つてゐたんだ、彼女がピアノを彈いてたので、僕は耳をすましてゐた。ねえ君、アルカーディ、」と彼は、聲を落してつづけた。「僕はどうしても中へはひる氣になれなかつた。」

「おい、ワーシャ——君はどうしたんだ？　君は人を變な風に見てゐるぜ。」

「おゝ、何でもない、少し氣分が惡いんだ。足が震へる。昨夜坐つてゐたからだよ。さうだー　僕の眼の前では何もかも綠色に見える。此處だ、此處だよ——」

彼は、心臟を指した。彼は、氣が遠くなつてしまつた。彼が我に返つた時、アルカーディは、無理に手當てをしようとした。彼は、無理に寢床に入れようとした。どうしてもワーシャは、いふことをきかなかつた。彼は、涙を流したり、兩手をもがいたり、書きたがつたりした、どうでも二頁だけ終つてしまはうとしてゐた。彼を怒らせることを避けて、アルカーディは彼を仕事に坐らせた。

「解るかい、君、」とワーシャは、自分の場所に落著いた時言つた。「僕がどんなことを思ひついたか？　望みがあるんだ。」

彼は、アルカーディに向つて微笑した。そしてその蒼白い顏は、希望の閃光で輝いた。

「僕は、明後日出來た丈けあの人の處へ持つて行かう。殘りの分に就いては嘘をつくんだ。それは燃えちやつたとか、水浸しになつちやつたとか、紛失したとか……。いや、實は書き上げてないのだと言つちまはう、嘘つくことは出來ない。ねえ君、僕は何と說明したらいゝだらう？　僕はすつかり說明しよう、どうして僕は書き終へなかつたのか說明しよう。僕は、戀のことをあの人に話さう。あの人もつい此間結婚したんだ、僕を理解してくれるだらう。勿論、それは恭しく、靜かにやらう。あの人は僕の涙を見て、動かされるだらう……」

「さうだ、勿論、君は行かなくちやいけない、行かなくちやいけない、そして說明するんだ……だが、涙なんか要らないよー　涙が何になるんだ？　本當に、ワーシャ、君は僕を全く脅かすねえ。」

「さうだ、行かう、行かう。しかし今は書かしてくれ、書かしてくれ、アルカーシャは誰の邪魔もしてやしないんだ、書かしてくれ！」

アルカーディは、寢床の上に身を投げ出した。彼は、最早ワーシャを信用しなかつた、全く

信用しなかつた。「ワーシャは、何かする能力を持つてゐたのだ、だが、何のために許しを乞ふのか？　どうして？　それは問題ではなかつた。問題は、ワーシャが自分の義務を遂行しなかつたといふことだ。ワーシャが自分の眼で罪を感じ、運命に對して忘恩であつたと感じたことだ。ワーシャが、幸福によつて打碎かれ、壓迫されて、自分がその値なきものだと思つてしまつたことだ。實に彼がその點に於いて狂人（きちがひ）になる口實を探さうとしてゐたことだ。そして、彼が思ひがけない前日の出來事から覺めなかつたことなのだ。さういふことなのだ。とアルカーディ、イワーノヴィチは考へた。「俺は彼を救つてやらなきやならない。諦めさせてやらなきやならない。彼は自分の身を亡ぼしてしまふだらう。」彼は、考へに考へぬいた。そして、翌日には早速ユーリアン・マスタコーヴィチの處へ行つて、すつかり話して來ようと決心した。

ワーシャは、坐つて書いてゐた。アルカーディ・イワーノヴィチは、疲れきつて、もう事を勘考することを止めてしまつた。そして夜明頃にやつと眼を覺した。

「しようがないなー　又かー」と彼は、ワーシャを見ると叫んだ。ワーシャは尙ほ坐つて書いてゐるのであつた。

アルカーディは、彼の處へ飛んで行つて、彼を捉へて、無理に床にはひらせた。ワーシャは、微笑してゐた。彼の眼は閉ぢて眠らうとしてゐた。彼は殆んど口をきくことも出來なかつた。

「僕は床にはひらうと思つてたんだよ。」と彼は言つた。「ねえ、アルカーディ、さう思つてたんだよ、僕は書き終へるよ。隨分早く書いたぜー　僕はもう坐つてはゐられなくなつちやつた。八時には起してくれ。」

この言葉を終るか終らない內に、彼は眠りに落ちて、死んだやうに熟睡した。

「マーヴラ、」アルカーディ・イワーノヴィチは茶を持つてはひつて來たマーヴラに言つた。「一時間たつたら起してくれと言ふんだがね、どんなことがあつても起しちやいけないよー　出來るなら十時間も眠らせるんだ。解つたかい？」

「解りましてございますよ、あなた。」

「晝飯も持つて來ちやいけない、薪も持つて來ちやいけない、音を立てちやいけない、言つたやうにしないとひどい眼にあはせるよ。僕のことを訊いたらね、役所へ行つたと言つてくれ、いゝかい？」

「かしこまりました、あなた、この人を寢かせるのはいゝことでございますよー　あなた方がよくお眠（やす）みになれば、わたしはうれしいのでございます。道具にもよく氣をつけてをりま

すよ。で、コップの割れましたのは、あなたはわたしをお叱りになりますけど、あなた、あれはわたしぢやございませんよ、あの哀れな小猫が割りましたんですよ、私は猫にまで眼をくばつてゐなければならないのですね。『叱つ、お前にも困りもんだねえ。』と私は言ひましたのですよ。」

「叱つ、靜かに、靜かに！」

アルカーディ・イワーノヴィチは、マーヴラに從つて臺所へ行つて、鍵を出させて、彼女を臺所へ閉ぢ込めてしまつた。それから彼は、役所へ出掛けた。途々彼は、どうしてユーリアン・マスタコーヴィチの前へ出ようか、そしてそれは適當なことだらうか、無作法なことではないだらうか、と考へた。彼は、おづ〳〵と役所にはひつて行つた、そして閣下が居られるかどうかをおづ〳〵と訊ねた。閣下は居られない、又來られまい、といふ答へを得て、アルカーディ・イワーノヴィチは、すぐ家へ歸らうと思つたが、ユーリアン・マスタコーヴィチが役所に出られないのだとすると、きつと、自宅で用事があるのだらう、といふことを直ぐ如才なく考へついた。彼は待つてゐた。時間には遲しがないやうに思はれた。彼は、シュムコフの賴まれてゐる仕事に就いて間接に訊ねてみたが、誰も、これを知つてゐる者はなかつた。ユーリアン・マスタコーヴィチが、特殊な仕事で、彼を使つてゐるといふことが解つてゐるだけであつた。だが、その特殊なものとは何だつたか——誰にも解らなかつた。たうとう三時が打つた。そこでアルカーディ・イワーノヴィチは、飛び出して急いで家へ歸らうとした。入口の處で彼は書記に出會つたが、その男はワシッリイ・ペトローヴィチ・シュムコフが一時頃に來たと言つた。そしてその書記は、「君が來てゐるか、ユーリアン・マスタコーヴィチがゐられるか」訊ねてゐたと附加へた。これを聞くとアルカーディ・イワーノヴィチは、襤を雇つて、驚き切つて夢中になつて家へ歸つた。

シュムコフは、家に居た。彼は、はげしく興奮して部屋の中を歩き廻つてゐた。アルカーディ・イワーノヴィチを見ると、彼はすぐに自分を制へ、考へ直して、その熱情を急いで隱した。彼は、一語も言はずに書類の處へ坐つた。彼は、友の質問を避け、そのことで當惑し、何か或る計畫を考へ、その果斷を隱さうと決心してゐるやうに見えた。何故なら彼は、それ以上友の愛情を恃みにすることは出來なかつたから。これはアルカーディの心を動かした。そして彼の心は、鋭い押しつけられるやうな苦痛で痛んだ。彼は、寢床の上に坐つて、自分の持つてゐた唯一の或る本の頁をひつくり返し始めたが、その眼は哀れなワーシャをちつと見戍つてゐた。しかし、ワーシャは頑固に默りつゞけて書いてゐた、そして頭をあげなかつた。數時間が過ぎた、そしてアルカーディの悲しみは極點に達した。遂に、十一時になると、

ワーシャは頭をあげてアルカーディをそのがらんどな眼でぢつと見詰めた。アルカーディは待つた。二三分間たつたが、ワーシャは物を言ひはしなかつた。

「ワーシャー」とアルカーディは叫んだ。

ワーシャは、返事をしなかつた。

「ワーシャ！」と彼は、寝床から飛び上りながら繰返した。「ワーシャ、君はどうしたんだい？どうしたんだ？」と彼は、彼の處へ駈け出して行きながら叫んだ。

ワーシャは、その眼をあげて、再び同じがらんどな眼でぢつと彼を見詰めた。

「氣を失つてるんだな！」とアルカーディは恐怖のために全く震へながら考へた。彼は、水を一杯くんで來て、ワーシャを引起して、頭に水をかけ、顳顬を濡らし、その手を自分の手で擦つた——するとワーシャは我に返つた。「ワーシャ、ワーシャ！」とアルカーディは涙を制へることが出來ないで、叫んだ。「ワーシャ、しつかりしろ、しつかり、しつかり！……」彼は、最早何にも言ふことが出來なくなつて、その腕に彼をしつかりと抱いてゐた。或る壓迫的の感じに似た或る表情がワーシャの顏に表れた。彼は、自分の額をこすり、頭を摑んだ、丁度それが破裂することを恐れてゐたかのやうに。

「僕はどうしたんだか、解らない。」と彼は、遂に附け加へて言つた。「こな〳〵に引裂かれたやうな氣がしたんだ。もう大丈夫だ、もう大丈夫だよ！　濟んぢまつたよ、アルカーディ、心配するな、」と彼は、悲しい疲れきつた眼で彼を見ながら繰り返した。「何故そんなに心配してるんだ？　さア！」

「君は、君は、僕を安心させてるんだ！」とアルカーディは、心を引裂かれるやうな感じがして叫んだ。「寢たまへ、一寸晝寢し給へ、出來ないかい？　自分を疲らしたつて何にもなりやしないぢやないか！　あとでは、尙よく仕事に就けるだらうに。」

「さうだ、さうだ、」とワーシャは言つた。「どうしても僕は寢よう、いゝとも。さうだ！　ねえ君、僕は書き終へようと思つてたんだ。しかしもう決心をかへたよ、さうだ……」

で、アルカーディは、彼を寢床へ連れて行つた。しかしもう決心をかへたよ、さうだ……」

「いゝかい、ワーシャ、」と彼はしつかり言つた。

ない。さア、話してくれ、君は何を考へてゐたんだ？」

「おゝ！」とワーシャは、その萎えきつた手を振り動かして寢返りを打ちながら言つた。「僕らはもうどうしても事をきめなきやならない。さア、話してくれ、君は何を考へてゐたんだ？」

「おい、ワーシャ、おい、決心し給へ。僕は君を傷つけたくないんだ。僕はもう默つてゐられない。決心するまでは眠れやしないよ、ねえ。」

「君のいゝやうに、君のいゝやうに。」とワーシャは、謎のやうに繰返した。

「言ふことをきくだらう。」とアルカーディ・イワーノヴィチは考へた。

「よく聽き給へ、ワーシャ、」と彼は言つた。「僕のいふことを覺えてゐたまへ、さうすれば僕は明日君を救つてやる、明日僕は君の運命を決定してやる！　君の運命つて僕は何を言つてるんだらう？　君は僕をひどく恐れてゐる、ワーシャ、君自身の言葉を僕はつかつてるんだよ。實際、運命だ！　そりや馬鹿げたことに過ぎない、下らないことに過ぎないんだ！　君はユーリアン・マスタコーヴィチの愛顧を失ひたくないんだ——愛情といつてもいゝだらう。さうなんだ！　さうして君はそれを失やしないんだぜ、ねえおい。僕は——」

アルカーディ・イワーノヴィチは、もつと言ひたかつたが、ワーシャが彼を妨げた。彼は寢床の上に坐つて、兩手でアルカーディ・イワーノヴィチの頸につかまつて、接吻した。

「もう澤山だ！」と彼は弱々しい聲で言つた。「もう澤山だ！　もうそのことは何にも言つてくれるな！」

「あゝ神よ！」とアルカーディは考へた。「神よ！　彼はどうしたんだらう？　全く夢中になつてるんだ。どんなことを考へてるんだらう？　彼は、自分で自分を滅茶々々にしてしまふんだ。」

アルカーディは、絶望して彼を見てゐた。

「彼が若し病氣になつたら、」とアルカーディは考へた。「多分その方がよくなるだらう。苦しみが病氣のために熄んでしまふだらう、で、それがすべてを定める最上の方法となるかも知れない。だが、何て馬鹿なことを俺は言つてるんだらう。おゝ、神よ！」

その間にワーシャは、眠つてしまつたやうに見えた。アルカーディ・イワーノヴィチは安心した。「いゝ徴候だ、」と彼は思つた。彼は、終夜その傍に坐つてゐようと決心した。ワーシャは穩やかにならなかつた。彼は、終夜痙攣を起したり、床の上でのたうち廻つたりして、ぢきに眼を開いてしまふのであつた。遂に、疲勞に壓倒されて彼は、死人のやうに眠つてしまつた。朝の二時頃だつたか、アルカーディ・イワーノヴィチは、椅子にかけたまゝテーブルに肘をついて微睡み始めた！　彼は奇妙な混亂した夢を見た。彼は、眠つてはゐないやうに思ひ續けてゐた、そしてワーシャがまだ寢床に横はつてゐたと思ひつゞけてゐた。ところが不思議にも彼は、ワーシャが眠つたふりをしてゐて、彼を欺いて、立ち上つて、こつそりとその眼の隅から彼を窺つて、書物机の處へそつと寄つて行つたやうに思つた。アルカーディは煙でられるやうな苦痛を心に感じた。彼は、混亂と悲しみを感じ、ワーシャが自分を信じないで、自分に隱れ、身を隱してゐることを堪らなく思つたやうに感じた。彼はワーシャを捉へて、喚び起して、寢床へ連れて來ようとした。それから、ワーシャは彼の腕に抱かれたまゝ叫び

つゞけてゐた、だが彼は寢床へ置いて見ると、それは生命なき屍であつた。彼は、眼を開いた、そして眼覺めた。ワーシャは、彼の前のテーブルで坐つて書いてゐた。

殆んど彼の感覺を信じることが出來ないで彼は寢床の方を見た、ワーシャはそこには居なかつた。アルカーディは、またその夢のために苦しくなつて、飛び上つた。ワーシャは動かなかつた、彼は書きつゞけてゐた。アルカーディは、すぐに氣がついて恐怖を感じたが、ワーシャは乾いたペンを紙の上に動かし、全く何も書いてない頁をめくり、その紙を埋めようとして急ぎに急いでゐるのであつた、恰も彼は最も完全な役に立つ遣り方で仕事をしてゐるとでもいふやうに。「いや、こりや夢ぢやないぞ、」とアルカーディ、イワーノヴィチは考へて全く慄然とした。

「ワーシャ、ワーシャ、僕にものを言つてくれ。」と彼は、その肩を捉へながら叫んだ。けれどもワーシャは口をきかなかつた。彼は、前の通り乾いたペンで紙に書くことをつゞけてゐた。

「隨分早く書けるやうになつたよ。」と彼はアルカーディを見上げずに言つた。

アルカーディは、その手を摑へてペンをもぎとつてしまつた。

ワーシャは、呻き聲を發した。彼は手を垂れてしまつて、アルカーディを見上げた。それから彼は、丁度彼の體全體にのしかゝつてゐた或る鉛のやうな重さを振り拂はうとでも欲するやうに、悲しみと疲勞の樣子をして手でその額のところを拂つた、そして、考へる力がなくなつてしまつたやうに、裕かにアルカーディの胸にその頭を埋めた。

「ワーシャ、ワーシャ！」とアルカーディは絶望して叫んだ。「ワーシャ！」

一分間の後ワーシャは、彼を見た。涙がその大きな碧い眼にたまつて、その蒼白い優しい顔は、無限の苦惱を呈してゐた。彼は何か私語(さゝや)いてゐた。

「何だい、何だい？」とアルカーディは、彼の方へ身を屈めながら叫んだ。

「何のために、何故に奴等は僕にそんなことをしてるんだ？」とワーシャは私語(さゝや)いた。「何のためだ？　僕が何をしたんだ？」

「ワーシヤ、どうしたんだい？　何を恐れてるんだい？　何だい？」アルカーディは、絶望してその手をもがきながら叫んだ。

「何だつて僕を兵隊に出さうとするんだ？」とワーシャは、その友の顔をまともに見ながら言つた。「どうしてなんだ？　僕が何をしたんだ？」

アルカーディの髮の毛は、恐怖のために逆立つた。彼は自分の耳を信じまいとした。彼は、半ば死んだやうになつて彼のそばに立つてゐた。

暫らくして彼は、氣を落著けた。「何でもない、一時のこつた。」彼は、眞蒼な顏をして、蒼い脣を震はして獨言を言つた。そして、急いで外出衣を著た。彼は醫者へ飛んで行かうと思つてゐたのだ。と、出し抜けにワーシャが彼に呼びかけた。アルカーディは、彼の處へ飛んで行つて、引離された子供の母親のやうにその腕を捉まへた。

「アルカーディ、アルカーディ、誰にも言ふな！　誰にも言ふな。いゝかい？　それが苦しいんだ、僕はそれを獨りで忍ばなくちやならないんだ。」

「何だつて——何だつて？　しつかりしろ、ワーシャ、しつかりしろよ！」

ワーシャは、溜息をついた、そして鈍い涙がその頰に滴り落ちた。

「何故彼女を殺すんだ？　何うして彼女が惡いんだ？」彼は、苦しい、心を引裂くやうな聲で呟いた。「罪は僕に在るんだ、罪は僕にあるんだ！」

彼は、一寸の間沈默した。

「さよなら、愛する者よ！　さよなら、愛する者よ！」と彼はその不幸な頭を振りながら囁いた。アルカーディは、立ち上つて、氣を落著けて、醫者を呼びに駈けて行かうとしてゐた。

「さあ行かう、もう時間だ。」ワーシャはアルカーディのその動作を見ると、叫んだ。「さあ、行かう、兄弟、さあ行かう。僕は支度が出來てるよ、君は案內してくれるね。」彼は默した、

そして氣力のない不信な顏附でアルカーディを見てゐた。

「ワーシャ、どうか後生だから、僕に從いて來ないでくれ！　此處で待つてゝくれ、すぐ歸つて來るから、直ぐだよ。」アルカーディは醫者のところへ駈け出さうとして帽子を摑んで、狼狽しながらさう言つた。ワーシャは、すぐ坐つた、彼は靜かで御し易かつた、が、彼の眼の中には、或る絕望的な決心の閃きがあつた。アルカーディは、引き返して來て、テーブルから開かれてる懷中小刀をとつて、最後に憐れな男に一瞥を與へて、それから家を飛び出した。

八時であつた。或時には部屋の中へも隈なき日光が差し込む時であつた。

彼は、誰も見なかつた。一瞬も休みなく駈け出してゐた。彼が、その建物のうちに醫者が住んではゐないかどうか、門番に尋ねた時その宿所を聞いておいた醫者は、皆、出掛けてゐた、往診か或は私用で。患者を診てゐた醫者が一人あつた。此の一人がたうとう尋ねられた。そして精密に言ふと、ネフェデーヴィチの來たことを取りついだ藥局生が、誰であるのか、誰から來たのか、どうしたのか、と訊ねて、それから最後に、先生は行かれない、大變忙しいのだ、そしてさういふ種類の病人は病院へ入れられなければならないのだ、と言つてお終ひになつた。

そこで、アルカーディは、事がこんな風になつた爲めに、疲れ果て、混亂し、全く途方に暮れてしまつて、地上のあらゆる醫者を呪つた、そしてワーシャのことが極端に心配になつたので、家へ駈け歸つて來た。彼は、家の中へ駈け込んだ。マーヴラが、何事もなかつたかのやうに、床を拭いたり、薪を割つたり、ストーヴを焚きつける用意をしたりしてゐた。彼は部屋にはひつた、ワーシャの影も見えなかつた。彼は又飛び出した。

「どつちへ行つたらう？　何處へ行つたんだらう？　それにあの可哀想な奴は何處へ逃げ出さうといふのだらう？」アルカーディは、恐怖のために冷たくなつて考へた。彼は、マーヴラに訊ね始めた。彼女は、何も知らなかつた、彼の出掛けたのを見も聞きもしなかつた。おお、彼はどうしたのか！　ネフェデーヴィチはアルテミエーフ家へ駈け出して行つた。

あすこに居るに違ひないといふ考へが、或る理由によつて彼の心に浮んだ。

彼が到著した時までには十時になつて居た。彼等は彼を待つてはゐなかつた、何にも知らなかつた、聞いてもゐなかつた。彼は彼等の前に突立つて、わく〳〵して苦しげな風をして、ワーシャは何處に居るかと訊ねたのであつた。母親は倒れさうになつて、ソーフワの上に腰を下ろした。リザンカは心配で震へながら、何事が起つたのか訊き始めた。何を彼は言ふことが出來たらう？　アルカーディ、イワーノヴィチは、一生懸命になつてそれを逃れた。勿論信じられさうもない作り話を案出した。そして不幸と不安とを殘してそこを逃げ出した。

彼は、まだ遲くはあるまいから、すぐどうにかしてワーシャが居なかつたら閣下の處へ行つてワーシャのことを知らせようと決心した。若し、そこにワーシャは何處に居るかと訊ねたのであつた。母親は倒れさうになつて、ソーフワの上に腰を下ろした。リザンカは心配で震へながら、何事が起つたのか訊き始めた。何を彼は言ふことが出來たらう？　アルカーディ、イワーノヴィチは、一生懸命になつてそれを逃れた。勿論信じられさうもない作り話を案出した。そして不幸と不安とを殘してそこを逃げ出した。

彼は、まだ遲くはあるまいから、すぐどうにかしてワーシャが居なかつたら閣下の處へ行つてワーシャのことを知らせようと決心した。若し、そこにワーシャは何處に居るかと訊ねたのであつた。母親は倒れさうになつて、ソーフワの上に腰を下ろした。リザンカは心配で震へながら、何事が起つたのか訊き始めた。何を彼は言ふことが出來たらう？　アルカーディ、イワーノヴィチは、一生懸命になつてそれを逃れた。勿論

んで行つた。が、途中で、ワーシャはユーリアン・マスタコーヴィチの處へ行つてるだらうといふ考へが浮んだ。それは、全く何よりもありさうなことであつた。それは、アルカーディが、第一番に、殆んどアルテミエーフ家の前でも考へたことであつた。彼は閣下の戸口のそばを馬車で通つたので、そこで止まらうかと思つたが、すぐ、眞直に行くように馭者に呶鳴けた。彼は、役所で何事かが起つたかどうかを探つてみようと決心した。誰かが、そこにワーシャが居なかつたら閣下の處へ行つてワーシャのことを知らせようと決心した。若し、そこにワーれを告げ知らさなければならない。

控所へはひるや否や、彼は同僚の書記たちにとり卷かれた、大部分は役所に在勤の若い人人であつた。彼等は、一齊にワーシャはどうしたのかと訊ね始めた。それと同時に彼等はワーシャは氣が狂つて、仕事を怠つた罰として兵隊に出されることに成つたと思つてゐるといふことを話した。アルカーディ・イワーノヴィチは、あちこちからの質問に答へながら、といふよりは誰にも直接の答へを避けながら、內側の部屋へ飛んで入つた。その途で彼は、ワーシャはユーリアン・マスタコーヴィチの私室にはひつて、皆もそこに居る、エスペール・イワー

ノヴィチもそこへはひつて行つたといふことを聞き知つた。彼は、其場に立ちすくんでしまつた。上役の一人が、彼は誰か、そして何を欲するのかと訊ねた。その人が誰なのかも知らずに彼は、ワーシャのことを何か言つて、部屋の中へ眞直にはひつてしまつた。ユーリアン・マスタコーヴィチの聲が中から聞えて来た。「何處へ行く?」と誰かがその戸口で彼に訊ねた。アルカーディ・イワーノヴィチは、殆んど絶望してゐた。彼は戻らうとした、がその開かれた戸口から彼は、可哀想なワーシャを見た。皆が混亂し困惑してゐるやうであつた、何故ならユーリアン・マスタコーヴィチが、明かに非常に不機嫌になつてゐたから。凡ゆる重役達は、彼のそばに立つて話し合つてゐたが、どう決定もつかなかつた。一寸離れてワーシャが立つてゐた。彼を見た時、アルカーディの心は沈んだ。ワーシャは、眞蒼になつて、自分の頭を上げ、固くなつて、足も手もその體に硬ばりついて、まるで士官の前に立つた新兵のやうに、立つてゐた。彼は、ユーリアン・マスタコーヴィチの顔をまともに見てゐた。アルカーディはすぐに注意され、二人が一緒の宿に居ることを知つてゐた誰かが閣下にそのことを話した。アルカーディは連れ込まれた。彼は、或る質問に答へようとして、ユーリアン・マスタコーヴィチをちらりと見て、彼の顔に純粋な同情が表れてゐることを見ると、子供のやうに震へ始めて泣き出してしまつた。彼はそれ以上のことをした。彼は、閣下の手をとつてそれを自分

の眼に當てゝ涙で濡らした、そこでユーリアン・マスタコーヴィチは無理に急いでそれを引離さなければならなかつた。そしてその手を空で振りながら言つた。「さア、ねえ君、さア! 君がいゝ人だといふことはよく解りますよ。」アルカーディは啜り泣いて、皆の方へ求めるやうな眼を向けた。彼等は皆彼の愛するワーシャの兄弟で、皆が皆彼のことで苦しみ泣いてゐたやうに思はれたのであつた。「どう、どうしてこんなことになつたのだね? どうしてこんなことが起つたのだね?」とユーリアン・マスタコーヴィチが訊ねた。「彼は何で氣が狂つたんだらう?」

「感——感——感謝の情からでございます!」アルカーディ・イワーノヴィチは、やつとこれ丈け言ふことが出來た。

すべての者は、彼のいふことを聞いてびつくりした。そして、人が報恩の感から狂人になることが出來るとは、すべての者にとつては不思議なことで信じられないことであつた。アルカーディは、一生懸命になつて說明した。

「神よ! 何といふ可哀想なことだ!」とユーリアン・マスタコーヴィチは遂に言つた。「で彼に賴んだ仕事は重要ではなかつたんだ。それが爲めに一人も急ぎではなかつたんだ。少しの人間を自殺させる程のものではなかつたんだ! さア、連れてつてくれ給へ!」……この

時、ユーリアン・マスタコーヴィチは、再びアルカーディ・イワーノヴィチの方へ向いて、もう一度彼に質問し始めた。「この人は頼むのだ、」と彼は、ワーシャを指して言つた。「或る娘にこの事を話してくれるな、と言つてね。娘とは誰だね——許嫁の人かと思ふが？」

アルカーディは説明を始めた。その間、ワーシャは何事かを考へてゐるやうに見えた、恰も彼は、特に此の瞬間に必要であつた或る重大な緊要な事柄を思ひ出さうとして、一生懸命にその記憶を働かせてゐるかのやうであつた。折々彼は、誰かが自分の忘れてゐたことを自分のために思ひ出してくれることを望んでゐるやうに、その不幸な顔を以て邊りを見廻すのであつた。彼は、アルカーディをぢつと見た。突然彼の眼には希望が輝いた、彼は、左足を前へ出し、士官から呼ばれて前へ出て來た兵卒のやうにその右の靴で床を鳴らしながら、出來るだけ速かに三歩ばかり前進した。すべての人は、何が起るのか見ようとして待つてゐた。

「私は肉體の缺陷を持つてをります、小さくてそれに脆弱であります。私は軍隊勤務には適當しません、閣下。」と彼は唐突に言つた。

部屋の中のすべての者は、苦しみに打たれた。ユーリアン・マスタコーヴィチはしつかりした性格の人だつたけれども、その眼から涙が滴り落ちた。

「彼を連れてつてくれ給へ。」と彼は、手を振つて言つた。

「只今！」とワーシャは、低い聲で言つて、廻れ右をして部屋を出て行つた。彼の運命を憐れに思つてゐた人々は皆そのあとから從いて出た。アルカーディは、皆のうしろから駈け出した。病院へ連れて行く爲めに命ぜられてゐた馬車の來るまで、彼等はワーシャを控所に坐らせた、彼は、默つて坐つてゐたが、非常に心配さうであつた。彼は、自分に解る人々に對して、さよならを言ふやうに頷いた。彼は、絶えず戸口の方へ眼をくばつて、時が來たと言はれたらすぐ出掛けようと用意してゐた。人々は、彼の周圍に小さな環を作つて集つてゐた。彼等は皆その頭を振つてゐた、皆悲しんでゐた。多くの人々は、突然に解つた彼の話で、非常に感動されてゐた。或る者はその病氣のことを話してゐた、又或る者はワーシャに憐れみを示して、彼のことを褒めて、彼は靜かな謙遜な青年で非常に有望だつたのだと言つてゐた。彼が如何に努力して勉強したか、知識に對して如何に熱心であつたか、彼が如何に自己教養に骨折つたか、といふことを人々は語つた。「彼は低い階級から獨力で上つて來たんだ。」と或る者は言つた。彼等は、閣下の彼に對する愛情に就いて熱情をこめて語つた。彼等の或る者は、何故ワーシャが、その仕事を終らない爲めに兵隊に出されるといふ考へを持つたのかといふことを說明し始めた。この可哀想な者は、つい最近まで軍隊に服すべき階級に屬してゐたの

だが、ユーリアン・マスタコーヴィチの斡旋で最初の位階を受けたばかりなのだ、ユーリアン・マスタコーヴィチは、彼の才能と溫順性とその態度の稀に見る優しさとを賞くも見抜いたのだ、と彼等は言つた。實際、色々な見解や理論が澤山出た。

ワーシャに非常に近い或る非常に丈の低い同僚は、目立つて特に悲しんでゐた。彼は、非常に若くはなく多分三十位であつた。彼は、シーツのやうに蒼ざめて、始終震へ、奇妙な微笑をしてゐた。恐らくは、或る外聞の悪い事件と恐るべき光景とが、彼を脅かし、それと同時に外側の見物人たちを幾分か樂しがらせてゐたからであらう。彼は、ワーシャを取巻いてゐた環の周圍を始終駈け廻つてゐた。そして、彼は、大變丈が低かつたので、爪立ちをしたり、皆の釦に捉まつたりしてゐた——卽ち、そんな勝手なことをする資格があると感じられる人々の——そして、彼はどうしてこんな事が起つたのか、それは單なる出來事ではなく甚だ重大な事件だとか、又それはその上の穿鑿をしずに殘して置かれてはならないとか、そんなことを言ひつゞけて、それから再び爪立ちをしたり、誰かの耳へ囁いて二度も三度も頷いたり、再び駈け廻つたりしてゐた。遂に、すべてが終つた。門番が現れて、それから、病院からの使ひがワーシャの處へ來て、もう出掛ける時だと彼に告げた。ワーシャは、そは〳〵して飛び上つて、彼の方を見ながら皆と一緒に出て行つた。彼は、誰かを探してゐた。

「ワーシャ、ワーシャ！」とアルカーディ・イワーノヴィチは、啜り泣きながら叫んだ。ワーシャは、立ち止つた。そしてアルカーディは、彼のところへ人々を押しわけてやつて來た。二人は、互ひの腕に身を投げかけて最後の抱擁をした。見るも悲しい有樣であつた。何といふ奇怪な不幸が、彼等の眼から涙をしぼるのであつたらう！　何のために彼等は泣いてゐたのか？　彼等の苦しみは何であつたか？　何故彼等はお互ひに理解しなかつたのか？

「さア、さア、これを持つてつて！　氣をつけて持つてつてくれ。」とシュムコフは、アルカーディの手に或る紙片らしいものを突込みながら言つた。「奴等が僕からそれを奪つてしまふからね。あとで僕に持つて來てくれ、持つて來て……氣をつけてね……」人々が彼を呼んだので、ワーシャは言ひ終らなかつた。彼は、皆に頷き、さよならを言ひながら、急いで階段を駈け下りた。彼の顏には絶望が表れてゐた。たうとう彼は、馬車に乘つて連れて行かれてしまつた。アルカーディは、急いでその紙を開いてみた。それは、ワーシャが決して身を離さなかつたリーザの眞黒な捲毛であつた。熱い涙がアルカーディの眼から流れ出た。おゝ、可哀想なリーザ！

役所の時間が終ると、彼はアルテミエーフ家へ行つた。其處で何事が起つたかは記述する必要はない！　ペーチャさへ、小さなペーチャさへ、彼は愛するワーシャに何事が起つたのか

本當には理解出來なかつたのだが、隅つこの方へ行つて、その小さな手に顔を隱して、子供らしい心が一杯になつて啜り泣いてゐた。アルカーシャが家に歸つたのは、もう黄昏の頃であつた。彼がネーヴに來た時、彼は一寸の間立ち止つて、尙ほも霧深き地平線の彼方に消えやらずにゐた日沒の最後の紫と眞紅との光によつて突然に眞赤に閃いた河の、烟るやうな氷に閉された遙か彼方へ、その鋭い一瞥を向けたのであつた……。町は夜になつてゐた、そして凍つた雪に水かさを增してゐるネーヴ河の廣い平面は、白い凍氷の無數の閃きと共に、最後の日光のうちに輝き渡つてゐた。二十度の寒さであつた。驅らるゝ馬と急ぎ行く人々からは雲のやうに水蒸氣が立ちのぼつてゐた。凝り固つた大氣は、かすかな響にも搖めいた。そして、河の兩岸の屋根々々からは、數條の煙が巨人のやうに上つて、もつれたり離れたりしながら寒い空の上へ昇つて行つた、そこで、新しい建物は古いもの丶上に浮び、新しい都市が空中に形造られてゐるやうに見えた……。凡ゆるその住民には强者も弱者も居り、凡ゆるその住居が或は貧しき者の隱家となり、或はこの世の力有る者の慰めのための金色の宮殿となつてゐる、この凡ゆる世界は、その薄暮の時には、幻想の中の妖精の國の如く、立ち變つて暗き青空の中へ、煙のやうに消えて過ぎて行く夢の如くでもあつた。憐れなるワーシャの取り遺された友には、不思議な或る考へが起つた。彼はびつくりした、そして彼の心は、その瞬間には、今まで決して知らなかつた或る力强い壓迫的な感覺によつて焚かれた熱い血潮が漲り渡るやうに思はれたのであつた。彼は、やつと今、すべての苦痛を理解し、彼の哀れなワーシャが、その幸福に堪へ兼ねて氣が狂つたのは何故かといふことをも知つたやうな氣がした。彼の脣はひきつり、彼の眼は輝き、彼は眞蒼になつた、そして云はば、或る新しい事の中に判然した幻像を認めたのであつた。

彼は、陰氣になり憂鬱になつた。そして彼の凡ゆる快活さを失つてしまつた。そのもとの下宿は彼にとつては厭はしくなつた——彼は新しい部屋を借りた。彼は、アルテミエーフ家を訪問しようとは思はなかつた。又實際彼には出來なかつた。二年後に彼は、教會でリザンカに逢つた。彼女は、その時はもう結婚してゐた。彼女のそばには、小さな赤子を抱いた乳母が歩いてゐた。彼等は、挨拶した。そして長い間、過去のことを話すことを全く避けてゐた。リーザは言つた、有難いことに自分は幸福にしてゐる、自分の夫は深切な人で、自分は彼を愛してゐる……。けれども、突然話の途中で彼女の眼は淚でいつぱいになり、その聲は弱くなつて、彼女は側を向いてしまつた、そして、その悲しみを隱さうとして教會の鋪石に跪いたのであつた。

白夜

（夢想家の日記からの感傷的な話）

第一夜

それは驚くべき夜であつた、親愛なる讀者よ、我々が若い時にのみ有り得るやうな、さういふ夜であつた。空は、星が一杯で非常に輝いてゐたので、それを見る者は誰でも、こんな空の下にも不機嫌な又は氣まぐれな人々が生存し得るのだらうかと、自ら問はざるを得なかつたであらう。これも亦若々しい質問である、親愛なる讀者よ、甚だ若々しいものである、が神はそれを一層屢々諸君の心の中に置かれるであらう！……氣まぐれな不機嫌な人々のことを言へば、私はその日終日道德的な狀態にあつたことを思ひ出さないわけにはいかない。朝早くから私は、或る不思議な落膽に壓迫されてゐた。突然私は、自分が孤獨であつて、すべての人が自分を見捨て、自分を去りつゝあると感じたのであつた。勿論、誰でも、「すべての人」とは誰々であるかを訊ねる資格はあるのだ。何故なら私は、ペテルブールグに殆んど八年間も住つてゐながら、まるで知己といふものを持つてゐなかつたのである。だが、私は知己をどうしようと欲したのか？　私は、云はば全ペテルブールグと知己であつた。凡ゆるペテルブールグ人が荷作りをして別莊へ出掛けて行つた時に、彼等が全く私を棄てたと感じたのは、それだからなのであつた。私は、獨り遺されることを恐ろしいと思つた、そして丸三日

間私は、自分だけではどうすることも出來ないで、非常に落膽して町をさまよつてゐた。ネーフスキイを歩いても、公園へ行つても、堤防をぶらついても、私がいつも一年中同じ時間に同じ場所で出會つた人々の顏は一つも見當らなかつた。彼等は、勿論私を知るまい、しかし私は彼等を知つてゐる。私は親しく彼等を知つてゐる。私は、彼等の顏を調べさへするのだ、そしてその顏が樂しげである時には愉快になり、その顏が曇つてゐる時には憂鬱になる。私は、幸福にも毎日、同時刻にフォンタンカで出會つた一人の老人と殆んど友達附合を始めた。彼は大變莊重な、考へ深い顏附をしてゐて、いつも獨語を嘯き、その左の腕を振りまはしてゐるが右の手には黃金の把手のついた長い節だらけの杖を持つてゐるのであつた。彼は、私を氣をつけても居るし、私に睽かい興味を持つてもゐる。若し、或る場合に、フォンタンカの同じ場所に私が居なかつたとすると、きつと彼は失望を感じたに違ひない。私たちはお互ひに挨拶を交しさへするのはさういふ理由だからである、特に、私たち二人共氣分のよい時には。いつであつたか、私たちが二日も逢はないで、三日目に逢つた時には、私たちは本當に帽子をとりさうにした。しかし、すぐ氣がついて、手を落して、お互ひに興味ありげな風をして行き過ぎたのであつた。

私は、多くの家も知つてゐる。私が歩いてゐる時には、凡ゆる窓から私を見て、そして、

「お早う！　如何ですね？　私は有難いことに大變い、具合だ、それに私は五月には新しい家に移らうと思つてゐる。」とか、「御機嫌はどうですか？　僕は明日また勳章を授かるんですよ。」とか、「私は殆んど燒けてしまふ所だつたんですよ、そりや恐ろしかつたんですよ。」とか、そんなことを言ひさうに、その家々は往來を走つてゐるやうに思はれた。私は、彼等の内に愛する人を持つてゐる、或る者は親しい友達である、彼等の或る一人は、この夏建築師の待遇を受けようと思つてゐる。私は、その働きが失敗に終らない事を見ようとして態々毎日出掛けるであらう。失敗のないやうに！　けれども私は、晴々しい赤い色で塗られたあの小さい綺麗な家の出來事を決して忘れはしないであらう。それは、實に氣持のい、煉瓦作りの家で、私には實に親しみ深く見え、見苦しい他の建物に對して實に勝ち誇つてゐるやうに見え、そのために私の心が、何時でもそこを通る機會のある時には、喜ばしくなる程であつた。先週に私は不意にその町を歩いた、そして、私の友達を見た時私は、或る悲しげな聲を聞いた。「あいつ等は私を黃色く塗るんだ！」惡者共！　野蠻人共！　彼等は、何にも大事にしなかつたのだ、圓柱も蛇腹も。そして私の可哀想な小さな友達はカナリアのやうに黃色くなつてゐた。それは、殆んど私を不愉快にした。そして今日まで私は、支那國の色に塗られた可哀想な見苦しい友達を訪問する勇氣を持たなかつた。

讀者よ、今は、私がどういふ意味で全ペテルブールグと知己になつたのか理解するであらう。

私が、自分の不安の原因を推測する前丸三日間といふもの苦しみを感じてゐたことは既に語つた。で、私は町では心持がよくなかつた——この人も行つてしまふ、あの人も行つてしまた、では他の人達はどうなつたらう？——そして家では、私はどうせ己自身を好ましく感じはしなかつた。二晩の間私は、自分の隱家に於いて、何が惡くなつたのか、どうして私はその中にそんな不滿を感じてゐたのかを考へて、頭を惱ましてゐた。で、私は混亂して自分の汚らしい綠色の壁や蜘蛛の巢だらけの天井を丹念に見詰めてゐた、蜘蛛の巢が出來るとマトローナはひどく元氣づくのであつた。私は、凡ゆる自分の家具を見渡して、惡いことがそこらにありはしないかと怪しみながら凡ゆる椅子を調べた。（何故なら私は、椅子が一つでも昨日あつた場所にちやんと置かれてゐないと、落著がないのである。）私はその爲めに少しもなくなりはしなかつた！　私は、窓を眺めた、がそれは全く無益であつた……。私はマトローナを呼ぶ氣にさへなつた。そして、蜘蛛の巢と其邊がだらしなくなつてゐることに就いて、父親のやうな訓誡を與へてゐた。しかし彼女は、唯だびつくりして私を見詰めた丈けで、一語も言はずに行つてしまつた。そこで蜘蛛の巢は、今日まで其場所に滿足さうにぶら下つてゐ

るのである。私は、やつと今朝、何がいけないのかをたうとう知つた。あゝ！　さうだ、彼等は私をまいて別荘へ逃げ出さうとしてゐる！　平凡なる表現を許し給へ、だが私は全く美しい言葉を使ふ氣になれないのである……。何故ならば、ペテルブールグに在つたすべての物は、休日の間は去つてしまつた、或は去らうとしてゐた。何故ならば、馬車に乗つてゐた、威嚴ある風采の凡ゆる尊敬すべき紳士が、私の眼には、忽ちに日常の務めを終へてその家庭の懐ろへ、別荘へと行かうとしてゐる尊敬すべき家長と變つてしまつた。何故ならば、すべての通行人が、今は全く特殊な様子をしてゐて、逢ふ人毎にかう言つてゐるやうであつた。「諸君、僕等はほんの一寸此處に居るんだ、そしてもう二時間も經てば別荘へ行つてるだらう。」若しも雪のやうに眞白な優しい指が窓硝子を叩いて、それから窓が開かれ、綺麗な娘の頭が突き出して、草花の鉢を賣り歩く者を呼びとめるとすれば——卽座に私はかう思つた。それらの花は、單に息苦しい都會生活に於いてその花と春とを樂しむために購はれたのではなく、彼等がまもなく田舍へ引越し、そしてその花をも持つて行くからなのである、と。更に進んで私は、一人々々の極く一寸した様子から、その人がどんな別荘に住んでゐるのかを正確に識別することが出來た程の、新しい特殊な研究をなした。カーメンニイ島及びアプテカールスキイ島か又はペテールホフ通に住んでゐる人々は、その馴れた優雅な態度と意氣な夏著と町へ乘つて行く綺麗な馬車とが目立つてゐた。パルゴローヴォ及びずつと遠くの場所へ行く人々は、一目でその理性的な威嚴ある様子の印象を人に與へた。クレストーヴスキイ島へ旅行する人々は、制へきれぬ樂しげな様子によつて解つた。若しも私が、手に手に手綱をとつてのそのそ歩いてゐる馭者と共に、テーブルや椅子やソーファや凡ゆる種類の家具什器を本當に山のやうに積んで、屢々老いぼれた料理女がその頂邊に坐つて、恰も自分の愛する物でもあるかのやうに主人の所有物を監視してゐる、さういふ長い行列に偶然出會つたならば、或はまた、家庭の道具を滿載した小舟が、黒海か多くの島の方へ向つてネーヴ河やフォンタンカをゆる〳〵と進んで行くのを見たならば——その馬車や小舟が、私の眼には、十倍も百倍もに見えるのであつた。凡てのものが動き移り、すべてのものが本式の隊商をなして別荘へ行きつゝあつたやうに私は思つた。まるでペテルブールグが荒野に化さうとして脅かされてゐるかのやうに思はれた。そのためにたうとう私は、自分が休日の間何處へも行かず、又行く理由も持たないことを恥かしく感じ、不面目な悲しいことと思ふに至つた。私は、凡ゆる荷馬車と共に行き、馬車に乘つてゐる凡ゆる尊敬すべき風采の紳士と共に乘つて行かうとした。けれども、誰も——全く誰も——私を招待してくれはしなかつた。彼等は私を忘れてしまつたやうであつた、本當に私は彼等にとつては赤の他人だつたかのやうであつた！

私は、續いていつもの通り全く自分が何處に居るのかも忘れて、長い間歩いてゐた。その時突然私は市の門の處に來てゐたのであつた。すぐに私は、氣が輕くなつたことを感じた。私は、門柵を越えて出た、そして疲勞にも氣がつかずに、まるで自分の魂から全く重荷が下りたやうにのみ感じながら、畑と牧場との間を歩いてゐた。すべての通行人は私に親しみ深い樣子を見せたので、彼等が殆んど私に挨拶するやうな氣がして、又彼等は皆何事かで非常に愉快になつてゐるやうに見えた。彼等は皆葉巻煙草を喫してゐた、誰もかも。そして私は、曾て無かつた程愉快な氣持であつた。私はまるで、出し抜けに伊太利へ行つたやうな氣がした——市壁の間に息づまつてゐる私のやうな半病の都會人に對しては、自然の効力は非常なものであつた。

春が近づいて、自然がその全力を、神から賦與されたすべての力を出し切る時、自然が木の葉に現れ、美裝し、花をもつて身を飾る時、ペテルブールグ附近の自然には、何かしら言ひ表はし難き感動がある。……兎に角私は、脆弱な肺病の娘のことを思ひ出さないではゐられない。人はその娘を折々憐憫を以て見、同情の愛を以て見ることもある。又時とすると人はまるで氣がつかないでゐる、しかし、その娘は或る瞬間に突然に、まるで偶然のやうに、説明の出來ない程愛らしく美しく印象的に魅惑的になる、人は自問せざるを得ない——如何

なる力がその悲しげな物思はしげな眼をこのやうな火で輝かしたのであらうか？　何者が、その蒼白い暗い頰に血液を呼び集めたのか？　何が、その胸を昂まらせたのか？　何が、そんなに突然に、その哀れな少女の顏の中へ力と生命と美とを呼び込み、そのやうな微笑を以て輝かし、そのやうな晴やかな閃く笑ひを點火したのであるか？　諸君は邊りを見廻す、諸君は誰かを探してゐる、諸君は忖度する……けれども、その瞬間が過ぎ去つて、翌日諸君が逢ふところのものは、恐らくは以前のとほりの物思はしげなぼんやりした樣子、蒼白い顏、大人しいおづ〳〵した動作、及び後悔の徴と社會的な苦しみの跡と一時の氣散じに對する悔みとであらう……。そして諸君は、その瞬間的の美が決して易々とは歸らないものとなつて消失し、それが諸君の上に非常に當にならない非常に空なものとして閃いたことを悲しむ。諸君が彼女を愛する暇さへなかつた故に悲しむのだ……。

そして、その上私の夜は、晝間よりも一層よいものであつた！　事の起りはかうであつた。

私は、大變遲くなつて町へ歸つて來た。そして私が自分の宿の方へ歩いてゐる時に十時が鳴つた。私の通つてゐるのは堀の堤防であつたが、其處ではその時は人つ子一人にも逢はなかつた。私が町のずつと外れの方に住んでゐたことは事實である。私は、歌ひながら歩いて

ゐた、といふのが、私は幸福な時にはいつも、自分の歡びを分つ友も知己も持たない凡ゆる幸福な人がするやうに、獨語を唸つてゐるのであつた。突然私は、最も思ひがけない事件に出會つた。

堀の柵に凭れて、一人の婦人が、その肘を柵について立つてゐた。彼女は、明かに非常に注意深くその堀の濁つた水を見詰めてゐるのであつた。彼女は、非常に氣持のいゝ黄色い帽子を被り、眞黒な外套を著てゐた。「彼女(かれ)は娘だ、そしてきつと彼女は悲しいのだ。」と私は考へた。彼女には私の跫音が聞えないやうであつた、そして、私が息を殺して、ドキ〳〵しながら通つた時も、身動きさへしなかつた。「可笑しいぞ。」と私は考へた。「この女はよつぽど何かに氣を取られてるんだ。」そして忽ちに私は石のやうに堅くなつて立ちすくんだ。私は制へてゐる啜り泣きを聞いたのであつた。さうだ！　間違ひではなかつた、娘は泣いてゐた、そして一分間後には涙がこみ上げるのを聞いた。何といふこつた！　私の心は沈んだ。そして、私は女に對しては羞しがりなのだつたが、これはしかしこんな場所であつた！……私は振り返つて、一歩彼女に近づいた。そして、若しも私が、小説の中で凡ゆる露西亞の社會において幾千回となくその叫びが發しられたといふことを知らなかつたとしたら、確かに私は、「貴女！」といふ言葉を發したであらう。その反省が纔かに私を止めた。しかし、私が言葉を探してゐた間に、娘は、我に返つて邊(あた)りを見廻し、びつくりして、眼を伏せた、そして堤防に添うて私のそばをすりぬけて行つた。私はすぐ彼女の跡について行つた。しかし、彼女は、これを見抜いて、堤防を去つて道を横切つて、鎚石道を歩いて行つた。私は、彼女について往來の向う側へ行くことはどうしても出來なかつた。私の心臟は、捉はれた小鳥のやうに震へてゐた。忽ちに、機會が私を助けに出て來た。

鎚石道の同じ側に、少女から餘り遠くない處へ、夜會服を著けた威嚴ある年輩の紳士が突然現れた。尤も馬車は決して威嚴あるものではなかつた。彼は、よろ〳〵して、川心深く壁に凭りかゝつてゐた。少女は、夜中に誰にでも連れて行かれることを欲しない凡ゆる少女に見るびく〳〵した速さで矢のやうに逃げ出した。そして、若しも私の幸運が彼を激勵しなかつたならば、そのよろ〳〵してゐる紳士は、確かに彼女を追はうとはしなかつたであらう。

突然に、誰にも一語も言はずに、紳士は、飛び出して、全速力でかの見知らぬ婦人を追ひかけた。彼女は、風のやうに飛んで行つたが、よろ〳〵してゐる紳士は追ひつきさうだつた——彼女に追ひついた。少女は叫び聲を發した、そして……私は、その時に右の手に偶然持つてゐた素晴しい節だらけの杖の爲めに自分の幸運を祝した。一瞬間にして私はその往來の他の側に行つてゐた、一瞬間にしてその無作法な紳士はその場で捉まり、抵抗し難い理論に

爭はれて、一言もなく退いたが、私たちが遙かに遠さかつてから、やつと私の行爲に稍々強い言葉で異議を唱へた。しかし、その言葉は、殆んど私たちの處へは聞えて來なかつた。

「腕をお貸しなさい、」と私は少女に言つた。「あいつは、もう我々を惱ますことは出來やしませんよ。」

彼女は、まだ興奮と恐怖のために震へながら、一語も言はずに私の腕をとつた。おゝ、無作法な紳士よ！　その瞬間私は如何に汝を祝福したか！　私は、彼女をちらりと盗み見た。彼女は、大變可愛らしく、そして悲しげであつた——私の推察は正しかつた。

彼女の眞黒な睫毛の上には、尙ほ涙が輝いてゐた——今の恐怖のためか、先刻の悲しみのためか——私は知らない。けれども、最早彼女の脣の上には微笑が光つてゐた。彼女も矢張り私をちらりと盗み見て、かすかに緩くなつて、俯向いた。

「さア、ねえ、貴女は何故僕を追ひ拂つたんです？　若し僕が此處に居たら、何にも起りはしなかつたでせう……」

「ですけれど、私、あなたを知らなかつたんですもの。私、あなたも矢張り……」

「えゝ、では今はもう僕を知つてるんですか？」

「少しは！　おゝ、例へばあなたは何で震へていらつしやるんです？」

「おゝ、貴女の推察は最初から當つてゐます！」と私は、私の少女が知力あることを喜んで答へた。それが美しさと共にあることは、決して不釣合ではない。「さうだ、貴女は、最初の一瞥で、自分の交渉してゐる男の樣子を推察しました。正確にいふと、僕は婦人の前では恥かしいのです、混亂してるんです、仕方がありません、丁度一分間前にあの紳士に脅かされた時の貴女のやうにね。僕は今いくらか驚いてゐるんです。夢のやうです。そして僕は、眠つてゐる時でさへ、女の人と話しをするなんてことはまるで考へたこともないんです。」

「何ですつて？　本當に？……」

「さうです、若し僕の手が震へてるとすればそれは、今までに貴女のやうな綺麗な小さな手を支へたことが一度もなかつたからなんです。僕は、女の人に對しては全くの他人なのです。つまり、僕は女の人に馴れてゐなかつたんです。解りますか、僕は一人つきりなんです……僕はどう話しをしたらいゝのかさへ知らないんです。よう御座んすか、僕は貴女に馬鹿なことを何か言ひはしなかつたでせうか、今僕には解らないんです！　正直に言つて下さい、きつと貴女は、僕が腹を立てる程鋭敏でないといふことを先づ考へたでせう？……」

「いゝえ、ちつとも、ちつとも、本當に反對ですわ。で、若し強ひて正直に言へと仰しやるなら、女はさういふ臆病を好むものですと申しますわ、若しかそれ以上にお知りになりたけ

れば、私もそれが好きですわ。私は、家へつくまで、あなたを追ひ拂ひはしません。」

「貴女はきつと、」と私は、喜びのために息もつかずに言つた。「僕の臆病を失はせるでせう、さうすれば、凡ゆる僕の僥倖ともお別れなんです……」

「僥倖ですつて！　どんな僥倖なんです——何の？　それは餘り聞きよくはありませんわね。」

「御免なさい、僕は悲しい、ついロが上つたんです。しかし、こんな場合に何の欲望も持たない人を貴女は考へられるんでせうか……」

「好かれること、えゝ？」

「さう、さうです、しかし、御願ひです、深切にはして下さい。僕がどういふ人間だか考へて下さい！　さア、僕は二十六です、そして今までに誰にも逢つたことのない人間なんです。どうして僕が、よく、うまく、そして適切に話しをすることが出來ませう？　僕が何もかも隱さずに貴女に話した時には、貴女にはよく思へるでせう……僕の心が話をしてゐるのに、どうして默れるのか、僕は知りません。いや、大丈夫ですよ……僕を信じて下さい、女の人だけぢやありません、決して、決して！　どういふ種類の知己もないんです！　そして、僕は毎日終ひには誰かに逢ふのだらうと夢想するより他何にもしないんです。おゝ、若しも貴女が、僕が幾度そんな風にして戀をしたか、知つてさへ下すつたら……」

「どうして？　誰方（どなた）と？……」

「えゝ、誰とでもないんです、或る觀念とです、僕が睡眠中に夢みてゐる人とです。僕は夢の中で本式のローマンスを作り上げるのです。あゝ、貴女は僕を知らない！　僕が二人か三人の女の人と逢つたことがあるのは、そりや勿論本當です。しかしその人たちはどういふ種類の女でしたらう？　みんな宿のお內儀さんでした、それは……しかし、僕が幾度も考へたことをお話ししたら貴女を笑はせるでせうね、それはかうなんです。往來で誰か貴婦人と話をする、唯だ單に話をすることなんです。言ふ必要もないことですが、彼女がたつた一人の時で、勿論、臆病に恭しく情熱的に、彼女に話しかけるんです、僕はどういふ婦人とも知合ひになる機會がないと言つて、僕を追拂はないように賴んで、僕はどういふ婦人とも知合ひになる機會がないと言つて、僕のやうなこんな不幸な男からは臆病な祈りを斥けるやうなことをしないのが、婦人の本來の務めだといふことを彼女に感じさせるのです。實際僕の求めるすべてのことは、彼女が同情を以て二語か三語姉らしい言葉を言つてくれて、一目見て僕を斥けるやうなことをしないで、僕の言ふことを信用して聽いてくれて、もし望みならば僕を笑つてもいゝのですが、僕を勵ましてくれて、その後決して二度とは逢はないとしても、二語も、たつた二語

でも僕に言つてくれるといふそれ丈けのことなんです！……だが貴女は笑つてる、しかし、それが、僕の貴女に話してゐる理由なんです……」

「お怒りにならないで下さい、私は、唯だあなたが、あなた御自身の敵になつていらつしやるのを笑ひましたの。もしそれを私にやつて御覧になつたら、きつと成功しましたわ、多分往來であつたとしましてもね。單純な程よう御座いますわ、……どんな深切な心の女でも、馬鹿か、それでなければその時何か困ることでもないのでしたら、そんなに臆病にあなたがお求めになる二語も言はずにあなたを追拂はうとすることは出來ませんわ。……しかし、私は何を言つてゐるんでせう？　勿論、その女は、あなたを狂人だと思つてしまひますわ。私は、自分で判斷してゐました、私は他の人達の生活についても隨分知つてをりますのよ。」

「おゝ、有難う、」と私は叫んだ。「貴女は今僕に對してどんなことをして下さつたのか御存じないでせう！」

「私、うれしいわ！　うれしいわ！　でも、話して下さい、どうしてあなたは、私が……注意と友情との……價値があると考へられるやうな……實際あなたの仰しやる宿のお内儀さんのやうな女ではない……といふことを發見なさつたんでせう？　何があなたに、私のところへいらつしやる決心をさせたんでせうね？」

「何が僕に？……だが、貴女は獨りでいらしつた、ところへあの紳――士がひどい横著なことをして、それに夜ですしね。あれは僕のしなくてはならないことだといふことを認めて下さらなくつちや……」

「いゝえ、いゝえ、私はその前のことを言つてゐるんですわ、向側の方で――あなたは、私の方へ寄つていらつしやるつもりだつたでせう。」

「向側で？　本當に僕はどう答へていゝか解りません。僕は恐ろしい……僕は今日は幸福だつたといふことが解りますか？　僕は歌を歌ひながら歩いてゐたんです、僕には田舍へ行つたんです、僕にはあんな幸福な瞬間は今までにありませんでした。貴女は……こりや多分僕の幻想だつたんでせう……そのことは許して下さい、僕は貴女が泣いてらつしやると思つたんです、それで僕は……それを聞いて悚へきれなかつたんで……僕の心は苦しくなつて來たんで……おゝ、神よ！　きつと僕は彼女のことを心配してゐたのかも知れません！　確かに、貴女に對して兄弟らしい憐れみを感じるのはいけないことではなかつたでせう……御免なさい、僕は憐れみと言ひましたが……さう、要するに、多分貴女は、貴女の方へ寄つて行つた僕の思ひがけない衝動を怒つてはいらつしやらないでせうね？……」

「お待ちなさい、もう澤山ですわ、そのことは話さないで下さい。」少女は、俯向いて私の手

を握りしめながら言つた。「そのことを言ひ出したのは私が悪いんですわね、しかし、私はあなたに誤解されなかつたのが、うれしいのですよ……ですが、もう家ですわ、私はこの曲り角から行かなくてはなりませんの。此處からもう二歩ばかりなんです……さやうなら、有難うございました！……」

「きつと……きつと貴女はそんなつもりぢやないんでせう……もう僕たちは二度と逢はないなんて？……きつと、これがお終ひにはならないんでせうね？」

「よう御座いますか。」と少女は、笑ひながら言つた。「初めはあなたは、たつた二語お望みになつたんでせう、それに今は……ですけれど、私は何も言ひませんわ……多分またお目にかかるでせう……」

「僕は明日此處へ來ます、」と私は言つた。「おゝ、許して下さい、僕はもう要求をしてゐる……」

「さうね、あなたは餘り我慢が無さすぎますわね……あなたはまるで迫つてるやうですわ。」

「聽いて下さい、聽いて下さい！」と私は彼女を遮つた。「僕が何か他のことを言ふとしても許して下さい……僕は言ひますが、僕は明日此處へ來ずにはゐられないんです、僕は夢想家です、僕は今こんな瞬間を、僕が夢の中で再びこんな瞬間を見なくてはゐられない程それ程稀なこんな瞬間を考へてるんですが、それは現實の生活を僕は殆んど持つてゐないからなんです。僕は、貴女のことを夢みてゐるでせう、終夜、まる一週間も、一年中も。僕は、きつと明日此處に來ます、丁度この場所へ、丁度同じ時間に、そして僕は今日のことを思ひ出して幸福になるでせう。この場所はもう僕にとつては親しみ深いものです。僕は、ペテルブールグにこんな場所をもう二つか三つか持つてゐるんですよ。僕は、曾て記憶の上で涙を流したことがあつたんでせう……」

「結構ですわ、」と少女は言つた。「多分、私は明日も十時に此處に參りますわ。私、あなたにはどうしても不可いと言へませんの……實は私此處に居なくてはならないんです。あなたと一緒に、用事をするのだとお思ひになつてはいけませんよ。第一に言ひますが、私は自分のために此處に居なければなりませんの。しかし……えゝ、私、あなたは本當に言ひますわ、あなたがいらしつても構はないんです。第一に、何か不愉快なことが、今日のやうに起るかも知れませんが、決して心配しないで下さい……つまり、私はあなたにお逢ひしたい丈けなんです……二語ばかり、あなたにお話しするためにね。誰だ、氣をつけて下さい、あな

たは、私をこれより悪く思つてはいけませんよー　私がそんなに輕々しく用事をすると思つてはいけませんよ……豫想させない方がいゝんですわ……それは私の祕密として置きませうー　たゞ約束だけは、豫め……」

「約束ー　言つて下さい、話して下さい。僕は何にでも用意します、本當に何にでもです。」と私は、歡ばしくなつて叫んだ。「僕は受合ひます、僕は從順に禮儀正しくします……貴女には僕がお解りでせう……」

「私が、明日來て下さいといふのも、皆あなたを私が知つてますからですわ。」と少女は笑ひながら言つた。「私は全くあなたを理解してゐます。でも、そんな風におなりになるのは氣をおつけなさいな、第一、（私のお願ひすることをよくとつて下さいね——私、正直に申上げるんですから。）あなたは私を戀しておしまひになることは出來ませんわ……それは出來ないことです、確かに。私はお友達にならうとしてゐるんです、さア、私の手を……ですが、私を戀しておしまひになつてはいけませんよ、お願ひですわー」

「誓ひます。」と私は叫んだ、彼女の手を握りしめながら……

「しつ、誓つちやいけません、あなたは、火藥のやうに燃えよう燃えようとしていらつしやるんですわ。そんな事を言つても惡く思はないで下さいましね。私は矢つ張り言葉を交はした

り忠告を求めたりする人を……一人も持たない事を御存じでさへあつたら。勿論、誰だつて忠告者を往來で探してはゐませんけれど、あなたは例外ですわ。私はあなたを知つてをりますす、二十年ものお友達の樣に……あなたは私を欺きはしないでせう、さうでせう？……」

「お解りでせう……たつた一つ、僕は、どうしてこれから先きの二十四時間を生存したらいか解りません。」

「ようく、お眠りなさいましな。お休みなさいまし、さうして私は、最早あなたを信じましたことを憶えてゐて下さい。しかし、あなたは、今、大變うまくお言ひになりましたわね、『きつと人は、すべての感情に對して、兄弟のやうな同情に對してさへ、責任を持つことは出來ませんー』つてね。お解りになつて、それは大變うまく仰しやつたわ、その考へは私を感動させましたの、それで私はあなたに打明けてお話しすることが出來ますわ。」

「どうか、だが何に就いてです？　それはどんな事なんです？」

「明日まで待つて下さい。それまでは、祕密にして置きませう。それ丈け、あなたには宜しいのですわ。その方が、ローマンスにいくらか味をつけることになるでせう。多分私は明日あなたにお話しします、ことによつたらしないかも知れませんが……ほんの少し豫めお話ししませうね、私たちは一層よくお互ひに知り合ふやうになりますわね……」

「おゝ、さうです。僕は、明日僕のことをすつかり話しませう！　だが、どうしたんだらう？　まるで僕には奇蹟が表れたやうだ……神よ、僕は何處に居るんでせう？　さア、言つて下さい、貴女が、他の女のするやうに怒りもします、最初から僕を迫拂ひもしなかつたことがうれしくはありませんか？　たつた二分間で、貴女は僕を永遠に幸福にしてしまひました。さうです、幸福に。恐らく貴女が僕を慰め僕の疑念を晴して下さつたことを誰が知るでせう！……多分こんな瞬間が僕には現れるでせう……しかし、それに就いては明日すつかり話しませう、何にもかも知らせます、何にもかも……」

「結構ですわ、承知しましたわ、あなたが先きに……」

「よござんすとも。」

「さやうなら、明日まで！」

「明日まで！」

そして我々は別れた。私は、家へ歸る決心をすることが出來なかつた。私は實に幸福であつた……明日！

第二夜

「まア、そんなことをしてあなたはお暮しなすつたの！」と彼女は、私の兩手を握りしめながら言つた。

「僕は二時間も前から此處に來てゐたんです、僕が一日どんな狀態でゐたか解りますまい。」

「知つてます、知つてますわ。併しお話をしませう。何故私は來ましたかお解りになつて？　昨日のやうな馬鹿なことを言はない爲めなんですよ。あなたにお話ししますけど、私たちはこれはずつと賢く振舞はなくてはなりません。昨夜私は、その事をよく考へたんです。」

「どんな風に——どう賢くならなければならないんです？　僕としては覺悟してゐます。しかし、本當に今はこれより賢くすることは何にも僕の生活には出て來ないんです。」

「本當に？　第一、私はお願ひしますけど、あなたはそんなに私の手をお握りになつてはいけません。第二に、私、今日は長い間あなたのことを考へて疑ひを感じてゐたことを申上げなくてはなりません。」

「それで、どうなつたんです？」

「どうなつたでせう？　それの結果は、私たちはすつかりやり直さなければならないといふことなんです。何故つて、私が今日到達した決定は、私があなたをちつとも知つては居ないといふことだつたのです。昨夜は私が赤ん坊のやうに、全く小さな女の子のやうに振舞つて

ねたといふことだつたのです、そして、勿論、實際をいふと咎は私の柔かな心に在るといふことになります——つまり、私は、誰でも自分の行爲を解剖する時到達することですが、私自身の賞讃をしてゐたといふことなのです。そこで、私の過誤を正しくするために、私は、あなたのことをすつかり細かに發見しようと決心したのです。しかし、私は、自分が何かを發見することの出來る人を一人も持つてゐないのですから、あなたは御自分で十分に何にもかも私に話して下さらなくてはいけませんわ。さア、あなたはどういふ方なのです？　さア、早く——始めて下さい——あなたの歴史をすつかり聞かして下さい。」

「僕の歴史！」と私は、びつくりして叫んだ。「僕の歴史ですつて！　だが、僕が歴史を持つてゐるなんて誰が言ひました？　僕は歴史なんかまるで持つてゐません……」

「そんなら、どうしてあなたは生きてらしつたんでせう、あなたに歴史が無いとすると？」

彼女は、笑ひながら遮つた。

「全く歴史なんか無いんです！　僕は、云はば自分で自分を見戍りながら、つまり、全く獨りで暮して來たんです——獨りです、全くの獨りで。獨りといふことはどういふことか解りますか？」

「でも、どうして獨りなんです？　あなたは、他人を決して見なかつたといふ意味なんです

か？」

「いや、いや、僕は勿論人々を見ます。でも矢張り僕は獨りです。」

「では、あなたは誰とも話をしたことが無いんですか？」

「正確にいへば、誰とも無いんです。」

「それぢやあなたはどういふ方でせう？　御自分で説明して下さい。一寸お待ちなさい、私、推察しますわ、多分、あなたには、私のやうにお祖母さんがあるんでせう。このお祖母さんが盲目で、あなたを何處へも遣らないんでせう。そのために、私は話の仕方を殆んど忘れてしまつたんですわ、そして、二年前に私が或る惡戲をした時、何にも私を制へてゐるものがないのを見ると、お祖母さんは私を呼びつけて、私の著物とお祖母さんのとをピンで留めてしまつたんです。それでそれからこつち、私は全く終日そんな風に坐つてゐたんです。お祖母さんは盲目なんですけど、靴下を編んでるんです。それで私は、お祖母さんのそばに坐つて、縫ひ物をするか、お祖母さんに大きな聲で本を讀んで上げるかしてゐるんです——そりやなんて可笑しな習慣でせう、もう二年も私はお祖母さんにピンで結びつけられてゐたんです……」

「何といふこつた！　何といふ不幸だ！　併しさうぢやありません、僕にはそんなお祖母さ

んはないんです。」

「さう、お祖母さんが無いんなら、どうしてあなたは家に坐つてるんです？……」

「聽いて下さい、貴女は僕がどんな種類の人間かといふことが知り度いのですね？」

「さうです、さうです！」

「嚴格な意味でですか？」

「非常に嚴格な意味で。」

「よろしい、僕は型（タイプ）なんです！」

「型（タイプ）、型（タイプ）ですつて！　どんな型（タイプ）なんです？」と少女は、笑ひながら叫んだ、まるで彼女は丸一年もの間笑ふ機會を持たなかつたかのやうに。「え、、あなたとお話するのは大變面白いわ。御覽なさい、此處に坐る處がありますし、坐りませう。誰も此處は通りやしません、誰も私たちの話を聞く者はありませんわ、それに——さあ、歷史をお始めなさい。でもあなたの仰しやることはよかありませんよ、あなたが歷史を持つてらつしやることは知つてますわ。たゞあなたは、それを隱していらつしやるんです。第一に、型（タイプ）つて何ですの？」

「型（タイプ）ですか？　型（タイプ）は本質のものです、それは馬鹿らしい人間なんです！」と私は、彼女の子供らしい笑ひに影響されて言つた。「それは性格です、よう御座んすか、夢想家とはどういふ

ものか知つてゐますか？」

「夢想家！　實は、知つてると思ひたいんです。私もその夢想家なんです。時々、お祖母さんのそばに坐つてゐると、凡ゆる種類の事が私の頭に浮んで來るんです。でも、夢想を始める時には、人は自分の空想と自分とを駈落させてるんですわね——え、、私が支那の公爵と結婚するんですつて！……でも、時には夢想するのはいゝことですわ！　しかし、どうしてそれがいゝか解るでせう！　殊に、人が夢想とは緣の遠い何か考へる事を持つてゐる時にはね。」と少女は、此度は可成眞面目に附加へた。

「素敵だ！　若し貴女が支那國と緣を結ばれるのだつたら、貴女は全く僕がお解りでせう。さア、聽いて下さい……しかし、一寸。僕はまだ貴女のお名前を知らないんです。」

「たうとう！　あなたは、そのことを急には考へなかつたんですのね！」

「おゝ、どうしたことでせう！　まるで考へつかなかつたんです。僕は全くこのまゝに幸福だつたんです……」

「私の名前はナステーンカです。」

「ナステーンカ！　そして、他に何もないんですか？」

「他に何もないんです！　だつて、あなたにはそれで十分ぢやないの、蟲のいゝ方？」

「十分ぢやないかといふんですか？　却つて十分過ぎる位です、十分ですよ、ナステーンカ。深切なお嬢さん、もしも貴女が初めから私のためにナステーンカなのならばね。」

「全くさうよー　それで？」

「さア、聽いて下さい、ナステーンカ、さアこの馬鹿らしい歷史を。」

私は、取りすました眞面目な態度をして、彼女のそばに坐つた。そして或る作品を讀み上げるやうに始めた——

「ペテルブールグにはね、ナステーンカ、貴女は御存じないでせうが、不思議な隱れた場所があります。それらの場所には、凡ゆるペテルブールグ人のために輝いてゐるあの同じ太陽は、覗き込みもしないで、或る他の新しいものが、それらの隱れた場所のために特に賴まれてすべての上に異つた光が投げてゐるかとも思はれるのです。さういふ隅にはね、愛するナステーンカ、全く違つた生活が營まれてゐるんです。我々の周圍に浪立つてゐる生活には似もつかない、我々の眞面目な、眞面目過ぎる位な時代に我々の間に現れないやうな或る知られない王國に恐らく存在するであらうと思はれるやうな生活が營まれてゐるんです。ところで、その生活といふのは、全く幻想的なひどく理想的な、或物と穢い殺風景な平凡な、信じられない程の下品なとも云ふに足らない或物(噫！　ナステーンカ)との混合なのです。」

「ふつ！　まア！　何といふ前置でせう！　何を私聽いてるんでせう？」

「お聽きなさい、ナステーンカ。(僕はいつまで經つても貴女をナステーンカと呼ぶことに退屈しないでせうよ。)さういふ場所には、不思議な人々——夢想家が住んでゐるのだといふことを話しませう。夢想家といふものは——若し貴女が正確な定義を欲するならば——人間ではなく、或る中間の種類の生物なのです。彼は、日の光から隱れてはゐるんですが、大抵は或る近づき難い隱家に落著いてゐるんです。彼がその隅つこへ辷り込んだが最後、蛇のやうな具合になり、それとも、ことによるとその點に於いてはかの動物にして同時に家である龜と呼ばれる驚くべき生物に非常によく似てゐるのです。彼が、いつも變らず綠に塗られた、穢らしい、陰氣な、そして恐ろしく煙草の烟で燻ぶつてゐる彼の四壁を大變好むといふことがどうして貴女に解りませう？　どうして、此の馬鹿げた紳士は少數の知己の一人に訪問されるとあんなになるんでせう、(それ故彼は、凡ゆる友人といふ友人を避けるやうになつてるんです。)此の馬鹿げた紳士が、その人に逢ふ時には、まるでその四壁の中でたつた今、或る罪惡でも犯したやうに、まるで贋造紙幣でも拵へてゐたかのやうに、又は、まるで眞の詩人が死んで、その友が詩人の仕事を出版することを神聖な義務だと思つてゐるといふことを述べようとして、匿名の手紙を添へて或る雜誌へ送るべき詩を書いてでもゐるやうに、非

常に混亂し、顏色を變へて、狼狽へきつてゐるといふのは何故でせう？　何故でせう、言つて下さい、ナステーンカ、その二人の友の間に會話が容易に出來ないといふのは何故でせう？　まるで笑ひもしないといふのは何故でせう？　新しくはひつて來た者も、いつもは笑ひと生々した言葉と美しい婦人に就いての會話と、及びその他の樂しい問題を非常に好むのであるが、その人も途方に暮れてしまつて、その舌から少しも生々した言葉が飛び出して來ないといふのは何故でせう？　そして、此の友だちが、多分新しい、そして始めて來た友だちが——何故なら二度目の訪問は殆んどないでせう、その友だちは二度とは決して來ようと思はないでせう——その友だちが、その機智（若し持つてゐるならば）にも拘らず、その主人の俯向いてゐる顏をぢつと見戍つた程混亂してしまひ、口重くなつてしまふといふのは何故でせう？　主人の方は、入れ代りに全く絶望的になり、事をうまくして會話を元氣づけ自分の上流社會の知識を示し美しい婦人に就いても語り、そしてこんなハンブルな努力で水から出てしまつた魚のやうに間違つて彼を訪問にやつて來た可哀想な人を、喜ばせてやらうとする素晴しい、併し無益な努力をした後で、どうしたらいゝか分らなくなつてしまふのです。その紳士が、忽ちにまるで有りもしなかつた甚だ緊要な用事を思ひ出して、出し抜けにその帽子をとり、急いで逃げ出して、そのまづくいつた事に就いての後悔と償ひとを示さうと全力

を盡してゐる主人の、暖かい愛から手を引離してしまふといふのは何故でせう？　その友だちは戸の外へ出ると笑ひ出し、この可笑しな人間に二度と會ひには來まいと誓ふのですが、その可笑しな人間は、本當に大變善良な奴で、それと同時に、彼は話してゐた間のその可笑しな奴の顏附を、裏切られて捉まり荒々しく取扱はれ脅かされて子供たちの爲めに凡ゆる種類の侮辱を蒙り終ひには全く元氣もなくなつてしまふ不幸な小猫の表情と比較して、慰みにしようとする考へを拒むわけにいかないのです、その小猫は椅子の下の暗い處に隱れて、隙を見て逆立ちをし唾を吐き、その虐げられた顏を兩方の前足で洗ひ落さなければならないんです、そしてずつと後までも人生と自然と及び情け深い奥さんによつて主人の食事から殘されたものをさへ腹立たしげに見てゐるんです……それは何故でせう？」

「よう御座んすか、」と始終びつくりして私に耳を傾けてゐたナステーンカが、その眼と小さな口とを大きくして遮つた。「よう御座んすか、私は、そんなことが何故起るのか、又あなたが何故そんな馬鹿げた御問を私になさるのか、ちつとも知りませんわ。私の知つてゐることは、こんな事をあなたが次から次へと言はなくてはならないやうになつた、といふことだけですわ。」

「確かにさうです。」と私は、最も莊重な顏をして答へた。

「ぢや、確かにさうなんですから、お續けなさいな。」とナステーンカは言つた。「だつて、私、それがどう終るんだか大變知りたいんですもの。」

「貴女は知りたいんですね、ナステーンカ、我々の主人公、卽ち僕が――何故ならすべての事の主人公が卑下してゐる僕自身なんだから――その隱家で何をなしたか？　貴女は知りたいんですね、何故僕が夢中になつてしまつたのか、そして何故一人の友だちの思ひがけない訪問によつて丸一日動顚してゐたのか？　貴女は知りたいんですね、何故僕が、そんなにびつくりしてゐたのか、何故僕が、その部屋の入口が開いた時赤くなつたのか、何故僕が僕の客を歎待(もてな)すことが出來なかつたのか、そして何故僕が僕自身の歎待の重みの下に打碎かれてゐたのか？」

「おゝ、さうです、さうですわ。」とナステーンカは答へた。「そのことですよ。よう御座んすか、あなたはそれをすつかり華々しく叙述なさつたわ、ですけれど、あなたはきつとそれをもう少し華々しくなく叙述なさることは出來なかつたんでせう？　あなたは、それを本から讀んでるやうに話していらつしやるわね。」

「ナステーンカ、」私は殆んど笑ひを制へることが出來ないで嚴肅な威嚴のある聲で、答へた。「愛するナステーンカ、僕は自分が華々しく叙述してゐることを知つてるんです。だが許して下さい、僕にはさうするより他どうしたらいゝのか分らないんです。今こそ、愛するナステーンカ、今こそ、僕は、千年の間七つの封印をされて壺の中に横はつてゐた後、その封印がやつと取除けられた時のソロモン王の靈のやうなのです。ナステーンカ、こんな長い間離れてゐてやつと出會つた今こそ――何故なら僕は何年もの間誰かを探してゐたんです、そしてそれが僕の探してゐたのは貴女だつたといふことの證(しるし)なんです、さうして、僕たちが今逢はなければならないといふことは定められてゐたんですからね――今こそ、千の扉が僕の頭の中で開かれてゐるんです、それで僕は言葉の河に僕自身を溺らせなければならないんです、でなければ僕は窒息してしまふでせう。だから、どうか僕の邪魔をしないで下さい、ナステーンカ、謙遜に從順に聽いて下さい、さもないと僕は默つてしまひます。」

「いえ、いえ、いえ！　どう致しまして。續けて下さい！　私一言も言ひはしませんから！」

「續けませう。一日の中で、わが友ナステーンカ、僕の非常に好きな一時間があるんです。それは殆んどすべての用事と仕事と務とが終つてしまつた時で、すべての者が食事をしに、寢に、休みに、急いでゐる時で、その途中で皆が皆他の、彼等の夕方と夜の凡ゆる殘りの自由な時間とに就いての、もつと樂しい問題を思ひ廻らしてゐる時なんです。その時我々の主人

公は——ナステーンカ、僕の物語を第三人稱で話す事を許して下さい、何故なら人は第一人稱で話す事は恐ろしく恥かしく感じるものですからね——そこで、その時我々の主人公は矢張り仕事を持つてゐたのですが、他の人々のうしろから歩いて行くんです。ところが、彼の蒼白いといふよりは鐵くちやに見える顏には、或る不思議な歡びの感情が働き始めるんです。彼は、寒いペテルブールグの空にゆる〳〵と消えかゝつてゐた夕陽をも、無關心には眺めなかつたんです。私がそれを眺めたとか眺めなかつたとかいへば、僕は、嘘を言つてゐるんだ、彼は、それを眺めはしなかつたが、言はば、まるで何か他のもつと興味のある事柄に疲れてゐたか心を奪はれてゐたかのやうに、認識なしに見てゐたんです。それ故彼は、自分のことには何事にも殆んどまるで氣もつかなかつたんです。彼が喜んでゐたのは、翌日までは彼にとつて退屈な仕事から解放されてゐて、教室から遊戲といたづらとに放たれた生徒のやうに幸福だつたからなんです。彼を一目見て御覽なさい、ナステーンカ、喜ばしい情緒が彼の弱弱しい神經と病的に昂ぶつてゐる空想との上に、既に或る効果を及ぼしてゐたことを貴女は見るでせう。彼が何事かを考へてゐるのを貴女は見るでせう……食事に就いて、だと思ひますか？　その夕方に就いてでせうか？　何を、彼はそんな風に見てゐるんでせう？　それは彼の跳ねてゐる馬に曳かれてゐる馬車でごろ〳〵とやつて來る婦人に向つて、まるで繪のやうにお辭儀をしてゐる威嚴ある風采の紳士に對してでせうか？　いゝや、ナステーンカ、それらの凡ゆるつまらない事が現在の彼にとつて何でせう！　彼は、今はその自分の個人的の生活で充ち足りてゐるんです、彼は急に裕福になつてしまつたんです。そして、その消えかゝつてゐる沈む日が非常に樂しげに彼の前にお別れの輝きを注ぎ、而も彼の暖かくなつた胸からさま〴〵な印象を呼び出してゐるといふことは何でもない事ではありません。今は彼は、いつもならば最も小さなくだらないことにも感動される筈の、その道路にも殆んど氣がつかないんです。今や、『空想の女神』が（もし貴女がジューコフスキイを讀んだならばね、ナステーンカ。）既にその幻想の手を以て彼女の黃金の經糸を繰り出してその上に驚くべき魔の世界の雜形を編み始めたんです——而も恐らくはその幻想の手は、彼が今歩いてゐる素晴しい大理石の甃石道から遙か遠い第七の水晶の天國へと彼を運んで行つた（譯者曰非常に幸福にしたことと）と彼は誰が知りませう？　試しに、彼を今呼び止めて、突然に訊いて御覽なさい、彼は今何處に立つてゐるのか、どの通りを歩いてゐるのか——多分彼は何にも記憶しないでせう、歩いてゐる場所も、今立つてゐる場所も。そして當惑して赤くなつて彼は、きつとその立場を救ふために何か嘘を言ふでせう。それほど彼はびつくりします、殆んど、叫びさうにします。そして、尊敬すべき老婦人が往來の眞中で丁寧に彼を呼び止めて道を訊かうものならば、恐ろ

しさうに邊りを見廻すのです。それから彼は當惑して顏をしかめて、大股に歩き出すのです、通行人が一人ならず微笑して彼を見ようとして振り向いたことも、小さな娘がびつくりして廻り途をして聲を上げて笑つたり、彼の無作法な物思ひに沈んでゐるやうな微笑と身振とを眼を見開いて眺めたりしてゐたことも氣づかずに。けれども、幻想が、老婦人や奇妙な通行人や笑つてゐる子供や、フォンターンカの畔の中で夜を過す百姓や（我々の主人公は、その時運河のそばを通つてゐるのだと思ひませう。）をその慰みの高揚の中へ不意に捉へて、凡ゆる人と物とを蜘蛛の巢にかゝつた蠅のやうにその晝布の中へ編み込んでしまふのです。そしてその變な男は、解決すべきいろ〳〵の氣持のいゝことをその心に貯め込んで自分の愉快な巢窟に歸つて來るのですが、彼の給仕をして呉れたマトローナが——いつも考へ深く鬱ぎ込んでゐる——テーブルを片附けてパイプを持つて來る時、やつと我に返るのです、其時我に返つて自分が食事をしたことをびつくりして思ひ出すのです、尤も彼はそれがどうして起つたのか全く氣がつかなかつたんですがね。部屋の中はもう暗くなつてゐる、彼の精神は悲しく空虛になる、空想の凡ゆる王國が彼の周圍（まはり）でこなごなに落ち碎け、跡かたもなく音もしずに落ち碎け、夢のやうに漂ひ去るのです。そして彼は、何を夢みてゐたのか自分で思ひ出すことも出來ないんです。しかし、ぼんやりした感覺がかすかにその心を動かして痛みを與へ、或る新しい欲望が誘惑的に彼の空想を攪り興奮させて一群の新しい幻像を目につかぬ程度に呼び出すのです。その小さい部屋の中は靜けさが支配してゐる、孤獨と怠惰とによつて空想が養はれるんです。それは、年取つたマトローナがすぐそばの臺所で靜かに身を動かしてコーヒーを作つてゐる時のその使つてゐる水のやうに、かすかに煙を立て、かすかに煮えてゐるんです。今やそれが痙攣的に發生して來ると、目的もなく、又出鱈目に拾ひ上げた本が、第三頁に達しない內に我が夢想家の手から落ちてしまふのです。彼の空想は再び動き働き出して、そして再び新しい世界が、新しい魅惑的な生活が彼の前に展開されるのです。新しい夢——新しい幸福！　デリケートな逸樂の毒の新しい突進！　彼に對しては何が本當の生活なのでせう！　彼の汚されてゐる眼には僕たち、貴女と僕とは、ナステーンカ、ひどく鈍く、のろ〳〵と、氣力なく生きてゐるんです。彼の眼には僕たちは皆その運命に對してひどく不平をこぼし、その生活によつてひどく疲れ果てゝゐるんです！　そして實際、僕たちの間でも一目見たところでは、如何にすべてが冷たく、苦々しく、まるで不機嫌なやうに見えることでせう、御覽なさい……憐れな事だ！　と我々の主人公は考へるのです。だが、彼がさう考へるのに全く不思議はないんだ！　彼の前に、斯くの如き魔術の生々した光景をなして非常に魅惑的に非常に氣まぐれに非常に無頓著に、そして自由に集つてゐる魔法の幻像を

御覽なさい、その中に在つて前景に於ける最も秀でた姿は、勿論その貴重な人物の中の彼自身、我々の夢想家なのです。何といふ様々な冒險があるのか、何といふ涯し無き有頂天の夢の一群があるのか、見て御覽なさい。多分貴女は、彼は何を夢みてゐるのかと訊くでせう。どうしてさう訊くのでせう？——何故つて、すべてのことに就いてなのです……最初は認められず後になつて月桂冠を冠せられた多くの詩人に就いて、聖バルソロミュウの夜のホフマンとの友情に就いて、イワーン・ワシリエーヴィチになつて演ぜられたるカザン奪取の英雄に就いて、クララ・モーグレーに就いて、エッフィ・デアンズに就いて、教長たちの會議及び彼等の前のハッスに就いて、『惡魔のロバート』の中の死者の蘇生に就いて（あの音樂を覺えてゐますか、墓地の臭ひのする！）ミンナとブレンダに就いて、ペレズィーナの戰に就いて、ヴェー・デー伯爵夫人に關する詩の朗讀に就いて、ダントンに就いて、ei sui amanti クレオパトラに就いて、カロームナに於ける小さな家に就いて、その人自身の、及びその人のそばに居る愛する人の家庭に就いて、彼等は冬の夕にその小さな口と眼とを開いてゐる女に耳を傾けてゐるんです、丁度今僕に耳を傾けてゐる貴女のやうに、僕の天使……いや、ナステーンカ、何があるでせう、彼にとつて、逸樂を好むのらくら者にとつて、この人生には何があるでせう、何故なら貴女と僕とどつちがこんな熱望を持つてるんでせう？　これは憐れな可哀想な人生だと彼は思ふのです。彼にとつても矢張り、その憐れな人生のうちの或る日には彼の空想の一生を與へもする程の悲しい時が時とするとあつて、而も喜びと幸福との爲め許りではなく、悲しみと後悔と抑へ難い憂ひとの時にでも識別もしずにその一生を與へてしまふのだといふ事を見透しはしないんです。だが、その脅迫的な時はこれまでやつて來たことはないんです——彼は何にも望んではゐないんです、何故なら彼は凡ゆる希望を超越してゐます、何故なら彼は凡ゆる物を持つてるのです、何故なら彼は充ち足りてゐるんです、何故なら彼は已自身の生活に對する藝術家で、彼の最近の氣まぐれに適應して絶えず自身のためにそれを創造してゐるからです。そして、貴女は御存じでせう、このお伽噺の國の幻想の世界は、非常に容易く、非常に自然に創造されるのですよ！　まるでそれは妄想なんぞではないやうに！　實際、彼はそれらの瞬間には凡ゆるその生活は感情によつて考へられたものではなく、蜃氣樓ではなく、想像の迷妄ではなく、それは具體的な、眞實の、實質的のものだといふことを信じようとしてゐるんです！　何故でせう、ナステーンカ、こんな瞬間に人が息を殺すといふのは何故でせう？　何故、如何なる魔法によつて、如何なる譯の分らない氣まぐれによつて、脈搏が早まり、その夢想家の眼からは涙が迸るのでせう、而も彼の蒼白い濕ひを帶びた頰が輝き、彼の全存在が何とも言はれない慰安の感情

に漲つてゐる時に？　不眠の全夜が窮りなき歡喜と幸福とのうちにまたゝく間に過ぎ去り、曉の光がその窓に薔薇色に閃き、黎明が、不確かな幻想的な光を以てその陰氣な部屋に充ち渡つて、いつものペテルブールグのやうになる時、我々の夢想家はヘトヘトに疲れきつて、寢床の上に身を投げ出して、病的に激し過ぎた精神のぞくぞくするやうな喜びを以て、又、その心の中には、倦み疲れた甘い疼痛を感じながら熟睡に落ちてしまふといふのはどういふ譯なのでせう？　さうだ、ナステーンカ、人は自己を欺いてゐるんだ、そして無意識に現實の本當の熱情が自分の魂を搖り動かしてゐるのだと信じてゐるんです、人は無意識に自分の非物質的な夢の中には何か生々としたしつかりしたものがあると信じてしまふんです！　だが、それは妄想なんでせうか？　そこでは、例へば愛は、彼の胸の中の凡ゆる計り難い喜びと、凡ゆる拷問の責苦とに結びつけられてゐるんです……まア、一寸彼を見て御覽なさい、さうすれば貴女にはきつと頷けるでせう！　貴女は彼を眺めて、ナステーンカ、彼がその有頂夫の夢の中で愛する彼女を決して見たことがないといふ事が信じられますか？　彼がたゞ纔かに誘惑的な夢想の中で彼女を見たことがあるのみで、この熱情は夢そのものに過ぎなかつたなどといふことが有り得るでせうか？　きつと彼等は、共に手に手をとつて——すべての世界を脫して、互ひに彼の或は彼女の生活を對手のそれと一致させて彼等二人だけで多くの年

を過したに違ひない！　きつと、別れの時が來た時には彼女は、陰氣な空の下で暴れ狂つてゐる暴風雨にも、彼女の眞黒な睫毛から涙を掴んで吹き飛ばしてしまふ風にも氣づかずに、彼の胸の上で啜り泣き悲しみながら打伏してゐたに違ひない！　そのすべてが、夢だなどと云ふ事が——そしてあの庭が、彼等がいつも相共に非常に幸福に散歩し、希望に燃えたり、悲しんだり、愛したりした、非常に長く、そして非常に樂しく『愛し合つた』あの庭が、鬱陶しい、見捨てられたやうな、荒れ放題になつてゐるあの庭が、あの少し許り苔の生えた、淋しい、陰氣な小道までが夢だなどといふことが有り得るのでせうか？　何といふ苦惱を彼等は嘗めたことでせう、何といふ激しい恐怖を！　彼等の戀は如何に無邪氣な、如何に純粹なものだつたでせう、そして惡い人々は（言ふ必要もないことですがね、ナステーンカ）如何に澤山あることでせう！　さうして、神よ！　屹度彼は後に彼女に逢ふでせう、彼等の生れた濱邊からはずつと離れた處で、全く違つた空の下で、全く無始無終の都（譯者曰——羅馬のこと）に於ける暑い南方で、音樂のとゞろき鳴り渡るまばゆきばかりに光り輝く舞踏會で、バラッゾーの中で、（きつとバラッゾーでですよ、）光の海に溺れて、露臺の上で、桃金孃と薔薇に環のやうに圍まれて、其處で彼女は、彼を認めると急いで假面を脫して、『私は自由なのです。』と私語きながら、彼の腕の中に震へながら身を投げかけて、歡びの叫び聲をあげ、お

互ひに抱き合ひながら、一寸の間彼等は自分たちの悲しみも別れて居たことも凡ゆるその苦しみも、それからあの陰氣な家やあの老人や離れた國の荒れ果てた庭や、又は彼女が最後の熱烈な接吻を與へて、苦しみと絶望とで萎えてゐた彼の胸から身を引放してしまつたあの場所をも忘れてしまふのです……おゝ、ナステーンカ、かの招かれない客が、或る嚴丈な脊の高い男が、冗談の好きな樂しげな人間が、扉を開けて、まるで何事もなかつたやうに、『おい、僕はたつた今パヴロフスクから來たんだよ。』と叫び出したとしたら、人はびつくりして、混亂の樣子をし、隣りの庭から盜んで來た林檎を今ポケットへ詰め込んだばかりの小學生のやうに眞赤になるのだといふことを、貴女は認めなければなりませんよ。神よ！　老伯爵が死んだのです、何とも云ひやうのない幸福が手近かなところへ來てゐるんです——そこで人々がパヴロフスクから來るんです！」

私は、自分の悲愴な訴へを終つて、悲しく口を噤んだ。私は心に留めてゐるが、私は無理に笑ふことをひどく欲してゐた。何故ならば私は自分の內に毒惡な惡魔が蠢動してゐたことを既に感じてゐたから、私の咽喉はつかへてゐた、私の顎は震へ始めた、そして私の眼は次第に濕り氣を帶びて來た。

その悧巧な眼を開けて私の言ふことをぢつと聽いてゐたナステーンカは、子供らしく制へきれずに笑ひ出すであらうと私は思つてゐた。私は、既に後悔しかけてゐた、私が餘りに餘計なことを、喋舌り、私の心の中で長い間煮つまつてゐたことを必要もないのに述べ立てたことを、而もそれに就いては私は書いたものから讀むやうに話すことが出來たのだ、何故ならば私は、ずつと前から自分自身に裁斷を下してゐたのだから、そして今、告白をする場合、理解されようとも思はずに、それを讀み上げないではゐられなかつたのだ。ところが、私の驚いたことには、彼女は默つてゐた、それから暫らくして彼女は私の手を握りしめて、臆病な同情を以て訊ねた——

「きつとあなたは、絶えずそんな風に暮していらしつたんではないんでせう？」

「絶えずです、ナステーンカ。」と私は答へた。「絶えずなんですよ、それに、僕は、終ひまでさうしてつゞけさうな氣がするんです。」

「いゝえ、さうつゞきはしませんわ。」と彼女は不安さうに言つた。「さうなつては不可ませんわ。すると、多分私は一生お祖母さんのそばで過すことになるでせう。そんな風に暮らすことは全くよくないのだといふことを知つてらしつて？」

「知つてます、ナステーンカ、知つてます！」私は、自分の感情を最早抑へることが出來ないで叫んだ。「そして僕は、自分のあらゆる善い年を失つてしまつたことを、今までよりも

ずつと認めてゐるんです！　そして、今は、僕は神様が貴女を、僕の善良な天使を、そのことを僕に話し、それを示す爲めに、僕に送つて下さつたといふことを知り、且つ、知つた上で、苦しくそのことを感じてゐるんです。今は僕は、貴女のそばに坐つて、貴女と話をしてゐるので、未來のことを考へるのは僕にとつては變なのです、何故なら未來に於いては——再び淋しさが來るのです、ふたゝびこの黴の生えた無益な生活が來るんです、そして僕は、現實に於いて、貴女のそばで非常に幸福であつた時のことを、どんな風に夢みなければならないんでせう！　おゝ、愛する少女よ、最初、僕を逐ひ拂はなかつたことのために、少くも二晩の間は、僕が生活したと言ふことが出來るやうにして下さつたことのために、貴女に祝福あれ。」

「おゝ、いゝえ、いゝえ！」ナステーンカは叫んだ、そして彼女の眼には涙が輝いてゐた。「いゝえ、もうさう成つては不可ません、私たちはそんな風に別れては不可ませんわ！　二晩とは何でせう？」

「おゝ、ナステーンカ、ナステーンカ！　貴女は僕自身のためにどこまで僕を慰めて下さつたか解りますか！　今でも僕が、或る時さうだつたやうに自分自身をひどく惡く思ふやうなことはないといふことが解りますか？　多分僕は、自分の生活の犯罪と罪過とを悲しむことを罷めるだらうといふことが解りますか？　さうして、僕が事を誇大してゐたとは思はないで下さい——どうか、さうは思はないで下さい、ナステーンカ。何故なら時とするとかういふ不幸は僕に現れて來るんです、かういふ不幸が……何故ならば、さういふ時には僕が現實の生活に於いて暮し始める事が出來ないやうに僕には思はれて來るんですから、何故ならば、僕には、自分が本當の物、現實の物に對する凡ゆる感激、凡ゆる本能を失つてしまつたやうに思はれるんですから、何故ならば、僕は最後には自分自身を呪ひさへするのですから、何故ならば、僕には空想の夜を過した後には正氣に歸る瞬間があるんですから、その瞬間は怖ろしいものです！　然るに貴女は、貴女を取捲く生活の渦の中の雜沓の急轉と叫喚とを聞いてゐるんです。貴女は、現實に於いて生活してゐる人々を聞いたり見たりしてゐるんです。彼等にとつては生活は禁ぜられてはゐないことを、彼等の生活は夢のやうにまぼろしのやうに浮び去りはしないことを、彼等の生活は永遠に新しく永遠に若々しくて、その內の一時間をとつても他の者と同じではないといふことを貴女は見てゐるんです。だが、空想は恐ろしく元氣なく、下品なまでに單調で、偏愛なく脅かされ、影の奴隸觀念の奴隸太陽を隱す最初の雲の奴隸で、且つ太陽に身を捧げてゐる眞のペテルブールグの人々を憂鬱に曇らせるものなのです——そして憂鬱に於いては空想が何でせう！　此の無限の空想は遂には退屈になり、不斷

の運動に疲れてしまふといふ事を人は感じてゐます、何故なら人は成人しようとしてゐる、自分の古い理想を凌駕しようとしてゐるんです。彼等は打碎かれて斷片になり、塵に委されようとしてゐるんです。若しそこに何等の他の生活もないとしたら人は、その斷片からそれを作り上げなくてはならないんです。しかるに魂は、何か他のものを熱望し切願してゐるんです！　さうしてこの夢想家は、無益にも彼の古い夢を掻き探してゐる、恰も餘燼の中に火花を求めるやうに、その火花を煽つて焰とし、再び燃ゆる火によつて自分の冷たく凍つた心を暖め、そして、非常に快かつた、彼の心を感動させた、彼の血を煮え立たせ、彼の眼から涙を落させ、非常に淫逸に彼を欺いてゐた凡ゆる事柄を再びその中に起さうとするかのやうに！　僕の到達した點が、ナステーンカ、解りますか？　解りますか、今、僕は僕自身の感覺の記念日を祝福しずにはゐられないんです、その記念日といふものは、曾ては非常に快い決して現實には在在しなかつたところのものなのです——何故ならこの記念日はその同じ愚かな影のやうな夢の記憶の中に在るのですからね——そしてこの祝福をしずにゐられないといふのは、その愚かな夢が最早無いからなのです、僕がその夢を得る何物も持たないからなのです、ねえ、夢とは云つても、何でもなくやつて來はしないんですよ！　僕が、曾て自己流に幸福であつたその場所を、或るきまつた日に思ひ出して訪問することを今でも愛してゐる

ことが解りますか？　僕は、その取り返せない過去に調和させて現在を打ち建てることを愛するんです、そして僕は影のやうに、目的もなく、悲しく、憂鬱に、ペテルブールグの町やうねくね曲つた小路やをさまよふのです。それは何といふ記憶でせう！　例へば此處では、丁度一年前の丁度今、丁度此の時間に、此の甃石の上で、今日と全く同じやうに淋しく憂鬱にさまよつてゐたといふやうなことを憶えてゐるんです。さうして人は、其時の自分の夢が悲しいものだつたことを憶えてゐるんです、而も、過去はよくはなかつたのだが、人はいくらかよかつたやうに感じてゐるんです、その生活は平和で、人は現在屢々やつて來る陰氣な考へから解放され、良心の蝕耗——現在實も夜も僕に休息を與へない陰氣な鬱々とした蝕耗から解放されてゐたやうに感じてゐるんです。そして人は、自分の夢が何處に在るのか自分で探してゐるんです。さうして、人は顏を振つて、如何に速かに生の飛び去ることよ！　と言つてゐます。そして人は、再び自分の時代に成されたところの事柄を自分で探すのです。貴女は、貴女の一番よかつた時代を何處に埋めたのでせう？　貴女は、生活をしたことがあるんですか、ないんですか？　見よ、と人は自分自身に向つて言ひます、見よ、如何に世界は冷たくなつてゐるかを。またいくらか年が過ぎる、そしてその後では陰氣な孤獨が來るでせう、それから今度は、撞木杖をついて震へてゐる老年が來る、その後は不幸と破滅です。貴女の

空想の世界は蒼白くなり、貴女の夢は枯れ凋んで消滅し木から落ちる黄色い葉のやうに落ちてしまふでせう……おゝ、ナステーンカ！　ねえ、獨りで殘されるといふことは、全くの獨りにされるといふことは、そして後悔すべき何事かをさへ持たないといふことは悲しいことでせう……何故なら貴女の失つたそのすべては、何もかも何物でもなかつたんだ、愚かな單純な無用の物だつたんだ、そこには夢より他に何物も無かつたんだ！」

「さア、もう私の感情を動かすことはよして下さい。」とナステーンカは、その頬に滴る涙を拭ひながら言つた。「さア、もうお終ひよ！　さア、私たちは二人一緒になりませう。さア、私にどんなことが起らうとも、私たちは決して別れるんぢやありませんわ。よう御座んすか、私は單純な娘です、お祖母さんが私の先生になつてはくれましたけれど、私は大した教育もないんです。それでも本當に私はあなたを理解します、何故つて、あなたが仰しやつたことはみんなお祖母さんがその著物へ私をピンで留めてしまつた時私が、自分で懐いてゐたところのものなんですから。勿論、私はあなたがなさつたやうに旨く述べることは出來ないでせう、私は教育が無いんです。」彼女は、臆病に附加へた。何故なら彼女は、私の悲愴な雄辯と高尚な遣方とに對して尚ほも或る種の尊敬を感じてゐたのであつた。「でも、私、あなたが私

にすつかり打明けて下さつたことが大變うれしいのよ。今は私はあなたをすつかり、あなたのすべてを知りましたわ。それにはあなたの方では何を知つてらつしやるでせう？　私も私の歴史をお話ししたいんです、隱さずに何もかも、でその後であなたは私に忠告を與へて下さらなくちや不可ませんよ。あなたは大變悧巧な方ですわ、あなたは私に忠告を與へる約束をして下さるでせう？」

「あゝ、ナステーンカ。」私は叫んだ。「僕は一度も忠告を、まして賢い忠告を與へたことは全くないんですが、でも、我々が若しもこんな風に續けて行くとすればそれは非常に賢いことでせうし、我々はお互ひに賢い忠告を澤山與へ合ふことが出來るだらうといふことが僕には解ります！　さア、僕の美しいナステーンカ、どういふ種類の忠告を貴女は欲してゐるんです？　正直に言つて下さい、今こそ僕は、言葉を見出すことが僕にとつてむづかしくも何ともない位、非常に樂しく幸福なんです、非常に勇敢で賢いんです。」

「いゝえ、いゝえ！」とナステーンカは、笑ひながら遮つた。「私は、賢い忠告を欲してる丈けぢやないんですわ、私は、丁度あなたが今までも絶えず私を好きだつたといふやうな暖い兄らしい忠告を欲してるんです！」

「いゝとも、ナステーンカ、いゝとも。」私は喜んで叫んだ。「そして、若し僕が二十年間も貴

女を好いてゐたんだつたとしたら、今よりももつと貴女を好いてゐたなんてことは有り得ないことだ。」

「お手を。」とナステーンカは言つた。

「さア、さア。」私は、手を彼女の方へ差出しながら言つた。

「では、私の歴史を始めませう！」

ナステーンカの歴史

「私の話の半分は、もうあなたは御存じね——といふのは、私にはお祖母さんがあるといふことはあなた知つてらつしやるわね……」

「若し、そのあとの半分もそれ程簡単なのだつたら……」私は、笑ひながら遮つた。

「靜かに、聽いて下さいよ。第一にあなたは私の邪魔をしないことを受合つて下さらなくては不可ませんわ、でないと私、きつと混亂してしまふでせうからねー　さア、靜かに聽いて下さい。

「私には年取つたお祖母さんがあります。私のお父さんとお母さんが逝つたので、私は全く小さな子供の時分にお祖母さんに引取られたのです。お祖母さんは、よく暮してゐた時分の事を此頃思ひ出してますから、昔は今よりもお金持だつたんだらうと思はれますの。お祖母さんは私に佛蘭西語を教へてくれました、それから私のために先生に成つてもくれました。私が十五の時（さうして今は私十七なんですのよ）私たちはお稽古を罷めてしまつたんです、私が惡戲になつたのは其時分なんですが、どんなことを私がしたか、お話ししようとは思ひませんわ、それは餘り重要なことではないといふ丈けで澤山なのです。けれどもお祖母さんは、或る朝私を呼びつけて、お祖母さんは盲目なので私の世話をすることが出來ないと言つて、ピンをとつて、私の著物をお祖母さんの著物へピンで留めてしまつたのです。さうして、若しも私がもつといゝ娘に成らなければ、勿論これから先きもそんな風にして坐つてゐなければならないのだと言ふのでした。實際、最初はお祖母さんから逃げることは出來ないことでした。私は始終お祖母さんの傍で、仕事をしたり、本を讀んだり、勉强したりしなければなりませんでした。一ぺん私は、お祖母さんを欺かさうとしました、そして私の代りにフヨークラを坐るように說き附けたんです。フヨークラといふのは私たちの傭女で、聾なんです。フヨークラが私の代りに坐つてゐました。お祖母さんは其時安樂椅子で眠つてゐたんです、それで私は直き近所のお友達に逢ひに行つたんです。おゝ、それが面倒なことになつたんです。私の居ない間にお祖母さんが眼を覺まして、何か訊いたんです。お祖母さんは、私が自分の居

るべき處にまだ靜かに坐つてゐると思つてゐたんです。フヰークラは、お祖母さんが何か訊いてるのを見ると(しかし何だつたのか解らなかつたんですがね)どうしたらいゝか分らなくなつて、ピンを外して逃げ出してしまつたんです……」

此時、ナステーンカは止めて、笑ひ出した。私も一緒に笑つた。彼女はすぐ笑ひやんだ。

「どうしたか、お話ししますが、あなたはお祖母さんのことを笑つては不可ませんよ。私は可笑しかつたから笑つたんです……お祖母さんがそんな風なんですから、私はどうしたらいゝんでせう、しかし、それでも私はいくらかお祖母さんが好きなのです。おゝ、それで、其時私は叱られました。私はすぐ自分の場所に坐らなければなりませんでした。そして、それからは、私は動くことも許されなかつたんです。

「おゝ、私はその家が私たちのものだつたことをお話しするのを忘れてゐました。それはお祖母さんのものなのです。それは、三つ窓のついた、小さな二階のついた、お祖母さん同様に古い小さい木造の家なんです。それで、私たちの二階へ新しい下宿人が越して來たんです。」

「その時來たのは年寄の下宿人だつたんですね。」と私は思はず言つた。

「さうですわ勿論。」とナステーンカは答へた。「そして、舌の使ひ方をあなたよりももつとよく知つてる人でしたわ。實際、その人は殆んどちつともその舌を使つたことが無いんです。

その人は唖で盲目で跛で、干からびたやうな小さな老人だつたんです。それでその人はたうとう生きてゐられなくなりました。その人は死んでしまつたのです。そこで、私たちは新しい下宿人を探さなければなりませんでした、何故なら私たちは下宿人を置かないと暮しが立たなかつたんですから——その家賃とお祖母さんの年金と一緒にした丈けが、私たちの持つてるものの殆んど全部なんですから。しかし、新しい下宿人は、幸にも若い人で此の地方の人ではなく他の國の人でした。その人は家賃を値切らなかつたので、お祖母さんはその人を入れることにしたんです。そして、あとで私にかう訊いた丈けでしたわ。『話しておくれ、ナステーンカ、今度の下宿人はどんな人だね——若い人か年取つた人かね?』私は嘘をつきたくなかつたので、その人は大變若くもなく、又年取つても居ないとお祖母さんに話しましたの。

『では、その人は樣子のいゝ人かね?』とお祖母さんが訊きました。

「今度も私は嘘をつきたくなかつたので、『えゝ、樣子のいゝ人ですわ、お祖母さん』と言ひました。するとお祖母さんが言ひました。『おゝ、何て邪魔だらう、何て邪魔だらう! 孫よ、お前に言つて置くがね、お前はあの人を見ては不可いよ。何といふ時節になつたんだらう! 何だつてこんなつまらない下宿人が來たんだらう、それに樣子までよくなくちやなら

ないなんて、昔は隨分遠つてゐたものだが！』」

「お祖母さんは、いつでも昔のことを惜しがつてゐました——お祖母さんも昔は若かつたんだとか太陽も昔は暖かだつたんだとか、そしてクリームも昔はこんなに酸つぱくなつてはゐなかつたんだとか——いつでも昔でした！　私はぢつと坐つて默つて、こんなことを獨り考へて居るのでした——何故お祖母さんはそんなことを私にほのめかすんだらう？　何故お祖母さんは、あの下宿の方が若いか様子がいゝかなんて訊いたんだらう？——しかし、それ丈けのことでした、それ丈け考へただけで、私は再び針を數へ始め、靴下を編みつゞけました、そしてそのことは何もかも忘れてしまひましたの。

「それから、或る朝、その下宿の方は私たちのところへやつて來たんです、あの方は、部屋に紙を貼り度いので訊きに來たんです。或ることからまた他のことが生ずるものです、お祖母さんは口數多くなつて、そして言ひました。『ナステーンカ、私の寢室へ行つて會計簿を持つておいで。』私はすぐに飛び上りました。何故か私は眞赤になりました、そして、お祖母さんとピンで結びつけられて坐つてゐたことを忘れてしまつたので、靜かにピンを外せば下宿の方には見えなかつたでせうが——私は、お祖母さんの椅子が動いた程に飛び上つてしまつたんです。下宿の方が今何もかも私のことを知つたのを見た時、私は眞赤になつて、彈丸に擊たれでもしたやうにぢつと立つてゐたのですが、出し抜けに泣き出してしまつたんです——その時私は、何處を見てゐたらいゝのか解らなかつた程、ひどく恥かしくて、見窄らしい氣がしたんです！　お祖母さんが、『お前何をぐづ〳〵してゐるんだい？』と言ひ出したので、私は前よりも尙ほ工合が惡くなつてしまつたのです。下宿の方は、私があの方のために恥かしがつてゐたのを見た時、それを見た時あの方は、お辭儀をして、すぐ行つてしまひました！

「それからといふもの、私は入口の處で一寸音がしても死んでしまひたいやうな氣がしました。『そら下宿の方だ。』と私はいつも考へました。私は、どうかするとこつそりとピンを外しました。しかしそれはいつもあの方ではないのでした、あの方はもうどうしても來なかつたんです。二週間經ちました。あの下宿の方は、私が讀むといゝやうな善い佛蘭西語の本を澤山持つてゐるから、私が退屈しないやうにそれを讀むことがお祖母さんの氣に入らないだらうか？　とフ『ークラに言傳てして言つて來ました。お祖母さんは喜んで承知しました、それでもまだその本を道德的な本だらうか、などと訊ねてはゐました。何故ならば、その本が不道德なものだつたら思ひもよらないことだ、人はその本から惡いことを知るだらうからといふのでした。」

「『でも、どうしてそれを私が知つてるでせう、お祖母さん？　さういふ不道徳な本の中にはどんなことが書いてあるんでせう！』

「『あゝ、』とお祖母さんは言ひました。『その中に書いてある事といふのは、如何に若い男たちが堅い娘たちをそゝのかして、彼等と結婚したいといふ口實で、その兩親の家から女を連れて行つてしまふかといふことなのだよ。如何にその男たちは後に、その不幸な娘たちを破滅させて、一番可哀想な遣方で殺してしまふかといふことなのだよ。私は澤山の本を讀んでゐるんだがね。』とお祖母さんは言ひました。『さうして人はこつそりとさういふ本を夜通し坐つて讀むと、よく言はれてゐるよ。だからお前はそんなものを讀まないように用心おし、ナステーンカ。』と言ひましたの。『あの人が寄越したのはどんな本だね？』

「『皆、ウォールター・スコットの小說よ、お祖母さん。』

「『ウォールター・スコットの小說だつて！　だがお待ち、その中に何かしかけがしてありやしないかい？　御覽よ、その中には艷書がはさんでありやしないかい。』

「『いゝえ、お祖母さん。』と私は言ひました。『艷書なんかありませんわ。』

「『だが、表紙の裏を御覽。よくそれは表紙の裏にはさんであるものだよ、惡い奴！』

「『いゝえ、お祖母さん、表紙の裏にも何にもないわ。』

「『よし、そんなら宜しい。』

「そこで私たちはウォールター・スコットを讀み始めました、そして一月かそこらの內に殆んど半分讀んでしまひましたの。それからあの方は、もつと〳〵寄越してくれました。あの方はプーシュキンも寄越して下さつたわ。それで終ひには私は本が無しでは暮せなくなりましたわ、そして、支那の公爵と結婚することはどんなに美しいことだらうなどといふ夢想は罷めて終ひましたの。

「私は或日、梯子段の處で私たちの下宿の方に偶然逢つたことがありました。お祖母さんが私を何かとりに遣つたんです。あの方は立ち止りました、私は眞赤になりました、あの方も赧くなりました。でも、あの方は笑つて、私にお早うを言つて、お祖母さんのことを訊いてから、『ねえ、本はお讀みでしたか？』と言ひました。私は讀みましたと答へました。『貴女はどつちが一番好きですね？』とあの方は訊きました。私は言ひました。『アイヴンホーとプーシュキンが一番。』そして私たちの話は其時はそれでお終ひでした。

「一週間後に、私はまた梯子段の處であの方に逢ひました。その時にはお祖母さんが私を遣つたのではなくて、私が自分のことで何かとりに行かうとしてゐたんです。それは二時過でした。下宿の方はその時刻にいつも家へ歸つて來るのでした。『今日は、』とあの方は言ひまし

た。私も今日はと言ひました。

『貴女は退屈ちやありませんか。』とあの方は言ひました。『終日お祖母さんと一緒に坐つてゐて？』

「さう訊かれた時私は、何故だか知りませんが眞赤になりました。私は恥かしい氣がしたんです、そして私はまた腹が立つて來ました——多分他の人がそのことを私に訊き始めたからなんでせう。私は返事もしずに行つてしまはうとしました、が力がありませんでした。

『ねえお嬢さん、』とあの方は言ひました。『貴女はいゝお嬢さんだ。さう言ふことを許して下さい、だがきつと貴女は、貴女のお祖母さんと全く同様に幸福を望んでいらつしやるんでせう。貴女は行つたり來たりするお友達はないんですか？』

「私は無いのですと言ひました、マーシェンカの他には一人も友達はないのですと言ひました。さうしてマーシェンカはブスコーフへ行つてしまつたんです、つて。

『ねえお嬢さん、』とあの方が言ひました。『僕と一緒に芝居へ行かうと思ひませんか？』

『芝居へ。お祖母さんはどうするんでせう？』

『だが、お祖母さんには知らさずに行かなきやなりませんね。』とあの方は言ひました。

『いゝえ。』と私は言ひました。『私、お祖母さんを騙したくはありませんわ。さやうなら。』

『さうですか、さやうなら。』とあの方は答へました。そしてそれ以上何も言ひませんでした。

「お晝の濟んだ許りの時、あの方は私たちの處へ來ました。そして、長い間坐つてゐてお祖母さんと話してゐました。お祖母さんは何處かへ行つたことがあるのか、知合ひの人があるのか、などと訊いてゐましたが、突然あの方は言ひました。『僕は今夜のオペラのボックスがあつてあるんです、セヴィールの「理髪師」を演つてるんです。僕の友達が行く筈だつたんですが、後で斷つて來たので切符が僕の手に殘つてしまつたんです。』『セヴィールの「理髪師」。』とお祖母さんは叫びました。『へえ、それは昔演つたものと同じものですか？』

『さうです、同じ「理髪師」ですよ。』とあの方が言ひました。そして私をちらと見ました。私は、それがどういふつもりだか解つたので眞赤になつてしまひました。そして私の心臟は氣懸りでドキ〳〵し始めました。

『確かに、私はそれを知つてゐる。』とお祖母さんが言ひました。『おゝ、昔には私も自分でロシーナの役をやつたことがありましたよ、試演でね！』

『では、今日いらつしやり度くはありませんか？』と下宿の方は言ひました。『でないと、僕は切符は無駄になつてしまふんです。』

『どうしたつて、參りますよ。』とお祖母さんは言ひました。『どうして行かずにゐられませう？　だが、ナステーンカは芝居へは一度も行つたことはないのですよ。』

「おゝ神樣、何といふ嬉しいことでせう！　私たちはすぐ支度をしました、一番いゝ著物を著て出掛けました。お祖母さんは盲目なんですけど、それでも音樂を聽きたかつたんです。それにお祖母さんは、深切な老人で、一番考へてゐたことは私を樂しませるといふことだつたのです、私たちは家から一度も外へ出なかつたでせうからね。

「セヴィールの『理髮師』から私がどんな印象を受けたか、私はそれをお話しようとは思ひませんわ。ですが、その一晩中私たちの下宿の方は大變よく見てゐました、大變よく話しかけました、それで私はその朝、あの方は私をあの方と丈けで行くように言ひ出して試してみるつもりだつたのだといふことを早速知りましたの。だが、あれはうれしいことでした！　私は、床にはひつてからも大變高慢で、大變樂しくて、少し熱が出た位私の心臟は鼓動してゐました。そして、一晩私はセヴィールの『理髮師』の諳誦を言つてましたの。

「私は、それから後はあの方がもつと〳〵度々私たちの處へいらつしやるだらうと思つてゐました。しかしちつともさうぢや有りませんでした。あの方は、まるで來ることをよしてしまひました。一月に一度位來た丈けでしたらう、その時も私たちを芝居へ招待した丈けでした。私たちはまた行きました。でもそれは私、ちつともうれしくありませんでしたのよ。あの方は、私がお祖母さんからひどく取扱はれてゐることをたゞ可哀想に思つた丈けで、それ丈けだといふことを私は知つたのでした。時が經つに連れて私は、だん〳〵苛々して來ました、私はぢつとしてゐられませんでした、本を讀むことも出來ませんでした、仕事をすることも出來ませんでした。時によると私は笑つたり、お祖母さんを苦しめるやうなことを何かしたり、又時とすると泣き出したりしたんです。たうとう私は、癆せてしまつて、殆んど全く病氣になつてしまひましたの。オペラの季節が終つて、私たちの下宿の方は、まるで私たちの處へ來なくなつてしまひました。私たちが逢ふ時にはいつでも——勿論、きつと梯子段の處でしたが——あの方はまるで話をしたくもないやうに默り込んで、ひどく嚴めしい風をしてお辭儀をしました、そして私が櫻んぼのやうに眞赤になつて梯子段の眞中にいつまでも立つてゐるのにあの方は、戸口の方へ行つてしまふのでした。私はあの方を見ると血がすつかり頭へ上つてしまつたんですから。

「さア、もう直きお終ひですよ。丁度一年前の五月に、その下宿の方は、私たちの處に來て、此處の用が濟んだので、一年間モスクーヴに歸らなければならないとお祖母さんにさう言ひました。私は、それを聞いた時、半分死んだやうになつて椅子に沈みました。お祖母さんは

何にも氣がつかなかつたんです、そして、あの方は、私たちともお別れだと言つてお辭儀をして行つてしまつたのです。

「私はどうしたらよかつたでせう？　私は、考へに考へ、興奮に興奮しました、さうして、たうとう私は決心したんです。翌日にはあの方は行つてしまふ筈だつたので、私はお祖母さんが寢床へ行くその晩中にやつてしまはうと決心しました。で、さう成つたんです。私は、著物をすつかり荷作りしました——必要な下著まですつかり——そして、その包を手に持つて生きてるといふよりは死んでるやうな氣持で、二階の私たちの下宿の方の處へ上つて行きましたの。私は梯子段の處で一時間も立止つてゐたに違ひないと思ひますわ。私があの方の戸を開けた時、あの方は私を見ると叫び聲をあげました。あの方は、私が幽靈だと思つたんです、そして、飛んで來て私に水をくれました、私は殆んど立つてゐられませんでしたから。私の心臟は、頭痛がして來た程はげしく鼓動してゐました、そして私は自分が何をしてゐたのか解りませんでした。我に返つた時、私は、先づ包をあの方の寢床の上に置いて、そのそばに坐り、兩手で顏を隱して涙を流して泣き出したのです。あの方には何もかもすぐ解つたのだと私は思ひますわ、さうして、私の胸が引裂かれた程悲しげに私を見てゐました。

「『お聽きなさい。』とあの方は始めました。『お聽きなさい、ナステーンカ、僕には何ともすることが出來ないんです。僕は貧乏です、僕は何にも、相當な寢臺さへ持つてゐないんですから。もし僕が貴女と結婚したとしても、どうして僕らは暮して行けるでせう？』

「私たちは長い間話しましたの。併し、たうとう私は、まるで狂人のやうになつてしまつたんです。私は、お祖母さんと一緒に生活を續けて行く事は出來ないと言ひました。私はお祖母さんから逃げ出してしまふだらうと言ひました。お祖母さんにピンで留められてゐたくはなかつたのだと言ひました。そして私はあの方無しには生きて行けなかつたのですから、あの方さへよかつたら、モスクーヴへ行き度いのだといふ事を話したのです。恥かしさと誇りと戀とが、凡ゆるものが忽ちに私の中で騷ぎ出してゐたのです、そして私は、殆んどひきつけたやうに寢床の上に倒れてしまひました、私はそれ程拒絕される事を恐れてゐましたの。

「あの方は、暫らく默つて坐つてゐましたが、やがて立ち上つて、私の處へ來て、私の手をとりました。

「『お聽きなさい、僕の愛する善良なナステーンカ、お聽きなさい。僕は、若し僕が結婚出來る位置に居るのならば、貴女は僕を幸福にして下さるでせう、といふことを誓ひます。今のところ、僕を幸福にしてくれるのは貴女たつた一人だといふことを僕は斷言します。いゝですか、僕はモスクーヴへ行くことになつてゐる、それで丁度一年あすこに居る筈です、僕は

自分の位置をしつかり建てることを望んでゐるんです。僕が歸つて來た時、若し貴女がまだ僕を愛してゐて下さるなら、僕たちは幸福になるといふことを僕は誓ひます。今は不可能です、僕には出來ないことです。僕は何にも約束する權利を持つてゐないんです。さア、繰返して言ひますが、若し一年以內でないなら、いつかはきつとさうなるでせう、つまり、勿論、貴女が誰か他の人を選ばないでゐるならばですよ。何故なら、僕は何か約束をして貴女を束縛することは出來ないし、又さうしようとも思はないんですから。』

「あの方は私にさう言つたのです。そして、翌日あの方は行つてしまひました。私たちは、お祖母さんには一言も言はないことを約束しました。それはあの方の希望だつたのです。さア、私の歷史は殆んどもうお終ひです。丁度一年經ちました。あの方は來たのです。あの方は此處に來てから三日になるんです、それに、それに——」

「それにどうしたんです?」私は、終ひまで聞いてゐられなくなつて叫んだ。

「それに、あの方は、今まで、姿を見せないんです!」とナステーンカは答へた。恰も凡ゆる勇氣を振起すやうに、「あの方の影も來なければ音もしないんですわ。」

此處で彼女は、止めて一寸默つて、頭を垂れ、兩手で顏を隱して啜り泣き始めた。それを聞くことは私の心には非常な苦痛であつた。こんな dénouement (大團圓。)を私は少しも豫期し

てはゐなかつた。

「ナステーンカ。」私は、樣子を覗ふやうな聲でおづ〳〵と言ひ出した。「ナステーンカ! お願ひだから、泣かないで! どうして解るもんですか? きつとその人はまだ來てゐないんで……」

「來てゐるんです、來てゐるんです。」とナステーンカは繰り返した。「あの方は來てゐるんですわ、そして私はそれを知つてるんです。私たちは、あの時に、あの晚に、あの方が行く前、今お話ししたいろんなことをすつかり私たちが話し合つた時に、約束したんです。さうして折合がついたんです、それから私たちは此の堤防を散步しに此處へ來たんです。その時には私は泣いてはゐませんでした、あの方の話を聞くのが私には氣持がよかつたんです……さうして、あの方は到著したらすぐ私たちの處へ來て、若し私があの方を拒絕しなかつたらすつかりそのことをお祖母さんに話さうと言つたんです。もうあの方は此の地へ來てゐるんです、私は知つてます、それにあの方はまだやつて來ないんです!」

さうして、再び彼女は涙を流した。

「おゝ、神よ、僕は貴女が悲しんでゐるのをどうして救つて上げることも出來ないんでせう

か？」と私は、全く絶望してその場から飛び上りながら叫んだ。「話して下さい、ナステーンカ、僕がその人の處へ行くといふことは出來ないでせうか？」

「そんなことが出來るでせうか？」彼女は、出し抜けに頭を上げながら訊ねた。

「いや、勿論、駄目です。」と私は、氣を落著けながら言つた。「だが、かうすればいゝでせう、手紙をお書きなさい。」

「いゝえ、それは不可能です、そんなことは出來ませんわ。」と彼女は、その頭をあげ、私を見ないやうにしながら、決然と答へた。

「どうして不可能なんです？」私は、自分の考へに固執して續けた。「しかし、ナステーンカ、それはどういふ種類の手紙のことなんです、手紙といふものは實に樣々です、そして……あゝ、ナステーンカ、僕の言ふことは本當ですよ、僕をお信じなさい、僕をお信じなさい、僕は貴女に惡い忠告を與へやしません。それは、すつかり用意して置くことが出來るんです！　貴女は第一歩を踏み出すんだ——どうして今、それが出來ないでせう？」

「出來ません、出來ません！　私はまるであの方に强ひてるやうに思はれますわ……」

「あゝ、善良な可愛いゝナステーンカ。」私は、殆んど微笑を隱す事が出來ないで言つた。「いや、いや、貴女は、實際、さうする權利を持つてるんですよ、何故ならその人は貴女と約束したんだから。その上、僕には凡ての事から、その人が感じ易い人で、非常にいゝ態度の人だといふ事が解りますからね。」私は、私自身の理窟と確信とに次第々々に動かされて續けた。「その人はどんな態度でした？　その人は約束をして自分の身を束縛したんです、その人は若し結婚したとしたら貴女より他の誰とでもないといふ自由まで與へたんぢやありませんか……さういふ事情なんだから、貴女は第一歩を踏み出す事が出來るんですよ。貴女には權利があるんだ、貴女は權利ある位置に居るんだ——若し、例へば、貴女がその人の與へた約束からその人を解放して上げたかつたら……」

「よう御座んすか、あなたはどう書けばいゝと思ふの？」

「何を書くんです？」

「その手紙を。」

「僕が書き方を話しませう、『親愛なる貴方。』……」

「『親愛なる貴方』なんて、そんな風に私、始めなければならないんですか？」

「確かにさう始めなければならないんです！」要するに、僕には解らないが、きつと……」

「よろしいわ、よろしいわ、それから？」

「『親愛なる貴方――私は辯解しなければならないことが――』だが、いや、辯解する必要は全くないんだ、事實そのものがすべてを判斷するんだ。簡單にかう書くんです――

「『私は貴方に手紙を差上げます。私の性急をお許し下さい。しかし私は、丸一年の間希望に燃えて幸福でゐたので御座います。私が、現在不安の一日をも忍ぶことが出來ませんのは私の咎で御座いませうか？　貴女は歸つていらつしやるのですから、恐らく貴方は心變りなさつたので御座いませう。若しさうならば、此の手紙は、私が貴方に愚痴をこぼしもしませんし非難しもしないことを、貴方に御傳へすることになるので御座います。貴方の御心を惹きつける力を持たなかつたことの爲めに私は、貴方を非難しは致しません、それが私の運命なので御座います！

「『貴方は尊敬すべき男子でいらつしやいます。この短氣な手紙を御覽になつて貴方は、微笑なさつたり、お困りになつたりすることはありますまい。これは憐れな一少女の書いたものであることを御記憶下さい、彼女は孤獨なので御座います。彼女は、自分を指圖し忠告してくれる者を一人も持たないので御座います。そして彼女は、自分では自分の心を制へることが決して出來なかつたので御座います、けれども、疑ひが――ほんの一寸の間であるとしても――私の心を覗き込んだことをお許し下さいまし。貴方は、貴方をこれ程に思つて居ります、これ程に思つて居ります彼女に、縱令考への上丈けでも、殘酷なことをなさることは出來ません。』」

「さうです、さうです、私の考へてゐたのはその通りですわ！」とナステーンカは叫んだ。そして彼女の眼は、喜びで輝いた。「おゝ、あなたに私の困難を解決して下さつたわ、神樣があなたを私に送つて下さつたのだわ！　有難う、有難う、有難う！」

「何のためにです？　何のためにです？　神樣が僕を送つてくれたことのためにですか？」私は、彼女のうれしさうな小さな顏を見ると歡ばしくなつて答へた。

「だつて、さうですわ、そのことのためにもね。」

「あゝ、ナステーンカ！　だが、人は、或る人々に對して、その人々が自分と同時代に生存してゐたといふことのために感謝するのです。僕は貴女に感謝します、僕に逢つて下さつたことのために、僕が一生涯貴女を記憶してゐられることのために！」

「さア、もう澤山ですわ、澤山ですわ！　さうして、今お話しすることを聽いて下さい。あの方が到著したらすぐ、このことは何も知らない私の知合ひの或る善い單純な人々に手紙を

預けて私に知らせるか、又は、私に手紙を寄越すことが出來なかつたら、(手紙はいつもすべての事を語るといふ譯にはいきませんからね。) あの方は到著した日の十時に私たちが逢ふやうに極めて置いた此の場所へ來てゐる、といふことをあの時私たちは約束したんです。あの方がもう到著してゐるといふことは私、知つてるんです、それにもう三日にもなるんです、さうして、あの方の影も見えなければ手紙も來ないんです。朝のうちはお祖母さんから逃げ出すことは私には出來ないんです。今お話した深切な人たちの處へ明日、この私の手紙を持つて行つて下さいな。その人たちはあの方の處へそれを屆けてくれるでせう、さうして若しあなたに返事をくれましたら、明日の十時に持つて來て下さいな。」

「だが、手紙だ、手紙ですよ！　ねえ、貴女は先づ手紙を書かなきやいけない！　すると多分すべては明後日になるに違ひない。」

「手紙は……」とナステーンカは、やゝ狼狽して言つた。「手紙は……ですが……」

併し彼女は言ひ終らなかつた。最初彼女はその小さな顏を私からそむけて、薔薇のやうに赧くなつた、そして突然、私は私の手の中に手紙を感じた、それは明かにずつと前に書かれたもので封がしてあつた。親しみ深い甘いそして魅力ある回想が私の心の中に漂つて來た。

「ロ、ロシ、シーナ。」私は言ひ出した。

「ロシーナ！」私たちは同時に小聲で言つた。私は、歡びから殆んど彼女を抱きさうにしたが、彼女はやつと赧くなることが出來たとでもいふやうに眞赤になつた。そしてその眞黒な睫毛の上に眞珠のやうに輝いてゐる涙の中で笑つた。

「さア、もう澤山、もう澤山よ！　もう、さやうなら。」彼女は、早口に言つた。「此處に手紙があります、これがあなたの持つて下さる宛名ですよ。さやうなら、またね！　明日まで！」

彼女は、私の兩手を暖く握りしめて、頭を下げて、それから向う側の通りを矢のやうに飛んで行つた。私は、眼で彼女を追ひながら長い間ぢつと立つてゐた。

「明日まで！　明日まで！」彼女が私の視界から消えた時、私の耳の中で鳴り響いてゐた。

第三夜

今日は、昔の私のやうな、陰氣な、日光のちらとも輝かない雨の日であつた。私は、ひどく奇妙な考へに壓倒され、ひどく陰氣な感情に壓倒され、私にとつてまだひどく曖昧な問題が頭の中に群がつてゐる——そして、私は、それらを整へる丈けの力も意志もないやうである。このすべてを整へることは私のためではないのだ！

今日は、私たちは逢はないであらう。昨日私たちがさやうならを言つた時、雲が空に群がり出して、霧が起つてゐた。明日は天氣が悪いでせう、と私は言つたが、彼女は返事もしなかつた。彼女は、彼女の望に反して話をすることを欲しなかつたのだ。彼女にとつては其日は輝かしく晴れ渡つてゐた、一片の雲も彼女の幸福を暗くする筈ではなかつた。

「若しか、雨が降つたら私たちはお逢ひしないでせう。」と彼女は言つた。「私は來られません わ。」

彼女は今日も雨を氣にしてはゐなかつたのだ、そしてどつち道彼女は來ないのだ、と私は考へた。

昨日は、私たちの第三回目の會見であつた、第三番目の白夜だつた……

けれども、歡びと幸福とは、人を如何に美しくすることであらう！　人の心は、如何に愛を以て溢れることであらう！　人は、己れの全心を注ぎ出さうと熱望してゐるやうだ。人は、すべてのものが樂しくあることを、すべてのものが笑つてゐることを、欲してゐるのだ。さうして、その歡びは如何に傳染的なものであるか！　昨日私に向けられた彼女の言葉の中にはさういふ柔かさがあつた、昨日私に向けられた彼女の心の中にはさういふ深切な感情があつた……彼女は、如何に心配さうで、如何に友だちらしかつたらう、彼女は如何にやさしく

私に勇氣を與へようと試みたらう！　おゝ幸福の媚！　然るに私は、……私はそれをすつかり本當のことと取つたのだ、私は考へてゐた、彼女が……

けれども、神よ、どうして私はそれを考へることが出來たのだらう？　すべての物が既に他の者によつて占められてゐたのに、私のものは何にも無かつたのに、實際、彼女の私に對するやさしさ、氣遣ひ、愛……さうだ、私に對する愛などが、間もなく他の人に逢ふことを考へその幸福のうちに私をも押包まうとしての歡びに過ぎなかつたのに、どうして私は、あんなに盲目で居ることが出來たのであらう？……あの男が來なかつた時、私たちの待つたのが無益だつた時、彼女は顏をしかめ、臆病になり、失望してゐた。彼女の動作、彼女の言葉は、最早それ程に輕く、それ程に冗談らしく、それ程に樂しくはなくなつてしまつた。そして、不思議にも彼女は、恰も、その希望は遂げられなかつたとしても、彼女が自分で非常に氣に懸けて欲してゐたところのものを私に於いて浪費しようと、本能的に望んでゐるかのやうに、私に對してその注意を二倍にしたのであつた。私のナステーンカは、私が彼女をたうとう戀してしまつたことを彼女が知つて、且つ、その憐れな戀に同情してゐたのかと、私が考へた程、憂鬱になり狼狽してゐた。かくの如く、我々が不幸なる時には、我々はそれ以上に他人の不幸を感じる、感情は損はれることなく、集中されるのである……

私は、心をいつぱいにして彼女に逢ひに行つた、そして全く性急であつた。私は、今私が感じてゐるやうなことを感じるであらうとか、すべてが幸福には終らないであらうとかといふ豫感を少しも持たなかつた。彼女は歡びに慄いてゐた、彼女は返事を期待してゐた。返事はあの方それ自身であつた。あの方は彼女の招きに應じてやつて來なければならなかつた。飛んで來なければならなかつた。彼女は、私が行くよりも丸一時間も前に來てゐた。最初は彼女はすべての事に笑ひ、私の話す一語々々に笑つた。私は話し出した、けれども沈默に後戻りしてしまつた。

「どうして私がこんなにうれしいんだか知つてらしつて。」と彼女は言つた。「どうしてあなたを見るとこんなにうれしいんだか？——どうして今日は私、あなたがこんなにひどく好きなんでせうね？」

「それで？」と私は訊ねた。そして私の心臟は鼓動し始めた。

「私は、あなたは私に戀をなさらないから、それであなたが好きなのよ。ねえ、あなたの代りに誰かが居るとしたら、きつと私を困らしたり苦しめたり、溜息ついたり、惱めな風をしたりしますわ。それだのにあなたは、そんなに立派なんですもの！」

それから彼女は、私が殆んど叫びさうとした程きつく私の手を絞つた。彼女は笑つた。

「まア、あなたは何といふお友達なんでせう！」と彼女は、暫くして眞面目に言ひ出した。「神樣が私にあなたを送つて下さつたのだわ。若しか今あなたが、私のそばに居て下さらなかつたら私はどうなつたでせう？　あなたはどんなにつまらないでせう！　あなたは、何て眞實に私の世話をして下さるんでせう！　私が結婚したら、私たちはいゝお友だちになりませうね、兄妹以上のね。私は、まるで私らしくあなたのお世話をするでせうね……」

私は、其瞬間恐ろしく悲しい氣がした。しかし笑ひに似た何物かが私の心の中で搖り動かされてゐた。

「貴女は全く僕を顚倒させますよ。」と私は言つた。「貴女は恐れてゐるんだ、あの人は來ないと思つてゐるんでせう。」

「おゝ、愛する者よ！」と彼女は答へた。「若しか私が幸福でなくなつたら、きつと私は、あなたの信仰の缺けてることのために、泣き出すでせうよ。ですけれどあなたは私を考へさせて下さつた、考へるべきものを與へて下さつたわ、でも私、後に考へませう、そして今は、あなたが正しいといふことを認めませう。さうよ、私はいくらか動顚してるんです、私は全く不安になつてるんです、そして、すべてのことを、云はば餘りに輕卒に感じてるんです。しかし、もう默つて下さい！　感じに就いてはもう澤山……」

その時、私たちは遥音を聞いた、そして、私たちは暗の中に私たちの方へやつて來る人影を見た。私たちは二人共飛び上つた。彼女は殆んど叫び出しさうにした。私は、彼女の手を放して、歩き去るやうな動き方をした。けれども私たちは間違つてゐた。それはあの人ではなかつた。

「何をあなたは恐れていらしつたの？　どうして私の手を放してしまつたの？」と彼女は、再び私の方へ手を出しながら言つた。「さア、何なの？　それは？　私たちは一緒にあの方に逢ひませう、私は、私たちがどんなに愛し合つてるかつてことをあの方に見せたいのよ。」

「僕たちはどんなに愛し合つてるでせう！」と私は叫んだ。（「おゝ、ナステーンカ、ナステーンカ。」と私は考へた。「そんな事を貴女は僕に幾度言つたらう！　さういふ愛といふものは、ある時には人の心を冷たくし人の魂を重苦しくするものなのだ。貴女の手は冷たい、僕のは火のやうに燃えてゐる。貴女は何て盲目なんだらう、ナステーンカ！……おゝ、幸福な人間は時とするとどれ程堪らないことだらうか！　だが僕は、貴女に腹を立てることは出來なかつたらう！」）

たうとう、私の心は餘りにいつぱいになつてしまつた。

「いゝですか、ナステーンカ！」と私は叫んだ。「僕が終日（いちんち）どんなことをしてゐたか解りますか？」

「まア、どんな事をなさつたの、どんなことをさつたの？　早く話して下さい！　どうしてあなたは今まで何にもおつしやらなかつたんです？」

「第一にナステーンカ、僕が貴女の凡ゆる委任を持つて、手紙を持つて行つて、貴女の善良な友達に逢ひに行つてから、それから……それから、僕は家へ歸つて寢床へはひつたんです。」

「それつきりなの？」と彼女は、笑ひながら遮つた。

「さうです、殆んどそれつきりです。」と私は自分を制へながら答へた。何故ならば、私の眼の中には愚かな涙が既に浮びかゝつてゐたから。「僕たちの此處へ來る時より一時間前に起きたんです、が、云はば僕は熟睡はしなかつた。僕はどうしたんだか自分でも解らないんです。僕はそれをすつかり貴女に話さうと思つて來たんです、時間が動かずに立止つてゐるやうな氣がしながら、まるで或る感覺が、或る感情が、あの時から永久に僕の中に殘つてるに違ひないやうな氣がしながら、まるで一分間が永遠と相應じてゐるやうな、そして僕にとつては人生が全く立ち止つてしまつた樣な氣がしながら……僕が起きた時には、何だか長い間馴れてゐた、そして淫逸な甘い或る音樂的な運動が現在僕に戻つて來たやうな氣がしたんです。それは、今まで絶えず僕の心に叫びかけてゐたか

のやうに思はれたんです、そしてたつた今……」

「おゝ、まア、まア。」ナステーンカは遮つた。「そりや皆どういふことなの？　私には一語も解りませんわ。」

「あゝ、ナステーンカ、僕は兎に角その不思議な印象を貴女に傳へたいんです……」私は哀れな聲で言ひ出した。その中にはまで希望は隱されてゐた、甚だ微なものではあつたが。

「お止めなさい、お默りなさいよー」と彼女は言つた、そして直ぐにその狡猾な少女は考へ込んだ。

突然彼女は、非常に口數多くなり、樂しげになり、悪戯になつて、私の腕をとつて、笑ひ、私にも笑へといつた。そして、私の發する困惑せる一語々々は、彼女の引伸ばされたやうな鳴り渡る笑ひから惹き出されたものとなつた……私は怒りを感じ始めた、彼女は出し抜けに巫山戯出した。

「あなた解つて、」と彼女は始めた。「あなたが私を戀しないつてことが少し困るやうな氣がして來たのが？　人間の本性には賢い所がちつともないのねえー　だからといつて、氣むづかし屋さん、私がそれ程に簡單なのだなんて責めてはいけませんよ。私、何もかも話しますわ、何もかも、馬鹿な考へが私の頭の中へ寄越してくれるものを何もかも。」

「お聽きなさいー　もう八時ですよ、きつと。」

私は、ゆるやかな鐘の音が遠方の塔から鳴り出したのでさう言つた。彼女は突然止めた、笑ふことを止めて數へ始めた。

「さう、八時ですね。」彼女は、たうとう臆病なぼんやりした聲で言つた。

私は忽ちに、彼女を脅して鐘を數へさせたことを後悔した。そして私は、私自身の惡い衝動を呪つた。私は、彼女が可哀想になつた、そして私がなしたことをどう償つたらいゝか解らなかつた。

私は、彼の來ない理由を探し、色々な理窟を、證據を提出して、彼女を慰め始めた。誰も、其時の彼女程に容易く欺されるものは無かつたであらう。そして實は、さういふ場合には誰でも、どんな慰めにでも喜んで耳を傾けるものである。辨明の影でも見出すことが出來れば歡び餘るものである。

「で、本當にそれは馬鹿なことですよ。」と私は、自分のやつてゐることに乘氣になつて、自分の議論の異常な明快さを讃へながら言ひ出した。「だつて、あの人は來られないんですからね。貴女は僕を困らせる、混亂させる、ナステーンカ、それで僕まで時を數へ損つた位ですよ……だが考へて御覽なさい、あの人は、殆んど手紙を受取ることが出來なかつたんです

よ、きつとあの人は來られないで手紙の返事を書かうとしてるんですよ、明日までは來ることが出來ないんで。僕は、明日明るくなつたらすぐ行つてみて、すぐ貴女に知らしませう。よく考へて御覽なさい、有りさうなことは隨分澤山あるんですよ、きつとあの人は手紙の來た時家に居なかつたんでせう、そして、今でもそれを讀んではゐないのかも知れないんだ！何かあるもんですよ、ねえ。」

「さうです、さうです。」とナステーンカは言つた。「私、それを考へませんでしたわ。勿論何かあるもんですわね！」彼女は、少しも反對しない調子で續けた。が、何か他のずつと遠方の考へが、それにごちや〳〵入れ交つて聞えて來た筈であつた。「私、言ひますわ、あなたはどうしなければならないか。」と彼女は言つた。「あなたは、明日の朝出來るだけ早く行くんですわ、そして、何かあつたらすぐ私に知らして下さい。私の家をあなた御存じね、まだ知らなかつたの？」

そして彼女は、私に彼女の宿所を繰返し始めた。

その時彼女は、私に對して非常にやさしく、私のことを非常に氣に懸けてゐるやうになつた。彼女は、私が話すことを注意して聽いてゐるやうであつた。しかし、私が或る質問をした時彼女は默つてしまつた、どぎまぎして顏をそむけてしまつた。私は彼女の眼の中を覗き込んだ——さうだ、彼女は泣いてゐた。

「貴女は何てことでせう？　何てことでせう？　おゝ、何て貴女は赤ん坊なんだらう！　何て子供みたやうなんだらう！……さア、さア！」

彼女は、微笑しようとした、氣を鎭めようとした、併し彼女の顏は震へ、その胸はまだ高まつてゐた。

「私、あなたのことを考へてゐたんですのよ。」と彼女は、一寸默つてゐてから言つた。「あなたは何といふ深切な方でせう、それを私が感じなかつたとしたら、私は石ででもあるんでせうね。今私がどんなことを考へたかお解りになつて？　私はあなた方二人を比べてゐましたのよ。何故、あの方があなたではないんでせう？　何故、あの方はあなたのやうではないんでせう？　あの方はあなたのやうに善い人ではないわ。でも私は、あなたよりあの方の方を愛してるんですけど。」

私は、返事をしなかつた。彼女は、私が何か言ふのを期待してゐるやうだつた。

「勿論、それは私がまだ十分にはあなたを理解してゐないといふことでせう。ねえ、私はいつでも、あの方を、云はば恐れてゐたんです。あの方はいつでも大變嚴格なんです、云はば大變高慢なんです。勿論、私にはあの方がそんな風に見えるといふ丈けしか解らないんです。

私に解つてるのは、あの方の心の中には、私自身の心の中に在るよりもずつとやさしさがあるといふことなんですわ……。私は、私があの方のところへ行つた時あの方はどんなに私を見たかといふことを憶えてゐます——あなた憶えていらしつて？——あの包を持つて行つた時のことを。でも私は、あの方を尊敬し過ぎてゐる位ですのよ、さうして、それは私たちが同じではないといふことを示すものではないでせうか？」

「いや、ナステーンカ、さうぢやない。」と私は答へた。「それは、貴女があの人を、世界の何物よりも、そして自分自身よりも愛してゐるといふことを示してゐるんです。」

「さうね、きつとさうなんでせう。」とナステーンカは、飾り氣なく答へた。「でも、今私はどんなことを考へついたかお解りになつて？　私は、今あの方のことを話してゐる許りぢやないんですわ、一般的に言つてるんです。暫らく前から私、かういふことを考へ始めたんです。話して下さい、私たちが全く兄弟のやうになり得ないといふのはどうしてなんでせう？　一番善良な人々でさへ、他の人には何かを隱したり、何かをうしろの方に持つてゐたりするやうに思はれるのは何故でせう？　自分が怠けて言はずにゐるといふことを知つてるのに、人は何故自分の心の中に在ることを眞直に言はないのでせう？　誰でも、本當のその人よりは粗野に見えるので、すべての人は、自分の感情を早く表はし過ぎていけないことをしはしな

いかと恐れてゐるやうですわね。」

「おゝ、ナステーンカ、貴女の言ふことは眞實です。併し、その理由は澤山あるんです。」私は、其時には、今までになく、自分自身の感情を制へることに馴れてゐた。

「いゝえ、いゝえ！」と彼女は深い感じを以て答へた。「そら、あなたは、例へば、他の人のやうではありません！　私の感じてゐることをどうお話したらいゝのか、本當に解らないんですけれど、私にはそんな氣がするんですわ、例へばあなたは……現在……あなたは私のために何か犧牲にしていらつしやるやうに私には思はれるんです。」彼女は私に飛ぶやうな一瞥を與へながら臆病に附け加へた。「さう言ふ事を許して下さい、私が單純な娘だといふことはあなたは御存じですわね。私は人生をほんの少ししか見てゐないんです、さうして、時々私は本當に、どういふ工合に物を言つたらいゝのか解らないことがありますのよ。」彼女は、何か隱された感情に震へてゐる聲で附け加へた、併し彼女は微笑しようとしてはゐた。「でも私は、たゞ私が感謝してゐるといふことがお話ししたかつた丈けですの、私がすつかり感じてゐることも……おゝ、神樣があなたにその爲めに幸福をお與へ下さるように！　あなたの夢想家に就いてお話しなさつたことは全く今は本當ぢやありませんわ——つまり、私の言ふ意味は、あなたにとつては本當でないといふことなんです。あなたは正氣です、あ

なたは、あなたがお話しになつたものとは全く違つた方です。若しあなたがいつか誰かと戀に落ちたとしたら、神樣は彼女と共に幸福をあなたにお與へ下さいますわ！　私は彼女には何にも欲しませんわ、何故なら彼女はあなただけで幸福でせうから。私は知つてゐます、私自身が女なのです、ですから私は、あなたにさう申し上げるのを信じなくてはいけません。」

彼女は、話すことを止めた。そして私の手を暖かに握つた。私も亦、感激しないでは話すことが出來なかつた。數分間過ぎた。

「さうです、あの方は今夜は確に來ませんわね。」彼女は、たうとう頭を擧げ乍ら言つた。「もう遲いわ。」

「あの人は明日來るんでせう。」と私は、最もしつかりした、確信ある調子で言つた。

「さうですわ。」彼女は、もとの憂鬱の影もなくなつて附け加へた。「今は、私にはあの方が明日までは來ることが出來なかつたといふことが解りますのよ。では、さやうなら、明日まで。若しか雨が降つたら、私は參らないでせう。しかし、明後日は參ります。きつと此處へ參りますわ、どんなことがあつても、私、あなたにお逢ひしたいんですから、何もかもあなたにお話ししませうね。」

それから、私たちが別れた時には彼女は私にその手を與へた、そして明らさまに私を見な

がら言つた。「私たちはいつでも一緒にしませうね、出來ませんの？」

「おゝ、ナステーンカよ、ナステーンカよー　若しも貴女が今私が如何に淋しいかを知つてさへ呉れたらー」

九時が打つや否や、私は部屋の中に留まつてゐることは出來なくなつたので、支度をしてこんな天氣にも拘らず出掛けた。私はあすこへ行つた、私たちの席に坐つてゐた。私は彼女の通りの方へ行つた、しかし恥かしく感じたので、彼女の戸口から二歩許りの處へ來た時に、その窓の方は見ずに引返して來た。私は、昔さうだつたより一層憂鬱になつて家へ歸つて來た。何といふ沈んだ、物淋しい日だらうー　若し天氣がよかつたら、私は終夜歩き廻つたのだつたらうが……

だが、明日だ、明日だー　明日は彼女は、何もかも私に話してくれるだらう。だが、今日は手紙は來なかつたのだ。しかし、それは豫想されてゐたのだ。彼等は、今までには一緒になつてゐる……

第四夜

神よ、すべてはどうなつたか！　すべてはどうなつて行つたらうー　私は九時には到著し

た。彼女は既に其處に來てゐた。私は、彼女がいゝ具合に過ごしたことに氣がついた。彼女は、最初の時のやうに、兩肘を欄干に凭せて立つてゐた、そして彼女には私の近づいて行くのが聞えなかつた。

「ナステーンカー」と私は、一生懸命になつて私の混亂を制へながら呼びかけた。

彼女は、すぐに振り向いた。

「どうして？　早くして下さいよー」

「どうして？」と彼女は言つた。「どうして？

私は、狼狽して彼女を見た。

「どうして、手紙は何處にあるの？　あなたは手紙を持つてらしつたんでせう。」彼女は、欄干に捉まりながら繰り返した。

「いや、手紙なんかありませんよ。」と私はたうとう言つた。「あの人はまだ貴女の處へ來なかつたんですか？」彼女は、恐ろしく眞蒼になつて、身動きもしずに長い間私を見詰めてゐた。

私は、彼女の最後の望みを滅茶々々にしてしまつたのであつた。

「あゝ、あの方はどうでもするがいゝんだわ。」と彼女は、たうとう張り裂けるやうな聲で言つた。「こんな風に私をお棄てなさるのならどうでもするがいゝんだわ。」

彼女は、眼を落して、それから私を見ようとした、が出來なかつた。數分間彼女は、その

感激と戰つてゐた。忽ちに彼女は振向いて欄干に肘を凭せて、涙を流し始めた。

「おゝ、いけません、いけませんよー」と私は始めたが、彼女を見ると私は、續ける氣にはなれなかつた。そして、私は彼女に向つて何と言つたらよかつたらう？

「私を慰めようとしないで下さい。」と彼女は言つた。「あの方のことを言はないで下さい。あの方は來るだらうとか、あの方はこんな風に殘酷に野蠻に私を棄てはしないだらうとか言はないで下さい。何の爲めなんです——何の爲めなんです？　私の手紙には、あの不幸な手紙には何かあつたんでせうか？」

その時、啜り泣きが彼女の聲を息詰らせた。彼女を見た時、私の心は引裂かれた。

「おゝ、何といふ野蠻な殘酷なことでせう！」と彼女は再び始めた。「それに、一行も書かないなんて、一行も書かないなんてー　あの人はせめて、私を欲しないとか、私を拒絶するとかいふこと位書けたんでせうのに——それに三日の間に一行も書かないなんてー　憐れな頼りない少女を傷つけ虐げることはあの人には何て容易いことでせう、その少女の過ちは唯だあの人を戀してゐるといふこと丈けなんですー　おゝ、この三日の間どんなに私は苦しんだでせう！　おゝ、愛する者よ！　私があの人の處へ最初行かうとした、私があの人の前に身を屈した、私が些かの愛をあの人に求めた、そのことを思ふとー……さうして、それから後

は！　聽いて下さい。」彼女は、私の方を向いて言つた、そして彼女の眞黒な眼は輝いてゐた。「さうぢやありませんわ！　そんな筈はありませんわ、それは自然なことぢやありませんわ。あなたか私かが間違つてゐるんですわ、きつとあの方は手紙を受取つてゐないのですわね？　きつとあの方はまだ何にも知らないんでせう？　どうして人が――あなた御自身判斷して下さい、言つて下さい、どうかそれを、私に說明して下さい、私には解らないんです――どうして人があの方が私にするやうな、こんな野蠻な下品な行ひが出來るんだか？　一語も言はないなんて！　えゝ、地球上の一番劣等動物だつてもつと情け深く取扱はれてゐますわ。きつとあの方は何か聞いたんです、きつと誰かが私に就いて何かあの方に言つたんです。」と彼女は、私に向つて求めるやうに叫んだ。「あなたはどうお思ひになつて？」

「いゝですか、ナステーンカ、僕は貴女の名前で明日あの人の處へ行きませう。」

「さう？」

「僕は、總ての事に就いてあの人に質問しませう。すべての事をあの人に話しませう。」

「さう、さうですか？」

「貴女は手紙を書くんです。いやと言つちや不可ません、ナステーンカ、いやと言つちや不可ませんよ！　僕は、あの人に貴女の行爲を尊敬させませう、あの人にすつかり聞かせませう、そして若しか――」

「いゝえ。私のお友達、いゝえ、」と彼女は遮つた。「澤山ですわ！　もう一語も一行も私からは――澤山ですわ！　私はあんな人知りません、もうあの人を愛してはゐないんです。私……あの人を忘れませう。」

彼女は、續けることが出來なかつた。

「お落著きなさい、お落著きなさい！　此處へお坐りなさい、ナステーンカ。」と私は、其場へ彼女を坐らしながら言つた。

「私、落著いてゐますわ。心配しないで下さい。何でもないんです！　唯だ涙に過ぎませんわ、それは間もなく乾いてしまふでせう。えゝ、あなたは、私が氣が違ふと思ふんですか、河へ身を投げると思ふんですか？」

私の心はいつぱいであつた、私は物を言はうとしたが出來なかつた。

「よう御座んすか。」彼女は、私の手をとりながら言つた。「言つて下さい、あなたはよもやこんな事はなさらないでせう、それともなさつて？　あなたは、自分からあなたの方へやつて來た少女を見捨てはなさらないでせう。あなたは、明らさまに彼女の弱い愚かな心に恥ぢ知らずな侮辱を加へはなさらないでせう？　あなたは、彼女を氣にかけてやるでせうね？

あなたは知つていらつしやるでせう、彼女がたつた一人だといふことを、彼女は自分の事をするにもどうしたらいゝのか分らないのだといふことを、彼女はあなたをどうしても愛さずにはゐられないのだといふことを、それは彼女の過ちではない、彼女の過ちではない——彼女は何もしはしないのだといふことを……おゝ、可愛いゝ方、可愛いゝ方！」

「ナステーンカ！」私は、たうとう自分の感激を制へることが出來なくなつて叫んだ。「ナステーンカ、貴女は僕を苦しめる！　貴女は僕の心を傷つける、貴女は僕を殺してゐるんだ、ナステーンカ！　僕はたうとう喋らなくてはならないんだ、僕の心の中に波立つてゐるものを遁らせなくてはならないんだ！」

私は、かう言つた時席から立上つた。彼女は、私の手をとつて吃驚して私を眺めてゐた。

「あなた、どうなさつたの？」と彼女は遂に言つた。

「聽いて下さい、」と私は決然と言つた。「僕の言ふ事を聽いてくれ、ナステーンカ！　今僕が貴女に話さうとしてゐる事は、みんな不可能な事です、みんな愚かな事です！　僕は、こんな事は決してあり得ないといふ事を知つてゐるんだ、併し僕は默つてはゐられないんです。貴女が今苦しんでゐる事の爲めに、前以て僕を許して頂きたい！」

「何ですの？　何ですの？」彼女は、涙は乾いてしまつて、ぢつと彼を見詰めながら言つた。

その間、彼女の吃驚した眼には不思議な好奇心が閃いてゐた。「どうなさつたんですの？」

「不可能なこつた、だが、僕は貴女を戀してゐるんです、ナステーンカ！　それなんです！　もう何もかも話してしまつた。」私は、手を振つて言つた。「もう、貴女はたつた今したやうに僕に話しつゞけることが出來るかどうか、僕が貴女に言はうとしてゐることを貴女は聞くことが出來るかどうか、解るでせう……」

「それで、それからどうなの？」とナステーンカは私を遮つた。「それがどうなの？　あなたが私を戀してらつしやることは私、ずつと前から知つてましたわ、たゞ大抵あなたは私がお好きな丈けだといつも思つてゐましたの……おゝ、可愛い方、おゝ、可愛い方！」

「最初は、唯だ好きだといふ丈けでしたよ、ナステーンカ、だが、今は、今は！　僕は、貴女が包を持つてあの人の處へ行つた時の貴女と丁度同じ位置に居るんです。貴女より尙ほ惡い位置だ、ナステーンカ、何故ならあの人は貴女より他には誰にも構つてはゐなかつたんだから。」

「何をあなたは言つてらつしやるの！　私、ちつともあなたが解りませんわ。ですが、言つて下さい、これは何の爲めなのだか、何の爲めといふ積りぢやないの、たゞ、何故あなたは……そんなに出し抜けに……おゝ、私は馬鹿な事を言つてますのねー　併しあなたは……」

さうして、ナステーンカは混亂して罷めてしまつた。彼女の頰は燃えてゐた、彼女は眼を落した。

「どうしたらいゝんだ、ナステーンカ、僕はどうすればいゝんだらう？　僕はいけない。僕が罵つたのは貴女の……いや、いや、僕はいけなくはないんだ、ナステーンカ、僕はそれを感じてゐます、それを知つてゐます。何故ならば僕の心は、僕は正しいと、貴女に話してゐるから、それは僕が何れにしろ貴女を損ふ事は出來ないからです、僕は貴女を傷つける事は出來ないー　僕は貴女のお友達でした。だが、僕は信用を裏切りはしなかつたんだ。今、僕は涙を落してゐる、ナステーンカ、涙は流れるがいゝ、流れるがいゝ——それは誰をも傷つけはしないんだ。それは乾いてしまふでせう、ナステーンカ。」

「お坐りなさい、お坐りなさい、」と彼女は、私をその場に坐らせながら言つた。「おゝ、私の神様！」

「いや、ナステーンカ、僕は坐るまい。僕はもう此處には居られない、貴女はもう僕を見ることは出來ないんだ。僕は何もかも貴女に話しませう、そして行つてしまひます。僕が貴女を戀してゐたことを貴女は決して知らなかつたのだといふことが、僕は言ひたい丈けなのです。僕は、自分の祕密を守つてゐればよかつたんです。僕はこんな時に自分の利己主義で貴女を苦しめる氣はなかつたんです。いや！　しかし、僕はもうそれに抵抗することが出來なくなつたのだ。貴女は、自分でそれに就いて言つてたが、それは貴女の罪だ、貴女の罪だ、僕の罪ぢやないんだ。貴女は僕を逐ひ拂ふことは出來ません、いゝえ、いゝえ、私はあなたを逐ひ拂ひはしませんよ……」

「いゝえ、いゝえ、私はあなたを逐ひ拂ひはしません、いゝえー」ナステーンカは、この哀れな子供は、一生懸命にその混亂を隱しながら言つた。

「貴女は僕を逐ひ拂ひはしないつて？　さうぢやないー　僕は、自分で貴女から逃げ出さうと思つてるんですよ。僕は行つてしまひます、だが、先づ僕はすつかり貴女に話しませう。貴女が此處で泣き出した時僕は感動されずに坐つてはゐられなかつた、貴女が泣いた時、貴女が意中の人に——意中の人に——僕はさう言ひますよ、ナステーンカ——意中の人に見捨てられて、貴女の愛人に拒絶されて苦しんでゐた時、僕は自分の心の中に貴女に對する非常な愛が起つたことを感じたんですー　そしてそれは、その僕の愛で貴女を助けることが出來なかつた程非常に苦しいもののやうでした、僕の心臟が破れさうだつた程、そして僕は……僕は默つてゐられなくなつたんです、言はなくてはならなかつたんです、ナステーンカ、言はなくてはならなかつたんだー」

「さうです、さうですー　話して下さい、私に話して下さい、私に語つて下さい、」ナステー

ンカは、何とも言ひやうのない身振をして言つた。「きつとあなたは、私がこんな風にあなたに物を言ふのは不思議だと思ふのでせう。しますわ！　私は何もかもお話ししますわ。しかし……　言つて下さい！　私はあとでお話し「貴女は僕を氣の毒に思つてる、ナステーンカ、貴女は僕を氣の毒に思つてる丈けです。僕の愛する可愛い〳〵友達！　濟んだ事は直す事は出來ない。言つて了つた事は、取返す事は出來ない。さうぢやないでせうか？　さア、もう貴女は知つてゐるんだ。それが出發點ですよ。よろしい。もう大丈夫です、たゞお聽きなさい。貴女が坐つて泣いてゐた時僕は獨り考へたんです、（おゝ、僕がどんな事を考へたか話しませう！）僕は考へた、（それは勿論有り得ないことでせう、ナステーンカ、）僕は考へた、貴女は……僕の考へたのは、貴女が兎に角……僕とは全く別問題として、あの人を愛しなくなつたのだと。それから——僕は昨日も一昨日も考へたのだが、ナステーンカ——それから僕は——僕はきつと——貴女に僕を戀させてみせると、ねえ、ナステーンカ、貴女は自分でも僕を殆んど戀しさうになつてると言ひましたね。さア、それから何でせう？　さうだ、僕が貴女に話したかつたのはそれで殆んど全部だ。言ふ事が殘つてる事は、若し貴女が僕を戀したらどうなるだらうといふ事です、それ丈けです、もう何にもない！　いゝですか、僕の友達——兎に角貴女は僕の友達だ——僕は、勿論、貧

しい賤しい人間です、全く取るにも足らぬ人間です、が、そんな事はどうでもいゝんだ、（僕は自分の言ひたい事が言へさうもない、ナステーンカ、僕はそれ程混亂してるんです、）たゞ僕は貴女を愛したいんです、もし貴女がまだあの人を愛してゐたとしても、貴女が僕の知らない人を愛し續けてゐたとしても、僕の愛が貴女には決して重荷とは感じられないだらうと思はれる位に、僕は貴女を愛したいのです。貴女は絶えず、自分の方では、貴女のための感謝に充ちた、感謝に充ちた心が、暖い心が波打たうとしてゐるといふ事を感じて許りゐる……おゝ、ナステーンカ、ナステーンカー　貴女は僕に何をしたんでせう？」

「泣いてはいけません、あなたが泣いてはいやですわ。」ナステーンカは、急いでその場所から立ち上り乍ら言つた。「さア、いらつしやい、お起ちなさい、私と一緒にいらつしやい、泣かないで下さい、泣かないで下さい、」と彼女は、ハンケチで自分の涙を拭き乍ら言つた。「もう行きませう、私はすつかりあなたにお話ししませう……若しあの人がもう私を棄てたのなら、若しあの人が私を忘れてしまつたのなら、私はまだあの人を愛してるんですけど（私、あなたを欺きたくはありませんからね、）……ですけれど、よう御座んすか、私の言ふことに答へて下さい。若しも私があなたを戀してゐるのだつたとしたら、例へば、つまり、若し私がたゞ……おゝお友達、お友達！　私があなたの戀を笑つた時、あなたが私に戀をなさらな

いと言つて褒めた時、私はあなたをどれ程傷つけたか、それを思ふと、それを思ふと、おゝ、可愛いゝ方ー　どうしてこれを私は見抜かなかつたんでせう、どうして私はこれを見通さなかつたんでせう、どうして私はそれ程馬鹿だつたんでせう？　ですが……さア、私、決心しましたわ、あなたにお話ししますわ。」

「そら御覧なさい、ナステーンカ、どうしてだか解りますか？　僕は行きます、それが僕のすべきことです。僕は貴女を苦しめてゐる許りなんだ。今貴女は、僕を笑つたことを後悔してゐる、だが僕は望んではゐないんだ、貴女が……貴女の悲しみに附け加へて……勿論、それは僕の罪だ、ナステーンカ、だが、さやうならー」

「お待ちなさい、私の言ふことを聴いて下さい、あなた待つて下されて？」

「何の爲めに？　どうして？」

「私は、あの方を愛してゐます。併し私は思ひ止まつてしまふでせう、思ひ止まらなければならないんです、私は思ひ止まりかけてゐます、それを感じてゐます……誰が知りませう？　きつと今日は、何もかも終つて了ふでせう、何故なら私はあの人を嫌つてゐるんですから。何故なら、あの人は私を嘲つたのですから、それにあなたは此處で私と一緒に泣いていらしつたんですから、何故ならあなたは、あの人のやうに私を拒絶なさりはしませんから、何故ならあの人は決して私に戀してはゐないのに戀してゐて下さるんですから、何故なら、實は、私も自分でもあなたに戀してるんですから……さうです、私はあなたに戀してゐますー　あなたが私を愛して下さるのと同じに私はあなたを愛してるんです。私は前にもさうお話ししましたわ、あなたは御自分でお聞きになりましたわ——私があなたを愛するのは、あなたの方があの人より善い方だからです、あなたの方があの人よりも高尚だからです、何故なら、何故なら、あの人は——」

憐れな少女の激情は、最早それ以上言ふことが出來なくなつた程はげしかつた。彼女は、私の肩にその頭を載せ、それから今度は私の胸に凭れて、はげしく泣き出した。私は、彼女を慰めたり說きつけたりしたが、彼女は、泣き止むことが出來なかつた、彼女は絶えず私の手を握りしめてゐた、そして啜り泣きの間で言つた。「待つて頂戴、待つて頂戴、ほんの一分間ですんでしまふんですからー　私はあなたにお話ししたいんです……あなたは、考へてはいけませんよ、この涙のことを——これは何でもないんです、弱いのです、すんでしまふまで待つて下さい。」……遂に彼女は泣くことを止め、眼を乾かして、それから私たちは再び歩き出した。私は喋りたかつた、しかし彼女は、尚ほ待つてくれと言つた。私たちは默つてゐた。

「こんな事なのですわね、」彼女は話し始めた。その聲は、弱々しい震へ聲だつたが、その中には、甘い苦痛を以て私の心を引裂くやうな調子があつた。「私が餘り輕卒でそれに不調和だなんて思つては不可ませんよ、私が忘れてしまつたりするなんて思つては不可ませんよ。私はまる一年の間あの人を愛してゐました、その事は出來ないなんて思つては不可ませんよ。私はまる一年の間あの人を愛してゐました、そして私は、あの人に對して不忠實だつたなんて決して、決して考へたこともないといふことを神に誓ひますわ……あの人は私を輕蔑しました、私を嘲つてゐたのです——神樣があの人を許すでせう！　だが、あの人は私を虐げ、私の心を傷つけました。私は……私は、あの人を愛しませんわ、私は大量といふことを、寛大といふことを愛する丈けなんですもの。私は私自身がそんな風で、それにあの人は私に値しないんですものは——まア、あの人のことはもう澤山ね。あの人はまだしもよかつたんですわ、若しかあの人が私の期待をあとになつて欺いたとしたら、あとになつて私に示さうとしてあの人が……さア、もうよしますわ！　しかし誰が知つてゐませう、私の可愛い〻方、」彼女は、私の手を握りつゞけてゐた。「誰が知つてゐませう、きつと私の愛は全く間違つた感情だつたんでせう、馬鹿らしいことだつ妄想だつたんでせう——きつとそれは始めから間違ひだつたんでせう、馬鹿らしいことだつたんでせう、何故なら私はお祖母さんの爲めに大變嚴格になつてゐたんですから？　きつと

私は他の人を愛する筈だつたんですわ、あの人でない、異つた人を。その人は私を憐れんでくれたでせう、そして……さうして……でも、もうその事は言ふのはよしませうね。」ナステーンカは息をつけない程の感激で一寸止めた。「私はたゞかう言ひたかつたんです……私はかう言ひたかつたんです、若しか、（私があの人を愛してゐるとしても——いゝえ、あの人を愛してゐたのですわ、）若しか、それでもあなたが矢張り……若しかあなたの愛が、私の心の中から、以前の感情を遂ひ出しおほせる程大きなものだといふ事を私が感じましたら——若しか、あなたが私を憐れんで下さるなら——若しか、あなたが私を希望もなく慰めもなく運命に任して放つて置く事を望まないのでしたら——若しか、あなたが今の通りにいつでも本當に私を愛さうとしていらつしやるんでしたら——私はあなたに誓ひます、喜んで……到頭私の愛はあなたの愛に値するやうになるでせう……あなた、私の手をとつて下さいな？」

「ナステーンカ！」と私は、啜り泣きで息もつけずに叫んだ。「ナステーンカ、おゝ、ナステーンカ！」

「澤山、澤山！　さア、もう本當に澤山ですわ、」と彼女は、殆んど已れを制へることが出來ずに言つた。「さア。もうすつかり話し合ひましたわね。さうぢやないこと？　さうぢやなくつて？　あなたは幸福ですわ——私も幸福ですわ。そのことはもう一語も言はないでいゝ

わ、待つて下さい、許して下さい……どうぞ、何か他のことを話して頂戴。」

「さうだ、ナステーンカ、さうだ！　もうそのことは澤山だ、もう僕は幸福です、僕は——さうだ、ナステーンカ、さうだ、他のことを話しませう、急いで話しませう。さうだ！　僕は用意してるんですよ。」

だが、私たちは何を話したらいゝか解らなかつた。私たちは笑つた、泣いた、無意味な辻褄の合はないことを澤山言つた、或る時には私たちは甃石道を歩いてゐた、或る時には突然向きを變へたり道を横ぎつたりした、又或る時には私たちは立ち止つた、そして再び堤防へ戻つて行つた、私たちはまるで子供みたやうであつた。

「僕は今たつた獨りで生活してるんですよ、ナステーンカ、」と私は始めた。「しかし明日は！　勿論解つてるでしよ、ナステーンカ、僕は貧乏だ、僕は千二百留貰つた丈けなんですよ、だが、そんなことはどうでもいゝんだ。」

「勿論、どうでもいゝわ、さうしてお祖母さんには年金がついてるんだから、ちつとも重荷にはならないわね。私たちはお祖母さんを一緒に連れて行かなければならないわ。」

「勿論、一緒でなきやならない。だが、マトローラがゐる。」

「さうだわ、フョークナも一緒にね！」

「マトローナは善い人間だけれど、たつた一つ悪い事があるんですよ、奴はまるで想像力といふものが無いんです、ナステーンカ、全く無いですよ、だが、そりやどうでもいゝんだ。」

「結構だわ——彼女達は一緒に暮せますわ、たゞ、あなたは、明日私たちの處へ引越して來なくてはいけませんよ。」

「貴女の處へ？　どうして？　結構だ、僕はさうしませう。」

「さうよ、私たちの部屋をお借りなさいよ。一番階上にあるのが空いてるんです。老婦人が下宿してゐたんですけれど、行つてしまつたんです。さうして私、お祖母さんは若い人を入れたがつてることを知つてるのよ。『どうして若い方がいゝの？』て言つたらね、お祖母さんはかう言ひましたのよ。『おゝ、私は年をとつたからね、だが、ナステーンカ、お前の夫を欲しがつてるなぞと思つては不可いよ。』だつて、それで私、さういふ考へだつて事を推察したのよ。」

「おゝ、ナステーンカ！」

そして私たちは一緒に笑つた。

「さア、もう澤山、もう澤山。でもあなたは何處に住んでらつしやるの？　私、忘れてしまつたわ。」

「向うの、X橋のそばの、バランニコフの建物ですよ。」

「あの大きな家？」
「さう、あの大きな家です。」
「おゝ、私知つてるわ、いゝ家ね。でも、ねえ、あなたはそこをよしてしまつて、出来るだけ早く私たちの處へ來た方がいゝんですわ。」
「明日行きます、ナステーンカ、明日。僕は少し家賃に借りがあるんです、だがそんなことはどうでもいゝんだ。僕はもう直き俸給を受取ることになつてるんですよ。」
「そして、ねえ、私は教へに行かうかと思つてるのよ、私は、自分で何か勉強するの、そしてそれから教へに行くのよ。」
「素敵だ！　それに僕はもう直き賞與を貰ふことになつてるんだ。」
「それで、明日はあなた、私の處の下宿人になるのね。」
「そして僕らは『セヴィールの理髪師』へ行かう、だつて、あれはもう直きまたやり始めようとしてるんだから。」
「さうね、行きませう」とナステーンカは言つたが、「でも何か他のものを觀る方がいゝわ、『セヴィールの理髪師』でなく。」
「さうだとも、何か他のものだ。勿論その方がいゝ、僕はさう思つたんぢやなかつた――」

私たちはこんな風で歩いてゐた、恰も自分たちに何事が起りつゝあつたのか知らなかつたかの如くに、私たちは或る種の有頂天に於いて、或る種の熱狂に於いて歩いてゐた。一寸の間私たちは立ち止つて、同じ場所で長い間話し合つた。それから私たちは再び歩いて行つた、私たちが何處を歩いてゐたのか、神が知つてゐる、そして再び涙、再び笑。出し抜けにナステーンカは家の方へ行かうと欲したのであつた。そして私は。彼女を止めようとする譯にはいかなかつたが、又、彼女を家の方へ行かせたくもあつた。私たちは出掛けた、そして十五分ばかりすると私たちの場所のそばの堤防へ來てゐた。その時彼女は溜息をついた、そして再び涙が彼女の眼の中へ現れた、私は不安で冷たくなつたのであつた……しかし彼女は、私の手をしつかり握つて、以前の通りに歩き、語り、喋ることを私に强ひた。
「私、家へ歸る時間が來ましたわ、私、もう大變遲いに違ひないと思ふのよ、」とナステーンカは遂に言つた。「私たちは子供みたやうなことをしてるのは罷めなきやなりませんわ。」
「さうだ、ナステーンカ、でも僕は今夜は眠られないでせう、僕は家へ歸らうとは思つてゐないんです。」
「私も眠られるとは思へませんわ、でも、私を家まで送つて頂戴な！」
「さう思つてた所ですよ！」

「こんな時に私たちは家へ歸つてしまはなければならないのね。」

「歸らなきやならない、歸らなきやならないんですよ。」

「誓つて下さいね？　いつかは家へ歸らなきやならないんですね。」

「誓ひますよ。」私は笑ひながら答へた。

「さア、行きませう！」

「行きませう！　空を御覽なさい、ナステーンカ、御覽なさい！　明日はいゝ天氣になりますよ、何といふ青空だ、何といふ月だ！　御覽なさい、あんな黄色い雲が今隱しかけてゐる、そら、そら！　いや、もう過ぎてしまつた。御覽なさい、御覽なさい！」

けれどもナステーンカは、雲を見てはゐなかつた。彼女は、まるで石に化してしまつたかのやうに默つて立つてゐた、暫らくして彼女は、私の方へおづ〳〵寄つて來た。彼女の手は私の手の中で震へてゐた、私は、彼女を見た。彼女の手は、尙ほも私の方へ寄り添つて來た。

その時、一人の若い男が私たちのそばを通つた。彼は、突然に立ち止つて、ぢつと私たちを見た、そして又再び數歩續けて行つた。私の心はどき〳〵し始めた。

「あれは誰です、ナステーンカ？」と私は低い聲で言つた。

「あの方ですわ。」彼女は、私に尙ほも一層近く寄り添つたまゝ、私語くやうに言つた。一層震へながら……。私は、殆んど倒れさうになつた。

「ナステーンカ、ナステーンカ！　貴女ですね！」私は、私たちの背後にさういふ聲を聞いた。そして、それと同時に若い男は私たちの方へ二三歩近寄つて來た。

神よ、彼女は如何に叫び出したか！　如何に彼女は飛び上つたか！　如何に彼女は私の腕から身を引き放して彼の處へ飛んで行つたか！　私は立つてゐた、そして全く打碎かれて彼等を見詰めた。けれども、彼女はその手を彼に與へるか與へない內に、彼の腕に身を投げかけるか投げかけない內に、彼女は再び私の處へ戻つて來た、一瞬の間に再び私のそばに來てゐた、そして私の知らない間に彼女は、私の頸に兩腕を卷きつけて、暖かいやさしい接吻を私に與へた。それから、私には一語も言はずに、彼女は再び彼の處へ歸つて、その手をとつてうしろへ引張つて行つた。

私は、長い間彼等の後ろを眺めてゐた。たうとう二人は、私の眼界から消えてしまつた。

朝

私の夜は朝に續いた。濕つた日であつた。雨が降つてゐて、私の窓硝子を陰鬱に打つてゐた。部屋の中は暗く、外は灰色であつた。私は、頭痛がし眩暈がしてゐた。私の四肢はいつ

しか汗ばんでゐた。

「御手紙ですよ、貴方様。郵便屋が持つて來ました。」マトローナが、私の上に屈むやうにして言つた。

「手紙？　誰からだ？」私は、椅子から飛び上りながら叫んだ。

「存じませんよ、貴方様、見なさつた方がいゝでせう――多分その人が書いたのでせう――」

私は封を切つた。それは彼女からであつた！

「おゝ、お許し下さい、お許し下さい！　私はあなたにお許しを乞ひます！　私は、跪いてあなたを、そして私自身をも欺きました。あれは夢でした、蜃氣樓でした……私の心は今日はあなたのために痛んで居ります、許して下さい、許して下さい！

「私を非難しないで下さい、何故なら私はあなたに對して少しも變りはしないのですから。私は、あなたを愛すると申しました、私は今もあなたを愛して居ります、愛する以上で御座います。おゝ、神様！　若しも私が、あなた方を同時に一緒に愛することが出來さへしましたら！　おゝ、若しもあなたがあの方でありさへしましたら！」

（「おゝ、若しもあの方があなたでありさへしましたら」と私の心には反響した。私は彼女の言葉を覺えてゐた、ナステーンカ！）

「私はあなたに對して今どうしたら善いのか、それは神様が御存じです！　私は、あなたが悲しく淋しくいらつしやることを存じて居ります。私はあなたを傷つけました、しかしあなたは、人が誤つて愛する時は間もなく忘れられる、といふことを知つていらつしやいます。そしてあなたは私を愛していらつしやいます。

「その愛に對して感謝致します、さうです、感謝致します！　何故ならそれは、覺めて後も長い間ためらつてゐる甘い夢のやうに、私の記憶の中に生きて居りませうから。何故なら私は永遠に覺えて居りますでせう、あなたが私に對して兄のやうにそのお心を開いて下さつたあの瞬間を、そして私の打碎かれた心の贈物をあんなに寛大に受けて下さつて、それを慈しみ、それを癒して下さつて……若しも私をお許し下さるならば、あなたの記憶は、無限の感恩の情によつて昂められるで御座いませう、それは私の魂から決して消えないで御座いませう……私はその記憶を寶と致します、私はそれに對して眞實で御座います、私はそれを裏切るやうなことは御座いません、私は私の心を裏切るやうなことは御座いません。それは全く變りません。それは昨日非常に速かに、いつも屬してゐましたあの方へ歸りました。

「私達はお逢ひするでせう、あなたは私達の處へ來て下さいますでせう、あなたは私達をお

捨てにはならないでせう、あなたは私にとつては永遠にお友達でそして兄で御座いませう。さうして、私にお逢ひ下さる時はお手をお與へ下さるでせう……さうで御座いますね？　あなたはきつとお與へ下さいますわ、あなたは私を許して下さいました、さうぢやありませんの？　あなたは前のやうに私を愛していらつしやいますの？

「おゝ、私を愛して下さい、私を捨てないで下さい、何故なら私は今も大變あなたを愛して居りますから、何故なら私はあなたの愛に値するのですから、何故なら私はそれを受けるに足るのですから……私の可愛いゝ方！　來週私はあの方と結婚致します。あの方は愛して歸つて來たのです、あの方は私を決して忘れたのではありませんでした。あなたは、私があの方のことを書くことをお怒りにはならないでせう。しかし私は、あの方と一緒にあなたにお逢ひしに行きたいのです。あなたはあの方が御好きでせう、さうぢやありませんか？　あなたの記憶と愛なる

ナステーンカ」

私は、その手紙を長い間讀みかへし、讀みかへしした。涙が兩眼から迸り出た。たうとう私は、手紙を手から落して顏を隱した。

「愛する御方！　ねえ、愛する御方――」マトローナは始めた。

「何だ、マトローナ？」

「私は天井の蜘蛛の巢を拂つてしまひました。もう御結婚でも夜會でも出來ますよ。」

私は、マトローナを眺めた。彼女は、まだ丈夫な若々しい老婆であつた、が全く突然に私には彼女が光りなき眼を持つた皺の寄つた顏の老衰した女に見えたのといふのは、何故なのか私は知らない……突然に私の部屋が、マトローナ同樣古びきつたものに見えたのは何故だか私は知らない。壁も床も色さめて見え、何もかもが穢らしく思はれた、蜘蛛の巢は以前よりも澤山になつてゐたのだ。私は何故か知らない、が私が窓から外を眺めた時、向う側の家も亦古びきつて穢らしく私には見えた、圓柱の漆喰は隙間が出來崩れてゐた、蛇腹は龜裂を生じ汚れて、生々した深い黃色い壁は斑になつてゐたやうに私には思はれた。

一寸の間雲の中から出し抜けに顏を出した日光までが雨の黑幕の後ろへ、再び隱れてしまつて、再びすべてが私の眼前には穢らしくなつた。それともことによると、私の未來の全景が非常に悲しげにまた忌はしく私の前に瞬いたのかも知れない、そして私は、現在と丁度同じやうな、十五年後の年とつた自分を、その淋しい正に同じ部屋の中に、その十五年の間に少しも悧巧になつてはゐないマトローナと共に、見たのであつたかも知れない。

しかし、私はお前に怨みを持つであらうといふことを考へるのか、ナステーンカー　私がお前の靜かな煩ひなき幸福の上に暗雲を投げるであらうといふことを、私の苦き非難を以てお前の心に不幸を與へるであらうといふことを、祕密の悔恨によつてそれを汚すであらうといふことを、祝福の瞬間にも苦惱に戰かしめるであらうといふことを、そして私が、お前が彼と共に祭壇に進む時、お前の眞黑な捲毛の中に絡んでゐるやさしい花の唯だ一片をでも粉砕するであらうといふことを……。おゝ、決して、決して！　お前の空は晴朗であれ、お前の甘い微笑は輝き煩はされないであれ、さうしてお前は、他の者の淋しき感謝に充ちた心に與へた惠まるべき幸福のあの瞬間のために、祝福されてあれ！

神よ、あらゆる幸福の瞬間よ！　それは、人間の生活全體にとつては餘りに少いものであるのか？

ポルズンコフ

私は、その男を嚴密に調べ始めた。彼にはその外貌に於いても何か非常に特殊なものがあつた。それは、人をして、どんな別なことを考へてゐる時にも、彼を凝視させずには措かなかつた、そして、どうしても笑ひ出させずには措かなかつた。私にはさうであつた。言つて置かなければならないことは、この小さな男の眼が非常に感じ易いことであつた。それともことによつたら、彼は、自分を凝視する眼には非常に感じ易く惹きつけられるのであつたのかも知れない、彼は殆んど本能的に自分が見られてゐたことを推察し、忽ちにその見てゐる人の方を振り向いて、心配さうにその人の表情を探るのであつた。彼が絶えず氣にして、振り向いたり、體をねぢ曲げたりしてゐる有樣は、いかにも舞人形によく似てゐた。それは奇妙であつた！　彼は嘲弄を恐れてゐるやうに思はれた。その癖彼は、全世界に向つて道化者としてのみ生活をつゞけてゐるのであつて、道德上の意味では、且つ肉體的の意味でも、凡ゆる飮食店へ姿を現して、彼のはひるべき仲間を選んでゐるといふ事は事實なのであつた。自發的の道化者は憐れまれもしまい。けれども私は、この不思議な男、可笑しな人間は、決して職業として道化者となつてゐるのではないことを直樣見てとつた。彼のうちには、それでも何等か紳士らしいものがあつた。彼自身に就いての、彼のその不安、その不斷の憂慮は、全く彼が深切であるといふことの證據であつた。深切であらうとする彼の欲望は、慾得づく

の考へのためといふよりも、深切な心情のためだつたやうに私には思はれた。彼は、人々が出來る丈け大きな聲で、而も最も不都合な遣方で、面と向つて嘲笑することを許さうとしてゐた、が併しそれと同時に——そして私はそれを誓つてもいゝ——彼の聽き手が、彼の言つたことや爲したことを笑ふのではなく、彼を、彼の全存在を、彼の心を、彼の頭を、彼の樣子を、彼の全體を、肉體と血とを、笑ふことが出來る程下品で無作法なのだといふことを考へると、彼の心は痛み悲しむのであつた。確かに彼は、其瞬間には、自分の立場の凡ゆる愚かしさを感じたのであるに違ひない。けれども、その反抗は絶えず幾度も英雄的に發生したものの、忽ちに彼の心の中から消え去るのであつた。確かにこのすべては、他ならぬ深切な心情のお蔭であつたに違ひない、それは除け者にされて誰からも金を借りることが出來なくなることの不利を恐れることから出たことではない。此の紳士は、常に人から借金をしてゐた、自分が入費をかけて馬鹿なことをしたり、人々を款待したりした後では、或る意味に於いて、その人々から金を借りる資格があると感じたので、そんな形式で助けを求めてゐたのであつた。しかし、何といふことだ！　金を借りるといふことは何といふ仕事だらう！　さうして、どんな顏附をして彼は借金を賴んだのか！　私は、この小さな男の皺だらけな骨張つた顏の如きこんな小さな場所に、非常に多くの樣々な皺め面が、これ程奇妙な雜多な特

色ある感情が、これ程の全く恐ろしい表情が、同時に表はれる餘地があらうとは想像することも出來なかつた。すべてがそこには表はれた——恥も傲慢不遜も、その顏に突然閃く困惑も、失錯に對する怒りと恐れも、敢て厄介をかける爲めに許しを乞ふ懇願も、彼自身の威嚴の意識も、彼自身の賤しさに對するそれ以上の意識も——この凡てが電光のやうに彼の顏を過ぎて通るのであつた。まる六年の間、彼はこんな風に神の國に奮鬪して來たのであつたが、未だ曾つて金を借りる興味ある瞬間に、相應しい態度をとることが出來るやうにはならなかつた！　言ふ必要もないことだが、彼は決して無感覺にも下賤にもなりきりはしなかつた。彼の心は餘りに感じ易く餘りに情熱的であつた——もう一層言ふと、實は、私の意見では、彼は世の中の最も正直な尊敬すべき人の一人であつた、しかし多少弱いところがあつて、人の好い性質から、そして興味も持たないのに人の命令で、何か賤しいことをして、唯だ單に同胞の世話をしようとしてゐる人なのであつた。要するに彼は、本當の意味の「ごろつき」と呼ばるゝ者であつた。最も理窟にあはないことは、彼が他の人々と同じ樣な服裝をしてゐたことである、他の人より惡くもなく善くもなく、小綺麗に、いくらか浮身をやつしてさへ居て、全く體面と個人的威嚴とを持するだけの風采を持つてゐたことである。此の外部の均齊と內部の不均齊、彼自身に對する不安、及びそれと同時に彼の不斷の自嘲が——このすべて

が、著しく不似合なものであつて、且つ笑ひと憐れみとを惹起し勝ちなのであつた。若しも彼が、彼の聽衆は世の中の最も善良な人々であつて、何か面白いことがありさへすれば笑はうとしてゐるのだといふことを確信し、且つそれは自分の個人的威嚴を犧牲にすることではないと確信したならば（さうして、度々經驗したことでありながら、時とすると彼はそれを信ずるやうなことになるのであつた、）彼は、わけもなくその上衣を脫いで、裏返しに著て、そして、他人の慰めのために又自分も滿足を感じて、そのまゝで町を歩いたりするのであつた。けれども均齊には、彼はどうしても達することは出來なかつた。もう一つの特質を言ふと、この變人は高慢であつた、そして發作的で突發的で、危險の無い時には豪俠でさへあつた。時とすると彼は、我慢がならなくなつて、その結果、勇氣を振つて殆んどヒロイズムを以て彼をひどく怒らした恩人の或者をやつつけるのであつたといふことは、見たり聞いたりするに足ることであつた……。一口に言ふと彼は、最も本當の意味の殉難者であつたが、最も無益な、從つて最も滑稽な殉難者なのであつた。

客達の間には、或る議論が始まつてゐた。忽ち私は、我々の變人がその椅子の上へ飛び上つて、有らん限りの聲を出して叫び出して、人々が注意しない事を氣遣つてゐるのを見た。「君、君、」とその家の主人が私に私語いた。「あの男はどうかすると馬鹿に珍らしい話をす

ることがあるんですよ……面白い男でせう？」

私は頷いて、それからその群の中へ押しわけてはひつた。その椅子の上に飛び上つて聲の限りに叫んでゐるちやんとした風采をした紳士を見ると、實際、すべての人々は注意をひかれた。その變人を知らなかつた多くの人々は、不意を打たれて互ひに顏を見合してゐた、その他の者は聽く程笑ひ出した。

「私はフェドセーイ・ニコラーイチを知つてゐました。私はフェドセーイ・ニコラーイチを、誰よりもよくつ知つてるわけなのです！」と變人はその高い處から叫んだ。「諸君、私に何か話させて下さい。私はフェドセーイ・ニコラーイチに就いて面白い話をすることが出來ます！私は或る話を知つてゐます——非常に面白い話を！」

「話し給へ、オシープ・ミハイルイチ、話し給へ。」

「話し給へ。」

「謹聽！」

「謹聽、謹聽！」

「私は始めます、しかし諸君、これは特殊な話なのです……」

「結構、結構！」

「それは喜劇的な話なのです。」

「結構、素敵だ、大したもんだ、やり給へ！」

「それは、私自身の私生活中の挿話なのでありますが……」

「しかし、何故そんな喜劇的なと敢て言ふんですね？」

「そして、幾分か悲劇的でもあるのです！」

「えゝつ???」

「一口に言ひますと、今私がお話しして諸君を喜ばせようとして居りますこの話は——諸君此話はその結果として非常に興味のある又有利なる仲間に私がはひることになつた……」

「洒落はよし給へ！」

「此話は……」

「要するにその話は——急いで話し給へ、前置を切り上げ給へ。その話は、それは金がかゝつてるんでせう。」口髭の生えた金髪の青年が、その手を上衣の衣嚢に突込みながら、嗄れ聲でさう言つたが、まるで偶然のやうに、ハンケチではなく財布を摑み出してゐた。

「その話は、親愛なる諸君、その事の後私は多くの諸君に御目にかゝり度くなつて、かういふ場所に來たのです。で、遂に、その話の事件のために結婚しなかつたのです。」

「結婚だつてー　妻ですねー　ボルズンコフは結婚しようとしたのか!!」
「告白しますが、私はボルズンコフ夫人を見たかつたのです。」
「そのボルズンコフ夫人たらんとした人の名前を訊ねさせて頂けませんかねえ。」と一人の青年が話し手の方へ近づいて叫んだ。
「だが、それはまだ第一章なのですよ、諸君。それは丁度六年前の春、三月三十一日のことでした——日に氣をつけて下さい、諸君——前夜で……」
「四月一日のですねー」と捲毛の青年が叫んだ。
「あなたは大變お察しがいゝですね、それは晩方でした……實際すべてが普通の景氣でした。さうしてそのひかけ、月は浮び上らうとしてゐました……實際すべてが普通の景氣でした。さうしてその今にも暮れようとしてゐる黄昏の中へ、私も矢張り、今は死んでゐる、燻り込んでゐる婆さんに別れを告げて——こつそりと自分の貧しい宿から浮び出て行つたのでした。諸君、こんな流行語を使ふことをお許し下さい、これは最近にニコーライ・ニコラーイチから聞いたものです。尤も、私の婆さんは實際に燻り込んでゐたんです。あの婆さんは、盲目で聾で唖で馬鹿だ——凡ゆる下らないものなんです……白狀しますが私は震へてゐました、私は大きなことをしようとしてゐたのです、骨張つた頸筋を捉へられた小猫のやうに、私の心臟はどきど

きしてゐたのです。」
「一寸失敬、ボルズンコフ君。」
「何か御用ですか？」
「もう少し簡單に話して下さい、餘計な努力をしないで下さい、どうか！」
「よろしい。」オシープ・ミハイルイチは、やゝ不意を打たれて言つた。「私はフェドセーイ・ニコラーイチの家（彼の持つてゐた家）へ行つたのです。御承知のとほり、フェドセーイ・ニコラーイチは、たゞの同僚ではありません、役所では得手に帆を揚げてゐる長官様です。私が訪れると、早速書齋へ通されました。今でもさうですが、あの部屋は暗かつた、實に暗かつたのです、が、蠟燭は持つて來られませんでした。さア、フェドセーイ・ニコラーイチがやつて來ました。彼と私とは暗黒の中に對ひ合ひました……」
「君はどうなつたんだらう？」と一人の士官が訊いた。
「どうしたと思ひますか？」ボルズンコフは痙攣的に動く顔を捲毛の青年の方へ急に向けながら訊いた。「さア、諸君、變なことが始まりました、が併し實はそこには何にも變なことは無かつたのです。それは日常茶飯事といはれてゐるやうな事だつたのです——私は、衣嚢から巻いてある紙をとり出した丈けでした……すると彼も巻いてある紙を取出したのです。」

「紙幣ですね？」

「紙幣です、そして私たちはそれを交換しました。」

「僕は賭けをしてもいゝが、其處には收賄の臭ひがありますね。」と立派な身なりの、髪を短く刈つた若い紳士が言つた。

「賄賂です！」とボルズンコフは、その紳士の言葉を引取るやうに言つた。

『おゝ、余は自由主義者たらん、
余は如何に多くそを見しか！』

「諸君にしたところが、地方で役に就いてゐる場合に、故郷の煖爐で手を暖めないなんてことが……何故なら或る作家の言つた通り、『常に我等の祖國の煙は、我等にとつては快いのである』といふ譯ですからね。祖國は我等の母です、諸君、我等の母なるロシアです。我等は彼女の嬰兒であります、さうしてそれ故に我等は彼女の乳を吸つてゐるのです！」

人々は、聲をあげて笑つた。

「だが、諸君、諸君は私が決して賄賂をとつたことは無かつたと思つてゐられたのですか？」とボルズンコフは、訝しげにすべての人々を眺め廻しながら言つた。

引伸ばされた、ホーマーのやうな笑が、突然起つて、ボルズンコフの言葉をその哄笑の中に呑み込んでしまつた。

「それは本當にさうです、諸君……」

けれども此處で彼は罷めた、そして尙ほも不思議な表情で、すべての人々を眺め廻してゐた。恐らくは——誰が知らう？——彼はこの名譽ある仲間の多くの者よりも一層正直だつたのだといふ考へが其時彼の心に浮んだのであらう……兎に角、彼の顏に表はれたその眞面目な表情は、一般の陽氣な騷ぎが全く靜まるまでは過ぎてしまはなかつた。

「で、さうなのです、」とボルズンコフは、すべてが靜かになつた時、再び始めた。「彼は決して賄賂をとつたことは無かつたのですが、それでもあの時には私は犯したのでした。私は賄賂を衣囊に入れました……收賄者から……つまり私の手の中には或る書類があつたのです、それを若し彼が或る人に送らうと思つたなら、フェドセーイ・ニコラーイチにとつてはひどく不利になつたのです。」

「そこで、彼は君からそれを買つたのですね？」

「買つたのです。」

「彼は澤山呉れましたか？」

「此頃の多くの人々ならば、全く、どんな變節でもして自分の良心を賣るだらうと思はれる

程哭れましたよ……此頃ではその爲めに何か貰ひさへすればいゝのですからな。しかし、私は、自分の衣嚢に金を入れた時何だか僕でられるやうな氣がしましたよ。私は實際不斷は自分を欺くといふことを理解しないのですよ、諸君——兎に角私は生きてるのか死んでるのか解らないやうな具合で、脣は震へ、脚は震へてゐました、さうです、私は惡いことをした、惡いことをしたのです、全く惡いことをしたのです。私は全く良心に責められました。私はフェドセーイ・ニコラーイチの許しを乞はうとしてゐましたよ。」

「それで、彼はどうしました？　つまり、どれ程に私が感じたかといふことがお話ししたいのですよ。それで、私は御承知の通り感じ易い心を持つてゐるのです。」

「ところが私は、許しを乞ひはしなかつたんです……彼が私の顏をまともに見てゐることを知りました。『君は神をちつとも恐れないのか、オシープ・ミハイルイチ？』と彼は言ひました。で、私はどうすればよかつたんでせう？　私は禮儀の感情から顏をそむけ、兩手を垂れてゐました。『どういふ譯で、』と私は言ひました。『私が神を恐れてゐないのでせう、フェドセーイ・ニコラーイチ？』しかし私は禮儀としてこれ丈け言つたのです……私は地の底へでももぐり込んでしまひたかつたのですよ。『これ程長い間わしらの家庭の友となつてゐながら、わしは言ふが、息子といつてもいゝ程だのに——だが天は我々に何を蓄へておいてくれたか、誰が知らう、オシープ・ミハイルイチ？——それに全く出し抜けにわしを告發するなんて！……そんなことではわしは人類をどう考へたらいゝだらう、オシープ・ミハイルイチ！』さうです、諸君、彼は私に向つて講義を讀んでゐたのですよ！　『さアさア、』と彼は言ひました。『わしはそんなことでは人類をどう考へたらいゝのか言ひ給へ、オシープ・ミハイルイチ。』『彼はどう考へたらいゝのかな？』と私は考へました。ところが、どうでせう、私の咽喉には塊がつかへてゐたのです、私の聲は震へてゐました、そして私は、自分が堪らない弱い人間だといふことを知つて、帽子を摑みました。『何處へ行くのだね、オシープ・ミハイルイチ？　今夜は例の日の前の晩なのだ、きつと君はわしに反抗しようなどと思つてるのではあるまい？　わしは君にどんな惡いことをしたらう？……』『フェドセーイ・ニコラーイチ、』と私は言ひました。『フェドセーイ・ニコラーイチ……』實際、私は溶かされてしまつたのです、諸君、私は有平糖のやうに溶かされてしまつたのです。卷いた紙幣が、そいつが私の衣嚢の中には在つたのです、そいつも矢張り叫び出すやうな氣がしました。『お前は忘恩の盜賊だ、呪はれた泥棒だ！』と言つてね。そいつは十五貫もの重みになつたやうな氣がしたんです……（だが若しも本當に十五貫もの重みなのだつたとしたら！）……『解るよ、』とフェドセーイ・ニコラーイチが言ふのです。『君の

後悔してゐることは解るよ……ねえ明日は……』『エチプトの聖マリアの日です。』『よし、もう泣くな。』とフェドセーイ・ニコラーイチは言ひました。『もういゝ、君は間違つてゐた、だが君は悔悟した！　來給へ！　多分少しはうまく君を眞實の道に戻す事が出來るだらう。』彼は言ふのです……『多分、わが愼しみ深い女神が、』（さうです、『女神』です、彼はいつもさう呼んでゐたことを私は覺えてゐます、惡者）『君の無情になりかゝつた……無情になつたとはわしは言はんよ、誤りかけた心を……』かう言ふのですよ、『暖めるだらう。』とね。彼は私の腕をとりました。諸君、そして私を彼の家庭の集りへ連れて行きました。私の背には寒いものが走り下りました。私は震へてゐました！　どんな眼をして、私は其處に居たらいゝのだらうと思ひました——これからお話ししますが、諸君……えゝ、私は何と言つたらいゝのでせう？——そこで感銘の深い事柄が起つたのです。」

「ボルズンコヴ夫人ぢやないかね？」

「マーリヤ・フェドセーヴナです、しかし諸君、彼女は諸君が呼ばれたやうな名前を持つやうには定められてゐませんでした、彼女はその名譽を得なかつたのです。御承知のとほり、私が殆んどその家の息子のやうに見做されてゐたと、フェドセーイ・ニコラーイチが言つたのは本當でした。實際、六ケ月前ミハイロ・マクシムイチ・ドゥヴィガーイロフと呼ばれた或る休職

下士官の生きてゐた頃には、さうだつたのです。ところが彼は神樣の意志で死んでしまつたのです。彼は自分の事件を定めることを延ばしてゐる內に、死が彼に代つてその仕事を定めてくれたといふわけなのです。」

「おゝ！」

「いや、何でもないことです、諸君、許して下さい、言ひ損つたのですよ。それは惡い洒落です、だが、それが惡い位何でもないのです——もつと惡いことが起つたのです。その時私は、云はば、腦を打ちぬかれた彈丸のほかには何にも先見することが出來すにゐたのですね。何故ならその下士官は、あの家に私を容れたくなかつたのですが（彼は立派に暮してゐました、彼は如何にして自分の身上を作るべきかを知つてゐたのですから、）それでも、多分確かに私があの家の息子であると信じてゐたのでせう。」

「あゝ！」

「さうです、つまりさういふ譯だつたのです！　そこで彼等は、フェドセーイ・ニコラーイチの家で私に構ひつけなくなつたのです。私は色々のことに氣がつきましたが、靜かにしてゐました。ところが、出し抜けに私にとつては不幸にも（或ひは恐らくは幸福にも！）一人の騎兵士官が、頭から雪を被つてゐる我々の小さな町へ馬で駈け込んで來たのです。彼の仕事は

――軍隊のために馬を買ふといふ――騎兵式に輕々とまめに活動する仕事でしたが、彼はフェドセーイ・ニコラーイチの家にしつかりとしがみ著いてしまつたのです、まるで籠城でもしようとしてゐたやうに！　私は、見苦しいことをやるのはいつものことなのですが、廻りくどい遣方でその問題に近づいて行きました。私は色々のことを言ひました、自分はこんな風に取扱はれる程のことを何をしたかと訊ねたり、私は殆んど彼の息子のやうなのだと言つたり、さうして、私が彼の父のやうに振舞ふことを期待してゐるのに……それで、彼は私に答へ始めました。だが、彼が喋り始めるが最後、諸君は十二節から成る眞物（ほんもの）の叙事詩を逃れることは出來ないのです、諸君に爲すことの出來ることと云へば、耳を傾け、舌をなめづり、歡ばしげにその兩手を擧げるといふやうなことだけなのです。ところが、意味がとれないところではなくて、その中には少くも意味なるものが全く無いのです。諸君は馬鹿みた樣に途方に暮れてしまふでせう――彼は諸君を靄の中へ入れてしまふのです、彼は鰻の樣にのたくり廻つて諸君からもがき出てしまふでせう。それは特別な天賦の才なのです、本當の天才ですよ――自分のことには無關係でも、人々は全く脅かされてしまひますよ。私は色々の事をやつてみました、あつちへ行つたりこつちへ行つたりしてみました。私は女に歌を歌つてやつたり、お菓子を持つてつてやつたり、彼女に何か頓智のある事を言はうと考へたりなどしてゐたのです。私は溜息をついたり、唸つたりしてみました。『僕の心は痛むのです。』と私は言ひました。『戀のために痛むのです。』そして私は涙を流し始めたんです、つまり祕密の說明ですよ。人間は馬鹿なものですね……私は自分が三十だなんて事は思ひ出しもしませんでしたよ……まるつきり！　私は出來る丈けの技巧を弄してみました。ちつとも進みはしませんでした。それは失敗でした、私は嘲笑と侮辱より外には何も得られなかつたのです。私は腹を立てゝゐました。怒りから息詰まるやうでした。私は逃げ出しました、そしてもうこの家へは一歩も足を入れまいと思ひました。私は考へに考へた上で、彼を告發する決心をしました。だが、勿論、それは賤しいことでした……正直な所私は友達を賣らうとしてゐたのですから。私は材料を澤山持つてゐました、素晴しい材料を――大した例を握つてたのです。その材料及びその報告を繕更した時には旅行手形で千五百留になつたのですからな！」

「あゝ、それがあの賄賂だつたんですね！」

「さうです、諸君、それがあの賄賂だつたのです――で、收賄者はそれ丈け出さなければならなかつたのです――だが、私は惡いことはしなかつた、確かにですよ！　さア、今お話しします、若しも諸君が幸にも覺えておいでになるならば、生きてるといふよりも死んだ者のやうな具合で彼等の茶を飲んでゐた部屋へと、彼は私を連れて行きました。彼等は皆、云は

ば腹を立てゝゐたやうな様子で私に逢ひました、つまり、正確に云ふと立てゝゐたのではなく、たゞ心を痛めてゐたのですね――餘りに心を痛めてゐたので單に……彼等は打碎かれてゐたやうに見えた、全く打碎かれてゐたやうでした、そしてそれと同時にその顏には威嚴が表はれ始め、その表情には嚴肅さが見えてゐたのです、何だか父らしい、親らしいと云つたやうな、放蕩息子が歸つて來た時のやうな――そんな風になつたのです！　彼等は私をお茶に坐らせました、併しそんな事をする必要は全くなかつたのです。私は、胸の中ではサモヴァールが煮えたぎり、足は氷のやうだつた氣がしてゐました。私は卑しめられ、脅かされてゐたのです。彼の妻のマーリヤ・フォミニーシュナが、始めから親しさうに私に話しかけました。

「『お前さんはまア何でそんなに痩せたんでせうねえ？』

「『私は、具合がよくなかつたのですよ、マーリヤ・フォミニーシュナ。』と私は言ひました。私の憐れな聲は震へました。

「そして、今度は全く出し抜けに――彼女は私に突かゝらうとして機會を待つてゐたに違ひない――彼女はかう言ひました――

「『きつとお前さんの良心も具合がよくはないんでせう、オシープ・ミハイルイチ、ねえ！　私たちはそんなに深切にしてるのに、お前さんにはそれが恥だつたんだ！　私の流した涙に

はお前さんは罪があるんですよ。』

「『さうです、誓つて言ひますが、彼女はさう言つたのでした――彼女はさう言ふ丈けの良心を持つてゐたんです。だが、彼女にとつてはそれは何でもなかつたんです。彼女は恐ろしい女でした！　彼女は、其處に坐つてお茶を注ぐよりほかには何にもしませんでした。だが若しもお前が市場にゐるのだつたら、愛する女よ、魚賣りの女より大きな聲を出して呶鳴り散すんだらう、かう私は思ひました……彼女はそんな女だつたのです。それから、私の弱つたことには、あの娘が、マーリヤ・フェドセーヴナが、全く何も知らずにいくらか青さめた顏をして、泣いてゐたやうに赤い眼をしてはひつて來ました。私は、卽座に馬鹿者のやうにころりと參つてしまつたんです。尤も後で知つたことですが、その涙は騎兵士官のために流されたものだつたのです。彼は立退くことになつてゐたんです、全く逃げ出さうとしてゐたんです、何故なら、御承知のとほり、彼は出掛けなくてはならない時が來たのでした――私はその事實をもお話ししませう、彼の出掛けることはそれ程差し迫つてゐたといふのではなくて、さうではなくてですよ……兩親たちが、すべてのことを知り、何事が起つたかを見出した時はもう遲かつたのです……　彼等はどうすることが出來たでせう？　彼等はその困難を隱匿してしまつたんです――家庭内で！

「それはさうと、私はどうすることも出來ませんでした――彼女を一眼見るや否や私は全く參つてしまつたんです。私はこつそり帽子を探しました。立ち上つて行つて了ひたかつたんです。ところが、さうはいきませんでした。彼等は帽子を持つてつてしまつたんです……私は告白しなければなりませんが、帽子なんか無くても構はず出て行かうと思つたのです。『よし！』と私は考へました――だが、駄目です、彼等は扉に錠を下ろしてしまつたんです。馴しい冗談や、目まぜや、一寸した歌や、深切などが始まりました。私は困りきつてしまつて、何か下らないことを言つたり、戀愛に就いて馬鹿なことを話したりしました。私の魔女は、ピアノに坐つて、傷ついた感情から、剣に凭れてゐる驃騎兵の歌をうたひました――それが私を打挫いたのです！

「『よし、』とフェドセーイ・ニコラーイチが言ひました。『何もかも忘れてしまふさ、わしの腕に來給へ！』

「私は實際に感じてしまつたんです、彼の胴衣の上に顏を押し當てました。

「『私の恩人！　あなたは私の父です！』と私は言ひました。そして、熱い涙を床にこぼしました。神よ、我等を惠み給へ、何をすべきだつたでせう！　彼は泣きました、彼の善良な夫人も泣きました、マーシェンカも泣きました……亞麻色の髮の毛の女もゐましたが、それも泣

いてゐました……まだそれ丈けぢやないんです、もつと小さな子供があつちこつちから這ひ出して來てゐたのですが（神は洩れなく彼等を感動させたのです、）それらも矢張り喚いてゐました……この涙、この情熱、この歡喜！　彼等は放蕩息子を見出したのです、まるで兵隊が家庭へ歸つて來たかのやうでした。それから休息する事になつて、私たちはカルタを行りました。それで、『私には苦痛がある。』――『何處に？』――『胸に。』――『誰が與へたのか？』私の魔女は顏を赧くしました。老人と私とはポンスを飲みました――そいつが私を醉かせました、全く私を醉かせてしまひました。

「『頭がぐら〳〵しながら私は、お婆さんの處へ歸りました。途中でも私は絶えず笑つてゐました。まる二時間の間私は、自分の小さな部屋を步き廻つてゐました。私は年取つた婆さんを起して私の幸福を語つたのです。

「『でも、お金を寄越したんだね、あの盜賊が？』

『吳れたんだ、お婆さん、吳れたんだよ、ねえ――幸福が僕らにどつさり持つて來て吳れたんだ。僕等は唯だ手を開いてそれをとりさへすればいゝんだ。』

「私はソフロンを起しました。

「『ソフロン、』と私は言ひました。『僕の靴をとつてくれ。』

「ソフロンは私の靴を脫がせてくれました。

「『さア、ソフロン、僕を祝福してくれ、接吻してくれ！　僕は結婚しようとしてるんだ、ねえおい、僕は結婚しようとしてるんだよ。明日はお前も愉快に飲めるんだぜ、酒宴を開いてもいゝんだぜ、ねえおい――お前の主人は結婚するんだ。』

「私の心は戯れと笑ひとでいつぱいでしたが、何物かが再び私を起してしまひました。私は眠りかけたのですが、何物かが再び私を起してしまひました。私は坐つて考へに耽りました。明日は四月一日だ、陽氣な面白い日だ――俺はどうしたらいゝだらう？　さうして私は或る事を考へたのです。えゝ、諸君、私は寢床から出て蠟燭をつけて、書物机の處へ行つて坐つたのです、本當にさうしたのです。私は興奮して熱してゐて、全く夢中でした――ねえ、諸君、人が全く夢中になつてゐる時どんなでせう？　親しき人々よ、私は泥濘の中をのたくり廻るやうなことをするのでした。ねえ諸君、私はそんな風なのです。さういふ場合には諸君が何か取られたとしても、また諸君はそれとは異つた何かを與へて、『これも取り給へ。』と言ふでせう。諸君が頬を打たれゝば、喜んで諸君は背中をも向けるでせう。饅頭を見せられて犬のやうに呼ばれゝば、諸君はその愚かな前脚で抱いて、全靈全身を以て接吻しようとすることになるのです。いや、私が今爲しつゝあることを御覽なさい、諸君！　諸君は笑つて私語き合つてゐられる――解りますよ！　私がすべてをお話ししてしまつた後で諸君は、私を馬鹿にし始めるでせう、私を攻撃し始めるでせう、併しそれでも私は、話し續けます、話しつゞけます！　だが、誰が私に命じるのでせう？　誰が私にこんな話をさせるのでせう？　私の背後に立つてゐて、『言へ、言へ、それを話せ。』と私語くのでせう？　だが、しかし、私は話します、話しつゞけます。私は、諸君が私の兄弟ででもあるやうに、諸君を樂しませようとしてゐるのです、また最も親しい友達ででもあるやうに……えゝ！」

凡ゆる方向から次第に起つて來た笑ひは、興奮しきつて或る種の有頂天の狀態に達してゐるやうであつた話し手の聲を、遂に全く溺らしてしまつた。彼は話を罷めて、暫らくの間その眼は人々の上をさまよつてゐたが、やがて突然に旋風に運ばれたかのやうに、その手を振つて自分も大笑ひに笑ひ出した、恰も、實際に彼は自分の立場が面白くなつたかのやうであつた。それから再び話し始めた。

「諸君、私は一晩殆んど眠りませんでした。私は一晩書き通しました。ねえ、私は或る惡戲を考へついたのです。えゝ、諸君、その事を考へる丈けでも私は恥かしいのですよ。若しもそれが全く夜爲されただけだつたとしたら、大して惡いことにはならなかつたでせう――私は醉つてゐたのでせう、間違つてゐたのでせう、馬鹿だつたのでせう、そして下らないこと

を口走つてゐたのでせう……ところが單にそれ丈けではなかつたのです！　私は、朝、明るくなるが早いか眼を醒しました、一二時間とは眠らなかつたのです、そして同じことを考へてゐたのです。私は、著物を著、顏を洗ひ、髮をちゞらし、脂をつけ、新しい上衣を著て、それから、休日を過ごす爲めにフェドセーイ・ニコラーイチの處へ眞直に出掛けて行きました。而も私は、昨夜書いた冗談を帽子の中へ入れて持つて行つたのでした。彼は矢張り打とけて私に逢つて、矢張り父らしくその胴衣に顏を押しあてさへしました。しかし私は、えらさうな風をしてゐたのです。私は、前の晩に心の中で考へついた冗談を持つてゐたのですからね。私は一歩後へ退りました。

「『いや、フェドセーイ・ニコラーイチ、それはさうとこの手紙を呼んで頂けませんか。』そして私は、全くいつも報告をする時のやうにそれを渡しました。で、諸君にはその中に何が書いてあつたか解りますか？　えゝ、『斯く斯くの理由に依り、前述のオシープ・ミハイルイチは罷免さるゝことを懇願す。』といふのですよ、そしてその願書の下には私の身分までですつかり署したのです！　まア考へて御覽なさい、何といふ物を書いたのでせう！　神よ、それが私の考へつくことの出來た一番悧巧な事だつたのです！　今日は四月一日だからといふので、私は、冗談のために、自分が尚も怨んでゐた、夜になつて自分の心は變つて粗暴になつた、

そして自分は『わが恩人よ、あなたともあなたの令嬢とも交際ひたくはないのです。私は昨日金を衣嚢にいれましたが、そのまゝになつてゐます——引渡しに罷免されたいといふ願書が此處にあります。私は、フェドセーイ・ニコラーイチのやうな長官の下で役に就いてゐようとは思はないのです。私は違つた役所へ行きたいのです、そこで多分告發します。』とでも言ふやうに、それ程腹を立てゝゐたのだ——といふやうなそんな風をしてゐたのです。私は、本當のごろつきみたやうな風をしてゐましたし、私は彼等を脅してみたかつたのです。だが彼等を脅すといふ事はうまい遣方ではなかつたでせうか？　諸君、それは美しい事ではなかつたでせうか？　御承知の通り私の心は前日から彼等に對してやさしくなつてゐたのです、そこで、その家庭に對して一寸した冗談をしてやらうと思つたのです。

——フェドセーイ・ニコラーイチの父らしい心をからかつてみようと思つたのです。

「私の手紙をとつて、それを開くや否や、彼の顏色は全く變つたのを私は見てとりました。

「『これはどういふ譯なのですね、オシープ・ミハイルイチ？』

「そこで私は馬鹿みたやうなことを言ひました。

「『四月の一日ですよ！　この日には、多くの幸福が歸つて來るんですよ、フェドセーイ・ニコラーイチ！』お祖母さんの安樂椅子の蔭に隱れてゐて、お祖母さんを脅さうとして、出し抜

けにその耳許で、聲を限りに『ワーッ』と叫び出す馬鹿な子供とまるつきり同じ所作ですね。さうだ……さうです、全く私はそれを話すのが恥しいのです、諸君！　さうだ、もう話したくありません。」

「そんなことはない！　それからどうしたんです？」

「そんなことはない、そんなことはない！　話し給へ！　さア、話し給へ！」とあつちこつちから呶鳴つた。

「親愛なる諸君、叫喊でした、騒擾でしたよ！　恐ろしい驚愕の叫でした！　さうして、『何といふ惡者だ、何といふいたづら者だらう。』だが、私は何といふ恐れを彼等に與へたのでせう——そして、餘りうまくいつたので私は、恥かしくなり、又、こんな神聖な家庭が私のやうな罪深い者のために、如何に汚され得るのかと怪しんだ位でした。

「『ねえ、お前さん。』と母親が叫びました。『お前さんはまア何て脅したんだらうねえ、私はまだまるつきり震へてゐますよ、まるで足が立たないんですよ！　私は氣違ひのやうになつてマーシャの處へ駈けて行つたんですよ。——マーシェンカ、まア私達はどうなるんだらうね！　お前のお友達はまア何といふことを爲出來したんだらう！——つて、さう言つたんだよ。だが、私はお前さんにはつらくあたつてましたね、お前さん私のやうなお婆さんは許してくれなきやいけませんよ、私はもう籠絡されてしまひましたよ！　でね、私は考へたの、あの人は昨夜家へ歸つて、遲く歸つてから、考へ始めて、私たちが明日は態々迎へに來て、捕虜にしたがるだらう、とあの人はさう思つたのだ。私はそれを考へるとゾツとしましたよ！　よしておくれ、マーシェンカ、私を見ないふりするのはよしておくれ——オシープ・ミハイルイチは他人ぢやないんだからね！　私はお前の母だ、惡い事は言ひたかないよ！　有難い事に私は二十やそこらぢやないんだよ、四十五にもなるんだからね……さう考へたのですよ。』

「偖て、諸君、私は殆んど卽座に彼女の足許に倒れようとしました。再び、そこには涙があふりました。接吻がありました。冗談が始まりました。フェドセーイ・ニコラーイチも、矢張り皆に『四月馬鹿』をやらうと思つたのです。彼は我々に、火の鳥がそのダイアモンドの嘴に手紙を咬へて飛んで來た、と話しました。彼も矢張り我々をまるめ込まうとしたのです——我我が笑はなかつたでせうか？　我々が感動されなかつたでせうか？　チェツ！　そんなことを話すのは私は恥かしいのです。

「だが、良き友達よ、もう間もなくお終ひになります。一日、二日、三日と過ぎ、一週間過ぎました。私は本當に彼女と婚約してゐたのです。私はさう思はずにはゐられません！　結婚指輪も註文されました、日も極りました、たゞ彼等が當分の間公表したがらないだけでし

た——彼等は、檢察官の訪問がすむのを待つ氣でゐたのです。私は檢察官の來るのが堪らなく待ち遠でした——私の幸福はそこに懸つてゐたのですからね。早く來ればいゝのに、とそは〳〵してゐました。そして興奮と歡喜とからフェドセーイ・ニコラーイチは、凡ゆる仕事を——記錄を書いたり、報告書を作つたり、書物を對校したり、總體を計算したり——何もかも私に投げつけてしまひました。私は、事が恐ろしく捗れてゐることを知りました——すべてが閑却されてゐるのです、何處も彼處もごた〳〵で不整頓なのでした。そこで、私は考へました、義父の代りになつて全力を盡さなければならない！　と。而も、彼は毎日苦しんでゐました。病氣になつたやうなのです、彼はだん〳〵惡くなつてくやうに見えました。で、本當に、私までが熊手のやうに痩せてしまひました。自分も參つてしまやしないかと恐れました。しかし、私は立派に仕事をしおほせました。私は、彼の代りに、事を期間內にちやんとしてしまひました。

「ところが、突然彼等は私の處へ使ひを寄越しました。私は大急ぎで駈けて行きました——何事が起つたんでせう？　私は、フェドセーイ・ニコラーイチが、その頭に酢の壓抵繃帶を施して、顏をしかめ、溜息をつき、唸つてゐるのを見ました。

「『おい、わしの息子、』と彼は言ひました。『若しわしが死んだら、誰に君を任せたらよからう、ねえ？』

「彼の妻は、すべての子供たちと一緒に皆ぞろ〳〵連つて出て來ました、マーシェンカは泣いてゐました、私も泣き出しました。

「『おゝ、いや、』と彼は言ひました。『神は寬大だ、神はわしの罪を君の上に降すことはあるまい。』

「それから彼は、皆を追ひ出してしまつて、私に扉を閉めさせて、そして私たちは、二人きり差向ひになつたのです。

「『君にお願ひがあるのだよ。』

「『どんなお願ひです？』

「『ねえ、君、わしは臨終の床に居てもまるきりおち〳〵してゐられないのだ。わしは金が必要なのだ。』

「『何ですつて？』私は本當に眞赤になつてしまつて、口をきく事も出來なかつた位でした。

「『いや、わしは自分の金を國庫に拂はなければならんのだ。わしは公益のためには何にも惜しいとは思はない！　わしの生命をも惜しいとは思はない。惡く思つてくれるな。讒言者が君に向つてわしの名を汚したことを考へるとわしは悲しい……君は間違つてゐた、わし

の髪の毛は悲しみから眞白になつてしまつたのだ。檢察官は間もなく來るのだが、マトヴェーエフが七千留の不足させてゐるのだ、わしはそれを償はなければならんのだが……他に誰が居よう？　さういふことになるんだよ、わしの眼が屆かなかつたからぢやないか？　それにマトヴェーエフにどれ程出すことが出來よう？　あれはもう十分弱りきつてゐるんだ。どうしてあの可哀想な奴を零落させることが出來よう？』

『『聖人だ！』と私は考へました。『何といふ正しい人だらう！　何といふ心根だらう！』

『『それにわしは娘の金はとりたくないのだ。あれは持參金としてとけてあるのだ、神聖な金だ。わしには自分の金もあることはある。それは事實だが、皆友人に貸してある——一寸の間にそれを皆集めることが誰に出來るだらう？』

『私は彼の前に跪いただけでした。『私の恩人！』と私は叫びました。『私はあなたに惡いことをしました、あなたを傷つけました、あなたのことを書いたのは讒言者でした、私の心臟を掻きむしらないで下さい、あなたのお金をおとりなさい！』

「彼は私を見て、眼に淚を浮べました。『實はわしはさう君の通りに考へてゐたのだよ、わしの息子。お立ち！　わしは娘の淚のためにあの時の君を許さう——もうわしの心は勝手に君を許してゐる！　君はわしの傷手を癒してくれた。わしは終生君を祝福する！』

「そこで、彼が私を祝福した時、諸君、私は出來るだけ大急ぎで家へとつて返して金を持つて來ました。

「『さア、お父さん、これがあのお金です。私は五十留貰つた許りです。』

「『いや、結構だ。』と彼は言ひました。『だが今はつまらない事まで數へ上げられるだらうからね、時は迫つてゐるのだ、數日前の日附にして報告を書いてくれ——君が金が足りないでその爲めに五十留とつたと。君は前から持つてゐたのだ、とわしは役所へ言ふからね。』

「ところで諸君、どう思ひますか？　私はその報告まで書いてしまつたのです！」

「で、それからどうしました？　どうなりましたね？」

「私が報告を書くや否や、諸君、かういふ事になつたのです。翌日の朝早く、役所の封印のされた封筒が來ました。私はそれを見ました、そして私はどうなつたでせう？　免職です！つまり、私の仕事を引渡して、帳簿を交附して——さうして私は勝手にしろといふ辭令なのです！」

「何だつて？」

「その時私が聲を限りに叫んだのも、その『何だつて！』でしたよ。諸君、私は耳鳴りがしてゐました。それには何にも特殊な理由はないと私は考へました——が、否、檢察官がその

町へやつて來たのです。私は氣が沈みました。『何でも無いことはないぞ。』と私は考へました。そして本當に私はフェドセーイ・ニコラーイチの處へ飛んで行つたのです。

『これはどうしたんです？』と私は言ひました。

『何がどうしたのさ？』と彼は言ふのでした。

『だつて、私は免職になつたのです。』

『免職だつて？　どうして？』

『でも、これを見て下さい！』

『成程、それがどうしたのだね？』

『だが、私はこんなことを賴みもどうもしなかつたんですがねー』

『いや、君は賴んだよ——四月の……一日に君は書類を送つたぢやないか。』（私はあの手紙をとり戻しては置かなかつたのでした！）

『フェドセーイ・ニコラーイチ！　私は自分の耳が信じられません、自分の眼が信じられません！　これはあなたのですか？』

『わしだよ、何故ね？』

『おゝ、何といふことだ？』

『氣の毒だね、君。君がそんなに若いうちから退職する決心をしたことをわしは氣の毒に思ひますよ。若い人は役所に居なければならないのだ、だが君は此頃になつて少し氣輕になつて來たやうだね。だが、君の證明書のことでは安心したまへ。わしはその世話をしてあげますよ！　君の態度はいつも模範的だつたねえ！』

『だが、あれは一寸した冗談だつたんですよ、フェドセーイ・ニコラーイチ！　私はそんなつもりぢやなかつたんですよ、あの手紙はあなたに上げただけなんですよ、あなたの父らしい……それ丈けなんですよ。』

『それ丈けだつて？　變な冗談だねえ、君！　人は冗談にあんな重大なことが書けるだらうか？　すると君は冗談でシベリアへ送られるやうなことになるぜ。さア、さよなら。わしは忙しいのだ。檢察官が來てゐるんだ——何をおいても役所の仕事といふ譯だよ。君が死んでしまつたつて、わしらは此處で仕事をしなければならないのだ。しかし、證明書は貰つて上げますよ——あゝさうさう、わしはね、マトヴェーエフから家を買つたのだよ、一日二日のうちにわし達は引越さうと思つてゐるのさ。そこで、わし達の新しい隱家へは、見には來て貰ひたくないものだと思つてるのさ。御機嫌よう！』

「私は家へ飛んで歸りました。

「『失錯つたよ、お婆さん！』

「お婆さんは、可哀想な愛するお婆さんは泣き出しました、すると、フェドセーイ・ニコラーイチの處から給仕が紙片に書いたものと鳥籠とを持つて駈けて來ました、そして籠の中には椋鳥がはひつてゐたんです。その椋鳥は、以前私が感激を以て彼女に與へたものでした。紙片には、たゞ『四月一日』とあつた許りでした。さア、これをどう思ひますか、諸君？」

「それからどうしました？　それから？」

「それからどうしたでせう！　私は、一ぺんフェドセーイ・ニコラーイチに會つたことがありましたが、面と向つて彼は惡者だと言つてやりたかつたんですが。」

「それで？」

「ところがどういふ譯だか、さう言ひ出す氣になりませんでしたよ、諸君。」

小英雄

その當時、私はやつと十一であつたが、Tと呼ばれた私の親戚の家のあるモスクヴに近い或る村へ、休暇を過す爲めに遣られた、その家にはいつぱい客が來てゐた、五十人か、或はもつと澤山……私は憶えてゐない、數へきれなかつたのである。家の中は大騷動で賑やかだつた。恰も、全く際てしなく續いてゐる祭日のやうであつた。恰も、そこの主人がその莫大な全財産を、出來る丈け速かに浪費することを誓ひでもしたかのやうであつた、そして、彼は實際近頃この推測を本當にするやうなことを、卽ち、それを悉く、棒切一本あまさずに掃滅してしまふやうなことをつゞいてなした。

新しい客が、いつも絶えず馬車を驅つて來るのであつた。モスクヴが眼と鼻の先きだつたので、立ち去る人々は、單に他の者のために餘地を作るだけのことであつた、そして涯てしなき祭日はちやんと續いてゐた。お祭りは次ぎから次ぎへと續いて、宴會はいつまで經つても終らなかつた。家の周圍には馬に乘つてゐる一隊があり、森や河へは回遊に出掛ける者があり、戸外では野遊びが始まつて辨當を擴げ、屋内の大きなテレースでは晩餐が始まるといふやうな譯である。その家内といへば、新鮮な夜氣の中へその花香を漂はしてゐる華かな草花が三列に取圍んでゐるし、輝かしい光は、キラ〳〵と反映して、誰もかもが殆んど同時に皆美しい我々の婦人連を、なほ一層綺麗に見せてゐる。彼等の顏は晝間の印象によつて興奮し、その眼は不思議な話の交換によつて閃き、鈴を振るやうな笑ひ聲は響き渡り、踊り、奏で、歌つてゐる。若しも空が曇つてゐれば、活人畫やシャレードやプロヴーブなどが取極められ（譯者曰——謎々の如き遊戲の一種。）私演劇が始まつたりするのであつた。そこには、うまい饒舌（しやべり）が居り、お話しをする人が居り、おどけ者が居た。

そのそばにはまた、或る人々が目立つてゐた。勿論、蔭口や惡口は盛んに出た、それが無くては世界は續くことが出來まい、數千の人々が、退屈から蠅の如くに死ぬであらうから。けれども、私はその時十一であつたので、甚だ違つた面白さに心を奪はれてゐた。そして、これらの人々を碌に見もしなかつたし、又何か見たにしても、それをすつかり見はしなかつた。唯だ、色々のことが、後で私の心に想ひ出されたのであつた。私の子供らしい眼はその光景の華かな方面を見ることが出來た許りであつた、及び、一般の活潑なこと、華美なこと、騷がしいこと——そのすべては、初めて見、初めて聞いたものであつて、最初の數日の間私は全く混亂してしまひ、私の小さな頭は渦の中にはひつてゐるやうであつた程の、こんな印象を私に與へたのであつた。

私は、いつまでも自分の年齡のことを言ふ。そして勿論私は、子供であつた、子供以上の何物でもなかつた。多くのこの愛らしい婦人たちは、私の年齡を考へようともしずに私を甘

やかした。しかし、不思議にも自分では理解することの出來ない或る感覺が、既に私にはあつた。その時までは何も知らなかつた、そして何とも考へなかつた或物が、既に私の心に私語いてゐるのであつた。そしてそれは何かの理由で直樣、燃え上り、動悸がし、そして屢々私の顏は突然眞赤になるといふやうなことがあつた。時とすると私は、云はば羞らひを感じた、そして、私の子供としての時代の色々な特權を怨みさへした。又或る時には或る程の驚異が私を壓服した、さうして私は、息をついたり或事を思ひ出したりするためでもあるやうに、見えない處に坐つてゐることの出來る隅つこへはひり込んでしまふのであつた——その或事は、その時までは全く記憶されてゐたのであるが、その時突然忘れられてしまつたかのやうに私には思はれ、その或事なしには私は、何處にもゐるところが無かつたやうな、全く存在出來なかつたやうな氣がするのであつた。

たうとう私は、何かをすべての人に隱してゐるやうな氣がして來た。けれども、何物も私をしてそれを誰かに話させようとするものはなかつた、何故ならば、私のやうな小さな子供が、その私が恥かしさで泣きさうなのであつた。間もなく、私を取圍んでゐた騷がしさのさ中に於いて私は、或る淋しさを意識したのであつた。そこには他にも子供たちはゐたが彼等は皆私より年とつてもゐなければ年下でもなかつた。それだのに私は、彼等には氣に入られなかつた。勿論、私が若しか例外の立場にゐなかつたのだとしたら、私には何事もなかつたのであらう。かの愛らしい婦人達の眼には、私はまだ、彼等が甘やかしたがつてゐた、そして人形のやうに弄ぶことの出來た、小さな出來上つてゐない生物だつたのである。特に彼等の內の一人は、私がかつて見たこともない、そして恐らくは再び見ることもあるまいと思はれるやうな、非常に濃いふさ〳〵した髮の毛を持つた、魅惑的な美しい女であつたが、彼女は、どうしても私をそのまゝに放つては置かないと誓ひでもしたやうであつた。私は困りきつてゐたが、彼女は私に亂暴なおてんばな惡戲をして、その度に我々の周圍で絶えず起つた笑ひ聲を面白がつてゐた、そしてそれは明かに彼女に非常な歡びを與へたのであつた。學校友達の間では、彼女は、きつといたづら者といふ諢名をとつてゐたのであらう。彼女は、實に樣子がよかつた、そして誰でも最切から惹きつけられるその美しさのうちには何物かがあつた。さうして、確かに彼女は、普通の內氣な餘り美しくない娘、むく毛のやうな白さの、白鼠のやうな柔かい、又は牧羊者の娘などと共通したものは何にも持つてゐなかつた。彼女は脊は高くない方で、やゝ肥つてゐたが、柔かでデリケートで甚だ美しく磨きをかけた顏であつた。彼女の顏の中には、何だか電光のやうにすばやいものがあつた、そして實際彼女は全く火のやうに輕くて速くていき〳〵してゐた。彼女の大きな見開かれた眼は、キラ〳〵と閃

くやうに思はれた、ダイヤモンドのやうに光つてゐた、さうして私は、このやうな青く輝いた眼を、如何なる黒い眼とも決して交換しなかつたであらう、それはアンダルシアの珠よりも黒かつたとしても。而も實際、私のブロンドは、偉大にして且つ有名なる或る詩人によつて歌ひはやされた有名なブランネットに對しても十分遜色なきものであつた、彼(詩人)は或る立派なる詩の中で、彼の指先を以てその神性の外部に觸れる爲めでさへあるならば、骨をけづるとも可なりといふことを凡ゆるカスティールによつて誓つた人である。これに加ふるに、その私の魅惑者は、世界で最も樂しげな女で、最も亂暴な微笑者で、子供のやうに遊びすきであつた、とはいへ彼女は結婚してから既に五年にもなるのであつた。彼女の脣には笑ひが絶えたことはなく、朝の薔薇の如く太陽の最初の光線の如く、フレッシュで、その香氣高い眞紅の蕾は、なほも冷たい露滴がその上に垂れ下つてゐるまゝで花を開くかとも思はれる。

私は、私がそこへ著いた翌日素人芝居が演ぜられたことを憶えてゐる。應接間は、彼等の言葉のとほり、溢れるやうにいつぱいであつた、空席は一つもなかつた、その時私はどうしたのか遲れて行つたので、この演藝をば立つてゐて樂しまなければならなかつた。けれども、その芝居が大變面白いので、だん〳〵前へ前へと出て行く程惹きつけられた、そして私は無意識に一番前まで出て行つてしまつた。そこで私はたうとう或る安樂椅子の背に肘を凭せて

立つてゐた。その安樂椅子には一人の婦人が腰かけてゐた。それが、私の神聖なるブロンドであつたが、私たちはまだ近づきになつてはゐなかつた。さうして私は、ふと彼女の肥つたミルクのやうに白い驚くべき魅力ある肩を見詰めてゐたのか、又はすぐ前の列にゐた貴婦人の房々した灰色の毛で掩はれた、輝くリボンのついてゐる帽を見てゐたのか、そんなことは私にとつて問題ではなかつた。或る婦人たちは、私が後になつてふと見た時、よそ〳〵しい若い男を好まないといふやうな見識の高い若く美しい婦人連のすぐそばへいつも逃げ込んでゐるのであつたが、さういふ種類の婦人の一人である老孃とでもいふべき婦人が、私の神聖なるブロンドのそばに腰かけてゐた。だが、そんなことはどうでもいゝので、唯だこの婦人が、私のぢつと見てゐることに氣がついて、その隣りにゐる彼女の方へ身を屈めて、作り笑ひをしながらその耳へ何か私語いたのであつた。ブロンドの婦人は忽ちに振り向いた、そして私は彼女の輝くやうな眼が、その半ば暗闇の中から、私が見られたく思はなかつた程、そして火傷(やけど)をしたやうにぴつくりした程ピカ〳〵と私の上に光つたことを憶えてゐる。美しい人は微笑しないたづらな表情をして私の顏を覗き込みながら訊ねた。

「あゝいふお芝居、お好きなの?」と彼女は臆病な

「えゝ。」私は、まだ何か怪しむやうに彼女を見詰めたまゝ答へた、その怪しみがひどく彼女を喜ばしたのであつた。

「でも、どうして立つてゐるの？　草臥れるでしよ。坐るとこが無いの？」

「本當にさうなんです、無いんです。」と私は答へた、美しい人の閃く眼に氣を取られてといふよりは、自分の席の無い難儀の方に氣を取られて、そして、私が自分のこの苦しみを打明けて話すことの出來る深切な人を見出したことを非常に喜んでゐるのであつた。「私どこもかも見たの。でも椅子はみんな塞がつてるんです。」と私は附け加へたが、まるですべての椅子の塞つてゐた爲めに彼女に對して不平を言つてゐるかのやうだつた。

「此處へいらつしやい、」彼女は、そのおてんばな頭に閃いた凡ゆる決斷に從つて、そして實際凡ゆる氣違ひじみた考へに從つて行動しようとして急いで活潑にさう言つた。「此處へ來て、私の膝にお坐りなさいな。」

「貴女の膝に？」と私は、びつくりして繰返した。私は、子供としての特權を怨み始め、本氣になつてそれを恥ぢ始めてゐたことを、既に語つた。嘲弄してゐるやうな此の婦人はいつでも、他の人々よりはずつと遙かに進んでゐた。それに私は、いつでも臆病な羞かしがりの子供であつたし、且つその頃には女を特に羞かしがり出してゐたのであつた。

「えゝ。さうよ、私の膝へね。どうして私の膝へは坐りたくないの？」彼女は、だん〳〵笑ひ出し乍ら言ひ張つた、そして終ひには彼女は何かをくつ〳〵と笑つてゐる許りであつた。何をだか知らないが、多分彼女の氣まぐれをか、それとも私の困りきつてゐるのを笑つたのであらう。しかし、彼女はそれを欲してゐたのであつた。

私は赤くなつた、そして困感して何處へか逃げ出さうとして見廻したが、彼女は、私の考へを見抜くと、逃げさせまいとして私の手を摑まへてしまつた、そして、出し抜けに、全く思ひがけなく、（私はひどくびつくりしたが、）彼女の方へ引寄せて、そのいたづらな暖い指の間に挿んで、私が一生懸命になつて聲を出すまいとしなければならなかつた程、そして一生懸命に自分を制へる爲めに、最も可笑しな顰め面をした程ひどく傷になつた位に私の指を抓り始めたのであつた。而も私は、何の理由もなしに、公衆の面前で、男の子に馬鹿なことを言つたり、その指を抓りさへする譯の分らない惡い婦人がゐるといふことを發見すると、非常に驚き、困惑し、恐怖をさへ感じた。不幸にも恐らく私の顏には、困惑が現れたのであらう、いたづらな人は私の顏を見ると氣違ひのやうになつて笑つて、その間にも尙ほ強く強く私の指を抓つてゐた。彼女はこんな惡いいたづらをして、憐れな子供を全く茫然とさせ、困らせて非常に喜んでゐるのであつた。私の立場は絶望的なものであつた。第一に私は、恥かしさ

で熱くなつてゐた。それといふのも、その近所にゐた殆んどすべての人々が振向いて私たちの方を見て、例の美しい人が何かいたづらを始めてゐたといふことを知つて、或者は不思議さうな顏をし、或者は笑つてゐたから。私はそれでもひどく叫び出したいのであつた、何故なら彼女が全く氣違ひのやうになつて私の指をねぢるといふのは、私が叫び出さないからであるに他ならなかつたのだから。然るに私は、スパルタ人のやうに、その苦痛を忍ぶ決心をした、私が叫び出すことによつて、現に起つてゐるより以上の騒ぎが始まることを恐れたからであつた。全く駄目なので私は、全力を出して手を引かうとして、遂に彼女と爭闘し始めた。けれども私の迫害者は、私よりもずつと強かつた。たうとう私は、どうしても忍びきれなくなつて叫び聲を發してしまつた——彼女が待つてゐたのはそれであつた！　すぐに彼女は、私を放して、まるで何事もなかつたかのやうに、そんないたづらをしてゐたのは彼女ではなく誰か他の人でもあるかのやうに、向うを向いてしまつた。それは丁度學校の生徒が、先生の後を向くや否や自分の近所の者にいたづらをし、小さい弱い子供を抓つたり、打つたり、蹴つたり、肘で衝いたりして、それからすぐ再び向うを向いてしまつて、書物に身を埋め、學課を繰返し始め、そして騒ぎを聞きつけて驚のやうに飛んで來る怒つてゐる先生を馬鹿にしてゐる……それと非常によく似てゐた。

けれども、私にとつて幸ひだつたことには、一般の注意は、その時演つてゐたスクライブの喜劇の中で主要な役をしてゐた、その家の主人の巧妙な演技によつて、その時は奪はれてしまつたのであつた。誰もかも賞讃し始めた。その騒ぎにまぎれて私は、こつそりと部屋のずつと隅の方へ急いで行つて、其處から私は人の並んでゐる間に隱れて、殘酷な美しい人の坐つてゐた場所の方を恐々見てゐた。彼女は、そのハンケチを脣に當てゝ、まだ笑つてゐた。そして、長い間彼女は絶えず振向いて凡ゆる方面に私を探してゐた、多分私たちの愚かな立廻りが餘りに早く終つてしまつたことを殘念に思つて、私に向つて何かまた他のいたづらを謀らうとしてゐたのであらう。

それが、私たちの知り合ひになつた始めであつた。そして、その晩以來彼女は、決して私を逃がさなかつた。彼女は、考へもなく良心もなく、私を迫害した、彼女は私の暴君になり、苛責者となつた。私に對する彼女の冗談の最も不都合なことは、彼女が首つたけといふ程に私に溺れてゐたやうな風をし、すべての人の前で私をいぢめるといふ事實であつた。勿論、私のやうな野蠻な者にとつては、このすべては、殆んど泣き出しさうになつた程うるさい困ることであつた、それで私は時とすると、この私の殘忍な賞讃者と闘はうとしてゐたやうな異つた立場に置かれることもあつた。私の子供らしい混亂、私の絶望的な不幸が、尙ほのこ

と私を迫害すべく彼女を勵ますらしかつた、私がどうして彼女から逃るべきか解らないでゐるのに、彼女は全く無慈悲であつた。私たちにいつも從つて起る笑ひを、どうすれば惹き起すことが出來るかを彼女はよく知つてゐたので、その爲めにまたも新しい惡戲をする氣になるのであつた。けれども終ひには、人々は彼女の惡戲が過ぎたと思ふやうになつた。さうして、實際、今でも憶えてゐるが、彼女は私のやうな子供に不埒な戲れをしたのであつた。

尤もそれが彼女の性格なのであつた。彼女は凡ゆる點に於いて、汚れてゐる子供であつた私は後で聞いたのであるが、彼女の夫は、大變肥つた、大變赤い顏をした、大變金持の、そして大變忙しさうに見える人で、誰よりも彼女を汚したのださうである。彼は、いつも忙しく駈け廻つてゐて、一つ處に二時間とはぢつとしてゐられなかつた。毎日モスクヴへ馬車を驅つた、ことによると一日に二度行くこともあつた、そしていつでも、彼自身言つてゐたことだが、川があつた。滑稽な併しいつも上品な顏附をしてゐる彼よりも、もつと生々した、もつと人の好い顏を見出すことは困難であつたらう。彼は、その妻を弱いといはれる程柔和といはれる程に愛してゐたばかりか、偶像のやうに彼女を崇拜してさへゐたのであつた。

彼は、何事でも彼女を制へることはしなかつた。彼女は、非常に多くの友だちを持つてゐた、男性のも女性のも。第一に、彼女を好まない人は殆んど一人もなかつた、そして第二にはこのおてんば女は、自分では友だちを選ぶことにひどく氣むづかしいやうなことはなかつた、尤も彼女の性格には、私が此處で言つてゐる事から想像されるよりももつと眞面目なものが多く根を据ゑてはゐたのだが。しかし、凡ゆる友だちのうちで彼女は、今矢張り我々の仲間に加はつてゐた遠い親戚の若い婦人を最も愛してゐた。彼等二人の間には、或るやさしい微妙な愛情が存在してゐたが、それは互ひに甚だ反對なものとして屢々現れた二つの氣質が全く相會ふところから時とすると生ずる結び附きの一つなのであつた、一方はより深い、より純潔な、より嚴肅なものであつたが、他方は、高尚な謙遜と寬大なる自己批判とを以て、他の者に快く道を讓ることで、友だちの勝れてゐることを意識することで、且つその友誼を幸福として慈しむことなのであつた。そこでかういふことになるのである——かゝる性格に關するやさしい高尚な微妙さは、一方に於いては愛であり無限の宥恕であり、他方に於いては、愛と尊敬——畏敬に近い尊敬、非常に高く評價されてゐる友だちの上にどういふ印象を與へるかといふ憂慮にも近い尊敬であり、且つ此世に於いて一歩々々その友の心に次第次第に近寄らうとする熱心なそして嫉妬ある欲望である。

此の二人の友だちは、同年であつたが、凡ゆる事のうちに——第一には容貌に於いて、二

人の間には著しい差異があつた。M夫人は、矢張り甚だ立派であつたが、彼女の美しさのうちには、多くの綺麗な婦人と著しく異つてゐる或る特殊なものがあつた、彼女の顔には何ものかがあつた、それは忽ちにすべての人を惹きつける、といふよりは、彼女に逢ふ凡ゆる人々に寛大な高尚な好意の感情を惹き起す、といふやうな具合であつた。さういふ幸福な顔であつた。彼女のそばにゐると誰でも、云はば善くなり、自由になり、深切になつた。とはいへ、彼女の熱情と勇氣とに充ちた大きな眼は悲しげで、臆病で、心配さうに見えた、恰も絶えず何か敵對せる毒惡なものを恐れてゐるとでもいふやうに。そして、此の臆病さは時とすると一目見ると人は自分自身の苦しみを見るやうに悲しくなるといふ伊太利のマドンナの、靜かな顏を連想させる柔かいやさしい容貌の上に、哀傷に充ちた影を投げるのである。その蒼白い細面の中には、純潔な正しい線と、或る默々としした隱された悲しみに充ちた峻嚴さとの近寄り難い美しさの中に、信實なる時代を語る幼い頃の清淨な面影と、多分最近の單純な心の幸福、やさしいが遠慮勝ちなためらふやうな微笑とが屢々表はれ、そのすべてが、彼女に對する不思議な同情——すべての人の心が、遠いところにあるものでも、彼女の態度で力强く宥められた快い暖かい憂慮のために無意識に動かされ、知らない人をも彼女に對して親しく感じさせるやうな——を惹き起すのであつた。しかし、この愛らしい人は、沈默勝で遠慮深

いやうであつたが、それでももし誰かが同情を必要としてゐるならば、それに對して彼女より注意深く快くすることの出來る者は誰もなかつた。此世には、仁慈の姉妹のやうな婦人がある。彼等からは、何物も、少くとも、その心を痛めてゐる、又は傷ついてゐる何物も隱されることは出來ない。苦しむ人は、勇敢に、希望を以て、重荷となることを恐れることなしに彼等のところへ行くであらう。何故ならば、少數の人々は、或る婦人の心の內には無限の忍耐深い愛と、同情と、許しとが見出されることを知つてゐるから。同情、慰藉及び希望の眞實の寶は、かくの如き純潔な心の中に貯へられてゐるのである、それは屢々彼等自身の苦しみに充たされてゐる——何故ならば、多く愛する心は多く悲しむものである——けれどもその傷は穿鑿者の眼からは注意深く隱されてゐる、何故なら深き悲しみは、大抵寡默にして且つ覆はれてゐるものであるから。彼等は、その傷手の深さに脅されてはゐない、その不潔にも、その惡臭にも脅されてはゐないのだ。彼等の處へ來る者は、誰でも助けを受けるに足るのである、彼等は、云はば、英雄主義（ヒロイズム）のために生れたのである……。M夫人は脅が高くしなやかで優美であつたが、やゝ瘠せてゐた。凡ゆる彼女の運動は、何だか不規則なやうで、時とすると遲く、穩やかで、そして威嚴も備つてゐたが、或る時は子供らしいあわただしいこともあつた、がしかしそれと同時に彼女の身振りには、或る震へてゐる賴りないやう

な、一種の臆病な謙遜があつた、しかしそれは何物をも望んでゐるのでは無く、又、保護を求めてゐるのでもなかつた。

殘忍なる美しい婦人の亂暴ないたづらが、私を困らせ、私を驚かし、そして私の急所を傷つけたことを既に私は書いた。けれどもそこには、私が隱してゐた他の祕密な奇妙なそして愚かな理由があつた、それを思ふと私は、骸骨を見た時のやうに震へ上るのであつた。それを一寸でも考へ出したが最後、私は物思ひに沈み、全く孤獨になり、そしてぐつたりしてしまつて、碧眼のいたづら者の探るやうな嘲弄的な眼も屆くことの出來ない、或る薄暗い、神祕な隅つこへはひつて、混亂と恥かしさと恐れに殆んど喘いでゐるのであつた——一口にいへば私は戀をしてゐた。それは多分出鱈目なものだつたのであらう、そんなことは殆んど有り得ないことだつたであらう。しかし、私の周圍に見える凡ゆる顏の中で、彼女の顏だけが私の注意を惹いたといふのは、それは何故だつたのであらう？　其時分私は婦人に注意したり、彼等の知己になりたいなどと望んだことは全くなかつたのだが、私が眼でその跡を追はうとしたのは彼女だけだつたといふのは何故だつたのだらう？　これは、私たちが天氣が惡くて皆屋內にはひつてゐた時と、私が大きな應接間の或る隅つこに隱れて淋しく譯もなく自分を凝視し、何にもすることを見出せないでゐる時、さういふ夕方に特に屢々起つた。何故なら

ば、私をいぢめる婦人のほかには殆んど私に話しかける人々は無いのであつた。それにさういふ夕方には私は堪らなく退屈なのだつたから。さういふ場合、私は周圍に居る人々を見詰めてその話しに耳を傾けてゐたが、一語も解らないやうなことがよくあつた。そして、其時M夫人の柔かい眼と優しい微笑と愛らしい顏とが、(彼女が私の情熱の對象なのだつたから)どうしてか、私の注意を全く奪ふのであつた、そして不思議な、ぼんやりした、しかし言ふに言はれぬ甘い印象が私には殘るのであつた。度々私は、數時間も彼女のそばから離れることが出來ないことがあつた。私は、彼女が爲した一擧一動に注意し、彼女の豐富な銀のやうなしかしやゝ含んだやうな聲の凡ゆる顫動に耳を傾けた。けれども、不思議にも、私の凡ゆる觀察の結果、私は、甘い羞かしい印象と共に、はげしい奇異な感情を感じたのであつた。恰も私は何か神祕な事柄の中にゐたかのやうであつた。

M夫人の前で愚弄されるよりも一層私を不幸にすることは、何にも無かつた。この愚弄と諷刺的な迫害とは、考へただけでも、私を辱かしめた。さうして、私のために多くの人々が笑ひ出し、その中に夫人も加はらないではゐられないやうな場合には、絶望しきつて、不幸から氣違ひのやうになつて、私は迫害者から身を離して二階へ駈け上り、その日はずつと應接間へは顏を出さないで、其處に淋しく留つてゐるのだつた。けれども、私は自分の恥かしさ

や困惑やが解らないのであつた、それらの事は無意識に私の內に進行してゐるのであつた。
私は殆んどM夫人に二語とは話しかけることが出來なかつた、そして實はさうしようとしな
かつたのであらう。けれども、或る晩、その日は堪らない日だつたが、私は他の仲間の人々
と一緒に行つた遠足から歸つて來た。私は恐ろしく疲れてゐたので、庭を横ぎつて家の方へ
行つた。或る人眼につかない並樹道の處に坐つてゐるM夫人を私は見た。彼女は、恰も故意
とこの淋しい場所を選んだやうに、全く獨りで、頭を垂れて、坐つてゐた、そして、器械的
にハンケチをいぢくつてゐた。彼女は、私がそのそばへ寄つて行くまで聞えないでゐた程、
茫然として考へてゐたのであつた。

私に氣がつくと彼女は、急いで立ち上つて向うを向いたが、私は彼女がそのハンケチで眼
を急いで拭いてゐたのを見た。彼女は泣いてゐたのであつた。眼を乾かしてから彼女は、私
に微笑して、私と一緒に家の方へ歩み戻つて行つた。私たちはどんなことを話したか憶えて
ゐない。しかし彼女は、花をとつて來てくれとか、隣りの並樹道に馬で來たのは誰だか見て
來てくれとか、色々な口實で度々私に使ひをさせた。さうして、私が彼女のそばを離れると
すぐ彼女は、再びその眼にハンケチを當てゝ、制へきれない淚を拭いてゐたのであるが、そ
れはあとからあとからと彼女の胸から浮び上り、彼女の可哀想な眼から落ちるのであつた。

私は、彼女がそれ程屢々私に使ひをさせたのは、私が邪魔だつたのだといふことを知つた。
そして、本當に彼女は、私が全くそれに氣が附いてゐたことを自分でも知つてゐた。しかし
それでも彼女は、自分を制へることが出來なかつた、そしてそのことがまた彼女のために尙
更私の心を痛ましめたのであつた。私は、其瞬間には自分自身を憤り、殆んど絶望し、拙劣
なそして智慧のない自分自身を呪ひ、そして同時に、どうしたら彼女の不幸に氣がついたこ
とを見せないで、旨く彼女のそばを離れることが出來るか解らないのであつた。さうして
悲しみに充ちた混亂狀態に在つた、殆んど恐慌の狀態に在つた彼女のそばを、全く途方に暮
れて、その途切れ途切れの會話を保つやうな一語をも發見することが出來ないでたゞ歩いて
ゐた。

此の會合が私にそんな印象を與へたので、私はその晩中、こつそりと、熱心な好奇心を以
てM夫人を注意し、決して彼女から眼を離さなかつた。ところが、思ひもよらず、彼女を注
視してゐる私を彼女は二度までも捉へたのであつた、そして二度目の時は私に氣をつけて、
微笑して見せた。彼女のその微笑は、其晩中でのたつた一度の微笑であつた。悲しみの影は、
其時には大變青くなつてゐた彼女の顏を去つたことはなかつた。彼女は、その晩中、或る性
質の惡い、喧嘩好きの老婦人と話して過した。その老婦人は、人のことを探つたり、蔭口を

きいたりするので誰にも好かれてゐなかつた、しかし誰からも恐れられてゐた。さうしてその結果、誰でも彼女には丁寧にしないではゐられないやうな氣がしてゐた。

十時に、M夫人の夫がやつて來た。その時まで私は、非常に注意深く彼女を見戍り、決して彼女のその悲しみに充ちた顏から眼を放さなかつた。今、思ひがけなく彼女の夫がはひつて來たのを見ると、彼女はびつくりし、その蒼白い顏は忽ちハンケチのやうに眞白になつたことを私は見た。それは、他の人達もさう言つてゐた程目に立つた。私は、斷片的な會話を洩れ聞いたところから推すと、M夫人は餘り幸福ではないのであつた。人々は、彼女の夫はアラビア人のやうに嫉妬深くて、それも愛からではなく虛榮心からだと言つてゐた。彼は、先づ第一に、最新の思想の模範を示し、それを以て、自ら誇つてゐる歐羅巴人、近代人であつた。外見に於いては、彼は眷の高い、眞黑な髮のもの、特に頑丈な男で、歐羅巴風の頰鬚を生やし、自ら滿足せる赭ら顏を持ち、砂糖のやうに白い齒を持ち、そして近づき難い紳士風な態度を持つてゐた。彼は、悧巧者と呼ばれてゐた。或る特殊な人種に對しては、或る社會ではこんな名前が與へられてゐるのである。さういふ人間は、他の人々に迷惑をかけても自分は肥り、全く何にもしないのである、又何かしようといふ欲望も持たない、そしてさういふ人間の心は、無限の懶惰と怠慢とから脂肪の塊となつてしまつてゐるのだ。「彼等の天

才を妨げる」或る甚だ錯雜せる、且つ敵意ある事態のためには、彼等は何にも爲すことが出來ない、そして、「彼等の才能の浪費を見ることは悲しき」ことである、といふことを、さういふ人間から諸君は絶えず聞くであらう。これは、彼等の有する美しき言葉である、彼等の Mot d'ordre（禮儀の言葉。）である、彼等の箴言である、これらの旨いものを食つて肥え太つてゐる我々の友達が始終持ち出して來る言葉である、それは、言葉の空虛なる形、卽ち、純然たる僞善として久しく我々を弱らせてゐた程である。けれども、爲すべき何事かを發見し得ないで濟んでゐる——尤も實は彼等は探しもしなかつたのだが——この樂しい奴のうちの或者は、彼等が心の代りに脂肪の塊などを持つてゐたのではないといふことを、すべての人に信じさせ、そして、その反對に、正確に言へば、最も偉大なる外科醫も殆んど決しようとすることの出來ない——勿論、禮儀から——ところのものではあるが、何等かの甚だ深い物を持つてゐたのだといふことを信じさせようと試みるのである。一體かういふ紳士は、凡ゆる彼等の本能が、下品な嘲弄的な近視眼の批判と恐ろしい自負との方向へ傾いてゐるといふ事實によつて立身出世するのである。彼等は、他人の過誤と弱點とを表示し强調するよりほかに何にもすることを持たないのであるから、そして、彼等は全く牡蠣ほどの善い感情を持つてゐるのであるから、人々といふ具合に旨くやつて行くといふことは、かういふ自衞の力を

持つた彼等にとつては困難なことではないのである。彼等は、それを自分でも非常に誇つてゐるのである。例へば彼等は、殆んど全世界が何等か彼等に負ふところがあり、全世界は常に保存してゐる牡蠣のやうな彼等のものであり、すべての人は、液汁を欲するや直ちにしぼり出す橙か海綿のやうなものであり、彼等は到る所で主人であり、そして、此のあらゆる意に適へる事態は、全く彼等が知力と性格とを非常に多く持つた人間だといふ事實のためであるのだ、と思ひ込んでゐるほど善良なのである。その無限なる自負から、彼等は自分等には何等の缺點をも認めない、彼等はさういふ種類の實物の惡黨で、生れつきのタルトゥツフ（僞善者。）で、ファルスタッフなのである、惡黨であることのために、遂には彼等はそれがさうでなくてはならないことを、卽ち彼等が横著に生活しなければならないことを信ずるに到つた程である、彼等は、自分等が正直な人間であることを、非常に屢すべての人に保證してゐたのである。彼等は自己の良心の前に、內的の判斷を持つことが決して出來ないのである、寬大な自己批判を爲すことが決して出來ないのである。或る事柄のために彼等は肥り過ぎてゐるのである。彼等自身の價値無き個性、彼等のバアル（フェニキア人の尊崇せし日神。）とモーロック（フェニキア人の奉ぜし火神）（譯者曰——偶像禮拜の意か）彼等の壯大なる自我は、到る處に於いて常に彼等の先觸れをなしてゐる。彼等にとつてあらゆる自然は、あらゆる世界は、それの中で經えず彼自らを賞讃し、彼等の背後に何人をも何物をも見ないやうに小さき神のために創造されたる驚くべき鏡に過ぎないのである、それ故、彼が斯くのごとき暗き光の中で世の中のすべての事柄を見てゐるといふことは、不思議なことではない。彼は、すべての物に對して一つの言葉を用意してゐる、そしてそれは——彼としては精巧の頂上であるが——最も當世向きの言葉なのである。實際、彼等がその成功を嗅ぎ分けてゐるあらゆる横道の考へを觸れまはして、流行させる助けをなすのは、正にかういふ人々なのである。よき鼻とは、正に當世向きの言葉を嗅ぎ分けて、他の人々より前に彼等自身をしてそれを保たしむるために、彼等が有するところのものである、それは、彼等と共に創造されたかのやうに思はれるのである。彼等は、人類に對するその深き同情を宣言し、博愛主義の最も正しき合理的な形をとれるものを定義し、そしてロマンティシズムを、言葉をかへて言へば、あらゆる彼等の軟體種族よりも一層貴重な各原子を有する美しき眞實なるすべてのものを、絕えず襲撃するための言葉を、特に蓄積してゐるのである。けれども彼等は、間接な廻りくどい出來上つてゐない形に於ける眞理を認めるにはあまりに粗野であつて、且つ彼等は、成熟せざる、未だ醱酵しつゝある、不完全なものは、何でも拒絕してしまふのである。旨い物を食つてゐる人間は、あらゆるものの備へられたる宴樂に於いて、その全生活を終り、自分でも何にも

しず、すべての仕事が如何に困難なものであるかといふことを知らないのである。それ故、若しも諸君が、何等かの荒々しさを以て、彼の脂肪たつぷりの感情と衝突するとしたら、諸君には恐ろしいことが起るであらう、そのためには、彼は決して諸君を許さないであらう、彼は常にそれを憶えてゐて、喜んでそれに復讐するであらう。大ざつぱに言ふと、私の主人公は、當世向きな言葉と、あらゆる種類のそれに附屬するものとを澤山に持つた、巨大な、恐ろしくぶく〳〵肥つた金嚢に他ならないのである。

併しながら、M氏は或る特色を持つてゐた、そして甚だ非凡な人間であつた。彼は、機智に富んだ、話し上手の、そして話し好きな人であつた、そして、何處の應接間へ行つても彼を取巻く一團は必ずあつた。其晩には彼は、人に感銘を與へることに特に成功した。彼は會話を占有してゐた。彼は、最もいゝ狀態に在つた、樂しげで、何事かを喜んでゐるやうで、そしてすべての人の注意を奪つてゐた。しかし、M夫人は、始終氣分が悪いやうな樣子をしてゐた、彼女の顔は、私が今にもその長い睫毛の上に涙が震へ始めるかと思つた程、非常に悲しげであつた。このすべては、前にも言つたが、私に著しい印象を與へ、私をして怪しましめたのであつた。私は、不思議な好奇心の感情を以てそこを去つた、そして、その時までそんなことは殆んどなかつたのだが、其晩は終夜M氏のことを夢みてゐた。

翌日は、朝早く、私の加はることになつてゐた活人畫の稽古に呼ばれた。その晩は——我我の主人の下の娘の誕生日の五日後なので活人畫や、芝居やその後では踊などがすつかり極まつたゐた。殆んど即席のこの宴會には、モスクヴや附近の別莊などから、百人も餘計に客が招かれたので、上を下へといふ大騒擾大混雜であつた。その稽古は、といふよりその著附けの練習は、我々の主人の友達で彼に對する愛のために活人畫の監督とそれを演ずる我々の練習とを滿足して引受けてくれた有名な藝術家、即ち我々の舞臺監督が衣裳を買つたりしてその祝宴の最後の用意をするために急いでモスクヴへ行かうとしてゐて、全く無駄にする時間はなかつたので、朝そんなに早くすることに極められてゐたのであつた。私は、M夫人と共に一つの活人畫の役を持つてゐた。それは、中世の生活からの或る光景で、「城の女とその小姓」と呼ばれるものであつた。

私は、その稽古でM夫人に出會して何とも言はれぬ困惑を感じた。私は、彼女が前日以來私の心に起つた凡ゆる反省、疑念、臆測を私の眼の中に直樣讀んでしまふであらうことを感じつゞけてゐた。私は、言はば彼女のことでは悪いことをしてゐたやうにも思つた、何故なら彼女が前日には涙を見せ、その悲しみを私が妨げたので、彼女は、その祕密の不快な目擊者、許し難い關係者として、私を、横目で見ないでは居られなかつたから。けれども、有難いこ

とに、それは大した面倒もなく濟んだ。私は餘り注意されなかつた。彼女は私を氣にしてはゐなかつたと思ふ、稽古のことも氣にしてはゐなかつたのだ、彼女は上の空であつた、悲しげで鬱々と考へ込んでゐた。彼女は何事か大きな心配事で苦しんでゐたことは明かであつた。私の役が濟むや否や私は著物を著更へに飛んで行つて、十分間後には庭の方へヴェランダから出て行つた。殆どそれと同時に夫人がもう一つの戸口から出て來た、するとすぐその後で、彼女の獨りよがりの夫が私たちの方へやつて來た。庭からの歸りで、全く一群の婦人連を警護して皆 Cavalier servente と手を連ぎ合はしてゐた。その夫婦の邂逅は、確かに思ひがけないものであつた。M夫人は、どうしてだか知らないが、突然狼狽して、かすかな困惑の跡が彼女の性急な動作に表はれた。呑氣に口笛を吹いて、偉さうにその髭を撫でてゐたその夫は、妻に逢ふと、私は今も憶えてゐるが、顔を顰めて、ひどく穿鑿するやうな眼附で彼女を見詰めた。

「お前、庭へ行くのかい？」と彼は、彼女の手の中に在つた洋傘と本とに氣がついてさう訊ねた。

「いゝえ、林の方へ。」彼女は、一寸顏を赧らめて言つた。

「獨りでかい？」

「この人と。」M夫人は私を指示し乍ら言つた。「私、朝はいつでも獨りで散歩に出るんですよ。」彼女は、初めて嘘を吐いた人がするやうに、不確かなためらふやうな聲でさう附加へた。

「ふむ……だが、俺は今そこで皆と集つて來たんだ。Nを見送るんであの花園の東屋へ皆一緒に集つたんだよ。Nは、お前も知つてるだらうが、出掛けようとしてるんだ……オデッサでは何か旨くいかないことがあつたんだ。お前の從妹は、」（彼は例の美しい人のことを言つてゐた、）「一時に泣いたり笑つたりしてゐる、彼女は全く譯が分らないよ。だが、彼女は、お前が何かでNのことを怒つてゝ、見送りにも行かないんだつて言つてるぜ。勿論、馬鹿なこつた！」

「あの女は笑つてるんですよ。」M夫人は、ヴェランダの段を降りながら言つた。

「では、これがお前の毎日の騎士なんだね。」M氏は、狡猾な微笑を浮べて、その眼鏡を私の方へ向けながら附加へた。

「小姓ですよ！」私は、その眼鏡とその嘲りとに腹を立てゝ叫んだ、そして、彼の顏を眞正面に見て笑ひながら、ヴェランダを三段一歩で飛降りた。

「いゝ散歩だな。」M氏は呟いて、それから行つてしまつた。

彼女がその夫に向つて私を指示し、一時間も前からさうするやうに私を招き寄せてゐたや

うな風をし、私が其の月には毎朝彼女と一緒に散歩してでもゐたやうな風をした時、勿論私は直ぐにM夫人に味方してしまつた。が併し何故彼女がそれ程狼狽てたのか、それ程困惑したのか、どんなことを考へてあんな一寸した嘘を吐くやうなことをしたのか、私には解らなかつた。何故彼女は單に一人で行かうとしてゐたのだと言ふだけにしなかつたのだらう？私は、彼女をどうして見たらいゝか解らなかつたが、怪しみに壓倒されて私は次第に甚だ無邪氣に彼女の顔を覗き込み始めた。けれども丁度一時間前、稽古の時には彼女は私の様子にも私の沈默の質問にも注意しはしなかつた。その同じ心配が、たゞ一層はげしく一層明かに、彼女の顔に、彼女の狼狽に、彼女の散歩に表はれてゐた。彼女は、急いでゐて、どん〳〵歩き、庭園の方へ導かれてゐる森の中のどの並樹道でもどの小徑でも不安さうに俯向いて歩いてゐた。さうして、私も矢張り何事かを豫期してゐた。出し抜けに、我々のうしろから馬の蹄の音が聞えて來た。それは、大變突然に我々を棄てゝ行かうとしてゐた紳士Nを取り卷いた紳士淑女の乘馬隊であつた。

その婦人連の中には、M氏が泣いてゐたと話してゐた、私の美しい迫害者がゐた。しかし彼女は、いつもの通り子供のやうに笑つてゐて、素晴しい栗毛の馬を輕々と走らせてゐた。私たちの處まで來た時Nは、帽子をとつたが、止まりもしなければ、M夫人に言葉をかけもしなかつた。間もなくその騎馬の行列はすつかり、我々の眼界から消えて了つた。私は、M夫人をちらりと見た、そしてびつくりして殆んど叫びさうにした。彼女は、ハンケチのやうに眞白になつて立つてゐた、そして彼女の眼からは大きな涙が迸り出てゐた。偶然私たちの眼は出會つた。M夫人は、急に赧くなつて、一寸の間向うを向いた、そして不安と困惑との明かな表情が、彼女の顔をかすめて通つた。私は邪魔なのであつた、この前の時よりもずつと惡かつたのだ、それは白晝の如く明かであつた、しかし、私はどうして逃れることが出來たらう？

すると、私の困難を推量したかのやうにM夫人は、その手の中にあつた本を開いて、赧くなり乍ら、明かに私を見まいとしながら、丁度突然にそれを知つたやうな風で言つた——

「あゝ！　第二卷だわ。私、間違へてしまつた、どうか第一卷をとつて來て頂戴な。」

私には、殆んど解らなかつた。私のつとめは終つた。そして、私はそれ以上速かに追ひ去られるわけにはいかなかつたのであらう。

私は、彼女の本を持つて駈け出した、そしてもう歸つて行かなかつた。第一卷は、その朝はテーブルの上に靜かに置かれてあつた……。

けれども私は混亂してゐた、私の心の中には或る種の恐怖が附纏つてゐた。私は、一生懸

命でM夫人に逢ふまいとしてゐた。けれども私は、獨りよがりのM氏には非常な好奇心を以て注意してゐた、恰も、現在彼には何か特殊なことが無ければならないのだとでもいふやうに。私の馬鹿げた好奇心が何を意味してゐたのかは、私は知らない。たゞ私は、自分がその朝思ひがけなくも逢はなければならなかつたすべての事によつて、不思議な程混亂させられてゐたことを憶えてゐるのみである。しかし晝のうちはまだやつと始まりなのであつた、それは夜になつてからは私にとつては、それは全く實質的になつた。

晝餐はその日は非常に早かつた。その晩ある筈の村祭りを見に、隣りの小村へ出掛けることになつてゐたので、間に合ふやうに支度をする必要があつた。私はこの遠出を何よりも喜んで、三日の間も夢みてゐたのであつた。殆んどすべての人々が、珈琲を飲みにヴェランダへ集まつた。私は、注意深く人のうしろへくつついて行つて、それから、三列目の椅子のうしろへ身を隱した。私は、好奇心を惹かれてゐた。が、それでも私は、M夫人に見られないようにと非常に注意してゐた。ところが、幸か不幸か、私は私の美しい迫害者の直き傍にゐることになつた。其日は、彼女には何か奇蹟的な信じ難いことが起つてゐた、彼女は、いつもより二倍も立派な様子をしてゐた。どういふ具合に、そして何故かういふことは起るのであるか私は知らない、しかしかういふ奇蹟は、婦人には洵して稀ではないのである。今度は我々

と一緒に或る新しい客が居たが、それは丈の高い蒼い顔の青年で、私たちの美しい人の公然の賞讃者で、この同じ婦人を非常に戀してゐたといふ噂のNと、まるで態とのやうに入れ變つて、モスクワから丁度到著したのであつた。この新しく到著した客は、シェークスピアの「から騒ぎ」(Much Ado about Nothing)の中のベアトリスに對するベネディックと同樣の關係に長い間在つたのであつた。要するに、美しい人はその日は彼女の最も美しい形を具へてゐた。彼女の饒舌と彼女の冗談とは、非常に愛嬌に充ち、全く非常に無邪氣で、非常に可愛らしく氣輕だつたので、彼女は、絶えず特殊な尊敬の中堅となつてゐた程、美しい自信を以てすべての人々を熱中させてゐた。びつくり感嘆してゐる聽衆の群は、始終彼女の周圍に集つてゐた、だが彼女は、決してそれ程魅惑的ではなかつた。彼女の發する一語々々が驚くべきもので魅力あるもので、それはすぐ捉へられて、群の中をぐる〳〵廻つて行つた。そして一語と雖も、たつた一つの冗談も、たつた一つの頓智もそのまゝで消えてしまふやうなことはなかつた。誰も彼女の斯くの如き趣味を、斯くの如き光彩を、斯くの如き機智を期待してはゐなかつたのだと私は思ふ。彼女の最も善い性質は、いつでも、最も輕躁な氣儘、殆んど道化と界を接してゐる所の、最も子供らしい惡戯の下に埋もれてゐるのであつた。それは殆んど見えなかつた、又見えた時でも殆んど信じられなかつた。それ故今の彼女の異常な光彩は

總ての者の間に驚きの切なる私語を引續き惹き起したのであつた。けれども、少くもその中でM夫人の夫によつて演ぜられた役を以て判斷すれば、其處には或る特殊なそして稍々デリケートな狀態があつた。それが彼女の成功の助けとなつたのである。その亂暴者は、大膽にも——そして私は殆んどすべての者の滿足に、或は、兎も角すべての若い者の滿足に附加へなければならない——恐らくは彼女の眼には非常に重大な多くの原因のために、彼に激しい攻撃をしてゐた。彼女は、その表面に於いてはうまく包まれ隱されてゐる最も空幻なそして殘忍な種類の頓智と嘲弄と諷刺的な洒落とを、全く十字をなして彼に發射し、その犧牲者に取りすがるべき何物をも與へずにその標的を射、そして、遂に彼をして攻撃者を擊退しようとする無効な努力に疲れさせ、はげしいそして滑稽な絶望に陷らしめたのであつた。

私は確かには知らない、が併しその一伍一什は、卽席に演ぜられたことではなく、前以て謀られたことであつたのだと思ふ。此の恐ろしい決鬪は食事の時、速くから始まつたのであつた。私はそれを恐ろしいと言ふ、何故ならM氏は却々降參しなかつたから。彼は、凡ゆるその沈勇を、凡ゆる彼の鋭い機智を、及び全く公然の汚辱を受けてはゐなかつた所の素晴しい策略を求めなければならなかつた。その爭鬪は、すべてのそれを目擊してゐた者と仲間になつてゐた者との不斷のそして抑へきれぬ笑を伴つた。その日は彼にとつては、前日とは甚だ異つてゐた。特に目に立つたことは、M夫人が、確かに彼女の無分別な友がその嫉妬深い夫を最も奇怪なそして滑稽な樣子をした、「靑髯公」の態度を持つたものとして描かうとしてゐたのを極力留めようと度々してゐたことであつた。それは、凡ゆる有りさうなことから、私の記憶に止つてゐる所のことから、そして最後に私自身がその事件の中で演じなければならないことになつた役柄から判斷すれば考へられなければならないのである。

私は、全く思ひもかけず最も馬鹿らしい仕方でその中へ陷つたのであつた。そして不幸にもその時には私は、惡いことが起ることを怪しみもせず、あれ程長い間持ち續けてゐた警戒も忘れてしまつて、見えるやうな處に立つてゐたのであつた。突然私はM氏の不俱戴天の敵、自然の競爭者として、彼の妻を夢中に戀してゐる者として、皆の前へ引張り出された。そのことを私の迫害者は誓ひ、證據を握つてゐると誓つて、今朝林の中で見た事を言つた……。

けれども彼女がまだ言ひ終らない內に私は最も堪らない氣持になつて、突然妨げた。その瞬間は非常に惡魔的に計られたもので、それの終局に、滑稽なる大團圓に導くために、殘酷にも用意されてゐたものであつて、且つ抑へ難い興味の完全な爆發が、この最後の頓智に報いられた程非常な恐ろしい狂想を以て持ち來されたものであつた。そして、其時でさへも私は自分のものがその芝居のうちで一番不愉快な役では無かつたと思つてはゐたが、それでも私

は非常に混亂し動顚し驚愕してゐたので、不幸と絶望とでいつぱいになつて、恥かしさと涙とで喘ぎながら、二列びの椅子を押しのけて駈け出し、そして、私の迫害者に向つて涙と怒りとに破れた聲で叫んだのであつた。

「貴女は恥かしかないの……大きな聲で……大勢の女の人の前で……　そんな惡い……嘘をついて？……小さな子供みたいに……こんなに大勢男の人がゐる處で……　みんなは何て言ふでせう？……貴女みたいな大きな子供が……それに結婚してる人が！……」

けれども私は續けられなかつた、耳を聾するばかりの喝采が鳴り響いた。私の爆發したために全く大騷ぎが起つた。私の幼稚な身振り、私の涙、及び殊に私がM氏を守るやうに見えた事實が、このすべてが、その樣な極惡な笑ひを惹起したのであつた。それは今でも私がそれを思ひ出しただけでも笑はずにはゐられない程のものであつた。私は混亂に打克たれ、恐怖で無感覺になり、恥かしさで燃えて、兩手で顏を隱しながら駈け出して、戸口の處へやつて來た下僕の手から盆を叩き落して、さうして私自身の部屋へ駈け上つて行つた私は、扉の外側にあつた鍵を引出して、錠を落してしまつた。私はよく爲した、何故なら私のうしろには叫び聲が追踪してゐた。一分間とは經たない內に、私の敵は最も美しい婦人たちの一揆によつて取圍まれた。私は、彼等の鳴り渡る笑ひを、彼等の絶え間なき饒舌（おしやべり）を、彼等の打震へる

聲を聞いた。彼等は忽ちに、みんな燕のやうに轉つてゐた。彼等のすべてが、誰もかもが、たつた一分間でもいゝから戸を開けるようにと、私に願つたり、賴んだりし、彼等は私に決して害を加へない、接吻を以て私を窒息させたいだけなのだと誓つた。しかし……この異常な脅嚇よりも恐ろしいことが有り得たとしたら何であらう？　私は扉とは反對の側へ行つて、枕に顏を隱しながら恥かしさに燃えてゐるだけであつた。そして開けはしなかつた、返事もしなかつた。婦人たちは長い間叩き續けてゐたが、私には聞えないかのやうだつた、そして單に十一の子供が有り得るやうに頑固にしてゐた。

だが、其時私は何をすることが出來たであらう？　すべてのことが明らさまに置かれた、すべてのことが顯はされた、私があれ程嫉妬深く守つてゐたすべてのこと、そして隱してゐたすべてのことが！……無限の不名譽と恥とが、私の上に落ちて來たのであつた！　しかし私は何故脅かされてゐたのか、何を隱さうとしてゐたのか、自分では言ふことが出來なかつたことは事實である、それでも私は、或る事を恐れてゐた、そして、その或る事が發見されることを考へると、木の葉のやうに震へてゐるのだつた。まだ其時まで私は知らなかつたのだ、それは何であつたのか、それは善い事だつたのか惡いことだつたのか、素晴しいことだつたのか恥づべきことだつたのか、賞讃すべきことだつたのか非難すべきことだつたのか？　その時私は、私

の不幸な狀態に於いて、私の上に力を逼つて來た不幸の狀態の中で、それが馬鹿らしいことで、恥づべきことだつたのを知つた。本能的に私は、それと同時にこの判斷が惡いもので、非人間的なもので、それに粗野なものであることを感じた。けれども私は打碎かれ全滅させられてゐた、意識は私の中に押し止められ、混亂の中へ投げ込まれてしまつたやうに思はれた。私は、その判斷に反對して立つことも、それを適當に批判することも出來なかつた。私は困惑してゐた、私は、自分の胸が非人間的に恥ぢ知らずに傷つけられ、そして無力な涙の溢れ出ることを感じたに過ぎなかつた。私は困惑してゐた、しかし私は、かつて感じたこともなかつたやうな怒りと憎惡とに煮えたぎつてゐた。何故ならば、私が本當の悲しみ、屈辱、及び損傷を知つたのは生涯に於いてそれが初めてであつたから——そして、それは大げさでなく眞實さうだつた。最初の無經驗な形を成さぬ感情は、子供である私の中にあれ程粗野に取扱はれた。最初の馥郁たる童貞らしい謙遜は、あれ程速かに露出され屈辱を受けた、そして最初の、且つ恐らくは甚だ眞實な、又審美的な印象は、あれ程凌辱されたのであつた。勿論そこには私の迫害者の知らなかつた、そして私の苦しみの中を見通さなかつた多くのものがあつた。私がその時までうまく解剖することが出來なかつた、それを私が、云はば恐れてゐた、一つの狀態が、幾分かその中には交つてゐた。私は、絶望と不幸に於いて、枕に顏を隱し

ながら寢床の上に横はりつゞけてゐた、そして私は交互に熱くなつたり震へたりしてゐた。私は、二つの問題になつて苦しんでゐた。一つは、あのやくざな美しい人は何を見たのであらう、そして實際、彼女は、林でその朝M夫人と私との間に何を見ることが出來たのであらう？　そして他の一つは、恥かしさと絶望とで參つてしまひもしずに、どうして私は現在M夫人の顏を見ることが出來るだらう？　といふことであつた。

庭に於ける異常な騷ぎが、私の陷つてゐた半意識の狀態からたうとう私を喚び起した。庭中は、馬車と鞍をつけた馬と駈け廻つてゐる下僕等とで押し合つてゐた。彼等はみんな出掛けようとしてゐるやうであつた、既に馬に乘つてしまつた紳士もあつた。馬車の中に場所をとつてゐた者もあつた……その時私は村の祭りへ出掛けるのであつたことを想ひ出した、そして次第々々に不安が私の上に蔽ひかゝつて來た。私は、心配して庭の中に私の小馬を探し始めた、がそこには小馬は一匹も居なかつた、そこで皆は私のことを忘れてしまつてゐたに違ひなかつた。私は、自分を制へきれなくなつて、大急ぎで階段を駈け下りて行つた、不愉快な會合や私の最近の汚辱に就いては全く忘れてしまつて……。

恐ろしい報知が私を待つてゐた。私のために用意された馬も、馬車の中の席もなかつた。すべての事が準備され、すべての席が取られてしまつてゐた、そして私は他の人々のために

場所を譲るやうに餘儀なくされてゐた。此の新しい打撃に壓倒されて私は、階段の上に立ちそして、私のためにはほんの少しの場所も殘されてゐない四輪馬車と普通の馬車と遊山馬車との長い列と絶え間もなく跳ね廻つてゐる馬に乘つた身輕な服裝をした婦人連とを、悲しく眺めてゐた。

一人の紳士が遲れて來た。人々は、出掛けようとしてその人の來るのを待つてゐる丈けなのであつた。彼の馬は、銜を咬みながら、その蹄で土を掻きながら、そして始終踊り上つたり竿立ちになつたりし乍ら、戸口の處に立つてゐた。二人の別當が用心深く彼の馬銜を捉へてゐた、そして他のすべての者は、そこから恭々しく離れて恐れを懷いて立つてゐた。

私の行く妨げをした最も面倒なことが起つた。幾人かの新しい客が到著したところへ持つて來て、席はすつかり塞がつてゐるし、馬が二匹病氣で倒れてゐた、その一匹は私の小馬であつた。けれども私は困つてゐる唯一の人間ではなかつた、今はひつて來た、既に私が語つたことのある蒼白い顏の青年のためにも、一頭の馬も無いといふやうな譯であつた。此の困難に打克つために我々の主人は、非常手段をとつて彼の怒り易い馴れてゐない種馬まで持ち出して來なければならなかつたが、彼の良心を滿足させるために、それに乘ることは不可能なことで、且つ人々はその獸を悪い性質のために買手さへつけば賣つてしまはうと長い間

考へてゐたのだといふことをも附加へたのであつた。

しかし、彼の警告にも拘らず、その客は自分は上手な乘手だと宣言し、いづれにしろ行かないよりは何にでも乘らうと言ふのであつた。我々の主人はもう何とも言はなかつた、併しその時私は、彼の脣には狡猾なぼんやりした微笑が漂つてゐたと思つた。彼は、その乘馬術をそれ程自慢した紳士を待つて、馬には乘らずに、堪らなさうに兩手をこすりながら絶えず戸口の方を見遣つてゐた。それと等しい感情が、二人の別當にも分たれてゐるやうに思はれた。彼等は、何の理由もなしに一寸の間に人を殺すであらう所の一頭の馬をすべての人々の前で警護してゐる自分達を見られることを得意になつて息をつけずに、その種馬を捉へてゐた。主人の狡猾な微笑に似た何物かが、彼等の眼にも輝いてゐた、それは期待を以て圓くされ、勇敢な客が現はれる筈の戸口をぢつと見戍つてゐた。その馬自身も矢張り、彼の主人及び別當と同盟してゐたかのやうな樣子をしてゐた。彼は、高慢な傲岸な樣子をしてゐた、恰も、多くの人々の好奇的な眼に見戍られてゐることを感じ、そして或る手に負へないごろつきが、罪を犯すことを手柄とし榮譽とするのと全く同じやうに、己れの悪い評判を榮譽としてゐたかのやうであつた。彼は、その獨立を敢て抑壓しようとする勇敢なる人を侮蔑してゐるやうに思はれた。

小説

その勇敢なる人は、たうとうやつて來た。すべての者がずつと待つてゐたことを見ると濟まないと思つて、急いでその手袋を脫ぎながら、何にも見ずに眞直にやつて來て階段を駈け下りて、それから、待つてゐた馬のたて髮をとらうとして手を伸ばした時、始めて目をあげたのであつた。けれども彼は、馬の竿立ちになつたことと、脅されてゐる見物人たちからの警戒する叫び聲とによつて忽ちに度を失つてしまつた。その靑年は、後退さりして、困惑して兇惡な馬を眺めた。馬は全く身を震はし、怒りを以て鼻嵐を吹き、そして、その血走つた眼を狂暴にぐり〳〵させ、絕えず後足で竿立ちをし、そして、外へ駈け出して自分と共に二人の別當をも持つて行つてしまはうとしてゐるかのやうに、その前足を跳ね上げるのであつた。一寸の間靑年は、全く途方に暮れて立つてゐた、それから、やゝ困つたやうにかすかに赤くなりながら、その眼をあげて脅されてゐる婦人達の方を眺めた。

「大變い、馬だ！」と彼は、獨り語のやうに言つた。「それに、僕の考へではこれに乘るのは隨分愉快であるに違ひない、が……併しねえ、僕は行くのは止さうと思ふのですがね？」彼は、深切な悧巧な顏に非常に適當したはつきりとした人の好い微笑を浮べて、我々の主人の方へ振り向きながら言ひ終つた。

「それでも私は、あなたが素晴しい乘手だとは思ひますよ、確かに。」と近づき難き馬の持主はうれしさうに答へて、それから彼は暖かく、且つ感謝するかのやうに靑年の手を握つて、

「最初から、あなたは自分の乘らうとする獸の種類がお分りなのだから。」と彼は威嚴を以て附加へた。「お解りですかね、私は二十三年間も驃騎兵の中にゐたのですが、それでもこの獸のお蔭で、つまり、この無用な獸に乘る度に、丁度三回も地面へ振り落される光榮を持つた譯なんですよ。タンクレッド、おい、貴樣に相當する者は此處には居らんのだぞ！　貴樣に乘る者はな、先づイーリア・ムロメーツだらうよ、ところが彼は今ではカパッチヤローヴォの村で、貴樣の齒が落ちるのを待つて、靜かに坐つてるのだらうよ。さア、連れてつてくれ、こいつは人を脅すには十分過ぎる。こいつを引張り出すのは時間の浪費だ。」彼は、滿足さうにその兩手をこすりながら叫んだ。

タンクレッドは、その主人に對して何の役にも立たず、たゞ無益に穀物を食つてゐたのだと言はなければなるまい。その上この老驃騎兵は、彼が單にその美しさの爲めに買つた無用な獸に對して非常な金額を拂ふことによつて、馬に就いての聲價を失したのであつた……それでも彼は、タンクレッドが彼の聲價を保ち、今一人の乘手の始末を附け、そしてそのために、新しい不條理な月桂冠を自分に一層近く惹きつけたといふことを今は喜んでゐた。

「ちや、あなたは行かないんですか？」彼女の Cavaliere servente がこんな場合に從はなけ

ればならないことを特に氣にしてゐたブロンドの美しい人が叫んだ。「本當にあなたは驚いてはゐないの？」

「本當に僕は驚いてるんです。」と青年は答へた。

「眞面目にさう言ふの？」

「だつて、貴女は、僕の頸を折りたいんですか？」

「ぢや、急いで私の馬にお乘りなさいな、恐かありませんよ、あれは大變靜かなの。すぐさうしませう。一分間で鞍を乘へることが出來るんですよ！　私、あなたを連れて行かうとしてゐるんですよ。きつとタンクレッドはいつでもあんなに手に負へないといふ譯ぢやないんでせう。」

言ふが早いか彼女は、鞍から飛び下りて、最後の言葉を終つた時は、もう我々の前に立つてゐた。

「貴女はタンクレッドを御存じないのだ。貴女がさうお思ひなら、こいつは貴女のやくさな婦人鞍を附けさせはするでせうよ！　而も、私は貴女の頸の骨をぶち折らせたくはないのですよ、そりや可哀想ですよ！」と我々の主人は言つたが、內心の喜びの瞬間にはいつもするやうに、樂しげない人間、老兵に相應してゐると思ひ、特に婦人達に對して誘惑的だと考へた

所の常から研究してゐた粗暴さと、亂暴な言葉使ひをさへしてみせたのであつた。これは、我々が皆よく知つてゐた所の彼の氣に入りの想像、氣に入りの氣まぐれの一つであつた。

「おや、泣き蟲さん、あなたはやつて見たくはないの？　あなたは行きたくて仕樣がないんでしよ？」勇ましい乘馬姿の婦人は、私に氣がついて、意地惡さうにタンクレッドを指しながら言つた。何故なら私は、彼女の眼に留る程不用心であつた、そして彼女は鋭い言葉なしに私を許しはしなかつたであらう、また、彼女は全く何にもならないのに馬から降りることは無かつたであらう。

「きつとあなたは、そんな——私たちはみんな知つてるのよ、あなたは英雄で、恐がることを恥ぢてるのをね。殊にあなたが見られてる時はね、綺麗なお小姓さん。」彼女は、入口の最も近くに在る馬車の中にゐたM夫人をちらと見ながら附加へた。

この美しいアマゾン(勇婦)がタンクレッドに乘る氣で我々の方へ近づいて來た時、私の心には、憎惡と復讐とが突然漲り渡つた……けれども私は、亂暴者からのこの思ひがけない挑戰を受けた時、どう感じたか記述することは出來ない。私がM夫人に對する彼女の一瞥を見た時、私の眼の前ではすべてが眞暗になつた。一瞬間或る考へが私の心の中に閃いた……しかしそれは一瞬間に過ぎなかつた、一瞬間よりも少なかつた、火花の閃きのやうな間であつた。

恐らくそれは最後の藁だつたのであらう。そして其時突然私は、怒りに動かされた餘り、勇氣が起つて、すべての私の敵を混亂させ、彼等のすべてに復讐し、そしてすべての者の前で私はかういふ人間だといふことを示してやり度い氣になつた。それとも、或る奇蹟によつて、私がその時まで何にも知らなかつた中世史からの或る激勵によつて、私の眩暈のする頭の中に、擬戰の、勇士の、英雄の、愛しい婦人達の、劍戟の、叫喚の、及び群集がなす喝采の、それらの幻影を渦巻き起らしめ、そしてそれらの叫喚の中に在つて、勝利と名聲より以上に快く誇りある魂を動かす所の、脅かされたる心の臆病な叫びをあげさせたが——此の凡ゆる空想的な出鱈目が、その時の私の胸には起つたのか、又は恐らくは、未來に於いて私のために貯へられてゐた必然的な出鱈目（ノンセンス）の最初の目覺めが起つたのか、私は知らない、兎も角私は、自分の時が來たと感じたのであつた。私の心は跳ね上り打震へた。さうして、如何に私が一飛びに階段を下りてタンクレッドのそばへ行つたか、私は憶えてゐないのである。

「僕が恐がつてると思ふの？」私は、大膽に誇らしげに、かつて無かつた熱烈さを以て、興奮に息もつかずに、そして私の頬には涙が燒けついた程眞赤になつて叫んだ。「いゝか、見給へ！」さうして私は、タンクレッドのたて髪を摑むと、人々が私を止めようとする暇もない內に、その鐙に足を置いたのであつた。が、其の瞬間に、タンクレッドは、竿立ちしてその頭を振上げた、そして大變な力で跳ね上つて、驚いて固くなつてゐた別當の手からもがき出て、すべての人々が恐怖の叫をあげてゐるうちに、疾風のやうに突進したのであつた。

どうして私はもう一方の足を、その全速力で駈け出してゐた馬の上にあげることが出來たかは神が知つてゐる。どうして私は手綱をとり外さなかつたかをも、私は考へることが出來ない。タンクレッドは、四つ目垣の向うへ私を持つて行つて、銳く右に曲つて、それから道などには目もくれずに、垣根のそばを飛んで行つた。その時やつと、私は自分のうしろに五十人の人々からの叫聲を聞き、そしてその叫び聲は、私の子供時代の其瞬間を決して忘れ得ないであらうところの誇りと歡喜との感情を以て私の昏倒してゐた心に反響したのであつた。體中の血が頭へ上つて、私をうろたへさせ、私の恐れに打つてしまつた。私は氣違ひのやうになつてゐた。そこには確かに、今でも憶えてゐるが、武者修業者の勳功のやうな何物かがあつた。

けれども、私の騎士らしい勳功は、一瞬の間に濟んでしまつた、といふよりは、それは騎士としてはまづく行つたのであらう。さうして實際、私はどうしてあんな風に逃れたのだか知らない。私は乘馬術は知つてゐた、私は敎へられたのであつた。併し私の小馬は、乘馬といふよりはむしろ羊のやうなものであつた。もしもタンクレッドが、私を拋り出す暇があつた

ならば、私は確かに彼に抛り出されてゐたに違ひない、が五十歩も駈け出した後彼は、突然道に横ぎつてゐた大きな石を見て驚いたのでうしろへ逃げ歸つた。彼は、全速力で駈けながら鋭く曲つたので、私が鞍から流れ出るやうに落されて、一間半も向うへ鞠のやうに飛ばされて、粉微塵にならなかつたといふことは、且つタンクレッドが、それ程急激に曲つたためにその脚を脫臼させてしまはなかつたといふことは、今もつて私には考へられないことなのである。彼は、その頭を恐ろしく擡げながら、怒りを以て醉ひどれのやうに左右に飛び跳ねながら、その脚を滅茶苦茶に空に振りながら、そして、跳ね上る度毎に、まるで虎が彼の上に乘つてその背中に齒と爪とを突込んででもゐたかのやうに、私を振り落さうと試みながら、門の方へ駈け戻つて行つた。

もう少しで私は投げ出されるところであつた。私は落ちかゝつてゐた。が、數人の紳士達が私を救ひに飛んで來た。その中の二人はその廣々とした田舍道を遮斷し、他の二人は、馬を駈つて來てタンクレッドを取卷いてしまつたので、彼等の馬の横腹が殆んど私の足を押しつぶしさうであつた、そして彼等は兩方からタンクレッドの銜を捉へてしまつた。二三分間の後私たちは、階段の方へ戻つて來た。

彼等は、眞蒼になつて殆んど息もつけないでゐる私を馬から降ろした。私は、風に吹かれてゐる草の葉のやうに震へてゐた。タンクレッドも矢張り同樣であつた、彼はそれに立つてゐたが、その瞳は云はゞ地面の中へ突込まれて、體全體はそり返り、眞赤な波打つてゐる鼻孔からは烈しい息をプップと吹き、始終ひきつるやうに震へ、傷つけられた誇りと、あんな大膽なことをして、罰を免れた子供に對する怒りとに沈んでゐるやうな風であつた。私の周圍のすべての者が混亂と驚きと恐慌との叫び聲をあげてゐるのを私は聞いた。

その瞬間に、私のさまよへる眼は、蒼ざめて混亂してゐるやうに見えたM夫人のそれとぶつかつたのであつた、そして——私はその瞬間を決して忘れることは出來ない——一寸の間私の顏はいつぱいに色づいて、火のやうに輝き燃えた、私には何事が起つたのか解らないが、己れ自身の感情に困惑し脅されて私は、おづ〳〵と眼を地面へ落してしまつた。けれども私の一瞥は氣づかれた、それは捉へられた、それは私から盜みとられた。すべての人々の眼はM夫人に向けられた、そして、計らずも注意の中心に身を置いたので、彼女も矢張り或る飾り氣のない思ひもかけない感情から子供のやうに赧くなり、そして、その混亂を笑ひによつてまぎらさうと努力したが、うまく行かなつた……。

すべてこれは、勿論、外側からは可笑しく見えたのであつた、しかしその時には、著しく純粹なそして思ひもかけない事が、皆に笑はれることから私を救ひ、そしてすべての事件に特

殊な色を與へた。あらゆる惡戯の發頭人であつた、そして其時までは私の和解し難き敵であつた愛らしい迫害者が、出し抜けに駈け出して來て、私を抱擁し接吻したのであつた。私が彼女の決闘を承諾し、M夫人へ一瞥を投げることによつて私に挑んで來た喧嘩を私が買つたのを見た時、彼女は自分の眼を殆んど信ずることが出來なかつたのだつた。彼女は、私がタンクレッドに乘つて飛んで行つた時には、恐れと自責の念とから殆んど死にさうであつた。それがすつかり濟んでしまつた今、そして特に彼女がM夫人と私の混亂と私の突然親くなつたのとをちらと見た今、彼女の他愛のない頭の中の空想的な旋律にその時或る新しい祕密な口に言はれね意味の與へられた今——彼女は、私の「騎士らしさ」に對して、私の事で感動され、喜び、誇るやうな熱情にまで動かされて、駈け出して來て、私をその胸に抱きしめたのであつた。彼女は、二つの小さな水晶のやうな淚の靈へ輝いてゐた最も天眞な嚴格な樣子をした小さな顏をあげて、彼女のそばに群つてゐた人々を見戍りながら、今まで聞いたこともないやうな莊重な眞心のこもつた聲で私を指してかう言つた。"Mais c'est très sérieux, messieurs, ne riez pas !" 彼女は、皆がまるで魅せられたやうに、立つてゐて彼女の光り輝くやうな熱情を賞讃してゐたことには氣がつかなかつた。彼女のいつも變らぬ笑ひを、愛する眼のうちに噴き出した淚によつて表はされたる、その敏捷こい思ひがけない行爲、その熱誠のこもつた小

さな顏、單純な心の純直、思ひがけない感情は、すべての人々が恰も彼女の表情と彼女の速かな熱烈な言葉と身振りとによつて電氣をかけられたやうに彼女の前に立つてゐた程の、それ程の驚きであつた。彼女の熱情的な顏に表はれたその稀れな瞬間を失ふことを恐れて、誰も彼女から眼を離すことが出來ないかのやうに思はれた。我々の主人までが、チューリップのやうに赤くなつた、そして、人々が宣言したところによると、彼はその瞬間には「恥かしいことだが」彼の魅力ある客を戀したのだつたと、後で白狀するのを聞いたさうである。さて、勿論、私はこのことがあつてからは騎士であつた、英雄であつた。

"De Longe ! Toggenburg" といふ聲が人々のうちから聞えた。

喝采が響き渡つた。

「來るべき時代萬歲！」と主人が附加へた。

「でも、この人は、私たちと一緒に行くんですわね、どうしたつて行かなければなりません わ。」と美しい人は言つた。「私たちはこの人のために場所を探しませう、私たちは場所を見附けなきやなりませんよ。私のそばにお坐りなさい、私の膝に……いえ、いゝえ、いゝえ！ それは間違ひよ！……」彼女は、我々が一番初めに逢つた時のあの樂しみを制へきれずに笑ひながら言ひ直した。しかし彼女は、笑つた時、出來る丈け私を柔らげようとして、私が腹

を立てないようにと、優しく私の手を撫でた。

「勿論、勿論。」といくつかの聲がかち合つて言つた。「この子は行かなきやならない、この子は自分の場所を贏ち得たんだ。」

事は忽ちに定められた。私をブロンドの美しい人に近附きにさせたあの同じ老婦人が、家に殘るようにと、すべての若い人々から忽ちに包圍攻撃で賴まれた、そして私を彼女の席へ坐らせた。彼女は、大變困つたのであるが、微笑してこつそり怒りの舌打をして、それに同意しなければならなかつた。いつも彼女の賴みになつてゐた、私の以前の敵、今の友である彼女の擁護者が、勢ひのいゝ自分の馬で飛んで來て、子供のやうに笑ひながら、自分は彼女が羨ましい、自分の方が家に殘りたいのだ、何故なら雨が降りさうだから我々は皆づぶ濡れになつてしまふだらう、と彼女に言つた。

そして、彼女が雨降りを豫言したのは正しかつた。一時間も經つと本當にポツ〳〵落ちて來た、そして遠足は滅茶々々になつた。我々は、村の小屋に數時間雨宿りしなくてはならなかつた、そして雨のために生じた霧深い中を夕方の九時と十時の間に家へ歸らなければならなかつた。私は、いくらか熱病のやうな氣持になり始めた。私が出掛けようとしてゐた時、M夫人が私のそばへやつて來て、私がジャケツの上に何にも著けてゐないで頸は裸になつてゐたのを見てびつくりした。私は、上衣を著て來る暇がなかつたのだと答へた。彼女は、ビンを持つて來て、私の襯衣の襟をひつくり返しに留めて、彼女自身の頸から眞赤な紗の頸巻をとつて咽喉を痛めないように、それを私の頸に巻きつけてくれた。彼女は、これを、私がお禮を言ふ暇も無かつた程急いでやつてしまつた。

しかし、我々が家に歸つて來た時、私は、彼女が、ブロンドの美しい人と、それからその日にタンクレッドに乘ることを拒んで乘馬の達人といふ名譽を得た蒼い顏の青年と一緒に、小さな應接間に居るのを見出した。私はそこへ行つて、お禮を言つて、頸巻を返した。けれども、今は、あんな向う見ずなことをしたあとなので、私は幾分か恥かしく感じてゐた。私は急いで濟まして二階へ行つてしまひたかつた、反省し考へようとする私の勝手であすこへ行つてしまひたかつた。私は、色々な感銘をいつぱい持つてゐた。私は、頸巻を返した時、いつもの通り耳まで赧くなつた。

「きつとこの子は、その頸巻をとつて置きたいんですよ。」と青年は笑ひながら言つた。「この子は貴女の頸巻と別れるのはつらいといふことは誰にだつて分りますね。」

「さうだわ、さうだわ！」と美しい婦人も挿んだ。「何て子供でせう！　おゝ！」彼女は、明かにいぢめようとして頭を振りながら言つた。けれども彼女は、それ以上に冗談を過ぎさせ

たくないと思つてゐたM夫人の嚴格な一瞥を見ると、すぐやめてしまつた。

私は、急いで逃げ出した。

「ねえ、あなたは子供ね。」と亂暴者は、次の部屋まで私を追ひかけて來て、慈しみ深く私の兩手を執つて言つた。「だつて、あなたがそれを大變持つてゐたかつたら、唯だ返さないでゐればよかつたのよ。あなたはそれを何處かへ置いて來てしまつたとでも言へばよかつたのだよ、それでお終ひになるんだわ。何て單純なんでせうね！　それも出來なかつたのね！　何て可笑しな子でせう！」

さうして彼女は、私が饐粟のやうに眞赤になつたのを見ると笑ひながら、指で私の顎を輕く叩いた。

「私はもうあなたのお友達よ、ねえ、さうぢやないこと？　もう私たちは敵同志ぢやなくなつたんでしよ？　さうなの、さうぢやないの？」

私は笑つた、そして一語も言はずに彼女の指を握りしめた。

「おゝ、どうしてあなたはそんなに……どうしてあなたはそんなに蒼白くつてそれに震へてるんでせう？　惡寒がしてるんぢやなくつて？」

「えゝ、僕、具合がよくないの。」

「あゝ、可哀想に！　あんまり興奮したからよ。あなた、どうしてだか知つてて？　お夕飯の席へは出ないでお床にはひつた方がいゝわ、さうすると明日の朝にはすつかり良くなるでせう。いらつしやい。」

彼女は私を二階へ連れて行つてくれた、そして彼女が私に對して浪費する氣遣ひは遲てしがなかつた。私の著物を脫がしてしまふと彼女は、階下へ駈けて行つて茶を拵へて、私が床にはひつた時、自分が持つて來てくれた。又彼女は、私に暖い蒲團を拵へてくれた。私は、私に對して浪費されたそれらの心遣ひと注意とに非常に感銘を受け動かされた、ことによつたら私は、其日一日遠足と激變とに感動されてゐたのかも知れない。私は、彼女にお休みなさいを言つた時、恰も彼女が私の最も親愛な最も近しい友達であるかのやうに彼女を暖かく抱きしめた、すると其の日凡ゆる激情が、疲れきつた狀態に於いて忽ちに私に戻つて來た、私は、彼女の胸に抱かれた時殆んど涙を流しさうであつた。彼女は、私の激し過ぎた狀態に氣がついて、この亂暴者自身もやゝ感動されたことを私は信じてゐる。

「あなたは、大變いゝ子だわねえ、」と彼女は優しい眼で私を眺めながら言つた。「どうか私を怒らないで頂戴ね。あなた、怒らないでせう？」

實際、私たちは最も暖かい、そして最も信實な友となつてしまつた。

私が眼を覺ましたのは、可成り早かつたが、太陽は既にきら〳〵する輝きを以て部屋中に漲つてゐた。私は、まるで前日に熱に侵されなどはしなかつたかのやうに、全くいゝ具合に健全に感じながら、寢床から飛び起きた。實際私は、今日全く歡ばしい心持になつてゐた。私は、前日のことを想ひ出した、そして、若し私が私の新しい友、美しい髪の毛の人を、昨夜のやうに再び抱擁することが出來たら、幸福になるだらうと感じた。しかしまだ隨分早かつた、誰もまだ熟睡してゐる頃であつた。急いで著物を著て私は、庭へ出て、其處から林の方へ行つた。私は、水の葉の厚く積もつてゐる道を通つて行つた、そこでは樹々の芳香が、いつもよりも一層やにを含んでゐた、そこには、日光が、むらがる木の葉の濃い暗黑をつき通すことが出來たことを喜ぶかのやうに、最もたのしげに覗き込んでゐた。氣持のいい朝であつた。

どん〳〵歩いて行つて、自分では氣がつかないでゐる內に、私は林のはづれまで行つてしまつて、モスクヷ河のほとりに出た。それは二百歩下の小山の麓を流れてゐた。河の向う岸では幾人かの人が草を刈つてゐた。私は、すべての銳い鎌の列が草刈人の動くにつれて一緒に日光に閃き、それから今度は小さな物凄い蛇のやうに再び草の中へ隱れて行くのを見戍つてゐた。私は、刈られた草が厚みのある豐富な幅をなして一方へ飛び、長い眞直な線をなして横はるのを見戍つてゐた。私はどの位考へ込んでゐたのか解らない。たうとう私は、私の居たところから二十歩程のところへ、莊園家宅への往還から走つてゐる道へ馬が來て、鼻嵐を吹いて、短氣に地面を引掻くのを聞いて空想から覺めた。私は、乘手がそこへ駈けて來て止つた時すぐに馬の聲を聞いたのだか、又はその音は私の耳に長い間聞えてゐたのに私が夢想から覺めずにゐたのか、どうか知らない。好奇心に驅られて私は、林の中へはひつて行つた、そして碌に私が歩みを進めない內に、早口で併し制へた聲で話してゐる聲を私は聞いた。私は、途に添うて生えてゐる灌木の枝を注意深く分けながらもつと近くへ寄つて行つたが、忽ちにびつくりしてうしろへ飛び退つた。私は、見馴れてゐる白い著物をちらりと見、柔かい女らしい聲が私の胸に音樂のやうに響いて來た。それはM夫人であつた。彼女は、鞍から身を屈めて急いで話してゐる馬上の人のそばに立つてゐた、而もその男がNだつたのを知つた時私は驚いたのであつた。M氏があれ程大騷ぎをして別れた、そして前日の朝行つてしまつた筈の青年Nであつた。而も人々はその時、彼は遠い露西亞の南部の或る處へ行かうとしてゐるのだと言つてゐた、それ故私はそんなに早く、而もM夫人と丈けに逢ひに來たのを見ると非常にびつくりしたのであつた。

彼女は、かつて見なかつた程感動し、混亂してゐた。そして彼女の頰には淚が輝いてゐた。

青年は、彼女の手をとつて、それを屈んで接吻してゐた。私は、彼等のお別れの處へ出會はしたのであつた。彼等は急いでゐるやうに思はれた。たうとう彼は、その衣嚢から封じてある封筒をとり出して、M夫人にそれを與へ、一方の手を彼女に捲きつけて、それでも馬からは降りずに、長い熱烈な接吻を彼女に與へた。一分間後には彼は、その馬に鞭打つて私の處を通つて矢のやうに飛んで行つてしまつた。M夫人は、暫らくの間彼のうしろを眺めてゐたが、それから物思はしげにそして悲しげに家の方へ向つて行つた。けれども、その途を數歩行つてから彼女は、突然氣がついて、急いで灌木を分けて林の中へ歩み入つた。

私は、自分の目撃したすべてのことに驚き動顚して彼女の跡をつけて行つた。私の心臟はまるで恐怖からのやうにはげしく打つた。私は、云はば感覺を失ひ困惑してゐた。私の考へは散々になり、全く顚覆してゐた。それに私は、或る理由で、甚だ悲しかつたことを憶えてゐる。私は、折々私の前の彼女の白い著物を簇がつてゐる木の葉の間からちらりと見た、私は機械的に、どうしても彼女を見失ふまいとして眼けて行つた。しかし私は、彼女が私に氣づく事を考へると身震ひするのであつた。半分間ばかり待つてから私は、矢張り灌木の林から出た、が私はその途の赤い砂の上に封じられた手紙が落ちてゐるのを見てびつくりした、それは、一目見ると、十分間前にM夫人に與へられたものと同一のものだといふことが私には解つた。

私は、それを拾ひ上げた。その手紙は兩側とも白紙であつた、それには宛名も何にも書いてなかつた。封筒は大きくはなかつたが、厚みがあつて重かつた。その中には書簡用の紙三枚以上の分量ははひつてゐたらしかつた。

此の封筒は何を意味するのだらうか？　疑ひもなくそれは、すべての祕密を說明するものであらう。恐らくその中には、Nがあの短い急ぎの會見では表はすことを望むことも出來ないすべての事が話さしてゐたのであらう。彼は馬から降りもしなかつたのだ……。彼は急いでゐたのであつたか、又は、別れの時に彼自身に對して不信であることを恐れてゐたのか——神が知つてゐる……。

私は立ち止つて、その途へは出ずに、そこへその封筒を最も目立つ場所へ投げて、M夫人がそれを失つたことに氣がついて戻つて來て探すであらうと想像して、それを見戍つてゐた。けれども四五分間も待つと、私はもう忍びきれなくなつたので、再びそれを拾ひ上げて衣嚢に入れて、それからM夫人を追ひかけて行つた。私は、庭の中の大きな並木のある途で彼女のそばに現れた。彼女は、考へに氣をとられてゐるやうに敏捷な急ぎ足で家の方へ眞直に歩いてゐた、そして眼は地面を見詰めてゐた。私はどうしたらいゝか分らなかつた。彼女の處

へ行つて、それを渡さうか？　それは、私が何もかも知つてゐた、すべてを見てしまつたと言ふのと同様だつたであらう。第一の言葉からして私は、自分を裏切らなければならないであらう。それに私は、どんな風に彼女を見なければならないであらう？　彼女はどんな風に私を見るであらう。私は、彼女が自分の失くしたことを見出して、あの途を戻つて來るだらうといふことを期待し續けてゐた。そこで私は、氣づかれないやうに封筒をその途に投げて置き、それで彼女がそれを發見することが出來るといふやうにすることが出來るだらう。しかし、否！　私たちは家に近づいて來た、彼女はもう氣がついてゐたのだつた……。

不幸にもすべての人々は、その日は非常に早く起きてゐた。何故ならば、前夜の遠足がまづく終つたあとなので、何か新しいことを彼等は準備してゐた、それに就いては私は何にも聞いてゐなかつた。すべての人は出掛けようとしてゐた、そしてヴェランダで朝飯をとつてゐた。私は、M夫人に見られないやうに十分間ばかり待つた、そして庭を廻つて彼女のはひつたあと長いこと經つてから他の側から家に近づいて行つた。彼女は、腕を組んで蒼ざめた顔をして混亂してヴェランダを往つたり來たりしてゐたが、彼女の眼にも、その歩行にも、一擧手一投足にはつきりと察知された所の苦しい絶望的な不幸を制へようと、一生懸命になつてゐることは明かであつた。折々彼女は、ヴェランダの階段を下りて、庭の方へ花床の間を數歩歩いて行つたが、彼女の眼は、途の砂の上やヴェランダの床の上やに何物かを求めて、堪らなさうで、物欲しさうで、不愼重でさへあつた。彼女が失くなしたことに氣づき、その手紙を何處か此處へ家の近くへ落したのだと思つてゐたことは確かであつた――さうだ、さうだつたに違ひない、彼女はそれを確信してゐた。

或者は、彼女が蒼ざめてゐて混亂してゐたことに氣がついた、又他の者は同じことを言ひさへしてゐた。彼女は、健康に就いての質問と見舞とに取圍まれた。彼女は笑はなければならなかつた、冗談を言はなければならなかつた。生々としてみせなければならなかつた。時時彼女は、露臺の隅で二人の婦人と話しながら立つてゐたその夫の方を見た。そして哀れな女は、彼が最初到著した日のと同様の戰慄と困惑とに壓服されてゐた。私は、衣嚢に手を突つ込んで、手紙をしつかりと摑みながら、M夫人が私に氣がつくようにと運命に祈りながら、すべての人々から少し離れた處に立つてゐた。私は、單にちらりと見ることによつてでも、彼女を喜ばし彼女の心配を救ひ、こつそりと彼女に話しかけ度かつた。ところが、彼女が私を偶然見た時には私は眼を伏せてしまつた。

私は彼女の不幸を見た、そして私は間違つてはゐなかつた。今日に到るまで私は彼女の祕密を知らないのである。私は、私が見たところのこと、及び此處に記述したところのもの以

外には何にも知らないのである。恐らくその情事は、人が最初の一瞥によつて想像出來るやうなものではなかつたであらう。恐らくあの接吻は、別離の接吻だつたのであらう、恐らくそれは彼女の平和と名譽とに對して拂はれた犧牲に對する、最後の最も小さな報酬だつたのであらう。Nは行つてしまふのであつた、彼は彼女を棄てようとしてゐるのであつた、恐らくは永遠に。私が、私の手の中に摑んでゐるこの手紙にしても——それがどんな內容を持つてゐるか誰が言ふことが出來よう！　どうして人は裁判することが出來るか？　そして、誰が罰することが出來るのだ？　而もそれでも、彼女の祕密が突然發見されることは、疑ひもなく恐ろしいことだつたであらう——彼女にとつては致命的な打擊だつたであらう。私は、あの瞬間の彼女の顏を憶えてゐる、あれ以上の苦しみを表はすことは出來なかつたであらう。次のやうなことを感じ、知り、確信し、豫期することは恰も死刑執行のやうなものである——十五分間後に、ことによつたら一分間後に、何もかも發見されてしまふであらう、あの手紙が誰かに見附けられて拾ひ上げられる、宛名が無いのでそれは開かれる、そして、それから、……それからどうなるのだらう？　彼女を待つてゐたところのものよりも一層惡い如何なる苦しみがあり得たであらうか？　彼女は、やがて自分を裁判するであらう所の人々の間を動いてゐた。次の瞬間にはそれらの微笑してゐる阿ねるやうな顏は、嘯かすやうな無慈悲

なものとなるであらう。それらの顏の上に彼女は、嘲笑と兇惡と氷のやうな輕蔑とを讀むであらう、それから彼女の生活は、續くべき黎明を持たない永遠の暗黑のうちに投げ込まれるのであらう……。さうだ、私は、今それを理解するやうには、其の時には理解しなかつたのであつた。私は、自分には十分は解らなかつた彼女の危險のことを考へて、曖昧な不審と疑念と心痛とを持つことが出來たに過ぎなかつた。けれども、どんなものが、彼女の祕密のうちに隱されてゐたにしろ、若し贖罪が必要だつたとしたら、私の目擊し、私の決して忘れることが出來ない所のあの苦惱の瞬間によつて、多くのものが贖はれたであらう。

しかし、その時出掛るための樂しげな召集が來た。直ちにすべての者はうれしさうに騷いでゐた、笑ひ聲と生々した饒舌とが凡ゆる方向から聞えて來た。二分間後にはヴェランダはひつそりしてしまつた。M夫人は、到頭具合がよくないからと言つてその仲間に加はることを斷つた。けれども有難いことには他の者は皆出掛けて行つてしまつた、皆大急ぎであつた、それ故、憐れみや質問や忠告で彼女を苦しめてゐる暇は無かつた。ほんの少ししか家には殘らなかつた。彼女の夫が、二語三語彼女に話した、彼女は、それに答へて、すぐにすつかり直るだらうから、心配することはないし、それに寢る程でもないから、獨りで……私と……この時私を彼女はちらと見た、一緒に庭を散步して來ると言つた。これ程幸福なことはまた

と無かつたらう！　私は歡喜を以て眞赤になつた、一分間後には私達は出掛けた

彼女は、本能的に自分の來た道を覺えてゐて、林から歸つて來たと同じ並木道、同じ小徑を歩いて行つて、私には答へもしずに、殆んど私が彼女のそばに歩いてゐることも忘れてしまつて、その眼をぢつと地面に据ゑて、熱心に探しながら前方を見詰めてゐた。

しかし、私たちが、私の手紙を拾つた場所に道が終つてゐるところに到著した時、M夫人は突然立ち止つた。そして、不幸のために弱々しくなつた聲で、其合が悪くなつたから家の方へ歸らうと言つた。けれども彼女が庭の垣の所に到著した時、彼女は再び立ち止つて、一寸の間考へてゐた。絶望の微笑が彼女の脣に現れた、そして、全く疲れ果てへト〳〵になつて、ぐつたりして、たうとう心をきめて、彼女は何とも言はずに振り向いて、元の道へかへつて行つた、その意志を私に話すことさへ忘れてしまつて。

私の心は、同情で引裂かれてゐたが、私はどうしたらいゝか分らなかつた。

私たちは行つた、といふより私が彼女を連れて行つたのであつた、一時間前に私が馬の歩みと彼等の會話とを聞いたあの場所へ。そこには、こんもりした楡の木に近い處に、常春藤と野生のジャスミンと野薔薇との生えてゐたそばの大きな石で切斷された場所があつた。その森全體は、小さな橋や東屋や岩穴や、それに似た多くの驚異で點綴されてゐた。M夫人は

そこのベンチに腰かけて、私たちの前に展開された驚くべき光景を上の空で眺めてゐた。次の瞬間には彼女は、本を開いて、それを讀むでもなく、頁も繰らず、殆んど自分が何をしてゐるのが無意識で、その上に眼を据ゑてゐた。九時半頃であつた。太陽は最早高くなつてゐた、さうして、深い青空の中に輝かしく浮んでゐた、恰もそれ自身の光の中へ鎔け込んでゐるかのやうに。草刈の人々は、今までにもうずつと遠くの方へ行つてゐた、刈られた草の際てしない山は完全な連續をなして彼等のうしろに這つてゐた、そして折々かすかに搖らぐ微風がその芳香を私たちの方へ送つた。「蒔きも刈りもしない」そしてその浮かれてゐる翼を以て切り開いてゐる空氣のやうに自由な草や花のかつて罷んだことのない奏樂が私たちの周圍にはあつた。その時には、すべての花や草の葉は奉納の香りを發散しその創造主に向つて、「父よ私は惠まれてゐます、そして幸福です。」と言つてゐたかのやうであつた。

私はちらりと彼女を見た。哀れな女は、このあらゆる喜ばしい人生の中に在つて死んだ者のやうに見えた、苦い悲しみによつて彼女の胸からしぼり取られた二滴の大きな涙は、彼女の睫毛の上に動かずにぶら下つてゐた。此の可哀想な弱い心を救ふことは、私の力に在つたのである、が私はどうしてその點に近づいたらいゝのか、どうして一歩を踏み出したらいゝ

のか唯だ分らなかつた。私は苦しんだ。何百回となく私は、彼女のそばへ寄らうとしてゐた。しかし私の顔は火のやうに輝くのだつた。

突然、私は非常な考へを思ひついた。私はそれをなすべき方法を見出した。私は、蘇生した。

「僕、花束を拵へて來て上げませうか？」私は、M夫人が頸をあげてぢつと私を見詰めた程喜ばしげな聲で言つた。

「えゝ、拵へて頂戴。」彼女は、たうとう、かすかに微笑して弱々しい聲で言つたが、すぐ復た本の方へ眼を落してしまつた。

「でないと、ぢきに此處の草は刈られてしまふんだ、花は失くなつちまふんだから。」私は熱心に仕事にとりかゝりながら叫んだ。

私は、間もなく花束を拵へた、それは貧弱な單純なもので、家の中へ持つてはひることを私は恥かしく思つたであらう。けれども私が花を拾つてそれを結びつけてゐた時、私の心は如何に輕くなつてゐたか！　野薔薇と野生のジャスミンとを私は、坐つてゐた處の近くで拾つた、餘り遠くない處にまだ刈られてないライ麥の畑があつたのを私は知つてゐた。私は、それをとりに走つて行つた。私は、一番綺麗な、そして一番金色をしてゐるのを選つて丈の高い麥の穗をつみとつてそれに交ぜた。そのすぐそばの、忘れな草の澤山生えてゐるところへ私は行つた、私の花束は殆んどいつぱいであつた。すつと離れた牧場の中には、眞蒼な風鈴草と野生の石竹とがあつた。それから私は、萹蓄草をとりに河のふちまで下りて行つた。たうとう私は、戻つて來て、花束の周圍につけるために光り輝く綠色の扇の形をした楓の葉をとりに森の中へはひつて行つたが、偶然にも私は色々の種類の三色菫のある處を通つた、そのそばには幸にも、菫の芳香が、厚い水々しい草のうちに隱れてまだ露の玉の閃いてゐる小さな花を表はしてゐた。花束は完成された。私は、美しい長い草を繩のやうに絢つてその廻りを縛つて、それから用心深く手紙をその眞中へ入れて花で隱したが、一寸でも注意が私の花束に拂はれゝば容易く氣がつくやうにしておいた。

私は、それを夫人のところへ持つて行つた。

途中で私は、手紙が餘り見え過ぎるやうな氣がしたので、それをもつと奥へ隱した。彼女の近くへ來た時私は、それを尙ほ奥の方へ押し込んでしまつた。そして遂に、その場所へ著いた時には私は突然、外からは全く氣がつかない程に、その花束の中央へまで深く突込んでしまつた。私の頰は、全く燃えてゐた。私は、自分の顏を兩手で隱して、すぐにも駈け出して行つてしまひたかつた。併し彼女は、私が花を集めに行つたことをすつかり忘れてしまつたかのやうに、それをちらと見た。機械的に殆ど見もしずに彼女は、手を伸ばして私の贈物を取つ

たが、すぐそれを、さうするやうに彼女に渡されたものでもあるやうに、坐つてゐるそばへ置いて、考へに氣をとられてゐる風で再び本に眼を落してしまつた。私は、この不運のために泣き出しさうであつた。「たゞ私の花束を彼女のそばへ持つて行きさへしたら！」と私は考へた。「彼女がそれを忘れてしまつたのでさへなかつたら！」私は、餘り遠くない草の上に横になつて、右手で頭を支へて、眠氣が差して來たやうに眼を閉ぢてゐた。しかし私は、彼女をぢつと見戍つて待つてゐたのだ。

十分間經つた、彼女はだん〳〵蒼白くなつて行くやうであつた……。幸にも惠まれたる好機會が私の助けに現れた。

これは、深切な私にとつては幸ひな微風に持つて來られた大きな金色の蜂であつた。それは、最初は私の頭の上でぶん〳〵言つてゐたが今度はM夫人の方へ飛んで行つた。彼女は、一二度それを拂つた。が蜂は一層しつこくなつた。遂にM夫人は、私の花束を摑んでそれを私の顏の前で振つた。その瞬間に手紙が花の間から落ちて、開かれた本の上に落ちた。私はドキツとした。暫らくの間M夫人は、驚きのために口もきけずに最初は手紙をそれから彼女が手に持つてゐた花束を見詰めてゐたが、彼女は自分の眼を信ずることが出來ないやうであつた。忽ちに彼女は眞赤になつて、飛び上つて、私を眺めた。けれども私は、彼女が動き出したのを見ると、眠つてゐるふりをして、しつかりと眼を閉ぢてゐた。その瞬間には、私をして彼女の顏を眞正面に見させるものは何にもなかつた。私の心臟は、村の子供に捉へられた小鳥のやうにドキ〳〵と踊つてゐた。私は、どの位眼を閉ぢて横つてゐたか憶えてゐないが、二三分間だつたであらう。到頭私は、思ひきつて眼を開いた。M夫人は、貪るやうに手紙を讀んでゐた。そして、彼女の輝く頰から、彼女の閃いてゐる涙のいつぱいになつた眼から、彼女の光り輝いた顏から、喜びに充ちた情緒に震へてゐた凡ゆる容貌から、私は、その手紙の中には幸福なことがあつて、凡ゆる彼女の不幸は煙の如く消散して了つた事を推量した。苦しく甘い感情が私の胸を嚙んだ。そんな風にしてゐることは私には困難な事であつた……。

私はあの瞬間を決して忘れないであらう！

突然、ずつと遠くの方から聲が聞えて來た——。

「M奥さん！　ナターリエー　ナターリエー！」

M夫人は、返事しずにその場から急いで立ち上つて、私のところへ來て、私の上に身を屈めた。私は、彼女が私の顏をぢつと覗き込んでゐたことを感じた。私の睫毛は震へた、が私は、自分を制へて、眼を開かなかつた。私はもつと當り前に靜かに呼吸をしようとしたが、私の心臟は烈しい鼓動を以て私を息づまらせた。彼女の燃えるやうな息が、私の頰に燒けつ

いた、彼女は、よく試めさうとして私の顔のすぐそばまで屈んでゐた。遂に接吻と涙とが、胸の上に裁せてゐた一方の手の上に落ちて來た。

「ナターリエ！　ナターリエ！　何處にいらつしやるの。」といふ聲が、今度は大變近くなつて再び聞えた。

「いらつしやいな。」W夫人は、私より外には誰も聞くことが出來なかつたやうな息詰つた涙にふるへた軟かな銀のやうな低い聲で言つた。「いらつしやいな！」

けれども、その時の私の心はたうとう私を裏切つて了つた、そして體中の血が私の顔へさつと上つたやうな氣がした。その瞬間に、甘い燃えるやうな接吻が私の脣に燒きついたので あつた。私は、かすかな叫び聲を發した。私は眼を開いたが、忽ちにその上にあの同じ紗の頸巻が落ちて來た、恰も彼女が私を太陽から蔽ひ隱さうとしたかのやうに。次の瞬間には彼女は行つてしまつてゐた。私は、速かに去つて行く跫音のほか何にも聞かなかつた。私は獨りであつた……。

私は、喜びから夢中になつて彼女の頸巻を伸ばしてそれに接吻した、暫らくの間私は殆んど氣違ひのやうになつてゐた……。殆んど息もつけずに、草の上に肘をつきながら、私は無意識に自分の前を見詰めてゐた——畑のぼつ〳〵と見える周圍の傾斜地を、日に照らされた遠方に點のやうに輝いてゐた小山と村々との間に、眼の屆く限りの遠くの方によぎれたり纏ひつくやうになつたりしてゐる小川を、恰も燃えるやうな空のふちに烟るやうに思はれ、そして甘い靜けさが、私の苦しみ惱んだ心を次第に靜かにさせた光景の勝ち誇つた平和によつて感銘されたかのやうに思はれる眞蒼な、殆んど見えない森林を。私は、次第に氣輕になり、一層自由に呼吸した、が恰もヴェールが何物かを始めて味ふ時のやうに私の眼をかくしてゐたかのやうに私の全精神は、默々とした甘い憧憬に充ちてゐた。期待のためにかすかにふるへてゐた私の脊かされた心は、或る臆測に向つておづ〳〵とそして喜ばしげに摸索してゐた……そして忽ちに私の胸は高まり、何物かに引裂かれたやうに痛め始め、そして涙が、甘い涙が私の眼から迸り出た。私は、兩手に顏を隱して、草の葉のやうに震へながら、始めての意識に、私の心の啓示に、私の天性の始めての曖昧な一瞥に身を任せきつたのであつた。私の幼年時代は其時で終つたのである。

二時間後に、私が家へ歸つて行つた時、私はM夫人を見出すことが出來なかつた。或る突然の事が起つて、彼女はその夫と共にモスクヴへ歸つて行つてしまつたのであつた。私はそれ以來、彼女に一度も會はなかつた。

優しき魂

（空想の物語）

第一部

第一章　私と彼女

おゝ、彼女が此處にぢつとしてゐる間は、すべては全くいゝのである。私は、始終立ち上つて彼女を見に行く。けれども明日は、人々が彼女を連れ去るであらう——そして、如何にして私は獨り殘るのであらう？　今、彼女は應接間のテーブルの上に載つてゐる。人々が骨牌のテーブルを二つ、一緒にくつ附けて置いたのである。明日は棺が此處へ來るであらう——白い、全く白い——だが、そんなことではない……

私は、それを自分自身に說明しようとしながら步き廻りつゞけてゐる。私は、この七時間といふもの、それを明かにしようと試みてゐたのだが、尙ほ私は、それを皆全體として考へることが出來ないのだ。

事實は、私があちこちへ步き廻つてゐるといふことなのだ、あつちこつちへと。

そんな譯だつたのである。私は單にそれを順序を立てゝ話さう。（順序！）

諸君、私は文學者とは緣の遠い人間である、そして諸君は、それを見らるゝであらう。だが構はない、私は、自分自身の理解する通りにそれを話さう。私にとつて恐ろしいことは、それをすつかり理解するといふことなのである！

若し諸君が知りたいならば、その最初から書くが、彼女は、一人の女が外交員たることを望んでゐるとか、家庭で學課を敎へることを望んでゐるとか、又は、其他のことの意味で、「聲」へ出す廣告に拂ふために、物を質入れするといふ丈けのことで私の處へよく來るのであつた。それが、抑もの始めであつた。そして私は、勿論彼女と他の人々との間に何等の差異もあるとは思はなかつた。「彼女は來る、」と私は考へた。「他の人のやうに。」そんな譯であつた。

しかし、後には私は差異を見始めた。彼女は非常に細そりした、色の白い、小柄な、やゝ丈の高い女で、いつも私に對しては少し具合がわるさうだつた、まるで困惑してゐたやうだつた。（彼女はすべての他人と同樣だつたのであらう、そして彼女の眼には、勿論私は他の人と全く同じで——即ち質屋としてゞはなく人間として——あつたのだらうと私は思ふ。）

彼女は、金を受取るが早いか、すぐ振り向いて、行つてしまふのであつた。そして、いつも默つてゐた。他の婦人たちは、大變議論したり、懇願したりして、もつとくれと私を惱ますのであるが、此の女はもつとくれと賴んだことは無かつた……。

私は、それをごつちやにしてゐると思ふ。

さうだ、私は、第一に彼女の持つて来た物によつて驚かされた、貧弱な小さな銀鍍金の耳環、やくざな小さな箱、二十錢の値打もないものなどである。彼女は、それらの物が殆んど何の値打もないものだといふことを自分でも知つてゐたのであるが、それらは彼女にとつては寶物であつたといふことが、その顏附を見ればすぐ解つた。そして私は、後になつて、それらが彼女の父と母とから彼女に殘されたすべてであつたことを、事實として知つた。

たつた一度私は、彼女の品物を嘲弄する氣になつたことがあつた。私が決してそんなことをする氣になる人間でないといふことは解るであらう。私は、自分の顧客に對しては紳士らしい調子を保つてゐる、寡言、尊重、嚴格。「嚴格！　嚴格！」

けれども、一度彼女は、最後の襤褸を、卽ち文字通りに古ぼけた毛皮の下著の切れ端を思ひ切つて持つて來たのであつた。そこで私は、冗談にして何事かを言はざるを得なかつた。神よ！　如何に彼女は燃え上つたか！　彼女の眼は大きく、碧く、そして夢みるやうであつた、が——如何にその眼が燃えたか。しかし彼女は、一語も洩しはしなかつた。彼女の「襤褸」を拾ひ上げて出て行つた。

私が特に彼女に注意し、彼女に就いて或る事をあへたのは、其時が始めてであつた——つ

まり、特殊な種類の或る事を。さうだ、私はもう一つの印象を憶えてゐる——卽ち、若しも諸君がそれを知るならば、恐らく、すべての事を概括する所の主要な印象となるであらう。それは、彼女が恐ろしく若い、やつと十四位かと思はれた程ひどく若いといふことであつた。それでも彼女は、三月たてば十六になるのであつた。が、私はそんなことを言ふつもりではなかつた、それはすべてを概括するところの物ではなかつた。翌日彼女は再びやつて來た。私は此頃になつて知つたのだが、彼女はあの下著を持つてドブロンラーヴォフの處とモーゼルの處とへも行つたのであつたが、彼等のところでは金のもの以外には何にも取らないのだから、それに就いては何にも言はなかつたであらう。私は、一度彼女から幾つもの或る石を取つた。（がらくたな小さな石。）そして私は、それをあとでよく考へてみて驚いた。私も矢張り金か銀かで貸す許りだつたのだが、彼女から私は石を受取つてしまつた。それは、彼女に就いて二度目に私が考へた時であつた、と記憶する。その時、それは彼女がモーゼルの處へ行つて來た時だが、彼女は琥珀色のパイプを持つて來た。それは、惡くない美術品ではあつたが、矢張り我々にとつては何の價値もないものであつた、何故なら我々は金屬の商ひばかりしてゐたのだから。彼女の「反抗」の翌日のことだつたが、私は、彼女を苛酷に扱つた。私が苛酷になると冷淡の形を採るのである。彼女に二留與へた時私は、それでも、一寸狼狽しな

がら、かう言はずにはゐられなかつた。「私は、勿論貴女のためだから差上げるんですよ、モーゼルではこんな物は取りますまい。」

その「貴女のため」といふ言葉を私は、特に響かせた、そして特別なものを含ませて。

私は悪かつたのだ。彼女はその「貴女のため」を聞いた時再び赧くなつた、併し彼女は一語も言はなかつた、その金を拋り出しはしなかつた、彼女はそれを取つた——貧乏なのだ！

だが、如何に彼女は眞赤になつたらう！　私は、自分が彼女に苦痛を與へた事を見たのである。そして、彼女が行つて了つた時、私は突然、彼女に對する私の勝利が二留の價値だつたのかどうかを自分に訊ねた。へつ、へつ、へつ！　私は、再び繰返してその質問を自分に加へた事を憶えてゐる。「あれはその價値があつたのか？　——あれはそれに値したのか？」

さうして、笑ひながら、私は内心にこれに答へてそれを是認した。で、私は非常に得意な氣がした。けれども、あれは悪い感情ではなかつた。私は、計畫あつて、或る動機からあれを言つたのだ。私は、彼女を試めさうと欲したのである。何故ならば、彼女に就いての或る考へが突然私の心に浮んだからであつた。それは、私が彼女に就いて特に考へた第三番目のものであつた。……さて、すべての事が始まつたのは、其の時からであつた。勿論、私は早速間接にすべての彼女の事件を見出さうと試みた、そして、特別氣短かに、彼女の來るのを

待つてゐた。私は、彼女は間もなく來るであらうといふ豫感を持つてゐた。彼女が來た時私は、いつにない鄭重な口のきゝやうをしながら、彼女に愛想よく話しかけた。私は、善い教育を受けてゐないわけではないし、且つ作法をも心得てゐる。ふむ。彼女は、穩かな心の優しい女だといふことを、私はその時推測した。

優しい、穩かな心の女といふものは、いつまでも會話を拒まず、且つ、彼等は決して自分を明かに見せようとはしてゐないが、その會話から如何にして逃れるべきかを知らないのであるが、そして澁々答へるばかりではあるが、併し彼等は答へるのである、そして、諸君が續ける限りは快く答へるのである。たゞ諸君は、彼等を話させようとするならば、自分の方のこと許り言つてゐてはならない。彼女はその時、私に何事をも説明しなかつたことは云ふまでもないことである。「聲」に就いて、及び私が後になつて發見した色々のことに就いて。その時彼女は、自分の最後の一錢を廣告に費ひつゝあつたのである、勿論最初は傲慢に。「外交員たらんとする一人の女、申込み次第條件をお送りすべし。」といふのだつたのが、此頃ではかうなつた、「仕事を望む、教授すること、隨伴者たること、家政をとること、病人看護、平服仕立、云々、云々。」在りきたりの事だ！　勿論、これらの事は、一度に少しづつ廣告に附加へられたのであるが、終ひには、彼女が絶望しきつた時には、「仕込みとすれば給料を要

せず。」と云ふことになつた。否、彼女は、位地を得ることが出來なかつた。私は、其時最後の場合として彼女を試めさうと決心した。私は、突然其の日の「聲」を取り上げて、或る廣告を彼女に示した。「年若き女、係累無し、裸母の職を求む、中年の寡夫の家庭に望む、家庭の慰安たるべし。」

「どさんすか、この婦人は今朝廣告を出したと思ふと、もう夕方までにはきつと位地を得るでせう。これが廣告法といふものですよ。」

再び彼女は眞赤になり、彼女の眼は燃えた。彼女は、振り向いて眞直に出て行つた。私は非常に喜んでゐた、尤もその時までには私はすべての事を確かに感じてゐたし、何等の氣遣ひをも持つてはゐなかつたのだ、誰も彼女のパイプなどを引受ける者はあるまい、と私は思つてゐた。その上彼女は、彼等を悉く避けてゐるのであつた。その通りだつた、二日後には彼女はやつて來た、この非常に蒼ざめた小さな女は、全く混亂してゐた——私は、彼女にはその家で何事かが起つたのだといふことを見てとつた、そして實際或事が起つたのであつた。私は、その時のことを眞直に話さう、だが私は、如何に私が巧妙なことをし、彼女の見解を高めたかといふことを憶ひ出したい丈けなのである。私は、突然さうする決心をした。實は彼女が聖像を質入れしに持つて來たのである。（彼女はそれを質入れしなくてはならなくなつたのだ）！……あゝ、聽き給へ！　聽き給へー　今やさういふことになつたのである、私は混亂してゐた。今言つた通り私は、すべてこれを凡ゆる細かいことまで、凡ゆる些細な點までを想ひ出したいのである。私は、それをすつかり一緒に想ひ起したい、それを全體として見たい、そして——私には出來ない……それはこんな小さな事だ、こんな小さなことなのだ……それは、マドンナの聖像であつた。マドンナと幼兒、古風な、家庭用のもので、そして据附は銀鑛金で、値打は——さうだ、六留には恐らくなるだらう。聖像が彼女にとつて貴重なものであることは私には解つた。彼女は、それもすつかり質入れしようとしてゐた、据附から外さずに。私は彼女に言つた——

「これは据附からとつてお置きになつた方がいゝでせう、聖像は持つてお歸りなさい、これは質に入れるやうな物ではありませんから。」

「でも、それを取ることは禁じられてゐるのです、が、貴女は、多分、貴女御自身が……」

「いや、禁じられてゐるといふ譯ではないのですから。」

「では、それを取つて下さい。」

「ではかう致しませう。私はこれを引受けませんが、他の聖像と一緒に此處の神龕（ずし）の中に入れて置きませう。」と私は、反省して言つた。「この小さい燈火の下に、」（私は、店を開けると

直ぐ、燈火を燃やしておく習慣であつた。)「さうして、貴女には　唯だ十留差上げませう。」
「十留下さらないでいゝのです。五留だけ必要なのです、きつとお返しに上ります。」
「十留は要らないのですか？　その聖像は十留の値打はあるのですが。」と私は、彼女の眼が再び輝いたことに注意しながら附加へた。
彼女は默つてゐた。私は五留持つて來た。
「人を侮るものではありませんよ、私にも、さういふ困窮の時がありました、いやもつと惡かつたでせう、そして、今こんな仕事をしてゐるのも……私が過去に於いて通つて來たところのものの爲めなんです……」
「あなたは、社會へ復讐してるのですか、さうですか？」彼女は、やゝ皮肉な嘲りの調子で突然口を挿んだ、がしかしそれは、可成無邪氣なのであつた。(卽ち、それは當り前のことであつた、何故ならば彼女は、その時には確かに私を他の人々と區別してはゐなかつたのだから。彼女はそれを殆んど惡氣なしに言つたのだ。)
「あゝ。」と私は考へた。「ではお前はそんな人間なのか。お前は性格を持つてゐる、お前は新しい行動をする者なのだ。」
「御覽なさい！」私は、すぐに、半ば冗談のやうに、半ば神祕的に言つた。「私は、惡いことをしようとしてゐる多くの者のはしくれなのですが、善い事をするのです……」
速かに、そして非常な好奇心を以て、(しかしそのうちには大變子供らしい何物かがあつた、)彼女は私を見た。
「一寸待つて下さい……それはどういふ事なんです？　何處からそれは出て來るんです？私、何處かでそんなことを聞いたことがありますけど……」
「頭を惱まさないでもよございますよ。さういふ言葉で、メフィストフェレスがファウストに取入つてゐますがね、貴女は『ファウスト』をお讀みになりましたか？」
「いえ……そんなによくは讀んでゐません。」
「つまり、貴女はちつとも讀んでいらつしやらないんだ。あれを讀まなくてはいけません。だが、まだ貴女は皮肉な眼をしてゐますね。私が、メフィストフェレスを使つて自分を貴女の前に推薦したり、質屋といふ役を飾つたりしようとする程無趣味な人間だとはどうか思はないで下さい。我々は知つてゐます。」
「あなたは隨分變ですねえ……私、そんなことを仰しやらうとは思ひませんでした。」
彼女は、「私はあなたを教育のある人間として見出さうとは思ひませんでした。」と言はうとした、がさうは言はなかつた。けれども、彼女がさう考へたといふことは私は知つてゐた。

私は非常に彼女を喜ばせた。

「ねえ、」私は言つた。「人はどんな職業ででも善いことをすることは出來ます――勿論私は自分のことを言つてるんぢやありませんよ。私は惡いことより外何にもしてはゐないとしたところが、それでも……」

「勿論、人はどんな位地に居ても善いことをすることは出來ます。」と彼女は、速かに意味深い顏附をして私を見ながら言つた。「さうです、どんな位地に居ても。」彼女は突然附加へた。

おゝ、私は記憶してゐる、私は凡ゆるそれらの瞬間を憶えてゐる！　而も私が附加へて置きたいことは、斯くの如き若い女が、斯くの如き氣持のいゝ若い女が何か非常に悧巧な意味深いことを言はうと欲する時には、彼等はその顏に忽ちに非常に忠實に又無邪氣に「さア私は今悧巧な意味深いことを言はうとしてゐますよ。」といふことを表はすものである――それはそれは、私のやうな他の人間にある如く、虛榮心からではなく、彼女がそれを恐ろしく尊重し、それに就いてよく考へ、そして彼女が考へてゐると同樣に誰でもそれを多く考へるものと思つてゐることを、人は見ることが出來るのである。おゝ、信實！　彼等が我々を支配するのはそれによつてである。彼女に於いてはそれが如何に微妙だつたか！

私は、それを憶えてゐる、何にも忘れてはゐない！　彼女が行つてしまふや否や、私は決心

した、その同じ日に私は、最後の研究をなした、そしてその時彼女に就いての凡ゆる細かい事柄を見出した。彼女の過去に就いての細かい事は、私は既にルケーリャから聞いて知つてゐた、それは當時のその家庭の召使で、それを私は數日前に買收したのである。その立場は恐ろしいものであつた、その樣な恐ろしい困難に在る時に、その日なしたやうに彼女はどうして笑ふことなどが出來たのか、又メフィストフェレスといふ言葉に興味を感じたりすることが出來たのか、私には分らない。しかし――それは青春である！　其時私は誇りと喜びとを以て彼女に就いて考へたところのものは正にそれである、何故なら、そのうちには魂の偉大さがあるから――「私は深淵のふちに臨んではゐるが、尙ほゲーテの偉大な言葉は光りに輝いてゐる。」といふことが出來る。青春は、それが閃きで、そして偏つたものでさへあるならば、常に或る魂の偉大さを持つてゐる。だが、私が言つてゐるのは、彼女に就いてである。獨り彼女に就いてである。而も、其上私は、私のものとして彼女を見てゐた。そして自分の力を疑はなかつた。諸君は、若しそれに就いて何等の疑ひをも感じないならば、それは逸樂の考へだといふであらう。

けれども、私はどうであつたか？　若しも私がこんな風に續けて行くならば、何時私はそれをすつかり纏めることが出來るであらう、そして何時、それを全體として見ることが出來

るであらう。私は急がなくてはならない、急がなくてはならない——それはどうでもいゝことである、おゝ、神よ！

第二章　結婚申込

彼女に就いて、私が知つた「細かい事」を、私は一言で話さう、彼女の父と母とは死んでゐた、彼等は三年前に死んだのであつた、そして彼女は、二人の卑劣な伯母と共に殘つたのだつた、が彼等は卑劣だとは餘り言はれてはゐなかつた。一人の伯母は、大家族（少しづつしか年の違つてゐない六人の子供達）を引連れた後家で、もう一人は怖ろしい老嬢であつた。兩方共怖ろしかつた。彼女の父は役所に勤めて居たのであるが、寫本書記としてであつたに過ぎないので、單に禮儀ある紳士といふ丈けのことであつた、實際すべての事が私の氣に入つた。私は、高き世界からやつて來たかのやうに現れたのであつた。私は、兎も角も素晴しい聯隊の退職中尉で、生れつきの紳士で、且つその他のすべての者で、又、私は、たゞ尊敬を以てそれを見ることが出來るばかりの質屋の店に關しては、彼女の伯母たちの處で奴隷のやうに生活してゐたのであつだつたであらう。彼女は、三年の間その伯母たちは、たのであつた。それでも彼女は、どうにかかうにか、何處かの試驗をパスした——彼女はそれをパス

した、彼女は日々の骨折仕事の無慈悲なる重荷によつて壓迫されてゐたのだが、その試驗のために時間を絞り出したのだ、そこで、それは彼女の分としてはより高くより善いところのものに對する努力に關して或事を證明するものであつた！　だが、何が私をして彼女と結婚することを欲せしめたのか？　だが、私のことは心配は要らない、それに就いては後に……重要になつて來るのだ！——彼女は伯母の子供たちを教へてゐた、彼等の著物を作つた、そして終ひには、著物の洗濯をするばかりかその弱い胸を以て、床の掃除をさへしたのである。はつきり言ふと、彼等は、彼女をよく毆るのであつた、そして彼等のパンを食つてゐると言つては彼女を辱しめた。終ひには彼女を賣らうといふ計畫までしてゐた。おゝ！　私は、汚はしい細かい事を忘れてゐた。彼女は、後にそれに就いてすつかり私に話した。

すべての此の事實は、一人の隣人、肥つた店主によつてまる一年の間見られてゐた、そして彼は貧乏人ではなく、二軒の雜貨店の所有者なのであつた。彼は、二人の妻を虐待し、今や三人目を探してゐるところだつた、それで彼は彼女に眼をつけた。「彼女はおとなしい。」と彼は考へた。「彼女は貧乏の中で育つた、そして俺は、母の無い子供等のために結婚しようとしてゐるのだ。」

彼は、實際子供を持つとゐた。彼は、結婚しようとし始め、伯母たちと談判し始めた。その

上彼は五十歳であつた。彼女は恐れ仰天した。彼女が、「聲」に廣告するために、私の處へ屢
屢來るやうになつたのは其の時分であつた。遂に彼女は、ほんの一寸の間考へる時を與へて
くれるようにと伯母たちに嘆願し始めた。彼等は、その一寸の間を彼女に許した、だが、そ
の上には彼女を許しはしまい。彼等は、常に彼女に當つてゐた。「私たちは、餘計な口に食べ
させるのをよすより外には、自分たちの糊口の道は見當らないんだからね。」
私は、既に此のことをすつかり見出してゐた、そしてあの同じ日に、その朝あのことがあ
つてから、私は決心した。その晩店主が店から一磅の菓子を持つてやつて來た、彼女は彼と
一緒に坐つてゐた、そこで私は、ルケーリャを臺所から呼び出して、彼女の處へ行つて、私
が彼女に大急ぎで話したいことがあつて、門のところで待つてゐると囁いてくれるように頼
んだ。私は、自ら喜ばしく思つてゐた。そして其の日は全く恐ろしく私は愉快に感じてゐた
のであつた。
その場で、門の處で、ルケーリャの居るところで、彼女がまだ私に呼ばれた驚きから覺め
ない內に、私は、そのことを名譽として幸福として考へるであらうと彼女に話した……次に
私の發表の爲方を、こんな門の處などで話すことを驚かないでくれと話し、私は眞直な人間
である、そして事件の成行をも知つてゐるのだ、と言つた。そして私は、自分が眞直な人間

だといふのは嘘をついてゐるのではなかつた。さうだ、問題はそこなのである。私は單に禮
儀として言つたのみではなかつた——つまり、私が端正な育ちの人間だといふことを示す
のではあるが、私はオリヂナルな言ひ方をしたのである、そしてそれが主要なことであつた。
要するに、それを許しては、何か害があるだらうか？　私は、自分を審判しようと欲する。
そして自分を審判しつゝあるのである。私は、贊否の論をしなければならない、そこで私は
さうするのである。それは馬鹿なことではあつたが、私はその後にも喜びを以てそれを憶ひ
出した——私は、少しも混亂しずに正直に宣言した、第一に私は特にその才はなかつた、特
に智力的ではなかつた、恐らくは溫厚でもなく、どつちかといふと安價な利己主義者だつた
のだらう。（私はあの時の表情を憶えてゐる、私は途中でそれを考へたのである。そして、それ
に喜ばされてゐたのである。）そして、確かに、他の點に於いて私の中には氣に食はないもの
が澤山あつたに違ひない。すべてこれは、特殊な誇りを以て話された——さういふ種類のこ
とがどうして話されるのか、我々すべての者は知つてゐる。勿論、私は自分の缺陷を正しく
算へ立てゝ置いた後、私の德を立派に見せようとしたり、「それを償ふために私はこれ〳〵の
ものを持つてゐます。」などと言つたりはしない程善い趣味を持つてゐた。私は、彼女がまだ
非常に恐れてゐたことを見た、が私は何にも和げなかつた、却つて彼女が恐れてゐたのを見

ると私は、わざと大げさに言つた。彼女が食つて行くには十分であらうが、美しい著物とか芝居とか舞踏會とかそんなものは――何にも持たないであらう。兎も角後々のことではなく、私が私の目的を達した時には。さう私は彼女に眞直に言つた。此の嚴格な調子が、私にはひどく喜ばしかつた。私は、或る特別な狀態のあることを暗示しながら、かういふ職業をとることと――卽ち、質屋の店を保つて行くといふことに於いて、私は唯だ一つの目的を持つてゐるのだと私は、出來る丈け大ざつぱに附加へた……だが私はさう云ふ權利を持つてゐたのである。私は本當にさういふ目的を持つてゐた、本當にさういふ狀態があつたのである。一寸待つてくれ給へ、諸君、私は常に、此の質屋といふ職業を嫌ふ第一人者であつた、が事實に於いては、さういふ神祕的な言葉で己自身のことを言ふのは馬鹿なことだが、併し私は、「社會に復讐しつゝ」あつた、私は本當にさうだつた、さうだつた！　それ故その朝私の復讐の考へに對して彼女が與へた嘲笑は不正であつた。卽ち、誰にでも解ることだが、若し私が眞直に、「さうです、私は社會に復讐してゐるのです。」といふ言葉で言つてしまつたならば、彼女は、その朝なしたやうに笑ひ去つたであらう、そしてそれは實際馬鹿なことだつたであらう。けれども、間接の暗示によつて、神祕的な言葉を使ふことによつて彼女の想像に依ることは出來たのであつた。その上、その時私は何の恐れをも持つてはゐなかつた。兎に角肥つた店主は、彼女に對しては私よりも一層いやだつたのだといふことを私は知つてゐた。そして門のところに立つてゐた私は、救ひ主として現れたのだといふことを知つてゐた。勿論、私はそれを理解してゐた。おゝ、卑しい人間が特によく理解するところのものは何であるか！　だがそれは卑しかつたらうか？　人はどうして裁斷することが出來るのだ？　私はその時にも彼女を愛してゐなかつたのだらうか？

一寸待つてくれ給へ。勿論私は、彼女の爲めになることをしてやるなどとは彼女に一語も言ひはしなかつた。その反對に、おゝ、全くその反對に、責を負ふところのものは、私に對する彼女ではなく、彼女に對する私なのだといふことを私は明かにした。實際、私はそれ丈けのことを言つた――それを言はずにはゐられなかつた――そして、恐らくそれは愚かに響いたのであらう、何故なら私は、彼女の顏に或る陰影が通つたことに氣がついたから。けれども私は、其日全く完全に勝利を得た。待ち給へ、若し私がすべての惡いことを記憶してゐるならば、私はその最も惡い野獸性に就いて話すであらう。私が立つてゐた時、私の心の中に起つてゐたところのものは「お前は丈が高く、いゝ姿で、教育もあり、それに――自惚でなしに言ふのだが――いゝ樣子だ。」といふことであつた。それが、私の心中に働いたところのものであつた。殆んど言ふ必要もないことだが、その場で、そんな戸外で、門の處などで彼女

は、「承諾します。」と言つたのである。しかし……しかし附加へて置かなければならないことは、そんな戸外で門の側で、彼女は「承諾します。」と言ふまでには長い間考へたのであつた。彼女は、私が「どうですか？」と言つた程――そして、いくらか力み返つてさう言はずにはゐられなかつた程、長い間沈思してゐた。

「一寸待つて下さい、私、考へますから。」

さうして彼女の小さな顔は、そんな時でさへ私がそれを讀みとることが出來た程、非常に眞摯に、非常に眞摯になつて來た！　そして私は心苦しくなつて來た。「彼女は、俺とあの雜貨商とのどつちかを選ぶことが出來るんだらうか！」と私は考へた。おゝ、私はその時は理解しなかつた！　私は、その時には何事をも、何事をも理解しなかつた！　私は今日まで理解してゐなかつた！　私は、外へ出て行つた時ルケーリャが後ろから走つて來て、往來で私を止めて、息をつかずにかう言つたのを憶えてゐる。「神樣がお報い下さいますよ、あなた、お家の若い女の方のためにね。たゞあの方にさう言つてはいけませんよ――あの方は高慢なんです。」

高慢だつて、彼女が！「俺は高慢な人間が好きだ。」と私は考へた。高慢な人間は特に美しい……さうだ、人々を支配する自分の力を疑はない時には、さうではないか？　おゝ、卑しい無能な人間だ！　おゝ、如何に私は喜んでゐたらう！　彼女が門の處に立つて、私に對して「諾」と言はうかどうかと躊躇してゐた時、そして私がそれを怪しんでゐた時、諸君は知るであらう、彼女はかういふ樣な或る考へを懷いてゐたのかも知れない、「若しもどつち道不幸になるのならば、最も惡い方をとつた方がよくはないだらうか？」――即ち、あの肥つた雜貨商をして、彼が醉つた時死ぬ程に彼女を毆らせようと！　えゝ！　諸君はどう思ふか、そんな考へが有り得たであらうか？

そして、實は、私には現在それが解らないのである。私は今でも全く理解してはゐないのである。私は今、彼女が二つの內惡い方を――即ち雜貨商の方を選ぶといふ、そんな考へを持つたかも知れないと言つた許りである。が、その時彼女にとつて最も惡いものは、どつちだつたのであらう――雜貨商か私か？　雜貨商か、それとも、ゲーテを引用した質屋か？　それがもう一つの問題である！　何といふ問題だらう！　そして、それさへ諸君は理解しないであらう、その答へはテーブルの上に橫はつてゐるのである、そして諸君は、それを問題と呼んでゐるのである！　だが、私のことはどうでもよいのだ。それは全く私の問題ではない……そして、序に言ふが、そこには今私に對して殘された所のものがある――それは私の問題だらうか、それともさうではなからうか？　それは、私が全く答へることの出來ないもの

なのである。私は、寝床にはひつた方がよいのだ。私の頭は痛む……。

第三章　自分では信じてゐない最も高尚なる人間

私は眠ることが出來なかつた。そして、私はどうしたらいゝのであらう？　私の頭の中はドキ〳〵と鼓動してゐる。人は、そのすべてを、すべての墮落を卒業しようと熱望してゐる。おゝ、墮落！　私があの時から彼女を曳ずつてゐたのは何といふ墮落であらう！　勿論、彼女はそれを知つてゐたに違ひない、彼女は、私の行爲を評價してゐたに違ひない！　私は、矢張り、色々のことを考へて喜んでゐた——例へば、私が四十一で彼女がやつと十六だといふやうなことを考へて。それは私を魅惑した、その不均等の感情は、非常に快かつた、非常に快かつた。

例へば、私は英國で結婚式を擧げたかつた、卽ち我々二人だけで、必要な目擊者も二人だけで、その一人はルケーリャだが、そして、結婚式から眞直にモスクヴへ汽車で行く。（其處で私は、序でにする仕事が偶然あつた。）それからホテルで二週間過すのだ。彼女は、それに反對した、彼はそんなことをしたくなかつた、それに私は、彼女の伯母たちを訪問して、まるで彼等を、私がそこから彼女を貰つた身うちの者とでもいつたやうな具合に、尊敬を以て取扱はなければならなかつた。私は讓歩して、そしして凡ゆる適當な尊敬をその伯母たちに拂つた。私は、そいつ等に各自百留づつの贈物をしさへした——それに就いては何にも彼女に告げないといふことを、勿論、彼女をして、その環境の低劣さによつて恥ぢを感じさせないように。伯母たちは、忽ちに絹のやうな柔かになつてしまつた。そこには、嫁入道具に就いての爭論もあつた、彼女は何にも、（殆んど文字通りに）持つてゐなかつたが、何にも欲しがらなかつた。しかし私は、彼女が何か持つて來なければいけないといふことをうまく彼女に說明して、嫁入道具を拵へた。私がしなければ誰が彼女に何かを與へたであらう？　だが、それで、私には十分であつた。しかし私は其時、私の考へと彼女の考へとを交通させることに成功したので、兎も角、彼女はそれを知つた。恐らく私は、全く大急ぎであつたらう。最もよかつたことは、最初から、彼女は、熱心な愛を以て私に逢ひ、喜びを以て私を扱つたことである。夕方、私が彼女に逢ひに行つた時にも彼女は、囀づるやうに（魅するやうな無邪氣な囀づり）私に話した、彼女の幼年時代に就いて、少女時代に就いて、以前の家庭に就いて、父と母とに就いてのすべてを。けれども私は、直樣その上に悉く冷い水を注いでしまつた。私は、沈默を以て、勿論、親しみ深い沈默を以て彼女の熱情に對した……が、それにも拘らず彼女は、我々が違つてゐたことを、

そして私が――一個の謎であつたことを速かに見ることが出來た。そして、謎であることが私の最も重んじてゐたところのものであつた！　さうだ、私がこの凡ゆる馬鹿なことに就いて罪深い者であつたといふのは――正にその謎たることの爲めなのであつた。第一のものは嚴格さであつた――私が彼女を私の家に入れたのは、嚴格さの態度を以てであつた。實際、私はそれにとりかゝつた時、滿足を感じながら安全なる法式を形作つたのである。おゝ、それは何の努力もなしに獨りでに現れたのである。そしてそれは、その他の方法をとることは出來なかつたのだ。私の、必要なる事實のためにその法式を創造しようとしてゐたのであるものであつた。さうだ、聽き給へ、若しも諸君が、一人の人間を裁判しなければならないならば、先づそれに就いてすべてのことを知つてから彼を裁判する方がいゝであらう……耳を傾け給へ。

私はこれをどうはじめようか、それは甚だ困難なのである。誰でも自分を辯護し始める時――その時は困難なものである。例へば、若い人々が金錢を蔑視する――と私は忽ちに金錢を重要なものとする、私は金錢の上に特殊な力を置くのであつた。さうして、彼女が次第次第に沈默勝ちになつてしまつた程、その上に力を置いた。彼女は、大きく眼を開いて、耳を傾け、注目し、そして何にも言はなかつた。若き者は英雄的である、英雄的で衝動的であることは彼等の間に在つては善いことである、が彼等は殆んど忍耐を持つてゐない、殆んどといふことが全く正しくないとすれば、彼等は輕蔑に充ちてゐるのである。私は、寬容を欲した、彼女のその心の中へ寬容を注入しようと欲した、それを彼女の一番奥の感情の一部分たらしめようとした、私はそれをしなかつたか？　私は、些細な例を採らう。さういふ風な性格の者に對して、私の質屋の店をどう說明しなければならなかつたのであらう？　勿論、私はそれを直接に言ひはしなかつた、でなければ、私は辯解してゐたことになつたであらう、そして私は、云はば誇りからそれをなした、私は殆んど言葉なしで話した、そして私は、言葉なしで話すことに熟達してゐるのである。生涯私は、言葉なしで口をきいてゐた、そして私は、自分自身のために、言葉なしで、凡ゆる悲劇の中を通つて來た。何故、私は、矢張り、不幸だつたのであらう！　私はすべての者に棄てられてゐた、棄てられ忘れられてゐた。そして誰も、誰もそれを知らなかつた。ところが、忽ちにこの十六年の少女は、殘しい人々から私に就いての色々なことを聞き集めて、彼女は私をすつかり知つたと思つてしまつた、だが、それにも拘らず、この心の中には如何に貴いものが隱れて殘つてゐたであらう！　私は、沈默し續けた、彼女に對しては特に、私は沈默してゐた、彼女に對しては特に、全く昨日ま

で——何故私は沈默してゐたのであらう？　何故なら私は、高慢だつたからだ。私は、彼女に自分で發見することを欲した、私の助けなしに、そして賤しい人間の話からではなしに。私は、私がどういふ人間であつたか、そして私を理解する爲めに彼女自身判斷することを彼女に欲してゐたのだ！　彼女を家へ連れて來てから、私は、凡ゆる彼女の尊敬を欲した。私は、私の苦しみのために敬意を拂つて私の前に立つことを彼女に欲した——そして私はそれに相當したのである。おゝ、私は、常に高慢であつた、私は常にすべてか虛無かを欲してゐたー　それは、私が、半分でも幸福を受入れるであらう所の人間ではなく、常にすべてを欲してゐたといふその理由に他ならないのであつた。私はその時、そんな風に行はずにはゐられなかつた、言ふべきことはこれ丈けであつた。「お前自身で私をごらん、さうして私を評價するがいゝ！」何故ならば、若しも私が、自分を相手に氣に入るやうに持ち込み、彼女の尊敬を求めながら、彼女に向つて自分を說明し始め、彼女に助言し始めたとしたら——それは、慈悲を求めるのと同じことだつたであらう、といふことを諸君は知らなければならない……が併し……併し、何故私はそんなことを話してゐるのであらう！

馬鹿、馬鹿、馬鹿、馬鹿！　私は、その時彼女に說明したのだ、二語三語、直接に、無慈悲に。（そして私は、この無慈悲にであつたといふ事實を强調する。）青春の英雄主義（ヒロイズム）は愛らしいものである、が——一錢の價値もないものだ、と、何故その價値がないのか？　何故ならそれは生活によつて達せられるのではないから、非常に少しの價値しかないのである、それは、云はゞ、「存在の最初の印象」に過ぎない、けれども今、諸君の働きを見ようではないか！安價なる英雄主義は、常に無造作なものである、そして生活を犧牲にすることさへも矢張り無造作なものである。何となれば、それは熱い血と、エネルギイの溢出の場合のみである。而も、其處には、美しきところのものに對する熱望であるのだ！　否、困難なる、曖昧なる、騷擾も光彩もない、汚辱を受けたる英雄主義の行爲をとつて見給へ、そのうちには非常な犧牲があるが、一粒の光榮もない——そのうちには、素晴しい人間たる諸君は、世界中の最も正直な人間であるのに、すべての者の前に惡漢のやうに見られることになつてゐる——諸君は、さういふ種類の英雄主義を試みると、まもなくそれを止めてしまふであらう！　然るに私は——生涯その重荷を負ひつゞけてゐたのだ。最初彼女は言ひ爭つた——おゝ、如何に彼女は言ひ爭つたか——が後には沈默になり始めた、實際、耳を傾けながらその眼を大きく開けて、本當に大きく、大きくして、非常に注意深く、全く沈默してしまつた。而も……而もその上に、私は突然微笑を見た、不信なる沈默せる兇惡なる微笑を。さうだ、私が彼女を私の家へ連れて來たのは、彼女の顏に於けるその微笑と共にであつた。彼女が、何處にも他に

行くところが無かつたといふのは、本當である。

第四章　計畫又計畫

我々の內どちらが、最初にそれを始めたか？　どちらでもない。それは、その最初から、獨りでに始まつたのである。私は、嚴格さを以て彼女を家へ連れて來たと言つた。けれども、第一歩から私はそれを緩和した。彼女は結婚しないうちに、貰受けをするので金を出さなければならないといふことが彼女に說明されねた、そしてその時には彼女は何にも言はなかつた。（そのことに注目し給へ。）その上彼女は、全く熱心に仕事をし始めた。さて、勿論、私の宿、私の家具は皆、以前の通りに殘つてねた。私の宿は、二つの部屋から成つてゐて、大きい方の部屋からは、店が分たれてゐた、もう一つの方も、矢張り大きくて我々のと居間と寢室とになつてゐた。私の家具は乏しかつた、彼女の伯母たちですら、もつと善い物を持つてゐた。燈火のつけてある私の神龍は、店になつてゐる外側の部屋にあつた、內側の部屋には、少しばかりの本の這入つた書棚と、私が鍵を持つてゐる鞄と、それから勿論、ベッドとテーブルと椅子は置いてあるのである。彼女が結婚しない前、私は彼女に我々の賄ひに費されるものは一日一留かそれ以上ではないと

言つた——卽ち、私と彼女と私が我々のところへ來させたルケーリャとの食費である。「三年に、三萬留はとらなけりやならない。」と私は言つた。「我々はこれ以上費へば貯金は出來ない。」彼女は、これに從つた、が私は一日に三十哥だけの額をあげた。それは芝居に就いても同樣であつた。結婚しない前は私は彼女に言つた、芝居になんぞ行くのではない、と。それでも私は、月に一度芝居へ行くことに極めた、そして相應な遣方で、特別席へ。我々は一緒に行つた。我々は三度行つた、そして、「幸福をあさる人」を觀た、「歌ふ小鳥」も觀たと思ふ。（おゝ、それがどうしたのだ！）我々は、默つて行つて、默つて歸つて來た。何故、何故、我々は最初から默つてゐるやうなことをしたのか？　最初から、我々は喧嘩をしなかつた、が常に同じ沈默。彼女は、いつもその時分こつそりと私に注目してゐたやうに、私は思ふ。私がそれに氣づくや否や、私は尙一層沈默勝ちになつた。沈默を主張したのは、彼女ではなく私であつた、といふことは事實である。彼女の方では、一度か二度爆發したことがあつた、彼女は、私を抱擁しに駈けて來た、しかし、これらの爆發の時には、ヒステリカルで、苦しみに充ちてゐるのであつた。そして私は、彼女からの尊敬を以て安全にされた幸福を欲してゐたのだ、私は冷たくそれを受けた。そして、實際私は正しかつた。いつでも爆發は、翌日まで喧嘩となつて續いた。

だが、もう二度と喧嘩はなかつた、そこには沈默があつた、そして――そして彼女の方では、次第々々に挑戰的な樣子になつた。「叛逆と獨立」さういふ譯であつた。たゞ、彼女はそれをどう表はすべきかを知らない丈けであつた。さうだ、あの優しい女は、次第々々に挑戰的になりつゝあつた。私が彼女に對して叛逆的になりつゝあつたのだといふことを、諸君は信ずるのであらうか？　私はそれを知つてゐた。そして彼女が、折々氣違ひのやうになつたことは疑ひもないことだつた。例へば、彼女があんな下等な困窮な狀態から――床の掃除からやつて來てみて、初めて我々の貧乏を嗅いだことに就いて考へて見給へ！　諸君は見るだらう、そこには何等の貧乏もなかつたのである、そこには質素はあつた、しかしそこには必要なるところのものの、例へば、リンネルの、及び最大の清潔の充實があつた。私は、夫に於ける清潔が、妻を惹きつけるといふことをいつもよく考へてゐるのであつた。彼女が輕蔑したのは、我々の貧乏ではなく、家政に於ける私の假定した吝嗇であつた、「彼は目的を持つてゐる、」と彼女は言つてゐるやうに思はれた。「彼は、自分の意志の力を示さうとしてゐるのだ。」彼女は突然芝居へ行くことを拒んだ。そして、皮肉な樣子を次第に屢々見せるやうになつた……そして私は、一層沈默勝ちになつた、一層、一層沈默になつた。

私は、自分を辯護し始めることは出來なかつた、私には出來たらうか？　このすべての根

柢に在つたところのものは、質屋といふ職業であつた。許してくれ給へ、私は、一人の女は、就中十六の時には、一人の男に全く服從してゐなくてはならない、といふことを知つてゐた。女は、オリヂナルな物を何にも持つてゐない。それは――それは公理である。今でも、今でも、私にとつてそれは公理である！　彼女が其處に、その外側の部屋に横はつてゐるといふ事實は、何を證明してゐるのであらう？　眞理は眞理である、そしてミルでさへも、それをどうすることも出來ない！　ところが、戀するところの女は、おゝ、戀するところの女は、惡德をさへ、彼女の戀する男の罪惡をさへ理想化するのである。男は、自分のことでさへ、彼女が自分のために見出すやうな、その罪惡に對するそんな辯護を見出しはしないであらう。それは、一般的であるが、オリヂナルではない。女の破滅であつたところのものは、獨りオリヂナルな物の缺除である。そして、私は繰り返すが、そのテーブルの上を諸君が指すのは何のためであるか？　おゝ、そのテーブルの上にある彼女の肉體のうちにオリヂナルな何があつたか？　おゝ、おゝ、おゝ！

聽き給へ。私は、其時彼女の戀を確信したのである。だが、彼女は、あの頃には私の頸に身を投げかけるのが常だつたのである。彼女は、私を戀してゐた。即ち、もつと正確に言ふならば、彼女は、戀しようと欲してゐたのだ。さうだ、正しくさうだつたのである。彼女は、

戀しようと欲してゐた。彼女は、戀しようと試みつゝあつた。そして、此の場合に於いては、彼女が辯護を見出さなければならないやうな何等の罪惡もなかつたといふことが主要なる點であつた。私は質屋である、と諸君は言ふであらう、そして誰でも同じことを言ふ。けれども、私が質屋ならばどんなのであるか？　最も寛大なる人間で質屋に成つたといふ理由がなければならない、といふことに見らるゝ通り、諸君、そこには觀念がある……卽ち、若しも人が何等かの觀念を表はすならば、言葉に於いてそれを發表する。その結果は甚だ愚かなことである。その結果は、その人をして恥ぢしむるものである。何の理由で？　何の理由もない。何故ならば、我々はすべて憐れなる生物であつて、眞理を聞くことが出來ない、然らずんば、私は何故か知らない。私は、今「最も寛大なる人が」と言つたが、——それは愚かなことである、が併し、それこそ、どうしてさうなのかといふことなのである。それは、眞理、卽ち絶對的な、絶對的な眞理であるー　さうだ、私は、私自身を安固にせんと欲し、質屋の店を開く權利を持つてゐた。「君たちは私を排斥する、君たちは——人々は、といふつもりだ——君たちは、輕蔑的な沈默を以て私を拋り出すのである。君たちに對する私の熱烈な憧憬を遇するに君たちは、私の一生涯侮辱を以てするのである。今私はかういふ權利を持つてゐる——君たちに對して防壁を建て、三萬留の貯金をし、そして、クリミアの何處かで、

南海岸で、山と葡萄畑との間で、その三萬留で買つた私自分の領土で、私の餘生を終り、そして、すべての上に超越し、君たちのすべてから遠く離れ、君たちに對して惡意なしに、私の魂の中の或る觀念を以て、もし神が惠み給ふならば私の心を愛する愛すべき女と共に、家庭と共に生活し——凡ゆる周圍の住民を助けようとしてゐるのだ。」

勿論、私が今自分で勝手にかう言ふのは全く正當なことであるが、彼女に對つてそのすべてを聲高く述べたてるよりも愚なことが何が有り得るだらうか？　それが、私の高慢なる沈默の原因であつた、我々が默り合つて坐つてゐた譯はそれであつた。何を彼女女理解することが出來たであらう？　十六歳の最も幼い青春——さうだ、彼女が私の辯解に就いて、私の苦しみに就いて、何を理解することが出來たであらう？　迷はざる實直、生活に對する無智、青春の安價な確信、多くの「高尙なる心」に對する牝雞のやうな盲目さ、そして主として何に從つてゐたのか——質屋の店、そして——それだけで澤山だ！　（そして私は、その質屋の店に於いて惡漢であつたのか？　私がどんなことをしてゐたかを彼女は見はしなかつたか？　私は强請し過ぎたであらうか？）

おゝ、地上の眞理は如何に恐るべきものであらう！　あの著名なる人間、あの優しき魂、あの天國の——彼女は暴君であつた、彼女は怯へられぬ暴君であつた、そして私の魂の苦惱

であつた！　若し私がさう言はなかつたなら、私は自分に對して不公平となるであらう！　諸君は、私が彼女を愛さなかつたと思ふのか？　私が彼女を愛さなかつた、と誰が言ふことが出來よう！　見らるゝ通り、それは因緣といふ場合であつた、惡意ある運命と自然との不思議なる因緣の場合であつた！（私の方が特に。）勿論、私は自分が或る間違ひをやつてゐたことを今は理解してゐる！　或ることがまづく行つたのだ。すべてのことが明かであつた。私の計畫は白日の如く明かであつた。「苛刻にして高慢なれ、何等の道德的慰安をも求むるな、沈默に於いて苦しめ。」そして、それが事の成行であつた。私は嘘をついてはゐなかつた、嘘をついてはゐなかつた！「彼女は、後になればそれは英雄的なことだつたといふことを自分で見るだらう、たゞ彼女はその見方を知らなかつた丈けなのだ。そこで、いつか彼女がそれを判ずる時が來れば、私に十倍もの價値を置き、彼女自身を塵に任せ、腕を組んで服從するであらう」――それが私の計畫であつた。しかし私は或る事を忘れてゐた、若しくはそれを見失つてゐた。そこには私が處置し損つた或事があつた。けれども、もう澤山だ、澤山だ！　だが、私は、今は誰の許し求めたらいゝのであらう？　濟んだことは濟んだことだ、勇敢なれ、男よ、そして誇りを持て！　それは汝の過失ではない！……

さて、私は眞理を話さう、私は、眞理に面と向ふことを恐れてゐるのである、それは、彼女の過失だつた、彼女の過失だつた！……

第五章　叛逆せる優しき魂

喧嘩は、彼女が突然に自分のために借金を拂はうとし始め、物の價値をそれ以上に置き始めることから始まつた、そして、彼女がそれに就いて私と議論しようとする氣になつたことが二度までもあつた。私は同意しなかつた。けれども、その時に大尉の寡婦が現れたのであつた。

この年取つた寡婦は、大褒章を――彼女の死んだ夫からの贈物（勿論、記念物）を持つて來た。私は、彼女にそれで三十留貸した。彼女は、ぶつ〳〵言つて、彼女のためにその品物を保管して置いてくれと私に賴んだ――勿論、我々は物品を保管しておくのである。だが、簡單に言つてしまふと、彼女は、再びやつて來て、それを、八留の價値しかない腕環と取り代へようとした、私は、勿論拒絕した。彼女は、私の妻の眼から何物かを推測したに違ひない、兎も角彼女は、復た今度は私の留守にやつて來た。そして私の妻はそれと大褒章と取り代へてやつた。

その同じ日にそれを發見すると、彼は穩かに、しかししつかりとそして道理を立てゝ話し

た。彼女は、ベッドの上に腰かけて、下を見詰めながら、毛氈の上を右足で叩きながら（それは彼女の特異な運動であつた。）聞いてゐた。彼女の脣には醜い微笑があつた。その時私は、少しも聲を高くしずに、靜かに說明した、金は私のものであること、私は私自身の眼で生活を眺める權利を持つてゐること——そして、私が彼女を家へ連れ來ようと申出た時、私は彼女に何にも隱してはゐなかつたことを。

彼女は突然飛び上つた、突然全く震へ始めた、そして——諸君はどう思ふか——彼女は突然私に向つて足を踏み鳴した、それは野獸の亂心であつた、それは野獸の亂心であつた。私は、驚愕のために石の如く固くなつた。私は決して、こんな爆發を豫期しなかつた。しかし私は、夢中にはならなかつた。私は何の運動をもしなかつた、そして再び同樣な靜かな聲で、もうこれからは私の仕事を助けてゐた彼女の役を奪つてしまふであらうと宣言した。彼女は、私の眼の前で笑つた、そして家から出て行つた。

實は、彼女は家から出て行く權利を持つてはゐなかつた。私と一緒でなければ何處へも行かない、これが結婚する前の約束であつた。夕方彼女は歸つて來た。私は、一語も言ひ出さなかつた。

翌日も彼女は、朝から出て行つた、そしてその翌日も。私は、店を閉ぢて彼女の伯母たちの處へ行つた。私は、結婚の時以來彼等との凡ゆる關係を斷ち切つてゐた——私は彼等に來て貰ひたくもなければ、彼等の處へ行く氣にもならなかつたのだ。しかし、行つてみると、彼女は、彼等と一緒には居なかつたのであつた。彼等は、私の言ふことを、好奇心を以て聽き、そして私の眼の前で笑つた。「それは本當にあなたにはい〳〵事ですよ。」と彼等は言つた。だが、私は彼等の笑を豫期してゐたのだ。その時その場で私は、若い方の結婚してゐなかつた方の伯母を、手金として二十五留與へて、百留で買收した。二日後に彼女は、私の處へやつて來た。「これには、エフィモーヴィチといふ士官が關係してますよ。」と彼女は言つた。「聯隊に居た時あなたのお友達だつた中尉がね。」

私は、非常にびつくりした。そのエフィモーヴィチは、聯隊に居た時は誰よりも一層私の邪魔をしてゐた、そして一月前には、恥ぢ知らずな風をして、一度か二度、何かを質入れすることに託言けて店へはひつて來たが、私の妻を笑つてゐたことを覺えてゐる。私は其時立ち上つて、我々の關係を考へてもう決して來ないでくれ、と言つた。しかし私の頭の中では何にも考へてはゐなかつた、たゞ彼は橫著な奴だと思つた丈けだつた。今、その伯母が突然私に話したところに依ると、彼女は既にその男に逢ふことになつてゐた、そしてすべての事件はその伯母の以前の友だち、大佐の寡婦、ユーリア・サムノソーヴナによつて整へられたので

あつた。「その女の處ですよ。」と彼女は言つた。「あなたの奥さんが今行つてるのは。」

私は、話を簡單にしよう。その事件は私には三百留の値打であつた、が、數日にして、私が、戸を閉ぢた次の間に立つて、差向ひになつた私の妻とエフィモーヴィチとの最初の會合に耳を傾ける、といふやうなことが出來上つたのであつた。然るに、その前の晩には、簡單なものではなかつたといふ考へが、突然私の頭の中に起つた。人は、それが彼女自身のものしかし私にとつては甚だ記憶すべき一つの光景が我々の間に起つた。

彼女は夕方になつて歸つて來て、ベッドの上に腰かけて、諷刺的に私を見、その足で毛氈を叩いてゐた。彼女を眺めてゐると、この一月の間、否やこの二週間彼女の性格は彼女自身のとは正反對なものだつたと言ひさへするかも知れない。彼女は、突然自分自身を反抗的な挑戰的な者として示した、私は禮儀などには構はず、又困難を熱望するのでないならば、恥ぢなくして言ふことは出來ない。彼女は、自分の道を踏み誤つて、困難なことを起しに行つたのである。しかし彼女の優しさは、彼女を妨げた。斯くの如き少女が叛逆する時、彼女は發作的にしてゐるのではあるが、人は、彼女がさうするために自己を强請し、さうするために自己を騙り立てゝゐるのだといふことを常に見ることが出來る、そして、彼女自身の謙讓と恥かしさとを支配し、これに打克つことは彼女にとつては不可能なことだといふことを常に

見ることが出來る。何故かういふ人々が、時とすると斯くの如き程度にまで到るかといふ譯はそれなのである。それ故人は、自分の眼を信ずることが殆んど出來ない。墮落に慣れてゐる人は、その反對に、常に事を緩和し、一層厭はしげに、禮儀と適切さとを示しながら行動する、その禮儀と適切さとは、それによつて彼女が諸君に勝つてゐると主張するところのそれである。

「あなたは、決鬪するのを恐れたので聯隊から出たんだつていふのは本當？」と彼女は、突然に、唐突に訊ねた——そして彼女の眼は輝いてゐた。

「俺が士官の言ひ渡しによつて俺の職を止めろと言はれたのは本當だ、だが、事實としては俺はそれより前に書類を送つて置いたのだ。」

「あなたは臆病者としてお出なすつたの？」

「さう、皆は俺のことを臆病者と言つてゐた。しかし、俺が決鬪を拒絶したのは臆病からぢやない、彼等のきめた亂暴なことに從つて侮辱されたとも思はなかつたのに決鬪狀を送るなどといふことはしたくなかつたからだ。ねえ、お前には解るだらう。」私はかう附加へないではゐられなかつた。「そんな亂暴なことに反抗して、その結果を承認するといふことは、どんな決鬪よりも遙かに男らしいことを示してゐるんぢやないか。」

私は、それに反抗することは出來なかつた。私は、言はば、自分を守るためにこれ丈けのことを言つたのであつた、そして、彼女が望んでゐたのはそれであつた、私に對する此の新しい屈辱であつた。

彼女は、意地惡さうに笑つた。

「それからあなたが、三年後に、銅貨を貰つたり、玉突場で夜を明かしたりして、宿無しみたやうにペテルブールグの町をうろついてゐたといふのは本當？」

「俺は、乾草場のヴェゼムスキイの家で夜を過したことさへある。さうだ、それは本當だ。俺が聯隊から出てからは、隨分多くの不名譽と墮落の生活をしたものだ、しかし、道德上の墮落ぢやない、何故なら、俺はその時でさへ、自分のしたことを誰より一層嫌つてゐたんだから。それは、俺の意志と心との墮落に過ぎなかつたんだ、そしてそれは、俺の立場の墮落によつて惹起されたに過ぎなかつたんだ。だがそれも終つた……」

「おゝ、今はあなたは一個の人物だわ——財政家だわ！」

質屋の店に對する暗示。しかし、もうその時までには、私は立派に、自己に返つてゐた。

彼女は、私にとつて、それが屈辱であつたといふ說明を欲してゐたことを私は見た、そして——私はそれを與へなかつた。甚だ好都合に、お客がベルを鳴した、そして私は、店へ出て行つてしまつた。一時間後に、彼女が出掛けようとして著物を著更へた時、彼女は私に面と向つて、靜かに立つてゐた、そして言つた——

「でも、私たちが結婚しない前には、あなたは、それに就いては一語も私に話さなかつたのね？」

私は答へなかつた、そして彼女は行つてしまつた。

そして、その翌日私は、あの戸口の向う側の部屋で、自分の運命が如何に決定されるかに耳を傾けながら、立つてゐた、そして私の衣嚢の中にはレヴォルヴァーがはひつてゐた。彼女は、いつもよりもずつといゝ著物を著てゐた、そしてテーブルの處に立つてゐた、そしてエフィモーヴィチは、彼女の前に見得を張つてゐた。そして、要するにそれは正確に（私は自分の名譽のためにさう言ふのだが。）私がそれを先見し假定してゐたとほりになつた、尤も私はそれを先見し假定したことに無意識ではあつた。私は、自分を悧巧に表現してゐるかどうか知らない。

かういふ事が起つたのであつた。

私は、絕えず耳を傾けてゐた。徹頭徹尾私は、むづ〳〵するやうな心持で、高尙なる、氣高い女と、淫蕩な、腐れた、鈍感な男との間の爭鬪の場に居合せたことになつた。そして、

如何に私はびつくりして怪しんだのだか、如何にあの純粋な優しい沈默せる少女が、すべてのことを知らうとしてゐたであらうか？　社會喜劇の最も機智ある作家と雖も、嘲笑と純な笑ひと高尙なる、惡に對する德操の輕蔑とのあんな光景を創造することは出來まい。而も彼女の言ふことが、彼女の一寸した言葉が如何に輝いてゐたか。彼女の速かなる答へのうちには何といふ機智があつたらうか。彼女の非難のうちには、何といふ眞理があつたか。そして同時に、何といふ子供らしいともいへる程の單純さがあつたか。彼女は、彼の眼の前で、彼の戀の宣言を笑ひ、彼の身振りを笑ひ、彼の申込を笑つた。早速亂暴にもその點へ觸れて、而も反對に逢ふことを豫期してゐなかつたので、彼は全く途方に暮れてゐた。最初私は、彼女の方では媚びてゐるのかと思つた——「彼女自身の價値を高める爲めの機智に富んだ、しかし墮落した女の媚び」しかしさうではなかつた。事實が太陽のやう輝にき出した、そして疑ふことは不可能であつた。此の會見をなしたことは、單に誇大された、そして衝動的の、私に對する嫌惡に過ぎなかつた、それが無經驗な彼女にそんなことをさせたのであつた。けれども、その場になると——彼女の眼は忽ちに開かれたのであつた。彼女は、どんなことにならうとも、兎も角、私を苦しめることを急いでゐたに過ぎない、しかし、彼女は何か非常に卑しいことをしようといふ氣にはなつても、不適當を忍ぶことは出來なかつた。そして、

それ程純粹な罪の無い、心中に或る考へを持つてゐる彼女が、エフィモーヴィチや、又はどんなやくざな氣取屋によつてでも唆かされ得たであらうか？　その反對に、彼女はたゞ彼によつて笑はされた丈けのことであつた。凡ゆる彼女の善良さがその魂から浮び上り、そして彼女の怒りは、あてこすりにまで及んだ。私は繰り返すが、その道化者は、たうとう全く途方に暮れてしまつて、顏をしかめながら、殆んど返事もしずに坐つてゐた、そこで私は、彼が復讐しようとする卑しい望みから、彼女を辱しめはしまいかと恐れ始めた程であつた。そして再び私は名譽のために繰り返すが、私は、殆んど驚きもしずにその光景に耳を傾けてゐた。私は、云はば、彼女に對して言はれた言葉は信じずに、一語も信じずに、さういふものに出會つたところのものに出會つたのであつた。私は云りで、出掛けて行つたのであつた、が衣裳の中にレヴォルヴーを持つて行つたことは——それは事實である。で、私は、彼女を違つた者として想像することが出來たのだらうか？　何を以て私は彼女と結婚したのか？　おゝ、勿論私は、彼女の私に對する嫌惡を全く確かめた、がそれと同時に、彼は、彼女の罪無きことをも全く確かめた。私は、突然戸を開いてその光景を妨げた。エフィモーヴィチは飛び上つた。私は、彼女の手をとつて、私と一緒に歸るやうにほのめかした。エフィモーヴィチは、我れに返ると、出

し抜けに讃くやうに笑ひ出した。

「おゝ、神聖なる夫婦の權利として、僕は敢て反對しない。連れて行き給へ！　だが君は知つてるだらう、」彼は、私のうしろから叫んだ。「如何に端正なる人も君と戰ふことは出來まいが、それでも君の夫人に對する尊敬から僕は君の意のまゝになるよ……若しも君が危險を侵さうと思ふのならばね。」

「お前聞いてるかい？」私は、戸口のところで一寸の間彼女を止めて、さう言つた。

それからは、家へ歸るまで一語も話されなかつた。私は、彼女の腕をとつて連れて來た、そして彼女は反抗しなかつた。その反對に彼女は、非常に感動されてゐた、そしてそれは家へ歸るまで續いた。家へ著くと彼女は、椅子に腰かけて、私をぢつと見詰めた。彼女は、非常に眞蒼であつた、彼女の脣は皮肉に窄められてゐたが、それでも彼女は、嚴肅な苛酷な侮蔑を以つて私を見た、そして始めて、私がそのレヴォルヴーで彼女を殺すであらうと本氣に確信してゐたやうに思はれた。けれども私は、一言も言はずに衣嚢からレヴォルヴーをとり出して、それをテーブルの上に置いた！　彼女は私を眺め、それからレヴォルヴーを眺めた。（レヴォルヴーは既に彼女には親しき對象であつたことに注意し給へ。私は、店を持つた時、例へばモーゼルがなしてゐるやうに、大きな犬とか强壯な男の召使とかは置くまいと決心した。私の料理人が客のために戸を開くのである。けれども我々の職業に於いては、非常の場合に自分を防禦する手段なしで居ることは不可能なことである、そこで私は質として買つたレヴォルヴーを持つてゐた。最初の頃、彼女が私の家へ來たての時、彼女はそのレヴォルヴーに大變興味を持つて、それに就いて道々訊ねた、そこで私は、それの構造と働きを說明しさへした、一度は標的に發射させさへした。このすべてに注意し給へ。）彼女の脅かされた眼に少しも氣をとめずに、私は、半分著物を著たまゝベッドの上に横になつた。私は非常に疲れたことを感じてゐた。其時は八時頃になつてゐた。彼女は、その同じ場所に坐つて、身動きもしずに、一時間も續けてゐた。それから、蠟燭を消して、彼女も矢張り著物を脫がずに壁のそばのソーファの上に横はつた。始めて彼女は、私と一緒に眠らなかつた——そのことにも注意し給へ……

第六章　恐ろしき回想

今度は、恐ろしい回想だ……

私は八時前に眼をさました、と思ふ。そして明るい日の光に餘程近かつた。私は、十分なる意識にまで覺めて、眼を開いた。彼女はその手にレヴォルヴーを握つてテーブルの處に立

つてゐた。私が眼を覺まして、彼女を見てゐたことを彼女は知らなかつた。そして私は突然彼女がその手にレヴォルヴーを持つて私の方へ動き始めたのを見た。私は、急いで眼を閉ぢて、尙ほ眠つてゐるやうに見せかけた。

彼女はベッドの處へやつて來て、私の前に立つた。私はすべてのものを聞いた、死の如き沈默が落ちかゝつて來たが、私は、その沈默を聞いた。忽ちに痙攣的な運動が起つた、そしてとても堪らなくなつて、自分の意志に反して、突然私は眼を開いた。彼女は、眞直に私を、眞直に私の眼を見てゐた、そしてレヴォルヴーは私の顳顬のところをねらつてゐた。我々の眼は出會つた。しかし我々は、一瞬間以上は互ひに見つめ合つてはゐなかつた。努力して私は再び眼を閉ぢた、そして同時に私は、何事が私を待つてゐようとも、身動きもしまい、眼も開くまい、と決心した。

熟睡してゐる人々が、突然その眼を開けて、一寸の間頭をあげて部屋を見廻しさへして、それから一瞬間後には、再び頭を枕の上に置いて無意識になり、何事をも理解しずに眠りに陷ちてしまふといふことは折々あることである。彼女の眼に出會ひ、私の額にレヴォルヴーを感じながら、私が眼を閉ぢて身動きもしずに、熟睡したかのやうにしてゐた時――彼女は、私が本當に眠つてしまつた、そして何にも見なかつた、特に、私が見たやうなものを見てから、こんな時に再び眼を閉ぢてしまふであらうといふことは全く有りさうもないことだと確かに思つたであらう。

さうだ、それは有りさうもないことであつた。けれども彼女は、同樣に眞實を推度したのかも知れない――全く同じ瞬間に忽ちに私の心の中に閃いたあの考へを。おゝ、一分間とも經たない間に、何といふ考へと感じとの旋風が私の心の中を駈け廻つたことであらう。思想の電光のやうな速力は驚くべきものだ！　さういふ場合には（さう私は感じた）若し彼女が眞實を推度し、私の眼覺めてゐたことを知つたならば、私は自分が死をも容れようとしてゐることによつて彼女を打ち碎いたであらう、そして彼女の手は震へたであらう。彼女の決心は、新しい壓へつけられるやうな感銘によつて弱められたであらう。高所に立つてゐる人間は自分の身を投げ落さうとする衝動を持つさうである。多くの自殺と他殺とは、單にレヴォルヴーがその手の中に在つたが爲めにのみ犯されたであらう、と私は思ふ。それは、四十五度の角度を以て傾斜してゐる深淵のやうなものである、諸君はその中へ陷らざるを得ないのである、そして何者かが諸君をして無抵抗に引金をひかしめるのである。併しながら、私が見、すべてを知り、そして一語も言はずに彼女の手の中に在る死を待つてゐた、それを知るといふことは――その傾斜の上で彼女をうしろへ引張ることであらう。

靜けさが長くつゞいた。そして忽ち私は顱頂の上に、髪の毛の上に、鐵の冷たい感觸を覺えた。諸君は訊ねるであらう、逃げようと望んだか？　と。神の審判する通り私は答へようだが私は訊きたい、レヴォルヴーが私の敬愛する者によつて私に對つてあげられた後、私にとつて生活が何の役に立つか？　その上私は、我々の間には爭鬪が始まつてゐた、生死を賭した恐しい決鬪、その決鬪が、臆病のためにその友によつて拒絶された昨日の臆病者によつて戰はれてゐたといふことを、私を全存在の力を以て知つた。私はそれを知つた、そして彼女はそのことを知つたのである、若しも彼女が私の眠つてゐなかつたといふ事實を推度しさへしたならば。

恐らくそれはさうではなかつたであらう、恐らく私は、その時さう思はなかつたのであらう、がそれでも、自覺した考へはなかつたとしても、それはさうだつたに違ひない、何故なら私は、それ以來一瞬の間もそれを考へる以外には何もしないのだから。

けれども諸君は、再び訊ねるであらう、何故お前はさういふ惡いことから彼女を救はなかつたのか？　おゝ！　私はあれ以來その質問を千回も自分自身で訊ねたのである——あの瞬間を思ひ起す度毎に、私の體はわなゝくのである。しかし、その瞬間に私の魂は、闇黑の絶望の中へ陷るのであつた！　私は墮落してゐた、私自身が墮落してゐた——どうして私に人を救ふことが出來たらう？　それに、私がその時人を救はうと欲したかどうかを、如何にして諸君は知るか？　私がその時何を感ずることが出來たかを、人はどうして告げることが出來よう？

だが、私の心は煮えたぎつてゐた、數分間過ぎた、彼女はまだ私の前に立つてゐた——そして突然私は、希望で慄へた！　私は急いで眼を開いた。彼女は最早部屋の中には居なかつた、私は寢床から出た、私は征服した——そして彼女は永遠に征服された！

私は、サモヴールの處へ行つた。我々はいつもサモヴールを外側の部屋へ持つて行つて置いた、そして彼女がいつも茶を注ぐのだつた。私は、一語も言はずにテーブルに就いて、彼女から、お茶のコップを受取つた。五分間私は彼女を見た。彼女は、恐ろしく眞蒼だつた、前日よりも一層蒼かつた、そして彼女は私を見た。そして突然……そして突然、私が彼女を見てゐたのを見ると、彼女はおづ〳〵と探るやうな眼附をして、その蒼ざめた脣に蒼ざめた微笑を見せた。「すると彼女はまだ疑つてゐる、そして、自分に質問してゐるんだ、——彼は知つてるのか、知らないのか、彼は見たんだらうか、見なかつたのだらうか？」私は何氣なく眼を轉じた。茶が濟むと私は店を閉めて、市場へ行つて、銀製の寢臺と屏風とを買つた。

家へ歸つて私は、そのベッドを前の方の部屋に置いて、屏風でかこふように指圖した。それは彼女のベッドであつたが、私は彼女に一語も言ひはしなかつた。彼女は、言葉なくして、そのベッドから、私が「見て、そしてすべてを知つてゐた」こと及びすべての疑ひは終つたことを理解した。夜、私はいつもの通りレヴォルヴーをテーブルの上に載せたまゝにして置いた。夜には彼女は、一語も言はずに新らしいベッドにはひつた。我々の結婚の羈絆は斷たれた、「彼女は征服された、が許されなかつた。」晩には彼女は夢中になり出した、そして翌朝彼女は腦膜炎になつた。彼女は、六週間床に就いてゐた。

第二部

第一章　誇りの夢

ルケーリャは、其時、自分は此處にいつまでも暮らすことは出來ないと言ひ、彼女の夫人が死んだらすぐ行つてしまふと言つた。私は跪いて五分間ばかり祈つた。私は一時間祈りたかつた、しかし考へに考へ續けてゐた、それにいつも病的な考へだつた、で私の頭は痛むのだ――何で祈る必要があらう？　――それは單に罪である！　それに私が眠くないといふのは不思議である。大きな、餘りに大きな悲しみに於いては、その最初の爆發の後、人は常に眠くなるものである。死刑を宣告された者は、その最後の夜には非常にぐつすりと眠るといふ話だ。さうであるに違ひない、それは自然の法則である、さもなくとも、彼等の力は持ちこたへられないであらう……私はソーフアの上に横はつた、が眠らなかつた……

……彼女の病氣の六週間の間、我々は日夜彼女の看護をしてゐた――ルケーリャと私と病院から頼んで來た看護婦と。私は入費を少しも惜しまなかつた――實際私は、彼女のためにはいくらでも金を使はうとしてゐた。私は、シュレーデル醫師を呼んで、一度の訪問に十留彼に拂つた。彼女がずつとよくなり始めてからは、私はそれ程には自分を示さなかつた。だが、何故私はこんなことを書いてゐるのであらう？　彼女は、再び起きられるやうになつてから、私の部屋の特別のテーブルに靜かに默つて坐つてゐた、そのテーブルもその頃私が彼女の爲めに買つたのであつた……。さうだ、それは事實である、我々は全く沈默してゐた。つまり、我々は後には話し始めたが、日々のお定りのことに過ぎなかつた。私は、わざと自分を示すことを避けてゐた。しかし私は、彼女も矢張り必要以上のことを言はなくてはならないのを喜ばないことに氣がついた。これは、彼女としては全く自然だつたやうに私には思は

れた。」彼女は餘りに打碎かれてゐる、餘りに征服されきつてゐるんだ。」と私は考へた。「で俺は、彼女にこれを忘れさせ、慣れさせてしまはなければならない。」こんな風にして我々は沈默してゐた。しかし絶えず私は、未來のために自ら用意してゐた。彼女も矢張りさうだつたと私は思つた、そして、彼女がその時獨りでどんなことを考へてゐたのかを推測することは、私にとつては非常に興味深いことであつた。

私はもう一層話さう、おゝ！　私が彼女の病氣を悲しみながら何を蕩盡したか、勿論誰も知らないであらう。けれども私は、自分の心の中の悲しみで窒息しさうであつた、ルケーリャからさへも、私は、凡ゆる事實を知ることなくして、彼女の死にかゝつてゐることを想像することは出來なかつた。彼女が危險狀態を脫し、その健康を回復し始めた時、私は非常に速かにそして完全に、私の安靜を取り戻したやうに思ふ。その上私は、出來る丈け長く我々の未來を引延ばして、その間全く成行に任せようと決心した。さうだ、何か不思議なそして特殊な事が、その時私の心の中には起つたのだ、さういふより外ない、私は勝つた、そしてそれを意識するだけで、私にはもう十分であつた。それから、一冬が過ぎた。おゝ！　私はかつて無かつた程滿足してゐた、そしてそれは一冬續いた。

諸君の見らるゝ通り、私の生活には恐るべき外的の事件があつたのである、それは、その

時まで——卽ち私の妻の災厄の時まで——毎日毎時私の上にのしかゝつてゐた。私は、名聲の失墜と聯隊の退職とのことを言つてゐるのである。簡單に言ふと私は、暴虐な不正を以て取扱はれてゐた。私の友達が私のむづかしい性格のために、私を愛さなかつたのは本當である、そして恐らくは私の馬鹿げた性格のためでもあらう、人にとつて高尙なる、貴き、且つ値打あるところのものが、何等かの理由で友達の澤山あることを喜ぶといふことはよくあることだが。おゝ、私は決してそんな風ではなかつた、學校に於いてさへも！　私は、いつもそして何處でも、嫌はれてゐた。ルケーリャでさへ私を好くことが出來ないのである。聯隊で起つたことは、それは私に對する彼等の憎惡の結果ではあつたが、或る意味に於いては偶然のことであつた。私がかういふ譯は、起つてもよし起らなくてもいゝやうな偶然の出來事によつて、丁度雲のやうに過ぎ去る事件の不幸なる堆積によつて零落することより、一層恥づべき一層苦しいものは何にもないからである。智力ある者に對してそれは、屈辱である。こんなことが起つたのであつた。

或る劇場で、幕間に、私は休憩室へはひつた。A——と呼ばれた驃騎兵がはひつて來て、すべての士官や公衆の前で、二人の他の驃騎兵に向つて大きな聲で話しを始めた、我々の聯隊のベズムツェーフ大尉が、往來で不名譽なことをした、といふのである、そして「彼はきつ

と醉つばらつてたんだ。」その會話はそれきり進まなかつた、そして實はそれは誤りであつた、何故ならベズムッェーフ大尉は醉つてはゐなかつたし、その「不名譽な光景」といふのは本當は不名譽なことではなかつた。驃騎兵たちは、何か他の事を話し始めた、そしてその事はそれきりになつた、が翌日その話は我々の聯隊に傳つた、すると今度は彼等は早速、其時休憩室にゐた我々の聯隊の士官は私獨りで、而も、A——といふ驃騎兵がベズムッェーフに就いて無禮に話した時私はA——の處へ行つて、それを止めて忠告しなかつたのだと言ひ始めた。だが、どんな立場から私はさうすることが出來たらうか？　若しも彼がベズムッェーフに對して不平を持つてゐたのだとしても、それは彼等の個人的の事である、そして何故私が干渉しなければならないのだらう？　ところが士官たちは、こんなことを言ひ始めた——それは個人的な事ではなかつた、聯隊に關係することだ、そして私が、その場に居合はせた唯一の我々の聯隊の士官だつたのだから、それによつて私はすべての士官を代表してゐたのだ、且つ、彼等自身の名譽と彼等の聯隊の名譽とのために餘り敏感でなかつた我々の聯隊內の士官たちがはひつてゐた休憩室の中の他の人々をも代表してゐたのだといふのである。私はこの意見に同意する事は出來なかつた。若し私が、遲くはあつたが今でも、A——から形式的の說明を求めようといふ氣になつたならば、凡てを正當に置く事が出來たのだと彼等は

私に言つた。私はそんなことをする氣にはならなかつた、そして私は混亂してゐたので、誇りを以て拒絕した。で、その爲めに私は直ぐに私の職を辭した——これで全部なのである。私は聯隊を退いた、誇りを以て、しかし心を打碎かれて。私は、意志に於いても心情に於いても鬱々としてゐた。モスクヴに居た私の妹の夫がすべての我々の小財產と、私の分まで蕩盡してしまつたのは、丁度其時であつた、それは隨分少し許りのものではあつたが、それを失つたために、私は家もなく一錢もなしに殘された。私は內職をすればよかつたかも知れない、が私はしなかつた。目に立つ服裝をして鐵道の役所で仕事をするといふやうなことは私には出來なかつた。そこで——それが恥づべき事ならば恥づべき事ならば不名譽でも構はない、墮落ならば墮落でもいゝ——(惡ければ惡い程いゝ)それが私の選んだところであつた。それから、陰氣な記憶の三年間がつゞいた、ヴォーゼムスキイの家までが。一年半前に私の敎母の金持な老婦人がモスクヴで死んで、彼女の意志で私に三千留殘してくれたには驚いた。私は、一寸考へて、直ぐ自分の行爲の方針を定めてしまつた。私は、誰にも辯解しずに質屋の店を出す決心をした、過去の記憶のために出來る限りのことは、金だ、それから家だ、それが彼の計畫であつた。加之、陰氣な過去と私の落ちぶれた名聲とが、毎日毎時私を亂した。だが、それから私は結婚した。それは偶然だつたか、さうでなかつたか、

私は知らない。けれども彼女を私の家へ連れて來た時、友を連れて來た、と私は思つた、それ程私は友を必要としてゐた。しかし私は、その友は鍛へられ、敎へられ、征服されもしなくてはならないといふことをはつきりと見た。私は偏見を持つた十六の少女に、自分で眞直に說明してやることが出來たらうか？　例へば私は、レヴォルヴァーの恐ろしい事件の助けを借りるといふやうな偶然が無かつたら、私が臆病ではなく、聯隊で臆病の罪を負はされたのは間違つてゐたのだといふことを、どうして彼女に信じさせることが出來たであらう？　けれどもその恐ろしい出來事は、丁度いゝ時に起つたのである。レヴォルヴァーを試みようとしてゐて、私は自分の凡ゆる陰氣な過去を切りとつてしまつた。そして、それに就いては誰も知らなかつたが、彼女は知つてゐた、そして私にとつてはそれがすべてであつた、何故なら私にとつては彼女はすべてであつたから、私が自分の夢の中で慈んでゐた未來の希望のすべてであつた！　彼女は、私が自分のために用意した唯一の人間であつた、そして私は、其他の何人をも必要としなかつた——そこで彼女はすべてを知つた、兎も角も彼女は、自分が不正にも私に對する私の敵に無鐵砲に加擔しようとしてゐたのだといふことを知つた。その考へが私を魅惑した。彼女の眼には私は最早惡漢ではなかつた、高々變人位のものだつた、そして、すべてのことが起つたあとでは、その考へは、決して私に對する不快といふものではなかつた、變といふことは惡いことではないといふ——その反對にそれは折々女の心を惹きつけるものである。實際、私はわざとその頂點（クライマックス）を引き延ばしてゐた、その間に起つたところのものは、私の心の平和のために十分なもので、そして非常に多くの幻影と、私の夢想の材料とを供給した。私が夢想家だといふことが、惡いのである。私は、自分の夢想のために、又彼女に就いても材料を十分持つてゐた、私は、彼女が待つことが出來ると思つてゐた。

そこで、一冬が、或る期待のうちに過ぎた。私は、彼女がその小さいテーブルに坐つてゐる時にこつそりと彼女を見るのが好きだつた。彼女は、裁縫に忙しかつた、そして時とすると夜には私の書棚から本を取り出して讀むのであつた。書棚の中から本を選ぶに就いては、矢張り私のために影響があつたに違ひない。彼女は、殆んど外へ出掛けなかつた。丁度夕方食事の後には、私は何日彼女を散步に連れ出すのが常であつた。我々は體のためにやつてゐたのであるが、いつものやうに全く沈默してはゐなかつた。實際、私は我々が沈默してはゐないことを示さうとし、調和して話してゐるやうにしようと試みた、しかし私が既に語つた通り、我々は二人共打開け合ふことを避けてゐた。私はそれをわざとした。私はそれが「彼女に時を與へる」に肝心なことだと思つてゐた。勿論、不思議なことではあるが、私はこつそりと彼女を見ることを好んだが、その冬中、かつて一度も彼女が私を見てゐるのを見たこ

とが無かつたといふことは、その多の殆んど終りになるまで一度も私を感動させなかつたのであつた！　それは彼女のうちの臆病さだと私は思つた。それに彼女は、病氣からこつちそんな臆病な優しさを、そんな弱々しさを持つてゐた。さうだ、待つた方がいゝ、そして——「彼女は直ちに自分からお前の處へやつて來るだらう……」

その考へは、凡ゆる言葉以上に私を魅惑した。私は或る事を附け加へよう、折々、言はばわざと、私は自分をそゝのかして、彼女が私を害したと信ずる所まで、自分の心と魂とを持つて行つたのであつた。そして、それは暫らくの間つゞいた。けれども私の怒りは決して、甚だ眞實なものでも激しいものでもあり得なかつた。そして私は、宛もそれがそんな眞似をしてでもゐたやうに、自分でも感じてゐた。そして、私は寢臺と屏風とを買つて我々の結婚を打破りはしたが、私は決して、決して彼女を罪人として見ることは出來なかつた。それは、私が彼女の罪を輕視したことではなく、その最初の日から、寢臺を買つたより前から、私が彼女を許さうといふ考へを持つたことの爲めである。實際それは私としては不思議なことである、何故なら私は、道德上の問題では嚴格なのだから。その反對に、私の眼には彼女は全く征服され、屈辱を受け、打碎かれてゐたので、折々私は彼女に對して憐憫の苦痛を感じた位だつた、尤も時によれば、彼女の屈辱といふその考へが全く私を喜ばせるのであつたが我々が平等でないといふ考へが、私を喜ばした……。

その多には私は、一生懸命になつて色々な深切の行爲をなした。私は二つの負債を許した。私は何にも抵當をとらずに一人の女に金を與へた。で私は、そのことを私の妻には何にも言はなかつた、そして私は彼女に解るやうな順序ではそれをしなかつた、しかしその女は私の處へ自分で禮に來て、殆んど跪かない許りであつた。でそんな具合でそれは公けのこととなつた、彼女は喜びを以てその女のことを聞いたやうに私には思はれた。

しかし、春が來ようとしてゐた、それは四月の半ば頃であつた、我々は二重窓を外した、そして太陽がその明るい光を以て我々の沈默せる部屋に輝き始めた。けれども、云はば私の眼の前には被幕（ヴエール）があつた、私の心の上には盲窓があつた。宿命的な恐ろしい被幕（ヴエール）！　突然私の眼からその曇りがとれて、私が出し抜けに見て理解したといふやうなことはどうして起つたのであらう？　それは偶然だつたのか、それともその時が來たのか、又は、日光の光線が私の陰鬱な心の中の思想を、臆說を輝かしたのか、それは思想ではなかつた、臆說ではなかつた。凡ゆる私の闇黑な魂と惡魔のやうな誇りとを光に溺らしながら、紘が突然に震へ顫き、長い間死んでゐた感情がゆるぎ出して生命を得たのであつた。それは恰も、私が突然自分の場所から跳び上つたかのやうであつた。そして、全く、それは突然に唐突に

起つた。それは夕方起つたのであつた、五時に、食後に……。

第二章　被幕（ヴエール）が突然落ちる

最初に一寸言つて置くことがある。一月前に私は、彼女の不思議な憂鬱に氣がついた、ただの沈默ではない憂鬱に。それも矢張り私に突然氣がついた。彼女は坐つて仕事をしてゐた、その頭は縫物の上に屈められてゐたが、私が彼女を見戍つてゐたことを、彼女は知らなかつた。そして突然私の心を打つたことは、彼女が大變デリケートな樣子になり、大變痩せ、彼女の顏は蒼白く、その脣は白かつたことであつた。このすべては、彼女の憂鬱と共に、忽ちに私を驚かせた。私は既に小さな、からつ咳を聞いてゐた、夜には特に。私は、早速立ち上つて、彼女には何にも言はずに、シュレーデルに來て貰ふように言ひに出掛けた。

シュレーデルは翌日やつて來た。彼女は、非常にびつくりして、最初シュレーデルを眺め、それから私の方を見た。

「でも、私、いゝんですよ。」と彼女は、不確かな微笑をして言つた。

シュレーデルは、餘り丁寧に彼女を診察しはしなかつた、（かういふ醫者は、往々大風に無關心な顏をしてゐるものだ。）彼はたゞ他の部屋で私に、それは彼女の病氣の結果に他ならないので、寒になつたら海岸へ旅行に出掛けるか、それが出來なければ夏になつてから郊外で百姓家を借りるかすれば間違ひあるまい、と言つた丈けであつた。實際彼は、弱いといふことと、又はさういふ種類の事の他には何にも言はなかつた。シュレーデルが行つてしまつた時に彼女は、私をぢつと見ながら再び言つた——

「私、本當にいゝのよ、本當にいゝのよ。」

けれども、かう言つた時彼女は、明かに恥かしさから、突然顏を赧くした。明かにそれは恥かしさであつた。おゝ！　今私は理解する、彼女は、私がまだ彼女の夫であつたことを、私が彼女の本當の夫のやうにまだ彼女を氣をつけてゐたといふことを、恥ぢてゐたのだ。けれども、その時には私は、理解しなかつた、そして彼女が赧くなつたことを謙遜に歸してゐた。

（被幕（ヴエール）だ！）

そこで、一ケ月後の四月に、或る晴れた太陽の輝く日の五時頃、私は店に坐つて計算書を作つてゐた。突然私は、我々の部屋に坐つてテーブルで仕事してゐる彼女が、柔かに、柔かに……歌ひ出すのを聞いた。この珍らしいことは、非常な感銘を私に與へた、そして今日まで私にはそれがどうしてだか解らないのである。其時まで私は、殆んど彼女が歌ふのをかつて聞いたことがなかつた、尤も我々がまだ標的を射る稽古をしたりして面白く暮してゐられ

た最初の頃には多分そんなこともあつたらうが。それから彼女の聲は、やゝ強く鳴り響き渡つた、がその聲は本當に全く美しく健康ではなかつた。やがて彼女の小さい歌は非常にかすかになつた——それは、その歌が憂鬱なものだつたといふことではなかつた、(それは小唄の一種だつた。)しかし彼女の聲のうちには、何だかガン〳〵鳴るやうな破れたやうなものがあつた、丁度彼女の聲が歌に合はないやうな、又は歌そのものが病的だといふやうな。彼女は低い聲で歌つてゐたが、出し抜けに聲が高くなつたかと思ふと、破れた——そんな哀れな小さな聲であつた、それは全く憐れに破れた。彼女は咽喉を癒して、それから再び柔かに、柔かに歌ひ始めた……。

私の情緒は弄ばれてゐたのであらう、しかし、何故私がそんなに感動されたのか、誰も理解することは出來まい！　否、私は尙ほ彼女を可哀想に思つてゐたのではなかつた、それは尙ほ、全く違つた何物かであつた。それが始まつた時には、第一に、兎も角も、私は突然の混亂と、恐ろしい驚き——恐ろしい、そして奇妙な、苦しい、殆んど執念深い驚きに充たされた、「彼女は歌つてゐる、それに俺の前で。彼女は俺のことを忘れてゐるんだらうか？」

全く壓服されてしまつて、私は自分の居た場所にぢつとしてゐた、それから私は突然立ち上つて、帽子をとつて出掛けた、云はば考へずに。少くも私は、何故、又は何處へ行かうとしてゐたのか知らない、ルケーリャが私の外套を著せ始めた。

「彼女(あれ)は歌つてゐるね？」私は、何氣なくルケーリャに言つた。彼女には何のことか解らなかつた、そして、まだ解らないで私を眺めてゐた、そして全く私は本當にわけが解らなかつた。「彼女(あれ)が歌つてるのは初めてなのか？」

「いゝえ、あの方はあなたがお出掛けの時はよく歌つておいでですよ。」とルケーリャが答へた。

私は、すべてのことを憶えてゐる。私は階下へ降りて、町へ行つて、滅茶々々に歩き廻つた。私は、町のはづれへ行つて、遠くの方を眺め始めた。人々が通り過ぎた、彼等は私に衝き當つた。私は、それを感じなかつた。私は馬車を雇つて、馭者に何故か知らないが、ポリツェイスキイ橋へ行けと言つた。それから突然、私は氣をかへて、二十哥を彼に與へた。

「これは、君に迷惑をかけたから上げるんだよ。」と私は、無意味な笑ひ方をして言つた。けれども或る歡喜が、私の中に突然に輝いた。

私は、急ぎ足に家へ歸つて來た。憐れなガン〳〵いふ破れた歌が、再び私の心の中に鳴り響いた。私は息をはづませてゐた。被幕(ヴェール)は落ちた、私の眼から落ちた！　彼女は私の前で歌つたのであるから、彼女は私を忘れてしまつたのだ——それは明かなことで、恐ろしいことだ——それは明かなことで、恐ろしいこと

であつた。私の心はそれを感じた。けれども歡びは、私の心の中に輝いてゐた、そしてそれは私の恐れに打勝つた。

おゝ！　運命の皮肉！　だが、私の魂の中にはその冬中他の何物も無かつた、その歡喜以外には何物も有り得なかつた、が、私はその冬中何處に居たのであらう？　共處で私は私の魂と一緒に居たであらうか？　私は、大急ぎで階段を駈け上つた、私はおづ〳〵とはひつて行つたのだつたかも知れない。唯だ私が憶えてゐることは、床といふ床が搖れてゐるやうに思はれ、私は河を漂つてゐたかのやうな氣持のしたことであつた。私は、部屋の中へはひつて行つた。彼女は、その縫物の上に頭を屈めて、前のとほりに同じ場所に坐つてゐた、しかし彼女はもう歌つてはゐなかつた。彼女は、あわてゝそして面白くなささうに私を見た。それは、殆んど、誰かが部屋の中にはひつて來た時にする習慣的な無關心な運動に過ぎない樣子であつた。私は、氣違ひのやうになつて眞直に彼女のそばへ行つて、椅子の上に唐突に腰かけた。彼女は急いで恐ろしさに私を見た、私は、彼女の手をとつて、それから私はどう彼女に言つたか憶えてはゐない——つまり、言はうとしたのだ、何故なら私は、適當に話すことすら出來なかつた。私の聲は破れ、そして私の思ふ通りに出なかつた、そして私は何と言つたらいゝか解らなかつた。私は、唯だ息をはづませてゐるよりなかつた。

「喋らう……ねえ……何か話してくれ！」私は、何か馬鹿なことを呟いた。おゝ！　どうして私は馬鹿なことを呟かずに居られたらう？　彼女は、再び驚いた、私の顏を見詰めながら、非常にびつくりして後退りした、けれども突然彼女の眼には、苛酷な驚きの表情が現れた。さうだ、驚きと苛酷。彼女は、眼を大きく見開いて私を見詰めた。その苛酷さが、その苛酷な驚きが、私を急ちに打碎いた。「ではあなたはまだ愛を期待してゐるの？　愛を？」彼女は何とも言ひはしなかつたが、その驚きは、かういつて訊ねてゐるやうに思はれた。しかし私は、それをすつかり讀んだ、それをすつかり讀んだ。私の中の凡てが、打慄へるやうな氣がした、そして私は、唯だ彼女の足許に倒れた丈けであつた。さうだ、私は彼女の足許にはひつくばつた。彼女は急に飛び上つた、が私は、彼女の兩手を無理矢理に捉へてゐた。

そして私は、全く私の絶望を理解した——私はそれを理解した！　けれども、（諸君は信ずるだらうか？）歡喜が私の心の中には、自分が死ぬのかと思つた程激しく波打つてゐた。私は、無我無中の歡喜で、彼女の足に接吻した。さうだ、大きな無限な歡喜だつた、而も私の絶望のあらゆる望み無きことを理解してゐたにも拘らず。私は泣いた、何か言つた、が喋ることは出來なかつた。彼女は驚愕と仰天とにつゞいて、或る不安な疑惑、或る壯重な疑念が現れた、そして彼女は、不思議さうに、無作法にと言つてもいゝ位に私を見詰めてゐた、彼

女は何かを速かに理解しようと欲してゐた、そして微笑した。彼女は、私がその足に接吻したことを恐ろしく恥ぢて、後ろへ足を引いた。しかし私は、彼女の足が在つた床の上の場所に接吻した。彼女は、それを見て、そして恥かしさから笑ひ出した。(人々が恥かしさから笑ふ時どんなであるか諸君は知つてゐるのであらう)彼女はヒステリカルになつた、彼女の手が震へてゐたのを私は見た——私はそれに就いては考へもしずに、私が彼女を愛するとか、立ち上らうとは思はないとか、呟きつゞけてゐる許りだつた。「お前の著物を接吻させてくれ……そして、一生涯こんな風にお前を崇拝させてくれ。」……私は知らない、私は憶えてゐない——しかし突然彼女はすゝり泣き始めた、そして全く震へてゐた。恐ろしいヒステリイの發作が續いて起つた。私は、彼女を脅かしたのであつた。

私は、彼女をベッドへ連れて行つた。發作が通り過ぎた時彼女は、恐ろしく疲れきつた様子をして、ベッドのはしに腰かけて、私の兩手をとつて、靜かにするように頼んだ。「さア、さア、悲しまないで下さいな、靜かにして頂戴!」そして彼女は、再び泣き始めた。その晩中私は、彼女のそばを去らなかつた。私は、彼女にこんなことを言ひつゞけてゐた——もう、早速、二週間以内に彼女を海水浴のためにブーローニュへ連れて行かう、彼女はあんな潰れた聲をしてゐた、私はそれを書間聞いたのだ、私は店を閉ぢてしまはう、ドブロンラーヴォフに

賣つてもいゝ、そこで何もかも新しく始めるんだ、その中でも、先づブーローニュだ! 彼女は耳を傾けてゐたが、まだ恐れてゐた。彼女は、次第々々に一層恐がり出した。しかしそれは私にはあまり關係したことではなかつた。私に最も關係したことは、再び彼女の足許へ跪いて、再び接吻し、彼女の足の在つた場所に接吻し、そして、彼女を崇拜しようとする抑へ難い慾望が尚一層起つて來たことであつた。そして——「俺は、お前に就いてはそれ以上何にも、何にも求めない。」私は繰返し續けた。「俺に答へないでもいゝ、俺に注意しないでもいゝ、ただ俺にこつちの隅つこからお分を見戍らしてくれ、俺をお前の犬のやうに、お前の品物のやうに取扱つてくれ……。」彼女は泣いてゐた。「私は、あなたの方が私をそんな風にさせようとなさるんだと思ひました。」突然彼女はさう言つたが、餘りに、餘りに無意識だつたので、恐らく彼女は、自分が何を言つてゐたのか氣がつかなかつたのであらう、それでも——おゝ、それは、その晩彼女が發した最も意味深い瞬間的な言葉で、私にとつて最も容易に理解出來るものであつた、そしてそれは、私の心をまるでナイフで突刺すやうに突刺したのであつた! それは、すべてのことを、凡ゆることを私に說明した、しかし、彼女が私のそばに、私の眼前に居た間は、私は希望を持たずにはゐられなかつた、そして恐ろしく幸福であつた。おゝ、私はその晩は恐ろしく彼女を疲らし

た、私はそれを理解した、しかし、私はすべてのことを直接に改めなければならないと考へつづけてゐた。たうとう、夜になつて彼女は、全く疲憊してしまつた。私は、彼女を說きつけて眠らせた、彼女は直ぐに熟睡に陷つた。私は、彼女が人事不省になることを豫期してゐた、彼女はやゝ人事不省になる性質であつたが。私は絕えず夜中に起きて、こく僅かにではあつたが。スリッパを穿いてそつと彼女を見に行つた。私は、自分が三留で彼女に買つてやつた憐れな小さな鐵製の寢臺にはひつてゐる弱々しい人間を見ながら、彼女に對して苦しみ惱んだ。私は跪いた、しかし彼女の眠つてゐる間に(私女の同意を得ずに)その足に接吻しようとは思はなかつた。私は祈り始めたが、再び飛び起きた。ルケーリャは、臺所を出たりはひつたりして、絕えず私を注意してゐた。私は、彼女の處へはひつて行つて、床にはひるやうに言ひ、明日は「事がすつかり變つてしまふだらう。」と言つた。

そして私は、このことを盲目的に、狂的に信じてゐた。

おゝ、私は喜びを以て、喜びを以て溢れてゐた！　私は、首を長くして翌日を待つた。それにしても、私は、何かが惡くいくだらうなどといふことを信じなかつた、その徵候があつたにも拘らず。理性は、全く私に戻つて來なかつたが、彼幕は私の眼から落ちたのであつた、そして長い間、理性は戻つて來なかつた——今日まで、今日只今まで！　さうだ、あの時どうしてそれが戻つて來ることが出來たらう、その筈である、彼女はあの時にはまだ生きてゐたのだ、その筈である、彼女は此處に、私の眼前に居たのだ、そして私は彼女の眼前に居たのだ。「明日彼女は眼を覺ます、そこで俺はこのことをすつかり彼女に話さう、それで彼女にはすつかり解るだらう。」私が、その時單純に明瞭に考へてゐたのはそれであつた、何故なら私は、歡喜の狀態に在つたのだから！　私の偉大なる考へといふのは、ブーローニュへの小旅行であつた。ブーローニュがすべてである、ブーローニュに關しては何か窮竟のそして決定的のものがある、といふことを、何かの理由で、私は絕えず考へてゐた。「ブーローニュへ！　ブーローニュへ！」……私は、氣違ひのやうになつて朝の來るのを待つてゐた。

第三章　私には解り過ぎる

けれども、諸君の知る如く、それは數日前であつた、五日だ、たつた五日前だ、この前の火曜日だつた！　さうだ、さうだ、若しもう少し長かつたら、もう少し彼女が待つてさへくれたら——**さうすれば私は闇黑を拂ひ消してしまつたであらうに！**　それは、彼女が、その安靜を取戻さなかつた位のことではなかつた。丁度其翌日は彼女は、混亂してゐたにも拘らず、微笑して私の言ふことを聽いてゐた……。この時の間、この五日の間、彼女は混亂した

り、恥ぢたりしてゐた。彼女は、恐れても居た、非常に恐れてゐた。私はそれを兎やかう言はない、私は、それを打消す程氣が狂つてはゐないことであつた、しかし、どうして彼女が脅かされずに居られたであらう？　我々は、あれ程長い間お互ひに他人だつた、あれ程お互ひに遠ざかるやうになつてゐたのだ、それに突然こんなことが……しかし私は、彼女の恐怖を見なかつた。私は、新しい生活の始まるといふことで眼が眩んでゐたのだ！……それは眞實である、私が間違つてゐたことは、全く眞實である。恐らくは、もつと多くの間違ひがあつたであらう。私は翌日眼を覺ました時、其の朝(それは水曜日であつた)第一の間違ひをした。私は、出し抜けに彼女を自分の友にしてしまつた。私は、餘りに急いでゐた、餘りに急いでゐたのだ、が告白することが、必要で缺くべからざるものだつたのだ——告白以上のものが！　私は、一生涯自分自身に隱してゐなかつたのだと、私は彼女に眞直に言つた。私が金を貸してゐる事は、單に私の意志と心情との墮落に過ぎないもので、自責と自尊との自分一個の考へに過ぎないものだつたのだといふことを、私は彼女にはつきりさせた。私は、休憩室に居たあの時は本當に臆病だつたのだといふ事、及び、それは私の性情と私の自覺心とのためだつたのだといふことを、彼女に說明した——

私は、周圍の者によつて、劇場によつて、感銘を受けた、私は、旨くやつたかどうかを疑つてゐた、そしてそれは馬鹿なことでは無かつたらうかと。私は、決闘を恐れはしなかつたが馬鹿なことをすることを恐れた……そして後にも私は、それを正直に言はないですべての人人を苦しめ、そのために彼女を苦しめた、そして、そのために苦しめたと同樣、彼女と結婚してしまつた。實際私は、その大部分を、無我無中のやうに話した。彼女自身は、私の手をとつて私を罷めさせた。「あなたは自分を不幸にしていらつしやるのよ。」そして再び涙、再び殆んどヒステリーであつた！　彼女は、そんなことを言はないやうに、私に賴みつゞけてゐた。

私は、彼女の懇願には全く氣がつかなかつた、殆んどそれには氣がつかなかつた。「春だ、ブーローニュだ！　あすこでは太陽が輝いてるだらう、我々の新しい太陽が。」私は、それを言ひつゞけてゐた！　私は、店を閉ぢてドブロンラーヴォフに讓つてしまふのだ。突然私は、我々の金を全部、私の敎母から殘された三千留だけ除いて、あとをすつかり貧しい人達に施與してしまつて、その三千留はブーローニュへ行つて使つて、それから我々は歸つて來て、眞實の仕事をして、新しい生活を始めよう、といふことを彼女にほのめかした。さう我々はきめた、何故なら彼女は何とも言はなかつたから……彼女は唯だ微笑した丈けであつた。そし

て私は、彼女は私を失望させることを恐れて主に差控へる心で微笑したのだといふことを信じた。彼女にとつては私が煩はしかつたといふことを、勿論私は知つてゐた。私がそれに氣づかない程愚かで、或ひは利己主義的であつたとは思はないでくれ給へ。君は、すべてを、すべてを、最も些細な事まで見た、私は、露骨に表はされた私の立場の全く望みないことを、誰よりもよく見たのだ。

私は、私自身のことと彼女のこととを何にもかも彼女に話した。それからルケーリャのことも。私は、自分が泣いたことを彼女に話した……おゝ、勿論私は話題を變へたのだ。私は或る事に就いては、それ以上一語も言ふまいとも思つてみた。そして實際、彼女は一度か二度復活したのだ——私はそれを憶えてゐる！　私が彼女を見たのに何にも解らなかつた、などと何故諸君は言ふのか？　そして、若しこの事さへ起らなかつたら、すべては、再び生命を得たであらう。さうだ、つい一昨日のことだつたが、我々が讀書に就いて及びその多彼女が讀んでゐたものに就いて話してゐた時、彼女は自分で或事を私に話してギル・ブラとグラナダの大僧正の光景を想ひ出しながら、それを話した時笑つてゐた。そして、何といふ氣持のいゝ、子供らしい笑ひ方だつたらう、それは我々が婚約した當時と丁度同じだつた。（一瞬のことだ！　一瞬のことだ！）如何に私は喜んだか！　だが、私は大僧正の話で恐ろしく感動されてゐた、すると彼女は、その多のうち坐つてゐた間にその文學的作品に接して笑ふ程に心の平和と、幸福とを見出したのであつた。そこで彼女は十分落著いたのだ、「私が彼女をそんな風に捨てるだらう。」といふ事を十分に信じ始めたのだ。「あなたの方が私をそんな風に捨てるんだらうと思ひました。」といふ言葉は、あの時、水曜日に彼女が發した言葉であつた！　おゝ！　十歳ばかりの子供のやうな考へだ！　そして、彼女がそれを信じたといふ事を諸君は知つてゐる、本當にすべてがそんな風な結果になるだらうといふ事を彼女は信じてゐた、彼女は彼女のテーブルに就き、そして私は私のテーブルに就く、さうして、我々は六十までもそんな風に續けて行くであらうと。そして忽ちに——私は前進した、彼女の夫、そしてその夫は愛を要求する！　おゝ、迷想！　おゝ、私の盲目さ！

私が彼女を喜びを以て見たことも、矢張り間違ひであつた、私は、自分を制へなければならなかつた、云はば私の歡喜は彼女を脅かしたのであつた。しかし、事實私は自分を制へた。私は再び彼女の足に接吻しはしなかつた。私は決してけぶりにも出さなかつた……さう、私が彼女の夫だといふことをこれつぱかりも見せはしなかつた——おゝ、私の心にはその考へは全く無かつたのだ、私は唯だ彼女を崇拜した丈けなのだ！　けれども、諸君の見らるゝ如く、私は全く沈默してゐることは出來なかつた、私はすつかり話さずにはゐられなかつた！

突然私は、私が彼女と話すことを喜んだこと、及び彼女を私よりも一層比較にならない程教養ある發達した人間だと思つたことを彼女に話した。彼女は、眞赤になつて、困惑して、私が誇張してゐるのだと言つた。それから私は、愚かな者のやうに、あの劣等な下品な奴に對する彼女の無邪氣な爭鬪、あの爭鬪を聽きながら扉のうしろに立つてゐた時、私がどんなにうれしかつたか、そして私が彼女の悧巧なことと華々しい機智と、及びそれと同時に彼女の子供らしい單純さとをどんなに喜んだか、ということを彼女に話さずにはゐられなかつた。彼女は、全く震へてゐるやうで、再び私が誇張してゐるのだといふことを呟いてゐたが、突然彼女の顏は暗くなり、彼女は兩手に顏を隱して、吸り泣き始めた……その時には私は自分を抑制することが出來なかつた、再び私は彼女の足許に跪いて、再び彼女の足に接吻し始めた、そして、再び水曜日の時と同じ樣に、ヒステリーの發作といふ結果になつた。それは昨日の夕方であつた——そして——朝には……

朝には！　氣違ひだ！　おゝ、その朝は今日なのだ、丁度今、たつた今なのだ！

耳を傾けて、理解しようとし給へ。おゝ、我々がサモヴールの處で逢つた時（昨日のヒステリーのあとだつた）私は、彼女の安靜さに全くびつくりした、それは本當のことである！而も私は、終夜昨日起つたことを考へて恐怖から震へてゐたのであつた。しかし、突然彼女は私の處へやつて來て、兩手を摑み合せながら（今朝だ、今朝だ！）こんなことを私に言ひ始めた、彼女は罪人だつた、彼女はそれを知つてゐた、彼女の罪はこの冬中彼女を苦しめてゐた、今も彼女を苦しめつゝある……。彼女は私の忠實な妻になります、あなたを尊敬します……」

そこで私は、飛上つて、氣違ひのやうに彼女を抱擁した。私は彼女に接吻した、彼女の顏に接吻した、彼女の脣に接吻した、長い間別れてゐてから始めて會つた夫のやうに。だが何故私は今朝外出したのだらう、たつた二時間……外國へ行く爲の我々の旅行券……おゝ、神よ！もし私が五分間、たつた五分間早く歸つて來さへしたら！……我々の家の門にはあんなに人がたかつてゐるのだ、あんなに多くの人々の眼が皆な私を凝と見詰めた。おゝ神よ！

ルケーリャが言ふには（おゝ！　私は、何かの爲めにルケーリャを放すまい。彼女はそれに就いて何にもかも知つてゐる、彼女はこの冬中此處に居たのだ、彼女は凡ての事を私に話してくれるだらう！）彼女が言ふには、私が家から出て行つて、歸つて來るやつと二十分許りの時——彼女は突然、私は何だつたか忘れたが何か飢きに我々の部屋にはひつて彼女の奥さんの處へ行つた、すると、彼女の聖像が（あの同じ聖母の像）取下ろされて彼女の前のテーブルの上に載つてゐたが、奥さんはたつた今その前で祈つてゐた所のやうだつたさうだ、「何を

なさつていらつしやるんです、奥さん？」「何にも、ルケーリャ、來てもいゝのよ。一寸お待ち、ルケーリャ。」「あの方は私の處へ來て接吻して下さいました。『貴女様は幸福でいらつしやいますか、奥さん？』と私がお訊ねしますと、『え〻、ルケーリャ。』『旦那様はずつと前に貴女の許しを乞ひにおいでなる筈だつたのでございますね、奥さん……貴女が慰められていらつしやることを神様に感謝なさいましよ。』『あ〻、い〻とも、ルケーリャ。』とあの方はおつしやいました。『あつちへおいで、ルケーリャ。』さうしてあの方は微笑なさいましたが、それや變でした。」ルケーリャが十分間あとで彼女を見に行つた程、變だつたさうだ。

「あの方は、窓のそばの壁に凭りかゝつていらつしやいました、壁に腕をおいて、その上に頭を凭たせて、そんな風にして考へながら立つておいでした。さうして、私が他の部屋からあの方を見にはひつて行つたことも知らずにいらしつた程、あの方は考へ込んで立つていらしつたんです。あの方は微笑しながら立つていらしつたんです。私はあの方を眺めて、ゆつくり振り向いて、不思議に思ひながら出て行きましたが、其時突然窓のあく音が聞えました。私はすぐにはひて行つて、かう申しました。『きつふございますよ、奥さん、風邪をひかないようになさらないと。』そして突然私は、あの方が開け放した窓へ乘つて丈いつぱいに立つて、私の方へ背中を向けて、手に聖像を持つてらつしやるのを見ましたのです。私はもうすぐ樣氣落がして了ひました。『奥さん、奥さん。』と私は叫びました。あの方は、それを聞いてが、振向きはなさらないで、前の方へ一歩出て、聖像を胸に押しつけて、窓から飛び降りてしまひになりました。」

私が門の處へはひつて行つた時、彼女はまだ暖かだつたといふことを憶えてゐる丈けだ。最もいけなかつたのは、人々が皆私を見てゐるといふことであつた。最初私は叫んだ、すると突然人々は默つてしまつた、それから凡ての者が彼女から離れて行つた……そして彼女は、聖像を持つてそこに横つてゐた。私は默つて彼女の處へ行つて、長い間彼女を見てゐたことを、云はば闇黒の中で憶えてゐる。けれどもすべての者が私の周圍へやつて來て、私に何か言つてゐた。そこにはルケーリャも居た、が私は彼女を見なかつた。彼女は、私に何か言つたと言つてゐる。私は、あの勞働者を憶えてゐる丈けだ。彼は、私にかう叫びつゞけてゐた。「たつた一摑み血が口から出た、一摑みだ、一摑みだ！」そして彼は、石の上の血を指した。私は指でその血に觸つたと確かに思ふ、私は指を汚して、その指を眺めた、（それを憶えてゐる）そして彼は、「一摑みだ、一摑みだ！」といつまでも繰り返してゐた。

「一摑みがどうしたんだ？」私は、大變な勢で喚いたといふことだ、そして、手をあげて彼

に跳びかゝつて行つたさうだ。

おゝ、野蠻だ！　野蠻だ！　妄念だ！　おそろしい！　有り得ないことだ！

第四章　私はたつた五分間遲かつた

それはさうでは無いのか？　多分さうだらう？　人はそんなことが可能なことだと本當に言ふことが出來るのか！　何のために、何故この女は死んだのだ？

おゝ、私を信ぜよ、私には解る、併し、何故彼女は死んだのかといふ事は、猶ほ疑問である。彼女は、私の愛を恐れてゐた、それを受容れるべきか受容れるべからざるかを本氣で自己に訊いたが、その問題を忍びきれずに、死を選んだのだ。私は知つてゐる、私は知つてゐる、私の頭を責める必要は全く無い、彼女はそれを守る事が出來ない事を恐れた——それは明かだ。それに就いては、全く恐るべき事情があるのだ。

何故に彼女は死んだのか？　それは要するに猶ほ疑問である。その疑問が、私の腦髓を打ちに打つ。若しも彼女があんな風にして置いてほしかつたのならば、私はあんな風にして置いたであらう。彼女はそれを信じなかつた、さういふ事なのであつた！　否——否。私は馬鹿なことを言つてゐる、それは全くそんな事ではなかつた。それは、單に私に對して彼女が忠實であつたが爲めだつたのだ——若しも彼女が私を愛したならば彼女はすつかり私を愛さなければならなかつたであらう、そしてあの雜貨商を愛した如くではない筈だつたであらう。そして、彼女はあの雜貨商が欲したやうな愛を容れるには餘りに淸く、餘りに純であつたので、彼女は私を欺きたくなかつたのであらう。半分の愛を以て、欺きの愛を以て、或ひは四分の一の愛を以て、私を欺きたくはなかつたのであらう。彼女のやうな人間は、正直である、餘りに正直である、それが問題なのである！　あの時分、私が彼女の心に寬容を吹き込まうと欲したことを諸君は記憶せらるゝか？　不思議な考へだつた。

恐ろしい興味を以て知り度いことは、彼女が、私を尊敬してゐたかゐなかつたか？　といふことである。彼女は私を輕蔑してゐたのかさうではなかつたのか、私は知らない。彼女が私を輕蔑してゐたとは、私は信じない。恐ろしく不思議なことだが、何故彼女が私を輕蔑してゐたといふことが、その多中、かつて一度も私の頭にはひつて來なかつたのであらう？　私は、彼女が苛酷な驚きを以て私を見た、あの瞬間までは、その反對のことを絕對的に確信してゐた。それは苛酷であつた。私は卽座に、彼女が私を輕蔑してゐたことを理解した、私は、立ち所に理解した、永遠に！　あゝ、彼女をして、彼女をして一生涯でも私を輕蔑せしむるがいゝ、たゞ彼女をして生活せしめよ！　つい昨日は彼女は歩き廻つたり、喋つたり

してゐた。どうして彼女が窓から身を投げたのか、それだけは私には解らない！　それに、どうして私がそれを五分間前に想像することが出來たらう？　私はルケーリャを呼んだ。私は今は何かの爲めにルケーリャを放すまい！

おゝ、それでも我々は、互ひに理解し合ふやうになつたかも知れないのだ！　我々は、その冬の間互ひに恐ろしく遠ざかるやうになつたといふだけのことだつたのだ、しかし我々は再び互ひに馴れるやうにはなり得なかつたのだらうか？　何故、何故、我々は再び一緒になつて、再び新生活を始めることが出來なかつたのであらう？　私は寛大である、彼女もだつた——それが共通の點だつた！　單にもう二語か三語、もう二日ほしかつた——それ以上は要らない、さうすれば彼女はすべてを理解したであらう。

總ての中で最も堪らない事は、それが偶然だといふ事である——單に野蠻な遲鈍な偶然だといふ事である。それが堪らない事なのだ！　五分間、たつた五分間遲かつたのだ！　私が五分間早く歸つて來たなら、その瞬間は雲のやうに過ぎ去つてしまつたであらう、そしてそれは決して再び彼女の頭にははひらなかつたであらう。そして、彼女がすべての事を理解するといふ結果になつたであらう。けれども今や再び、空室となつた、そして私獨りになつてしまつた。此處で時計の振子はカチ〳〵いつてゐる、それは何とも思つてはゐない、それは何等の憐れみも持つてはゐない……。此處には誰ももうゐない——それが不幸な事なのだ！

私は歩きつゞけてゐる、私は歩きつゞけてゐる。私は知つてゐる、知つてゐる、諸君は私に語る必要はない、それは諸君を樂しませるだらう、諸君は、私が偶然とあの五分間とに不平をこぼしてゐるのを馬鹿なことだと思ふであらう。けれどもそれは明かだ。一つのことを考へ給へ、彼女は、人々が常になすやうに「私の死には誰も罪は無い」といふやうな書置さへ殘さなかつた。彼女はルケーリャとだけでゐたのだ。」するとルケーリャが困難な立場になり、「彼女はルケーリャが彼女を推し落したのだと言はれるかも知れないといふことをも考へなかつたのであらう。もしも窓からと、家からと、庭からと四人の人が彼女が手に聖像を持つて立ち、それから身を飜して飛び降りたのを見るやうなことが無かつたとしたら、いづれにしてもルケーリャは警官に捉へられたであらう。けれども、人々がそこに立つてゐて、彼女を見たといふのも、矢張り偶然であつた。否、それは全く一瞬間であつた、單に責任のない一瞬間であつた。突然の衝動、幻影であるー　もし彼女が聖像の前で祈つてゐるのだつたとしたらどうだらう？　彼女が、死に面してゐたといふことにはならない。そのすべての衝動は、恐らくは、十分間位ゐ續いたのであらう。彼女が頭を腕に凭せて、微笑しながら壁に凭つて立つてゐた間にそれは決定されたのであらう。その考へが彼女の頭に飛び込んで、彼女

は眩暈がした、そして——そして、それに抵抗することが出來なかつたのだ。

諸君が何といはうとも、それは明かに間違つてゐたのだ。私と共に生活することは可能なことだつたであらう。そして、もしもそれが貧血病なのだつたとしたらどうであらう？　それは單に、血の不足、活動力の弛緩から來るのであつたらうか？　彼女は、その冬の間疲れ易くなつてゐた、それが、その理由だつたのだ……。

私は遲れたのだ！……

棺の中に在る彼女は何と痩せてゐるのであらう、彼女の鼻は何といふ尖りかたであらう！彼女の睫毛は、矢のやうに眞直になつてゐる。さうして、諸君、彼女が落ちた時には何にも打碎かれなかつたのだ、何にも壞れなかつたのだ！　あの「一摑みの血」の他には何にも。それは、デザートの時の匙に一杯位なのだ。內部の傷害からだ。變な考へだが、若しも彼女を埋めないことが出來るのだつたら？　何故なら若しも人々が彼女を連れ去らなくてはならはいなどと云ふことは殆んど信じられないことだ！　私は氣が違つてはゐない、狂つてはゐないのだ——その反對に、私の心は今までにも非常にはつきりしてゐたことは無かつたのだ——だが、そこには再び誰も居ないで、たゞ二つの部屋と私と抵當物とだけだつた場合、私はどうしたらいゝのであらう？　發狂だ、發狂だ！　私は、死ぬまで彼女を苦しめた、さういふ譯である！

今、私に對する諸君の法律はどんなものであるか？　諸君の習慣、諸君の道德、諸君の生活、諸君の制度、諸君の信仰を私はどう思ふであらう！　諸君の裁判官をして私を裁判せしめよ、私をして諸君の法廷へ行かしめよ、私をして諸君の陪審官に審問せしめよ、さうすれば私は、何物をも承認しないと言ふであらう。諸君の裁判官は、「默れ、士官。」と叫ぶであらう。すると私は、彼に向つてから叫ばうと思ふ。「私が服從するやうな如何なる力を君は持つてゐるのか？　何故盲目的な生氣なき力が最愛のものを破壞したのであるか？　今私に對する君の法律はどんなものであるか？　それは私にとつては何物でもないのだ。」と。おゝ、私は構はない！

彼女は盲目であつた、盲目であつた！　彼女は死んだのだ、彼女には聞えないのだ！　私が如何なる樂園を以て諸君を取卷かうと思つてゐるかを、諸君は知らない。私の魂の中には樂園がある、私は、諸君の周圍にそれを華やかなものにして見せようと思つてゐるのだ！　だが、諸君はを私愛さなかつたであらう——それでもいゝ、それが何だ？　事は尙ほもそんな風でなくてはならなかつたのであらう、すべては、そんな風に留らなくてはならなかつたのであらう。諸君は唯だ私に友として話した方がよかつたのだ——だがそれでもいゝ、それ

でもいゝのだ！　諸君は笑ひながら彼と共に歩いてゐればよかつたのだ、さうすれば私は、町の他の側から諸君を見戍つたであらう……おゝ、何か、何か、何か、若しも彼女がもう一度その眼を開きさへしたら！　一瞬間でもいゝ、たつた一度でいゝ！　若しも彼女が、今朝私の前に立つて、忠實なる妻となるといふ誓をした時のやうに私を見てくれたら！　おゝ、一目で彼女はそれをすつかり理解したであらうに！

おゝ、盲目なる力よ！　おゝ、自然よ！　人間は地上に於いて孤獨である——それが恐るべき事なのだ！「この國に生きてゐる人間があるか？」と露西亞の英雄が叫んだ。私は、英雄ではないが、同じく叫ぶ。併し誰も私の叫びに答へる者はない。彼等は、太陽が宇宙に對して生を與へる、と言つてゐる。太陽は昇る、そして——それを眺めよ、それは死んではゐないか！　總ての物が死んでゐる、そして到る處に死人が居る。人間は孤獨である——彼等の周圍には沈默がある——それが土地である！「人間よ、互ひに相愛せよ。」——誰がさう言ふのか？　それは誰の命令なのか？　時計の振子は、無感覺に無情にカチ〳〵いつてゐる。」夜の二時だ。彼女の小さな靴が小さなベッドの傍に置いてある、恰も彼女を待つてゐるやうだ……否、重大な事だ、人々が明日彼女を運れ去つてしまつたら私はどうなるのであらう？

變人の夢

一

私は、變人である。人々は、私を今では狂人だと言つてゐる。若し私が、今では以前と同樣に人々にとつて變人なのではなかつたのならば、それは一種の昇進とでも言ふべきであらう。けれども私は、最早彼等に逆つてはゐない、今では私は彼等を悉く愛してゐる——彼等が私を笑ふ時でさへ、兎も角も私は、彼等を以前よりも一層愛してゐる。若しも彼等を見ることが、私を非常に悲しませなかつたならば、私は、彼等と共に自分でも笑ふつもりなのだ——己自身をではなく、彼等の愛のために。悲しくと言つた譯は、彼等が眞理を知らないのに私が知つてゐるからなのである。眞理を知つてゐる一個の人間にとつては、それは如何に困難なことであらう！　しかし彼等は、これを理解しないであらう。彼等はそれを理解しないであらう。

以前には私は、自分が變だと思はれた爲めに深く苦しむのが常であつた。云はれたのではなく、さうだつたのだ。私は、いつも變だつた、恐らくは私は、生れ落ちるとから、そのことを知つてゐたのであらう。恐らくは私は、やつと七歳の時にも自分が變人だといふことを知つてゐたのであらう。その後私は學校へ上り、やがて大學へ行つた、そして——さうだ、

私が學問すればする程、私は自分が變人だといふことをはつきり知るやうになつた。そこで終ひには凡ゆる私の大學の知識は、それを深く突込んで勉強すればする程、私が變人だといふことを說明し證明するためにのみ存するやうに、私には思はれて來た。私が凡ゆる點で變に見えるといふことは、日々に私の自覺を增し强めるのであつた。すべての人々は、よく私を笑つた。尤も、この世の中に本當に自分が變人だといふことを知つてゐる者があるとしたらそれは私に他ならないのだといふことを知り、或は推測してゐた者は隨分あつたのだが、そのことが全くすべてのうちで最も侮辱に當ることだといふことを彼等は知らないで、而も私が罪を被せられてゐた。私は、そのことを誰にも告白する氣にならなかつた程、常に高慢であつた。私の高慢は、年と共に增大し、そして若しも私が誰にせよ血の通つてゐる人間に向つて、自分が變人だといふことを告白する氣になるやうなことがあるとしたら、私は卽座に連發拳銃（レヴォルヴァー）で自分の頭を打碎いてしまつたに違ひないと本當に思ふ。おゝ、私が忍びきれずに突然どうにかして、友達に告白してしまひはしないかと、如何に私は小さい時分には苦しんだことであらう。

併しながら、私は一個の青年になつたので、一年一年と自分の恐ろしい性質を次第に實感するやうに自分はなつたが、或る理由で私はやゝ平靜になつて來た。私は言つて置くが、或

る理由から今でも私はそれを說明することは出來ない。恐らくは、私の魂の中には私の全存在よりも無限に高い或る物から一つの恐るべき苦惱が生れた故であらう——突如として私の得た確信は、この世の何處に於いてもすべては同じことだといふことであつた。私は、ずつと以前からそれを疑つてゐたのであるが、どうしたのか突然去年になつてこの十分な確信が現れたのであつた。若しもこの世界が實在してゐるとしても、又は何處にも何にも無いのだとしても、私にとつては、それは全く同じことだらうといふことを私は突然に感じた。私は、「自分の背後には何にも無かつた」といふことを自分の全存在を以て感じ始めた。最初私は、實際非常に澤山のものが在つたのだと思つてゐた、しかし後には私は、以前にも何にも無かつたのだし、又單にどうにかしてさう思はれたに過ぎなかつたのだといふことを推測した。次第々々に私は、決して何にも存在しはしまいといふことを確信するやうになつた。そこで私は急に、人々に對して腹を立てることを罷め、そして、殆んど彼等を注意しなくなり始めた。實際、それは最も些細な事柄のうちに現はれた。例へば私は、往來を步いてゐて、人に衝き當るやうなことはよくあつたが、それは私が考へに氣をとられてゐるからではなかつた——其時分には私は考へることを全く罷めてゐたのだから、私は何を考へなくてはならなかつたらう？ ——私にとつては、全く同じことであつた。そして、解決すべき問題に關し

ては、おゝ、私はそれを解決しなかつたのだ、而も如何に澤山の問題が在つたらう！ けれどもそれは私にとつては全く同じことであつてしまつた、そしてすべての問題が消えた。

丁度其後、私は眞理を知つた。私は、この十一月、この十一月の三日に眞理を知つた、そして私は、その三日以來一瞬間も忘れないのである。それは陰氣な夜であつた、諸君の考へ得る最も陰氣な夜であつた。私は、十一時頃に家へ歸らうとしてゐた、そして私は、それ以上に陰氣な時間を見出すことは不可能だらうと思つたことを憶えてゐる。理學的にでも。終日雨が降つてゐた、ひどく冷たい陰氣な雨が。その雨は時とすると人類に對して、全く務かしてゐるやうで明かに敵意を持つてゐたことを、私は憶えてゐる。突然十一時に雨は止んだ、そして、今度は雨の降つてゐた時よりも一層ジト〳〵した、一層冷たい、恐ろしい濕氣が生じた。凡ゆる物、往來の凡ゆる石、及び凡ゆる小徑から、霧が昇つてゐた、その時私は往來から眼を放して低い方を眺めてゐたのだ。突然私は、瓦斯が消えてしまつたら氣持よくなるだらうと思つた、何故ならば點火された瓦斯があの濃厚な霧を反映するので、人の心はそれによつて一層悲しくなるものである。その日は、私は實際に何にも食べてゐないのだつた。日の暮れかけた時分から私は、知り合ひの技師と一緒に坐つてゐたのであつた、その男は、二人の他の友達と一緒だつた。私は始終全く沈默してゐた、そこで私は、彼等を退屈させたに

違ひない。彼等は、何か刺戟的なことを話してゐたが、不意に全く興奮してしまつた。しかしそれは、彼等にとつては全く同じことであつた。私はそれを見た。彼等は全く何でもないことに興奮してゐたのだ。出し抜けに私は言ひ出した。「ねえ、君……だが、これは君たちにとつては全く同じことですよ。」彼等は、腹を立てはしなかつたが、皆して私を笑ひ始めた。それは、私が何にも非難しずに口をきいたからで、確かに、私にとつてはそれが全く同じことであつたが爲めであつた。彼等は、それが私にとつては全く同じことであつたといふことを知つて、陽氣になつた。

私が往來で瓦斯のことを考へてゐた時、私は空を眺めた。空は、恐ろしく眞黒だつたが、切れぎれの雲とその間に見えてゐる眞黒な底知れぬ空間とを、私ははつきりと區別することが出來た。不意と私は、そのうちの或る空間の中に一つの小さな星を見附けた、そしてそれを凝視し始めた。何故ならその小さな星が私に或る考へを與へたのであつた。私は、その夜自殺しようと思つた。私は、二ケ月前から自殺しようとしつかりきめてゐた、そして私は非常に貧乏だつたが、素晴しい連發拳銃を自分で買つた、そしてそれをその日に裝塡した。それ以來二ケ月經つて、それは私の抽斗の中にはひつてゐる、私にとつては餘りに全く同じことであつたので、たうたう私は、全く同じことでない日を見出さうと熱望するに到つた——何故だか、私は知らない。そこで、この二ケ月の間といふもの毎晩、家に歸つて來ると私は、自分を射撃することを考へてゐた。けれども、始終私は時が來るのを待つてゐた。今や、あの小さな星が私にその考へを與へてくれた、そして私は、その晩今は確かに自殺することになるときめてゐた。だが、何故あの小さな星が私にその考へを與へたのだらうか——私は知らない。

そして、私が空を見てゐた丁度其時、あの少女が突然私の腕を捉へたのであつた。往來は最早ガランとしてゐた、人の子一人居なかつた。ずつと遠くの方では馬車屋が馬車の中で眠つてゐた。その少女は八つ位であつたが、小さなシールを著てゐた。彼女は外套を着てゐないので、濡れ鼠になつてゐた。しかし私は、特に彼女の濡れたぼろ〳〵な靴を憶えてゐる、今でもそれを憶えてゐる。それは、特に私の眼を惹いたのであつた。彼女は、不意に私の腕を引張つて、叫び出した。彼女は泣きはしなかつたが、どうしたのか唐突に何か叫んでゐた。彼女は、絶えず寒さの爲めに全く震へてゐたので、適當に言葉を發することが出來なかつた。彼女は、何かこわがつてゐた、そして絶望して叫んだ。「お母さん、お母さん！」私は、彼女の方へ振り向いたが、何とも言はなかつた。私は歩き出した、しかし彼女は、駈けて來て、私を引張つた。彼女の聲には、非常に脅かされてゐる人の、絶望しきつてゐるやうな響があつ

た。私は、その響を知つてゐる。彼女の發することは意味をなさなかつたが、彼女の母が何處かで死にかゝつてゐるか、又は人々に何事かが起つたので、彼女が人を呼びに、或は母を助ける何かを探しに飛び出して來たのだといふことを私は知つた。けれども私は、彼女に從いて行かなかつた、却つて、突然彼女を追ひ拂はうといふ考へが私には起つた。最初、私は巡査を探しに行くやうに彼女に言つた。しかし彼女は、突然その兩手を摑み合せて、吸り泣き、息をはづませながら私のそばを走つて來て、私を離れようとしなかつた。そこで私は、足踏みをして、彼女に吠鳴りつけた。彼女は、「どうぞ、をぢさん、をぢさん……」と叫ぶばかりであつた。しかし、出し抜けに彼女は私を離れて、向う側の往來へ駈けて行つた。一人の通行人が現れた。明かに彼女は私から彼の方へ駈けて行つたのだつた。

私は、自分の五階へ上つて行つた。私は、家主から一部屋を借りてゐた、他にも部屋はいくつもあつた。私の部屋は、貧乏くさい、小さなものだつた。窓は、半圓形のアゼンス風のものである。私は、亞米利加布で掩はれたソーフアと、數冊の本の載せてあるテーブルと、二個の椅子と、それから安樂椅子とを持つてゐた。これは古い、非常に古いものではあつたが、しかし矢張り安樂椅子なのである。私は、坐つて、蠟燭を點けて、それから考へ始めた。仕切壁のうしろの、扉に接した他の室では、亂痴氣騒ぎが始まつてゐた。それは、一昨日から續いてゐたのであつた。そこには、退職の大尉が住んでゐたが、彼女は友達と一緒になつてゐて——五六人の美人たち——ヴォートゥカを飲み、古い加留多でファローを演つてゐた。昨夜は摑み合ひが始まつた、彼等夫婦が長い間髪の毛を引張り合つてゐたことを私は知つてゐる。女房は、警官に訴へたかつたのだがその大尉をひどく恐れてゐた、この家の部屋を借りてゐる人はもう一人だけあつて、それは小さな痩せた軍人の細君なのだが、家の中にばかりはひつてゐるために殆んど病氣になつてしまつた三人の小さな子供を連れて、唯だ此處を通るだけなのである。彼女とその子供達とは、大尉を恐れて小さくなつてゐて、夜通し震へて、十字を切つてゐた、而も一番小さい子供は、恐れのためにひきつけたりするのであつた。この大尉は折々ネーフスキイ廣小路で通行人に言葉をかけて、物乞ひをしてゐることがあつたのを、私は本當に知つてゐる。彼は、どこの役所でも逐出されてゐるのである、が言ふも不思議なことだが——私が彼のことを話すのはこれが爲めなのである——まる一月の間彼は、私を憤らせずにゐた。抑もの初めから、勿論、私は彼と知己になることを避けてゐた、そして彼は、最初會つた時から私には弱らされてゐた。だが、如何に大聲で彼等が仕切壁のうしろで吸鳴つたにしても、又彼等が如何に大勢居たにしても——私にとつては、全く同じことであつた。私は終夜坐つてゐるのだが、本當に彼等が耳にははひらないのだ、つまり、全く

私は彼等を忘れてゐるのである。毎晩私は、夜明まで眠らないでゐる。それは一年間も續いた。私は、終夜テーブルのそばの自分の安樂椅子に坐つて、何にもしないでゐる。私は、晝の間本を讀んでゐる丈けなのである。私は坐つて、考へもしずに居るが、それでも何かの考へが漂つてはゐる、そこで私はそれを勝手に漂はせて置くのである。夜の間に蠟燭は燃えつくしてしまふのである。

私は、テーブルのそばに坐つて、連發拳銃をとり出して、それを自分の前に置いた。それを自分の前に置いた時は、「これは本當か？」と自分に訊ね、そして、「全く本當だ。」——卽ち自分を射擊しようとしてゐるのだと、絶對的の確信を持つて自分で答へたことを記憶してゐる。私はその夜自分を射擊するであらうといふことを確かに知つてゐた、しかし如何に長い間私はテーブルの前に坐つてゐたらう——それを私は知らなかつた。私は、確かに自分を射擊しなくてはならなかつたに違ひない、が併し、あの少女の爲めには。

二

諸君は知るであらう、私にとつてはすべてが全く同じことではあつたが、私は例へば苦痛を感じたのであつた。若しも誰かが私を打たうとしたならば、私は苦痛を感じなければならなかつたらう。道德感に就いても全く同樣である、若しも何か甚だ憐れむべき事が起つたならば、私は、以前に生活上に於いて色々のことをして、それが皆私にとつては全く同じことになつた如くに矢張り憐れみを感じるのであらう。私は、つい先刻も憐れみを感じたのだつた。確かに私は間違ひなく一人の子供を救ひたかつたのであらう。そんなら、何故私はあの小さな女の子を救はかつたのか？　それは、或る考へがその時私の心に浮んで來たからである。彼女が私を引張り、私に呼びかけてゐた時、突然に一つの問題が私の前に現れた、それつた。それは、つまらない問題であつたが、それが爲めに私は答へることが出來なかつたのだ。それは、今夜死んでしまはうと決心してゐたにしても、その時でもこの世のすべては、現在、前よりも一層私にとつて全く同じことなのだ、といふ決定のために腹が立つたのだ。私にとつて全く同じことではないと感じながら、而も私があの少女を憐れんだといふのは何故だつたのか？　私は、非常に彼女を可哀想に思つたことを憶えてゐる。それが爲めに私は或る苦痛を感じたのであつたが、それは私の立場では不思議な且つ信じ難いものでさへあつた。本當に私は、自分の瞬間的の感情をこれ以上はつきりと書くことは出來ない。が、これは、私が家に著いて、自分のテーブルのそばに坐つてしまつた時までも續いてゐた。私は、今まで長い間にもかつて無かつた程ひどく混亂してゐた。考へがそれからそれ

へと續いた。

若しも私が、零ではない一個の人間だとして、且つやがては零になつてしまふのだとしても、それならば確かに私は、生存し、そして自分の行爲のために苦しんだり、怒つたり、恥を感じたりしてゐることが出來るに違ひない。本當にさうである。けれども、若しも私が例へば今から二時間以內に自殺しようとしてゐたとしたならば、あの少女が私にとつて何であらう、そして私は、恥を或は地上の何事かを、どうしなければならないのであらう？　私は零にならうとしてゐるのだ、絕對的の虛無に。私が間もなく斷然と存在することを罷め、その結果何物も存在しなくなるのだといふ私の意識は、あの少女を憐れむといふ感情に對して、或は私が侵した惡を恥ぢる感情に對して、殆んど何等の影響をも與へることが出來なかつたのであらうか？　併しながら、それこそ、私があの可哀想な少女に對して、云はば何の憐れみをも感じなかつた許りか、二時間以內にはすべてのことが消滅してしまふのであるが故に、たとひ私が或る人間らしくない罪惡を侵すことになるのだとしても、その時には私はさうする權利を持つてゐたのだといふことを示さうとでもするやうに、野蠻にも足踏みしたり、吹鳴りつけたりしたその理由に、他ならなかつたのである。それが私の敗鳴りつけた理由だといふことを諸君は信ずるであらうか？　今私は、それを殆んど確信してゐる。生活と世界とは、云

はば私に賴つてゐたのだといふことが私には明かになつて來た。私は、この世界は獨り自分のためにのみ存在したのだと言ふことさへ出來たであらう。私は、自分を射擊する筈だつたのだ、そこでその時には全く何等の世界もなくなつてしまふであらう、少くも私にとつては。恐らくは私の背後には何人の爲めにも何物もなく、私の意識が消滅するや否や、全世界も亦、單に私の意識の一部であるかのやうに、幻影の如く消えて了ひ、全く無くなつてしまふのであるから、凡ゆるこの世界及び凡ゆるこれらの人々は、獨り私自身なのだ、といふことは言ふまでもないことである。私が坐つて考へてゐた時には、これらの凡ゆる新しい多くの問題を全く異つた方向へ向けてしまつて、全く新しい或事を案出してゐたことを私は憶えてゐる。例へば、或る不思議な考へが、突然私の心に浮んで來た。若しも私が前に月の世界か火星の中かに住んでゐたことがあり、そして、夢か夢魔の中でのみ人が折々考へることの出來る程、それ程ひどく汚辱され恥をかゝされたことがあつたのだとして、又後になつてこの地球の上に現れて、而も、他の遊星の上で私が爲してゐたことの意識を尙ほも保存してゐたものとして、且つ、その上私が決してどんなことがあつても共處へ歸ることが出來ないことを知つてゐて、その時私が地球から月の世界を觀察しようとしてゐたのだとしても——それは、私にとつては全く同じことだらうか、それとも同じでは無いだらうか？　私は、自分の行爲を恥か

しく感じるであらうか、それとも感じないであらうか？　その問題は、下らない、そして無用なものであつた、何故ならば連發拳銃が既に私の前には置いてあつたし、それに、私は此事は確かに起るであらうといふことを全くよく承知してゐたのだから。しかし、その問題は私を興奮させて、憤らせるに到つた。私は、先づこれを解決しずに死ぬことは出來なかつた。一言にして言ふと、あの少女は私を救つたのであつた、何故ならこの問題が私をして引金を引くことを延ばさせたのだから。この間に、大尉の處では、全く靜かになつてしまつた。彼等は、骨牌をお終ひにして、皆眠らうとし始めたが、その間にも各自勝手に不平を言つたり罵つたりしてゐた。それから私は、突然に、テーブルのそばの安樂椅子の中で眠りに陷ちてしまつた、こんなことはこれまで無かつたことである。私は、全く無意識に眠りに落ちてしまつた。

夢といふものは、非常に不思議なものである。一つの事が、驚く程透明に、細かい點まで寶石のやうに美しくされて、現れる。而も諸君は、まるでその事にはちつとも氣がつかないかのやうに、他のものを——例へば空間と時間とを飛び超えてゐるのである。夢は、意志からではなく欲望から、頭からではなく心から出て來る働きのやうである。そして、夢の中では私の心は時とすると何といふ錯雜した事柄を案出することであらう！　夢に於いては、全く理解し難い事柄が現れる。例へば、私の兄弟は五年前に死んだ。時々私は、彼の夢を見るが、彼は私の事柄に交渉し、そして我々は非常に興奮してゐる、ところが私は、私の夢が進んでゐる間も始終、私の兄弟は死んで埋まつてゐるといふことを全く知つても居、憶えても居るのである。何故私は、彼が死んでゐるのに尙ほ私のそばに居て私の事で働いてゐるのを驚かないのであらう？　何故私の心は、それをすつかり受け容れてゐるのであらう？　だが、もうその位にして置いて、私の夢の方へ取りかゝらう。さうだ、其時私は、あの私の十一月三日の夢を見たのであつた。今や人々は、それが單に夢に過ぎないからと言つて。私を揶揄する。だが、若しもそれが私に對して眞理を啓示してくれたとしたら、それが夢であらうと無からうと同じことではないか？　きつと諸君はかつて眞理を知り、それを見たことがあるであらう、それならば、諸君は、それが眞理であつて、眠つてゐる時にしろ眼覺めてゐる時にしろそれ以外に眞理は無い、有る筈もないのだといふことを知つてゐるであらう。さうだ、夢なら夢でも構はない。私は、諸君がそれ程高く賞讃してゐる此の生命を、自殺によつて消滅させようと欲してゐたのだが、私の夢は、私の夢は——それは、私に對して偉大な、新たにされた、そして力強い、新生命を表はしてくれたのである。

耳を傾け給へ。

三

私は、自分が尚ほもあの同じことを考へてゐる内に、知らず識らず眠りに落ちてしまつたと言つた。突然私は夢を見た、私は連發拳銃をとつて、坐つたまゝで、自分の心臟を――頭ではなく心臟をねらつた。以前には私は、確かに自分の頭を――確かに右の顳顬から射撃しようと定めてゐたのであつた。それで自分の心臟をねらつて、私は一秒か二秒待つたゐた。私の眼前の蠟燭とテーブルと壁とが、突然揺れ動き出した。私は素早く引金を引いた。

夢の中で諸君は、高い處から墜ちたり、咽喉を切られたり、打たれたりすることがあらう、が諸君は、どうにかして寢床の中に在る肉體を本當に傷つけられない限りは、決して苦痛を感じないであらう。それから諸君が苦痛を感じると、殆んどいつでもそれが爲めに眼が覺めてしまふであらう。私の夢でもさうだつた。私は何の苦痛も感じなかつた、しかし、私は自分の内のすべてのものが、それに反應して痙攣を起し、そしてすべてのものが突然消滅してしまつたやうな心持がした。私の周圍は全く恐ろしく眞暗であつた。私は、まるで盲目になり、知覺がなくなつてしまつたやうになつた、そして何か堅いものの上に背中を當てゝ横はつてゐた。私は、何にも見ることも出來ず、何か音を立てることも出來なかつた。人々が歩き廻り、

そして、私のそばで騒いでゐた、大尉のバスの聲、女房の叫び聲……と、そこには馬車が來てゐた。私は、棺の蓋をされて運ばれてゐるのである、私は棺が揺れるのを感じ、そのことを考へてゐる、すると突然始めて、私は死んでゐるのだといふ考へが私の心に浮んだ、私は、それを知つて疑はうともしないでゐる、私は見ることも動くことも出來ないが、それでも同時に私は、感じたり考へたりはしてゐるのである。けれども私はやがて、それと調和し始め、そして、夢の中ではいつもさうだが、私は疑ひもしずにその事實を受け容れてゐる。

今度は私は、地下に埋まつてゐるのだ。凡ての人は去つてしまひ、そして私だけが全く獨りで殘つてゐる。私は、身動きもしない。以前、私が自分の墓の中へ埋まつたら本當にどんなだらうと想像した時、私が常にそれと共に連想するのは、濕氣と寒氣との感ばかりであつた。今も私は、特に足の爪先が非常に冷たかつたといふことを感じたが、それ以上には何も感じなかつた。

私はそこに横はつて、そして――言ふも不思議なことだが――私は、死人といふものは何にも期待するものを持つてゐないのだといふことを、疑ひもしずに受け容れて、何にも期待しなかつた。しかし、濕りきつてゐた。どの位經つたものか、私には解らない――一時間か、

二三日か、それとも五六日か。突然、閉ぢてゐた私の左の眼の上へ、一滴の水が落ちた、それは、墓の頂天から漏れたのであつた。一分間もすると、もう一滴落ち、次に又一滴、そして絶えずつゞいた。突然、私の心の中には深い怒りが燃え上り、そして突然私の心の中には、肉體的の苦痛を感じた。「それは俺の傷だ。」と私は考へた。「それは俺の射た場所だ。そこには彈丸がはひつてゐる。」而も絶えず水は、私の閉ぢた眼の上へ眞直に滴り落ちてゐた。突然私は、自分に向つてなされてゐたすべてのことを裁決してゐる者に對して、叫び出した、私は身動きも出來なかつたから聲で叫んだのではなく、私の全體で叫んだのだつた。

「汝が何人であらうとも、若し汝といふ者が居るのならば、そして現在ある事柄よりも一層賢い目的が存するのならば、それをも此處に現してくれ。だが、若しも汝が私の愚かなる自殺のために私に復讐するのならば、それ以上の卑しき且つ無稽なる存在といふことによつて私がどうならうと、如何なる苦しみも、殉教の幾百萬年の間を探しても、私が默然として感じてゐるやうなこの侮蔑とは比較にもならないのだといふことを知るがいゝ。」

私は、叫んで、それから沈默した。深い沈默がまる一分間も續いた。矢張り又水滴が落ちて來た。しかし私は、忽ちにしてすべてのことは確かに變るであらうといふことを、無限にそしてしつかりと知り且つ信じた。不意に私の墓が開いた。それは前から開かれてゐたのか

今開かれたのか、私は知らない、が併し私は、自分には譯の分らない或る眞黒な者に連れて行かれて、それから我々は、空間へ出た。突然、私は見た。深夜であつた、未だかつて、未だかつて、こんな暗黒は決してなかつた！　我々は空間から劃られてゐて、地球からは既に遙かに離れてゐるのであつた。私は、自分を導いて行く者に何にも訊ねなかつた。私は高慢だつたから、待つてゐたのだ。私は、自分が恐れてはゐないといふことを確信した、そして私の心は、自分が恐れてゐないといふ考へで、喜びに鎔け込んだ。どれ程我々は空間を突き進んで行つたものか憶えてゐない、それに、想像することも出來ないのである。夢に於いては常に起ることであるが、諸君は空間と時間と、及び生命や意志の法則を飛び超え、そして諸君の心が喜ぶ處に於いてのみ止まるのである。私は、突然暗黒の中に一つの小さな星を見たことを憶えてゐる。

「あれは天狼星ですか？」と私は、突然自分を制へ兼ねて訊ねた。といふのも私は彼に何事かを訊ねたくはなかつたのだから。

「いや、あれはお前が家へ歸る時見たあの同じ星だ。」と、私を連れて行く者が答へた。私は、彼が云はば人間のやうな顏を持つてゐたことを知つてゐた。不思議なことだが、私はその者が好きにはなれなかつた。私は、彼に對して深い嫌厭をさへ感じた。私は、完全なる絶滅を

期待してゐたのだ、その考へで私は、自分の心臓を射撃したのであつた。そして今私は、或る者に支配されてゐたが、その者は、勿論人間ではなかつたけれども、もとは人間だつた、そして存在してゐたところのものであつた。「すると、墓のうしろにも生活があるんだな。」と私は、夢の中の不思議な氣輕さを以て考へた。けれども、私の心の、底の底の本質は私に殘つてゐた。「だが、もう一度存在する必要があるならば、」と私は考へた。「そして、誰かの頑強な意志によつて再び生活する必要があるならば、その時には私は、征服されてはゐまい、又卑劣なる者ともなるまい！」

「私があなたを恐れてゐないことをあなたは知つてゐる、それであなたは私を輕蔑するんでせう？」私は、半ば告白のやうな屈辱の質問をしずに居られなくなつて、唐突に私の連れの者に向つてさう言つた。そして私は、自分の心の中に針で突き刺されるやうな屈辱を感じた。彼は私の質問には答へなかつたが、私は突然自分が輕蔑されてはゐない、嘲笑されてもゐないことを感じ、獨り私にだけ關する知れざる神祕い、憐れまれてもゐないことを感じ、この我々の旅行は、な目的を持つてゐるのだといふことを感じた。私の心の中には恐れが生じた。私の沈默せる連れの者から、或る物言はぬ而も苦痛のこもつた感動が、私に達して、そして私を貫いたのであつた。我々は、眞暗な、そして見知らぬ空間の中を突き進んでゐた。私は、見慣れてゐた星座を、隨分長い間見ないでゐた。私は、天上の空間には數千年數百萬年の後始めてその光が地球へ屆く筈の、多くの星のあることを知つてゐた。恐らくは我々は、それらの空間を既に通り越してしまつたのであらう。恐ろしい惱みの爲めに私の心は疲れきつてゐたが、私は或ることを期待してゐた。突然に、經驗のある併し最も壓迫的な情緒が私の心を搖り動かした。私は、我々の地球を生んだ我々の太陽ではあり得ないといふこと、及び我々には無限に遠い處へ連れて行かれてゐたのだといふことを知つてはゐたが、兎も角も全く私は、それが我々のと正確に同じ太陽、それの寫しか相當物だといふことを認めた。私の心の中では、氣持のいゝ感動的な喜びが有頂天になつて鳴り響いた。光明の、私を生んでくれたあの同じ光明の親愛なる力が、私の心を感激させ、それを復活させてくれたのだ、そして私は、死んでから始めて、生命を、昔の生命を感じた。

「だが、若しかあれが太陽なら、我々のと同じ太陽なら、」と私は叫んだ。「そんなら、地球は何處だらう？」すると私の連れの者は、暗の中で綠玉の光のやうに閃いてゐる小さな星を指さした。我々は、その方へ向つて眞直に導かれて行つた。

「では、宇宙にはこんな反復があり得るんでせうか？　それが自然の法則なんですか……さうして、もしあすこのあれが地球なのならば、我々のと全く同じ地球なんでせうか……我々

のと全く同じ、その最も忘恩な子供の心にあの同じ苦痛に充ちた地球に對する愛を惹き起させる、あの同じ、可哀想な、不幸な、愛すべき、昔の愛人である、あの地球なんでせうか？」……私は、自分があとにして來た私自身の以前の地球に對する堪らない有頂天な愛に震へながら叫んだ。私が虐待したあの少女の幻影が、私の前に現れた。

「お前には何もかも解るのだ。」と私の連れの者は答へたが、私は彼の言葉の中に悲しみの響きを聞くことが出來た。我々は、その遊星に速かに近づきつゝあつた。それは、私の眼の前に大きくなつて來た。私は、既に歐洲の外線を成してゐる大洋を見分けることが出來た。突然に不可思議な、大きなそして冒すべからざる嫉妬の感情が、私の心の中に燃え上つた。

「どういふ具合でこんな反復があり得るんでせう、それに何故でせう？　私が愛する、或ひは愛するとの出來るのは、唯だ一つのあの地球だけです、私があとにして來た、そして私といふ忘恩者が、ピストルの發射で自分の生命を終らせようとした時自分の血を濺ぎかけて來た、あの地球です。だが、決して一度も、決して一度も、私はあの地球を愛することを罷めたことはありません、そして、私があれに別れを告げたあの晩でさへも、私は、多分以前より一層銳くあの地球を愛してゐたのです。此の新しい地球の上には、苦痛はあるのですか？　一體我々は、苦痛を以てのみ、苦痛を通してのみ、本當に愛することが出來るのだ！　我々はその他には愛することは出來ない、そして我々は、その他には何等の愛も知らないのだ。私は、愛する爲めに苦痛を必要とする。今の今でも私は、私があとにして來たあの地球のみを涙と接吻とに浸すことを欲する、熱望するのだ。私は、他の地球の上の生命を欲しはしない、承認しはしないのだ。」

ところが、私の連れの者は、最早私のそばには居なくなつてしまつた。出し抜けに、云はば自分自身さへ氣づかずに、私は、樂園のやうに美しい、晴れ輝いた太陽の下に在るそのもう一つの地球の上に立つてゐた。私は、我々の地球にすると希臘の多島海のある處のあゝいふ風な島の一つか、又は、その多島海の近くの大陸の海岸のやうな處に立つてゐたと思ふ。おゝ、すべては地球に在ると全く同じであつた、が、すべては、遂に違せられた大なるそして神聖なる勝利を以て、祭日のやうに輝いてゐるやうに思はれた。微笑んでゐる綠玉の海は、愛を以て、明かな手にとるやうな、殆んど自意識の働いてゐるやうな愛を以て、海岸を接吻しながら、それを包んでゐた、丈高い素晴しい樹々は、あらゆる彼等自身の光輝ある花の中に立つてゐた、そして彼等の無數の葉は、恰も愛の言葉を發するかのやうに、心持のいゝ抱擁するやうな響を以て、確かに私に會釋してゐるやうであつた。草は、きらびやかな芳香ある色彩を以て燃えてゐた。小鳥は、空中に飛びかひ、恐れる色もなく、私の肩や手の上に止

接まつたり、彼等の愛らしい震へる小さな羽ばたきで、うれしげに私を叩いたりしてゐた。遂に私は、その幸福なる國の人々を見、そして認めた。彼等は、自分から私のところへやつて來て、私の周圍に群がつて、私に接吻した。太陽の子等、太陽の子等——おゝ、如何に彼等は美しかつたか！　地球上では決して、こんな人間の美を私は見たことはなかつた。恐らく幸福に充ちてゐた。彼等の言葉と聲には、子供のやうな歡喜が響いてゐた。おゝ、一瞬にして、彼等の顏を一日見るや私は、すべてを、すべてを理解した！　それは、未だ惡によつて汚されてゐない土地であつた、その上にはまだ何等の罪をも知らない人々が住んでゐたのであつた。彼等は、人類に就いての宇宙の傳說に從へば、我々墮落せる者の祖先がかつて住んでゐた事のあつたあの樂園に住んでゐたのだ、此の地上悉くが到る處一つの樂園だつたといふ事以外に。喜ばしげに笑ひ乍ら彼等は、私を取り卷いて、私を抱擁した、彼等は私をその家庭へ連れて行つた、そして彼等の一人々々が、皆私を幸福にする事を欲してゐた。おゝ、彼等は、私に何の質問もしなかつた。彼等は、何にもかも知つてゐて、出來るだけ速かに

私の顏から凡ゆる苦しみの跡を取除いてしまはうと欲してゐたかのやうに思はれた。

四

再び言ふが、それは單なる夢だつたのだといふことを承知し給へ。けれども、それらの美しいそして無邪氣な人々の愛の感じは、永遠に私のうちに殘つた、そして今でも私は、彼等の愛が遙か彼方から私に生氣を與へてくれることを感ずる。私は、この自分の眼で彼等を見たのだ、私は、彼等を知るやうになり、私が彼等を愛してゐたことを知るやうになつた、その後私は、彼等のために苦しんだ。おゝ、その時でさへも私は、多くの事柄に就いて、自分が彼等を少しも理解してゐないのだといふことを、直ぐに知つたのであつた。私といふ近代露西亞の急進派、厭ふべきペテルブールグ人にとつては、例へば、彼等が多くのことを知りながら、猶ほ且つ我々の科學を所有してゐないといふことは、譯の分らないことであるやうに思はれた。けれども間もなく私は、彼等の知識が我々の地上に於いて持つてゐるものとは異つた直觀によつて獲得され、育て上げられたものであること、及び彼等の抱負は全く別なものであることを知つた。彼等は、何物も欲求しなかつた、がしかし平靜であつた。彼等は、我々が知識を渴望するやうには、生活の知識を渴望しはしなかつた、何故なら彼等の生活は

成就されてゐたのだから。併しながら彼等の知識は、我々の科學よりも數等深い、そして高いものであつた、何故なら我々の科學は、その科學自身が如何に生くべきかを人に教へんが爲めに、生活とは何であるかを說明することを求め、生活を知ることを渴望してゐるのだから。ところが彼等は、科學なしに、如何に生くべきかを知つてゐた。それをも私は理解した、しかし私は出來なかつた。彼等の樹々を私に示した、しかし私は、彼等がその樹々を見てゐるその愛の深さを理解することは出來なかつた、全く恰も彼等がその仲間同志で話をしてゐたかのやうであつた。そこで、彼等は、その樹々と話をしてゐた、と私が言つたにしても、恐らく間違ひでは無かつたであらう。さうだ、彼等は彼等の言語を見出してゐた、そして、その樹々はそれを理解したのだと、私は確信する。同じやうに彼等は、すべての自然を見てゐた——彼等と共に生息してゐた動物共は、彼等を攻撃するやうなことはなく、彼等を愛し、彼等の愛に服從してゐた。彼等は、私に多くの星を指して、それに就いて、私には理解出來なかつたことを何か言つた、しかし私は、彼等が、或る方法で天上の星と接觸してゐたのだといふことを確信する、その連結にしても單に思想の上でではなく、何等かの具體的な方法で。おゝ、彼等は、私にそれを理解させようとは試みなかつた、そんなことをしずに彼等は私を愛した。しかし私は、彼等の方では私を決して理解しまいといふことを知つてゐた、それ故私は、我々の地球に就いては殆んど一語も彼等に話さなかつた。私は、彼等の面前で、彼等が住んでゐる土地に接吻した丈けであつた。そして私は、言葉なしに彼等を崇拜した、彼等は、それを見て平氣で崇拜させてゐた、私が彼等を崇拜することを少しも恥かしいとは感じてゐなかつた、何故なら、彼等は、非常に愛してゐたからである。私の心の中では、如何に大なる翼の力を以て彼等は私に報いてくれるのだらうといふことを知つて、喜びに充ちて、涙を流しながら私が、彼等の足に接吻した時にも、彼等は私のために苦しみはしないのであつた。折々私は、驚きと共に自分自身に訊ねた、こんなことをしてゐる間に、私のやうなこんな人間に彼等が腹も立てず、又、私の心には嫉妬も羨望も決して起らないなどといふことが、どうして有り得たのであらう？　幾度となく私は、自分に訊ねた、自慢家で嘘つきである私が、勿論彼等の全く知らない私の學問に就いて彼等に何にも言はなかつたといふのは、どうした譯なのであらう——假りに私が、その愛の爲めにのみそれを辛抱してゐたのだとしても、それを以て彼等を驚かさうと欲しもしなかつたといふのは、どうした譯なのであらう？　彼等は、子供のやうに樂しげで幸福であつた。彼等は、その美しい並木道や森林の中を散步し、彼等の愛らしい歌をうたひ、旨いものを食べ、彼等の樹々に熟る果實を食べ、彼等の森の蜂蜜を甜め、そして、彼等を愛する獸の乳を

飲んでゐるのだ。彼等は、その衣食の爲めに、ほんの少し樂に働いてゐた。彼等の間には戀があつた、そして子供が生れた、併し、我々の地上では殆んどすべての人を捉へそして殆んどすべての罪の源となる所の、その殘酷な淫蕩の有頂天を、彼等の間に私は決して見なかつた。彼等は、彼等に生れた子供を、彼等の幸福の新しい仲間として喜ぶのであつた、彼等の間には、全く喧嘩もなければ嫉妬もなかつた、それがどういふことを意味するのか、彼等には解らなかつた。彼等の子供は、すべての者の子供であつた、何故なら彼等はすべて一家族だつたから。彼等の間には死はあつたが、病氣は殆んどなく、年取つた人々は靜かに死んだ、恰も眠るが如くに、友達に取圍まれて、その友達に祝福と微笑とを與へ、彼等自身もその友達の晴やかな微笑によつてその安靜を祈られてゐるのであつた。この告別の時にも私は、決して悲しみも涙も見なかつた、云はば歡喜にしかし靜かな歡喜に充ちた、全く完成された、そして默想に沈んだ愛ばかりが其處には在つた。彼等は尙ほも、その死後にさへ死人と交通し、彼等の地上の結合は墓によつて引離されはしなかつたことを、人は信ずることが出來たであらう。私が永生に關して彼義に訊いた時、彼等は殆んど私を理解しなかつた、が彼等は、明かに、それを非常に確信してゐたので、彼等にとつてはそれは全く問題にならなかつたのであつた。彼等は、何等の寺院をも持たなかつたが、全宇宙との

眞實な生命ある、そして不斷の交通を持つてゐた、彼等は、何等の宗教をも持たなかつたが、しかし彼等は、その地上の喜びがその地上の自然の極限にまで完全された時には彼等のためには、全宇宙とのその接觸に就いて、生命あるものと同樣の死したる、而も一層なる仲展が始まるのだといふ確實なる知識を持つてゐた。彼等は、此の瞬間を、喜びを以て、しかし短氣にではなく、又それに對する何等の苦しみの熱望もなく、待つてゐた、が、彼等が各自交通してゐた彼等の心の豫感のうちに、云はば既にそれを共に享けてゐるのであつた。夕方には、休息しに行く前に、彼等は心地よく瞑じく歌を合唱することを好んだ。その歌で彼等は、暮れかけてゐる一日が彼等に與へてくれた凡ゆる感情を表し、それを讃へ、そしてそれに別れを告げた。彼等は、自然を、土地を、海を、森を、讃へた。彼等は、人の心から浮び上りそしてその心を感動させるやうな歌を各自のために作ることを好んだ。そして、獨り歌に於いてばかりではなく、凡ゆる彼等の生活はお互ひの賞讃に費されてゐたやうであつた。彼等は、全く、普く、人の心を奪ふのであつた。その他の、彼等の嚴肅な、そして高級な歌を、私は殆んど全く理解することが出來なかつた。私は、その言葉は理解したけれども、云はば私の心に近づき難く殘つたその深い意味を透徹することはどうしても出來なかつた、尤も私の心は、不思議にも、唯だそれ以上のものとしてそれを感じはしたのであつた。私は段々次

のやうなことを彼等に話した、私が長い間このすべてを豫感してゐたこと、我々の地球に居た間にも尚ほ、彼等の喜びと賞讃とが私に現れたこと、それは苦しい憧憬であつたが、時とすると制へ難い苦悩に達したこと、自分の心の夢想に於いて及び意志の幻に於いて彼等の恵みとを先見してゐたこと、地上に於いては屢々私は涙なしに日沒の太陽を眺めることが出來なかつたこと……及び地上の人々に對する私の嫌惡のうちに常には苦しみがあつたことなどを話した——何故私は彼等を愛さずに嫌ふことが出來なかつたのでらう？　何故私は彼等をたゞ許すことが出來なかつたのであらう？　而も、彼等に對する私の愛の中にも、矢張り苦しみがあつたのだ、何故私は彼等を嫌ふことなしに愛することが出來なかつたのであらう？

彼等は、私に耳を傾けてゐたが、私の言つたことが解らなかつたのを、私は知つた、しかし私はそれに就いて彼等に話したことを後悔してはゐなかつた。何故なら私は、彼等が私のあとにして來た人々に對する私の苦しみの力を悉く理解したことを知つたから。さうだ、彼等がその親しみ深い、愛の漲つた眼で私を眺めた時、そして私が、自分の心も亦彼等の前に在つては彼等自身のと同樣無邪氣に眞實になつて行つたことを感じた時、その時私は、自分が彼等を理解しなかつたことを後悔しなかつた。彼等の生活の完全さに對する私の感情は、

私から喋ることを奪つてしまつた、そこで私は、默つて彼等を尊敬した。

おゝ、今すべての人は私の面前で笑つてゐる、そして、私が今話してゐるやうなこんな細かい事を見るのは夢の中でも不可能なことだと私に言つてゐる。夢の中では私は、無我夢中でゐる私自身の心から生じた唯一つの事を見るか或は感じるかした許りで、そんな細かいことは、眼を覺ましてから自分で創造したのだと彼等は私に言ふのである。そして多分さうだらう、と私が言つた時——おゝ、神よ、如何に彼等は私の眼の前で笑つたか、そして私が何といふ樂しみを彼等に與へることになつたか！　おゝ、さうだ、勿論私は、その夢ばかりの、そして、私の痛む心の中に完全に殘つたところのものばかりの感じによつて壓迫されてゐたのではあるが、それでも、私が夢の中であの時本當に見た私の夢の眞實の影像と形とは、私が眼覺めてからも、我々の弱々しい言葉ではそれを裝はせることは確かに出來なかつた程の、そんな調和をなして完成され、それ程に魅惑的で美しく、且つそれ程に眞實であつた。それ故それらのものは、私の心の中で汚される必要があつたに違ひない、そして恐らく私は、自分では氣がつかずに、その細かい事柄を、勿論それを歪にしてはゐるが、後になつて組立てずにゐられなかつたのであらう、就中私の熱烈な欲望によつて、たとひ一部分だけでもそれを直樣話してしまはずにはゐられなかつたのであらう。併し、それにも拘らず、どうして私は、

このすべての事柄を本當に在つたことだと思つてしまふことが出來なかつたのであらう？それは、恐らくは私が話したよりは、何千倍も善い、輝いた、そして一層喜ばしいものとなつたであらう。夢として置いても構はない、が併しこのすべては、唯だ本當に有り得なかつたといふだけのことである。私は、一つの祕密を諸君に語らう、恐らくこのすべては、全く夢では無かつたのだ！　何故ならば、とても睡眠中の夢ではあり得ないやうな恐ろしい事實としての或る事が起つたのである。私の心が私の夢を拵へたものとして置かう、しかし、私の心だけが、後に起つたその恐ろしい事實を拵へることが出來たのであらうか？　どうして私は獨りでそれを發明することが出來たであらう、又は、それを私の心の中だけで夢みることが出來たであらう？　私のつまらない心と、私の氣まぐれな、取るにも足らぬ意力とが、こんな眞理の啓示にまで高められ得たのであらうか？　おゝ、諸君自ら判斷し給へ、今までに彼は、それを隱してゐたのだ、しかし、今私は、公然とこの事實をも話さうと思ふ。私は——

五

さうだ、さうだ、そんな事になつたのである。私は彼等すべてを汚した！　どうして私はそれを成し就げることが出來たのであらう——私は知らない、が私ははつきりと憶えてゐる。夢は、永久に過ぎ去つた、そして私の心には、唯だ全體の感じだけが殘つた。私は、唯だ墮落の原因は私だつた、といふことだけを知つてゐる。すべての人間に害毒を傳へてゐる汚れの胚種の如く、惡疫の原子の如く、そのやうに私は、自分の魂を以て、かの私以前に罪を知らなかつた幸福なる國に害毒を傳へたのである。彼等は、嘘をつくことを知り、そして嘘をつかうと欲した、そして、嘘の美しさを知つた。おゝ、これは恐らく、無邪氣に、冗談から、遊び好きな所から、慰みを愛する所から、多分原子から始まつたのだ。併し、嘘の原子は彼等の心にはひり込み、そして彼等は、それを愛した。まもなく、逸樂が生じ、逸樂からは——嫉妬、嫉妬から——殘酷……おゝ、私は知らない、私は憶えてゐない、だがすぐに、忽ちに、最初の血が流された。彼等は、驚き恐れ、そして、軋轢を生じ始め、分離し始めた。結合は現れた、しかしそれは、各自相反する結合であつた。非難と訴へ合ひが始まつた。彼等は、恥を知るやうになり、恥から德を拵へた。名譽の觀念が生れ、そして、各結合が各自の旗をひらめかした。彼等は、獸共を惡用し始め、そして獸共は森に逃げ込み、彼等の敵となつた。不和の戰が始まり、その戰爭に於いて彼等は、分離のために、個性のために、我のために、汝のために鬪つた。彼等は、異つた國語も話し始めた。彼等は、悲しみを知つて愛するやう

になつた、彼等は、苦痛を熱望し、そして、眞理は苦痛のみによつて獲得され得るのだと言つた。その時、彼等の間には科學が現れた。腹が立つた時彼等は、同胞と人道とに就いて語り始め、それらの觀念を考へた。罪を犯した時彼等は、裁判を發明し、そしてそれを支へるために法律を書いた、すべての法律を自ら作つた、そしてその法律を支へる爲めに彼等は、斷頭臺を備へつけた。殆んど、殆んど彼等は、自らがかつては無邪氣で幸福であつたといふことを信じようと欲しさへしなかつた。彼等は、その昔の幸福の可能だつたことを、笑ひさへして、それを夢と呼んでゐた。彼等は、それを形と影像とに於いて自分達の前に描いてみることさへ出來なかつた、ところが、不思議な、そして怪しむべきことには、彼等が以前の幸福を傳說と呼んで、それに對する信仰を全く失つてしまつた時に、彼等は、その心が子供の如くであり度いといふ欲望の前に跪き、そしてその欲望を崇拜した程にまで再びもう一度無邪氣になり、幸福になりたいといふ非常に大きな望みを懷いたのであつた。彼等は、それが爲めに多くの寺院を建て、彼等の理想に對して、彼等自身の欲望に對して、祈り始めた。彼等は、それが實行せられぬ、不可能なことだといふことを十分に信じてゐたのに、而もなほ涙と共に、それを崇拜し、讃へてゐた。だが若しも、彼等が以前失つた無邪氣な幸福な狀態に歸ることが出來るといふやうなことが、た

だ偶然に有り得たとしたら、そして、誰かがそれを出し抜けに彼等に示して、それに歸りたいかどうかと訊ねたとしたら、彼等はきつと拒んだに違ひない。彼等は私にかう答へるであらう、「我々が嘘つきで惡者で不正な者であることを承知し給へ、我々はそれを知つて、そのために泣いてゐるんだ、我々は我々自身苦しみ惱んでゐる、そして、恐らくはあの我々を裁判する名も知らぬ慈悲深い裁判官よりも一層苛酷に自分自身を罰してゐるんだ。けれども、我々は科學を持つてゐる、科學の助けによつて我々は再び眞理を見出すであらう、そして今は我々は、自覺して科學を承認するであらう。知識は感情よりも高いのだ、生命の自覺は、生命そのものよりも高いのだ。科學は我々に智慧を與へるであらう、智慧は我々に掟を示すだらう、そして幸福の掟の知識は、幸福よりも高いのである。」彼等の言つたところのものはこれである。そして、こんな言葉の後彼等は、各自が他人より以上に己を愛し、それ以外のことは何にも出來ないのであつた。各自は、全力を以て他人の品性を落し賤しめようとした程、各自の個性に就いて嫉妬深くなつた、その中に各自は各自の生活を見た。奴隷制が、自由意志の奴隷制までが現れた。弱者は、彼等自身よりももつと弱い者を打碎くために强者が自分達を助けてくれるといふ唯一の目的を以て、易々として强者に服從した。神の如き人人が現れて、これらの人々に、涙を以て、彼等の誇りに就いて、彼等の度量と調和の不足

に就いて、彼等の恥を失つてゐることに就いて語つた。彼等は、それを嘲つて、石を投げた。神聖は血が、寺院の入口に流された。けれども、各自が最も己を愛することを罷めずに、なほ他人に干渉しないでゐることが出來るやうな、そして彼等のすべてが、云はば、結社の中に居るやうに一緒に住むことが出來るやうな、そんな方法で、彼等が結びつくやうにはどうしたらいゝかといふことを考へた人々が、なほも現れ始めた。凡ゆる戰場は、此の考へによつて闘はれた。闘つてゐたところのすべての人々は科學と智慧と、自己保存の本能とが遂には人々を調和せる合理的な社會の中に結びつけるであらうといふことを、しつかりと信じてゐた。その間に、この仕事を共に助けようとして、「賢者」は、「愚者」及び彼等の考へを理解しないでその勝利を妨げようとしてゐた人々を絶滅しようと試みた。ところが、自己保存の本能は、速かに弱り出した。高慢な、そして淫逸な人々が現れて、直ちにすべてか虚無かを要求した。すべての物を得るために彼等は、殺人の手段を採つた、そして若し失敗したら自殺するのだ。宗教が現れて、虚無に於ける永遠の休息のために生に反する者と自ら破壊する者との跪拜に身を任せた。遂にこれらの人々は、その愚かなる勞働に疲れ始め、そしてその顏には苦痛が現れた、そして彼等は、苦しみは美である、それ故苦しみの中にのみ思想があるのだと宣言した。彼等はその歌に於いて苦しみを讃へた。私は、手を拂つて身もだえしながら彼等の間を歩き廻りそして彼等の上を思つて泣いた。それでも私は、彼等の顏に何等の苦しみもなく、そして、彼等が無邪氣で美しかつた時よりも恐らくはなほ一層彼等を愛した。私はその土地が樂園であつた時よりも彼等が汚したその土地を愛した、何故ならこの爲めにのみ、悲しみがその土地に表れたのだつた。あゝ、私は常に悲しみを、悲哀を愛してはゐたのだが、それは私自身のため獨り私自身のみのためだつたのだ、そして私は彼等を憐れみ乍ら、彼等の爲めに泣いた。私は、絶望して、自分自身を罵り、呪ひ、侮蔑しながら彼等の方へ兩手を伸ばした。私は彼等に、これは全く私の仕事であつた、私獨りの仕事だつたのだと言つた。彼等の間に腐敗と害毒と虚僞とを持つて來たのは、私だつたのだ！　と言つた。私は、自分を十字架につけてくれと彼等に賴んだ、私は、十字架を作ることを彼等に敎へた。私は自殺することが出來なかつた、私には力がなかつた、しかし私は、彼等からの苦しみに身を任せようと欲した、私は、私の最後の血の一滴が、その苦しみの中で流されることを熱望した。けれども彼等は、單に私を笑ふだけであつた、そして終ひには私を氣違ひだと思ひ始めた。彼等は私を守つた、彼等は、彼等自身が欲したところの物を受けただけなのであつて、すべてのことは、有り得なかつた丈けのことなのだと言つた。たうとう、彼等は、私が彼等にとつて危險になつて來たから、もし私が自分の平和を保たなかつたな

らば顚狂院へ入れてしまふ、と私に宣告した。彼等の悲しみは、私の心を縮まらせ、私が、死ぬのかと思つた程ひどく私の魂の中にはひつて來た……その時私は眼が覺めた。

それは、最早朝であつた、つまり、まだ夜明になつてはゐなかつたが、六時であつた。私は、あの同じ安樂椅子の中で眼覺めた、私の蠟燭は燃え盡きてゐた。大尉の處では、皆熟睡してゐた。そして四邊は全く靜かであつた、こんなことは、この家では珍らしいことであつた。先づ私は、びつくりして飛び起きた。そんな風なことは今まで一度も私には起つたことはなかつた、最も些細なことまでが不思議であつた。例へば、私は決して安樂椅子で眠りに落ちたのではなかつた。それから、私が自分の感覺を取戻しながら立つてゐた時、突然に、私の裝填された連發拳銃が突然に私の前に現れた。けれども直ちに私は、それを身のまはりから片附けてしまつた。おゝ、今は——生命だ、生命だ！　私は双手を擧げて、永遠の眞理を求めた、求めたのではない、泣いたのだ。歡喜が、言ふに言はれぬ歡喜が、私の全存在を高めた。さうだ、生きるのだ、そして——傳道するのだ！　おゝ、その瞬間に私は、傳道する——決心をした、さうだ、一生涯傳道しよう、私は傳道することを熱望するのだ。私は傳道しよう、私は傳道することを熱望した何を？　眞理を。何故なら私は、眞理を見たのだ、この眼で見たのだ、華かな眞理を見たのだ。

その時以來私は、傳道をした。その上私はすべての人々を、中でも私を嘲る人々を愛した。何故そんなことをするのか？　私は知らない、私は說明することが出來ない、がそれでいゝではないか。私はさ迷つてゐるのだと人々は既に言つてゐる、若しも彼が現在さ迷つてゐるのならば、どうなるのであらう！　と言つてゐる。それは本當だ。私はさ迷つてゐる、そして恐らくは、未來に於いてはだん〳〵惡くなつて行くであらう。そして勿論私は、如何にして、如何なる言葉と行爲とで、傳道すべきかを發見しない前に、幾度か迷ふであらう、何故ならこれは、發見するに困難なものである。今でも私は、このすべてを、白日の如く明かに知つてゐる、が耳を傾け給へ。如何なる人が路を迷はないであらう？　而もすべては全く同一の目標に向いてゐるのである、少しも凡ゆる人々が、賢者から最低の殺人者に至るまで、この同一の目標に向いて進んでゐるのだ、唯だその方法が違ふだけである。それは、古い眞理だ、がその中には新しいものがあるのだ。私は、これ以上路を迷ふことは出來ない。私は、眞理を見たのだ。私は、人々がこの地上に生きる能力を失ふことなくして、美しく幸福になり得ることを見、且つ知つたのだ。私は、惡が人間の正當な狀態だといふことを信じようとは思はない、また信じることは出來ない。而も彼等のすべては、私の信仰を嘲るのみなので

ある。しかし、私はどうして信じないでゐられたら？　私は眞理を見た、私は自分の心でそれを發明したのではなかつた。私は見た、見たのだ、そしてその眞理の生々とした影像が永遠に私の魂を充たしたのだ。私は、眞理が人間の間にはないなどといふことを本當に信ずることが出來ない程完全に成就された形で見たのだ。さうだとしたら私は、どうして路を迷ふことが出來よう？　勿論私は、一度ならず路を迷ひはするだらう、そして私は、多分他人の言葉を以て語りさへするであらう、が長い間ではない。私が見たあの生々とした影像は、常に私と共にあるであらう、そして常に私を正し、私を導いてくれるだらう。おゝ、私は强く、そして生々としてゐる、私は、千年の間も進みに進むことが出來るのだ。諸君は、最初私が、彼等のすべてを汚したことを隱さうと欲しさへしたことを知つてゐるであらう、が、それは間違ひであつた——諸君の見らるゝ通り抑もの間違ひであつた！　しかし眞理が、私は嘘をついてゐたのだと私語いたのであつた、眞理は私を守り導いてくれた。しかし、如何にして樂園を作るべきかは、私は知らない、私は言葉でそれを表現することは出來ないから。夢の後私は、凡ゆる私の言葉を、少くも私が最も必要とした所の重要な言葉を見失つてしまつた。だが、それはどうでもいゝ、私は進まう、そして倦まず傳道しよう、何故なら私は、はつきりと見たのだ、自分の見たところのものを語ることは出來ないけれども。だが、嘲弄者は理解しない、「彼は、夢を見たのだ、無我夢中の幻だ、錯覺だ。」あゝ、しかしこれは本當に賢いことであらうか？　夢？　夢とは何だ？　我々の生活は夢ではないか？　私はもう一語言はう！　これは決して生じないことだ、樂園などは無いであらう、といふことにして置き給へ——少くも私はそれを理解する——さうだ、それでも猶ほ私は傳道するであらう。そして、それは非常に單純なことである、一日で、一時間で、すべては忽ちに定まるであらう。唯一のことは——汝自らの如く汝の隣人を愛せよ——これがその唯一のことである。それがすべてだ、それ以外には何にも必要はない。諸君は直ちに如何に生くべきかを知るであらう。それは、何千萬回か繰り返へされ讀まれた古い眞理ではあるが、それでもそれは發見されない。「生命の知識は、生命よりも高い、幸福の掟の知識は——幸福よりも高い。」——戰はれなくてはならないのはこれである。そして私は戰はう。若しもすべての者がこれを欲しさへしたならば、その時にはすべては、忽ちに正しくなるであらう。

そしてあの少女を私は見出した……彼女の處へ私は行かう、私は行かう。

——「ドストエーフスキー短篇集」了——

大正九年六月五日印刷
大正九年六月十日發行

（定價金貳圓）

◀短　篇　集▶

譯者　永島直昭

發行者　東京市牛込區矢來町三番地中の丸　佐藤義亮

發行所　東京市牛込區矢來町三番地　新潮社
電話番町（八〇九番
八九九番

振替（東京）一七四二番

印刷所　東京市神田區宮本町五番地　新潮社印刷部
電話下谷（四〇六七番

印刷者　高橋治一

ツルゲーネフ全集

(1) ■獵人日記　生田長江氏譯　▼▼價貳圓　▼▼送料十二錢

(2) ■ルーヂン　(附)彼等の手紙　田中純氏譯　▼▼價壹圓卅錢　▼▼送料八錢

(3) ■初戀　(附)『フアウスト』クララミリッチ　生田春月氏譯　▼▼價壹圓卅錢　▼▼送料八錢

(4) ■その前夜　田中純氏譯　▼▼價壹圓卅錢　▼▼送料八錢

(5) ■煙　大貫晶川氏譯　▼▼價壹圓卅錢　▼▼送料八錢

(6) ■父と子　谷崎精二氏譯　▼▼價壹圓卅錢　▼▼送料八錢

(7) ■ブーニンとバブリン　(附)餘計者の日記、ミシャ、外一編　布施延雄氏譯　▼▼價壹圓卅錢　▼▼送料八錢

(8) ■處女地　田中純氏譯　▼▼價貳圓　▼▼送料十二錢

(9) ■春の波　外(1)篇　生田春月氏譯　▼▼價壹圓卅錢　▼▼送料八錢

文藝愛好者の久しき渴望を醫せしむる新叢書出でたり。

■チエホフ全集■

「此の眞珠の如き作品を見よ、ツルゲーネフも、ゴンチヤロフも、而して余も、遂に彼に及ぶ能はず。」とはトルストイが、チエホフに對して放てる讃嘆の語也。チエホフの作幾十百篇、種々の世相、種々の心理を其の簡勁無類の筆に活寫す、而も憂鬱のうちに一種の爽快味あり、微笑のうちに涙あり。殊に、其の取扱へる世態人情の、日本現代のそれと甚しく似通へるの點、日本の讀者の心を牽くこと强きものある可し。

毎月一回又は隔月一回發行

第一編 ■短篇集　隣人　外七篇　秋庭俊彥譯　價壹圓廿錢　送料八錢（新刊）

第二編 ■短篇集　六號室　外八篇　廣津和郎譯　價壹圓廿錢　送料八錢（新刊）

第三編 ■脚本集　櫻の園　外三篇　楠山正雄譯　價壹圓廿錢　送料八錢（新刊）

有島武郎著作集

一編より五編迄六拾五錢
第六編に限り定價九拾錢
郵送料一册八錢づゝ

■(1) 死（短篇集）

■(2) 宣言（長篇小說）

■(3) カインの末裔（短篇集）

以上、多きは三十版を超え少きも二十版を下らず、最近十年間、斯くの如くに多く弘く盛んに讀まれたるものあるを知らず

■(4) 叛逆者（感想集）

■(5) 迷路（長篇小說）

白樺の森

白樺派の小說家詩人評論家すべて十四家、その會心の作品を集めて一卷となす、白樺派の全面容を一眸に鳥瞰し得べき全大集也

▼價壹圓七拾錢、▼郵送料拾貳錢

白樺脚本集

有島武郎氏以下白樺同人八氏の脚本中より其最も代表的となす傑作を收む。新興劇壇の大なる刺戟たる可きや固より論なき也。

▼價壹圓五拾錢、▼郵送料拾貳錢

□武者小路實篤氏著□

■新しき村の生活

武者小路氏は、單なる藝術家として甘んぜず、その熾熱の精神を實行に驅つて自らの理想に驀進せんと企て、遂に「新しき村」の計畫を事實の上に示しつゝあり。卽ち、同志を糾合して、一郭を構へ、純眞なる人間性の要求に基ける生活によつて一理想鄕を建設し、以て來る可き時代の文明の酵母たらしめんとする也。その詳細に至つては、本書これを語つて剩すところなし、いかにして生く可きかを思ひ煩ふものは、必ず本書を讀まざる可からず。

□中版 三百頁
□定價八拾五錢
□郵送料八錢

■自己を生かす爲に

新しき村の生活の姉妹卷出づ

稀に看るの人格者也。本書は『新しき村』の生活の姉妹卷たらしむ可く、氏が感想論文等のなかより、その最も力あり、光あり、熱あるものを選集して一册とせるもの也。題して『自己を生かす爲に』と云ふ。眞に生きんとする人は、先づ此の書に就いて、苦しめる、すぐれたる魂の告白を聞かざる可からず。

武者小路氏は、獨り文壇とのみ云はず、現社會の各方面を通じて、實に

□中版 三百頁
□定價八拾五錢
□郵送料八錢

阿部次郎氏著

■ツァラツストラ解釋 並に批評

ニイチェの『ツァラツストラ』は極めて難解、誤り讀まるゝこと多し。阿部氏は哲學界の權威、深く此の書を愛讀してよく其の閫趣微韻を了す。卽ち爲めに深切なる解釋を加へ、創意ある批評を添ふ。氏自ら曰く、余近時一西人の極めて無理解なる本篇の解釋を讀み、此の書を公表するは左迄遠慮すべきに非ざるを覺れりと。

大阪特製箱入 價壹圓貳拾錢 郵送料八錢

民主的文藝の先驅

白鳥省吾氏著

價七拾五錢送料八錢

民主々義の提唱、文壇思想界を動かすの時にあたり、新たに此の書出づ。**ホイットマン、カアペンタア、トロウベル**は、實に民主詩人の三傑にして、「全體」「不死の愛の光」「正義」の標語に各々世界改造の熱意を寄す。本書は、卽ち三者の思想と藝術とを紹介して、民主主義の眞面目を發揚し、併せて其の生涯を傳せるもの。之を讀んで始めて此新精神の眞髓を會得す可し。著者は、我國に於ける民主詩人の第一人者にして、深く三者に私淑して其の精神を體得せるの人也。

生田長江氏 本間久雄氏共著。

■最新社會問題十二講

第一講、解放運動としての佛蘭西革命。**第二講**、産業革命と勞働者階級の發生。**第三講**、資本主義的經濟組織の解剖。**第四講**、空想的社會主義と科學的社會主義。**第五講**、マルクスの唯物史觀と剩餘價値說。**第六講**、デモクラシイとは何ぞ。**第七講**、勞働組合主義と同盟罷工。**第八講**、ギルド社會主義とサンヂカリズム。**第九講**、選擧權擴張問題。**第十講**、婦人問題と性的道德。**第十一講**、婦人參政權問題。**第十二講**、婦人職業問題。

總洋布最上製 價二圓五拾錢 郵送料十二錢

中澤臨川氏 生田長江氏共著

■近代思想十六講

■近代思想の概觀 ■レオナルド・ダ・ビンチと文藝復興 ■近代主義 ■ニイチエの超人の哲學 ■スチルナアの個人主義 ■トルストイの人道主義 ■ドストイエフスキイの愛の福音 ■イプセンと第三帝國 ■ダアキンと進化論 ■ゾラの自然主義 ■フロオベルと懷疑思想 ■ジエムスの實用主義 ■オイケンの理想主義 ■ベルグソンの流動哲學 ■梵の行者タゴオル ■ロマン・ロオランの眞勇主義——以上十六講——

總洋布最上製 價二圓五拾錢 郵送料十二錢

新進作家叢書

■中版百六十頁づゝ
■一册價金五拾錢宛
■郵送料一册四錢宛

第一■新らしき家　武者小路實篤
第二■恐ろしき結婚　里見　弴
第三■生あらば　豐島與志雄
第四■大津順吉　志賀直哉
第五■生と死の愛　谷崎精二
第六■結婚の前　長與善郎
第七■暴君へ　有島生馬
第八■煙草と惡魔　芥川龍之介
第九■夢と六月　相馬泰三
第十■手品師　久米正雄
十一■一つの芽生　中條百合子
十二■神經病時代　廣津和郎
十三■愛と憎み　江馬修
十四■土の靈　野村愛正
十五■無名作家の日記　菊地寛
十六■お絹とその兄弟　佐藤春夫
十七■赤い矢帆　江口渙
十八■イボタの蟲　中戸川吉二
十九■不能者　葛西善藏
二十■霰の音　加能作次郎
廿一■歸れる父　水守龜之助
廿二■修道院の秋　南部修太郎
廿三■結婚者の手記　室生犀星
廿四■放浪者寓藏　宮地嘉六

終